公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（61）

南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

北山遺跡 2

（阿久根市山下）

2025年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（61）
北山遺跡 2
二〇二五年三月
鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

遺跡西側から紫尾山地を望む

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道 (阿久根川内道路) 建設に伴って，令和２年度から令和５年度にかけて実施した阿久根市山下に所在する北山遺跡の発掘調査の記録です。

北山遺跡は，縄文時代早期から晩期，古墳時代，古代，中世，近世の遺構や遺物が発見され，各時代の人々の活動の場として使われてきたことがわかりました。

縄文時代早期では，土坑・集石などを伴う生活の跡が土器・石器とともに発見されました。鹿児島県で多く出土する土器だけでなく，他地域の特徴をもつ土器も見られることから，当時から広いエリアとの交流が盛んであった様子がうかがえます。中世では，この地を治めていた阿久根氏に関連すると考えられる遺構・遺物が多く発見されました。海外との交流の様子もうかがえ，中世の人や物の活発な動きを検討する上で貴重な資料となりました。また，中世末から近世にかけて製鉄を行っていたと考えられる遺構・遺物が発見されています。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解いただくとともに，今後の研究の一助となれば幸いです。

最後に，本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，鹿児島県教育庁文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター，阿久根市教育委員会等の関係各機関並びに御指導をいただきました先生方，発掘作業，整理作業に従事された方々，遺跡の所在する阿久根市山下の皆様に厚く御礼を申し上げます。

令和７年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　　寺原　徹

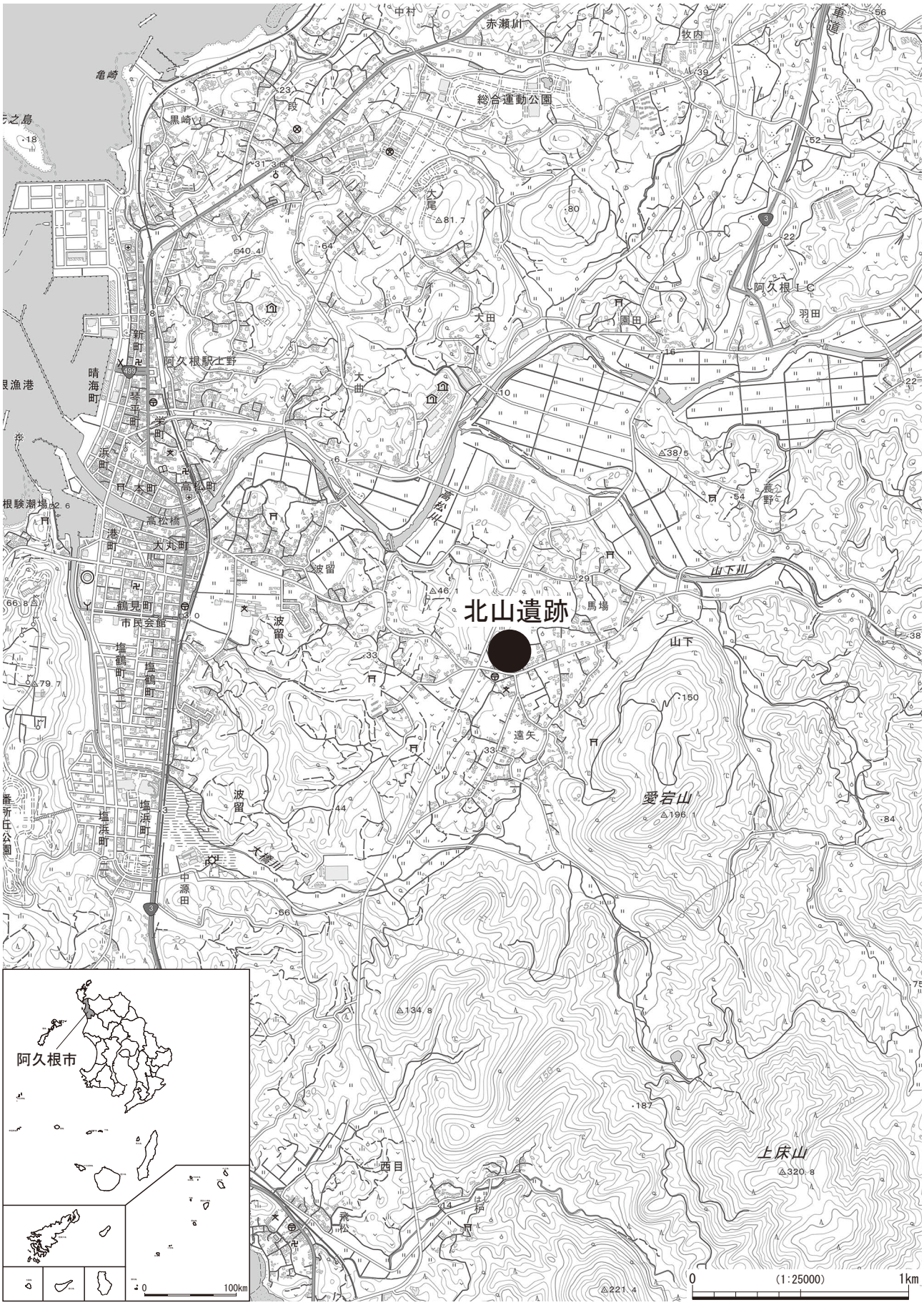
報 告 書 抄 録

ふりがな	きたやまいせき2
書　　名	北山遺跡2
副　書　名	南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第61集
編 著 者 名	辻　明啓　　山川　正樹　　上床　真
編 集 機 関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号　TEL 0995-70-0574
発 行 年 月	2025 年 3 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査起因
きたやまいせき 北山遺跡	かごしまけん 鹿児島県 あくねし 阿久根市 やました 山下 あざきたやま 字北山	46206	206-34	32° 00’ 39”	130° 12’ 47”	分布調査 2017. 12. 11 試掘調査 2018. 7. 27 確認調査 2019. 12. 2～12. 25 2020. 9. 1～ 9. 28 2021. 5.18～ 6. 11 本調査 2020. 10.1～2021. 1.27 2021. 5.10～2021. 7.28 2021. 10.4～2022. 1.28 2022. 5.11～2023. 1.27 2023. 9. 1～2023. 12.27	3,121 4,481 11,549 9,327 2,530	南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う記録保存調査

種別	主な時代	主要な遺構	主要な遺物	特記事項
散布地	縄文時代	集石5基 土坑1基 落とし穴2基	加栗山式，小牧3A，吉田式，別府原式，政所式，中原1類，中原2類，中原5類，塞ノ神B式，その他早期土器，春日式，阿高系（南福寺式含む），西平式，その他後晩期土器 石鏃，スクレーパー，石錐，二次加工のある剥片，石核，打製石斧，磨製石斧，石皿，台石，砥石，石錘，敲石，磨敲石，磨石，凹石，軽石製品，その他石製品	—
	古墳時代	—	東原式土器（甕，壷，高坏）等	—
	古代	—	土師器（甕・坏・埦等），須恵器（壺・碗等），黒色土器B類，越州窯系青磁，土錘，土製品，文字資料（ヘラ書き・墨書）【ヘラ書き：土師器，墨書：須恵器】	—
	中世	掘立柱建物跡12棟 竪穴建物跡1軒 土坑35基，炉跡3基 溝状遺構8条 礫集積4基（溝内） 石列4基（溝内）	土師器（坏・皿等），中世須恵器（東幡系・産地不明等），瓦質土器（摺鉢・火鉢・風炉等），国産陶器：（摺鉢・甕等）【備前・常滑等】，青磁（碗・皿・坏等）【龍泉窯系・同安窯系等】，白磁（碗・皿・合子等）【中国を基本として朝鮮も含む】，青花（碗・皿等）【景徳鎮窯・漳州窯等】，輸入陶器（壺・甕・瓶等）【中国南部・タイ産等】，滑石製石鍋，石錘（石鍋転用），茶臼，銭貨（洪武通宝），火打石，天草砥石	—
	近世	掘立柱建物跡1棟 土坑9基	陶器（薩摩焼・備前焼等），磁器（肥前，古伊万里等），金床石	—
	鍛冶・ 製鉄関連遺構	製鉄炉4基，竪穴建物1棟 土坑13基，炉跡19基	陶器（薩摩焼・備前焼等），磁器（肥前，古伊万里等），鉄製品，鉄滓，羽口，炉壁等	—
	その他	土坑20基，炉跡7基 柱穴・ピット974基	天草砥石，打欠石，碁石，硯，銅製品，古銭，鉄製品	—

遺跡の概要	北山遺跡は，阿久根市山下及び波留に位置し，阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30～37mの台地上に所在する。遺跡周辺は古代の英祢駅比定地のひとつと考えられ，東側に位置する愛宕山には，中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡があるなど，古代から中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。 調査区では，縄文時代から近世までの遺構・遺物の検出・出土が確認された。特に中世から近世にかけては多く，阿久根地域における有力者の集落跡と推測される。



北山遺跡位置図（１：25,000）

例　　言

1　本書は，南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う北山遺跡の発掘調査報告書である。本書では令和２～５年度に本調査を実施した調査区の調査報告を行う。

2　北山遺跡は，鹿児島県阿久根市山下～波留に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下「鹿児島国道事務所」という。）から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「調査センター」）へ調査を委託し，令和２～５年度の４年間にわたり実施した。

4　発掘調査は令和２年度，令和３年度前期（５月～７月）に調査センターが直営で行い，令和３年度後期（10月～１月）は発掘調査支援業務を国際文化財株式会社へ委託して実施した。令和４～５年度は，調査センターが直営で調査を行った。

5　整理・報告書作成は，令和３～６年度に　調査センター第一整理作業所で実施した。

6　掲載遺構番号は，遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表及び図版の遺構番号は一致する。掲載遺物番号は，通し番号であり，本文・挿図・表及び図版の遺物番号は一致する。

7　遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＫＹ」である。

8　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。

9　本書で使用した方位は，すべて座標北（G.N.）であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

10　発掘調査における実測図作成および写真撮影は，主として調査担当者が行ったが，令和４年度は遺構実測の一部を調査センターの指揮・監督のもとで，株式会社イビソクおよび株式会社九州文化財研究所に委託した。また，空中写真撮影は令和２・３年度は株式会社ふじた，令和４年度は有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

11　本書に係る遺構実測図・出土遺物の実測，トレースは，調査センター職員の指揮・監督のもと，調査センターの整理作業員が行い，陶磁器実測の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。

12　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）の写場において，辻明啓，西園勝彦が行った。

13　本報告に係る自然科学分析は，株式会社パレオ・ラボ，株式会社加速器分析研究所，日鉄テクノロジー株式会社，株式会社古環境研究所，株式会社古環境研究センターに委託し，成果を第Ⅴ章に掲載した。

14　執筆担当は以下の通りである。

第Ⅰ～Ⅲ章　・・・・・・・・・・・・・・・　辻・山川
第Ⅳ章　第１節・・・・・・・・・・・・・・・　山川
　　第２節・・・・・・・・・・・・・・・　上床
　　第３節・・・・・・・・・・・・・・・　上床
　　第４節・・・・・・・・・・・・・・　上床・辻
　　第５節・・・・・・・・・・・・・・　上床・辻
　　第６節・・・・・・・・・・・・・・・　川口
　　第７節・・・・・・・・・・・・・・　上床・辻
第Ⅴ章・・・・・・・・・・・・・・・・・　山川・上床
第Ⅵ章・・・・・・・・・・・・・・・・　川口・山川・辻

15　記載した土色や胎土の色は，『新版　標準土色帖』（1970　農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。釉薬の色調については，『日本色研事業株式会社　新配色カード』（1996　一般財団法人日本色彩研究所監修）を参考にした。

16　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。

SK: 土坑　SS：集石　SI: 竪穴建物跡　SB：掘立柱建物跡　SD: 溝跡　SP: ピット　SX: その他

17　遺構図の縮尺は，以下を基本とした。また，各図中にも縮尺を示した。

土坑・落とし穴：１／40　集石：１／20　竪穴建物跡：１／40　掘立柱建物跡：１／40～100
溝跡：１／80～250　ピット　：１／40

18　遺物の縮尺は，以下を基本とした。また各図中にも縮尺を示した。

土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品：１／２，１／３
石器・鉄製品：１／１，１／２，１／３，１／４

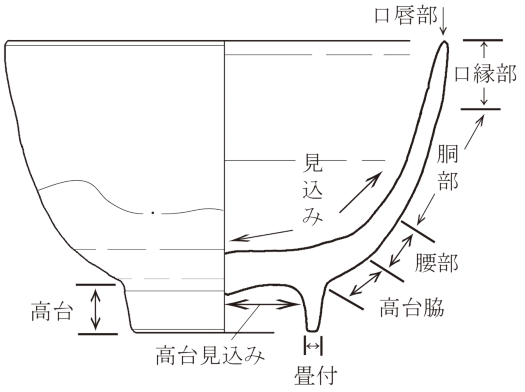
19　観察表のうち，口径・底径が括弧書きのものは復元径，器高が括弧書きのものは残高である。

20　遺構番号については，調査時に付されたものから，報告書掲載順に付け替えた。

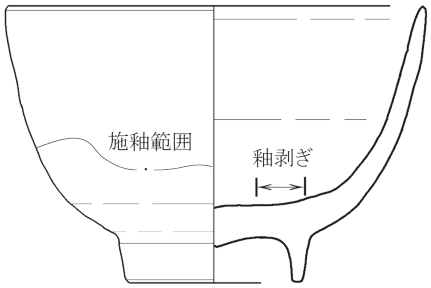
21　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　　例

【陶磁器】本報告書の陶磁器の部位，表現については以下の通りとする。

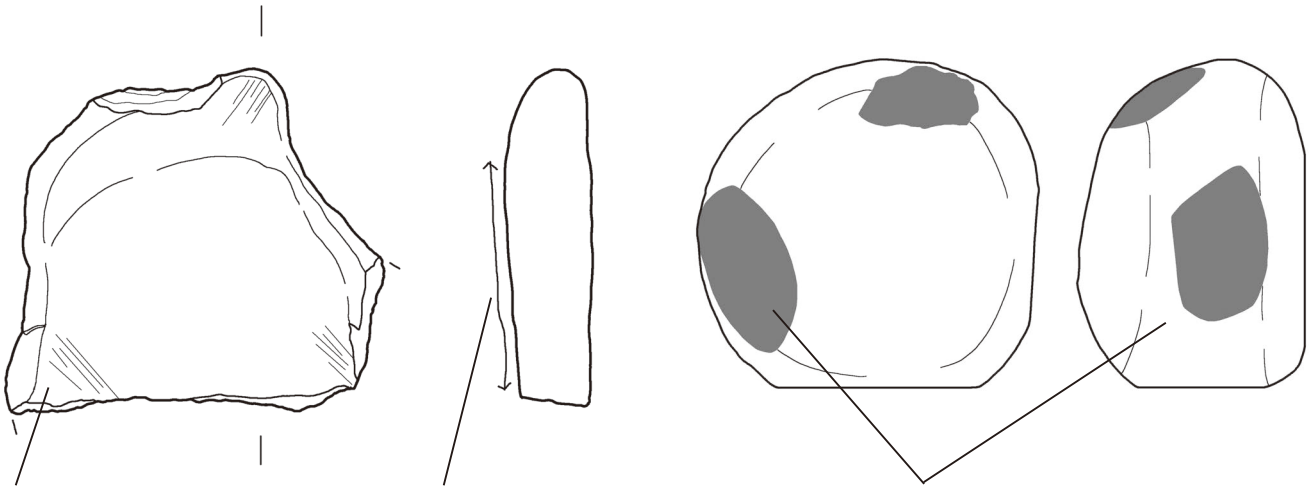


土器・陶磁器の各部位の名称



陶磁器の表現

【石器】本報告書の石器の磨面については，以下の①～③のように表現する。



①磨面の擦痕の方向が
明確に確認できるもの

②広い磨面をもつが，
擦痕が不明瞭なもの

③部分的に磨面をもつが，
擦痕が不明瞭で，矢印で
範囲を示しにくいもの

【観察表】各時代の観察表の層位の表記「マ」は，「遺構内の埋土」を示す。
（例）マ２＝埋土２

本 文 目 次

巻頭図版
序文
報告書抄録
北山遺跡位置図
例言・凡例
第Ⅰ章　発掘調査の経過
第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
第２節　調査の組織
1　分布調査…… 1
2　試掘調査…… 1
3　確認調査…… 1
4　本調査…… 4
第３節　発掘調査の経過…… 6
第４節　整理・報告書作成の経過…… 10
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境…… 14
第２節　歴史的環境…… 14
第Ⅲ章　発掘調査の方法と層序
第１節　調査の方法…… 20
1　発掘調査の方法…… 20
2　遺構の認定と検出方法　…… 20
3　整理作業・報告書作成作業の方法…… 20
第２節　層序…… 20
第３節　新旧遺構対応表…… 27
第Ⅳ章　調査の成果
第１節　縄文時代の調査
1　調査の概要…… 29
2　遺構…… 29
3　出土遺物…… 39
第２節　古墳時代の調査
1　調査の概要…… 74
2　出土遺物…… 74
第３節　古代の調査
1　調査の概要…… 76
2　遺構…… 76
3　出土遺物の分類…… 77
4　出土遺物…… 79
第４節　中世の調査
1　調査の概要…… 104
2　出土遺物の分類…… 104
3　遺構…… 109
4　包含層出土遺物…… 176
第５節　近世の調査
1　調査の概要…… 226
2　遺物の分類…… 226
3　遺構…… 226
4　包含層出土遺物…… 236
第６節　製鉄関連遺構
1　製鉄遺構調査区（遺構・出土遺物）…… 256
2　炉跡遺構調査区（遺構・出土遺物）…… 279
第７節　その他
1　調査の概要…… 293
2　遺構…… 293
3　その他の遺物…… 314
第Ⅴ章　自然科学分析等
第１節　北山遺跡の放射性炭素年代（AMS 測定）… 325
第２節　北山遺跡の放射性炭素年代（AMS 測定）… 326
第３節　放射性炭素年代測定…… 329
第４節　北山遺跡出土端家財の樹種同定…… 332
第５節　北山遺跡出土試料の自然科学分析
（年代測定・樹種同定・種実同定・テフラ分析）… 333
第６節　北山遺跡の放射性炭素年代測定…… 340
第７節　北山遺跡出土炭化材の樹種同定…… 342
第８節　北山遺跡出土製鉄～鍛冶関連遺物の調査… 345
第９節　北山遺跡出土試料の自然科学分析…… 360
第10節　北山遺跡出土試料の自然科学分析
（植物珪酸体分析・リン・カルシウム分析）… 363
第11節　北山遺跡におけるＸ線解析装置による
遺構内検出白色物質の分析…… 368
第Ⅵ章　総括
第１節　縄文時代…… 371
第２節　古墳時代…… 372
第３節　古代…… 372
第４節　中世…… 372
第５節　近世…… 374
第６節　製鉄関連遺構…… 374
写真図版…… 376

挿 図 目 次

第１図　北山遺跡トレンチ配置図…… 5
第２図　発掘調査の進捗図…… 11
第３図　北山遺跡周辺遺跡位置図…… 16
第４図　北山遺跡周辺阿久根氏関連城跡位置図…… 17
第５図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図…… 19
第６図　土層断面図①～③…… 21
第７図　土層断面④・⑤…… 22
第８図　土層断面⑥・⑦…… 23
第９図　土層断面⑦～⑨…… 24
第10図　土層断面⑩・⑪…… 25
第11図　土層断面⑫・⑬…… 26
第12図　土層断面⑭…… 27
第13図　集石１～３号・出土遺物…… 31
第14図　集石４号・出土遺物…… 32
第15図　集石５号…… 33
第16図　土坑１号…… 34
第17図　土坑１号出土遺物…… 35
第18図　落とし穴１・２号 …… 36
第19図　縄文時代の遺構配置図…… 37
第20図　縄文土器の出土状況図…… 38
第21図　縄文時代の遺物①…… 41
第22図　縄文時代の遺物②…… 42
第23図　縄文時代の遺物③…… 44
第24図　縄文時代の遺物④…… 46
第25図　縄文時代の遺物⑤…… 47
第26図　縄文時代の遺物⑥…… 49
第27図　縄文時代の遺物⑦…… 51
第28図　縄文時代の遺物⑧…… 52
第29図　縄文時代の遺物⑨…… 54
第30図　縄文時代の遺物⑩…… 55
第31図　縄文時代の遺物⑪…… 57
第32図　縄文時代の遺物⑫…… 58
第33図　縄文時代の遺物⑬…… 59
第34図　縄文時代の遺物⑭…… 61
第35図　縄文時代の遺物⑮…… 62
第36図　縄文時代の遺物⑯…… 63
第37図　縄文時代の遺物⑰…… 64
第38図　縄文時代の遺物⑱…… 65
第39図　縄文時代の遺物⑲…… 67
第40図　縄文時代の遺物⑳…… 68
第41図　石器出土状況図…… 69
第42図　古墳時代の遺物…… 75
第43図　土師器（高台・ヘラ切り底部）出土状況… 76
第44図　古代の遺物①…… 78
第45図　古代の遺物②…… 79
第46図　古代の遺物③…… 80
第47図　古代の遺物④…… 81
第48図　古代の遺物⑤…… 82
第49図　古代の遺物⑥…… 83
第50図　古代の遺物⑦…… 84
第51図　古代の遺物⑧…… 85
第52図　古代の遺物⑨…… 86
第53図　古代の遺物⑩…… 87
第54図　古代の遺物⑪…… 88
第55図　古代の遺物⑫…… 89
第56図　古代の遺物⑬…… 90
第57図　古代の遺物⑭…… 91
第58図　古代の遺物⑮…… 92
第59図　古代の遺物⑯…… 93
第60図　古代の遺物⑰…… 94
第61図　古代の遺物⑱…… 95
第62図　古代の遺物⑲…… 96
第63図　古代の遺物⑳…… 97
第64図　古代の遺物㉑…… 98
第65図　中世の遺構配置図（43～66区）…… 107
第66図　中世の遺構配置図（66～78区）…… 107
第67図　掘立柱建物跡１号…… 108
第68図　土坑２号…… 109
第69図　中世遺構内の遺物①…… 110
第70図　掘立柱建物跡２号…… 111
第71図　土坑３号・中世遺構内の遺物②…… 112
第72図　掘立柱建物跡３号…… 113
第73図　掘立柱建物跡４号…… 114
第74図　掘立柱建物跡５号…… 115
第75図　掘立柱建物跡６号…… 116
第76図　掘立柱建物跡７号・中世遺構内の遺物③… 117
第77図　掘立柱建物跡８号…… 118
第78図　掘立柱建物跡９号…… 119

第79図　掘立柱建物跡10号 …… 120
第80図　掘立柱建物跡11号 …… 121
第81図　中世遺構内の遺物④ …… 122
第82図　掘立柱建物跡12号 …… 123
第83図　中世遺構内の遺物⑤ …… 124
第84図　竪穴建物跡１号・中世遺構内の遺物⑥ … 125
第85図　土坑４・５号・中世遺構内の遺物⑦…… 126
第86図　土坑６～９号 …… 127
第87図　土坑10号・中世遺構内の遺物⑧ …… 128
第88図　土坑11号・中世遺構内の遺物⑨ …… 129
第89図　土坑12・13号・中世遺構内の遺物⑩ …… 130
第90図　土坑14号 …… 131
第91図　土坑15号・中世遺構内の遺物⑪ …… 132
第92図　土坑16・17号・中世遺構内の遺物⑫ …… 133
第93図　土坑18号・中世遺構内の遺物⑬ …… 134
第94図　土坑19号 …… 135
第95図　中世遺構内の遺物⑭ …… 136
第96図　土坑20～24号 …… 137
第97図　土坑25～27号・中世遺構内の遺物⑮ …… 138
第98図　土坑28～32号・中世遺構内の遺物⑯ …… 139
第99図　土坑33・34号・中世遺構内の遺物⑰ …… 140
第100図　土坑35号・中世遺構内の遺物⑱ …… 141
第101図　土坑36号・中世遺構内の遺物⑲ …… 142
第102図　炉跡１～３号 …… 143
第103図　溝状遺構１・２号溝（51～56区）…… 145
第104図　溝状遺構１・２号溝（56～61区）および集積１・２号 … 146
第105図　溝状遺構１号断面・集石１・２号…… 147
第106図　溝状遺構１号道跡（51～56区）および石列１ … 148
第107図　溝状遺構１号道跡（56～61区）・石列２ … 149
第108図　溝状遺構１号階段状出入口および分岐点 … 150
第109図　溝状遺構２号断面１～３ …… 151
第110図　中世遺構内の遺物⑳ …… 152
第111図　中世遺構内の遺物㉑ …… 153
第112図　中世遺構内の遺物㉒ …… 154
第113図　中世遺構内の遺物㉓ …… 155
第114図　中世遺構内の遺物㉔ …… 156
第115図　中世遺構内の遺物㉕ …… 157
第116図　中世遺構内の遺物㉖ …… 158
第117図　中世遺構内の遺物㉗ …… 159
第118図　中世遺構内の遺物㉘ …… 161
第119図　中世遺構内の遺物㉙ …… 162
第120図　溝状遺構３号および断面１・２ …… 164
第121図　中世遺構内の遺物㉚ …… 166
第122図　溝状遺構４号平面図 …… 168
第123図　溝状遺構４号断面１・２ …… 169
第124図　溝状遺構４号集積３・４号 …… 170
第125図　溝状遺構４号石列３・４ …… 171
第126図　中世遺構内の遺物㉛ …… 172
第127図　中世遺構内の遺物㉜ …… 173
第128図　中世遺構内の遺物㉝ …… 174
第129図　溝状遺構５号および断面 …… 175
第130図　中世遺構内の遺物㉞ …… 176
第131図　溝状遺構６・７号および６号断面１…… 177
第132図　溝状遺構６号断面２および７号断面１・２… 178
第133図　中世遺構内の遺物㉟ …… 179
第134図　中世遺構内の遺物㊱ …… 180
第135図　中世遺構内の遺物㊲ …… 181
第136図　溝状遺構８号および断面 …… 182
第137図　中世遺構内の遺物㊳ …… 183
第138図　中世の遺物① …… 190
第139図　中世の遺物② …… 192
第140図　中世の遺物③ …… 193
第141図　中世の遺物④ …… 194
第142図　中世の遺物⑤ …… 195
第143図　中世の遺物⑥ …… 196
第144図　中世の遺物⑦ …… 197
第145図　中世の遺物⑧ …… 198
第146図　中世の遺物⑨ …… 199
第147図　中世の遺物⑩ …… 200
第148図　中世の遺物⑪ …… 201
第149図　中世の遺物⑫ …… 202
第150図　中世の遺物⑬ …… 203
第151図　中世の遺物⑭ …… 204
第152図　中世の遺物⑮ …… 205
第153図　中世の遺物⑯ …… 206
第154図　中世の遺物⑰ …… 207
第155図　中世の遺物⑱ …… 208
第156図　中世の遺物⑲ …… 209
第157図　中世の遺物⑳ …… 210
第158図　中世の遺物㉑ …… 211
第159図　中世の遺物㉒ …… 212
第160図　中世の遺物㉓ …… 213
第161図　中世の遺物㉔ …… 214
第162図　中世の遺物㉕ …… 215

第163図　中世の遺物㉖ …… 216
第164図　中世の遺物㉗ …… 217
第165図　中世の遺物㉘ …… 218
第166図　近世遺構配置図 …… 227
第167図　掘立柱建物跡13号・近世遺構内の遺物①… 229
第168図　土坑37・38号・近世遺構内の遺物② …… 230
第169図　土坑39・40号・近世遺構内の遺物③ …… 231
第170図　土坑41・42号・近世遺構内の遺物④ …… 232
第171図　土坑43・44号・近世遺構内の遺物⑤ …… 233
第172図　土坑45号・近世遺構内の遺物⑥ …… 234
第173図　近世の遺物① …… 236
第174図　近世の遺物② …… 238
第175図　近世の遺物③ …… 239
第176図　近世の遺物④ …… 240
第177図　近世の遺物⑤ …… 242
第178図　近世の遺物⑥ …… 243
第179図　近世の遺物⑦ …… 244
第180図　近世の遺物⑧ …… 245
第181図　近世の遺物⑨ …… 246
第182図　近世の遺物⑩ …… 247
第183図　近世の遺物⑪ …… 248
第184図　近世の遺物⑫ …… 249
第185図　近世の遺物⑬ …… 250
第186図　製鉄関連遺構配置図 …… 256
第187図　製鉄遺構調査区配置図 …… 256
第188図　製鉄炉１号・出土遺物 …… 258
第189図　製鉄炉２号 …… 259
第190図　製鉄炉３号 …… 259
第191図　土坑51～54号 …… 260
第192図　土坑55・56号 …… 261
第193図　製鉄炉３号・土坑51·54·56号出土遺物…… 262
第194図　製鉄炉４号・土坑全体配置図 …… 263
第195図　製鉄炉４号 …… 263
第196図　土坑49・50号 …… 264
第197図　製鉄炉４号・土坑50号出土遺物 …… 265
第198図　竪穴建物跡２号 …… 265
第199図　竪穴建物跡２号出土遺物 …… 266
第200図　土坑46～48・57号出土遺物 …… 267
第201図　炉跡４～６号 …… 267
第202図　硬化面２ …… 268
第203図　硬化面２出土遺物 …… 269
第204図　羽口１ …… 269
第205図　羽口２ …… 270
第206図　炉壁１ …… 271
第207図　炉壁２ …… 272
第208図　炉外滓 …… 275
第209図　炉底滓Ａ …… 276
第210図　炉底滓Ｂ …… 277
第211図　炉内滓Ｃ …… 277
第212図　炉内滓Ｄ …… 277
第213図　炉内滓Ｅ …… 277
第214図　炉内滓Ｆ …… 278
第215図　炉内滓Ｇ …… 278
第216図　鉄塊 …… 278
第217図　炉跡遺構配置図 …… 279
第218図　炉跡７～10号配置図 …… 280
第219図　炉跡７号・出土遺物 …… 280
第220図　炉跡８・９号 …… 281
第221図　炉跡10号 …… 282
第222図　炉跡11・12号 …… 283
第223図　炉跡13号·出土遺物…… 284
第224図　炉跡14号 …… 285
第225図　北部炉跡群の位置 …… 285
第226図　炉跡15・16・20・21号 …… 286
第227図　炉跡15・16号出土遺物 …… 287
第228図　炉跡17・22号 …… 288
第229図　炉跡18・19号・出土遺物 …… 289
第230図　土坑58号・ピット実測図 …… 290
第231図　ピット出土遺物１ …… 290
第232図　ピット出土遺物２ …… 291
第233図　土坑59～66号 …… 294
第234図　土坑67～71号・出土遺物 …… 295
第235図　土坑72～77号・出土遺物 …… 296
第236図　炉跡23～28号 …… 298
第237図　炉跡29・30号 …… 299
第238図　ピット及び周辺遺構配置図（43～53区） … 302
第239図　ピット及び周辺遺構配置図（53～64区） … 303
第240図　ピット及び周辺遺構配置図（63～74区） … 304
第241図　ピット及び周辺遺構配置図（67～76区） … 305
第242図　ピット拡大図①（Ｄ・Ｅ－49～51区） … 306
第243図　ピット拡大図②（Ｅ・Ｆ－72～75区） … 307
第244図　ピット出土遺物① …… 308
第245図　ピット出土遺物② …… 309
第246図　ピット出土遺物③ …… 310

第247図　ピット出土遺物④ …… 311
第248図　その他の遺物① …… 314
第249図　その他の遺物② …… 315
第250図　その他の遺物③ …… 316
第251図　その他の遺物④ …… 318
第252図　その他の遺物⑤ …… 319
第253図　その他の遺物⑥ …… 320
第254図　その他の遺物⑦ …… 321

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 17
第２表　阿久根 IC ～西目 IC 間の遺跡 …… 18
第３表　北山遺跡基本層序…… 27
第４表　新旧遺構対応表…… 28
第５表　集石観察表…… 30
第６表　縄文時代遺構内出土土器観察表…… 70
第７表　縄文土器観察表(1)…… 70
第８表　縄文土器観察表(2)…… 71
第９表　縄文時代遺構内出土石器観察表…… 72
第10表　石器観察表(1)（Ⅲ・Ⅳ層出土）…… 72
第11表　石器観察表(2)（Ⅰ・Ⅱ層出土）…… 72
第12表　石器観察表(3)（Ⅰ・Ⅱ層出土）…… 73
第13表　石器観察表(4)（縄文時代以外の遺構内出土）… 73
第14表　古墳時代遺物観察表…… 74
第15表　古代土師器・須恵器・青磁観察表(1)…… 99
第16表　古代土師器・須恵器・青磁観察表(2)…… 100
第17表　古代土師器・須恵器・青磁観察表(3)…… 101
第18表　古代土師器・須恵器・青磁観察表(4)…… 102
第19表　古代土師器・須恵器・青磁観察表(5)…… 103
第20表　古代土製品観察表…… 103
第21表　古代焼塩土器・紡錘車等観察表…… 103
第22表　中世遺構内出土遺物観察表(1)…… 183
第23表　中世遺構内出土遺物観察表(2)…… 184
第24表　中世遺構内出土遺物観察表(3)…… 185
第25表　中世遺構内出土遺物観察表(4)…… 186
第26表　中世遺構内出土遺物観察表(5)…… 187
第27表　中世遺構内出土遺物観察表(6)…… 188
第28表　中世の土師器・須恵器・瓦質土器観察表(1)… 219
第29表　中世の土師器・須恵器・瓦質土器観察表(2)… 220
第30表　中世の陶磁器観察表(1)…… 221
第31表　中世の陶磁器観察表(2)…… 222
第32表　中世の陶磁器観察表(3)…… 223
第33表　中世の陶磁器観察表(4)…… 224
第34表　中世の陶磁器観察表(5)…… 225
第35表　中世の石製品観察表…… 225
第36表　陶磁器の時期区分…… 226
第37表　近世遺構内出土陶磁器観察表…… 235
第38表　近世遺構内出土石製品観察表…… 235
第39表　近世遺構内出土金属製品観察表(1)…… 235
第40表　近世遺構内出土金属製品観察表(2)…… 235
第41表　近世の遺物(1)…… 251
第42表　近世の遺物(2)…… 252
第43表　近世の遺物(3)…… 253
第44表　近世の遺物(4)…… 254
第45表　近世の遺物(5)…… 255
第46表　羽口観察表…… 270
第47表　遺構内鉄滓出土一覧表…… 274
第48表　炉壁・炉底観察表…… 274
第49表　鉄滓観察表…… 278
第50表　製鉄関連遺構内土師器・須恵器・瓦質土器観察表… 292
第51表　製鉄関連遺構内陶磁器観察表…… 292
第52表　製鉄関連遺構内土製品観察表…… 292
第53表　ピット出土遺物一覧(1)…… 312
第54表　ピット出土遺物一覧(2)…… 313
第55表　その他の遺構内遺物観察表(1)…… 322
第56表　その他の遺構内遺物観察表(2)…… 323
第57表　その他の遺構内遺物観察表(3)…… 323
第58表　その他の遺構内遺物観察表(4)…… 323
第59表　その他の遺物（石器・石製品）観察表…… 323
第60表　その他の遺物（金属製品）観察表…… 324
第61表　その他の遺物（土器）観察表…… 324

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景
図版２　縄文時代の遺構①…… 376
図版３　縄文時代の遺構②…… 377
図版４　縄文時代の遺構③…… 378
図版５　中世の遺構①…… 379
図版６　中世の遺構②…… 380
図版７　中世の遺構③…… 381
図版８　中世の遺構④…… 382
図版９　中世の遺構⑤…… 383
図版10　中世の遺構⑥…… 384
図版11　中世の遺構⑦…… 385
図版12　中世の遺構⑧…… 386
図版13　中世の遺構⑨…… 387
図版14　中世の遺構⑩…… 388
図版15　中世の遺構⑪…… 389
図版16　中世の遺構⑫…… 390
図版17　中世の遺構⑬…… 391
図版18　中世の遺構⑭…… 392
図版19　ピット完掘状況…… 393
図版20　製鉄関連遺構①…… 394
図版21　製鉄関連遺構②…… 395
図版22　製鉄関連遺構③…… 396
図版23　製鉄関連遺構④…… 397
図版24　縄文時代の遺物①…… 398
図版25　縄文時代の遺物②…… 399
図版26　縄文時代の遺物③…… 400
図版27　縄文時代の遺物④…… 401
図版28　古代の遺物①…… 402
図版29　古代の遺物②…… 403
図版30　中世の遺物①…… 404
図版31　中世の遺物②…… 405
図版32　中世の遺物③…… 406
図版33　中世の遺物④…… 407
図版34　中世の遺物⑤…… 408
図版35　近世の遺物…… 409
図版36　金属製品・硯…… 410

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

県教委は，文化財の保存・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき，鹿児島国道事務所は，南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設の施工計画に基づき，事業区内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「県文化財課」という。）に照会した。

これを受けて県文化財課及び埋文センターが，平成29年度に事業予定地内の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果，事業区内には周知の遺跡を含め10か所の遺物散布地の存在が判明した。

分布調査の結果をもとに，事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについて，鹿児島国道事務所，県文化財課，埋文センターの三者で協議を行い，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に発掘調査を実施することとした。

これを受けて，遺跡の残存状況をより詳細に把握するため，県文化財課が平成30年７月27日（金）に試掘調査，埋文センターが令和元年12月２日（月）～25日（水）にかけて確認調査を行った。試掘調査及び確認調査は，文化庁の国庫補助を受けて県内遺跡発掘調査等事業として実施した。その結果，事業区域内13,190㎡の範囲に遺物包蔵地が存在することが判明した。

試掘調査・確認調査の結果を受けて，本調査は県教委から，調査センターへ委託することとなった。

本調査が必要と判断された表面積13,190㎡のうち，令和２年度は，表面積2,230㎡・延面積3,121㎡の調査を行った。調査期間は，令和２年10月１日（日）～３年１月27日（水）（実働66日間）であった。令和３年度前期は，表面積3,104㎡・延面積4,481㎡の調査を行った。調査期間は令和３年５月10日（月）～７月28日（水）（実働43日間）であった。また，後期は，調査センターが民間調査組織と支援業務委託を契約して，表面積7,721㎡・延面積11,549㎡の調査を行った。調査期間は令和３年10月４日（月）～４年１月28日（金）（実働63日間）であった。令和４年度は，表面積7,327㎡・延面積9,327㎡の調査を行った。調査期間は令和４年５月11日（水）～５年１月27日（金）（実働133日間）であった。令和５年度は，表面積2,530㎡・延面積2,530㎡の調査を行った。調査期間は令和５年９月１日（金）～12月27日（水）（実働74日）である。

第２節　調査の組織

１　分布調査

分布調査は，鹿児島国道事務所から県文化財課が南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）阿久根北～西目ＩＣ間の依頼を受け，平成29年12月11日（月）に実施した。調査体制は，次のとおりである。

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
調 査 者　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　平　美典
　　県立埋蔵文化財センター
　　調査課第一調査係長　中村　和美
立 会 者　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
　　南九州西回り自動車道プロジェクト推進室
　　事業対策官　沼田　英昭
　　計画課　専門官　中薗　雅人
　　企画係長　岡元　侑己
　　技官　鶴丸　巧
　　技官　馬場ひなの
協 力 者　阿久根市教育委員会　生涯学習課
　　主事補　宮田　大之

２　試掘調査

試掘調査は，分布調査の結果を受けて，平成30年７月27日（金）に実施した。調査の結果，古墳時代から古代の遺跡が残存していることを確認した。調査体制は，次のとおりである。

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
調 査 者　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　平　美典
調査協力　阿久根市教育委員会　生涯学習課
　　主事補　宮田　大之

３　確認調査

遺跡の確認調査は，令和元年度から３年度にかけて，条件整備が整った範囲を対象に計30か所の確認トレンチを設定し順次実施した。トレンチの規模は，任意の大き

さで設定し，必要に応じて拡張を行った。調査は，表土を重機により剥いだ後，鋤簾等による人力掘削を基本として遺構・遺物の確認を行った。遺構については，各層の上面で検出を行った。

令和元年度

調査は，北山遺跡の西側約9,500㎡を対象に17か所の確認トレンチを設定し，令和元年12月２日（月）～12月25日（水）まで実施した。調査の結果，縄文時代早期・後期・晩期，古墳時代，古代，中世，近世の遺物が出土した。

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
事業主体	鹿児島県教育委員会	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所　　長	前迫　亮一
調査企画	次長兼総務課長	野間口　誠
	南の縄文調査室長兼調査課長	
		中村　和美
	第二調査係長	三垣　恵一
調査担当	文化財主事	隈元　俊一
	文化財研究員	加世田　尊
調査事務	主　　査	新穂　秀貴

確認調査の概要（第１図）

（４トレンチ）

Ｅ－30・31区に，東西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅳ層を検出した。Ⅳ層では，土坑１基，ピット３基を検出した。遺物は成川式土器，青磁，東播系須恵器，染付，陶器，滑石，黒曜石剥片，チャート剥片が出土した。遺構を検出したため，Ⅳ層で掘削を終了した。

（５トレンチ）

Ｇ・Ｈ－31区に，北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅵa層を検出した。Ⅵa層上面を精査したが，遺構・遺物は発見されなかった。その後下層の掘削を行ったところ，明赤褐粘質土に砂質の土塊が混入するⅦa・b層が堆積していることを確認した。深度が深くなったため，Ⅶb層の途中で掘削を終了した。

（６トレンチ）

Ｆ・Ｇ－38・39区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅵb層を検出した。Ⅰ層で青磁片が出土したのみで，遺構は検出されなかった。調査は，Ⅶb層で終了した。

（７トレンチ）

Ｈ－28区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅱb層を検出した。遺構は検出されなかった。遺物はⅡb層で加栗山式土器，成川式土器，土師器，染付，Ⅲ層で型式不明の土器が出土した。調査はⅣ層途中で終了した。

（８トレンチ）

Ｅ－25区に，北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅲ層を検出した。Ⅲ層で精査したが，遺構・遺物は確認できなかった。その後重機により下層確認トレンチを入れたが遺構・遺物はなく，Ⅳ～Ⅵa層の堆積を確認して調査を終了した。

（９トレンチ）

Ｅ－34区からＨ－35区にかけて，北西－南東方向に約31ｍのトレンチを設定した。表土を重機で掘削したところ，北西側ではⅥa層が，南東側ではⅡa層を検出した。その後人力でⅡa・b層を掘削した。遺構はⅡb層で焼土跡１基，Ⅲ層上面で土坑２基，Ⅵa層上面で土坑１基を検出した。遺物は縄文土器，成川式土器，須恵器，土師器，白磁，青磁，瓦質土器，土錘，鞴の羽口，染付，陶器，打製石鏃，磨石，鉄滓，黒曜石剥片，チャート剥片が出土した。調査はⅢ～Ⅵa層上面で終了した。

（10トレンチ）

Ｇ－24・25区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅵa層を検出した。Ⅵa層上面を精査したところ，土坑１基，ピット１基を検出した。遺物は成川式土器と思われる土器片と土師器が出土した。調査はⅦa層で終了した。

（11トレンチ）

Ｅ－22区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところⅥa層を検出した。南東方向へ拡張したところ，Ⅵa層上面で土坑４基を検出した。遺物はⅠ層で染付が出土したのみであった。調査はⅦa層で終了した。

（12トレンチ）

Ｆ－18・19区に，北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅳ層を検出した。遺構は土坑１基，ピット１基を検出した。遺物は縄文時代のものと思われる土器片が出土した。遺構部分を避けて重機を用いて下層確認を実施した結果，Ⅴ～Ⅵb層は堆積しておらず，Ⅶa層が露出した。Ⅶa層上面で調査を終了した。

（13トレンチ）

Ｇ－32～34区に，北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，南西側でⅥa層，北東側でⅡa層を検出した。遺構は検出されなかった。遺物はⅡa層で染付が出土したのみである。Ⅱb～Ⅳ層は堆積しておらず，Ⅵa層上面で調査を終了した。

（19トレンチ）

Ｆ－37区に，北西－南東方向に設定した。この地点はⅥa層より上位の層が残存していないことが分かってい

たため，Ⅶ層以下の層の堆積状況を調査するために重機を用いて掘削した。Ⅶb層以下は10cm程度の粘質土が堆積し，その下は阿久根火砕流によると思われる溶結凝灰岩層を検出した。

遺構・遺物は確認できなかった。調査は溶結凝灰岩層で終了した。

（20トレンチ）

Ｅ・Ｆ－31区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅱa層を検出した。Ⅱa層を人力で掘削したがあまり残存しておらず，下位のⅡb～Ⅴ層は堆積していなかった。遺構は検出されず，遺物はⅠ層で染付，Ⅱa層で稜花皿が出土した。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

令和２年度

調査は，北山遺跡の北側約2,800㎡を対象に４か所のトレンチを設定し，令和２年９月１日（火）～９月28日（月）まで実施した。調査の結果，古代から中世の遺構・遺物を確認した。

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所　　長	前迫　亮一
調査企画	次長兼総務課長	野間口　誠
	南の縄文調査室長兼調査課長	
		中村　和美
	第一調査係長	三垣　恵一
調査担当	文化財主事	上浦　麻矢
	文化財主事	馬籠　亮道
調査事務	主　　査	新穂　秀貴

確認調査の概要

（21トレンチ）

Ｆ－76区に，北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅵa層を検出した。Ⅶa層まで人力で掘削したが，遺構・遺物は確認できなかった。

（22トレンチ）

Ｇ－72・73区に，東－西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅱa層を検出した。人力で掘削を行い，近世のものと考えられる造成土と土坑や柱穴が発見された。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

（23トレンチ）

Ｆ－70区に，北西－南東方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅱa層を検出した。Ⅲ層でピット２基を確認し，遺物は中世から近世のものと思われる陶磁器等を確認した。

遺構の可能性を考慮し，調査はⅢ層上面で終了した。

（24トレンチ）

Ⅰ－75区に，北東－南西方向に設定した。表土を重機で掘削したところ，Ⅱa層を検出した。人力で掘削を行い，近世のものと考えられる造成土，遺物は中世から近世のものと思われる陶磁器等を確認した。Ⅵb層上面で掘削を終了した。

令和３年度

調査は，北山遺跡の東側約12,000㎡を対象に９か所のトレンチを設定し，令和３年５月18日（火）～６月11日（金）まで実施した。調査の結果，縄文時代早期，古代から中世の遺物が出土した。

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所　　長	中原　一成
調査企画	次長兼総務課長	大口　浩嗣
	南の縄文調査室長兼調査課長	
		寺原　徹
	第一調査係長	三垣　恵一
調査担当	文化財主事	湯場﨑　辰巳
	文化財主事	上浦　麻矢
調査事務	主　　査	和田　賢

確認調査の概要

（25トレンチ）

Ｄ・Ｅ－65区に，北東－南西方向に設定した。表土下からⅤ層が検出され，縄文時代早期と考えられる土器や石器が出土した。また，Ⅵa層上面では，古代から中世と考えられる土坑・柱穴等を検出した。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

（26トレンチ）

Ｆ－65区に，北東－南西方向に設定した。表土下からⅤ層が検出され，縄文時代早期と考えられる土器や石器が出土した。また，Ⅵa層上面では，古代から中世と考えられる土坑・柱穴等を検出した。Ⅵb層上面で掘削を終了した。

（27トレンチ）

Ｈ－65区に，北東－南西方向に設定した。表土下からⅤ層が確認され，縄文時代早期と考えられる土器が出土した。また，Ⅵa層上面では，縄文時代早期と考えられる土坑を検出した。Ⅵb層上面で掘削を終了した。

（28トレンチ）

Ｆ－62区に，北東－南西方向に設定した。表土下から

Ⅵa層が確認され，Ⅵa層上面で古代から中世と考えられる柱穴や，縄文時代早期と考えられる土坑を検出した。遺物は出土しなかった。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

（29トレンチ）

Ｈ－62区に，北東－南西方向に設定した。表土下からⅤ層が確認され，黒曜石のチップが出土した。また，Ⅵa層上面では，縄文時代早期と考えられる土坑を検出した。Ⅵb層上面で掘削を終了した。

（30トレンチ）

Ｅ・Ｆ－58・59区に，北東－南西方向に設定した。表土下からⅥa層が確認され，Ⅵa層上面では，古代から中世と考えられる土坑や柱穴を検出した。遺物は出土しなかった。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

（31トレンチ）

Ｈ－58区に，北東－南西方向に設定した。表土下からⅡb層が確認され，近世と考えられる陶磁器や鉄滓が出土した。また，Ⅵa層で古代から中世と考えられる土坑や柱穴を検出した。Ⅱb層直下はⅥa層で，Ⅲ～Ⅴ層は残存していなかった。Ⅵa層上面で掘削を終了した。

（32トレンチ）

Ｄ－59区に，北西－南東方向に設定した。表土下からⅦ層が確認された。旧石器時代の可能性を考えたが，遺構・遺物は確認できなかった。Ⅶa層上面で掘削を終了した。

（33トレンチ）

Ｄ・Ｅ－60・61区に，北東－南西方向と北西－南東方向に設定した。表土下からⅥa層が確認された。Ⅵa層上面での，遺構・遺物は確認できなかった。Ⅵb層上面で掘削を終了した。

４　本調査

確認調査の結果，本調査の範囲は，12トレンチ西側の市道から21・24トレンチ東側の集落道間までとした。市道部分は，深く削平されていたため，調査範囲に含めていない。調査対象表面積は約26,500㎡である。

令和２年度

令和２年度は，調査着手のための条件が整った範囲，表面積2,230㎡（延面積3,121㎡）の調査を実施した。調査期間は，令和２年10月１日（木）～３年１月27日（水）（実働66日間）である。

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中原　一成
調査企画　総務課長兼総務係長　中島　治
　　調査課長　寺原　徹
　　調査第二係長　有馬　孝一
調査担当　文化財専門員　加世田　尊
　　文化財専門員　髙吉　伸弥
調査事務　主事　上園　慶子

令和３年度

令和３年度は，条件が整った範囲の表面積3,104㎡（延面積4,481㎡）の本調査を実施した。調査期間は，令和３年５月10日（月）～３年７月28日（水）（実働43日）である。

（直営）

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中村　和美
調査企画　総務課長兼総務係長　中島　治
　　調査課長　福永　修一
　　調査第二係長　有馬　孝一
調査担当　文化財専門員　加世田　尊
　　文化財専門員　肥後　弘章
　　文化財専門員　田上　俊一
　　文化財専門員　林田　真一
調査事務　主事　上園　慶子

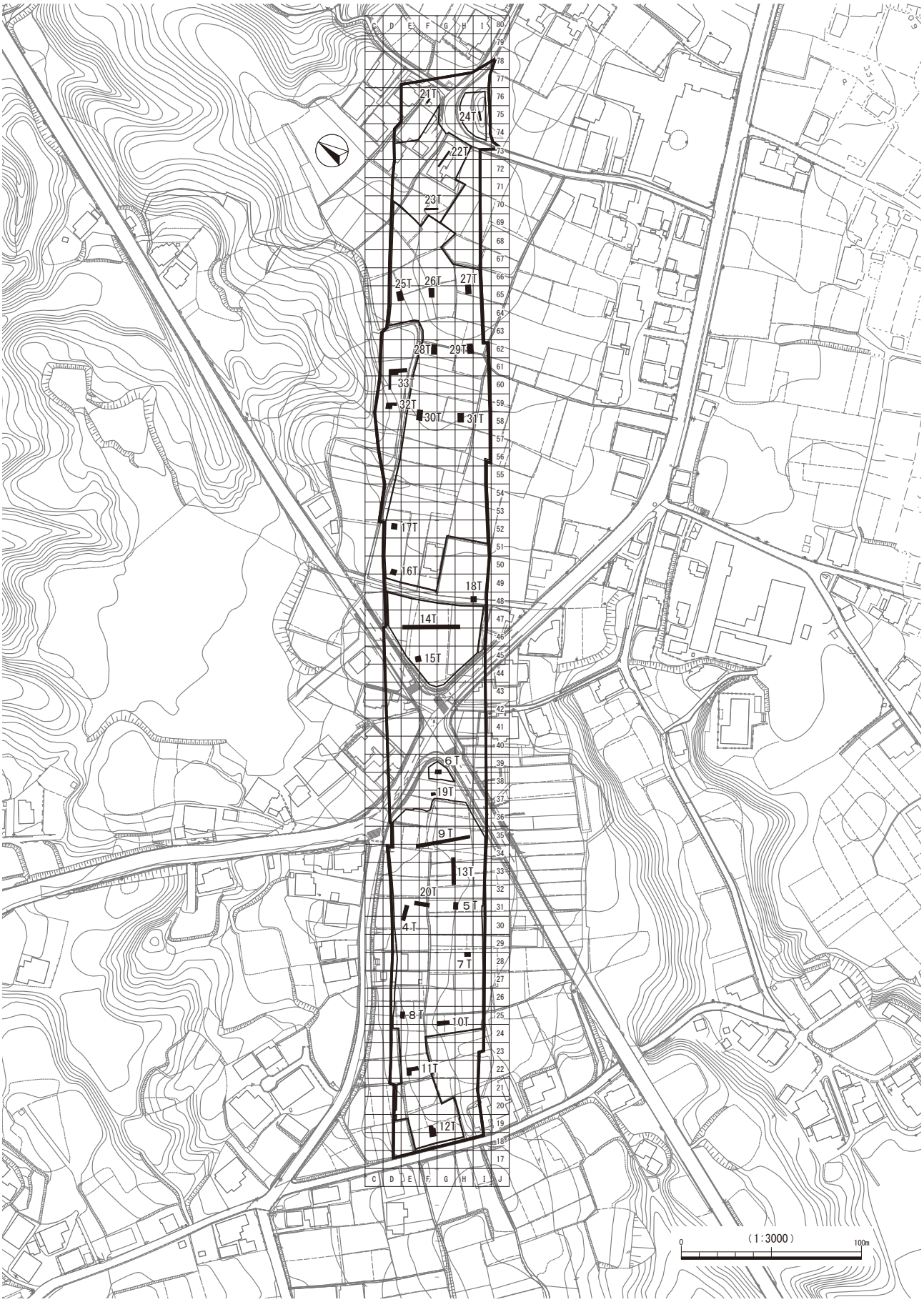
直営方式による調査に続き，条件が整った範囲の表面積7,721㎡（延面積11,549㎡）の本調査を，調査の進捗を図るため，民活方式による調査を実施した。調査期間は，令和３年10月４日（月）～４年１月28日（金）（実働63日間）である。

発掘調査の実施にあたり，調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，国際文化財株式会社へ本調査（記録保存調査）等の支援業務委託を実施した。

なお，調査センター職員２名が常駐し，調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

（民活：民間支援業務委託）

調査担当　文化財専門員　加世田　尊
　　文化財専門員　田上　俊一
調査事務　主事　上園　慶子
委託先　国際文化財株式会社
調査体制　国際文化財株式会社
　　主任技術者　飯田　英樹



第１図　北山遺跡トレンチ配置図

主任調査支援員　安村　健
調査支援員　宮田　慈
四家　礼乃
土岐　耕司
（10月）
駒井　沙紀
長林　大
（10月～）

委託期間　令和３年10月４日～令和４年３月11日
委託内容　記録保存調査　１式
測量業務　１式
土工業務　１式
検　査　中間検査　令和３年12月15日（水）
完成検査　令和４年２月25日（金）
（実地検査）
令和４年３月１日（火）
（成果物検査）

令和４年度

令和４年度は，条件が整った範囲の表面積7,327㎡（延面積9,327㎡）の本調査を実施した。調査期間は，令和４年５月11日（水）～５年１月27日（金）（実働133日）である。

事業主体　国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　中村　和美
調査企画　総務課長兼総務係長　中島　治
調査課長　三垣　恵一
調査第二係長　川口　雅之
調査担当　文化財専門員　田上　俊一
文化財専門員　藤﨑　光洋
（５月～10月）
文化財専門員　松山　初音
（11月～１月）
調査事務　事業推進員　市成　英加
（５月～８月）
事業推進員　今掛　美子
（９月～１月）

令和５年度

令和５年度は，条件が整った範囲の表面積2,530㎡（延面積2,530㎡）の本調査を行い，終了した。調査期間は，令和５年９月１日（金）～５年12月27日（水）（実働74日）である。

事業主体　国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　寺原　徹
調査企画　総務課長兼総務係長　脇田　清幸
調査課長　三垣　恵一
調査第三係長　上床　真
調査担当　文化財専門員　辻　明啓
文化財専門員　山川　正樹
（11月～12月）
文化財調査員　野田　清志
調査事務　事業推進員　今掛　美子

第３節　発掘調査の経過

発掘調査の経過については，日誌抄を月ごとに集約して記載する。

１　調査の過程（日誌抄　Ｒ４刊行済地点も含む）

令和２年度

９月

Ｇ～Ｉ－43～49区
表土剥ぎ（重機使用）

10月

Ｇ～Ｉ－43～46区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，土坑（SK１・２・４～６）調査，写真撮影，実測
21日　安全パトロール
監理業務　立神文化財主事（県文化財課）
監理業務　前迫所長（埋文センター）
監理業務　中村調査課長（埋文センター）
現地視察　中原センター長

11月

Ｅ・Ｆ－43～45区
表土剥ぎ（重機使用）
Ｇ～Ｉ－43～48区
Ⅱa層掘り下げ，掘立柱建物跡（SB１，２）土坑（SK３，５～10）不明遺構（SX１～３）調査，写真撮影，実測
監理業務　前迫所長（埋文センター）
監理業務　三垣第一調査係長（埋文センター）
現地調査　有馬係長

12月

Ｄ～Ｆ－46～48区
表土剥ぎ（重機使用），Ⅱb 層掘り下げ
Ｇ～Ｉ－47・48区

Ⅱb層掘り下げ，掘立柱建物跡（SB１・２）土坑（SK12～14・16～26）不明遺構（SX１～５）調査，写真撮影，実測
５日　現地説明会
　現地視察　中原センター長
　現場指導　寺原調査課長　中島総務課長
　現地調査　福永係長　有馬係長　黒川係長
22日　空中写真撮影
　監理業務　中村調査課長（埋文センター）
　現地調査　有馬係長

１月

Ｄ～Ｇ－47・48区
Ⅱb層掘り下げ，土坑（SK12・30～48）不明遺構（SX１・３・６・10～25）調査，写真撮影，実測
　監理業務　横手第二調査係長（埋文センター）
　現地視察　中原センター長
　現地調査　有馬係長

２月

埋め戻し
５日　　調査終了

令和３年度（直営）

４月

Ｅ～Ｈ－17～25区
表土剥ぎ（重機使用）

５月

Ｆ－18・19区，Ｅ－20～25区，Ｆ～Ｈ－24・25区
表土剥ぎ（重機使用），Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，土坑（SK52，53）掘り下げ
Ｆ・Ｇ－38・39区
表土剥ぎ（重機使用），Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構検出，地形測量，土層断面図作成，写真撮影，ピット実測，埋め戻し
25日　安全パトロール
　監理業務　立神文化財主事（県文化財課）
　現地調査　有馬係長

６月

Ｄ～Ｆ－19～25区，Ｇ・Ｈ－18～20区，Ｇ～Ｉ－24・25区
Ⅱb層掘り下げ，Ⅲ層掘り下げ
竪穴建物跡（SI１・２・３）溝状遺構（SD１・２）土坑（SK52・54・56・57）ピット（SP122～127）不明遺構（SX29）調査，先行トレンチ，写真撮影
Ｈ・Ｉ－74～76区（調査区３）
表土剥ぎ（重機使用），Ⅱa層掘り下げ
　現地視察　中村センター長
　現場指導　福永調査課長
　現地調査　有馬係長

７月

Ｅ～Ｈ－18・19区，Ｄ～Ｈ－19・20区，Ｄ～Ｆ－21～25区，Ｇ～Ｉ－24・25区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅲ層掘り下げ，トレンチ拡張，調査区実測，セクションポイント実測
竪穴建物跡（SI３）土坑（SK60・68）ピット（SP）調査
Ｈ・Ｉ－74～76区（調査区３）
Ⅱa層掘り下げ
土坑（SK61～67，70～75）ピット（SP）調査
６日　空中写真撮影
28日　埋め戻し
　調査終了
　監理業務　立神文化財主事
　監理業務　西園第２調査係長（埋文センター）
　現地視察　中村センター長
　現場指導　福永調査課長
　現地指導　中島総務課長
　現地調査　有馬係長
　鹿児島国道事務所来跡

令和３年度（民活）

10月

Ｄ～Ｉ－25～37区（調査区①）
表土剥ぎ（重機使用），Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構検出，遺構調査
Ｄ～Ｈ－69～74区（調査区②）
表土剥ぎ（重機使用），Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構検出，遺構調査
　現地視察　中村センター長
　現場指導　中島総務課長
　現場指導　福永調査課長
　現地調査　有馬係長

11月

Ｄ～Ｇ－25～30区
Ⅱb層掘り下げ，遺構調査
Ｇ～Ｉ－31～34区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構調査
溝状遺構（SD５）ピット（SP）調査掘立柱建物跡（SB３～８）写真撮影
Ｄ～Ｈ－69～74区
Ⅱb層掘り下げ
遺構検出，遺構調査，ピット調査，写真撮影
８日　安全パトロール
　監理業務　横手係長（県文化財課）
　監理業務　寺原調査課長（埋文センター）
　現地視察　中村センター長

12月
Ｄ～Ｇ－25～30区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，実測，掘り下げ
Ｇ～Ｉ－31～34区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，実測，掘り下げ
Ｄ～Ｈ－69～74区
Ⅱb層掘り下げ，遺構検出，遺構調査，土坑（SK1001～1019）炉跡（SL1001）ピット（SP）調査，写真撮影，実測，掘り下げ
４日　現地説明会
監理業務　立神文化財主事（県文化財課）
現地視察　中村センター長
現場指導　福永調査課長　中島総務課長
現地調査　永濵係長　有馬係長　黒川係長
国土交通省来跡
１月
Ｄ～Ｇ－25～30区
Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，地形測量，埋め戻し
Ｇ～Ｉ－31～34区
Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，地形測量，埋め戻し
Ｄ～Ｈ－69～74区
Ⅲ層掘り下げ，遺構検出，遺構調査，写真撮影，実測，掘り下げ
14日　空中写真撮影
埋め戻し
調査終了
現地視察　中村センター長
現場指導　福永調査課長
現地調査　永濵係長　有馬係長　黒川係長

令和４年度
Ｄ～Ｉ－52～70区（未買地を除く）
表土剥ぎ（重機使用）
５月
Ｄ～Ｆ－66～70区
Ⅱa～Ⅴ層，表土剥ぎ後の精査，遺構検出，写真撮影，Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構調査
溝状遺構（SD11・12）土坑（SK81・82）調査
現地視察　中村センター長
現場指導　三垣調査課長
現地調査　川口係長
27日　安全パトロール
６月
Ｄ～Ｆ－63～70区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，掘立柱建物跡（SB16，竪穴建物跡SI7）溝状遺構（SD11・12）土坑（SK81～84）ピット（SP）調査
現場指導　三垣調査課長
現地調査　川口係長
７月
Ｄ～Ｆ－56～66区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構検出，遺構調査，写真撮影，集石（SS２）掘立柱建物跡（SB16）竪穴建物跡（SI７）溝状遺構（SD11・12・13）土坑（SK81～84）ピット（SP）調査
現地視察　中村センター長
現場指導　三垣調査課長
監理業務　黒川第１調査係長（埋文センター）
現地調査　川口係長
８月
Ｄ～Ｆ－56～70区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構検出，遺構調査，写真撮影，溝状遺構（SD13・14）ピット（SP）調査
Ｄ・Ｅ－48～51区
表土剥ぎ（重機使用）
24日　現地指導　佐藤　亜聖氏（滋賀県立大学）
現地調査　川口係長
９月
Ｄ～Ｇ－59～70区
Ⅱa層掘り下げ，Ⅱb層掘り下げ，遺構検出，遺構調査，写真撮影，溝状遺構（SD11・12）ピット（SP）調査
Ｅ・Ｆ－49～59区
Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ
Ｄ・Ｅ－48～52区
表土剥ぎ（重機使用），Ⅳ層掘り下げ
１日　遺構実測委託開始（イビソク）
現地視察　中村センター長
現地視察　中島総務課長
現場指導　三垣調査課長
現地調査　川口係長
10月
Ｄ～Ｇ－59～70区
Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ層掘り下げ，遺構検出，遺構調査，写真撮影，集石（SS２）溝状遺構（SD12・13）ピット（SP）調査
Ｅ～Ｇ－49～54区
表土剥ぎ（重機使用），Ⅲ層掘り下げ
Ｄ・Ｅ－62・63区
表土剥ぎ（重機使用）
現地視察　中村センター長
現場指導　三垣調査課長
現地調査　川口係長

11月
Ｇ～Ｉ－51～61区
Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，土坑(SK89)調査
Ｇ～Ｉ－52～61区
表土剥ぎ（重機使用），Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，炉跡（SL101～105）土坑（SK89・91・92）溝状遺構（SD17・18）調査
Ｄ・Ｅ－62・63区
溝状遺構（SD13）調査
Ｅ－26区（飛び地）
溝状遺構調査
現地視察　中村センター長
現場指導　三垣調査課長
現地調査　川口係長

12月
Ｈ・Ｉ－56～58区
表土剥ぎ（重機使用）Ⅱ層掘り下げ，
Ｄ～Ｆ－49～58区
近世遺構調査
溝状遺構（SD15）調査
Ｇ～Ｉ－51～61区
Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，炉跡（SL102～112）土坑（SK93～95）溝状遺構（SD17・18）ピット（SP）調査
Ｅ・Ｆ－49・50，56～59区
Ⅳ層掘り下げ
３日　現地説明会
７日　空中写真撮影
現地視察　中村センター長
現地視察　中島総務課長
現場指導　三垣調査課長
現地調査　川口係長
現地調査　平係長

１月
Ｆ－55区
表土剥ぎ（重機使用）
Ｇ～Ｉ－55～58区
Ⅲ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，掘立柱建物跡（SB23・24）土坑（SK107）炉跡（SL102）溝状遺構（SD17・18）調査
埋め戻し
調査終了
現地視察　中村センター長
現場指導　三垣調査課長
現地調査　川口係長

令和５年度
８月
調査開始準備，調査区環境整備

９月
Ｇ～Ｉ－59～62区
表土剥ぎ（重機使用）
Ｈ・Ｉ－59～62区
Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ，遺構調査，写真撮影，集石（SS501・502）土坑（SK501）溝状遺構（SD18）ピット（SP）調査
現地視察　寺原センター長
現場指導　三垣調査課長
現地調査　上床係長

10月
Ｇ～Ｉ－59～61区
Ⅲ・Ⅳ層調査，遺構調査，写真撮影，集石（SS502・504・505）土坑（SK502）溝状遺構（SD15）ピット（SP）調査
Ｇ～Ｉ－62区
Ⅲ・Ⅳ層調査，遺構調査，写真撮影，溝状遺構（SD15）
ピット（SP）調査
Ｇ～Ｉ－63・64区
表土剥ぎ，Ⅲ・Ⅳ層調査，ピット調査
現地調査　上床係長
現地調査　川口係長

11月
Ｇ～Ｉ－63～66区
Ⅲ・Ⅳ層調査，遺構調査，写真撮影，集石（SS502・506）土坑（SK501・503～506）溝状遺構（SD13・15）ピット（SP）調査
現地確認　脇田総務課長
現場指導　三垣調査課長
現地調査　上床係長
現地調査　西園係長

12月
Ｇ～Ｉ－63～66区
遺構調査，写真撮影，土坑（SK505・506）溝状遺構（SD13・18・19）調査，地形コンタ図作成
監理業務　馬籠文化財主事（県文化財課）
現場指導　三垣調査課長
現地調査　上床係長

２　現地説明会について

北山遺跡では，調査成果の公表と文化財保護の意識向上を目的として，令和２年度から令和４年度にかけて現地説明会を開催した。

現地説明会の概要

令和２年度
開催日時：令和２年12月５日（土）13:00～15:30

参加者数：約130人

主な内容：発掘調査現場の見学
近隣遺跡発掘調査成果のパネル展示
出土遺物の展示
（古墳から中世の土器・陶磁器・石鍋等）

令和３年度

開催日時：令和３年12月４日（土）13:00 ～ 15:30
参加者数：約100人

主な内容：発掘調査現場の見学
近隣遺跡発掘調査成果のパネル展示
出土遺物の展示
（古墳から中世の土器・土師器・陶磁器等）

令和４年度

開催日時：令和４年12月３日（土）13:00 ～ 15:30
参加者数：約150人

主な内容：発掘調査現場の見学
近隣遺跡発掘調査成果のパネル展示
出土遺物の展示
（古墳から中世の土器・土師器・陶磁器等）

第４節　整理・報告書作成の経過

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，調査センターで実施した。

令和３年度は，出土遺物の水洗い，注記，遺物の仕分けなどの基礎的作業，及び遺構の図面チェック・配置図作成，原稿執筆等を実施した。

令和４年度は，注記，遺物の仕分けなどの基礎的作業，遺物の実測及び拓本，トレース，遺構のトレース，レイアウト，写真撮影，原稿執筆等の報告書作成業務及び遺物収納を実施した。

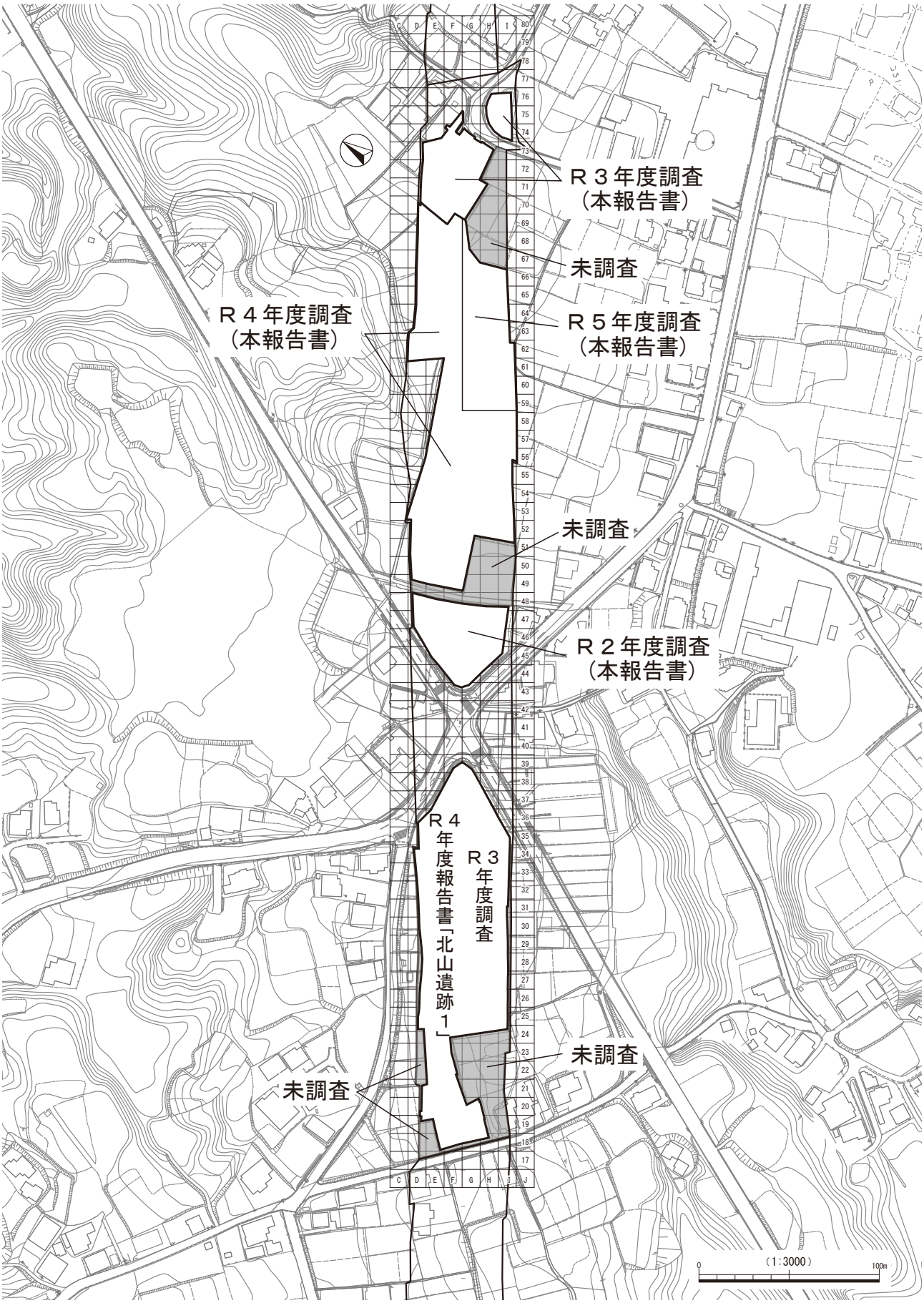
令和５年度は，注記，遺物の仕分けなどの基礎的作業，遺物の実測及び拓本，トレース，遺構のトレース，レイアウト，原稿執筆等を実施した。

整理・報告書作成作業に関する調査組織及び整理作業の経過は以下のとおりである。

令和３年度

調査組織

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中村　和美
調査企画	総務課長兼総務係長	中島　　治
	調査課長	福永　修一
	調査第二係長	有馬　孝一
調査担当	文化財専門員	肥後　弘章
	文化財専門員	小田　裕人
	文化財調査員	池畑　耕一



第２図　発掘調査の進捗図

事務担当　主　　事　　上園　慶子
　　事業推進員　　市成　英加

作業の経過

遺構・・・・・・図面チェック，遺構配置図作成
遺物・・・・・・水洗い，注記，分類，接合
土層断面・・図面チェック
原稿執筆

報告書作成指導委員会　　調査課長ほか８名
10月５日・11月４日・２月１日
報告書作成検討委員会　　センター長ほか５名
10月13日・11月10日・２月９日

令和４年度

調査組織

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　　中村　和美
調査企画　総務課長兼総務係長　　中島　　治
　　調査課長　　三垣　恵一
　　調査第二係長　　川口　雅之
調査担当　文化財専門員　　肥後　弘章
事務担当　主　　事　　上園　慶子
　　事業推進員　　市成　英加
　　〃　　今掛　美子

作業の経過

令和４年度刊行「北山遺跡１」に伴う作業
遺構・・・・・レイアウト，遺構配置図作成
遺物・・・・・注記，分類実測，拓本，復元，トレース，トレースチェック，レイアウト，遺物観察表作成
土層断面・・・図面チェック，トレースチェック，レイアウト
図版・・・・・レイアウト(現場・遺物)，遺物写真撮影
原稿執筆・校正
遺物・写真・図面等の整理及び収納
自然科学分析委託…年代測定分析２件
整理指導　佐藤　亜聖氏（滋賀県立大学教授）
　　永山　修一氏（ラ・サール高等学校教諭）
報告書作成指導委員会　　調査課長ほか８名
６月７日・８月３日・10月４日・11月９日・11月21日
報告書作成検討委員会　　センター長ほか５名
６月10日・８月８日・11月24日

令和５年度

調査組織

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　　寺原　　徹
調査企画　総務課長兼総務係長　　脇田　清幸
　　調査課長　　三垣　恵一
　　調査第三係長　　上床　　真
調査担当　文化財専門員　　藤﨑　光洋
　　〃　　田上　俊一
　　（４月～10月）
　　〃　　山川　正樹
　　（１月～３月）
　　文化財調査員　　野田　清志
　　（４月～８月，１～３月）
事務担当　主　　事　　上園　慶子
　　事業推進員　　今掛　美子

作業の経過

遺構・・・・・図面チェック
遺物・・・・・注記，分類実測，拓本，復元，トレース，トレースチェック，遺物観察表作成
土層断面・・・図面チェック
自然科学分析委託…年代測定分析30件，樹種同定関係24点，鉄関係76点
整理指導　佐藤　亜聖氏（滋賀県立大学教授）
　　續　伸一郎氏（堺市文化財課技術職員）
報告書作成指導委員会　　調査課長ほか８名
６月13日・８月２日・10月４日・11月７日・２月６日
報告書作成検討委員会　　センター長ほか５名
６月10日・８月８日・10月６日・11月７日・２月９日

令和６年度

調査組織

事業主体　国土交通省
　　九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　　寺原　　徹
調査企画　総務課長兼総務係長　　脇田　清幸
　　調査課長　　三垣　恵一
　　調査第三係長　　上床　　真

調査担当　文化財専門員　　辻　　明啓
　　〃　　山川　正樹
事務担当　主　　事　　坂元　宏光

作業の経過

遺構・・・・・図面チェック，第２原図作成，トレース，遺構配置図作成，レイアウト
遺物・・・・・分類，復元，実測，拓本，トレース，トレースチェック，レイアウト，遺物観察表作成
土層断面・・・図面チェック，トレース，レイアウト
図版・・・・・レイアウト(現場・遺物)，遺物写真撮影
原稿執筆・校正・遺物・写真・図面等の整理及び収納
自然科学分析委託…年代測定分析２件
遺物指導　柴田　圭子氏（愛媛埋蔵文化財センター調査員）
　　加世田　尊氏（鹿児島県観光文化スポーツ部文化振興課世界遺産室主査）
　　渡辺　芳郎氏（鹿児島大学文学部人文学科多元地域文化コース教授）

報告書作成指導委員会　　調査課長ほか８名
６月7日・８月３日・10月９日・11月５日・11月19日
報告書作成検討委員会　　センター長ほか５名
６月10日・８月８日・10月11日・11月６日・11月22日

遺物指導状況１

遺物指導状況２

遺物実測状況

遺構検討状況

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

北山遺跡は，阿久根市山下・波留に位置し，阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30 ～ 37ｍの台地上に所在する。遺跡周辺の阿久根市山下は愛宕山山麓に台地状に広がり，北山遺跡はその台地の中心部にあたる。現在の地形はほぼ平坦で水平であるが，古い時代の地形には若干の起伏があり，全体として北から西へ緩く傾斜する。

遺跡の所在する阿久根市は，1889（明治22）年に町村制の施行により阿久根村として誕生し，1952（昭和27）年４月に阿久根市となった。その後，1955（昭和30）年には，隣接の三笠町と合併した。市域は東西約11㎞，南北約22㎞で，面積は134.28㎢，世帯数9,735世帯，人口18,538人である（令和５年12月末時点）。鹿児島県の北西部に位置し，東経130度12分，北緯32度１分の地域にある。市の境界は，北に日本三大潮流として名高い黒之瀬戸を隔てて長島町と相対し，東は出水市，南は薩摩川内市と接する。西は40㎞に及ぶ屈曲に富んだ海岸線で東シナ海に面している。

市の南東部には，北薩地域最高峰1066ｍの紫尾山を含む標高400ｍの山々からなる出水山地・紫尾山系が連なる。北部には標高394ｍに達する笠山の山塊があり，山地の多い地形である。

東部の出水山地は，四万十層からなり，これらを源に高松川・折口川・尻無川・大川川等，数本の川が東シナ海へと注ぐ。北部の山地は，中新世～更新世火山性堆積物からなり，両者の山地をつなぐようにして，阿久根平野と折多平野の二つの平野がある。いずれも沖積作用と隆起作用によって形成された平野で，本来は湿地状であった場所が多い。阿久根平野が，市の行政機関や商業地が集中する市街地であるのに対して，折多平野は，農業を中心とする市の穀倉地帯といえる。

一方，市の西部は，東シナ海に面し，約40㎞に及ぶ海岸線は変化に富み，美しい自然の景観を生んでいる。特に牛之浜海岸は，県の名勝に指定され，海岸に露出する岩石は，緑色凝灰岩や泥岩，砂岩の層がいくつも複雑にからみあったメランジ堆積物として美しい文様が見られる。

また阿久根湾には島が点在し，特に県立公園に指定される阿久根大島は日本の水浴場55選等に指定されており，松林が繁茂し，野生のマゲシカが住むなど，夏季は避暑地やマリンスポーツでにぎわいを見せてきた。沿岸は，漁業資源に富み，阿久根港・黒野浜港・倉津港などの天然の良港があり，漁港以外でも古来より外国との貿易港としても繁栄してきた。

気候は，黒潮の影響を受ける沿岸部は，温暖で降雨量が多く，全体的に降霜も少なく，ハマジンチョウ，ヘゴ等の亜熱帯性の植物も越冬している。一方で出水山地の影響により，緯度の割に冬季の最低気温は低く，日照時間も少ない。

第２節　歴史的環境

阿久根市は，分布調査等により埋蔵文化財包蔵地として57箇所程が確認されている。特に，阿久根平野と折多平野周辺の台地及び丘陵に集中してみられる。

阿久根市の遺跡は旧石器時代から確認されている。旧石器時代は，折多平野最深部の微高地を中心に赤剥遺跡，日暗遺跡，陣之尾遺跡の３か所が確認され，細石刃や細石刃核等が出土している。

縄文時代になると，市内各所で縄文土器が確認される。旧石器時代と同様に平野周辺の微高地に遺跡が多くみられ，縄文前期の土器や磨石が発見されている波留貝塚や，縄文後期の土器や石鏃が発見されている宮脇遺跡，古里遺跡等，計31遺跡が確認されている。阿久根大島でも，曽畑式土器や阿高式土器が発見されており，縄文時代前期から中期にかけて海を利用した交通も注目される。弥生時代の遺跡は，脇本地区で弥生土器や夜臼式土器片が確認されているが，これまで調査例が少ない。

古墳時代になると，４世紀代の竪穴式石室をもつ鳥越古墳や，県指定史跡となっている６世紀後半の横穴式石室と地下式板石積墓（石棺墓）が隣接する脇本古墳群があり，県内でも有数の古墳築造地域として知られ，須恵器や土師器も多数確認されているが，大部分は未調査である。しかし，少なくともこの地域に住む一部族が，大和国家の支配体制に組み込まれた可能性を示す。

古代では，山下・波留地区を中心とした台地上に諏訪ノ前遺跡のほか10遺跡が確認されている。この地域は，出水郡に属し，延喜式に記載の宿駅である英祢駅の比定地の１つとされている。北部の脇本地区，黒之瀬戸は万葉集の大伴旅人の歌にも詠まれるほどで，平安時代中頃まで大宰府と薩摩・大隅を結ぶ海上交通の要所であった。平安時代末期，平季基の末裔・神崎成兼が英祢姓（のちに莫祢と表記）を名乗り，英祢院の院司として，阿久根周辺の地を支配するようになった。その集落地とされた南方神社東側の角地区から多くの素焼きの椀や鉢が出土しており，古代から中世にかけて，阿久根の中心的な地域であったとされる。

中世では，本遺跡も合わせて26遺跡が確認されている。市街地東方1.5ｋｍに位置する愛宕山周辺に山城が築かれ，この中に通称・城山と呼ばれる莫祢城が含まれる。莫祢城は，三代莫祢成光の時（12世紀頃）に，戦略的価

値低下のために波留地区（阿久根中学校周辺）の賀喜城から移り，その後，莫祢氏代々の居城となった山城である（「阿久根市誌」より）。その居所も山下馬場地区に移し，現在も山下小学校東側には莫祢氏初代から三代までの供養塔とされる五輪塔が残されている。莫祢城の山麓地区は，現在でも「麓」地区と呼ばれ，所々に石垣等が見られる。この麓付近は，中・近世を中心に多くの遺跡が，集中する地域となっている。

莫祢城以外にも莫祢氏やその一族による中之城跡，新城跡，大石城跡，小田城跡など複数の城址が山下・波留及び田代・鶴川内地区に点在する。天然の地形を利用した小規模な野城で，時期は中世初期（鎌倉時代）及び南北朝時代のものが大部分である。

また，本遺跡を含む出水郡は，15世紀後半から薩州島津氏の所領となり，この頃その家臣となった莫祢氏は阿久根氏と改め，地名も阿久根へと変化した。16世紀末には，薩州島津家は滅び，阿久根氏も各地に離散したとされ，豊臣秀吉の天領を経て，まもなく島津氏に与えられ島津本家の領有となった。

また，この時代の阿久根は，倭寇の根拠地の一つとされ，明国と関係を持ち，室町幕府の権威が失墜した応仁の乱以降には糸印貿易，薩州島津氏によるルソン貿易，またスペインやポルトガル，琉球など広く海外貿易の主要な港の役割を果たすようになっていた。ポルトガル船船長の墓とされる「とっぽどんの墓」や阿久根砲等は，それらに関連する資料であり，現在，阿久根市名産の阿久根文旦も明との密貿易船によってもたらされたものである。

近世では，関ヶ原の戦い後に徳川家康との間で和解した島津家久が，江戸幕府の統制下で薩摩藩主となった。藩内では外城制が敷かれ，出水地域には阿久根・高尾野・出水の三外城が置かれ，のちに野田・長島を加え，五か外城となった。外城（のちの郷）には藩主の代理者である地頭がおかれ，地域の警備・行政を委任され，地方行政の中心となっていった。外城の中心地は麓とよばれ，地頭の宿所である地頭仮屋が置かれた。阿久根では，初めは莫祢城下の山下地区に置かれたが，元禄年間に波留地区小牟田（現在の栄町）に移され，集落もそれに伴い波留・高松・栄町地区に移ったという。

阿久根は古くから海上交通の要所であったことを上述したが，近世に入ると，各藩と幕府との関係が密接になり，国内では江戸に通じる主要道や領内の通路や宿場なども陸上交通が整えられた。鹿児島城を基点に宮崎に出る東目筋や，薩摩半島から出水（出水筋）を経て九州西岸を北上する小倉筋などが整備された。それぞれが海路で大坂にまで通じており，その中で阿久根は，出水筋の主要な宿場の１つとされ，地頭仮屋に近い本町に，それ以前は山下地区がその中心であったという。

海上交通では明からの帰化人・河南源兵衛一家が藩御用商人として離島及び琉球方面との貿易を行うようになり，阿久根は琉球貿易や黒砂糖運搬の基地として栄えた。沖合の桑島周辺では鎖国中でも唐船との密貿易もさかんに行われていたという。

現在残る遺跡として，中之城跡からは，近世の肥前系磁器，薩摩焼等が出土しており，他に調査された遺跡としては脇本窯，楞厳寺（りょうごんじ）跡等がある。これらの遺跡は，ほとんどが分布調査によって把握され，複数の時代にわたって確認される場合が多い。

本遺跡は，昭和56（1981）年の広域営農団地農道整備事業（北薩オレンジロード建設），平成８（1996）年の宅地造成に伴い，阿久根市教育委員会による本調査と確認調査が行われている。その際，縄文時代早期，古代，中世，近世の遺構，遺物が発見されている。

－引用・参考文献－

阿久根市
1974『阿久根市誌』阿久根市誌編纂委員会編

阿久根市教育委員会
1982『北山遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
1992『鳥越古墳群』埋蔵文化財発掘調査報告書（２）
1997『鳥越古墳群　大蔵庵遺跡・北山遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（３）

鹿児島県教育委員会
1997『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅵ）』埋蔵文化財調査報告書（72）
2012『陣之尾遺跡・陣之尾塁跡　上野畑遺跡・広段遺跡・北山田遺跡』発掘調査報告書（167）

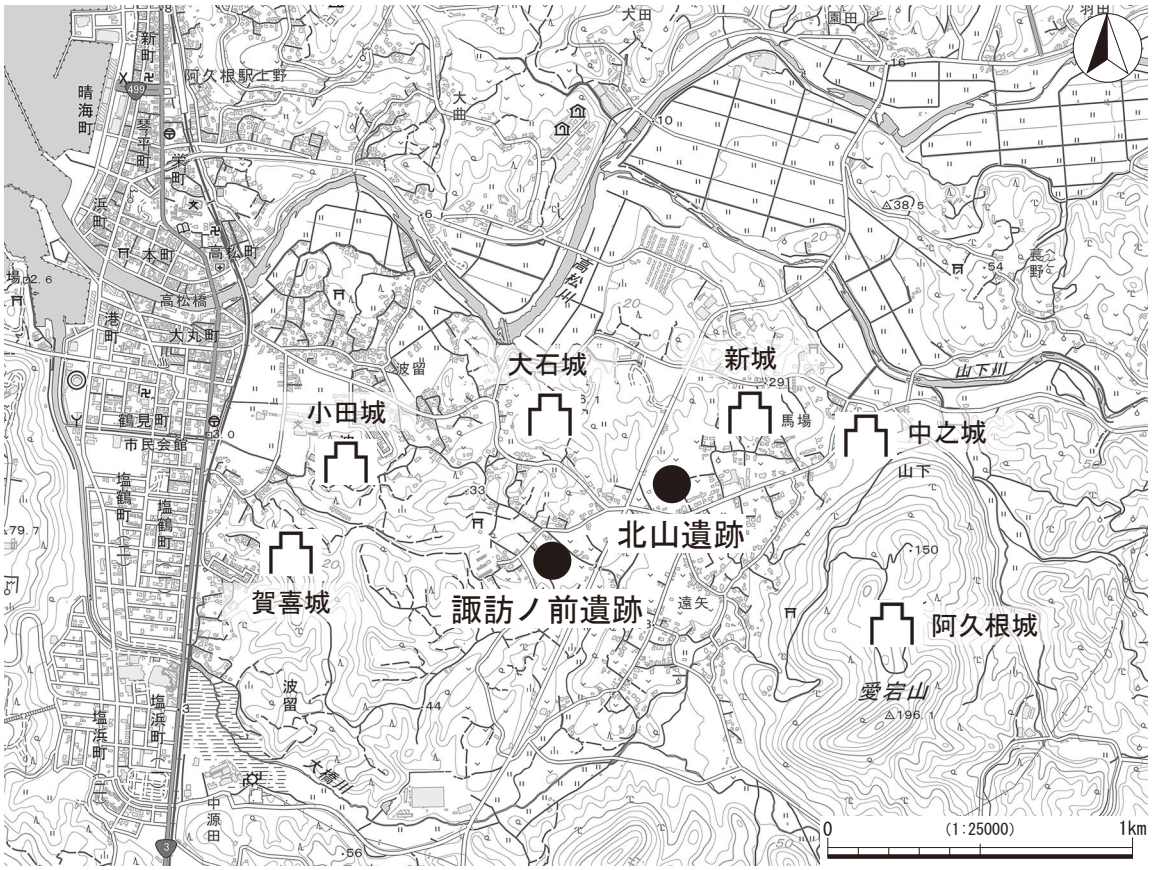
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
2014『中郡遺跡群』埋蔵文化財調査センター報告書（１）
2023『北山遺跡１』埋蔵文化財調査センター報告書（51）

藤﨑琢郎2024「鎌倉・室町時代における莫祢（阿久根）一族と阿久根・川内地方」薩摩川内郷土史研究会『千台』第52号

第３図　北山遺跡周辺遺跡位置図（1：25,000）

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	種別	主な時代
1	206	34	北山	鹿児島県阿久根市山下字北山	散布地	中世
2	206	21	新城跡	鹿児島県阿久根市山下新城	城館跡	中世
3	206	38	諏訪ノ前	鹿児島県阿久根市波留字諏訪ノ前	散布地	古代，中世
4	206	8	楞厳寺跡	鹿児島県阿久根市山下	社寺跡	中世，中世室町
5	206	39	下谷	鹿児島県阿久根市山下字下谷	散布地	縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世
6	206	9	阿久根城跡	鹿児島県阿久根市山下峰	城館跡	中世
7	206	22	中之城跡	鹿児島県阿久根市山下	城館跡	中世
8	206	40	萇野	鹿児島県阿久根市鶴川内萇野	散布地	縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世
9	206	43	奥	鹿児島県阿久根市山下	散布地	縄文時代
10	206	37	大蔵庵	鹿児島県阿久根市波留字大蔵庵	集落跡	縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世
11	206	11	大石城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
12	206	57	上野畑	鹿児島県阿久根市鶴川内	散布地	縄文時代，古墳時代，古代，中世，近世
13	206	7	大曲窯跡	鹿児島県阿久根市高松町大曲	生産遺跡	
14	206	3	波留貝塚	鹿児島県阿久根市波留1591	貝塚	縄文時代
15	206	20	小田城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
16	206	15	賀喜城跡	鹿児島県阿久根市波留	城館跡	中世
17	206	36	鳥越古墳群	鹿児島県阿久根市潟字鳥越	地下式板石積石室墳丘墓(石室のみ残存)	古墳時代



第４図　北山遺跡周辺阿久根氏関連城跡位置図

第２表　阿久根 IC ～西目 IC（仮）間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	調査面積 発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要 時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	上野畑	阿久根市鶴川内 散布地	調査面積 3900㎡ 調査期間 2009.08.03 ～ 2009.10.28	報告書刊行 2012 県立埋文センター 調査報告書 167	縄文時代 ～近世	竪穴状遺構１基 掘立柱建物跡２棟 炉状遺構２基 柱穴28基 土坑１基	弥生土器，土師器，須恵器，瓦質土器，青磁 石鏃，削器，磨製石斧，磨石
		上野畑遺跡は，縄文時代晩期から近世の遺構である。掘立柱建物跡や炉状遺構は当該期の生活の一端を知る資料となった。					
2	新城	阿久根市山下 字新城	本調査 6708㎡ 1098㎡	報告書刊行 2025	中世	掘立柱建物跡５棟 柵列２基 土坑３基 炉跡10基 ピット72基 虎口状遺構１基 土塁１基	土師器，中世須恵器，擂鉢，国産陶器 （常滑焼，古瀬戸，備前焼等）， 輸入磁器（青磁，白磁，青花等），輸入陶器　（沖縄Ⅲ類，Ⅴ類壺，東南アジア系鉢），瓦質土器，土錘，台石，滑石製品，鉄製品，碁石，羽口，木製品
			調査期間 2022.05.11 ～ 2023.1.27	（公財）埋文調査 センター 59			
			2023.11.1 ～ 2023.11.24		近世以降	炉跡１基 集石１基	陶器（肥前系，薩摩焼等）， 磁器（染付等），煙管
		新城跡は，阿久根市山下に位置し，高松川左岸の標高30 ～ 35mの台地上に所在する。東側に位置する愛宕山には，中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡がある。新城跡は，その西麓の台地上に点在する山城の一つであり，中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。 発掘調査では，西台地で虎口（出入口）の可能性がある大型土坑と通路状遺構から成る虎口状遺構など中世の山城の特徴を持つ遺構が発見された。虎口状遺構は，防御施設と考えられる。他にも，中世の青磁，擂鉢，鉄器，近世の陶磁器，石皿などの遺物も出土した。 近隣の北山遺跡や諏訪ノ前遺跡の遺構や遺物と類似点が多く，阿久根の中世の様子をつかむうえで貴重な資料である。						
3	北山	阿久根市山下 字北山	本調査 3121㎡ 4481㎡ 11549㎡ 9327㎡ 2530㎡	報告書刊行 2023・2025 （公財）埋文調査 センター 51・61	縄文時代	集石５基 土坑１基 落とし穴２基	加栗山式，小牧３Ａ，吉田式，別府原式，政所式，中原１類，中原２類，中原５類，塞ノ神Ｂ式，その他早期土器，春日式，阿高系（南福寺式含む），西平式，その他後晩期土器 石鏃，スクレーパー，石錐，二次加工のある剥片，石核，打製石斧，磨製石斧，石皿，台石，砥石，石錘，敲石，磨敲石，磨石，凹石，軽石製品，その他石製品
					古墳時代	－	東原式土器（甕，壺，高坏等）等
					古代	－	土師器（甕・坏・埦等），須恵器（壺・碗等），黒色土器Ｂ類，越州窯系青磁，土錘，土製品，文字資料（ヘラ書き・墨書）【ヘラ書き：土師器，墨書：須恵器】
					中世	掘立柱建物跡12棟 竪穴建物跡１軒 土坑35基，炉跡３基 溝状遺構８条 礫集積４基（溝内） 石列４基（溝内）	土師器（坏・皿等），中世須恵器（東播系・産地不明等），瓦質土器（擂鉢・火鉢・風炉等），国産陶器（擂鉢・甕等）【備前・常滑等】，青磁（碗，皿，坏等）【龍泉窯系・同安窯系等】，白磁（碗・皿・合子等）【中国を基本として朝鮮も含む】，青花（碗・皿等）【景徳鎮窯・漳州窯等】，輸入陶器（壺・甕・瓶等）【中国南部・タイ産等】，滑石製石鍋，石錘（石鍋転用），茶臼，銭貨（洪武通宝），天草砥石，火打石
			調査期間 2020.10.1 ～ 2021.1.27 2021.5.10 ～ 2021.7.28 2021.10.4 ～ 2022.1.28 2022.5.11 ～ 2023.1.27 2023.9.1 ～ 2023.12.27		近世	掘立柱建物１棟 土坑９基	陶器（薩摩焼・備前焼等），磁器（肥前，古伊万里等）， 鍛冶・製鉄関連遺構：製鉄炉４基，竪穴建物１棟，土坑13基，炉跡19基 陶器（薩摩焼・備前焼等），磁器（肥前・古伊万里等），鉄製品，鉄滓，羽口，炉壁等
					その他	土坑20基 炉跡７基 柱穴・ピット974基	天草砥石，打欠石，碁石，硯， 銅製品，古銭，鉄製品
		北山遺跡は，阿久根市山下及び波留に位置し，阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30 ～ 37mの台地上に所在する。遺跡周辺は，古代の英祢駅比定地のひとつと考えられ，東側に位置する愛宕山には，中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡があるなど，古代から中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。 調査区では，縄文時代から近世までの遺構・遺物の検出・出土が確認された。特に中世から近世にかけては多く，阿久根地域における有力者の集落跡と推測される。						
4	諏訪ノ前	阿久根市波留 字諏訪ノ前	本調査 6646㎡	報告書刊行 2025	縄文時代	－	曽畑式・市来式・西平式・上加世田式・三万田式土器　石鏃，磨敲石，石斧，石錘，石製品
					古墳時代	－	成川式土器（東原式・笹貫式）
					古代	埋甕	須恵器，土師器，紡錘車，土錘
			調査期間 2023.5.08 ～ 2024.1.26	（公財）埋文調査 センター 60	中世	掘立柱建物跡５棟 竪穴建物跡１軒 土坑19基 トイレ遺構６基 溝状遺構２条 礫集積遺構１箇所 ピット227基　炉跡21基 段状遺構１箇所（道跡１条含む）	須恵器（瓦質・土師質含む），土師器，中国磁器（青花・青磁・白磁） 陶器（備前・常滑・国外），土錘 砥石，滑石製品，水輪 懸仏本尊，洪武通宝，角釘，指貫
					近世～近代	－	陶器（薩摩焼・備前等），磁器（肥前系・関西系），土製品，青磁獅子香炉脚部
					時期不詳	－	土製品，金属製品
		諏訪ノ前遺跡は阿久根市波留に所在し，阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約35m～ 30mの斜面上に立地する。遺跡周辺の地域は古代の英祢駅があったとされる比定地のひとつであること，阿久根氏の居城である阿久根城をはじめ居城跡が点在するなど，特に古代～中世にかけて歴史的に重要な役割を果たした地域であるといえる。 今回の調査では，溝状遺構，炉跡，掘立柱建物跡，土坑などが検出された。その中でも，科学分析によって裏付けられたトイレ遺構は南九州で初めての例となり貴重な成果となった。遺物は，縄文～近代までの幅広い遺物が出土しているが，中心となるのは中世後半（14世紀～ 16世紀頃）の貿易陶磁器や，瓦質及び土師質の擂鉢・火鉢である。特筆すべきは五輪塔の水輪や懸仏の本尊などの宗教的意味合いが強い遺物が出土していることであり，阿久根氏に加え，遺跡の北西側に位置する波留南方神社との関係も深いと考えられる遺跡である。						

第５図　南九州西回り自動車道関係遺跡位置図（１：25,000）

第Ⅲ章　発掘調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法等，整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

調査に先立ち，本遺跡の調査区割り（グリッド）の設定を行った。鹿児島国道事務所が打設した道路建設用センター杭「STA №290」と「STA №293」を結ぶ線を基準に，調査区内に10m間隔の区画（以下，グリッドという）を設定し，この延長戦を中心に北側から南側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・・・列，西側から東側に向かって１・２・３・４・・・列とする調査区割りを設定し，呼称することとした。調査着手のための条件が整った部分から，発掘調査を実施した。Ｄ～Ｉ－43～48区の調査を令和２年度，Ｄ～Ｉ－17～39区及びＤ～Ｉ－69～76区を令和３年度，Ｄ～Ｆ－49～51区及びＤ～Ｉ－52～58区，Ｄ～Ｆ－59～69区を令和４年度，Ｇ～Ｉ－59～69区を令和５年度に実施した。Ｄ－55～61区及びＥ－57～61区の一部については，すでに撹乱されていたため，調査範囲から除外した。令和６年段階で未調査の地点が複数箇所残存する（第２図参照）。

調査は，確認調査の結果に基づき，重機で表土を除去した後，遺物包含層については人力で掘り下げ（山鍬，鋤簾，ねじり鎌，移植ごて，手鍬等の発掘道具）を行った。出土した遺物については，必要に応じて出土状況の記録写真撮影を行った後，実測が必要なものや現位置を記録し取り上げたものを除いて，層ごとに一括で取り上げた。さらに，遺物包含層の調査と並行して，下層確認用の先行トレンチを設定し，掘り下げを行った。検出遺構については，移植ごて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し，調査進捗に応じて，検出状況，半截状況，完掘状況等の写真撮影を行い，図化作業等の記録保存を行った。さらに，無遺物層の一部を重機及び人力で除去し，基盤層が無遺物層であることを確認し調査を終了した。

調査が終了した調査区については，重機及び人力による埋め戻しを行った。

２　遺構の認定と検出方法

北山遺跡は，中世以降の土地開発等の影響で，層の堆積状況が良好でない箇所もあり，遺構の精査は，主にⅢ～Ⅵ層上面で行った。また，遺構内外で異なる土の境界をたどり，平面的に遺構の輪郭（平面プラン）を確定していった。

その後，主軸を確認し，土層確認用のベルトを設定し，遺構の掘り下げを行った。その際，埋土の色や白色軽石等の混入状況，質，硬さなどの違いを比較し掘り下げた。

さらに，遺構を検出した層や埋土状況，遺構の形態，遺構内出土遺物などの情報から遺構の帰属時期の検討を行った。

３　整理作業・報告書作成作業の方法

整理作業は令和３～６年度に調査センターが実施し，令和６年度に本報告書を刊行した。令和４年度に『北山遺跡１』として，令和２～５年にかけて調査を行った地点の一部であるＤ～Ｉ－18～39区の調査終了部分の報告書を刊行している。

遺物は水洗い，注記，接合，復元，実測，トレース，写真撮影という一連の作業を行い，手トレースおよびデジタルトレースを行いまとめた。一部の陶磁器については，令和６年度に土器実測業務委託を行った。遺構内出土遺物のうち遺構の時期と同一と考えられる遺物については，遺構ごとに掲載した。遺構は各図面やトータルステーションデータを整理，統合しながらパソコンを使ったデジタルトレースでまとめていった。

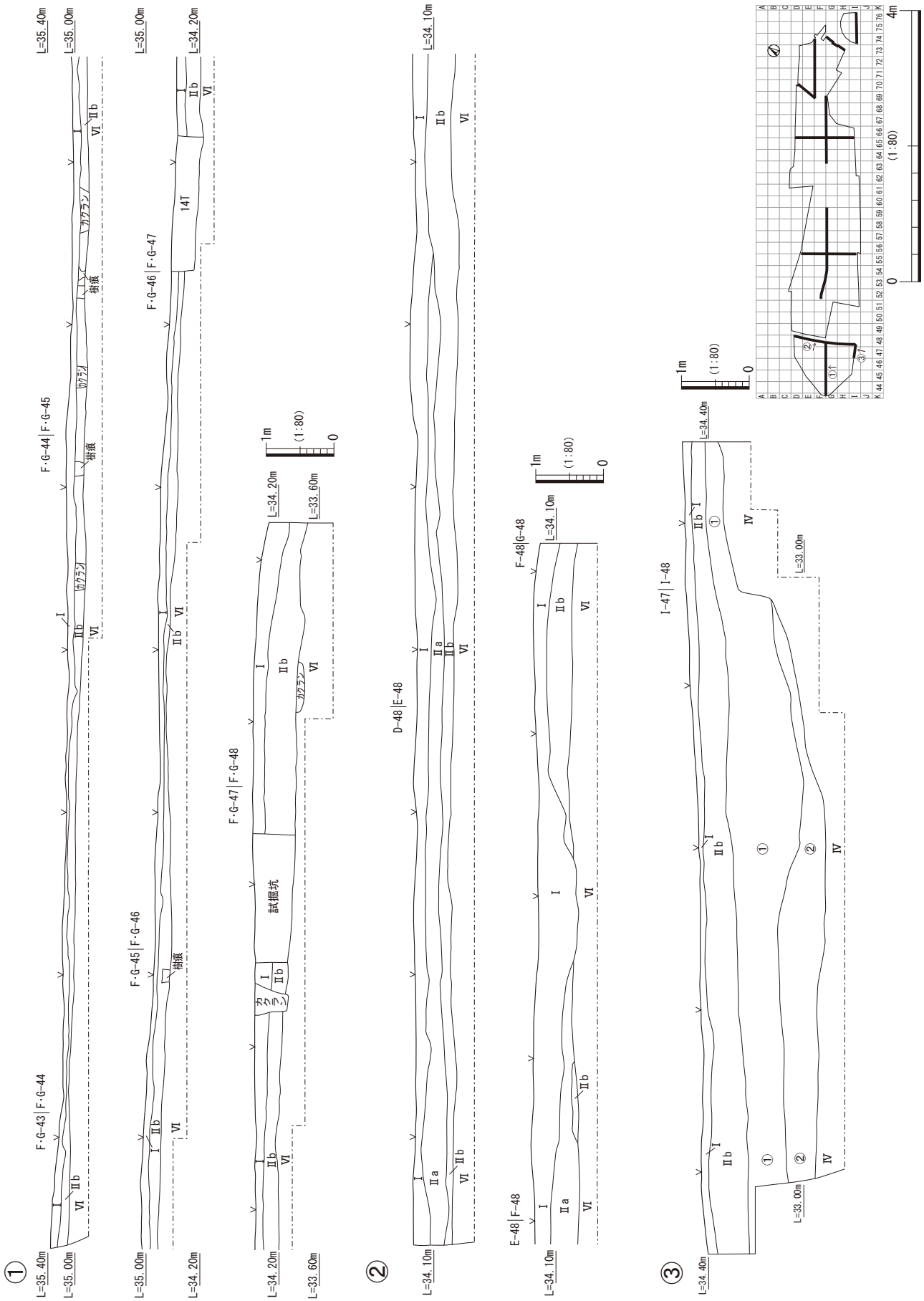
鉄製品などの保存処理が必要な遺物は，埋文センターの南の縄文調査室が保存処理を行った。

自然科学分析は，令和４～６年度にかけて年代測定，樹種同定，種実同定，テフラ分析，金属等分析業務を委託し行った。

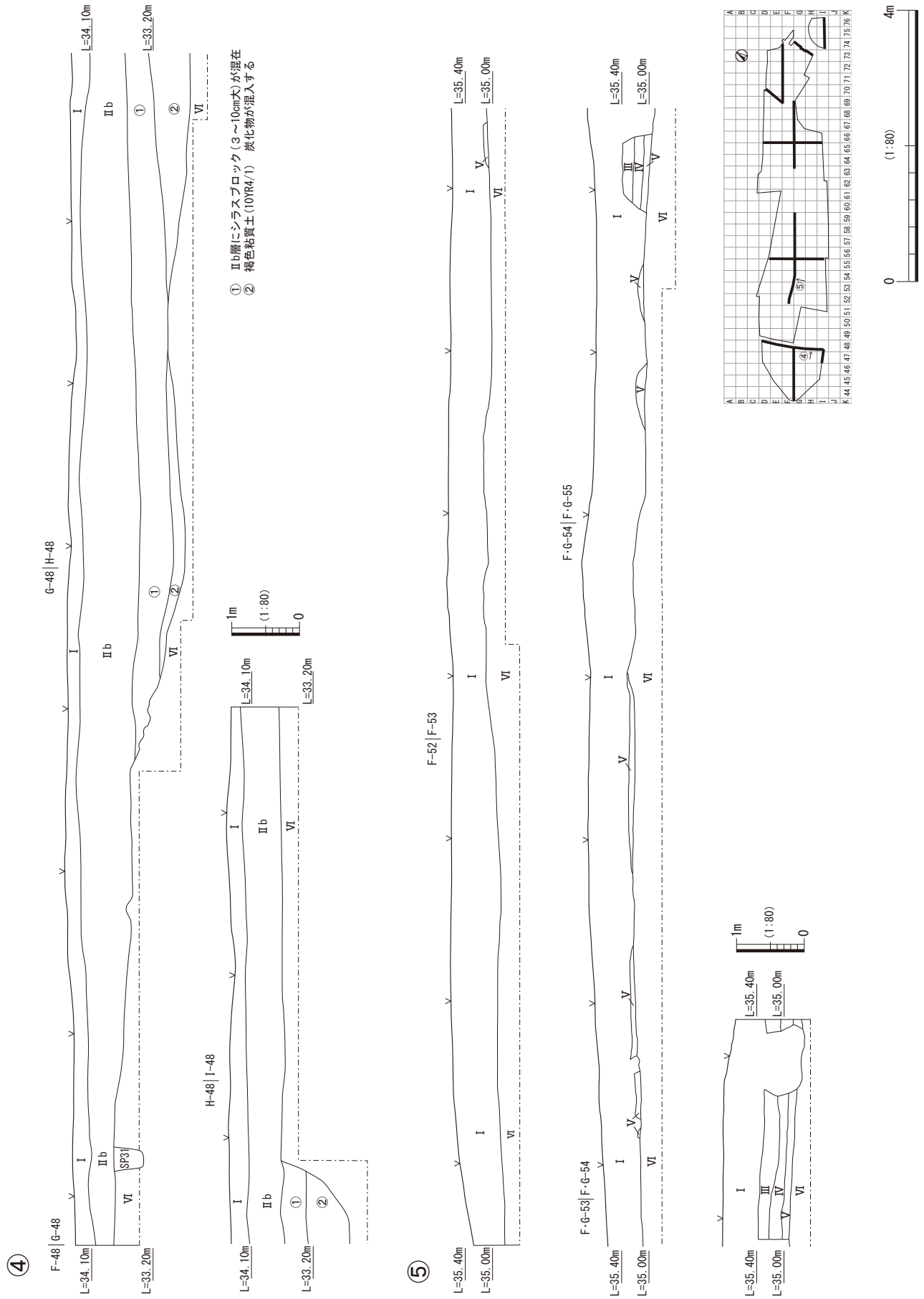
第２節　層序

本遺跡は，阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30～37mの台地に位置する。遺跡周辺は，耕作地または住宅地として使用されている。遺跡内も農地転用や宅地造成に伴い，場所によっては土層の堆積状況が悪い。

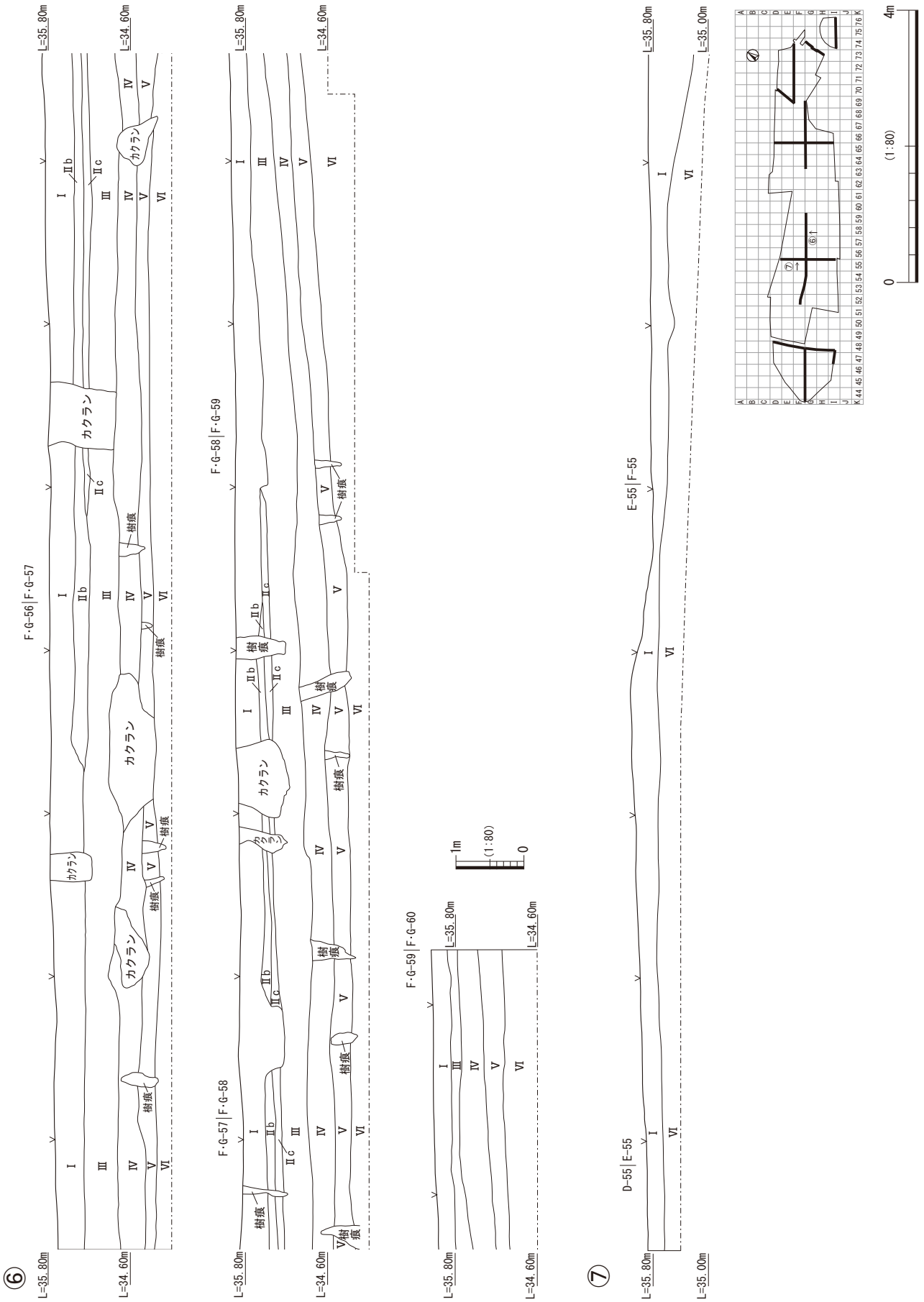
基本層序は，27ページの第３表のように整理した。表土（Ⅰ層）下のⅡa層は，残存状況が悪く調査区の西側を除いて残存状況は良好でなかった。また，Ⅱc層は，層が比較的良好に残っていた57・58区において確認できた。Ⅵ層の検出状況から，Ｆ・Ｇ－63～65区を頂点に，北・東側にはやや急に，南・西側には緩やかに傾斜する地形である。また，調査区内には小規模な谷が存在し，地点によって土層堆積状況の良好な場所も確認された。今回報告する地点では，「北山遺跡１」で報告したⅦ層（阿多鳥浜テフラ想定）は，確認できなかった。Ⅵ層（ＡＴ火山灰層）の堆積状況が良好であったためと考えられるが，Ⅵ層下に存在すると考えられるため，基本層序には掲載してある。


①
②
③
F-G-43 | F-G-44
F-G-44 | F-G-45
F-G-45 | F-G-46
F-G-46 | F-G-47
F-G-47 | F-G-48
D-48 | E-48
E-48 | F-48
F-48 | G-48
I-47 | I-48
L=35.40m
L=35.00m
L=34.20m
L=33.60m
L=34.10m
L=33.00m
L=34.40m
カクラン
樹痕
14T
試掘坑
I
II a
II b
VI
IV
(1:80)
1m
0
4m

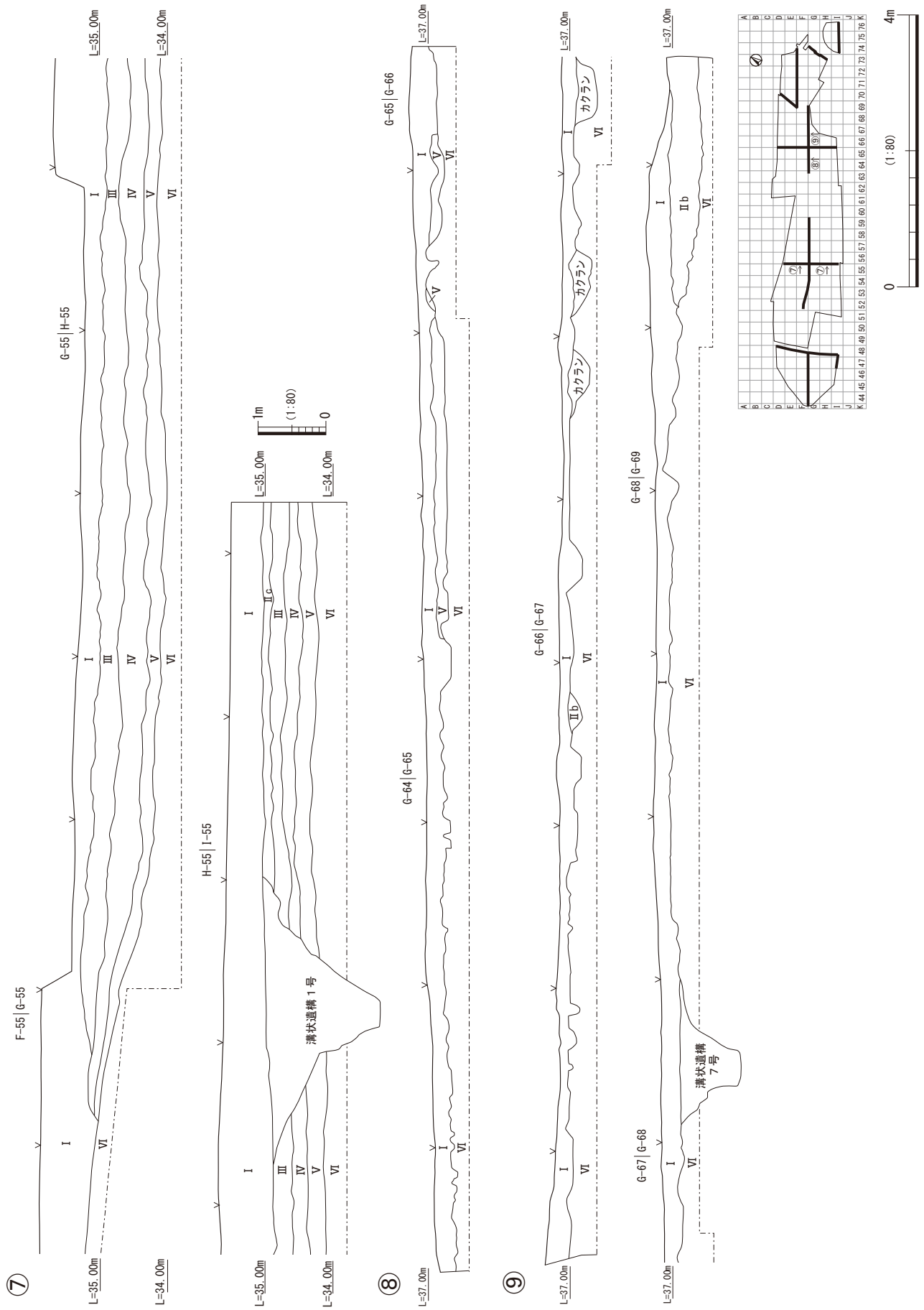
第６図　土層断面図①～③


④
⑤
F-48|G-48
G-48|H-48
H-48|I-48
F-52|F-53
F-G-53|F-G-54
F-G-54|F-G-55
L=34.10m
L=33.20m
L=35.40m
L=35.00m
Ⅰ
Ⅱb
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
SP3
① Ⅱb層にシラスブロック（3～10cm大）が混在
② 褐色粘質土(10YR4/1)　炭化物が混入する
1m
(1:80)
0
4m

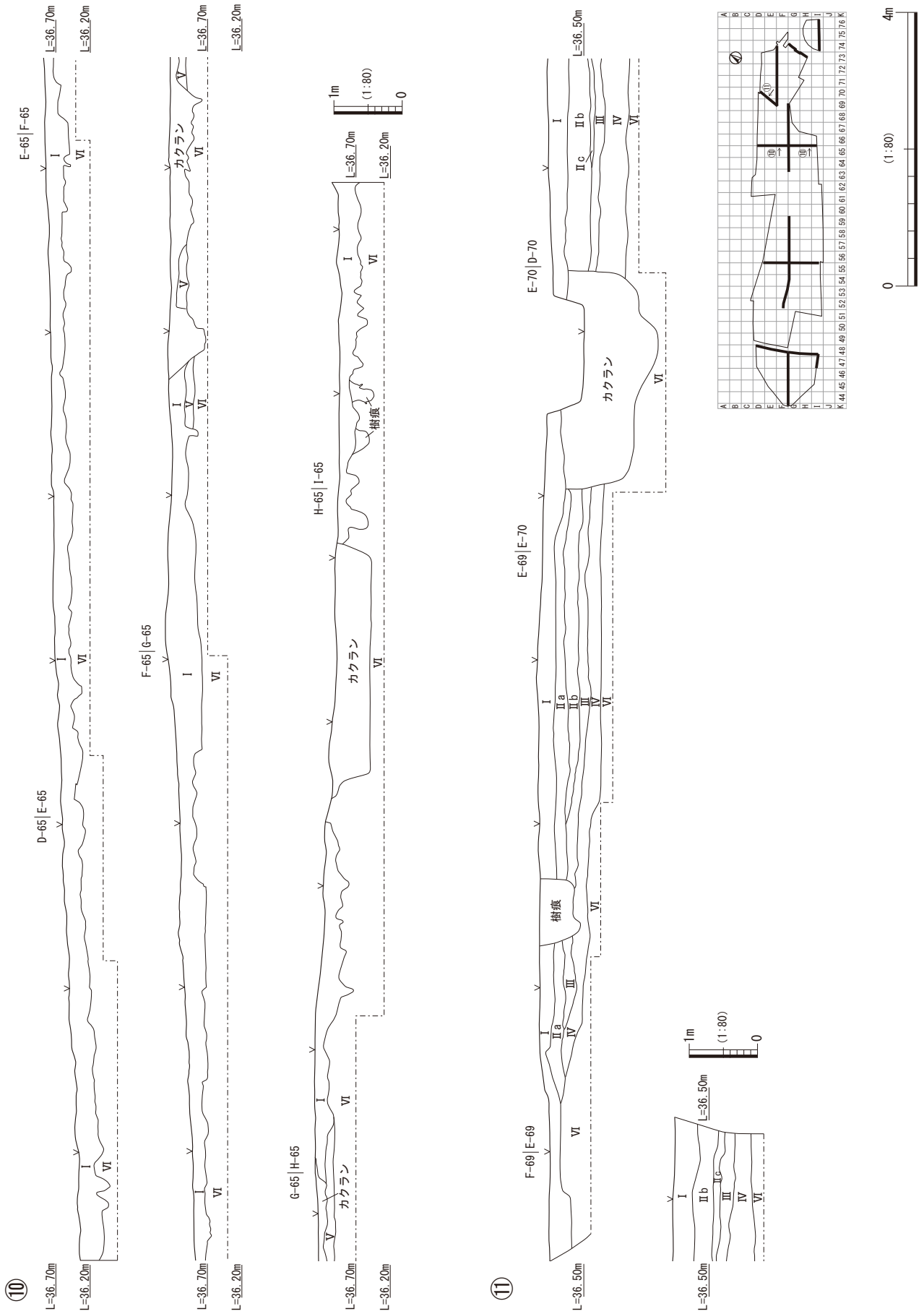
第７図　土層断面図④・⑤


⑥
⑦
F・G-56 F・G-57
F・G-57 F・G-58
F・G-58 F・G-59
F・G-59 F・G-60
D-55 E-55
E-55 F-55
L=35.80m
L=34.60m
L=35.00m
カクラン
樹痕
Ⅰ
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
1m
(1:80)
0
4m

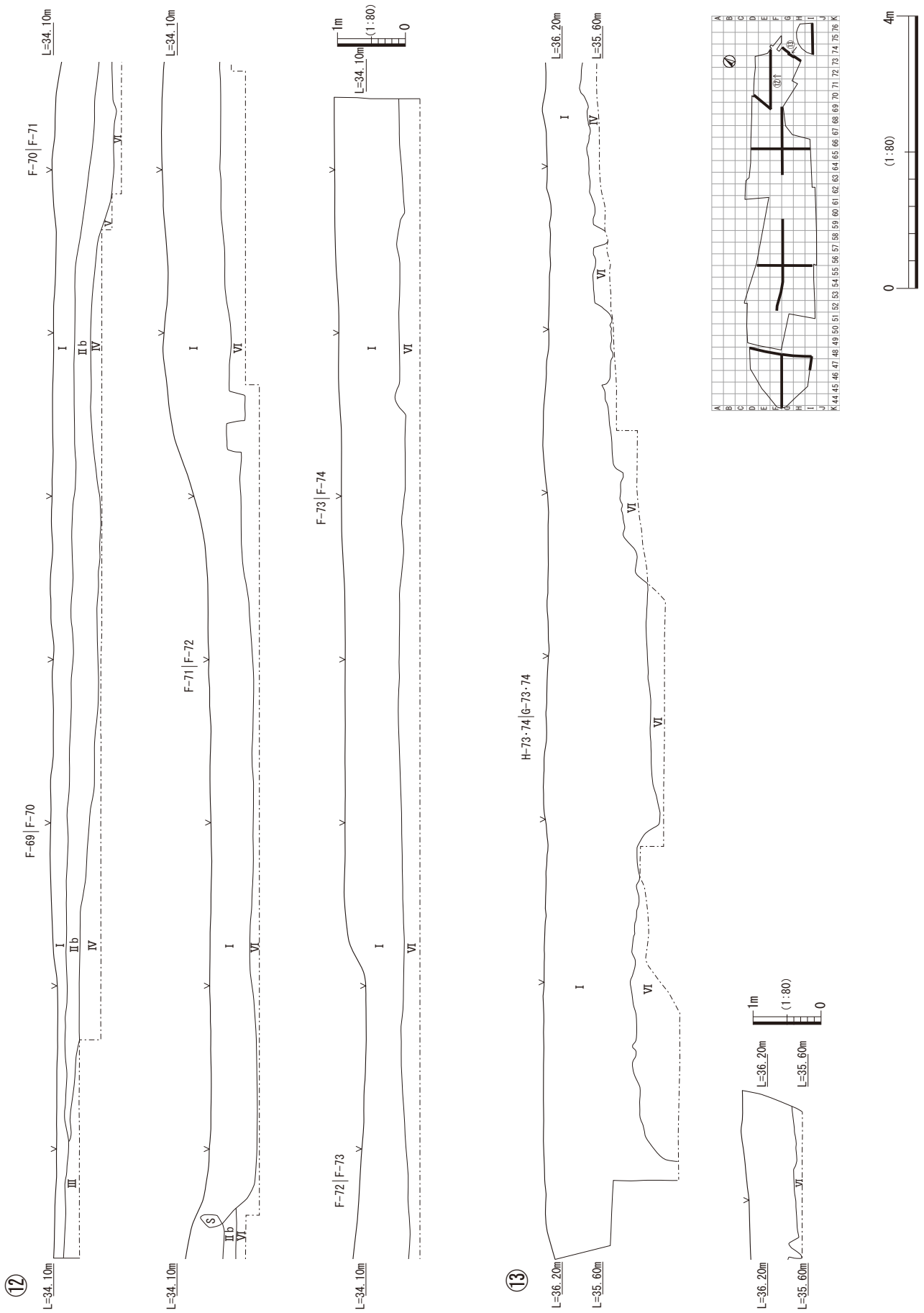
第８図　土層断面図⑥・⑦


⑦
⑧
⑨
F-55|G-55
G-55|H-55
H-55|I-55
G-64|G-65
G-65|G-66
G-66|G-67
G-67|G-68
G-68|G-69
L=35.00m
L=34.00m
L=37.00m
溝状遺構１号
溝状遺構７号
カクラン
I
II b
II c
III
IV
V
VI
1m
(1:80)
0
4m

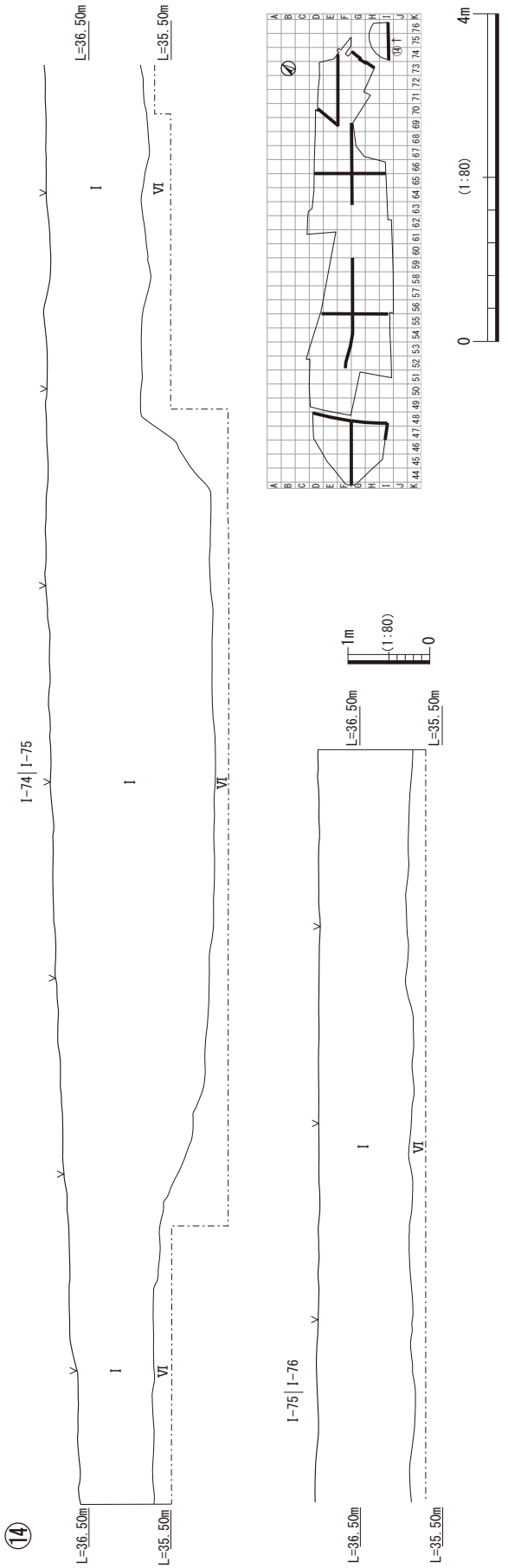
第９図　土層断面図⑦～⑨



第10図　土層断面図⑩・⑪



第11図　土層断面図⑫・⑬



第12図　土層断面図⑭

第３表　北山遺跡基本層序

Ⅰ層	表土・耕作土である。 層厚：10cm～２m
Ⅱa 層	暗褐色土(7.5YR ３/４)で，白色軽石を含む。近世の包含層である。 層厚：０～40cm
Ⅱb 層	暗褐色土(7.5YR ３/４)で，赤色小石を含む。Ⅱa 層より硬質である。古墳から近世の包含層である。 層厚：０～80cm
Ⅱc 層	暗褐色土（10YR ３/３）で，白色軽石や赤色小石は含まない。粘性がある。層の残りがよい場所でわずかに検出できる。 層厚：０～15cm
Ⅲ層	褐色土（7.5YR ３/４）で，粘性はやや低くからやや強い範囲である。縄文時代の包含層である。 層厚：０～40cm
Ⅳ層	黒褐色粘質土（7.5YR ３/２）で，１～３cm 程度の黄色パミスを含む。 層厚：０～40cm
Ⅴ層	褐色粘質土（7.5YR ４/６）で，１～３cm程度の黄色パミスを含む。 層厚：０～30cm
Ⅵ層	黄褐色砂質土（10YR ５/８）で，AT 火山灰層である。
Ⅶ層	明赤褐色粘質土（５YR ５/８）で，２～５cm 程度の小石を含む。阿多鳥浜テフラと考えられる。今回報告を行う調査区では確認できなかった。

第３節　新旧遺構対応表

調査が４年にわたっているため，調査時の遺構名は，重複が生じないように，年度ごとに継続した番号や桁数を変更し，新たに振り直している。報告書作成段階で第４表の通りピット以外の遺構は，名称変更を行った。番号の重複を避けるため，時代に関わらず同一の遺構に関しては，連番になるように番号を振った。

第４表　新旧遺構対応表

本調査（旧名称）	報告書（新名称）	本調査（旧名称）	報告書（新名称）	本調査（旧名称）	報告書（新名称）
SS501	集石１号	SK1003	土坑32号	SK45	土坑48号
SS505	集石２号	SK1004	土坑33号	SK46	土坑57号
SS504	集石３号	SK1013	土坑34号	SK49	炉跡６号
SS502	集石４号	SK1012	土坑35号	SK48	炉跡４号
SS 2	集石５号	SK1011	土坑36号	SK47	炉跡５号
SK505	土坑１号	SK23	炉跡１号	SX26	硬化面２
SK89	落とし穴１号	SK22	炉跡２号	SL101	炉跡７号
SK90	落とし穴２号	SL1001	炉跡３号	SL103	炉跡８号
SB 1	掘立柱建物跡１号	SD18	溝状遺構１号	SL107	炉跡９号
SX 3	土坑２号	SD18_ 集積１	集積１号	SL104	炉跡10号
SB 2	掘立柱建物跡２号	SD18_ 集積２	集積２号	SL102	炉跡11号
SX 2	土坑３号	石列１号	石列１号	SL110	炉跡12号
SB23	掘立柱建物跡３号	石列２号	石列２号	SL108	炉跡13号
SB24	掘立柱建物跡４号	階段状出入口	階段状出入口	SL109	炉跡14号
SB22	掘立柱建物跡５号	分岐点	分岐点	SL105	炉跡15号
SB19	掘立柱建物跡６号	SD17	溝状遺構２号	SL113	炉跡16号
SB17	掘立柱建物跡７号	SD15	溝状遺構３号	SL106_1	炉跡17号
SB20	掘立柱建物跡８号	SD13	溝状遺構４号	SL111	炉跡18号
SB21	掘立柱建物跡９号	集積１号	集積３号	SL112	炉跡19号
SB16	掘立柱建物跡10号	SD13内集積１号	集積４号	SK98	炉跡20号
SB25	掘立柱建物跡11号	石列３号	石列３号	SK92	土坑58号
SB26	掘立柱建物跡12号	石列４号	石列４号	SK101	炉跡21号
SI 7	竪穴建物跡１号	SD19	溝状遺構５号	SL106_2	炉跡22号
SK13	土坑４号	SD12	溝状遺構６号	SK104	土坑59号
SK12	土坑５号	SD11	溝状遺構７号	SK501	土坑60号
SK 5	土坑６号	SD1001	溝状遺構８号	SK1008	土坑61号
SK 6	土坑７号	SB27	掘立柱建物跡13号	SK1007	土坑62号
SK 3	土坑８号	SK24	土坑37号	SK1002	土坑63号
SK 7	土坑９号	SK31	土坑38号	SK1015	土坑64号
SK27	土坑10号	SK41	土坑39号	SK1019	土坑65号
SX 1	土坑11号	SK42	土坑40号	SK1014	土坑66号
SK26	土坑12号	SK50	土坑41号	SK1018	土坑67号
SK25	土坑13号	SK21	土坑42号	SK1006	土坑68号
SK18	土坑14号	SK36	土坑43号	SK1016	土坑69号
SK28	土坑15号	SK44	土坑44号	SK1009	土坑70号
SK 9・10	土坑16号	SK1001	土坑45号	SK1005	土坑71号
SX 4	土坑17号	SX23	製鉄炉１号	SK1017	土坑72号
SK 8	土坑18号	SX19	製鉄炉２号	SK1010	土坑73号
SX 5	土坑19号	SX22	製鉄炉３号	SK66	土坑74号
SK30	土坑20号	SX10	土坑51号	SK74	土坑75号
SK38	土坑21号	SX27	土坑52号	SK70	土坑76号
SK43	土坑22号	SX27内土坑	土坑53号	SK65	土坑77号
SK102	土坑23号	SX14	土坑54号	SL 1	炉跡23号
SK107	土坑24号	SX16	土坑55号	SL 2	炉跡24号
SK103	土坑25号	SX17	土坑56号	SL 3	炉跡25号
SK106	土坑26号	SX21	製鉄炉４号	SK502	炉跡26号
SK83	土坑27号	SX25	土坑49号	SL1002	炉跡27号
SK82	土坑28号	SX20	土坑50号	SL1004	炉跡28号
SK81	土坑29号	SX15	竪穴建物跡２号	SL1003	炉跡29号
SK85	土坑30号	SX 6	土坑46号	SK61	炉跡30号
SK84	土坑31号	SX 7	土坑47号		

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　縄文時代の調査

１　調査の概要

本遺跡では，確認調査及び令和２～５年度の発掘調査の結果，縄文時代に該当する遺物包含層はⅢ・Ⅳ層であることを確認した。ただし，後世の撹乱の影響を受け，Ⅲ層からは古代・中世の遺物も含む。

調査区内は，後世の土地改良や耕地開発等の影響で削平を受け，特に調査区北側の広い全域ではⅢ層またはⅣ層まで削平され，西側の49～52区はⅥ層近くまで削平されており，一部を除くＤ・Ｅ区ではⅢ・Ⅳ層が確認されず，縄文時代の遺物の出土もほぼなかった。調査区南側のＦ～Ｉ－55～63区はⅢ層が，59～62区はⅣ層が比較的よく残存しており，なかでも縄文時代の土器・石器の出土は，特にＦ～Ｈ区の南側エリアに多かった。

縄文時代の遺構としては，集石５基，土坑１基，落とし穴２基の計８つを確認した。その多くがＧ・Ｈ－61区周辺に集中しており，集石１基がＥ－65区で，落とし穴は少し西に離れたＦ・Ｇ－51・52区で検出した。遺構の具体的な内容は，次の項で報告する（第13～18図参照）。遺物については，縄文時代早期から晩期までの土器と石器が出土し，土器は早期のものが多くみられ，出土量は，調査面積に対して，種類は一定数あるものの削平の影響からか数量は少ない。石器は，石鏃や石錐などの剥片石器，磨製石斧，磨・敲石などの礫石器などがある。

出土区は前述の通り調査区南側に多く，土器については，時期ごとに，まとまった区域で出土する傾向が見られた。最も数が多い縄文時代早期中葉の土器は，Ｈ－60～62区とＥ－65区及びその隣接する区域に集中し，他では出土していない。これらのエリアはともに海抜36.0～36.4mの標高にあり，土坑や集石が検出されたエリアで，Ⅳ層の残存状態がよかったことが，出土が集中した理由と考えられる。このほか，Ｈ・Ｉ－45区周辺は縄文時代早期後葉の塞ノ神Ｂ式土器が，Ｇ・Ｈ－55・56区では縄文時代後期から晩期とみられる土器がある程度まとまって出土する傾向が見られた。

石器については，土器と同じようにＦ～Ｉ区の調査区の南側にまばらに出土地域が広がり，Ｇ～Ｉ－52～56区での出土がやや多くなっている。なお，石器の掲載については，縄文時代の遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層出土，その他の時代の包含層であるⅠ・Ⅱ層出土，縄文時代以外の遺構内出土の３つに分けて掲載した。また，時代が十分特定できていない凹石は，磨・敲石など縄文時代の石器形態に類似するものであることから，縄文時代の可能性があるものとして，本節で掲載しているが，周辺の遺跡の出土遺物との関連も踏まえて，石器の用途や製作時期などは，今後も検証が必要と考える。

２　遺構

ア　集石

①概要

北山遺跡で検出した集石は５基である。

この項では，報告を行うにあたって留意事項を述べる。集石遺構の分布をみると，集石５号がＤ－65区に位置するのを除き，他はＦ～Ｈ－60・61区とほぼ同じエリアに集中している。また，集石はいずれもⅢ層下面～Ⅳ層上面で検出され，その隣接する区域のⅢ・Ⅳ層からは，縄文時代早期中葉の土器も集中して出土している。このような状況から，集石についても縄文時代早期中葉のものである可能性が高いと考える。前述したように本遺跡は削平を受け，Ⅲ・Ⅳ層が確認できるエリアは限られていたため，本来はもう少し広範囲に縄文時代の遺構があった可能性も十分考えられる。

②形態分類

上野原遺跡（埋文センター 2000）では，集石の形態的特徴から，次に示すように分類している。

Ⅰ類	構成礫が集中せず，掘込み部を確認できなかった集石
Ⅱ類	構成礫が集中するが，掘込み部を確認できなかった集石
Ⅲ類	構成礫が集中し，掘込み部が確認できるもので，底石や壁石などがない集石
Ⅳ類	構成礫が集中し，掘込み部が確認でき，底石や壁石などの施設を伴う集石

本遺跡で検出した集石については，この類型に当てはめて分類した。しかし，構成礫は集中していないが，掘込み部が確認できるⅠ類とⅢ類の中間にあたるものがあり，これについてはⅠ＋Ⅲ類として記した。以下，集石１号～５号の詳細について報告する。なお，調査区内の西側の集石から順に１号～５号の番号を付けた。

集石１号・出土遺物（第13図　１）

集石１号は，Ｇ－60区の東西方向の緩斜面のⅣ層上面で検出した。礫は南北に約90cm，東西に約40cm の範囲に広がる。掘込みは，確認できなかった。

礫の数は９個で，径４cm～12cm の偏平礫，角礫，亜円礫で，石材は赤色砂岩と凝灰岩が混在し，平坦面にまばらに分布している。礫のうち，石器が１点あり，炭化物はなく，被熱の痕跡も見られなかった。

１は砥石または石皿の破片と考えられ，径約７cm，厚さ約２cm の板状の赤色砂岩である。表面は，ほぼ全面が丁寧に研磨されている。裏面は，中央から下部にかけて部分的に丁寧に研磨されている。下端部は欠損しており，砥石などとして使用された後に廃棄された可能性がある。

集石２号（第13図）

集石２号は，Ｇ－61区の東西方向の緩斜面のⅣ層上面で検出した。礫は東西に約200cm，南北に100cm の範囲で平坦に広がる。礫の数は18個で，約４～10cm 前後の砂岩，凝灰岩が混在している。掘込みは確認できていない。炭化物はなく，被熱の痕跡も確認できない。集石ではなく，廃棄遺構の可能性もある。集石内の遺物は，土器の小片が２点出土した。厚さ約1.5cm の厚手で無文の土器であり，集石３号や土坑１号で出土した型式と同一と考えられる。なお，周辺の土器との接合を試みたが，接合に至っていない。

集石３号・出土遺物（第13図　２・３）

集石３号は，Ｇ・Ｈ－61区の東西方向の緩斜面のⅢ層で検出した。礫は南北に150cm，東西に40cm の範囲で平坦にまばらに広がる。掘込みは確認できていない。礫の数は13個で，径５～13cm の赤色砂岩と砂岩で構成される。その他，土器２点が出土したが，炭化物等はなく，被熱の痕跡も見られなかった。

集石内から出土した土器を図化した。２・３は，厚さ約1.5cm の厚手の胴部で，底部に近い部分と思われ，下端部はさらに厚手のつくりとなっており，外面は無文である。集石２号から出土した土器片や，Ｈ－61区の土坑１号から出土した完形の土器と酷似しており，底部は尖底形になるものと想定できる。土坑１号や集石２号から出土した土器との接合を試みたが，接合に至っていない。

集石４号・出土遺物（第14図　４）

集石４号は，Ｈ－61区の南北方向の緩斜面のⅣ層に近いⅢ層下面で検出した。礫は，東西に約130cm，南北約90cm の範囲に広がる。掘込みをもち，深さは約50cm である。礫の数は323個で，土坑に礫を充填するように，径６～10cm 前後の礫を５，６段ほど積み重ねて作られ，使用されていたと考えられる。礫数や形状等，本遺跡の他の平坦な集石とは様相が異なる。埋土は炭化物の影響からか黒色に近いⅣ層土を主体とし，３cm 未満のⅤ・Ⅵ層の小ブロックも少量混在する。Ⅲ層土の混ざり込みは見られず，Ⅲ層が堆積する以前に使用が終了したと考えられる。北に隣接するＧ－61区では，完形に近い縄文時代早期の土器が入った土坑１号が検出されているため，集石４号は同一時期の可能性が高いと考えられる。集石内の遺物は，土器１点，石器１点が出土し，炭化物の小片はないが，被熱の形跡がうかがえた。土器は約２cm の小片のため図化していないが，石器は図化した。

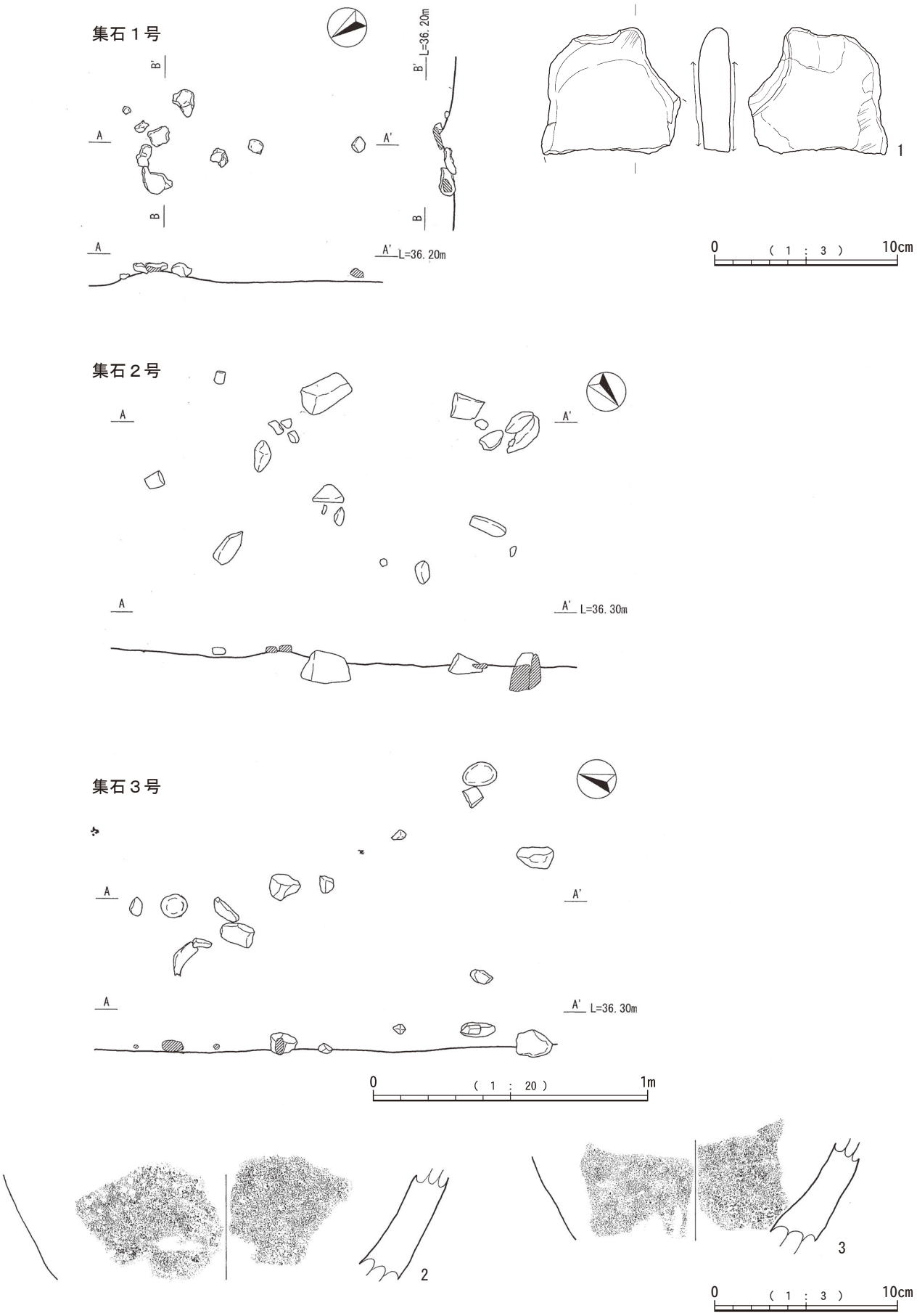
４は石皿で，凝灰岩の約８cm の立方体に近い厚手の形状で，表面の一部は磨面をもち，下半部は破損している。

集石５号（第15図）

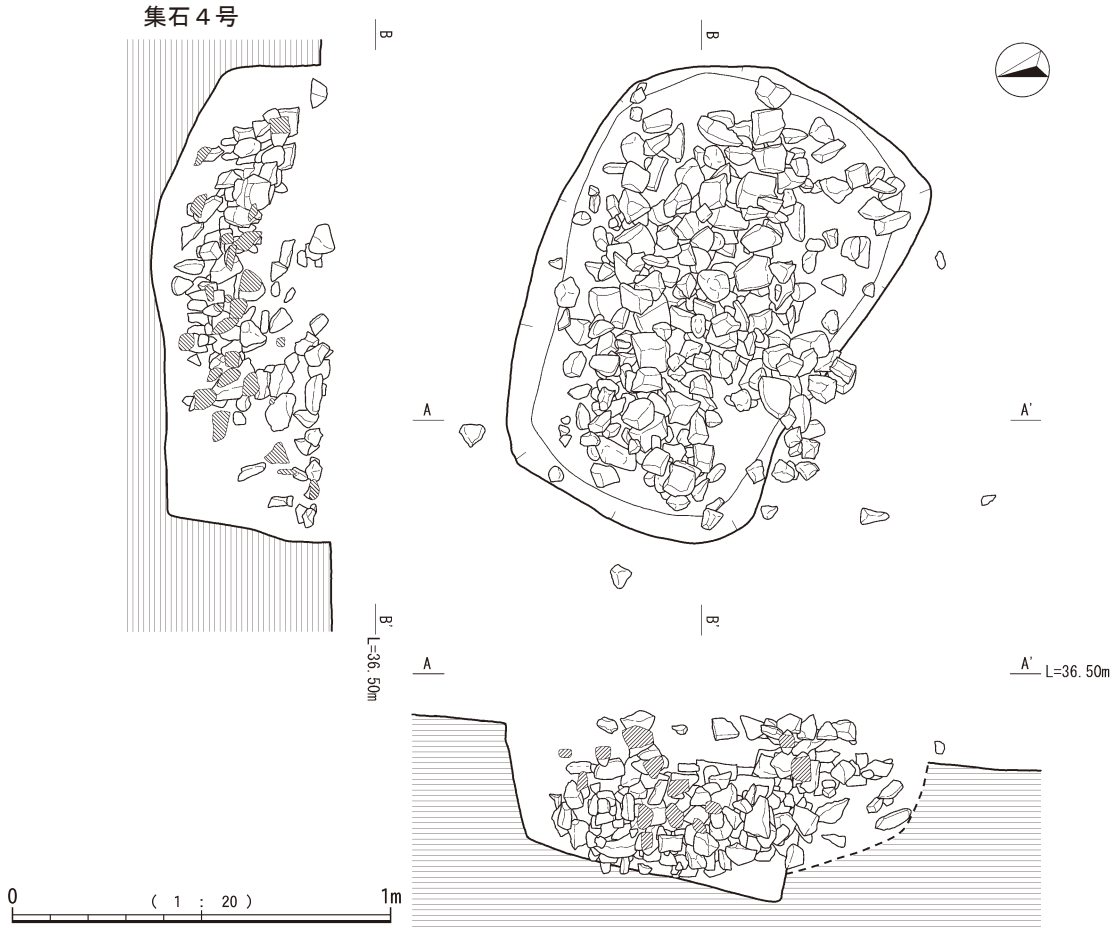
集石５号は，Ｄ－65区の東西方向の緩斜面のⅢ層下面ないしⅣ層上面で検出した。この周辺の区域はⅢ層上面までほぼ削平を受けていたが，集石の周辺だけが部分的にⅢ・Ⅳ層が残っていた。礫は南北に160cm，東西に80cm の範囲で広がる。南側に平坦に15個の礫がまばらに広がり，その下に礫の重なりはなかったが，北に数十cm ずれた位置のⅣ層土の中から16個の礫がまとまって検出され，深さ約10～20cm の掘込みをもつ。礫の数は計31個で，径３～17ｃｍの砂岩，赤色砂岩，安山岩で、約９割は偏平礫，１割が亜円礫である。赤色砂岩の一部は，被熱によるひび割れや炭化物付着が見られた。わずかに出土した５㎜大の炭化物片は，科学分析の結果，近世のもので，上層から打ち込まれた竹杭と考えられ，本遺構とは無関係であった。他に集石内の遺物はなかった。

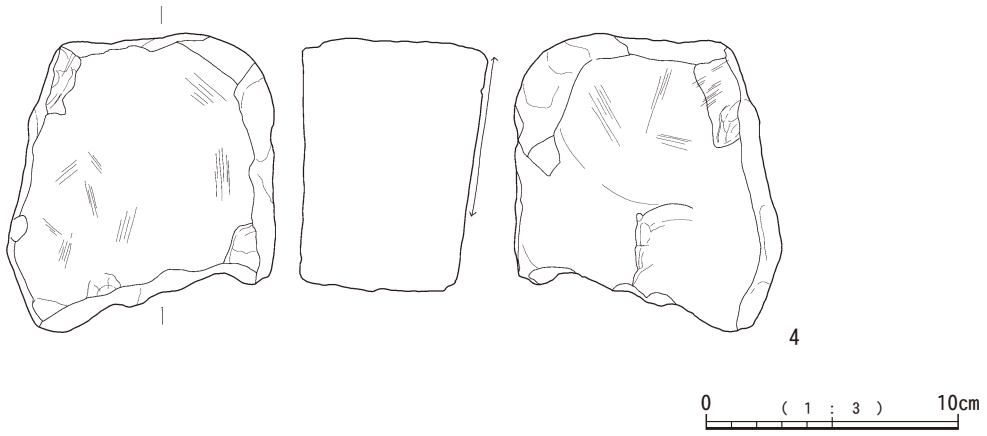
第５表　集石観察表

集石番号	検出区	検出層	規模 (cm)		総礫数	形態分類
			長軸	短軸		
集石１号	G-60	Ⅳ層	90	40	9	Ⅰ類
集石２号	G-61	Ⅳ層	200	100	18	Ⅰ類
集石３号	G･H-61	Ⅲ層	150	40	13	Ⅰ類
集石４号	H-61	Ⅲ層下面	130	90	323	Ⅰ＋Ⅲ類
集石５号	D-65	Ⅲ・Ⅳ層上面	160	80	31	Ⅰ＋Ⅲ類

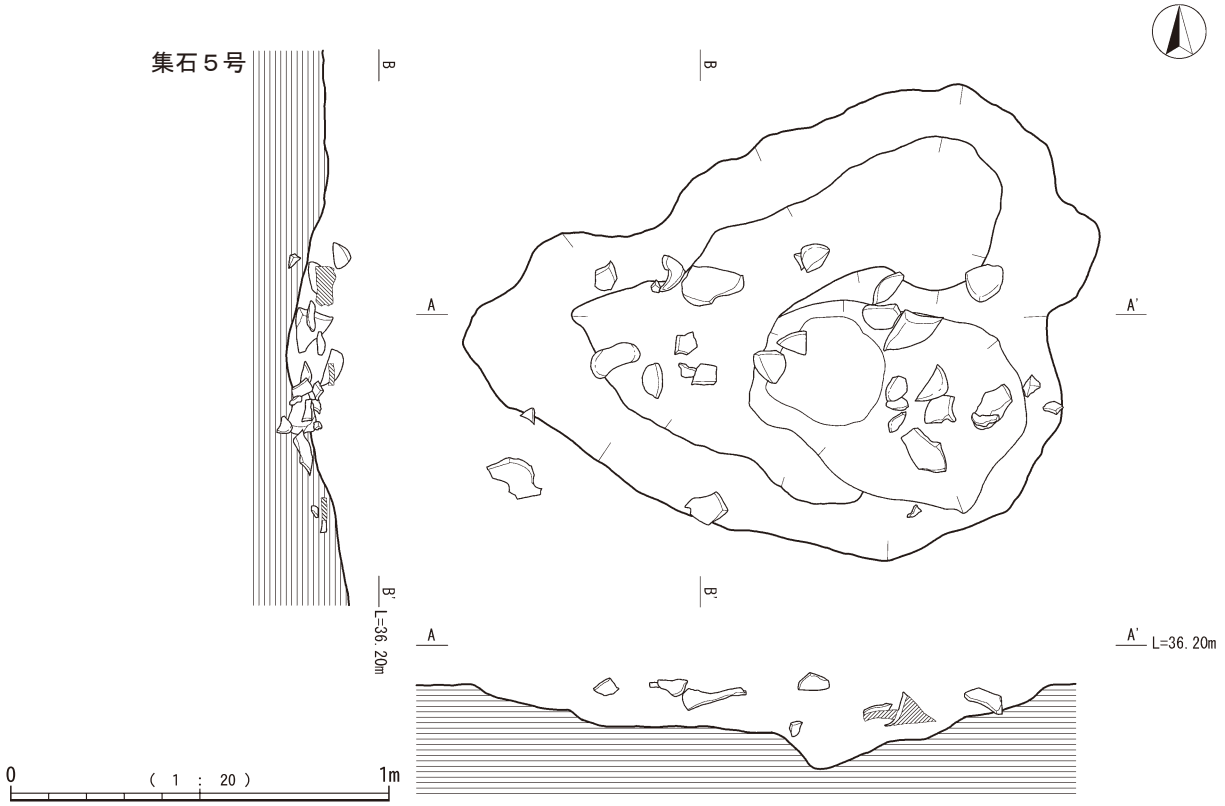


第13図　集石１～３号・出土遺物





第14図　集石４号・出土遺物



第15図　集石５号

イ　土坑

土坑１号・出土遺物（第16図　５）

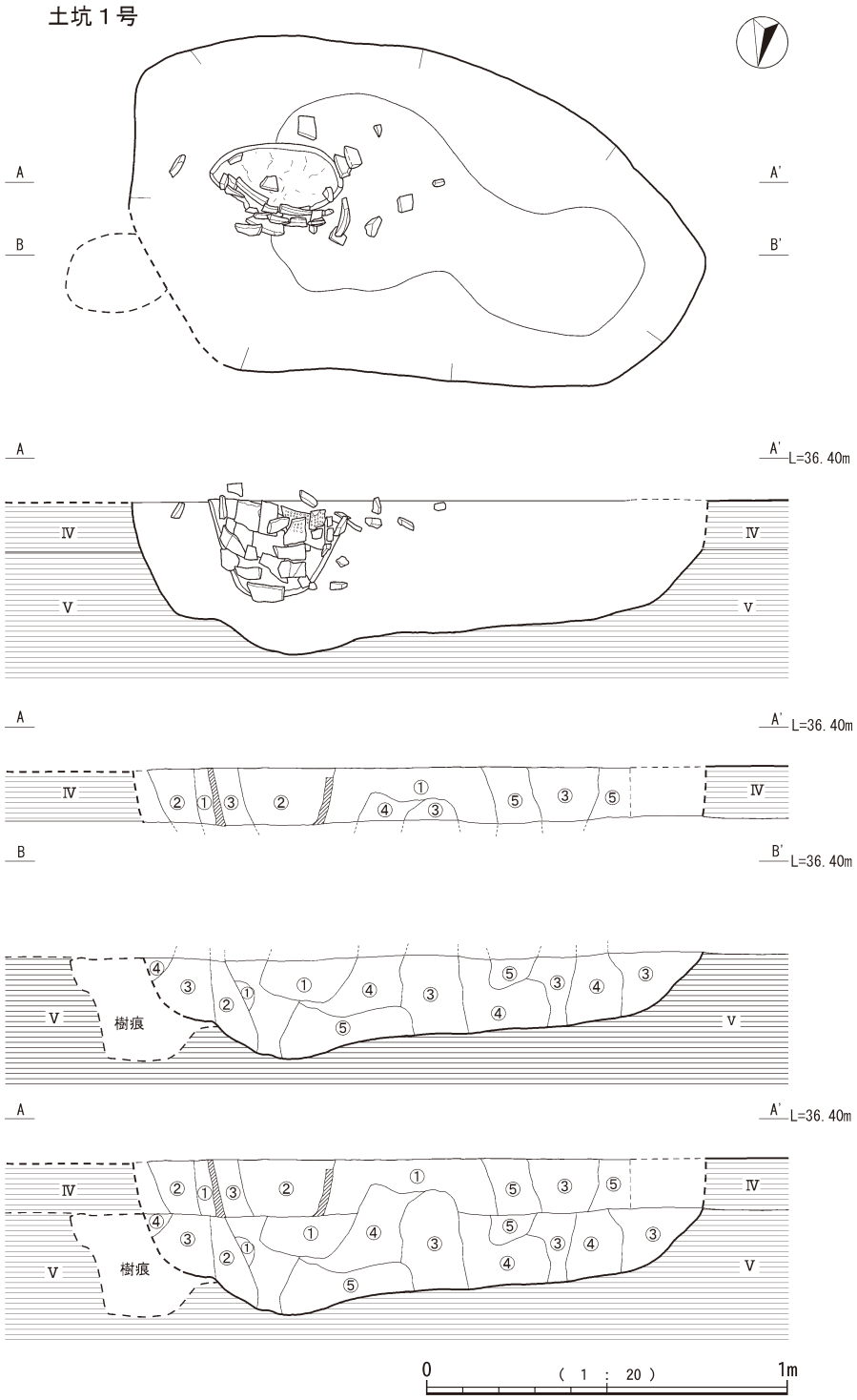
土坑１号は，Ｇ－61区の平坦面のⅣ層上面で検出した。径30cmほどの土器の破片が出土した。土器が埋まっていた北側から段階的に掘り下げたところで土坑のプランを確認し，連結土坑を想定して掘り下げを行ったが，最終的に長楕円形の土坑であると判断した。

法量は，長軸約160cm，短軸90cm，深さ45cmである。ただし北側の上端は南側よりも15cm低い位置で検出したため，実際は短軸はもう少し長く，形状も隅丸方形であった可能性がある。埋土はブロック状に入り，Ⅳ層土とⅤ層土の他，Ⅳ・Ⅴ層の混ざった土がみられ，Ⅲ層土はなかった。土層断面図については，上端から北側を約15cm掘り下げた時のもの（第16図Ｂ－Ｂ’間）で，さらにそこから下端までは土坑を半截したときのもの（第16図Ａ－Ａ’間）を組み合わせて掲載している。

土坑１号から出土した土器は，すべて同一個体と考えられる土器片で計35点である。土坑の中心より北側から出土した破片は押しつぶされた小片が多いが，南側は残存状態がよく，原形に近い形でまとまった状態で出土した。最終的に口縁部から底部まで全体の半分程度が出土し，器形の全体像が想定できる。接合により復元したものを図化したのが５である。

５は，器高約41.0cm，口縁部の直径は約31.0cmと比較的大型の砲弾形の深鉢形土器である。口縁部は直線的で，胴部から底部に向かってすぼまり，尖底になっている。底部内面も破損部があるが，尖底に近い形状である。器壁の厚みは1.5～2.0cmと非常に厚手で，内外面ともに非常に摩耗が激しいが，口縁部の外面には貝殻腹縁部による約3.5～4.0cmの従位の連続刺突文が施され，胴部以下は無文である。なお，次項で報告する包含層から出土した類似の土器と比較すると，５は口縁部上部がやや薄手のつくりで，口唇部に施文がみられない点が相違点であるが，器形や文様等の特徴から縄文時代早期の政所式土器に該当するものと考える。なお，集石２号・３号と，隣接エリアの包含層から出土した類似の土器からは，５と接合できる個体は確認できなかったが，同じ型式の政所式土器は，Ⅴ類土器として，次項で報告する。なお，土坑内部から採取した埋土は，ウォーターセパレーションし，検出した炭化物の年度測定を実施したところ，8930±30年BPという結果で，縄文時代早期中葉の遺構であることが確認された（第Ⅴ章第10節参照）。

また，サイズ・形状から墓である可能性を考え，土坑内から採取した土壌資料の科学分析をおこなったが，遺体埋葬の影響があったと断定することはできなかった。



土坑１号埋土注記
① 暗褐色砂質土(7.5YR４/２) しまり粘性弱い Ⅴ層由来の土
② 極暗褐色粘質土(7.5YR２/３) しまり粘性あり Ⅳ層由来の土
③ 極暗赤褐色粘質土(５YR２/４) しまり粘性あり Ⅳ・Ⅴ層の混じり土
④ 暗褐色粘質土(10YR３/４) しまり粘性あり Ⅳ・Ⅴ層の混じり土
⑤ 暗褐色粘質土(10YR３/４) しまり粘性あり Ⅴ層ブロック土が混じる

第16図 土坑１号

第17図　土坑１号出土遺物

ウ　落とし穴

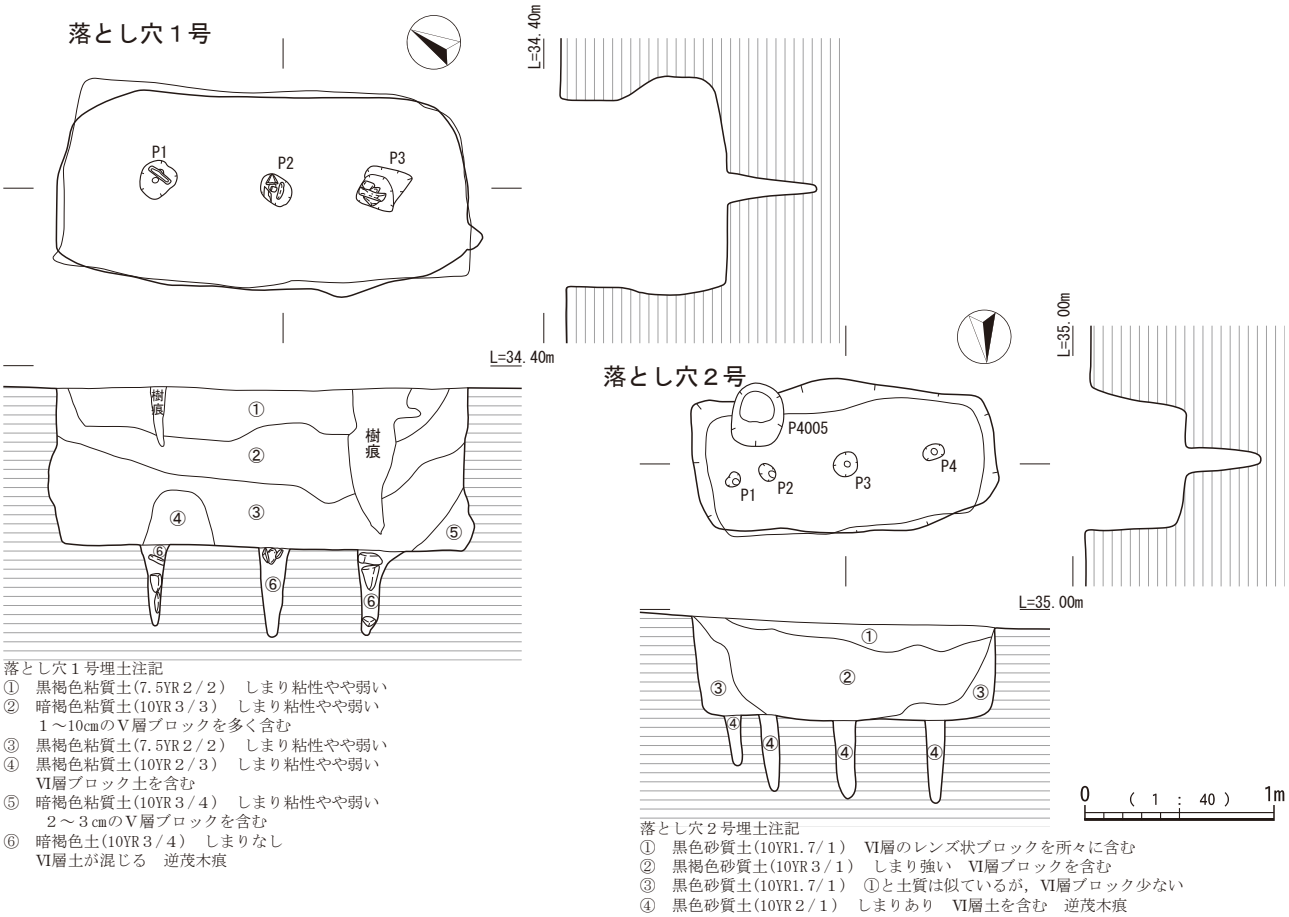
落とし穴は２基が検出した。隣接する区で見つかり，集石などの他の縄文時代の遺構から100m ほど西に離れた場所に位置する。規模はわずかに異なるものの，平面形，断面形はいずれも長方形を基本とし，複数の逆茂木痕をもつなど，つくりも酷似している。なお，落とし穴が検出された区域は，表土を除去すると明黄褐色のシラスが検出され，Ⅱ～Ⅴ層が削平により残ってない場所が多く，検出面がⅥ層となったが，本来の掘り込み面は検出面より数十 cm 上位にあり，もう少し深い落とし穴だったと考えられる。

落とし穴１号（第18図）

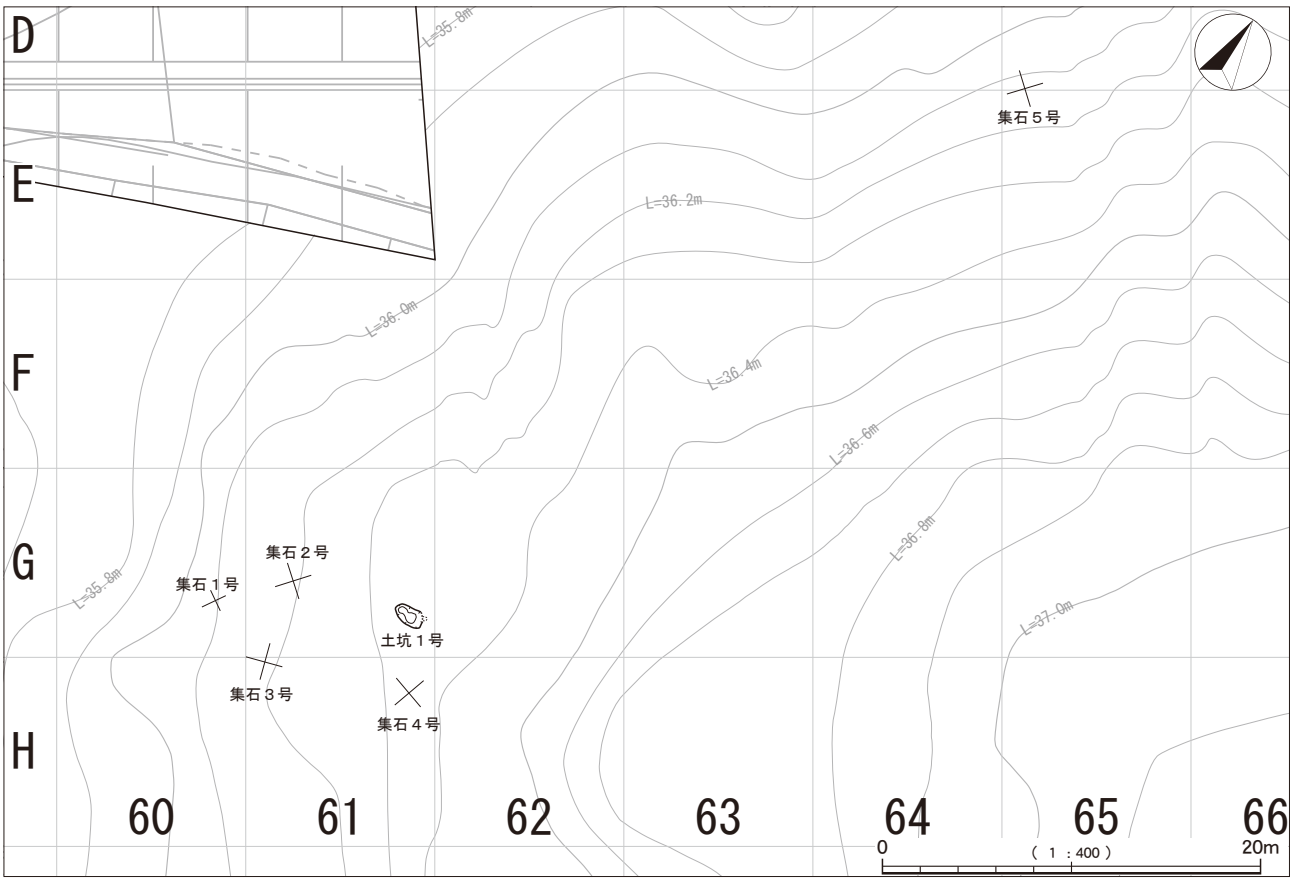
Ｆ・Ｇ－51区の東西方向の緩斜面のⅥ層で検出した。落とし穴の本来の上部は削平により残っていない。平面形は隅丸長方形で，大きさは，長軸220cm ×短軸100cm，検出面からの深さは85cm である。壁は垂直にたち，底面はほぼ平らである。完掘後，底面中央部に直線上にほぼ均等な間隔で並ぶ３つの小穴が検出され，すべての小穴の上部に，偏平礫が詰められた状態で検出された。それぞれ穴の中央部を空けて，壁に沿うように配置されており杭を固定する目的と考えられ，逆茂木痕であることが確認された。さらに底面を残して長軸方向に断ち割ると，底面からの逆茂木痕の深さは約40 ～ 50cm あり，うち２つは穴の底近くにも偏平な礫が詰められていた。埋土はしまりが弱い粘質土で，上部から黒褐色土，Ⅴ層ブロックを多量に含む暗褐色土，黒褐色土の３つの層に大別され，レンズ状に堆積しているため自然堆積と考えられる。遺物は確認されなかった。

落とし穴２号（第18図）

Ｆ－52区の東西方向の緩斜面のⅥ層で検出し，落とし穴１号同様，上部はかなり削平を受けている。平面形は，ほぼ隅丸長方形で，大きさは長軸85cm ×短軸45cm，検出面からの深さは55cm である。壁は垂直にたち，底面はほぼ平らになっている。完掘後に底面中央付近に５つの小穴が確認され，逆茂木痕検出のため，長軸方向に断ち割ったところ，底面中央部に直線上に４つの逆茂木痕が検出され，１つは樹根と判断した。底面からの逆茂木痕の深さは底面からＰ１が約26cm，Ｐ２～４が約40 ～ 45cm で，礫が中に入っているものはなかった（第18図参照）。埋土は黒色土を基本とし，壁面崩落土，２次シラスブロックを含むが，Ⅳ層土に類似していることから縄文時代の可能性が高いと考えられる。遺物は確認されなかった。



第18図　落とし穴１・２号



第19図　縄文時代の遺構配置図

	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
C																																
D																									▼1							
E		▲1						▲1						▲1 ●1				□1				◆2 ○2			▲1	●1			△1 □2			
F	□1													▲1							●1											
G		●1	△1										□2 ●1		□1			◇1 ※	◆1		●1			○1								
H		▲2							▲1		▲1	□1				□1	▲2●2 ▽1○1	◇2 ●2	◆4●2 ○1◎1 ▽1□1													◎1
I		▲2	▲1						△1								▲1	△1 ◇3	◇1													

※ほぼ完形品が土坑1号から出土

※上図はグリッドごとに出土した土器の種類，数量を示す。
（複数の土器を接合した資料は1でカウント）
出土区が複数のグリッドにまたがって記録されている場合は，その中間地点，またはアルファベット・数字の小さいグリッドで記載する。

（ 縄文時代早期前葉 ）
- △ Ⅰ類土器（加栗山式）
- □ Ⅱ類土器（小牧3A）

（ 縄文時代早期中葉 ）
- ▲ Ⅲ類土器（吉田式）
- ◆ Ⅳ類土器（別府原式）
- ◇ Ⅴ類土器（政所式） ※
- ● Ⅵa類土器（中原式 1類）
- ○ Ⅵb類土器（ 〃 2類）
- ◎ Ⅵc類土器（ 〃 5類）
- ▽ Ⅶa類土器（その他の縄文早期1）
- ▼ Ⅶb類土器（その他の縄文早期2）

（ 縄文時代早期後葉 ）
- ▲ Ⅷ類土器（塞ノ神B式）

（ 縄文時代中期 ）
- ▲ Ⅸ類土器（春日式）
- △ Ⅹ類土器（阿高系）

（ 縄文時代後期 ）
- ▲ Ⅺ類土器（西平式）

（ 縄文時代後晩期 ）
- □ Ⅻ類土器（その他縄文後晩期）
- ● その他の底部

※未掲載の◇（Ⅴ類土器）が上記以外にH・I－60～64で複数出土

第20図　縄文土器の出土状況図

３　出土遺物

（１）土器

縄文土器は点数は少ないが，貝殻文を施した縄文時代早期の土器の割合が高く，縄文時代中期や後期・晩期と考えられる土器もわずかにみられた。最も出土数の多い縄文時代早期の土器の多くはⅢ・Ⅳ層からの出土である。しかし，調査区内は削平の影響を受けており，表土や他の時代の包含層，縄文時代以外の遺構内から出土した土器についても，重要と思われるものについては掲載の対象とし，計63点を図化した。

出土地点は，土器の時期ごとにある程度のまとまりがみられる。縄文時代早期中葉の土器（Ⅲ～Ⅵ類土器）は調査区の60区～68区，中でもＨ・Ｉ－60～62区に集中していた。この区域は，４つの集石と土坑を検出したＦ～Ｈ－60・61区に隣接する位置にあたり，北山遺跡の縄文時代早期中葉の状況を知る上で，有効な情報を得られる地点であると考える。また，数量は多くないが，縄文時代早期後葉のⅧ類土器は，Ｈ・Ｉ－45区周辺で多く出土しており，縄文時代後期・晩期のものと考えられるＸ類土器は，Ｇ・Ｈ－55・56区周辺に集中して出土がみられるなど，時期ごとに分布が偏る傾向が認められた（第20図　縄文土器出土分布図　参照）。

また出土した縄文土器の多くは摩耗した小片で，完全復元できるものや，全体の器形をうかがうことができるものはほぼないが，各土器片の器形や文様の特徴から分類を行い，時期が古いと思われる順に，以下のように分類した。

Ⅰ類土器…加栗山式土器
- 器壁が直線的に立ちあがる角筒形。
- 胴部の斜位・縦位の連続貝殻刺突文が「Ｘ」字状に交差する文様。

Ⅱ類土器…小牧３Ａタイプ
- 器壁が直線的に立ち上がる円筒形。
- 胴部に縦位の貝殻刺突文が充填される

Ⅲ類土器…吉田式土器
- やや外斜し，直線的に立ち上がる円筒形。
- 口縁部下にクサビ形の突起をもち，胴部は貝殻腹縁部による押引文をもつ。

Ⅳ類土器…別府原式土器（新段階）
- わずかに外反する口縁部と直線的な胴部，ややすぼまる底部をもつ深鉢形。
- 口縁部に斜位の貝殻条痕文や押し引き気味の貝殻刺突文をもち，胴部に浅く細い貝殻条痕文をもつ。

Ⅴ類土器…政所式土器
- 直線的に立ち上がる口縁部，胴部から底部に向かってすぼまり，尖底の底部をもつ砲弾形。
- 口縁部に縦位の貝殻刺突文をもち，胴部以下は無文で，1.5cm 以上の厚手の器壁をもつ。

Ⅵ類土器…中原式土器
- 厚手の器壁をもち，底部は平底となる砲弾形
- 施文の違いから以下のａ～ｃに分類

Ⅵa類土器…中原式土器第１類
- 口縁部の狭い範囲にのみ貝殻刺突文をもち，胴部以下は無文。

Ⅵb類土器…中原式土器第２類
- 口縁部から胴部上位の範囲に貝殻腹縁による連続刺突文をもつ

Ⅵc類土器…中原式土器第５類
- 口縁部から胴部までの広い範囲に，貝殻腹縁による縦施文と横施文の条痕文をもつ。

Ⅶ類土器…その他の縄文時代早期の土器
- Ⅰ～Ⅵ類に該当せず，口縁部に貝殻刺突文をもつ胴部以下は無文で，縄文時代早期と思われるもの。

Ⅶa類土器
- 細かい斜位の貝殻刺突文を１段だけもつもの

Ⅶb類土器
- 貝殻腹縁部による横位の刺突文を６～７段もつもの（石坂式土器に類似する文様がみられる）

Ⅷ類土器…塞ノ神Ｂ式土器
- ラッパ状に開く口縁部の深鉢形
- 器面全体に貝殻刺突文を連続して施文し，帯状の文様を構成し，工具による複数の沈線文をもつ。

Ⅸ類土器…春日式土器
- 口縁部が内湾しながら外に開くキャリパー形の深鉢形で底部は上げ底になっている
- 器面には貝殻条痕文が施され，文様は沈線や隆帯の渦文や曲線文が施される。

Ⅹ類土器…阿高系土器
- 内外面ともに強い赤味を帯びた赤褐色の器壁をもつ
- 胴部は明瞭な太い沈線で描かれた幾何学的な文様がが施される。

Ⅺ類土器…西平式土器
- 「く」字形口縁をもち，口縁部は大きく外反し，上端部は波状をなす。胴部が張り出す深鉢形
- 頸部外面に工具による横位の連続刺突文，横位の多重の沈線文が施される。

Ⅻ類土器…その他の土器
- Ⅰ～Ⅺ類に該当しない，縄文時代後期から晩期にかけてのものと想定される詳細不明の小破片をまとめてその他の土器として掲載した。

なお，分類が困難な底部については，最後にまとめて掲載した。以下，図化した各類土器ごとの特徴について略述する。

Ⅰ類土器（第21図　６）

Ⅰ類土器は，胴部の小片１点のみの出土である。６は，胴部の器壁が直線的に立ち上がり，角筒形と想定される。外面は，貝殻腹縁部による縦位及び斜位の明瞭な連続刺突文が，交差するように帯状に施される。内面はケズリによる調整が行われ，器壁の厚さは約0.7cm と薄手である。

Ⅱ類土器（第21図　７）

Ⅱ類土器は，胴部の小片1点のみの出土である。７は，胴部の器壁が直線的で円筒形の器形と想定される。器面は灰褐色で，胴部外面には貝殻腹縁部の非常に明瞭な連続刺突文が約２㎜ごとに密に施されている。内面はナデによる調整が行われ，器壁の厚さは約0.7cm と薄手である。

Ⅲ類土器（第21図　８～10）

Ⅲ類土器は，口縁部に近い胴部２点と，胴部１点が出土している。胴部は器壁が直線的に立ち上がり，円筒形または角筒形と想定され，８・９は胴部外面にクサビ形の貼付文をもち，周りに文様はみられない。内面はナデまたはケズリによる調整が施され，器壁の厚さは約0.6～0.8cm と薄手である。８は上部にクサビ形の貼付文が約１cm 間隔で横並びに施され，その下部に摩耗が激しいものの横位の貝殻押引文が確認できる。９は摩耗が少ないシャープなクサビ形の貼付文が確認できるが，下部は欠損しており文様は確認できない。10は器壁が0.5cm と非常に薄手で，外面全体に貝殻腹縁部を刺突し，わずかに横に押し引いた文様が確認できる。

Ⅳ類土器（第21図　11～17）

Ⅳ類土器は，口縁部２点，胴部４点，底部１点を図化した。口縁部はわずかに外反し，口唇部は平らである。胴部は直線的で，底部に向かってややすぼまる深鉢形と想定される。口縁部外面は，貝殻条痕文と刺突文の両方が施され，胴部ほぼ全面に斜位または横位の凹みが浅く，細い貝殻条痕文をもつ。内面はナデ調整で，器壁の厚さは約1.0～1.5cm とやや厚手である。11は口縁部で，斜位の貝殻条痕文を施し，さらに貝殻腹縁を用いた太い縦位の刺突文が約４cm 幅で施されている。12は口縁部で斜位の貝殻条痕文があり，摩耗が激しいが縦位の太い刺突文がわずかに確認でき，内面は丁寧なナデ調整がなされている。13～16は胴部であり，15・16は外面の摩耗が激しいが，いずれにも外面全体に細くて浅い斜位の貝殻条痕文が施されていることが確認できる。17は平底の底部で，胴部から徐々に径が小さくなる円筒形に近い器形が想定される。器壁は約1.5cm と厚い。外面は摩耗が非常に激しいが斜位の条痕がわずかに確認できる。

Ⅴ類土器（第22図　18～21）

Ⅴ類は口縁部と多くの胴部が出土し，器壁の厚さが1.5～2.0cm と極めて厚手の土器で，本遺跡で最も多くの破片が出土した土器の１つである。土坑１号から出土した土器も，同様の特徴をもつⅤ類土器の１つである。口縁部は直線的に立ち上がり，胴部から底部にかけて徐々にすぼまる。包含層内では底部の出土はないが，土坑１号の土器と類似していることから底部は尖底形であると考えられる。口縁部のみに貝殻腹縁部による連続刺突文が施され，胴部以下は無文である。内面は，丁寧なナデ調整が行われており，色調はすべて薄橙色である。17点の出土のうち，数量の多い胴部は文様がないことから小片を接合した胴部１点，口縁部３点の計４点を図化した。

18～20は，口縁部または口縁部近くの部位である。18は口唇部にやや大きめの横位の貝殻刺突文がみられ，口縁部外面には縦位のやや細かな連続刺突文が２段ほど施されている。19は口縁部の小片，20は口唇部が欠損し，やや摩耗している口縁部近くの小片であるが，どちらも同じような連続刺突文が施されている。なお，18・19は同一個体と思われる。21は，４つの小片を接合した胴部の破片である。器壁は2.0cm と非常に厚く，色調は浅黄橙～にぶい橙で，傾きや屈曲から大型の土器であることが想定される。胴部外面は無文で，内外面ともにナデによる調整がなされている。

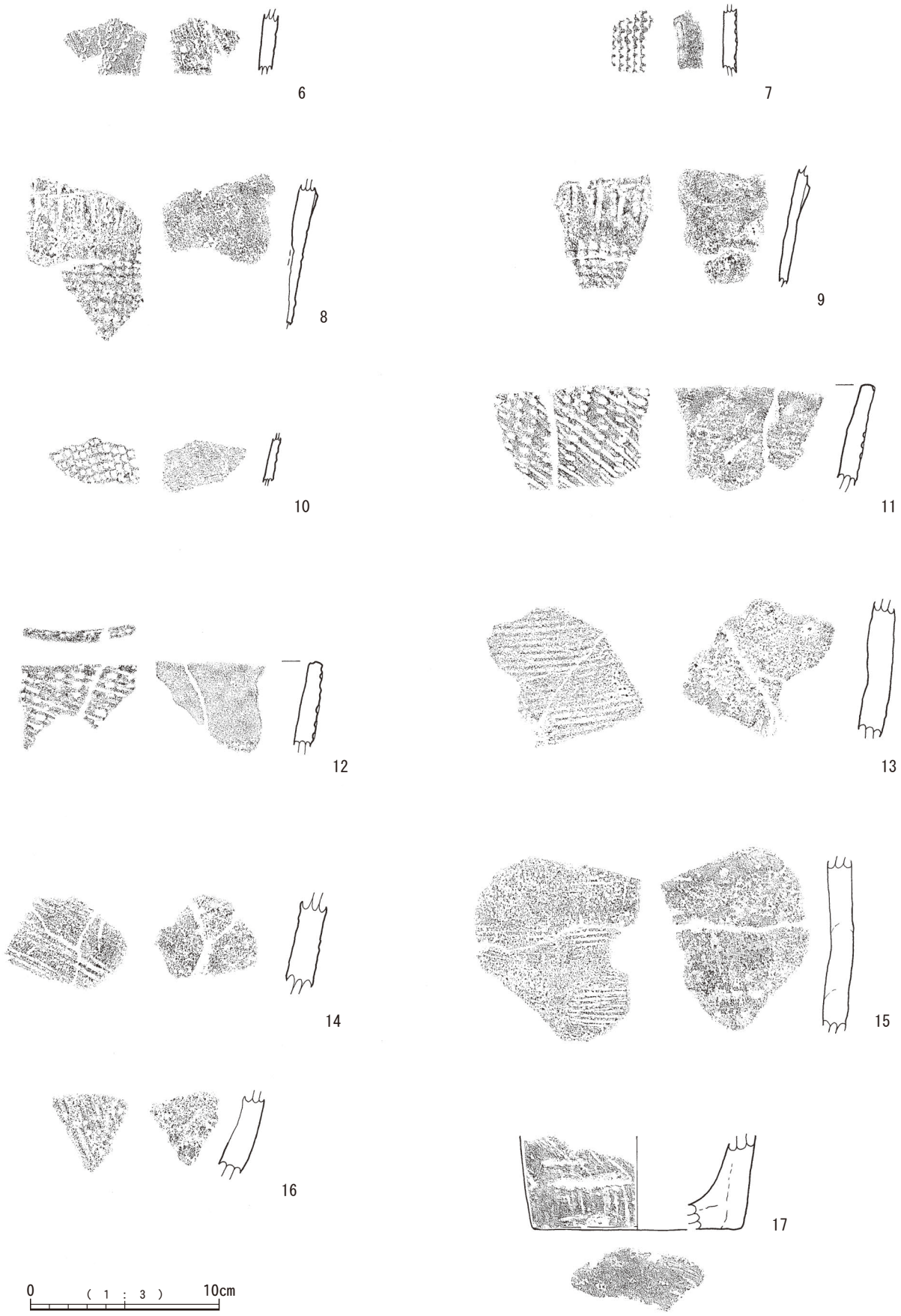
Ⅵ類土器

Ⅵ類土器は，Ⅴ類と並んで本遺跡の縄文土器で最も多く出土したものである。器壁は1.0～1.5㎝と厚く，ほぼ直線的に立ち上がる口縁部には貝殻刺突文または条痕文が施され，胴部は，無文のものと貝殻条痕文や押引文を施したものに分かれる。胴部から底部にかけては小さくすぼまり，やや小さな平底の底部をもつ。いずれも中原式土器の特徴に類似するものと考え，各部位の文様の特徴により，次のａ～ｃ類の３つに分類して掲載した。

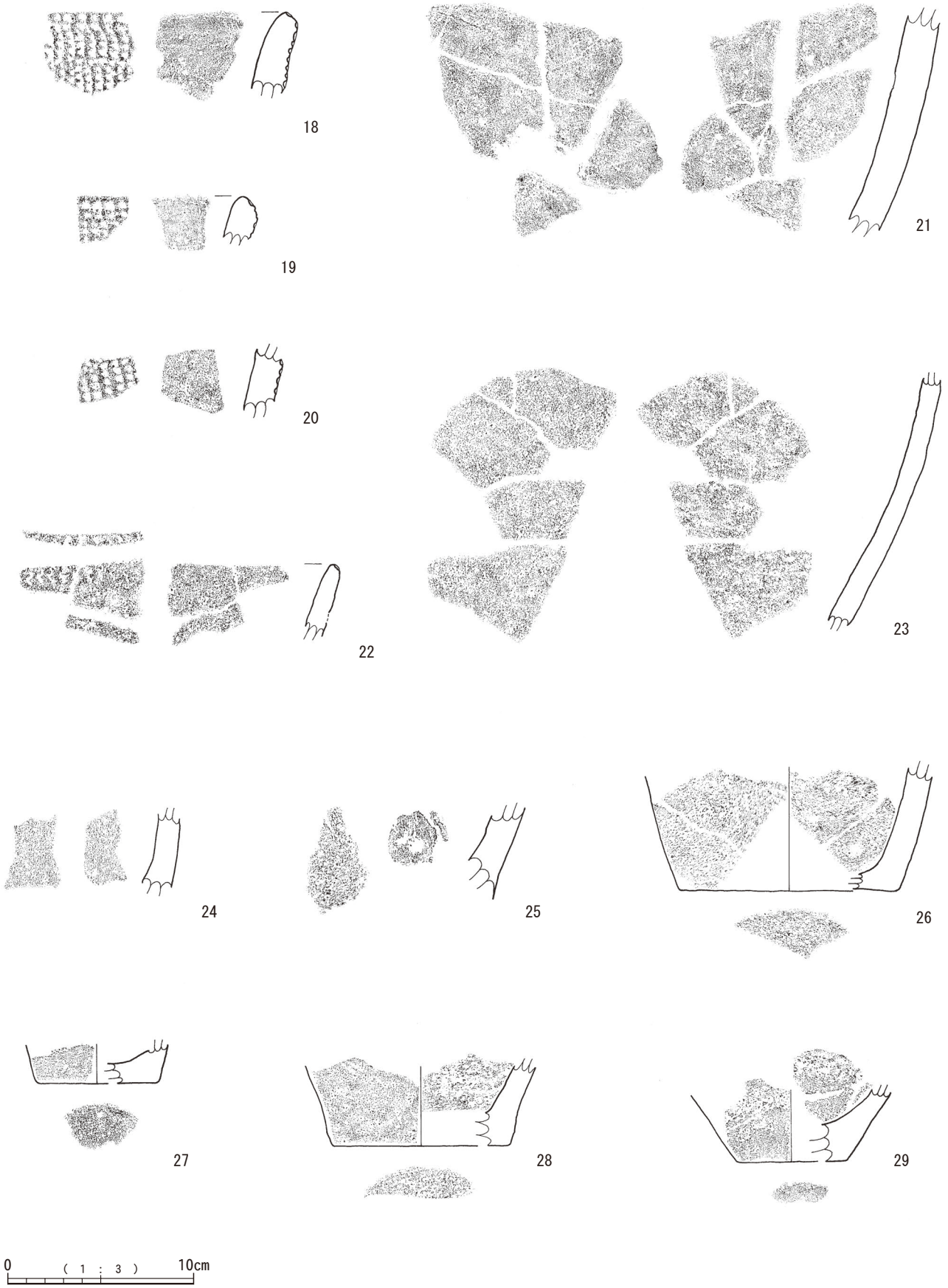
ａ類：	口唇部と口縁部上端のごく狭い部分にのみ貝殻腹縁刺突文があり，胴部以下は無文である。
ｂ類：	口縁部に斜位または縦位のやや押し引いたような貝殻刺突文が施される。
ｃ類：	口縁部に斜位の貝殻条痕文，胴部全面に縦位の貝殻条痕文と横位の貝殻を押引文をもつ。

Ⅵa類土器（第22図　22～29）

22は直行する口縁部で，口唇部～口縁上部のわずかな範囲に貝殻腹縁刺突文が連続してみられ，その下は無文である。23は，複数の小片を接合し，長軸15cm のやや大きめの胴部の破片で，底部に向かってすぼまるように湾曲する。外面全体が無文で，ナデ調整がなされ，器壁



第21図　縄文時代の遺物①



第22図　縄文時代の遺物②

の厚さは1.2cmとやや厚手である。24～28はいずれも底部または底部周辺の破片で，器壁の厚さは1.5cm以上と非常に厚手である。24・25は，内面の湾曲部に変化が確認できるため，底部近くの小片であることが確認できる。26は３つの小片を接合した胴部下部～底部の破片で，底部は平底である。胴部に比べ底部の径が小さくすぼまっている形状が確認できる。27も平底の底部の小片だが，小さくすぼまる形状が確認できる。28は溝状遺構４号から出土した底部で，厚手で無文のものだが，26・27と比べると底部から胴部に向かってやや外反しながら立ち上がる形状で，底面もやや小さい。29も厚手，無文，平底の底部であるが，底面は小さく，底部から胴部下部に向かって広く径が広がるような形状である。なお，22の口縁部は，口唇～口縁部に２段の貝殻連続刺突文をもつ中原式土器１類と明確に一致するとは言えないが，類似するものとして，Ⅵａ類に分類した。

Ⅵb類土器（第23図　30～34）

30～34は，いずれも貝殻の連続刺突文が施された口縁部である。30は５つの小片が接合した，口縁部～胴部までの破片である。口唇部断面は丸みをもち，口縁部上部から貝殻腹縁～背面を用いたと考えられる横位の連続刺突文がみられる。縦１cmのスジ状の文様が横並びに３段施され，約４cmの範囲に文様がみられる。胴部は摩耗が激しいが，細く浅い条痕らしき痕がわずかに確認でき，Ⅳ類土器の可能性もある。31・32は同個体で，口縁部にやや斜めの縦位の貝殻刺突文がスジ状に２～５段施されており，30と類似している。31は，わずかに残る胴部外面は，摩耗により文様がはっきりと確認ができない。器壁の厚さはいずれも1.2㎜程度とやや厚みがある。33は摩耗が激しい小片で，わずかに刺突文が確認でき，30～32に類似するものである。34は貝殻腹縁～背面を用いた横位の連続刺突文が３段施されている点で類似しているが，他と貝殻の種類が異なり刺突文１つ１つの幅が約３～５㎜と太く，より力強い文様が施され，他のⅥb類の文様とやや異なる。器壁の厚さが口縁部下は1.6㎜と非常に厚い。胴部は欠損しているため，文様の確認はできないが，Ⅵb類に該当するものとして分類した。

Ⅵc類土器（第23図　35・36）

Ⅵc類のうち，35は複数の小片を接合した縦長の胴部片で，器壁はやや直線的に立ち上がり，底部に向かってややすぼまる形状だが，円筒形に近い器形にもみてとれる。焼成が不十分で内外面ともに摩耗が非常に激しく，文様も明瞭ではないが，外面全体の広い範囲に縦位の貝殻条痕文を施し，その上から約1.5cmずつ横位の貝殻押引文を間隔を空けて施している。押引文と押引文の間には，クサビ形を模したような隆起部がみられるが，貼り付けたものではない。胴部下部は特に摩耗が激しく，一部に縦位の条痕がみられる以外は，文様の確認はできない。この胴部全体に縦横に施文の痕跡がみられることから，本類に該当すると考えた。36は，口縁部の小片で，口縁は外反せず，ほぼ直線的に立ち上がる。外面は摩耗が激しいが，斜位の貝殻条痕文がほぼ全面に確認でき，内面は丁寧なナデ調整がなされている。器壁の厚さは1.1cmとやや厚手で，胴部がないため文様の確認はできないが，中原式土器５類または４類のいずれかに該当するものと思われ，Ⅵc類に分類した。

Ⅶ類土器

Ⅶ類土器は口縁部３点を図化した。いずれも口縁部に貝殻腹縁部の連続刺突文をもつ縄文時代早期の土器であると考えるが，Ⅰ～Ⅵ類土器の特徴に当てはまらず，その他の縄文時代早期の土器として分類した。口縁部外面の刺突文の特徴から，次のａ・ｂに分類した。

ａ類	口縁部に斜位の貝殻復縁部の細い連続刺突文施される。その下は無文である。
ｂ類	口縁部に横位の貝殻復縁部による明瞭な刺突が複数段施される。その下は無文である。

Ⅶa類土器（第23図　37・38）

Ⅶa類土器は，口縁部２点で，37・38はいずれも口縁部上部から約２cmの範囲に斜位の貝殻腹縁部による細かな連続刺突文が施され，その下は無文であるが，胴部は接合していないため，詳細は不明である。器壁は0.6～1.0cmとやや薄手で，ナデ調整が行われている。

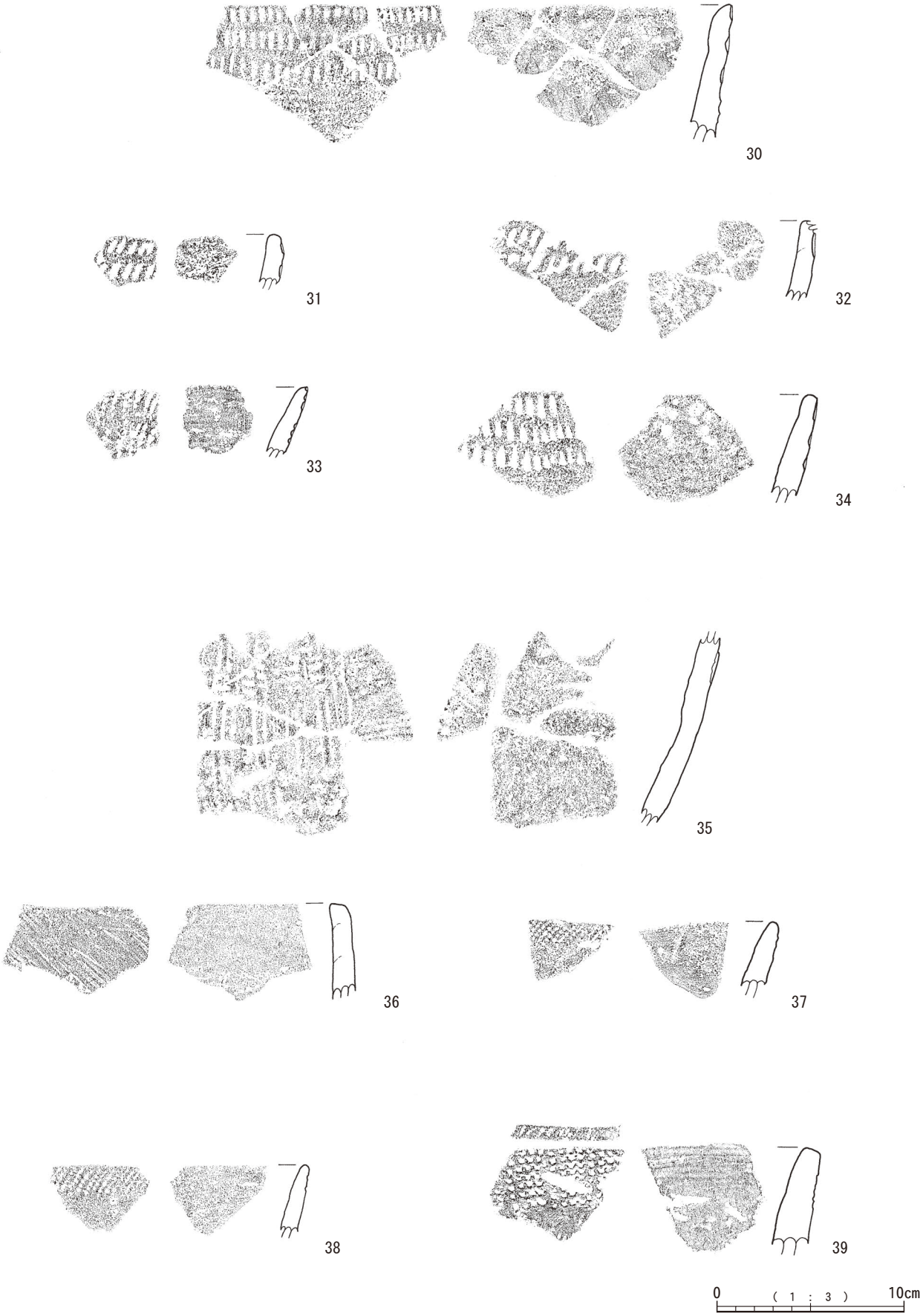
Ⅶb類土器（第23図　39）

Ⅶb類土器は，口縁部１点のみの出土である。39はやや外反する口縁部をもち，口唇部は平坦である。器壁は硬質で，赤味が強い。器壁の厚さは1.8cmと非常に厚手である。外面の上部約３cmの範囲には横位の貝殻腹縁刺突文が７，８段施され，その下は摩耗が激しいが無文であると考えられる。石坂式土器に類似する文様がみられるが，胴部以下に貝殻文が確認できず，その他の土器として分類した。

Ⅷ類土器（第24図　40～45）

Ⅷ類土器は，頸部からラッパ状に大きく開く口縁部をもつ深鉢形の土器で，頸部外面には貝殻腹縁刺突文が１条ずつ横位に施され，胴部には貝殻刺突文を連続で施した帯状の文様が確認でき，細い数条の沈線もみられる。器壁の厚さは約0.8cmとやや薄手のものが多い。内面はナデまたはケズリによる調整が行われ，器壁の厚さは0.8cmとやや薄手である。

40は口縁部で，帯状の連続刺突文が２条確認できる。



第23図　縄文時代の遺物③

41は頸部下部で，外面に貝殻刺突文による帯状の文様を構成している。42 ～ 45は胴部の小片で，同様に刺突文による帯状の文様が確認できる。42は頸部に近い胴部と思われ，上部から中央部にかけて丸く張り出し，中央部から下部にかけてはすぼまっていく形状である。外面には連続貝殻縁刺突文による帯状の文様が斜めに２条施され，文様が途中で交差している。さらに，その下にヘラ状の工具等で引かれた，斜位の細い沈線文が多数施されている。43はゆるやかに内湾し，外面には帯状の連続貝殻縁刺突文が横向きに４段みられる。44は２つの破片を接合したもので，同様に斜位の帯状の連続刺突文と，その斜め下には細い多数の沈線文が斜めに引かれ，幅約４cm の無文地帯を挟んで，再び平行する斜位の多数の細い沈線文が施されている。沈線文の太さは一定ではなく，様々である。45は胴部の小片だが，同様に帯状の貝殻刺突文が２本，工具による複数の沈線が確認できる。こうした外面の連続貝殻刺突文による特徴的な帯状の文様から，本類に該当するものとして分類した。

Ⅸ類土器（第24図　46）

Ⅸ類土器は，底部１点のみの出土である。46は，外面に横位の貝殻条痕文が数条確認できる。内面は破損や摩耗が激しいが，斜位の条痕文らしき痕跡がわずかに残っている。底面は上げ底になっており，下面には内から外に向かう貝殻条痕文がみられる。

Ⅹ類土器（第24図　47 ～ 49）

Ⅹ類土器は，すべて小片で，器形の全体像は不明であるが，内外面ともに丁寧なナデ調整がなされ，赤味が強い赤褐色の器壁と太めの沈線文をもつ。

47は胴部でその上部はやや外反し，外面に浅い横位の沈線文を３～４条施している。48は口縁部で，外面に明瞭な太い沈線文がみられる。口縁部上端に沿うように１条の太い沈線，その下に三重の平行な斜位の直線的な沈線による菱形文と考えられる文様が施されている。49は上端と下端が破損し，側面には破損の跡がみられず，文様も確認できないため，浅鉢の把手の部分であると推測される。これらは，太めの沈線や赤みの強い器壁など阿高系土器に該当するものと考える。なお，49については縄文後期の南福寺式土器に該当するものと思われ，阿高系土器の１つとして本類に分類した。

Ⅺ類土器（第24図　50 ～ 55）

Ⅺ類土器は，口縁部は大きく外反し，上端部は「く」字形に屈曲し，波状をなす。頸部には，明確な稜がみられる。胴部は小片のみだが，頸部の形状から丸く張り出す深鉢形と想定される。頸部の外面には，「Ｃ」字状の刺突文と，多重の沈線文が施され，沈線の間には磨消縄文が確認できるものもある。内外面ともに丁寧なミガキ調整がなされ，器壁の厚さは0.7 ～ 0.9cm と薄手で，色調は薄橙色である。

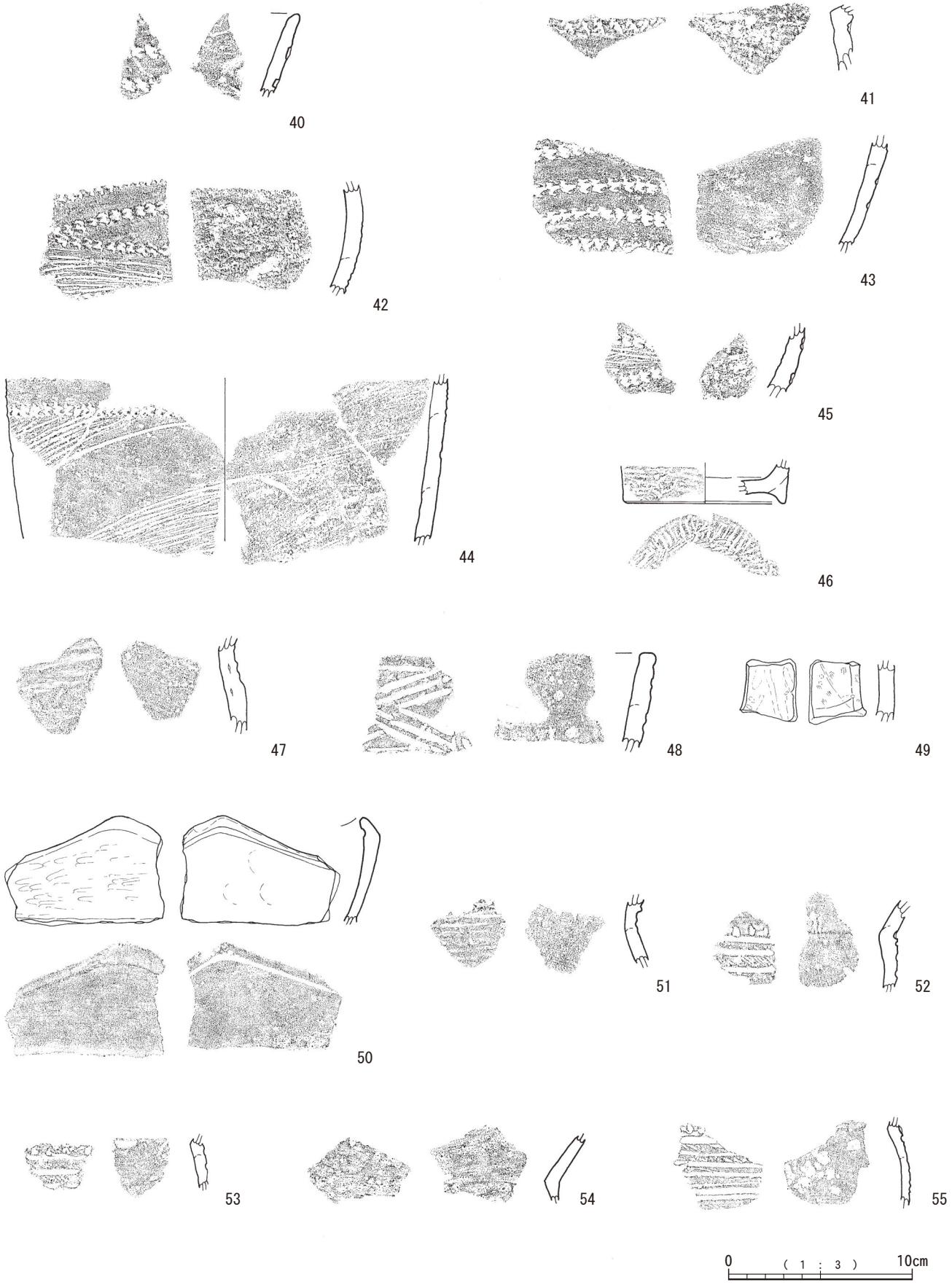
50は口縁部～頸部にかけての破片で，口縁部は「く」字形に屈曲し，波状をなす。外面は無文だが，内面には上端に沿って１条の沈線が施される。51 ～ 55は，頸部から胴部にかけての破片である。51・52は外反する口縁部が一部確認でき，51は摩耗が激しいが，頸部下の外面に横位の沈線がわずかに確認できる。52 ～ 54は頸部に「逆Ｃ」字形の刺突文が横並びに施され，その下に52・53は３条，55は７条の横位の沈線が確認できる。54は外面の摩耗が激しく，文様は確認できない。

Ⅻ類土器（第25図　56 ～ 64）

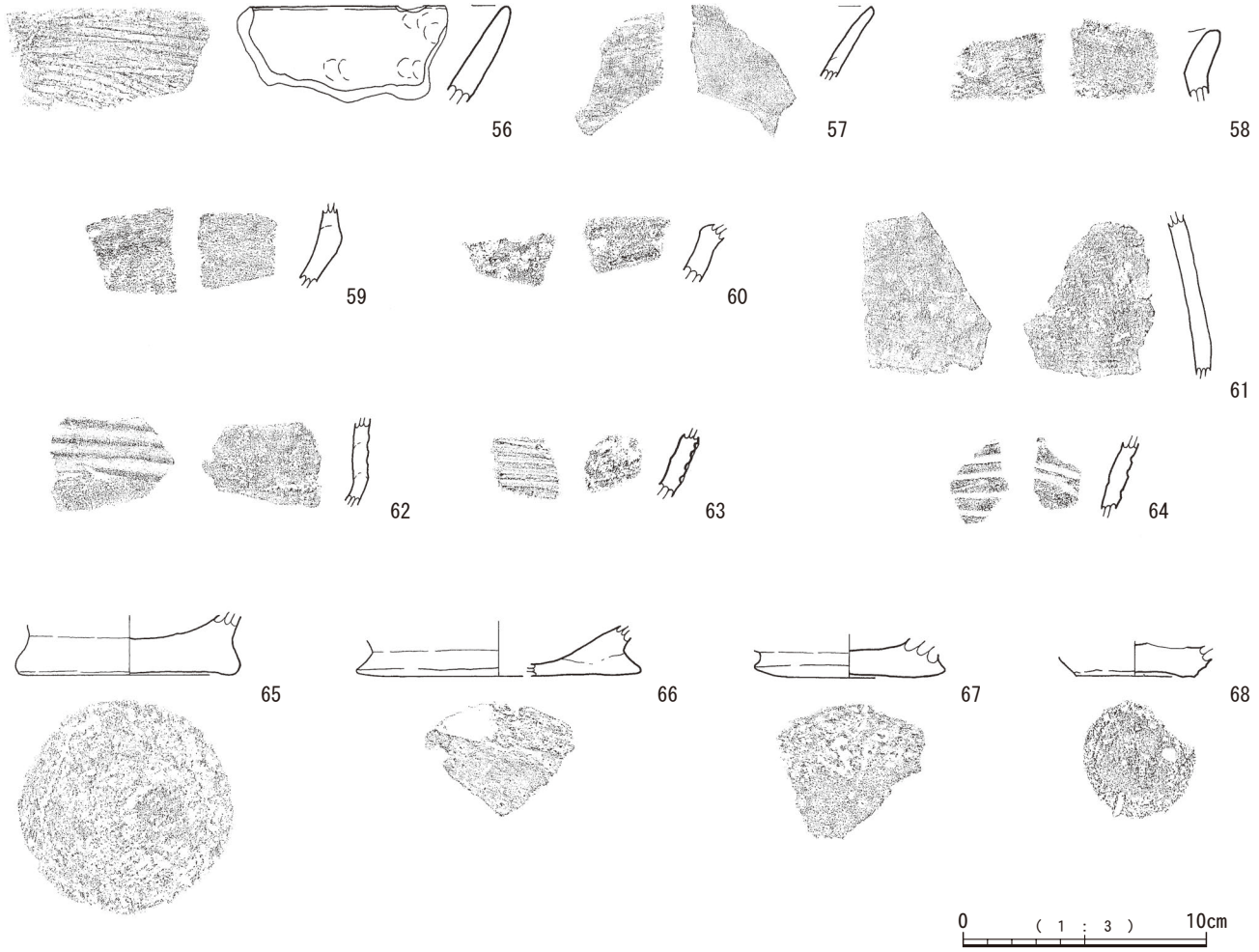
Ⅻ類土器は，詳細が不明の土器を一括して掲載した。多くは縄文時代の後期から晩期の土器と想定しているが，摩耗が激しく，小片も多いため，時期は不詳である。

56 ～ 58は，口縁部の破片である。56は褐灰色の口縁部で，器壁の厚さは上端部が厚さ0.5cm と薄手で，下端部は1.0cm と下に向かって徐々に厚手になる。外面には斜位の沈線が不規則に施され，内面はケズリによる調整が施されている。57は口唇部をわずかに残す口縁部で，灰褐色である。厚さは0.6cm と薄手で，外面上部に3㎜程度の短いスジ状の文様が３，４本確認できるが，ほぼ無文で，内面はミガキ調整である。58は口縁部から「く」字形に外側に向かって屈曲する頸部の小片と思われ，全体的に摩耗が激しく文様は確認できないが，無文であると思われる。59・60は頸部と思われる小片で，59は内側に向かって強く「く」字形に屈曲し，外面に文様は確認できず，内外面とも丁寧なナデ調整がなされ，２㎜程度の砂粒をやや多く含む。60も「く」字形に強く屈曲し，明瞭な稜がみられ，ラッパ状に開く口縁部をもつ器形であると想定されるが，摩耗が激しく欠損部も多い小片のため，詳細は不明である。61 ～ 64は胴部の小片である。61は，厚さは0.6 ～ 0.8㎜と薄手で，灰褐色であり，無文である。62は黒褐色の胴部で，器壁は0.6cm と薄く，外面上部には横位の沈線が３～４条確認できる。強く内側に屈曲する明瞭な稜があり，底部につながっていく浅鉢形の器形と想定される。外面はミガキ調整がなされており，三万田式土器に類似する特徴をもつ。63は赤みが強い色調の胴部の小片で，器壁の厚さは0.8cm とやや薄手で，外面には横位の太さ３～４㎜の明瞭な条痕が４，５条みられる。

64は厚さ0.7cm の小片であるが，外面には横位の条痕文が４条あり，色調も西平式土器と類似するが，内面にもやや斜めの横位の条痕が確認でき，その他の土器に分類した。



第24図　縄文時代の遺物④



第25図　縄文時代の遺物⑤

底部（第25図　65 ～ 68）

ここでは，土器底部の破片のみを一括して掲載するが，形状的には縄文時代後期から晩期のものであると想定している。

65は直径約9.0cm の底部全体の形状が残っているものであり，高さ1.5 ～ 2.5cm が残存する。端部が張り出し，内面はわずかに上げ底になるが，平坦な形状である。66は底部片で，高さ約 1 cm 張り出した台状の平底から胴部が開く形状で，内底面は丸みを帯びる。67は，扁平でわずかに張り出し，内面も平坦に近い形状をもつ。

68は張り出しはなく，胴部からすぼまる器形であると想定され，直径は約4.8cm である。底面の中央部から直径約3.5cm の範囲は上げ底となっており，植物が付着した痕跡が確認できる。

（２）石器

石器については，88点を図化した。掲載にあたっては，縄文時代の遺物包含層から出土したものだけでなく，形態的な特徴から類例があるものなど，縄文時代の石器の可能性が想定されるものを選別し，縄文時代の包含層と分けて，以下の３つに分類して掲載した。

・Ⅲ・Ⅳ層出土の石器（縄文時代の遺物包含層）
・Ⅰ・Ⅱ層出土の石器（古墳～近世の包含層と表土）
・縄文時代以外の遺構内からの出土

また，石器の主な出土地点については，土器と同様に調査区内の南側のＥ～Ⅰ区が中心で，広くまばらに出土しており，調査区の中央から西側にかけての範囲にやや多い傾向がみられ，器種ごとにみても分布に偏りはそれほどみられない。（第41図）。

ア．Ⅲ・Ⅳ層出土の石器

Ⅲ・Ⅳ層は縄文時代の遺物包含層である。先述したように，調査区内は後世の開発の影響を受け，本遺跡のⅢ・Ⅳ層は削平されている範囲も多い。

Ⅲ・Ⅳ層からは，黒曜石を素材とする石器の割合が他の包含層と比べるとやや多く，器種別では，打製石鏃や石皿・台石の割合がやや高い。出土地点については，Ｆ～Ｈ－56～61区に比較的集中する傾向がみられる。

打製石鏃

剝片を素材とし，両側縁部の両面から押圧剥離を施した，小型で三角形状の石器を石鏃とし，欠損品も含めて報告する。なお，形態的な特徴から，下表のⅠ～Ⅲ類及び，ａ～ｃ類の組み合わせで分類した（「天神段遺跡３」（調査センター　2018）の石鏃の分類を参考）。図化した石鏃は，いずれも無茎型である。

石鏃全体の形状
Ⅰ類：長身鏃（側縁部の長さが幅の約２倍ある細長い形状のもの）
Ⅱ類：二等辺三角形鏃
Ⅲ類：欠損品

脚部や抉りの形態
ａ類：脚部の抉りが浅いもの
ｂ類：脚部が直線的に外側に開くもので，脚部の先端が尖っているもの
ｃ類：脚部の抉りがＵ字形で，脚部の先端が平らなもの

※Ⅰ・Ⅱ層出土，遺構内出土の打製石鏃についても同じ分類を用い，以降はこの表を省略する。

Ⅰａ類（第26図　69）

69は安山岩を素材とし，脚部の抉りが浅く，側縁部から脚部に向かって丸味を帯び，幅が細くなる帖地型（大久保型）である。尖頭部の先端は鋭く尖っている。

Ⅰｂ類（第26図　70）

70は針尾系の黒曜石を素材とし，脚部は外に大きく開き，幅が広く，長い。側縁部は直線的で,裏面左側の尖頭部の先端から側縁部に一部欠損がみられる。

Ⅱａ類（第26図　71）

71は安山岩を素材とし，脚部の抉りが浅い形状である。中央部に厚みがあり，側縁部はわずかに湾曲する形状に加工されている。先端はわずかに破損している。

Ⅱｃ類（第26図　72・73）

72は日東系の黒曜石，73は安山岩を素材とし，脚部に「Ｕ」字状の抉りがみられ，やや厚みがある。２点とも形状は類似しているが，72は脚部が内側に向かって丸く加工されるのに対し，73は外側に向かって直線的に広がっている点が異なる。

二次加工のある剥片（第26図　74・75）

黒曜石を素材とし，二次加工を施した剥離痕のある小型の剥片及び剥片で，２点を図化した。

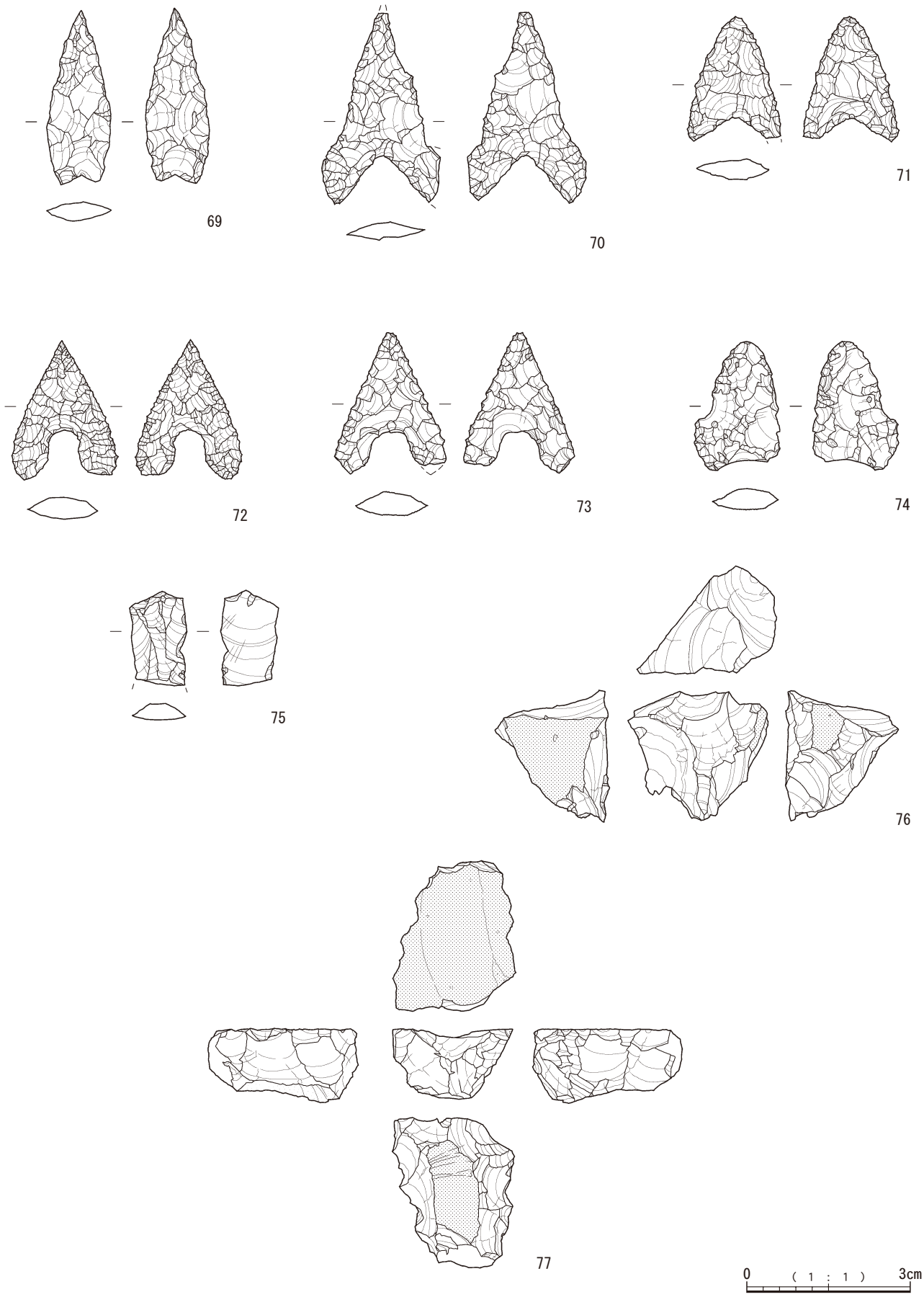
74は，不純物を多く含む日東系の黒曜石製で，両面ともに微細な押圧剥離による成形が行れており，側縁部にもわずかに調整剥離がみられる。石鏃の製作途中に，脚部にあたる部位が欠損し，廃棄された可能性がある。75は腰岳系の黒曜石を用いた，厚さ２㎜の薄手で小型の剥片である。表面は縦方向からの剥離痕が複数みられるが，裏面は平坦な主要剥離面のみである。両縁は鋭い刃状になっているが，調整剥離の痕はみられない。

石核（第26図　76・77）

礫及び分割礫を素材とし，小型の剥片が剥出されたものを石核とし，２点を図化した。76は日東系の黒曜石製で，確認調査の第29トレンチ内のⅤ層から出土した。右側面の一部と左側面から裏面は自然面が残っているが，正面・上面・右側面は多方向から複数回の剥離を行っている。77は光沢の少ない上牛鼻系の黒曜石で，正面・両側面いずれも剥片の剥離が繰り返され，上面は自然面が残る。側縁部はやや細かい剥離痕により刃部状になっていることから，石器として利用した可能性も考えられる。

磨製石斧（第27図　78・79）

素材となる礫に敲打調整を加えて形を整え，砥石で研磨加工された斧状の石器を磨製石斧とし，２点を図化し



第26図　縄文時代の遺物⑥

た。78はやや厚手の安山岩製で，下半部は研磨され，刃部の加工は丁寧で，欠損はみられない。上半部は敲打調整の跡が残り，上端部は破損している。79は砂岩を素材とした欠損品で，側縁部から刃部の中央付近のみが残っているが，非常に丁寧に研磨された鋭利な刃部がある。

敲打痕のある剥片（第27図　80）

こぶし大の中型の礫から剥出した剥片を素材とした１点を掲載した。80は砂岩製で，径約10cm の礫の剥片で，複数の敲打による剥離が確認でき，正面の上下及び左右側縁部にやや細かい剥離，裏面の左側縁部に大きめの剥離，下端部にも細かい剥離が認められる。用途は不明である。

敲石（叩石）（第27図　81・82）

礫を素材とし，全面もしくは部分的に敲打痕が見られ，磨面は不明瞭なものを敲石（叩石）とし，２点を図化した。81は灰色で多孔質の安山岩を素材とし，長さ11.5cm の棒状叩石である。上・下端部に使用痕がみられ，表面や右側面にはわずかに敲打痕が残る。82は被熱を受けたと考えられる赤色砂岩で，上下端部は欠損している，厚さ３～４cm 程度の偏平な板状の礫である。表面と裏面の両面の中央部には敲打による凹みがみられ，凹石にも近い。

磨石（第27図　83・84）

礫を素材とし，全面もしくは部分的に明瞭な磨面を有し，敲打痕が不明瞭なものを磨石とし，２点を図化した。83は多孔質の安山岩を素材とし、やや偏平な円礫で，表・裏面のほぼ全面にやや粗い磨面をもつ。側面に使用痕はみられない。84は砂岩を素材とした肉厚の円礫で，正面２箇所，右側面，左側面，下面，裏面に各１箇所ずつ，部分的に楕円状に研磨され，計６面の磨面をもつ磨石である。磨面の多くが念入りに研磨され，滑らかでわずかに窪んだ面となっており，下面は平ら，裏面はやや粗い磨面となっており，砥石として利用された可能性も考えられる。

凹石

礫を素材とし，偏平な面をもち，原則として円形または楕円形に近い形状で，表・裏面の中央部の一面，または両面に敲打による凹みがあるものを凹石とした。凹みはあるが，板状の角礫など異なる形状の礫は別の器種としてここには含んでいない。なお，凹みの箇所や程度により，以下の４つの類型に分類し，掲載した。

凹みの形状による分類
Ⅰ類：表面だけに凹みをもつもの
Ⅱ類：表・裏面の両方に凹みをもつもの
Ⅲ類：表・裏両面と側面にも凹みをもつもの
Ⅳ類：表・裏面の凹みが非常に浅いもの

※Ⅰ・Ⅱ層出土，遺構内出土の凹石についても同じ分類を用い，以降はこの表を省略する。

なお，凹石の出土数は20個以上と本遺跡の中で最も出土点数が多い石器の１つである。磨敲石の一種として掲載したが，Ⅲ・Ⅳ層からの出土は２点と少なく，他の時代の包含層や中世の遺構内からの出土の方が多いため，縄文時代以外の石器の可能性も否定できない。隣接する諏訪ノ前遺跡でも多数出土しているが，縄文土器の出土はごくわずかであること，いちき串木野市の栫城跡では類似の凹石が大量に出土したが，縄文時代以外の石器の可能性を示唆し，成川式土器を伴う住居跡から検出する例をあげている。こうしたことから，凹石の製作時期，用途等について再考する必要があるが，現段階では言及できない。

Ⅲ類（第28図　85）

Ⅲ類は表・裏両面に凹みをもつもので，１点を図化した。85は，偏平な安山岩の円礫を利用している。両面の中央部が，直径約３mm 程敲打により凹んでいる。左右の側面にも敲打痕があり，特に右側面はほぼ平坦になるほど変形しており，磨石として使われた可能性もある。

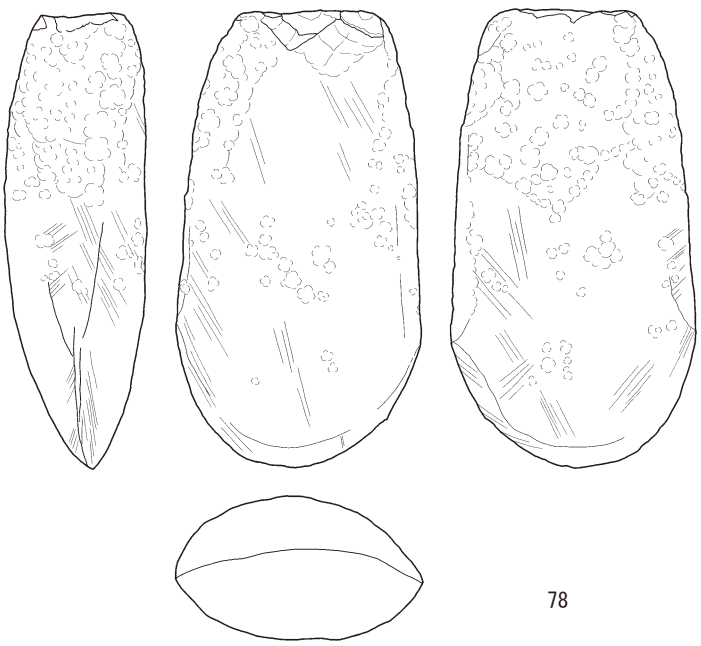
Ⅳ類（第28図　86）

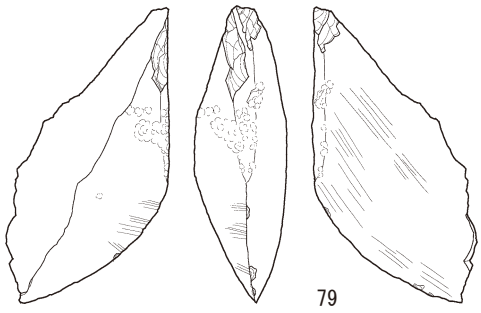
Ⅳ類は，Ⅰ～Ⅲ類と比べ，敲打による凹みが非常に浅いもので，１点を図化した。86は，安山岩を素材とし，偏平な楕円形の礫を利用している。表・裏両面，両側面に敲打痕があり，上下端部に敲打痕はみられない。表・裏面の中央部付近は，硬い石材のためか，深さ１㎜程度のごくわずかな凹みがみられる。

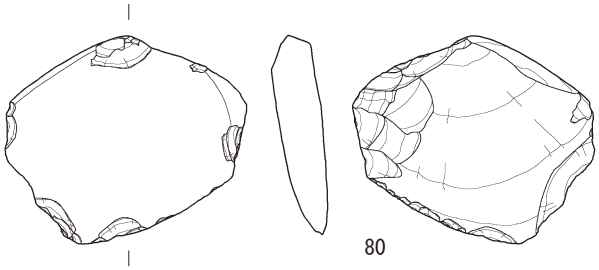
石皿・台石（第28・29図　87～93）

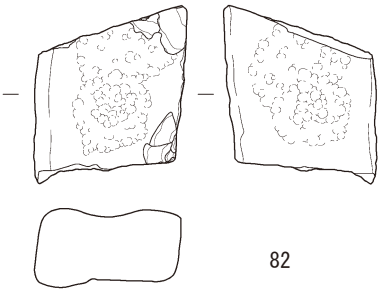
径10cm 以上のやや偏平な角礫・円礫を利用し，磨面や，敲打・研磨による凹面を有するもので，食糧加工を目的としたものを石皿，食糧加工以外の目的で使用されたと考えられるものを台石とし，計７点を図化した。

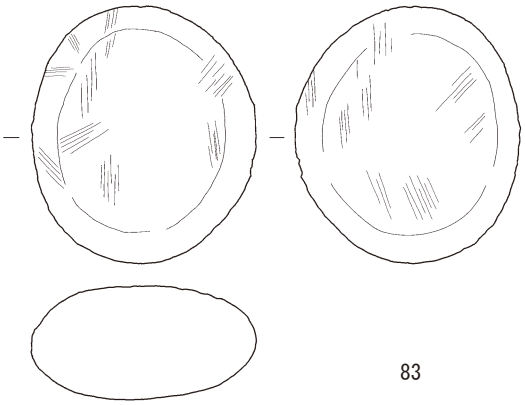
87は，安山岩を素材とする偏平な板状の石皿で，一部が欠損している。表・裏面の中央部に縦長の楕円状にやや浅い凹みがみられ，左側面は破損しているが，右側面には磨面もみられる。88・89は欠損のない完形の石皿で，ともに厚さ約３cm 程度の板状である。88は砂岩製の亜角礫を素材とし，表面全体が研磨され，表面の上部中央はわずかに凹んでいる。89は砂岩製の亜角礫を素材とし，表・裏面の全体が磨面だが，特に表面上部の中央～右側

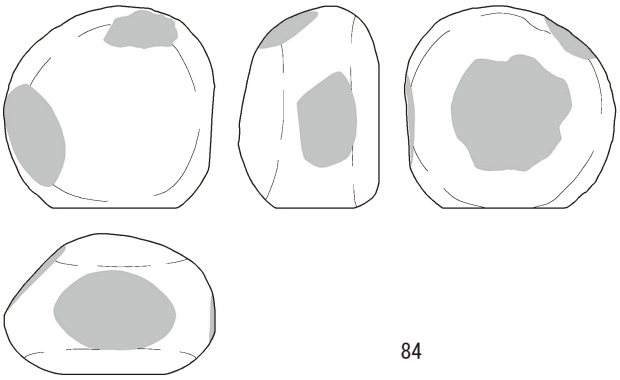








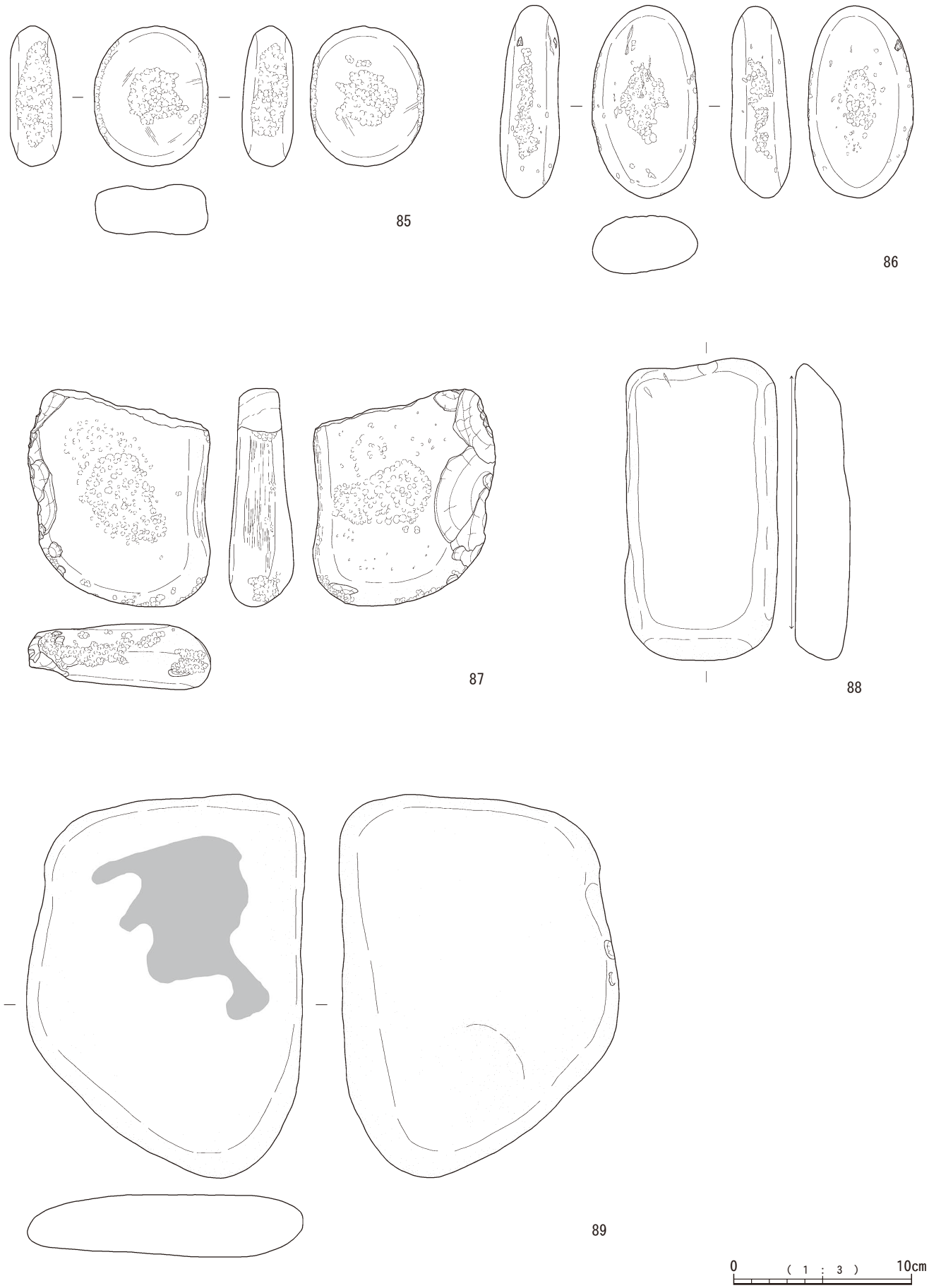




0 (1:2) 5cm

0 (1:3) 10cm

第27図　縄文時代の遺物⑦



第28図　縄文時代の遺物⑧

にかけての範囲は非常に滑らかで丁寧に研磨されている。90は黒色の砂岩を素材とし，表面全体がざらつきが感じられないほど非常に丁寧に研磨されており，右側面や裏面は人工的に切断されたような直線的な断面になっている。91は長軸は約17cm，厚さは約4.5cmあり，側面と下端部は破損しているが，板状の偏平な角礫を素材とする，安山岩製の石皿である。表・裏面ともに平坦で，やや粗めに研磨されている。92は安山岩製の肉厚な円礫を素材とし，表・裏面には偏平な磨面がみられ，表面がやや丁寧に研磨され，石皿として利用されたと考えられる。93は白い不純物を多く含む砂岩を素材とし，長さ・幅約13cm，厚さ８cm，重量約３kgと大型の台石である。表面の広い範囲に摩耗した面がみられるが，全体的にざらつきの少ない石材で，自然面の可能性もある。左右の側面は部分的に欠損し，表面下部等には明赤褐色に変色した部分がみられる。

砥石（第29図　94）

素材となる礫の平坦面を利用し，明瞭な研磨の痕跡が認められるものを選別し，１点を図化した。なお，変性流紋岩製の砥石（天草砥石）については，縄文時代の可能性が低いと考え，別項で紹介する。

94は赤色砂岩製で，部分的に赤黒く変色しており被熱痕がうかがえる。側面はいずれも破損しているが，長さ・幅ともに10cm以上，厚み約２cmの偏平な形状で，表面全体が丁寧に研磨された滑らかで平坦な摩耗面となっている。右側面には幅５㎜以内の細長いスジ状の穴が複数あいているが，その周りの平坦面は摩耗している。石材自体が，薄い層が節理状に重なり合ってできているため，側面の穴もこれに伴うものであると考えられる。その他に，磨面はみられない。裏面の一部には，炭化物が付着している。

石錘（第29図　95）

楕円形で薄い偏平の礫を素材とし，左右の両側縁部の一部を打ち欠いたものを石錘とし，１点を図化した。

Ⅲ層出土の１点のみで，他の層や遺構内からの出土はなかった。95は安山岩を素材とし，幅8.5cm，厚さ1.5cm程度の偏平な円礫で，表・裏面ともに長軸方向の両面からの打欠き部形成の剥離が施される。

イ　Ⅰ・Ⅱ層出土の石器

Ⅰ層（表土）及びⅡ層（古墳から近世に該当）から出土した遺物で，縄文時代に製作された石器，または形態的に縄文時代の石器と想定されるものを抽出し，掲載した。出土地点は，Ｆ～Ｈ－45・46区やＨ・Ⅰ－52・53区に多く，器種別では凹石が11個と，本遺跡で出土した凹石全体の50％以上を占める。

打製石鏃

打製石鏃の形態的な特徴による分類については，前項（Ⅲ・Ⅳ層出土の石器）を参照とされたい。

Ⅱa類（第30図　96・97）

96・97は，いずれも安山岩を素材とし，脚部の抉りが浅く，やや横幅が広い形状で，厚さは３㎜と薄く，側縁部は鋸歯状になっている。96は尖頭部から脚部にかけて側縁部が湾曲し丸味を帯びながら脚部に向かって広がり，五角形鏃に近い形状となっている。脚部の片側が，欠損している。97は側縁部が直線に近く，わずかに湾曲しており，先端が欠損している。

Ⅲ類（第30図　98）

Ⅲ類は欠損した石鏃の一部と想定されるものである。98は日東系の黒曜石を素材とし，脚部を欠損し，尖頭部のみが残っている石鏃と思われる。先端や表面にも一部欠損がみられるが，細かい成形剥離を全面に施している。

石錐（第30図　99）

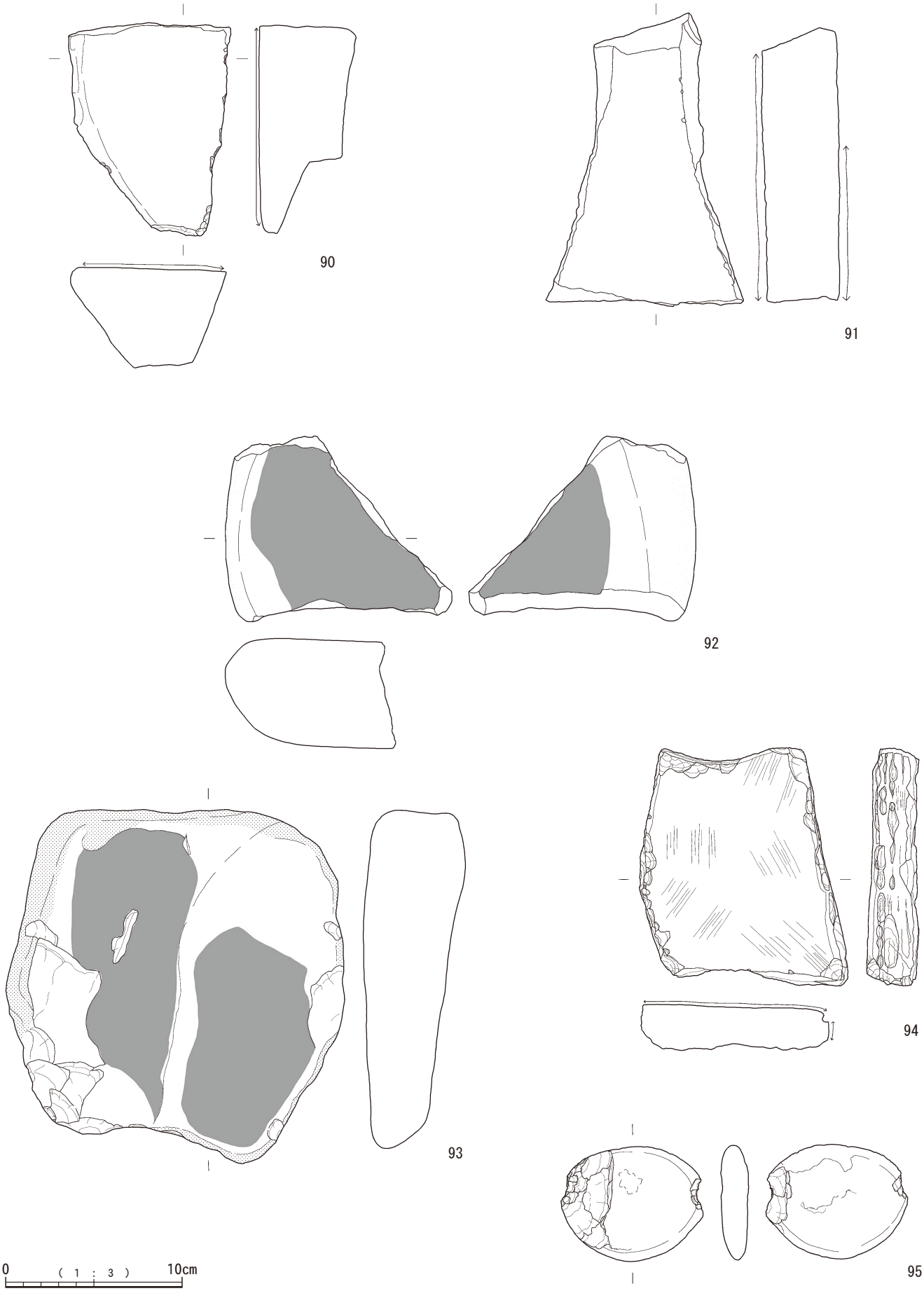
剥片の一端を鋭く尖らせて，錐状に加工したものを石錐として，１点を図化した。99は黒色のチャートを素材としたやや肉厚な剥片で，長さ２cm程度のものである。表面は成形剥離を丁寧に行い，裏面は主要剥離面を残している。側縁から先端部には微細な加工を施し，錐部を作っている。錐部の使用痕は，明確に確認できない。

スクレイパー（第30図　100）

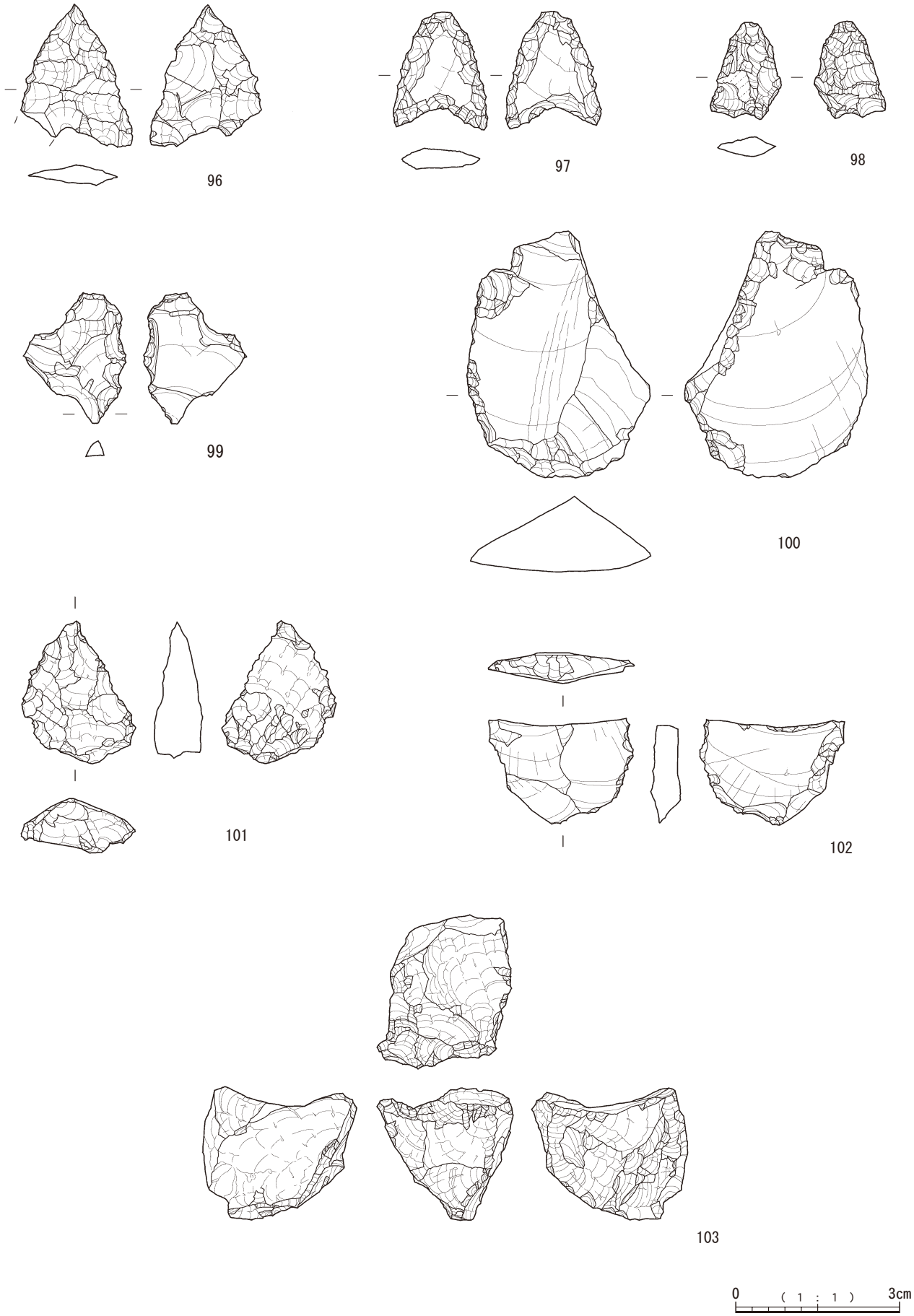
剥片の一端に二次調整を行い，刃部を形成したものをスクレイパーとし，１点を図化した。100は，長さ4.5cmの玉髄の剥片を素材とし，正面の左側面から下端部にかけての側縁部には細かい押圧剥離による調整を施して，刃部を形成している。小型のエンドスクレイパーであると考えられる。正面の左上縁部は，使用による欠損と思われ，裏面の上端部～左側面にも細かな調整剥離がみられる。

二次加工のある剥片（第30図　101・102）

黒曜石の二次加工を施した剥離痕のある剥片で，２点を図化した。101は不純物を多く含む日東系の黒曜石を素材とし，表面に細かな剥離が連続的に施され，裏面は



第29図　縄文時代の遺物⑨



第30図　縄文時代の遺物⑩

部分的に細かな剥離がなされているが，上半部は主要剥離面も残っている。尖頭部をもち，側縁部は左右とも細かい調整剥離がなされている。石錐または鏃を意識した形状だが，側縁部左下が欠損しており，製作過程で廃棄された可能性がある。102は，腰岳系の黒曜石を素材とする。表面は大きな剥離の段階で終わっており，裏面はほぼ主要剥離面で，裏面の下端部は成形剥離がみられる。側縁部や上部には微細な二次加工がわずかにみられ，刃部状になっている。素材剥片の切断面には，複数の微細な剥離がみられる。

石核（第30図　103）

小型の剥片を剥出したと考えられる，石核１点を図化した。103は，非常に多くの不純物を含む日東系の黒曜石で，正面には細かい剥離痕が多く，左側面・上面には比較的大きめのの剥離痕がみられる。右側面の中央部には大きな半透明の不純物の脈が入りこみ，剥離が円滑に進まなかったことがみてとれる。

磨製石斧（第31図　104・105）

素材となる礫に敲打調整，研磨加工した磨製石斧２点を図化した。104は淡い灰色のホルンフェルスを素材とし，全面が丁寧に研磨されているが，両側面には敲打調整の跡が残る。刃部は使用痕とみられる欠損がみられるが鋭く研磨加工されていはる。105は頁岩を素材とし，上半部は破損しているが，全面が丁寧に研磨されており，側縁部には敲打調整の跡が見られ，刃部は非常に鋭く研磨加工され，欠損も少ない。

剥片（第31図　106）

１点を掲載した。106は頁岩を素材とし，厚さ１cm程度で欠損部が多く，全体像は不明である。表面と裏面は大きな剥離が多く，表面の下部や裏面の上端部周辺や中央部は砥石で丁寧に研磨したような非常に滑らかな磨面をもつ。石斧の一部などの可能性も考えられる。

磨石（第31図　107）

明瞭な磨面を有する磨石１点を図化した。
107は安山岩を素材とし，直径約５cmで，球体に近い肉厚な円礫を利用している。部分的な細かな欠損もあるが，全面的に粗い磨面がみられるが，左側面のみ比較的使用され，なめらかな磨面となっている。

磨敲石（第31図　108・109）

礫を素材とし，全面もしくは部分的に明瞭な磨面を有し，平坦面や側縁に敲打痕がみられるものを磨敲石として，２点を図化した。108・109はともに多孔質の安山岩を素材としている。108は，楕円形で肉厚の形状で，欠損部には敲打による使用痕が残る。表・裏面と側面は磨面がみられ，裏面はわずかだが敲打による凹みも確認できる。109は欠損しているが棒状を呈する形状と考えられ，裏面は被熱により黒く変色している。表面中央部には敲打痕，上端部は敲打痕と磨面があり，繰り返し使用した痕跡がみられる。

凹石

礫の中央部を敲打し，明瞭な凹みをもつ凹石11点を図化した。凹石の分類については，前項（Ⅲ・Ⅳ層出土の石器）を参照とされたい。

Ⅰ類（第32図　110）

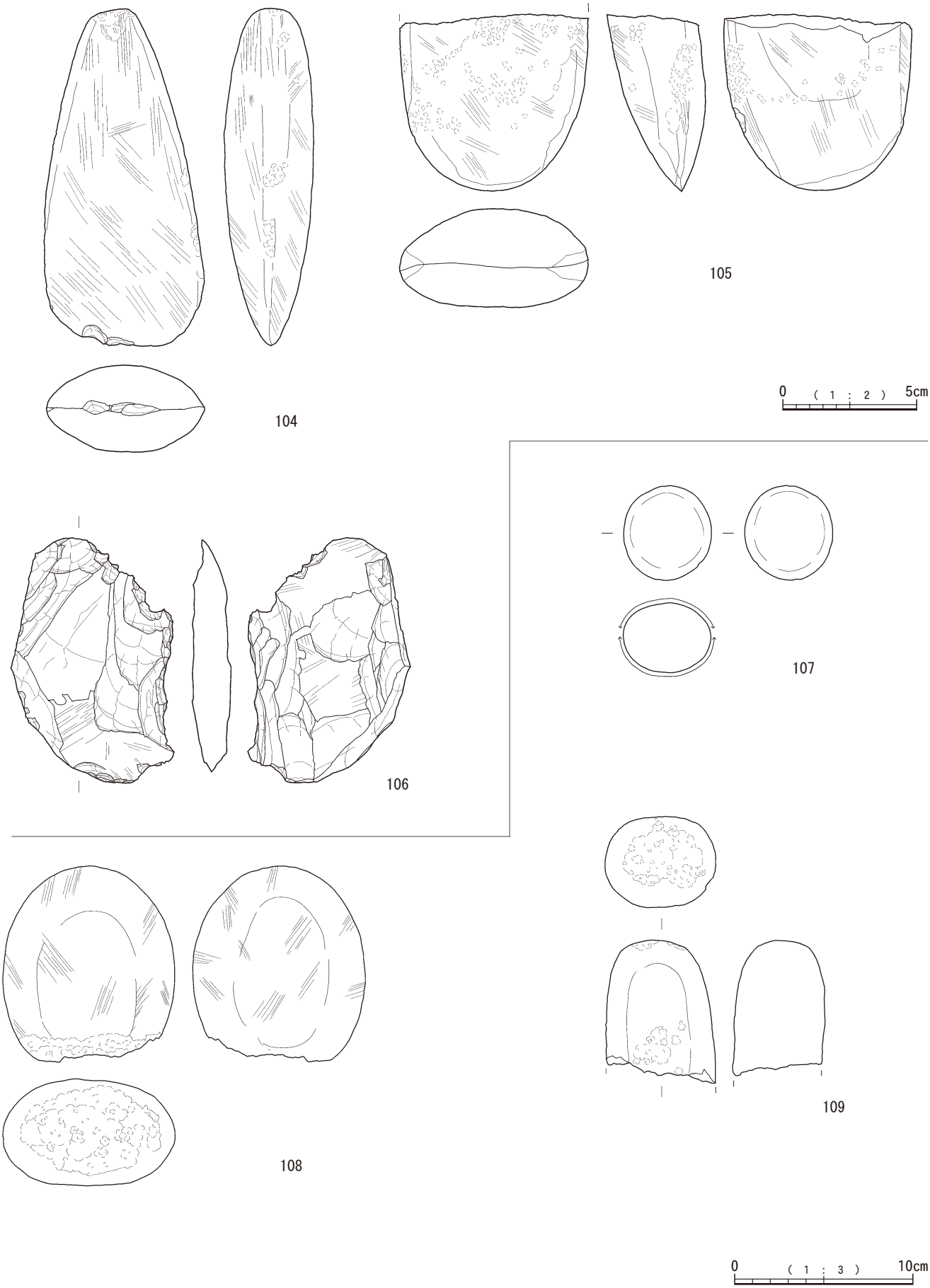
Ⅰ類は表面にのみ凹みをもつもので，１点を図化した。110は安山岩を素材とし，楕円形で厚みのある形状だが，表面は偏平な面となっており，多くの敲打痕をもつ。裏面は不定形で敲打痕もほぼないが，部分的に磨面があり，磨敲石としての特徴をもつ。

Ⅱ類（第32図　111 ～ 114）

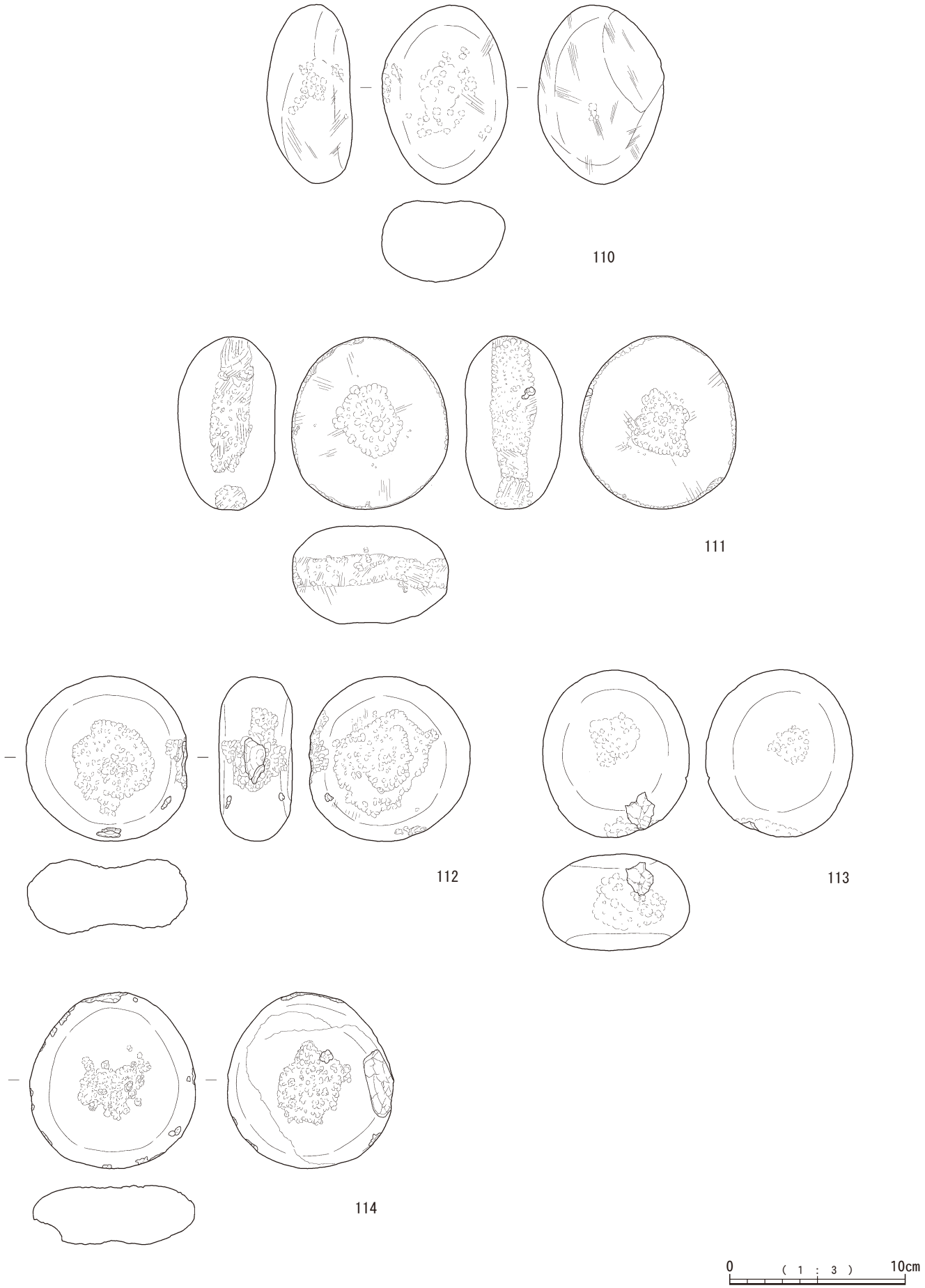
Ⅱ類は表・裏両面に凹みをもつもので，４点を図化した。石材は111が砂岩，112 ～ 114は多孔質の安山岩を素材としている。111と113は，ともに楕円形で肉厚の球状で，特に111は重さ700ｇ以上と最も重く，石材も硬質である。中央部の凹み以外に，側面全体にも敲打による使用痕がみられる。113は表・裏面の中央部の凹みはやや浅い。下面にも敲打痕があり，下端の欠損部は敲打により破損したものと考えられる。112・114は両面に偏平な面をもつ，やや平たい円礫である。112はやや赤味を帯びたやや肉厚の安山岩製で，両面に顕著な凹みが見られ，右側面も敲打により変形している。114は厚さ3.4cmとやや薄い円礫で，裏面は平坦でなく，節理や破損により凹凸がみられるが，表面と同様に中央部に敲打による凹みが確認できる。上部にも敲打痕がみられる。

Ⅲ類（第33図　115 ～ 119）

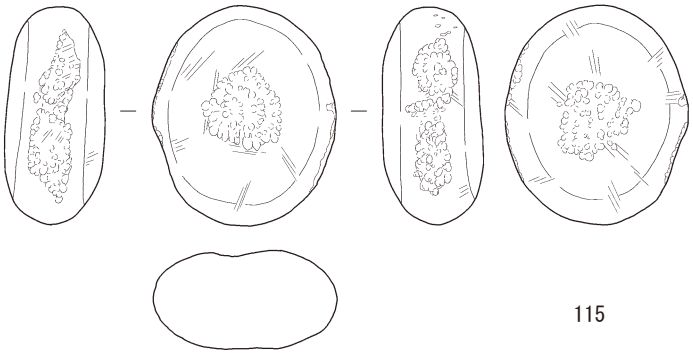
Ⅲ類は表・裏両面に加え，側面にも顕著な凹みがみられるもので５点を図化した。石材は115 ～ 117，119は安山岩製で，118のみ凝灰岩である。形状は偏平な楕円形で，上端部や下端部にも凹みがあるものも多い。115は楕円形の偏平な形状で，左右の側面の上半部・下半部にそれぞれ敲打による凹みがあり，凹み以外の両面と上下面はほぼ磨面になっている。116は石鹸状の形状だが，敲打や研磨によって繰り返し使用されている。表・裏面，両側面と上下面，それ以外の箇所にも著しい凹みがみられ，側面の凹みは左右とも同じく，斜め方向に擦られた様子がうかがえる。117は楕円形の棒状で，やや偏平で赤味を帯びた安山岩製である。表・裏両面と左・右両側面にも顕著な凹みが見られ，下端部には敲打痕が確認でき，



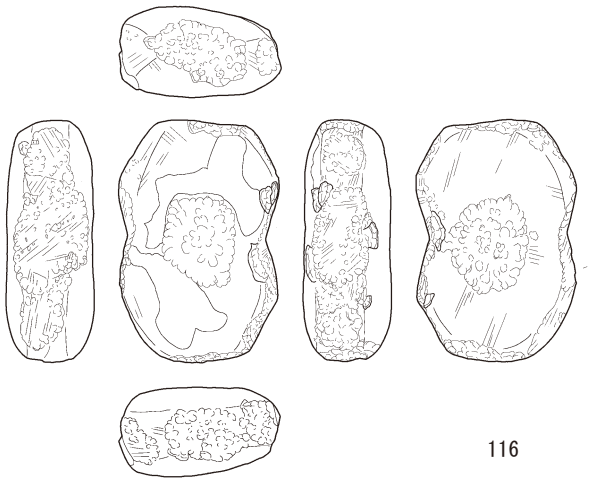
第31図　縄文時代の遺物⑪



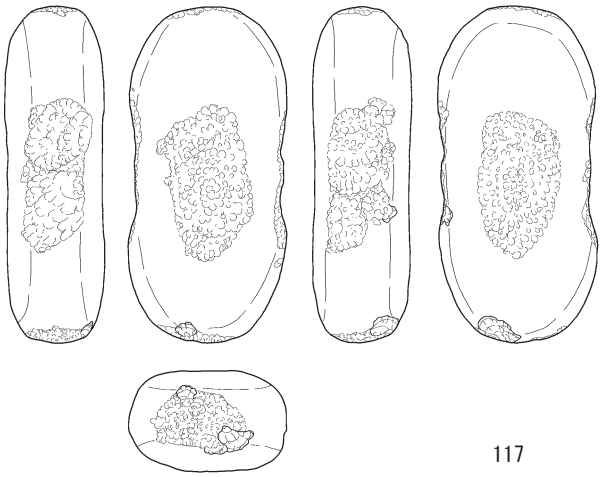
第32図　縄文時代の遺物⑫



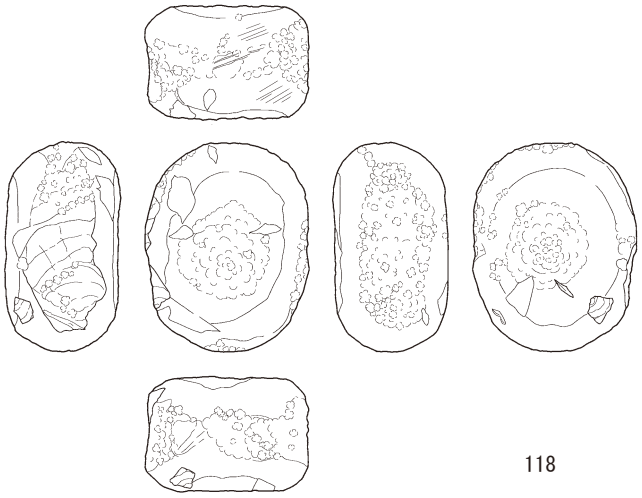
115



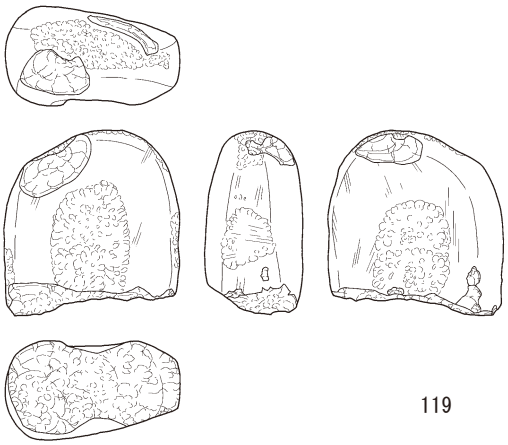
116



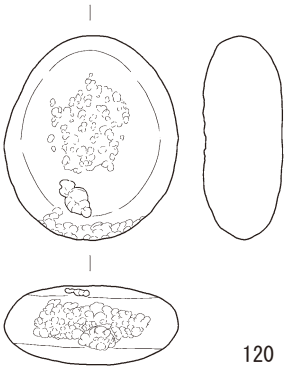
117



118



119



120

0 (1:3) 10cm

第33図　縄文時代の遺物⑬

ハンマーのように利用したと考えられる。118は凝灰岩製で，楕円形のやや肉厚の円礫を素材とする。表・裏面中央部は敲打により約８㎜と深く凹み，左・右側面は敲打により偏平になるほど使いこまれ，凹みをもち，上・下面は敲打痕がみられるが凹みはなく，擦った痕跡は確認できない。119は上端部２か所が破損し，下半部は欠損しているが，もとは偏平でやや細長い楕円形であったと考えられる。中央部は敲打による顕著な楕円形の凹みが両面にあり，右側面にも摩耗した凹みがみられ，裏面の左半分には磨面が残る。上面には敲打痕，下面は破損した断面を利用して敲石として再利用した敲打痕がある。

Ⅳ類（第33図　120）

Ⅳ類は凹みがごく浅いもので，１点を図化した。120は表は灰褐色，裏面は赤褐色で赤味が強く，硬質で偏平な安山岩製の円礫を素材とする。表面の中央部に敲打痕が多くみられるが，表面が擦りとられた程度のごく浅い凹みがある。裏面は敲打痕はなく，下面には敲打痕がみられる。

石皿・台石　（第34図　121 ～ 123）

石皿・台石として計４点を図化した。121・122は赤色砂岩製で欠損部のある石皿の破片であるが，形状や使用痕に共通する点がみられる。121は赤味が強く，表・裏両面の中央部に敲打による顕著な凹みがみられ，表面には２か所，裏面は１か所の凹みがある。右側面の下半部や左上半部は丁寧に研磨され，砥石のように滑らかな磨面がみられる。上面・左側面にも局所的だが同様の滑らかな部分がわずかに確認できる。122はにぶい橙色で，121より一回り小さいが同形状で，121と同じく凹みが表面に２か所，裏面に１か所，上面・左側面に滑らかな磨面をもつ点も類似している。表面の凹みは掻き出し口が右側に延びているようだが，欠損しているため断定できない。また裏面の凹み周辺は磨面があり，左側面中央部は敲打痕もみられる。121，122の側面の磨面は，石皿とは異なる用途で使用された可能性もある。123は肉厚の砂岩製で，表・裏両面の中央部に敲打痕によるやや浅い凹みをもち，側面には使用痕はみられない。121 ～ 123は円礫ではないが，両面に凹みをもつ凹石的様相をもつ。

砥石（第34図　124 ～ 126）

素材となる礫の平坦面に研磨の痕跡が認められるもので，３点を図化した。石材はすべて砂岩である。124，126は，厚さ１cm 程度の偏平な形状で，裏面など大部分が破損しているが，表面や上面に摩耗面が認められる。125は礫の表面に褐色のスジが複数入った砂岩で，表・裏面だけでなく両側面に摩耗面が認められ，表・裏面の中央部には敲打痕もみられる。

軽石製品（第35図　127・128）

軽石を素材とし，研磨などの加工痕が残るものを軽石製品として，２点を図化した。２点とも表面や断面が淡い黄褐色の軽石である。127は径６cm で，表面・下面・右側面それぞれに平坦な磨面がみられ，裏面は自然面と考えられる。128は径3.5cm，厚さ0.7㎜ほどの小片で表・裏面に摩耗面がみられる。２点とも加工痕があるが用途は不明である。

その他　（第35図　129）

その他の石器・石製品として１点を図化した。129は赤色砂岩を素材とし，長さ・幅約８cm，厚さ約３cm である。中央部には穿孔がみられ，表面は平坦で，一部破損もあるが全体的に滑らかな磨面になっている。孔は表面から裏面にかけて徐々に径が大きくなり，表面では直径1.5cm，裏面は2.5cm あり，孔の内部面は研磨されている。裏面や側面は破損していると考えられ，全体像や石器の用途は不明である。

ウ　縄文時代以外の遺構内から出土した石器

ここでは，中世から近世の遺構内から出土した石器を紹介する。その多くが中世以降の溝跡（溝状遺構１・２・４・６号）の埋土から出土したもので，土坑やピット出土のものも含む。縄文時代に製作されたと思われる石器，または形状的に縄文時代の石器に類似するものを抽出し，掲載した（※出土遺構については第13表の観察表を参照）。

打製石鏃

打製石鏃の形態的な特徴による分類については，前項（Ⅲ・Ⅳ層出土の石器）の説明を参照とされたい。

Ⅲ類（第36図　130）

欠損した石鏃と想定されるもの１点を図化した。130は日東系の黒曜石を素材とし，尖頭部が欠損した石鏃の一部と考えられ，左右の側縁部は細かい調整剥離により加工され，脚部の抉りは非常に浅い。基部表面の中央部がやや盛り上がり，細かな成形剥離がみられるが，裏面は平坦で，主要剥離面をそのまま利用している部分が多い。

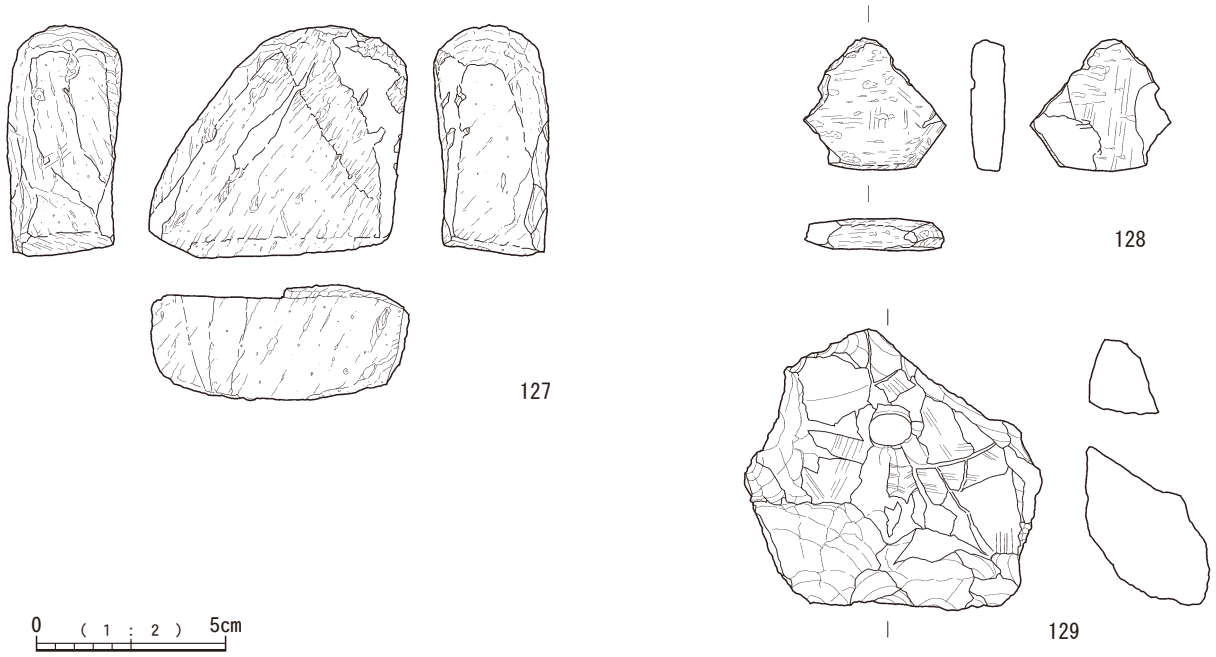
磨製石斧（第36図　131 ～ 133）

素材となる礫に研磨加工した磨製石斧３点を図化した。131は溝状遺構４号から，132・133は溝状遺構１号の埋土から出土したものである。

131・132はともに細長く偏平な頁岩を，素材としている。

131はほぼ完形で，長さ約９cm，幅約3.5cm と小型の細長い形状で，刃部は胴部幅よりもやや狭く，裏面下端

第34図　縄文時代の遺物⑭



第35図　縄文時代の遺物⑮

部だけを研磨加工して刃部を形成した石斧である。132は胴部～刃部のみの破損品で，長さ約８cm，幅4.5cmの短冊形のである。刃部周辺は表・裏面から丁寧に研磨され刃部が形成されているが，欠損が複数みられる。133はやや厚みのある細長い砂岩を素材とした，基部～胴部のみの破損品で，刃部が残っていれば，約12～13cmの石斧と想定される。胴部に比べ，基部が非常に細い乳棒形の石斧である。表面は全体的に摩耗し，部分的な剥落も多く，十分な研磨の度合い・状況は確認できない。

打製石斧（第36，37図　134・135）

偏平な礫を素材とし，剥離成形により刃部を作出した土堀具と想定されるものを打製石斧とし，２点を図化した。134は溝状遺構２号から，135は溝状遺構４号から出土している。134は砂岩を素材とした破損品で，側縁部は柄に装着するためと考えられるやや浅い抉りがみられ，鍬のように使用したと想定される。135は頁岩製で，表・裏面を成形加工し，下端部はやや細かく調整を施し，鋭い刃部を形成しており，スクレイパー等の可能性も考えられる。側縁部もやや鋭く加工され，基部は破損している可能性がある。

敲石（叩石）（第37図　136・137）

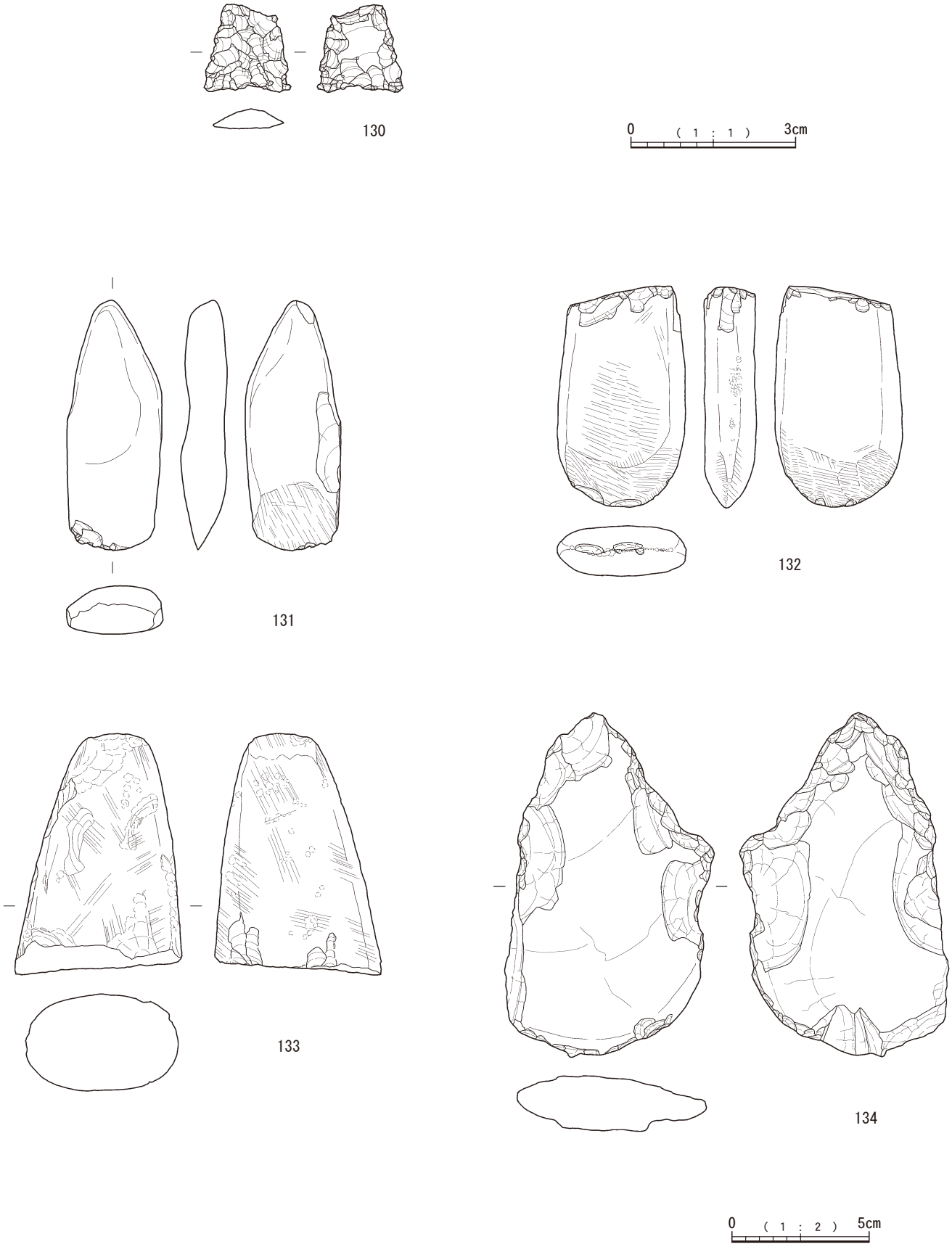
全面または部分的に敲打痕をもち，磨面は不明瞭な敲石（叩石）２点を図化した。136は溝状遺構１号から，137は掘立柱建物１号のピットから出土し，２点とも細長い形状の多孔質の角閃石安山岩を素材とする。136は細長く偏平な楕円形の礫を素材とし，下面に使用痕がみられる。左右の側面には２か所ずつ敲打または剥離による凹みをもつ。137は上半部が欠損しているが，下面に使用痕があり，叩石として利用されたものと考えられる。

磨石（第37図　138）

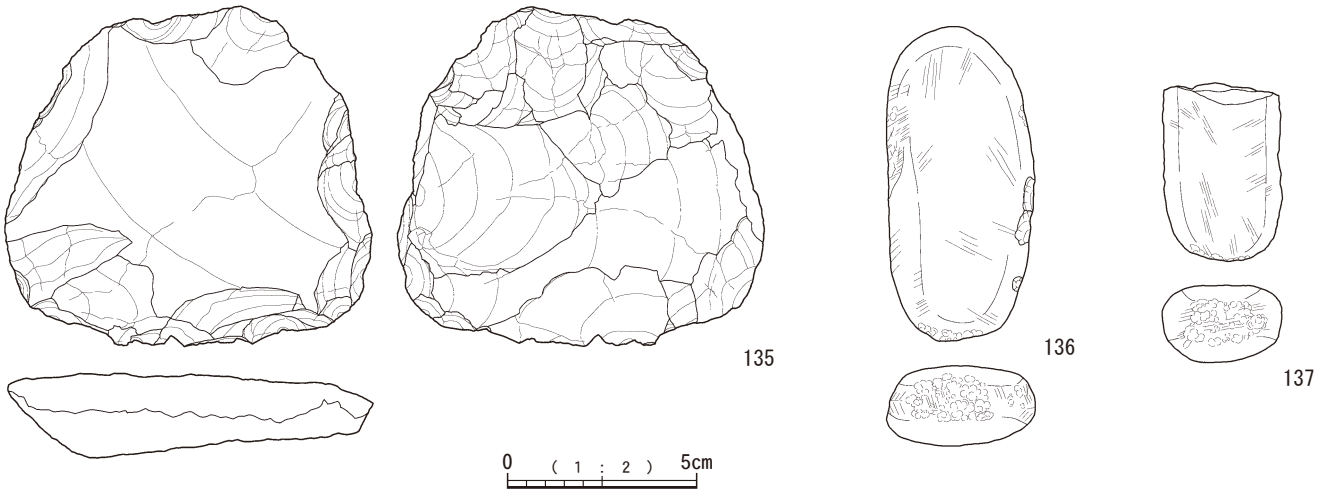
明瞭な磨面を有する磨石１点を図化した。138は溝状遺構６号から出土し，肉厚でやや偏平な安山岩の円礫を素材とする。表・裏面や側面は全体的にわずかに磨面がみられる。

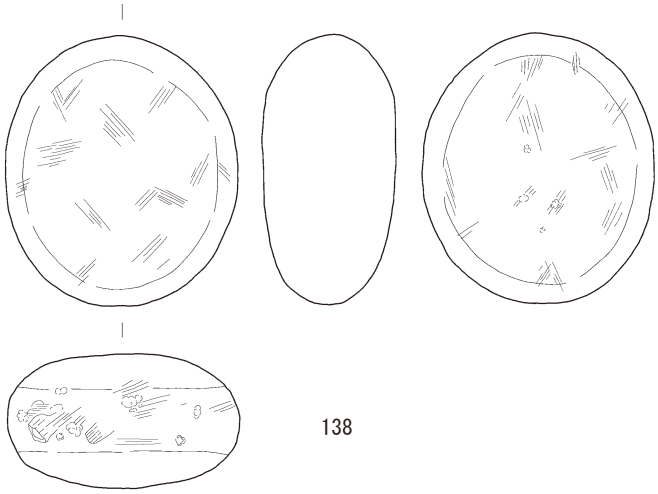
磨敲石（第37図　139～141）

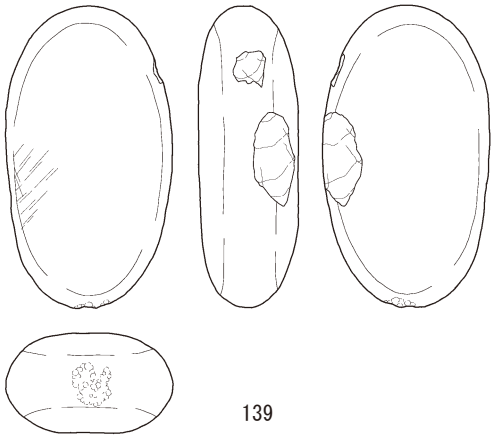
礫を素材とし，明瞭な磨面を有し，平坦面や側面に敲打痕がみられるもの３点を図化した。139は溝状遺構１号，140は溝状遺構５号から，141はピット（SP3264）から出土したもので，安山岩製である。139はやや細長い楕円形の礫を素材とし，両面の中央部付近を除いて，ほぼ全面がわずかな磨面となっており，下面は敲打痕がみられる。140は偏平な円礫を素材とし，表・裏面や側面の多くにわずかな磨面がみられ，右側面のみ敲打痕がみられる。141は細長く肉厚の楕円形の礫を素材とし，全体的によく利用された磨面で形成されている。両面の中央部付近は敲打の繰り返しによる浅い凹みがあり，上面にもわずかに敲打痕が残り，凹石的様相をもつ。

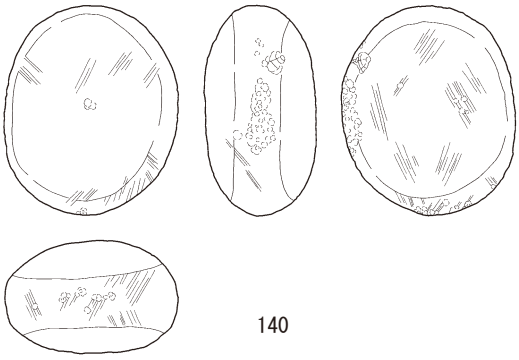


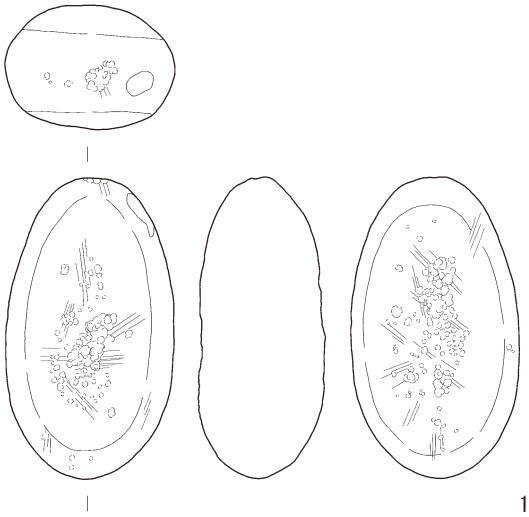
第36図　縄文時代の遺物⑯





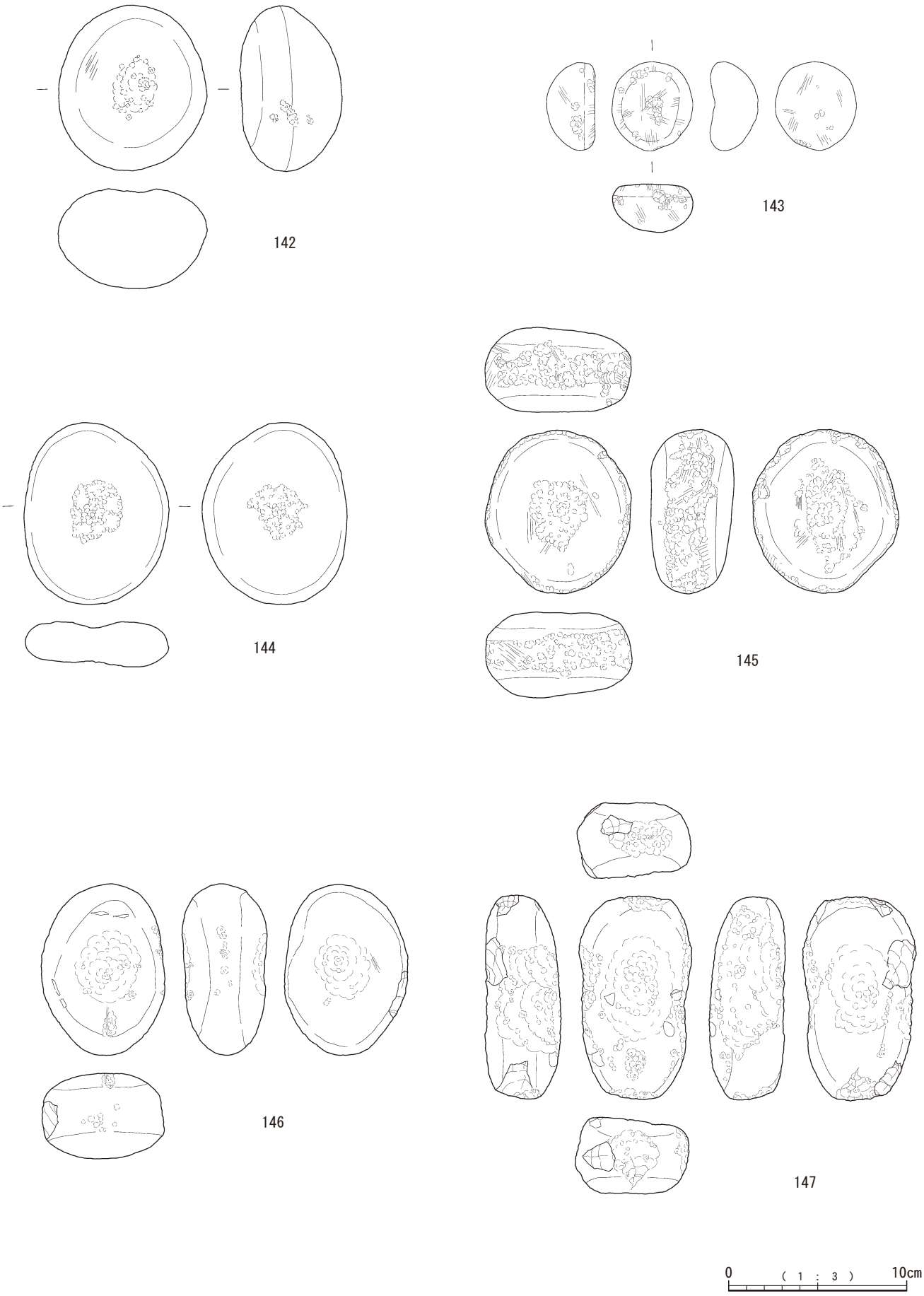






0 (1 : 3) 10cm

第37図　縄文時代の遺物⑰



第38図　縄文時代の遺物⑱

凹石

礫の中央部を敲打し，明瞭な凹みをもつもの９点を図化した。凹石の分類については，前項（Ⅲ・Ⅳ層出土の石器）を参照とされたい。

Ⅰ類（第38図　142・143）

Ⅰ類は表面にのみ凹みをもつもので，２点を図化した。142・143はともに多孔質の角閃石安山岩の円礫を素材とし，表面だけが偏平で，その中央に凹みがみられる。142はこぶし大の円礫で肉厚，表面の中央部に約３cmほどの敲打による凹みをもち，裏面は中央部が丸く盛り上がっており，使用痕はみられない。143は直径約4.5cmの小さく厚みのある円礫で，表面は全体的に凹んでおり，中央に敲打痕が見えるが，その周辺は磨面になっている。下面にも敲打痕がある。

Ⅱ類（第38図　144 ～ 146）

Ⅱ類は表・裏両面に凹みをもつもので，３点を図化した。144・145は多孔質な角閃石安山岩製，146は凝灰岩製である。144・146は溝状遺構４号から，145はピット（SP2439）から出土したものである。144は厚さ約２cmの偏平な円礫を素材とし，表・裏面に顕著な敲打痕と凹みをもち，側面には使用痕はみられない。145は厚さ約4.5cmの肉厚な円礫を素材とし，両面に顕著な凹みをもつ以外に，側面全体も敲打により部分的に欠けた結果，変形し，いびつな形状である。146は表面の凹みは深く，右側面も敲打により変形し，やや偏平な面となっている。

Ⅲ類（第38，39図　147・148）

表・裏両面に加え，側面も顕著な凹みがみられるもの２点を図化した。147・148はともに溝状遺構１号から出土したものである。147は細長い楕円形でやや肉厚な安山岩を素材とし，表・裏面と両側面は非常に深く凹んでおり，上面・下面も敲打による破損がみられ，各部位を繰り返し使用した痕跡がうかがえる。148は偏平な楕円形のホルンフェルスを素材とし，硬い石材のためか，両面の中央部と左右の両側面の凹みはやや浅いが，側面は全体が平坦になるほど使い込まれており，特徴のある凹石である。

Ⅳ類（第39図　149・150）

凹みがごく浅いもの２点を図化した。149・150はともに溝状遺構１号から出土したもので，150は埋土１で検出した石列から出土したものである。石材は，２点とも安山岩製である。149はやや厚手の楕円形の礫を素材とし，両面に偏平な面を持ち，その中央部は敲打によるわずかな凹みがみられる。また凹みはないが，左右側面も多数の敲打痕があり，部分的に欠損部もみられ，敲打痕の周辺は磨面が認められる。150は偏平な直径15cm以上の大型の凹石で，両面の中央部は敲打痕が残り，わずかに凹んでいるが，側面には使用痕はなく，磨面もみられない。

石皿・台石　（第39・40図　151 ～ 154）

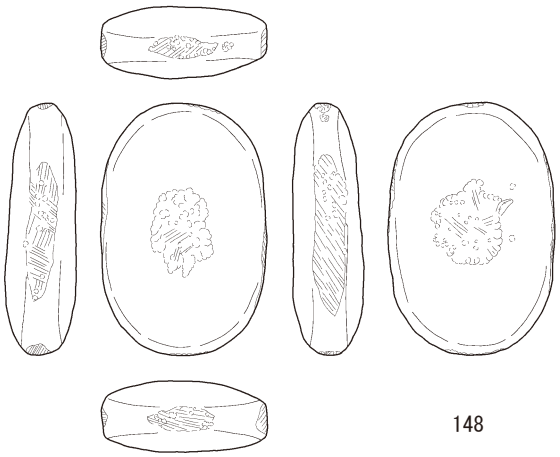
石皿・台石として計４点を図化した。151が土坑４号から，152は溝状遺構１号の石列，153は溝状遺構１号，154はピット（SP2322）内から出土したものである。151は赤色砂岩製で，直方体に近い板状の石皿で，下半部は欠損している。表面は平坦で，ほぼ全面が使用によって滑らかな磨面となっており，中央部は擦り減ったようになだらかに凹んでいる。中央部付近は敲打痕もみられる。裏面はゴツゴツとしているが，左下半部が滑らかな磨面，左側面も敲打痕とやや滑らかな磨面，右側面には敲打痕がみられる。152は，多孔質の安山岩製の石皿の破片で，全体的に摩耗しているものの，表面の右下半部はやや滑らかな磨面が残っており，もとは全面が磨面であったと想定する。153は，板状の砂岩製で下半部が破損した台石と考えられ，表・裏両面の中央部付近に多くの敲打痕をもつ。154は，安山岩製の円礫で，左半部が破損している。径約31cm，厚さ約7.5cm，重さ５kg以上の大型の石皿で，表面上部には楕円形に近い深い凹みをもち，その凹みを中心に広い範囲がなだらかに凹んだ磨面がみられる。裏面はやや反り返るような形状で，自然面であると考える。

砥石（第40図　155）

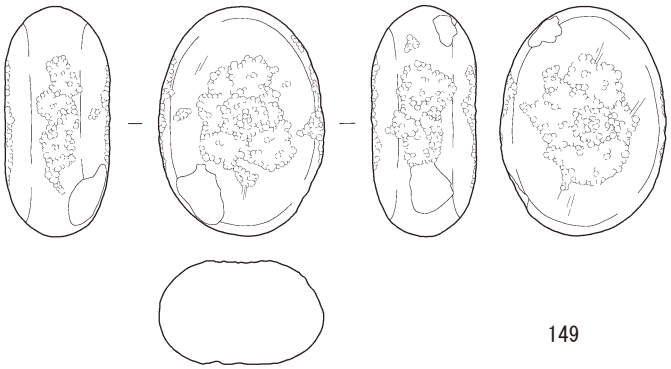
素材となる礫の平坦面に，研磨の痕跡が認められるもの１点を図化した。155は溝状遺構１号から出土し，薄手で板状の赤色砂岩製である。表面と下面の全体が丁寧に研磨され，滑らかな磨面になっている。裏面は平坦だが研磨の痕はなく，下面以外の側面は破損している。

その他の石器（第40図　156）

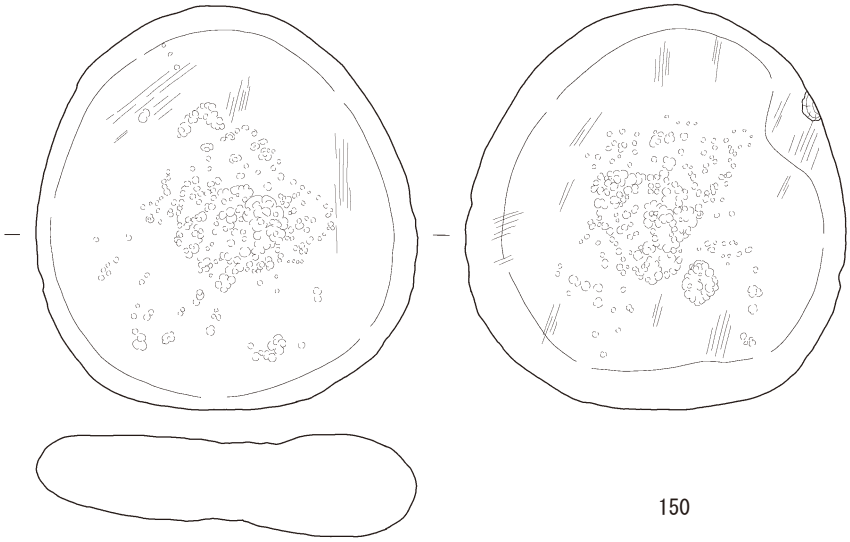
156は多孔質の溶結凝灰岩製で，円錐台状に加工されたと考えられる。上面，下面は楕円形に近く，長軸はそれぞれ約10cm・13cm・短軸は8cm・10cm，高さは約16cmで，上面の左半部には炭化物が付着している。側面には擦痕や使用痕などは確認できず，用途不明で，その他の石器として掲載した。



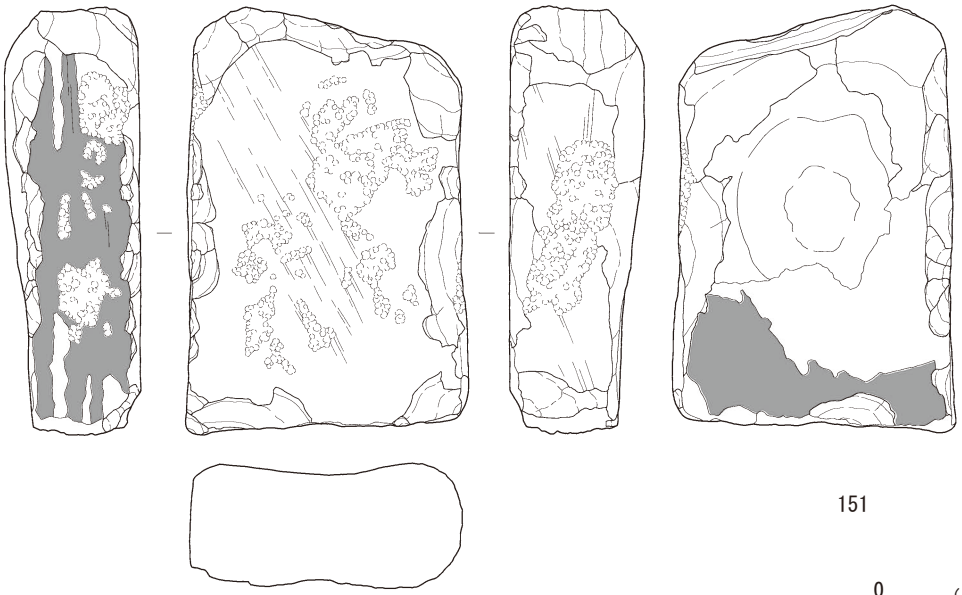
148



149



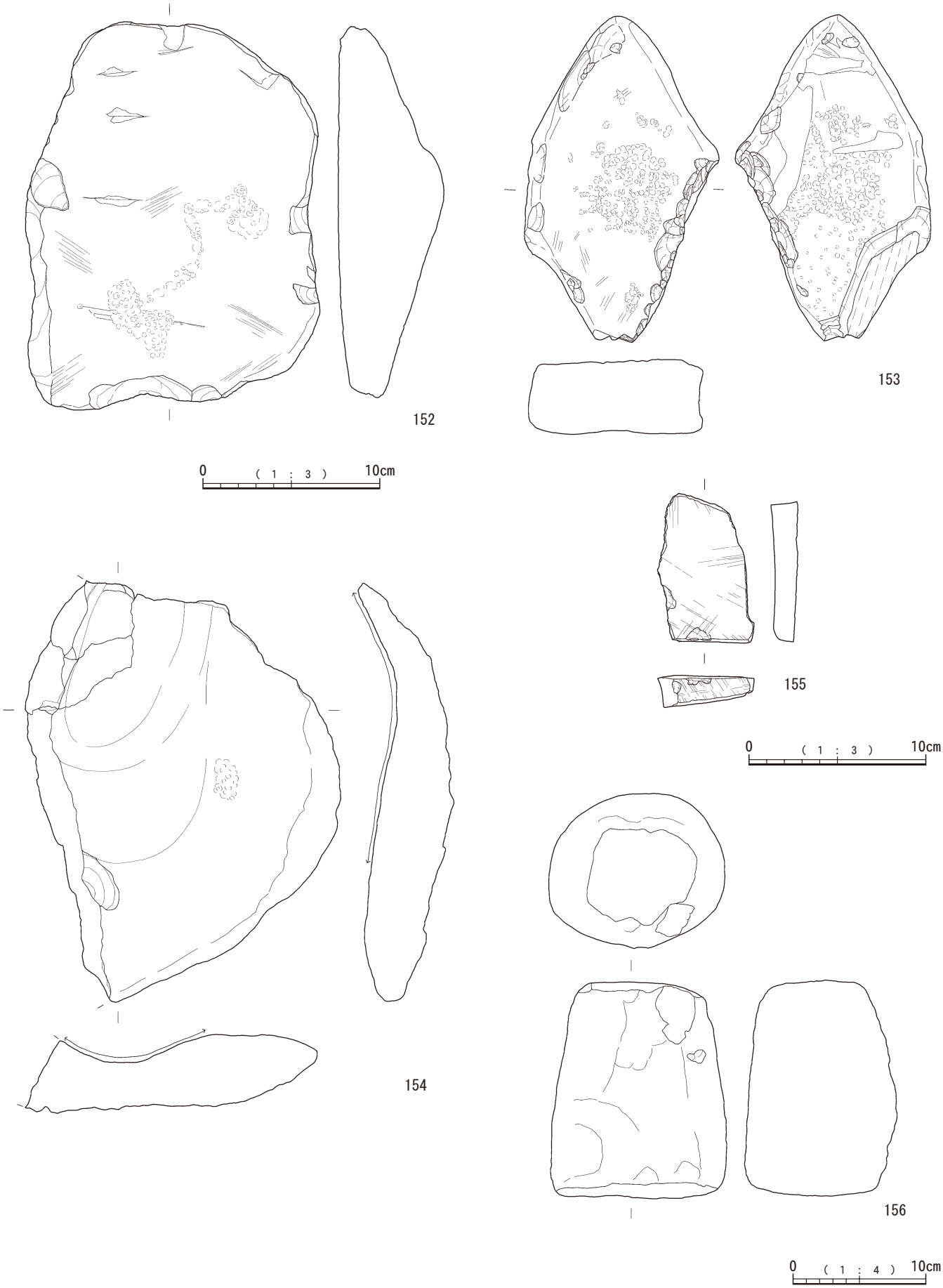
150



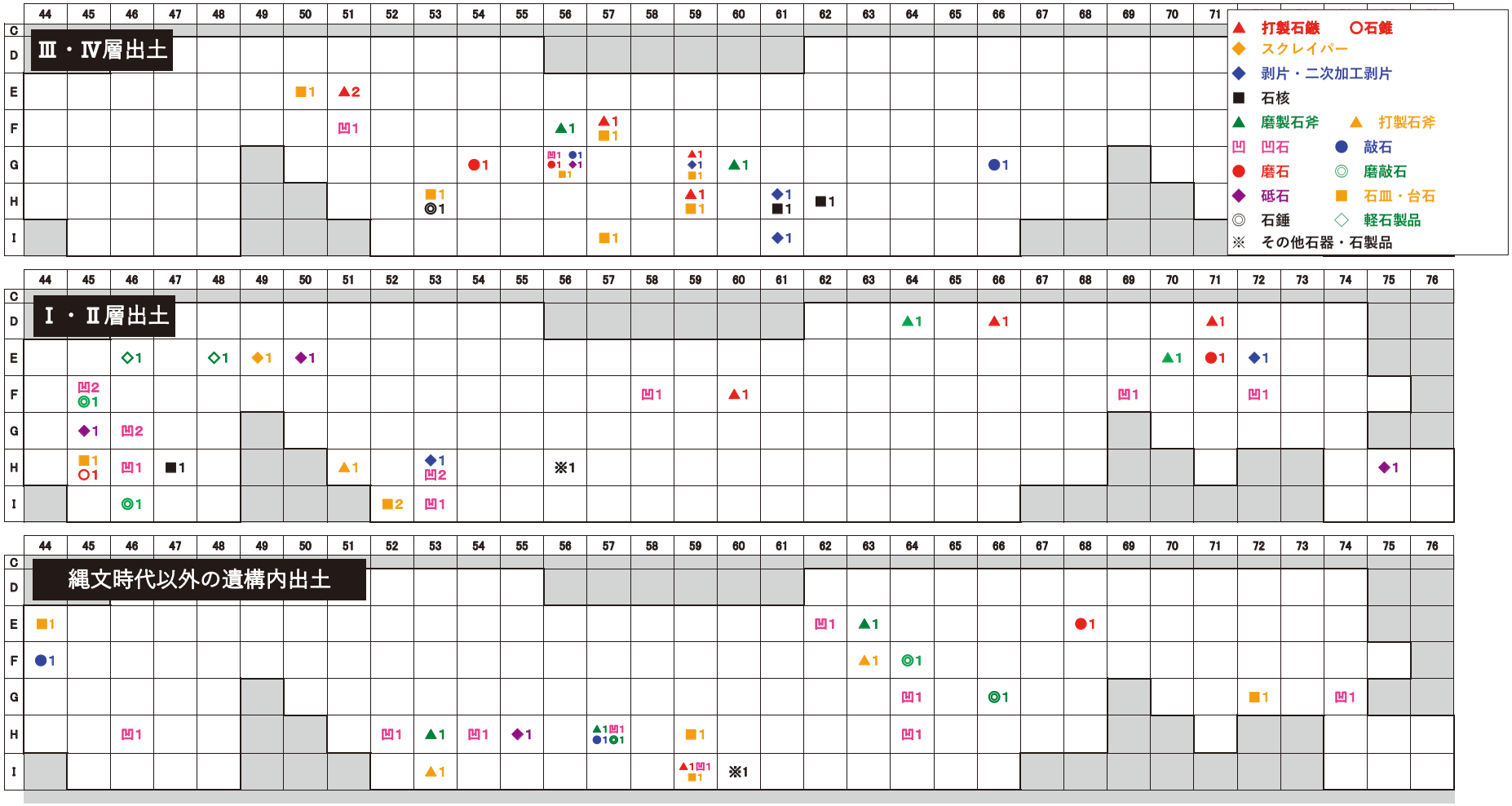
151

0 (1:3) 10cm

第39図　縄文時代の遺物⑲



第40図　縄文時代の遺物⑳



※上図はグリッドごとに出土した石器の種類，数量を示す。出土区の記録が複数のグリッドにまたがる場合は，その中間地点，またはアルファベット・数字の小さいグリッドで記載する。

第41図　石器出土状況図

第６表　縄文時代遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	分類	器種	出土区		層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		
13	2	Ⅴ類	深鉢	H	61	Ⅲ	胴部	ナデ	ナデ	浅黄橙～にぶい橙	浅黄橙～にぶい橙		○			SS504-5	集石３号内遺物
	3	Ⅴ類	深鉢	H	61	Ⅵａ上	胴部	ナデ	ナデ	浅黄橙～にぶい橙	浅黄橙～にぶい橙		○			SS504-12	集石４号内遺物
17	5	Ⅴ類	深鉢	G	61	Ⅳ	口縁～底部	刺突文・ナデ	ナデ	にぶい黄褐～にぶい橙	にぶい黄褐～にぶい橙		○			SK505-1	土坑１号内遺物

※層位の「マ」は埋土を示す　　凡例　胎土の鉱物量：◎多い　○普通

第７表　縄文土器観察表(1)

挿図番号	掲載番号	分類	器種	出土区		層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		
21	6	Ⅰ類	深鉢	Ⅰ	61	Ⅲ	胴部	貝殻刺突	ケズリ	明褐	明褐	○		○	砂粒多い	4315	
	7	Ⅱ類	深鉢	E	61	Ⅵa上	胴部	貝殻刺突	ナデ	褐灰	灰褐	○	◎	○	白粒	－	SP3328内遺物
	8	Ⅲ類	深鉢	H	60	Ⅳ	胴部	クサビ・貝殻押引	ナデ	明褐	明褐	○	○	○		4431・4429	
	9	Ⅲ類	深鉢	H	60	Ⅲ	胴部	クサビ・貝殻押引	ナデ	明褐	明褐		○	○		4430	
	10	Ⅲ類	深鉢	Ⅰ	60	SD18マ１	胴部	貝殻押引	ナデ	橙	橙	○	○	○		－	溝状遺構１号内遺物
	11	Ⅳ類	深鉢	H	62	Ⅲ	口縁部	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	橙	橙	○	○	○	赤粒・砂粒多い	4664	
	12	Ⅳ類	深鉢	G	62	Ⅲ	口縁部	貝殻条痕	ナデ	橙	橙		○	○		4593	
	13	Ⅳ類	深鉢	H	62	Ⅳ	胴部	貝殻条痕	ナデ	明褐	橙	○	◎	○		4716	
	14	Ⅳ類	深鉢	H	62	Ⅲ	胴部	貝殻条痕	ナデ	橙	橙	○	○	○		4576	
	15	Ⅳ類	深鉢	E	65	Ⅱｂ	胴部	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐～褐	明黄褐	○	○	◎	白粒	3031	
	16	Ⅳ類	深鉢	H	62	Ⅳ	胴部	貝殻条痕	ナデ	橙	橙		○	○	砂粒多い	4716	
	17	Ⅳ類	深鉢	E	65	Ⅱｂ	底部	条痕・ﾅﾃﾞ	ナデ	明赤褐	橙		○	○	白粒	3032	
22	18	Ⅴ類	深鉢	Ⅰ	61	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐～浅黄橙	浅黄橙		○	◎		5010	
	19	Ⅴ類	深鉢	Ⅰ	61	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐～浅黄橙	浅黄橙		○	◎		4929	
	20	Ⅴ類	深鉢	Ⅰ	61	Ⅲ	口縁部近く	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐～浅黄橙	浅黄橙	○	○	○		4962	
	21	Ⅴ類	深鉢	Ⅰ	61-64	Ⅲ	胴部	ナデ	ナデ	浅黄橙～にぶい橙	にぶい橙～浅黄橙		○			4658・4931 4932・4950	
	22	Ⅵa類	深鉢	H	60	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	橙	にぶい褐	○	○	○		4138	
	23	Ⅵa類	深鉢	F	64	Ⅱｂ	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙～灰褐	灰褐		○	○		3033	
	24	Ⅵa類	深鉢	H	62	Ⅳ	底部	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐		○	○		4260	
	25	Ⅵa類	深鉢	H	62	Ⅲ	底部近く	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐		○	○		4693	
	26	Ⅵa類	深鉢	H	61	Ⅳ	底部近く	ナデ	ナデ	橙	灰褐	○	○	○		4574・4719	
	27	Ⅵa類	深鉢	H・Ⅰ	59-61	Ⅰ	底部	ナデ	ナデ	橙	灰褐	○	○	○		－	
	28	Ⅵa類	深鉢	G	64	SD13マ１	底部	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐		○	◎	砂粒多い	4890	溝状遺構４号内遺物
	29	Ⅵa類	深鉢	H	61	Ⅳ	底部	ナデ	ナデ	橙	橙		○			－	
23	30	Ⅵb類	深鉢	H	62	Ⅲ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐	黄橙	○	○	○		4703	
	31	Ⅵb類	深鉢	E	65	Ⅱｂ	口縁	貝殻刺突	ナデ	褐灰	黄褐		○	○	白粒	3030	
	32	Ⅵb類	深鉢	E	65	Ⅱｂ	口縁	貝殻刺突・条痕	ナデ	褐灰	黄褐		○	○	砂粒多い	－	
	33	Ⅵb類	深鉢	G	67	SD19マ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○		5052	溝状遺構５号内遺物
	34	Ⅵb類	深鉢	H	62	SD18マ２	口縁部	貝殻刺突	ナデ	明褐	橙		◎	○	5㎜大の小礫	4556	溝状遺構１号内遺物
	35	Ⅵc類	深鉢	H	62	Ⅲ	胴部	貝殻条痕・貝殻押引	ナデ	明赤褐～灰赤	橙～灰赤		◎	○	5㎜大の小礫	4057・4058・4663	

第８表　縄文土器観察表(2)

挿図番号	掲載番号	分類	器種	出土区		層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		
23	36	Ⅵc類	深鉢	H・I	75	Ⅰ	口縁部	貝殻条痕	ナデ	橙	橙	○	○	○	白粒・赤粒	－	
	37	Ⅶa類	深鉢	H	60	Ⅳ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	灰褐	浅黄橙	○	○	○		4234	
	38	Ⅶa類	深鉢	H	62	Ⅳ	口縁部	貝殻刺突	ナデ	灰褐	にぶい褐	○	○	○		4710	
	39	Ⅶb類	深鉢	D・E	68・69	SD12マ	口縁部	貝殻刺突・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	ナデ・ミガキ	橙	黄橙	○	○	◎	白粒	3002	溝状遺構６号内遺物
24	40	Ⅷ類	深鉢	I	46	Ⅱb	口縁部	貝殻刺突	ナデ	にぶい橙	橙		◎	○		－	
	41	Ⅷ類	深鉢	－	－	Ⅰ	頸部	貝殻刺突	ナデ	橙	橙		◎	○	白粒・赤粒	－	
	42	Ⅷ類	深鉢	I	45	SX5マ	胴部	貝殻刺突・細沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	白粒・小石	460	土坑19号内遺物
	43	Ⅷ類	深鉢	H	45	Ⅱb下	胴部	貝殻刺突	ナデ	橙	橙	○	◎	○	白粒・赤粒	381	
	44	Ⅷ類	深鉢	H・I	45	Ⅱb下	胴部	貝殻刺突・細沈線	ナデ・ケズリ	橙	にぶい橙	○	◎	◎	白粒・小石	380	土坑19号内遺物
	45	Ⅷ類	深鉢	I	45	SX5マ	胴部	貝殻刺突・細沈線	ナデ・ケズリ	にぶい橙	橙		○	○		－	土坑19号内遺物
	46	Ⅸ類	深鉢	H	54	SD18マ2	底部	ナデ	ナデ	明赤褐	明褐灰	○		○	黒粒	－	溝状遺構１号内遺物
	47	Ⅹ類	深鉢	E	72	Ⅱb	胴部	沈線	ナデ	橙	橙	○		○	白粒	－	
	48	Ⅹ類	深鉢	G	46	SB2-19マ	口縁部	沈線・ﾅﾃ		橙 口縁部	橙		○		白粒	SB2-19	堀立柱建物跡2号-19ﾋﾟｯﾄ内遺物
	49	Ⅹ類	深鉢	I	52	Ⅱc	把手	摩滅・ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐				白粒	－	
	50	Ⅺ類	深鉢	F	57	Ⅱa	口縁部	ミガキ	沈線・ミガキ	褐灰～にぶい橙	にぶい黄橙		○	○	白粒・赤粒	3042	
	51	Ⅺ類	深鉢	E	67-69	Ⅲ	頸部	刺突・沈線	ナデ	橙	灰褐		○		白粒・小石	－	溝状遺構６号内遺物
	52	Ⅺ類	深鉢	E	45・46	Ⅱb	頸部	刺突・沈線・縄文	ナデ・ミガキ	浅黄橙	にぶい橙		◎	○	白粒	－	
	53	Ⅺ類	深鉢	H・I	52・53	Ⅰ	頸部	沈線・刺突	ナデ・ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	白粒	－	
	54	Ⅺ類	深鉢	E・F	56-58	Ⅳ	頸部	ナデ・摩滅	ナデ	にぶい橙	褐灰		◎	○		－	
	55	Ⅺ類	深鉢	E	51	Ⅲ	胴部	刺突・沈線	ミガキ	にぶい橙	にぶい黄橙		○	○	白粒	3186	
25	56	Ⅻ類	不明	G	58	Ⅲ	口縁部	沈線	ケズリ	褐灰	褐灰			○	白粒	－	
	57	Ⅻ類	不明	E～G	43-45	Ⅱ	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐	灰褐	◎		○	白粒	－	
	58	Ⅻ類	不明	H	55	SD18マ2	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙			○		－	溝状遺構１号内遺物
	59	Ⅻ類	不明	E	72	SP2353マ	頸部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		－	SP2353内遺物
	60	Ⅻ類	不明	H	59	Ⅲ	頸部	摩滅	ナデ	にぶい橙	黒・にぶい橙				砂粒多い	4477	
	61	Ⅻ類	不明	G	56	Ⅳ	胴部	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐			○		－	
	62	Ⅻ類	不明	E	72	Ⅱb	胴部	沈線・ミガキ	ミガキ	黒褐	褐灰		○	○	白粒・小石	－	
	63	Ⅻ類	不明	H	62	Ⅲ	胴部	沈線	ナデ	橙	にぶい橙	○				4684	
	64	Ⅻ類	不明	G	56	Ⅲ	胴部	沈線	沈線	にぶい橙	浅黄橙		○	◎		－	
	65	底部	不明	G	56	Ⅳ	底部	ﾅﾃﾞ	－	浅黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	白粒・赤粒・金雲母	－	
	66	底部	不明	E・F	56-58	Ⅳ	底部	ﾅﾃﾞ・指押さえ	－	にぶい橙	浅黄橙		○	◎	白粒・赤粒	－	
	67	底部	不明	E	69	Ⅱb～Ⅲ	底部	ﾅﾃﾞ・指押さえ	－	橙	浅黄橙	○	○	○	白粒・赤粒	－	
	68	底部	不明	G	45	Ⅱb	底部	ｹﾞｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・指押さえ	－	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	白粒	50	

第９表　縄文時代遺構内出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区		層	法量（cm）				石材	取上番号	備考	
						最大長	最大幅	最大厚	重量(g)				
13	1	砥石	G	60	Ⅳ上	7.0	7.6	1.8	150.5	赤色砂岩	SS501-№7		
14	4	石皿	H	61	マ	11.9	10.7	7.7	1379.0	安山岩	SS502-№103		

第10表　石器観察表(1)（Ⅲ・Ⅳ層出土）

挿図番号	掲載番号	器種	出土区		層	法量（cm）				石材	取上番号	備考	
						最大長	最大幅	最大厚	重量(g)				
26	69	石鏃	F	57	Ⅲ	3.2	1.2	0.4	1.0	安山岩	3045	石鏃Ⅰａ類	帖地型（大久保型）
	70	石鏃	H	59	Ⅲ	3.5	2.2	0.2	1.3	黒曜石(針尾系)	4456	石鏃Ⅰｂ類	
	71	石鏃	E	51	Ⅲ	2.2	1.7	0.4	0.9	安山岩	3157	石鏃Ⅱａ類	
	72	石鏃	E	51	Ⅲ	2.5	2.0	0.4	1.2	黒曜石（日東系）	3115	石鏃Ⅱｃ類	
	73	石鏃	G	59	Ⅲ	2.6	2.1	0.5	1.3	安山岩	4870	石鏃Ⅱｃ類	
	74	敲打痕のある剥片	G	59	Ⅲ	2.4	1.6	0.4	1.3	黒曜石(日東系)	4887		石鏃の可能性あり
	75	剥片（素材剥片）	H	61	Ⅳ	1.7	1.0	0.3	0.7	黒曜石（腰岳産）	4057		
	76	石核	H	62	Ⅴ	2.8	2.7	2.1	7.2	黒曜石（日東系）	第29トレンチ-２		
	77	石核	H	61	Ⅳ	2.7	2.2	1.3	8.0	黒曜石（上牛鼻系）	4340		
27	78	磨製石斧	F	56	Ⅲ	12.2	6.8	3.8	443.0	安山岩	3059		
	79	磨製石斧	G	60	Ⅲ	7.8	4.3	2.4	53.9	砂岩	4082		
	80	敲打痕のある剥片	I	61	Ⅳ	8.2	9.6	2.4	186.7	砂岩	4130		
	81	叩石（ハンマー）	F・G	66-67	Ⅱ～Ⅲ	11.5	4.7	3.8	307.0	安山岩	－		R4年度
	82	敲石	G	56	Ⅳ	7.0	6.1	3.4	210.0	赤色砂岩	－		
	83	磨石	G	56	Ⅲ	12.5	8.9	4.5	615.0	安山岩	－		
	84	磨石	G	54	Ⅲ	8.0	8.4	5.6	498.9	砂岩	3811		
28	85	凹石	G	56	Ⅲ	7.9	6.4	2.9	241.9	安山岩	－	凹石Ⅲ類	
	86	凹石	F	51	Ⅲ	10.8	5.9	3.4	296.8	安山岩	3133	凹石Ⅳ類	
	87	石皿	H・I	51-54	Ⅲ	12.3	10.3	3.7	638.0	安山岩	－		
	88	石皿	F	59	Ⅲ	17.0	8.7	3.2	910.0	砂岩	－		
	89	石皿	E・F	56-58	Ⅲ	21.6	15.7	3.5	1877.0	砂岩	－		
29	90	石皿	I	57	Ⅲ	12.1	9.2	5.7	678.0	砂岩	－		
	91	石皿	G	59	Ⅲ	16.7	11.2	4.5	1118.0	安山岩	4372		
	92	石皿	G	56	Ⅲ	10.5	12.9	6.2	1090.0	安山岩	－		
	93	台石	E	50	Ⅲ	20.1	19.2	7.3	3550.0	砂岩	3107		
	94	砥石	G	56	Ⅳ上	13.4	11.8	3.0	673.0	赤色砂岩	－		
	95	石錘	HI	51-54	Ⅲ	6.0	8.1	1.6	111.9	安山岩	234		

第11表　石器観察表(2)（Ⅰ・Ⅱ層出土）

挿図番号	掲載番号	器種	出土区		層	法量（cm）				石材	取上番号	備考	
						最大長	最大幅	最大厚	重量(g)				
30	96	石鏃	D	66	Ⅱｂ	2.6	2.1	0.3	1.3	安山岩	3029	石鏃Ⅱａ類	
	97	石鏃	F	60	Ⅱ	2.3	1.7	0.4	1.1	安山岩	3059	石鏃Ⅱａ類	
	98	石鏃	D	71	Ⅱｂ	1.8	1.5	0.4	0.6	黒曜石（日東系）	2001	石鏃Ⅲ類	
	99	石錐（ドリル）	H	45	Ⅱｂ	2.4	1.9	0.3	3.1	チャート	182		
	100	スクレイパー	D・E	49・50	Ⅰ	4.5	3.4	1.5	19.7	玉髄	－		
	101	二次加工のある剥片	E	72	Ⅱｂ	2.6	2.1	1.0	3.6	黒曜石（日東系）	－		
	102	二次加工のある剥片	H	53	Ⅰ	1.9	2.7	0.6	2.7	黒曜石（腰岳産）	－		
	103	石核	H・I	47・48	Ⅱｂ	2.4	2.4	2.8	13.6	黒曜石（日東系）	－		
31	104	磨製石斧	E	70	Ⅱｃ	12.6	6.0	3.2	330.0	ホルンフェルス	－		
	105	磨製石斧	D	64	Ⅱ	7.1	7.0	3.7	216.7	頁岩	－		
	106	剥片	H・I	51	Ⅰ	9.1	6.1	1.5	91.9	頁岩	－		磨面あり
	107	磨石	E	71	Ⅱｂ	5.4	4.9	4.0	134.0	安山岩	－		
	108	磨敲石	I	46	Ⅱｂ	9.0	9.6	6.0	976.0	安山岩	421		
	109	磨敲石	F	45	Ⅱｂ下	8.1	6.1	5.2	390.0	安山岩	432		

第12表　石器観察表(3)（Ⅰ・Ⅱ層出土）

挿図番号	掲載番号	器種	出土区		層	法量（cm）				石材	取上番号	備考	
						最大長	最大幅	最大厚	重量(g)				
32	110	凹石	F	69	Ⅱ	10.2	7.2	4.9	458.0	安山岩	－	凹石Ⅰ類	
	111	凹石	H・I	51-54	I	9.9	9.0	5.6	725.0	砂岩	－	凹石Ⅱ類	
	112	凹石	F	57	Ⅱa	9.4	9.1	4.2	518.0	安山岩	3040	凹石Ⅱ類	
	113	凹石	G	46	Ⅱb	9.5	8.4	6.5	687.0	安山岩	425	凹石Ⅱ類	
	114	凹石	F	45	Ⅱb下	10.1	9.5	3.4	475.1	安山岩	430	凹石Ⅱ類	
33	115	凹石	H	53	Ⅱc	8.7	7.3	4.0	341.3	安山岩	3374	凹石Ⅲ類	
	116	凹石	F	45	Ⅱb下	9.6	6.4	3.5	323.3	安山岩	443	凹石Ⅲ類	
	117	凹石	G	44	Ⅱb	13.4	6.3	4.0	592.0	安山岩	64	凹石Ⅲ類	
	118	凹石	F-H	71-73	I	8.3	6.5	4.6	333.1	凝灰岩	－	凹石Ⅲ類	
	119	凹石	H	46	Ⅱb	7.4	6.9	3.9	278.0	安山岩	412	凹石Ⅲ類	
	120	凹石	I	53	Ⅱc	8.1	6.9	3.2	240.5	安山岩	3317	凹石Ⅳ類	
3.4	121	台石	H	45	Ⅱb	13.2	11.8	7.9	1439.0	赤色砂岩	356		
	122	台石	I	52	Ⅱc	12.7	8.0	5.0	727.0	赤色砂岩	3389		
	123	台石	I	52	Ⅱc	14.9	8.7	5.6	979.0	砂岩	3392		
	124	砥石	G	45	Ⅱb下	13.6	4.6	1.8	149.4	砂岩	234		
	125	砥石	H・I	75	I	4.8	5.0	2.9	128.4	砂岩	－		
	126	砥石	E・F	49-51	I	4.1	5.7	1.6	42.6	砂岩	－		
35	127	軽石製品	E・F	47	Ⅱb	6.1	6.8	3.1	26.1	軽石	－		
	128	軽石製品	D・E	46	Ⅱb下	3.5	3.7	9.0	3.3	軽石	－		
	129	その他石器・石製品	H・I	56	I	7.4	7.8	3.3	158.6	赤色砂岩	－	用途不明・孔あり	

第13表　石器観察表(4)（縄文時代以外の遺構内出土）

挿図番号	掲載番号	器種	出土区		層	法量（cm）				石材	取上番号	備考	
						最大長	最大幅	最大厚	重量(g)				
36	130	打製石鏃	I	59	マ3	1.6	1.6	0.4	1.1	黒曜石（日東系）	5172	Ⅲ類	溝状遺構１号内出土
	131	磨製石斧	E・F	63	Ⅱ	9.2	3.5	1.8	78.7	頁岩	－		溝状遺構４号内出土
	132	磨製石斧	H・I	56-58	マ1	8.1	4.7	1.9	124.4	頁岩	－		溝状遺構１号内出土
	133	磨製石斧	H	53	マ2	8.8	6.1	3.5	261.4	砂岩	－		溝状遺構１号内出土
	134	打製石斧	I	53	－	12.5	7.6	2.3	234.1	砂岩	3592		溝状遺構２号内出土
37	135	打製石斧（礫器）	F	63	－	9.0	9.6	2.2	234.5	頁岩	－		溝状遺構４号内出土
	136	敲石	H・I	56-58	マ1	12.5	5.9	3.2	375.6	安山岩	－		溝状遺構１号内出土
	137	敲石	F	45	マ	7.1	4.7	30.5	179.8	安山岩	掘立1号-23		堀立柱建物跡１号-23
	138	磨石	E	68	I	10.8	9.3	5.4	808.0	安山岩	SD12		溝状遺構６号内出土
	139	磨敲石	H	57	Ⅲ	12.1	6.7	4.0	493.7	安山岩	－		溝状遺構１号内出土
	140	磨敲石	G	66	マ	8.3	6.9	4.5	381.7	安山岩	4895		溝状遺構５号内出土
	141	磨敲石	F	64	マ	12.0	6.7	5.0	586.0	安山岩	SP3264-3		SP3264内出土
38	142	凹石	H・I	46	マ	9.3	8.3	5.7	598.0	安山岩	－	凹石Ⅰ類	土坑19号内出土
	143	凹石	H	64	マ2	4.9	4.5	2.7	89.3	安山岩	4842	凹石Ⅰ類	溝状遺構４号内出土
	144	凹石	E	62	Ⅱ	10.2	8.2	2.6	331.5	安山岩	－	凹石Ⅱ類	溝状遺構４号内出土
	145	凹石	F	74	マ	9.3	8.3	4.8	551.0	安山岩	SP2439	凹石Ⅱ類	SP2439内出土
	146	凹石	G	64	マ2	9.6	6.9	4.8	425.8	凝灰岩	5016	凹石Ⅱ類	溝状遺構４号内出土
	147	凹石	H	51-52	マ1	11.5	6.4	4.2	455.4	安山岩	－	凹石Ⅲ類	溝状遺構１号内出土
39	148	凹石	H・I	56-58	マ1	10.1	6.6	2.9	305.0	ホルンフェルス	－	凹石Ⅲ類	溝状遺構１号内出土
	149	凹石	H	54	マ2	9.2	6.6	4.2	357.4	安山岩	－	凹石Ⅳ類	溝状遺構１号内出土
	150	凹石	I	59	マ1	16.1	15.1	4.1	1525.0	安山岩	SD18 石列23	凹石Ⅳ類	溝状遺構１号石列23
	151	石皿	E	44	マ	17.0	11.2	5.4	1825.0	赤色砂岩	－		土坑４号内出土
40	152	石皿	I	59	マ1	21.9	16.5	6.0	3170.0	安山岩	SD18 石列29		溝状遺構１号石列29
	153	台石	H・I	58	マ	18.5	11.1	4.2	1120.0	砂岩	-		溝状遺構１号内出土
	154	石皿	G	72	マ	31.8	23.9	7.6	5340.0	安山岩	SP2322-1		SP2322内出土
	155	砥石	H	55	マ2	8.5	5.5	1.9	103.3	赤色砂岩	－		溝状遺構１号内出土
	156	その他の石器	I	60	マ3	16.4	13.3	11.7	2510.0	溶結凝灰岩	5195		溝状遺構１号内出土

第２節　古墳時代の調査

１　調査の概要

古墳時代に該当する包含層は，Ⅱｂ～Ⅲ層である。当該時期の遺物は，破片で摩耗の激しいものが多い。

また，古代・中世・近世の遺物と混在した状態で出土している。遺構は確認されていない。出土遺物には，甕・壺・高坏がある。なお，確実に当該時期の石器・石製品類と判断できるものはなかった。

遺物の主な出土地点については，Ｆ～Ｉ－53～57区とＤ・Ｅ－70～72区周辺であり，この範囲に散在する。古墳時代前期に比定される東原式土器段階を中心として多少時期が前後するものとみられるが，完形の遺物はなく，ほとんどが小片である。

２　出土遺物（第42図　157～166）

遺物は，100点以上の土器片が出土した。在地系の東原式土器段階が主体と考えられる。摩耗した小片が多く，壺の底部や高坏の一部などが確認される。

157は，２条の沈線を斜め方向に交互に施すものである。幅広突帯に類似するが，本資料については壺の胴部に直接施される文様の一部であると考えられる。

158・159は，甕の胴部と脚部との接合部付近と考えられる。ただし，欠損部が多く，摩耗が激しいため全体形は不明である。

160～162は，壺の底部である。160は，平底である。底部から広く立ち上がり，成形時の接合痕が確認できる。全体的に摩耗している。

161は，尖底に近い。接地部分は，わずかに面を有する。また，底部付近は厚みがある。内外面ともに風化しており，調整は確認できない。

162は，丸底である。摩滅が激しい。胎土に白色や灰色の２㎜程度の小石を多く含み，若干の赤色小石も見られる。また，底部外面の中央部には深さ５mm程度の凹みがみられる。この凹みが，当初からのものかは，器面の摩耗が激しいために確認することができないが，意図的なものではなく，胎土の小石などが外れた可能性を考えたい。

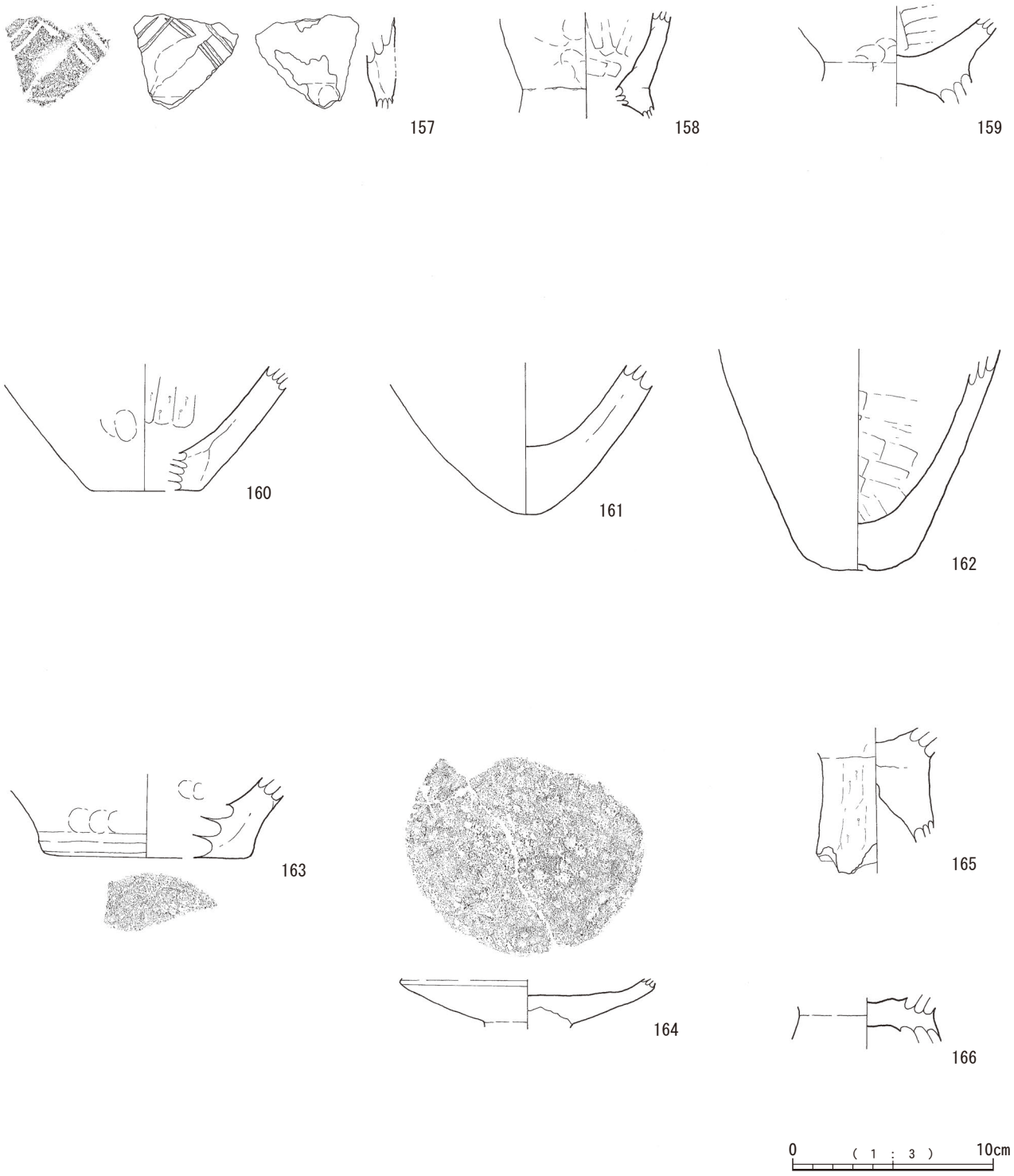
163は，甕か壺か明確でない底部である。平底の甕及び底部が広い平底の壺は，本遺跡では他に確認できていないため不明とした。なお，底部の形態から，弥生時代の可能性もあるが，ここでは他の出土資料の状況から古墳時代の可能性が高いものとして扱った。

164～166は，高坏である。164は，高坏の坏部下位である。坏部には明瞭な屈曲部が確認され，屈曲部から口縁部にかけては欠損する。また，脚部は接合部分から外れた状態で欠損しており，坏部と脚部の製作方法が分かる資料である。外面は，ナデ調整が施されている。胎土に灰色の２～５㎜の小石を多く含み，数は少ないが，赤色小石もみられる。

165・166は，溝状遺構１号から出土したものである。165は，下方から上方にかけてのケズリ痕が残る。166は，高坏の坏部と脚部の接合部分の破片である。

第14表　古墳時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区		層位	部位	主文様・調整		色調		胎土				取上番号	備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		
42	157	壺	D	71	Ⅱb	胴部	沈線	ナデ・ユビオサエ	赤	明赤褐	○	○	○	白色粒・黒色粒	－	
	158	甕	D	72	Ⅱb	底部	ケズリ・ユビオサエ	ケズリ	橙	橙	○	○	○	白色粒・灰色粒	－	
	159	甕	D	70	Ⅱc	底部	ナデ・ユビオサエ	ケズリ	橙	明赤褐	○	○	○	白色粒・黒色粒	2006	
	160	壺	H	61	Ⅳ	底部	ナデ・ユビオサエ	ケズリ	橙	橙	○	○	○	白色粒・黒色粒	－	底径5.6cm
	161	壺	G	59	Ⅳ	底部	磨滅	磨滅	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	白色粒・黒色粒	4436	底径１cm
	162	壺	E	70	Ⅱc	底部	磨滅	ケズリ	にぶい橙	橙	○		○	白色粒・赤色粒	2011	底径６cm
	163	不明	H	62	Ⅲ	底部	ナデ・ユビオサエ	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	白色粒・赤色粒・黒色粒	4697	底径10.6cm
	164	高坏	F	57	Ⅲ	坏部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○		白色粒・赤色粒	3055	
	165	高坏	H	57	－	脚部	ケズリ・ナデ	ナデ	明黄褐	橙		○	○	白色粒・黒色粒	－	溝状遺構１号出土
	166	高坏	H	53	－	坏部～脚部	ケズリ・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○		○	白色粒・赤色粒	－	溝状遺構１号出土



第42図　古墳時代の遺物

第３節　古代の調査

１　調査の概要

古代の遺物は，主にⅡb層・Ⅱc層から出土している。Ⅱb層は，中近世の遺物が混在した状態で，古墳時代から近世までを含む包含層である。遺跡の大部分において中世以降に大規模な土地改良が行われ，古代の生活面も削平を受けている。

以上のことから，慎重に調査を行ったが，古代の遺構は確認できなかった。

北山遺跡周辺は，古代駅である英祢駅（延喜式【延喜５（905）年完成】諸国驛傳馬条記載）の比定地の一つとなっており，以前から古代の土師器や焼塩土器などの遺物が発見されていた。

２　遺構

右表は，古代に該当する土器底部片の分布状況を示した表であるが，集中的に出土している地点があることがうかがえる。古代に該当する遺物の中で，文字資料（墨書・ヘラ書き）や越州窯青磁なども出土していることから，古代に該当する重要な施設が周辺にあったことが想定される。G～Ⅰ－49～51区，G～Ⅰ－67～73区は，今後調査が実施される予定であり，包含層の堆積も比較的良好である可能性が想定されている。また『北山遺跡１』で報告した調査区につながる地点であるE～H－44・45区は，集中的に遺物が出土している。削平の影響で遺物が動いている可能性は高いが，古代に該当する遺構が南側や西側に広がっている可能性が想定される。

	C	D	E	F	G	H	I
76							
75							2
74						2	
73							
72			3				
71		1	2				
70		7	9		1		
69		12	12	9			
68		5	2				
67		1	1				
66			11				
65		2		1			
64		1		1			
63			2				
62			3				
61							
60							
59							
58							
57				5	33	1	11
56				6	12	2	13
55					2	13	18
54				1	6	18	17
53					3	41	39
52			3		4	34	21
51			7	24	1	7	
50		10	21	3	3		
49		2	22	6			
48				1			2
47		2	2	1	2	5	2
46			13	9	14	17	22
45			21	19	83	84	
44				83	58	19	

第43図　土師器（高台・ヘラ切り底部）出土状況

３　出土遺物の分類

⑴　器種分類

基本的には，以下のように器種分類を行う。分類にあたっては，大宰府の分類（山本1990），中村和美氏による分類（中村1994），岩元康成氏による分類（岩元2012）及び平城京の分類（神野2010）等を参考とした。

用途に関する分類としては，以下のように分類した。

食膳具：椀・坏・高坏・蓋・皿

貯蔵具：壺・鉢・須恵器甕

煮炊具：土師器甕・甑

その他：上記に分類できないもの，器種不明のもの

⑵　遺物分類

遺物は，土師器，黒色土器，須恵器，越州窯系青磁，文字資料及びその他に大別した。その中で，上記⑴に基づいて細分した。

【土師器】

ア　食膳具

椀：高台を有するもので，深さのある器形で，胴部が丸いものと直線的なものがある。高台は，底部周縁から内側に貼り付けられる。そのうち，高台端部が外方へと反るものは，古手の様相を示す。高台は高さが低いものから高いものへと変化することが確認されている。また，ごく少数だが，高台部分のみ色調の異なる胎土で製作されたものがある。

坏：平底を原則とする。口径と比較して，器が高いもので，器高はおおむね３㎝以上とした。

高坏：坏に筒状の細長いラッパ状に開く脚部がつくものである。古墳時代に多い器種で，古代には減少する。本遺跡では，極めて少量出土している。

蓋：器高は低く皿を上下逆にしたような形状で，端部にかえしがつく場合がある。上方の中央には，擬宝珠形のつまみがつくものがある。

皿：口径に対して，器高が低いものである。器高はおおむね３㎝未満とした。高台がつくものもある。

イ　貯蔵具

壺：胴部よりも口縁部が締まったものを指す。本遺跡では，口縁部から胴部のみの資料で全形がわからないものと，粗製の小型壺が確認されている。ここでは貯蔵具に分類したが，調度具であった可能性もある。

鉢：最大径と高さに差が少ないものを指し，器形は様々なものがある。本遺跡では，全形が確認できない。ここでは貯蔵具に分類しているが，調度具であった可能性もある。

ウ　煮炊具

甕：口縁部がラッパ状に外反し，胴部はやや縦長の長球状となる。本遺跡では，底部はごく少量しか確認されておらず，全形を確認できるものはない。これは，カマドに装着し，下方から強い火力を受けたことによる可能性がある。ただし，本県では古代のカマドは数例しか確認されておらず，本遺跡でも確認されていない。胴部外面は，ヨコナデもしくは横方向のハケメが施されるものが多い。胴部内面は，ヘラ状工具によりやや斜め上方向のケズリ，ナデやユビオサエによる調整がみられる。

甑：口縁部は，直行するもの，やや外反するもの，波状口縁となるものがみられ，底部は筒状（底抜け）となる。口縁部よりも，底部を丁寧に調整する傾向があり，底部は口縁部にみえることもある。胴部上寄りの部分には把手がつくが，本遺跡のものは基部近くで欠損しており，全形は明らかでない。器面の調整等は土師器甕とほぼ同様である。

【黒色土器】

基本的に椀のみである。Ａ類（内黒）が多いが，少量ではあるもののＢ類（内外面黒）も含まれる。一部には，高台部分のみ色調の異なる胎土で製作されているものも含まれる。

【須恵器】

ア　食膳具

椀・坏・高坏・蓋・皿がある。若干の違いはあるが，各特徴は，概ね土師器の同器種と同じである。

イ　貯蔵具

甕・壺がある。いずれも小破片が多いため，全形が確認できない。基本的には，甕は外面には平行・格子目のタタキが，内面には平行・同心円状の当具痕が 確認される。壺に関しては，外面は甕と同様であるが，内面はナデしか確認できないものもみられる。また，甕・壺のどちらかは確認できていないが，一部には内面に掌で押圧したとみられる痕跡が残るものもある。

【越州窯系青磁】

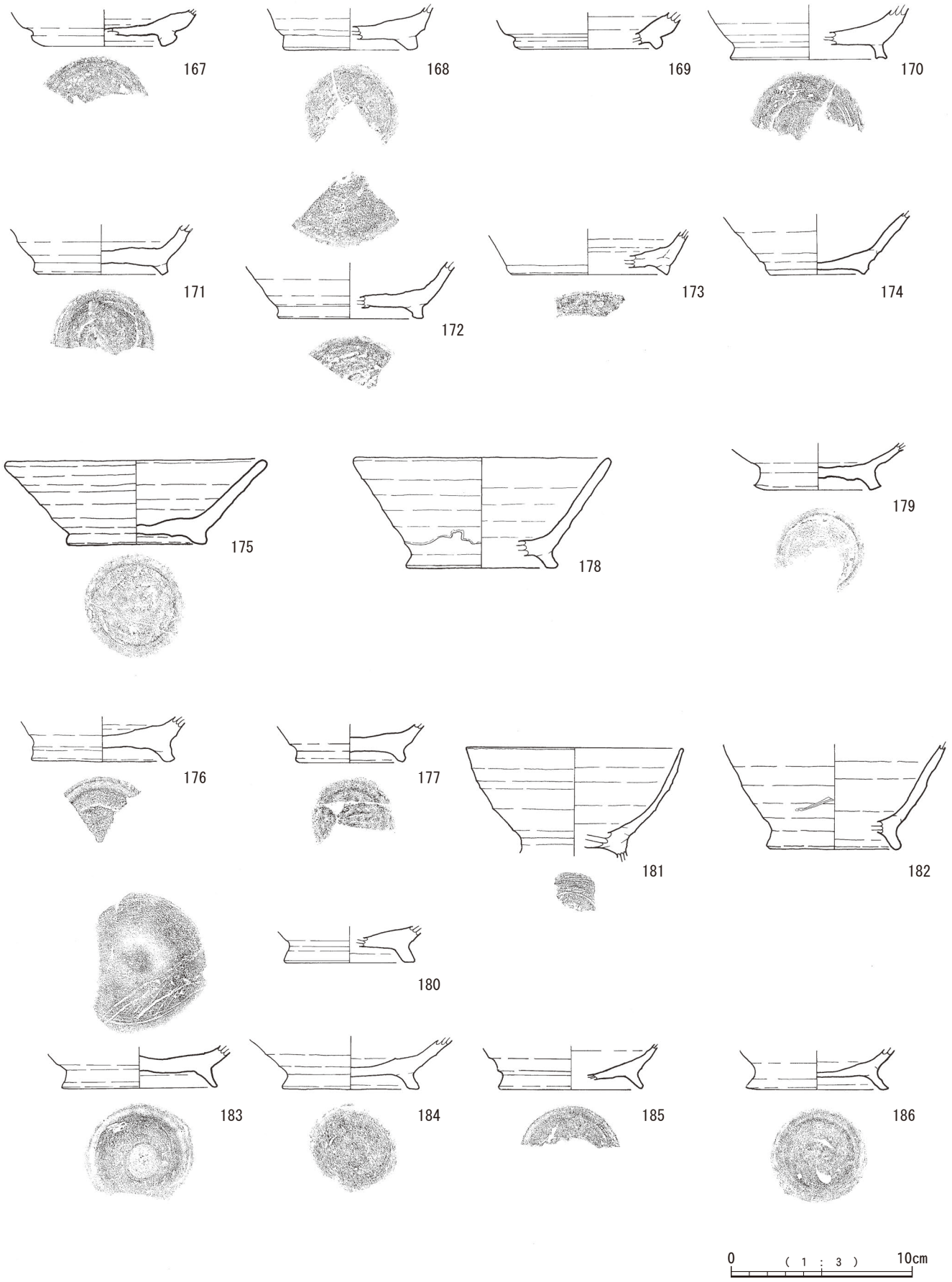
本遺跡では，数量は少ないが，碗と鉢がみられる。中国の越州窯で生産されたものである。

【文字資料】

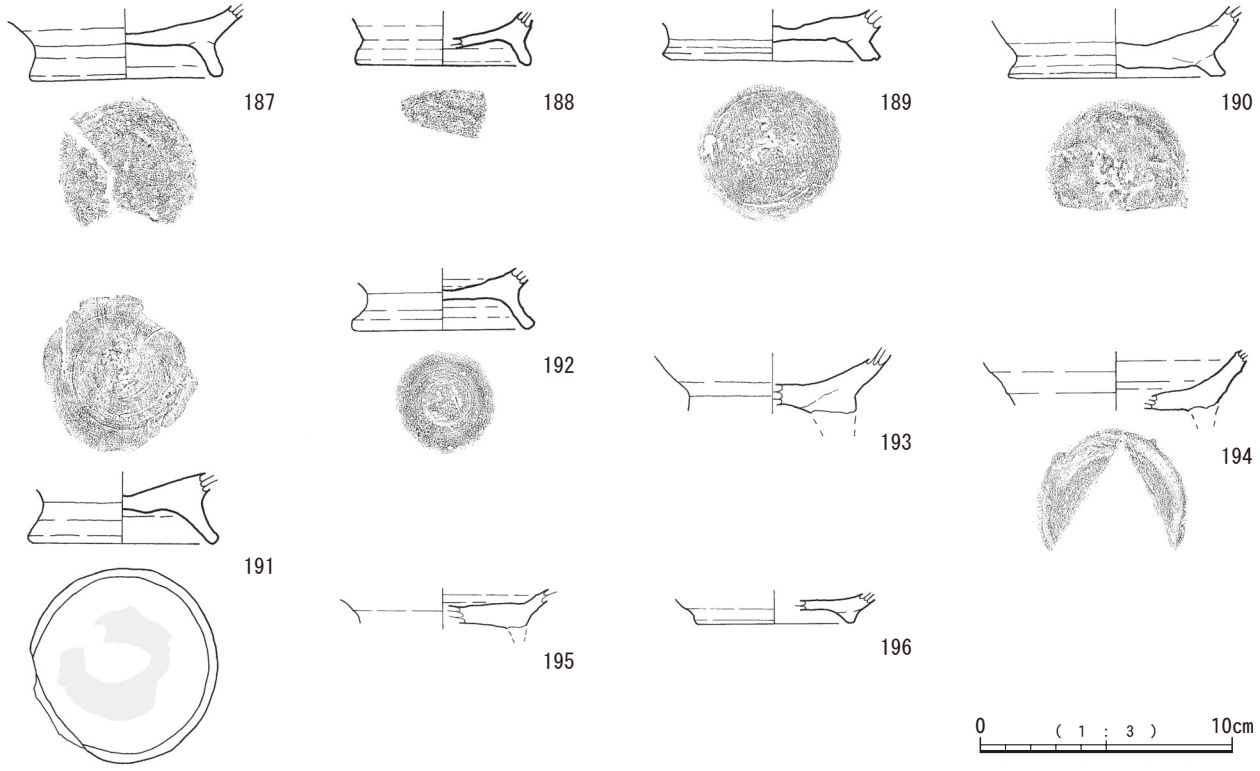
土器の表面にヘラ状工具，または墨書により，文字またはその可能性があるものが書かれているものを，土師器・須恵器とは別に分類したものである。

【その他】

土錘，焼塩土器，円盤状製品，紡錘車，土製品をまとめて掲載した。


167
168
169
170
171
172
173
174
175
178
179
176
177
181
182
180
183
184
185
186
0
(1 : 3)
10cm

第44図　古代の遺物①



第45図　古代の遺物②

４　出土遺物

⑴　土師器（第44 ～ 51図　167 ～ 268）

ア　食膳具

167 ～ 233は，比較的小型の食膳具である。

椀（第44・45図　167 ～ 196）

167 ～ 177は，比較的低い高台を有するものである。

167 ～ 174及び176・177は，底部付近の資料である。高台が外方へと開くもので，古手の様相を呈する。167・168は，周縁より内側から「ハ」字に高台が開くものであり，８世紀前半頃の可能性が考えられる。173・174は，断面三角形状の低い高台がつくもので，胴部は直線的である。175は，口縁～底部で，胴部は直線的である。高台を貼り付ける前段階で，回転台からヘラ切りによって切り離しを行った痕跡が残る。

178 ～ 190は，高台脚部の高さが若干高いもので，特に183 ～ 190は，やや外方に開く長めの高台をもつものである。178は，口縁～底部だが，口唇部がわずかに残るのみである。胴部は直線的で，外面には高台を貼り付けた粘土の痕が残る粗雑なつくりである。181・182も口縁から底部の資料であるが，いずれも胴部がやや丸みを帯びる。181は，内外面の広い範囲に製作時に付着した煤が確認でき，高台下面は破損しているが，赤色高台と考えられる。190は，高台部のみ赤色胎土を用いている。赤色高台椀は，黒色土器（Ａ類・内黒）に多いとされるが，本資料は黒色ではない。

191・192は，高台脚部が非常に長く，外方へと大きく開くものである。底部のみの資料であるが，胴部は丸みを帯びる器形と考えられる。191は，底部見込みに煤が付着している。

193 ～ 195は，高台が外れたものである。194は，高台が坏部との接合部分で外れたものである。

196は，高台部分のみが白色胎土となるものである。

坏（第46図　197 ～ 217）

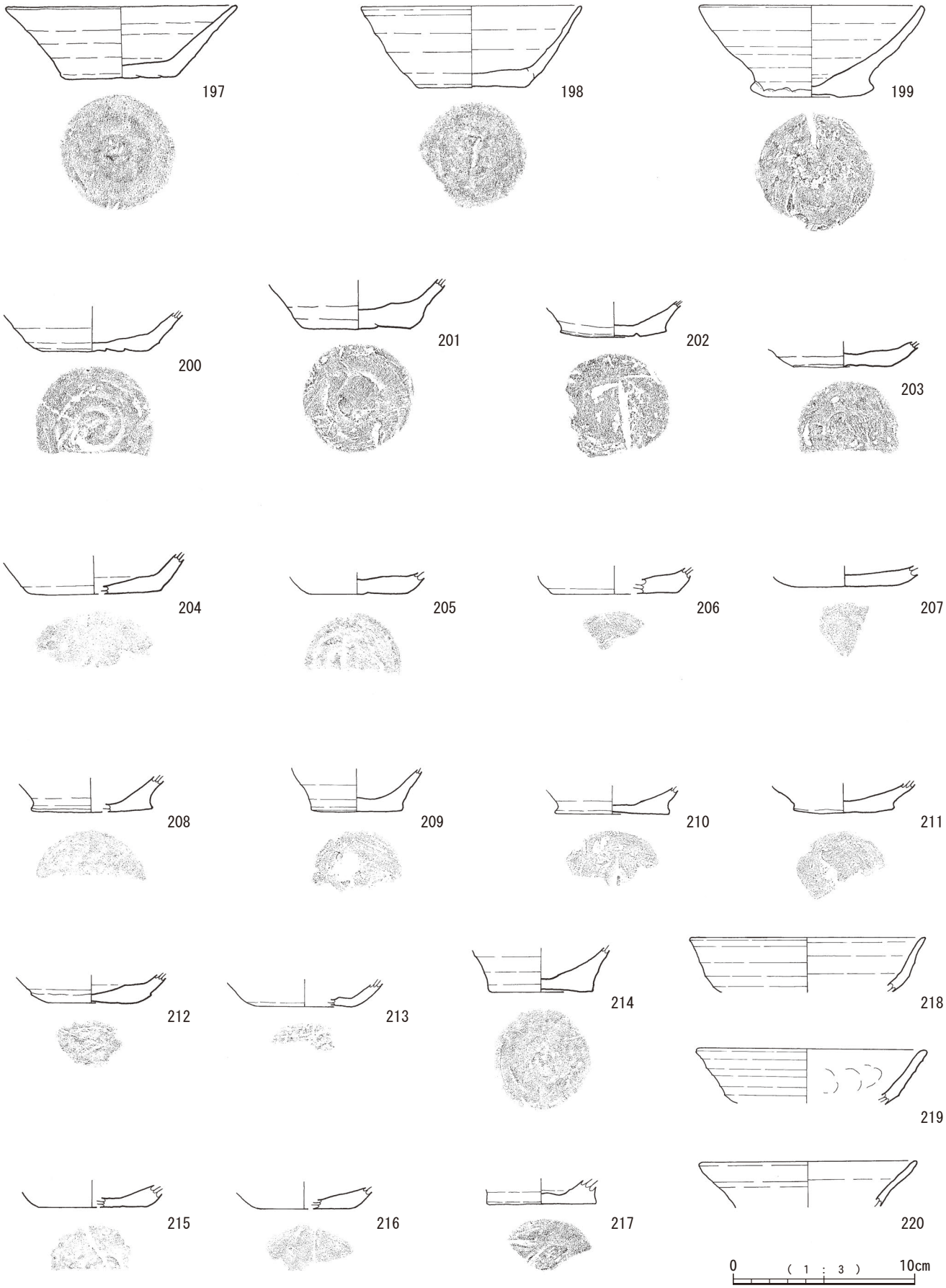
197 ～ 217は，いずれも，回転台からヘラ切りによって切り離しを行った痕跡が残る。

197は完形品で，胴部は直線的だが，口縁部付近でわずかに外方へと反るように開く。198は胴部がやや丸みを帯び，内側へわずかに湾曲する。199は，底部外面が若干張り出すもので，柱状（充実）高台椀にも類似するものであるが，高台としては低く，明確な椀とは言いがたいため，ここで扱った。

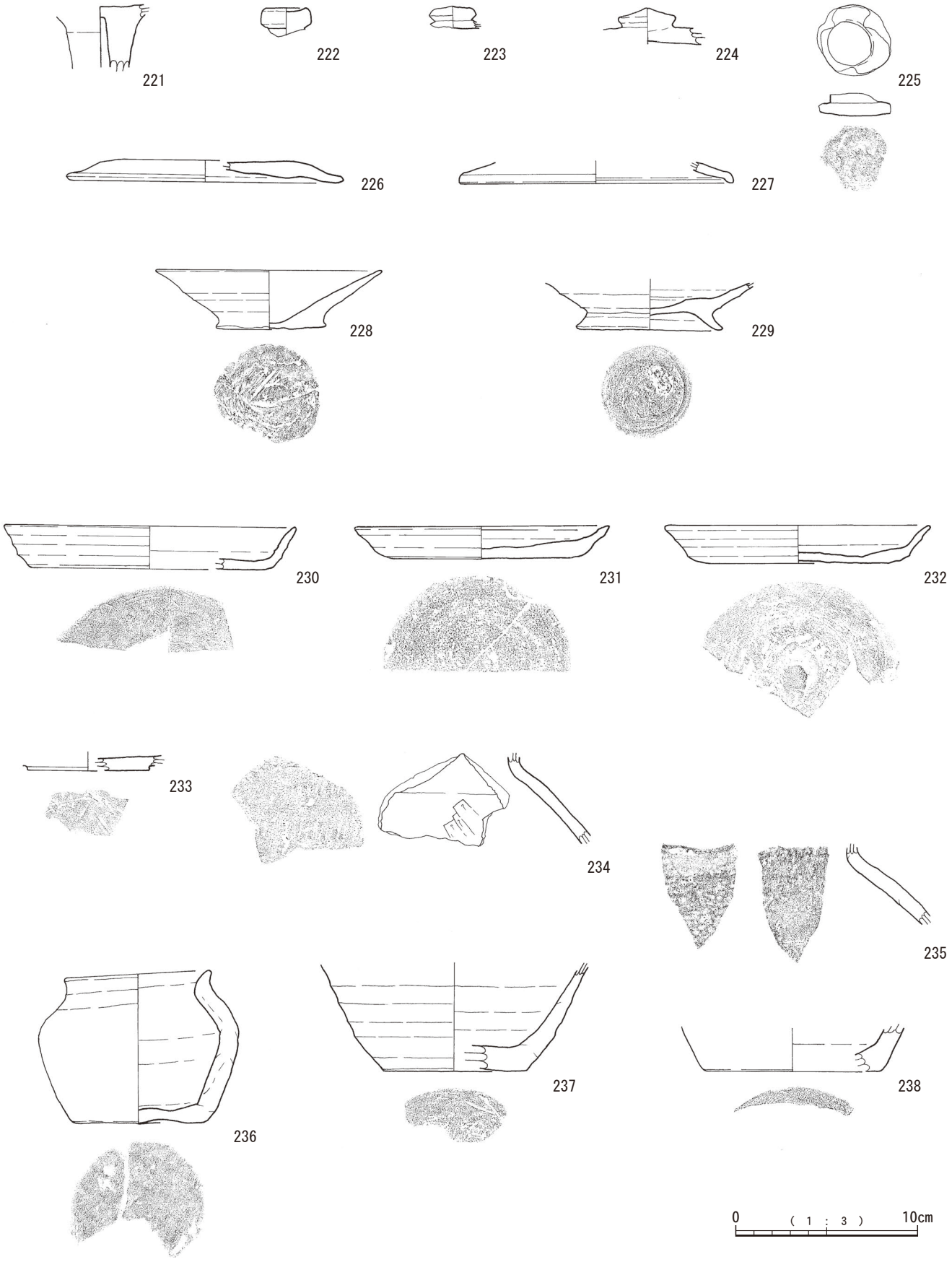
200 ～ 217は，底部及び底部付近である。この中で，214は底部周縁付近に厚みがあり，特徴的である。

椀もしくは坏（第46図　218 ～ 220）

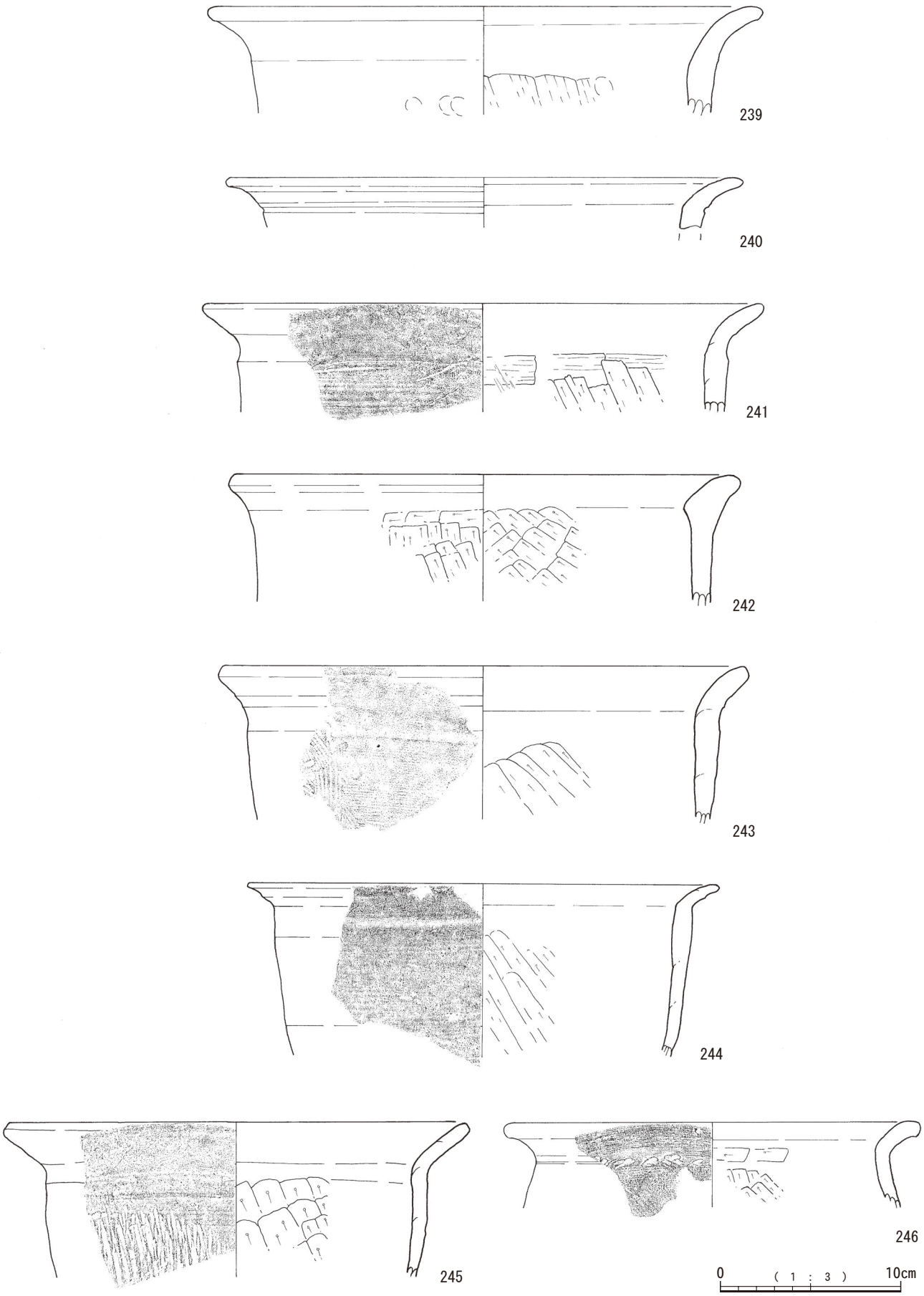
218 ～ 220は，口縁部から胴部のみの残存のため，椀もしくは坏の判別に至らなかったものである。胴部の状況から，椀の可能性が想定される。


197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
218
219
215
216
217
220
0
(1 : 3)
10cm

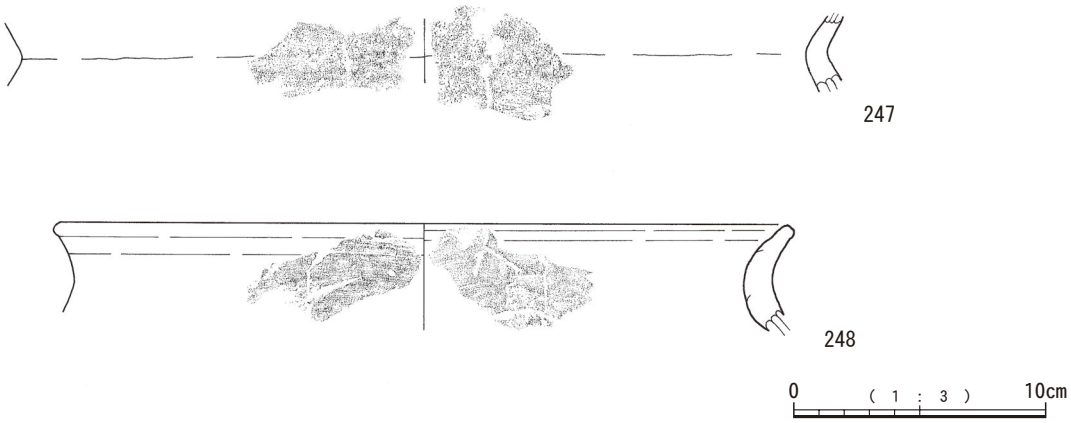
第46図　古代の遺物③


221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
0
(1 : 3)
10cm

第47図　古代の遺物④



第48図　古代の遺物⑤



第49図　古代の遺物⑥

220は，胎土が白色で焼成が堅緻なものである。在地産ではない可能性もある。

高坏（第47図　221）

221は，高坏の坏部下端から脚部基部にかけての破片で，脚部は筒状になっている。白色で細かい胎土である。

蓋（第47図　222 ～ 227）

222 ～ 227は蓋で，222 ～ 225は擬宝珠状の蓋のつまみ部である。つまみ部以下はほぼ欠損しているが，大きく広がり蓋の体部につながると考えられる。いずれも摩滅が著しく，全体的に表面が荒れている。225はつまみ部分が基部を残して欠損するものである。226・227はつまみ部分を欠損している体部のみの資料であるが，226は全体形や大きさが想定できる資料である。

皿（第47図　228 ～ 232）

228・229は，口縁部幅に比べて高さがなく，体部が直線的に大きく開く器形で，高台を有する皿である。228は，柱状高台に近いもので，内面見込み中央部は窪み，非常に薄手である。229は，「ハ」字状に開くやや高い高台を有する。

230 ～ 232は，口縁部幅に比べて高さが低く，偏平な形態のもので，底部は大きく平坦である。231は，底部がやや厚手で，特に浅いつくりである。いずれも，回転台からヘラ切りによって切り離しを行った痕跡が残る。器面は，比較的丁寧にナデが施される。

器種不明の食膳具（第47図　233）

233は底部で，平底であるが器種は不明である。外面には赤色顔料が塗布されている。

イ　貯蔵具

壺（第47図　234 ～ 236）

234・235は，破片のため，全形は確認できないが，壺の肩部と考えられる。235は，風化しているが，外面にはタタキ痕が，内面には当具の痕跡がわずかにみられる。胎土の状況から土師器としたが，焼成不良の須恵器の可能性も残る。

236は小型の壺である。ややいびつな形状で，輪積みの痕跡が明瞭に残る。胎土は白色で，表面の風化が進行している。底部はゆがみのある平底で，胴部下半からややふくらみ，胴部最大径から屈曲して頸部となる。口縁部は短く折り曲げて外反させる。底径と器高には，あまり差はない。本資料は，形態的に類例の少ないものであり，焼成が悪いためか，表面が脆いものである。

鉢（第47図　237・238）

237・238は，鉢の底部付近の破片で，底部は平底である。237は，底部に厚みがあり，やや大きめの個体と考える。

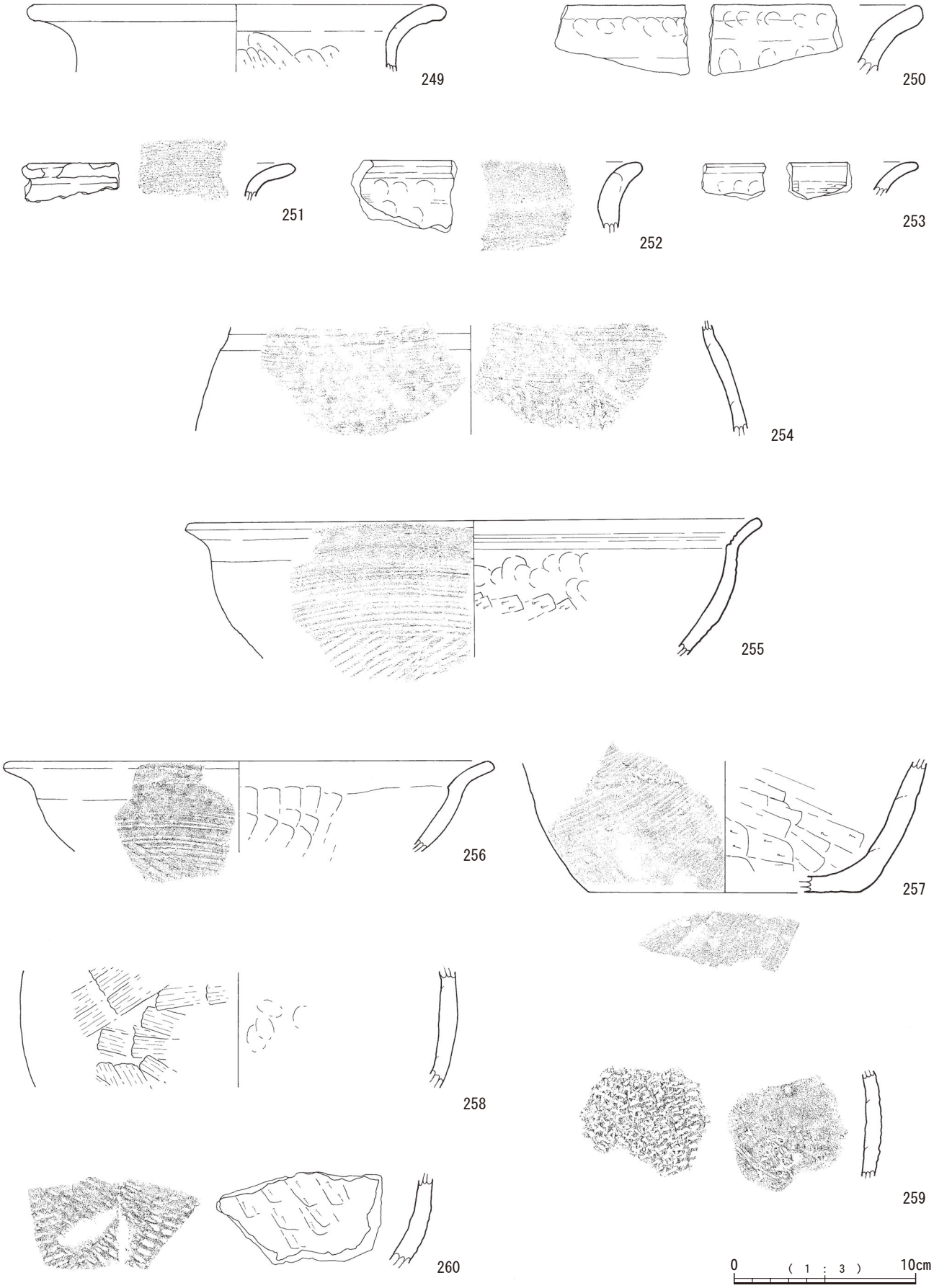
ウ　煮炊具

甕（第48 ～ 50図　239 ～ 260）

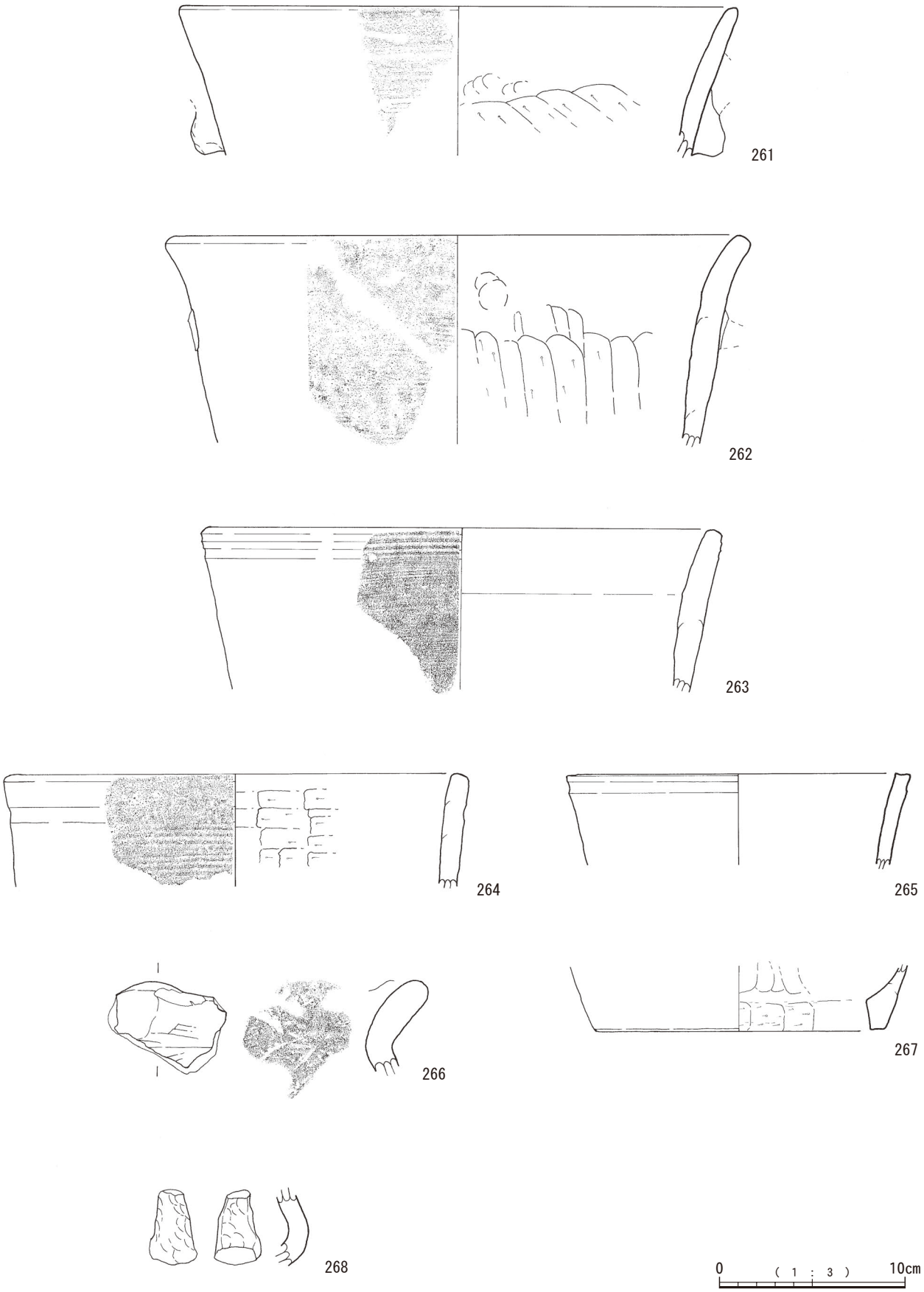
239 ～ 246は，ラッパ状に開く口縁部の破片で，口唇部下を屈曲させた後，ほぼ垂直に下方へ向かうものが多い。246は，胴部に若干膨らみをもつと考えられる。内面屈曲部以下には，下方から上方へと行ったヘラケズリの痕跡が明瞭に残る。外面については，横方向のナデ，ユビオサエ，ハケ目，ヘラケズリの痕跡，爪痕を残すものがあり，240には頸部に横位の強い沈線が引かれているなど，バリエーションがみられる。すべて底部は残っていないが，丸底であると推測される。

247・248は，口縁から頸部付近の資料で，胴部がやや外方へ向かってふくらむもので，外面には横方向のナデ，内面には横方向のヘラケズリが施される。本来は大型のものであったと考えられるが，頸部以下が残存せず，底部形状も不明である。大型鉢の可能性もあるが，ここでは甕として扱った。

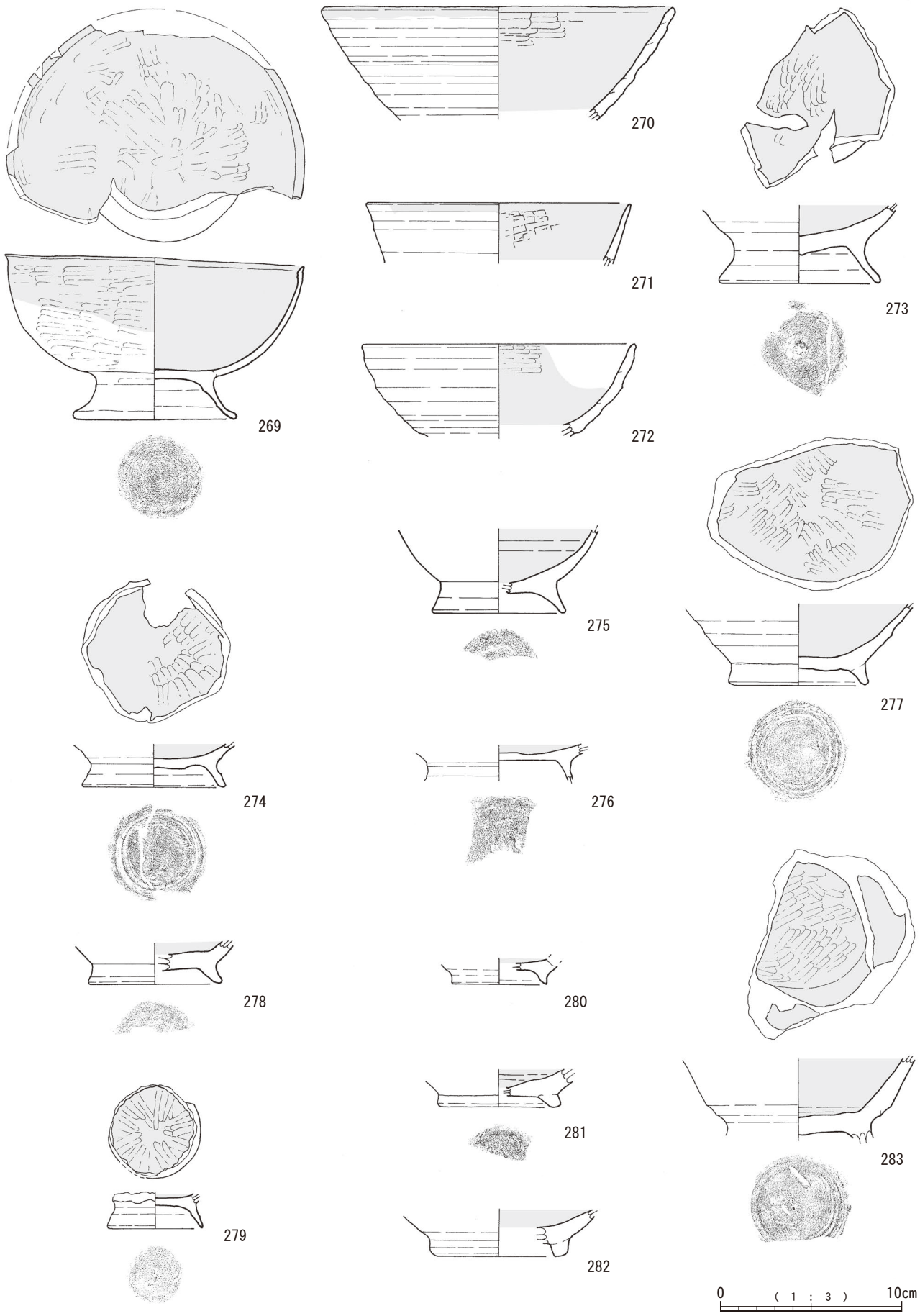
249 ～ 253は，小型の甕である。251・253は，他と比べ，器壁が薄く，内面のケズリも不明瞭で特徴的である。



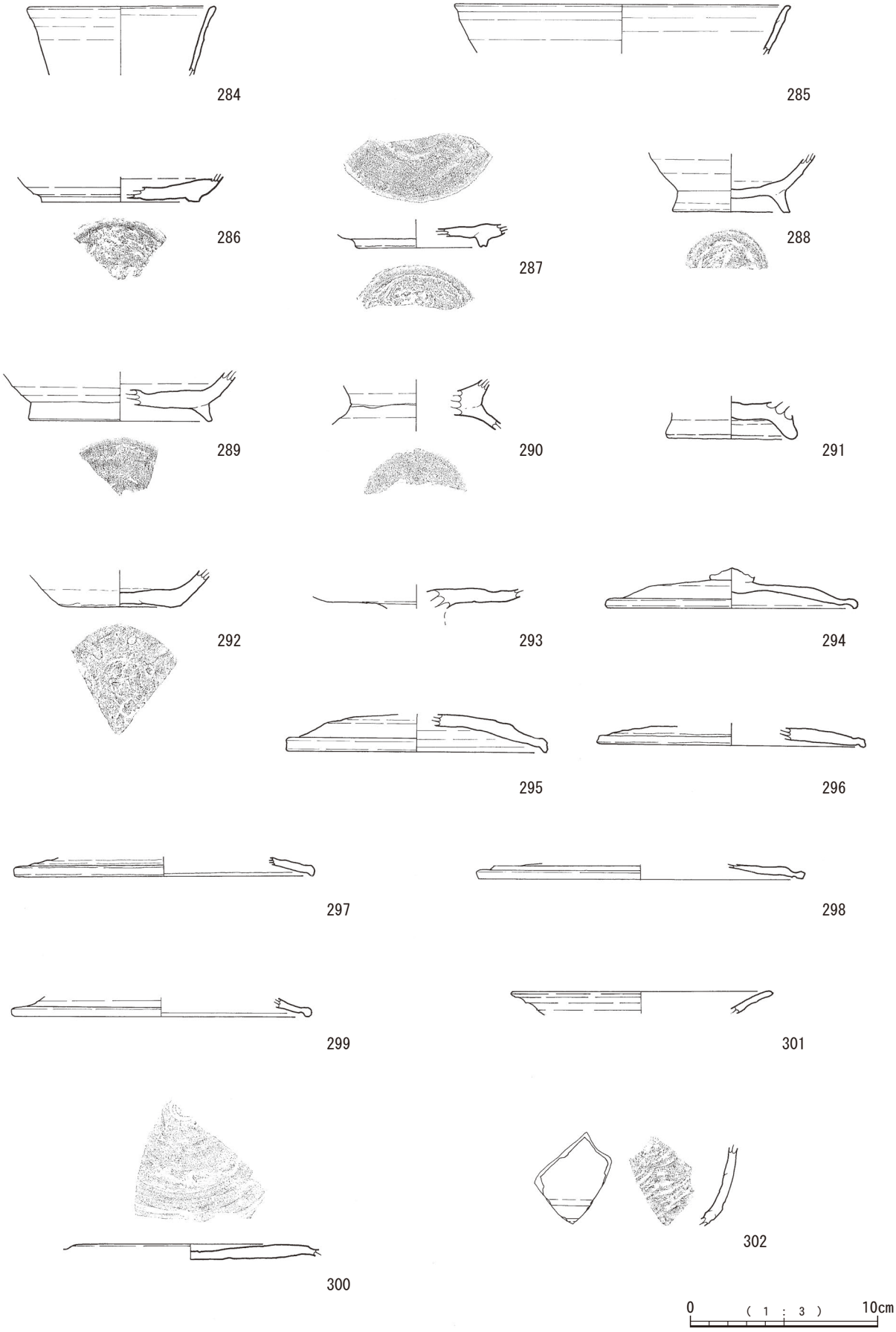
第50図　古代の遺物⑦



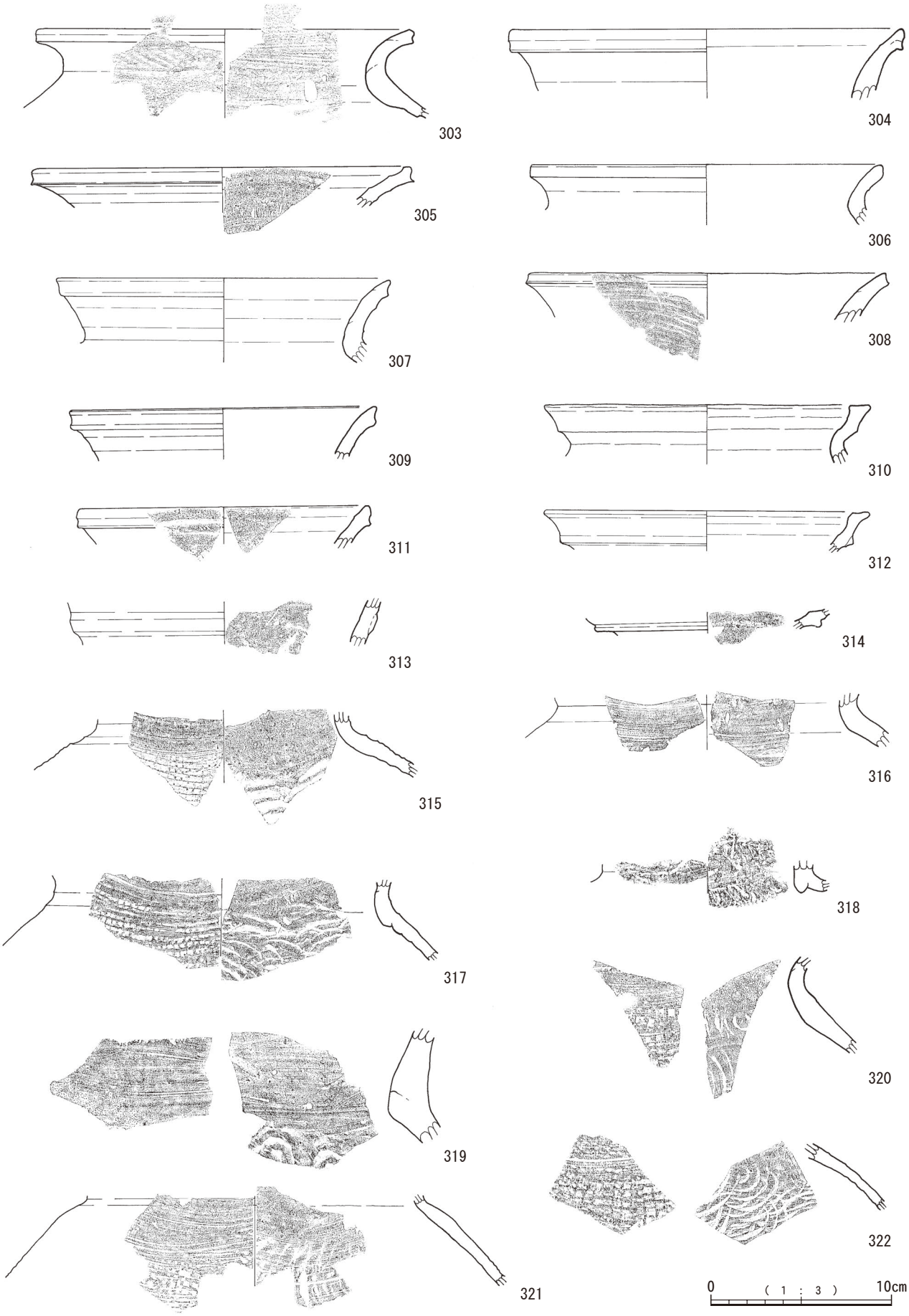
第51図　古代の遺物⑧


269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
0
(1 : 3)
10cm

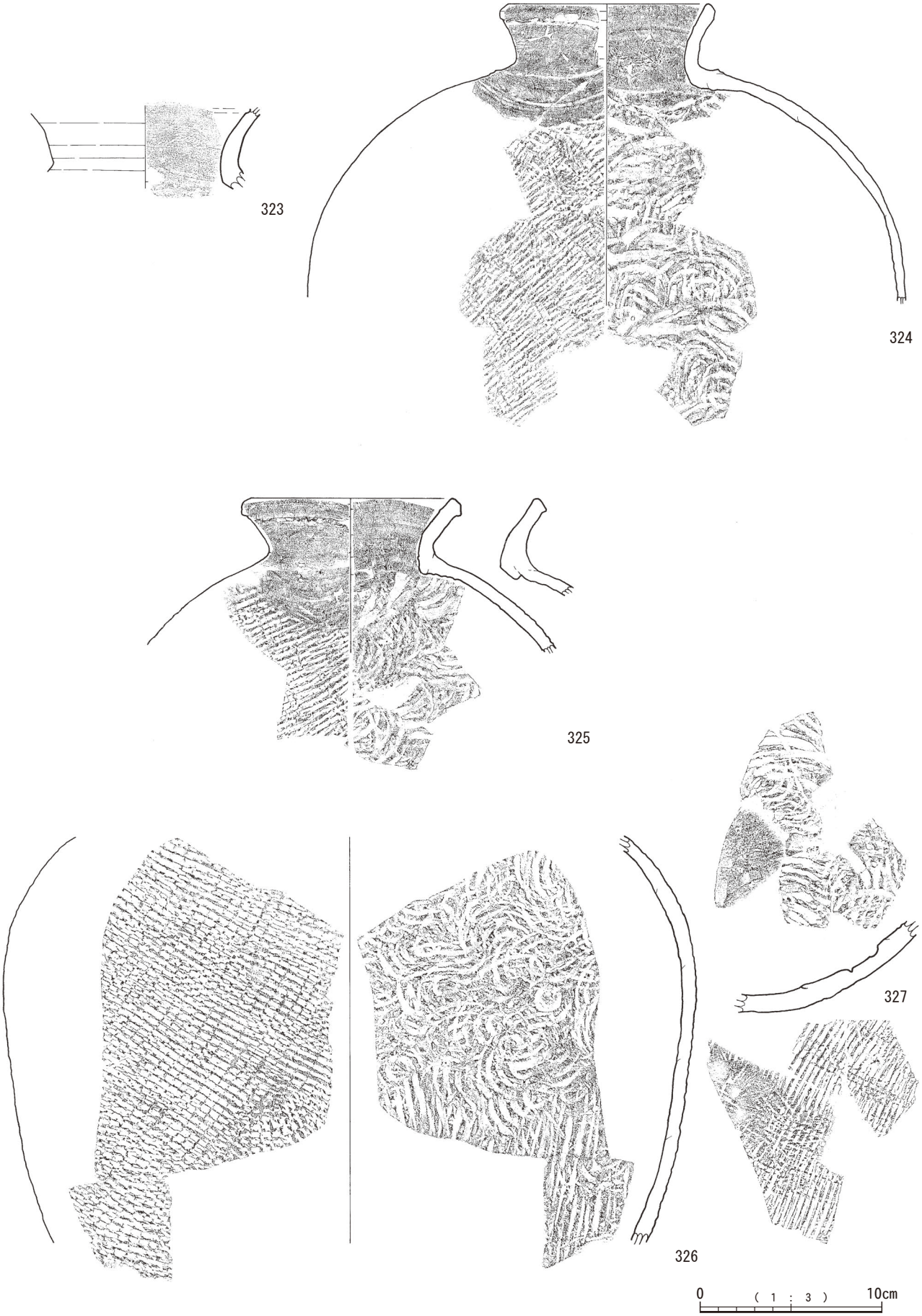
第52図　古代の遺物⑨


284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
301
300
302
0
(1 : 3)
10cm

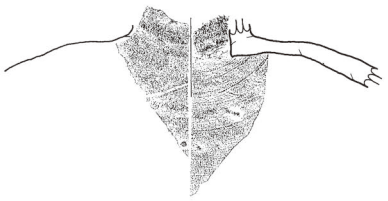
第53図　古代の遺物⑩


303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
0
(1 : 3)
10cm

第54図　古代の遺物⑪



第55図　古代の遺物⑫



328

329

0 （1：3） 10cm

第56図　古代の遺物⑬

254は，頸部から胴部である。胴部は球状に膨らむ。

255・256は，鉢形に近い甕である。口径に対して器高が低く，胴部に丸みがあり中華鍋形に近い。10世紀以降に出現するとされる。

257は，底部が平底となるが，内面のケズリが明瞭なため甕とした。258は胴部で，外面は細かく丁寧なハケ目，内面はユビオサエで調整された特徴的なものである。259・260は，外面に細かい格子目タタキ，内面はケズリを施すものである。外面調整については須恵器の技法で，内面調整と焼成は土師器の技法であり，折衷的なものである。

甑（第51図　261 ～ 268）

261・262は，把手を有するものである。ただし，把手は基部近くで欠損しているため，全形は明らかではない。263 ～ 265は，口縁部が直行するもので，口唇部は丁寧に整えられ，263・264は外面には平行に引かれた明瞭なハケ目が確認できる。

266は口縁部片で，波状口縁とみられるもので，波頂部にはコブ状の膨らみを有する。267は，底部片の資料である。底部は平たく，筒状の器形となるもので，内面にはヘラケズリ・ユビオサエの痕跡が残る。底部内面の下端部にも，横方向のヘラケズリの痕跡がみられる。

268は，把手である。小ぶりで，261 ～ 267とは別個体であると考える。

⑵　黒色土器（第52図　269 ～ 283）

269 ～ 283は，いずれも内面が黒色で，内面にはヘラ状工具によるミガキが施される。中には，底部が残存しないものもあるが，基本的には高台がつく椀で，283のみ鉢である。

269は，完形復元が可能なものである。高台は「ハ」字状に開き，約2.5cm の高さがある。胴部は底部から丸みを帯びながら立ち上がり，口縁端部はわずかに反る。全体的に，器壁は薄く丁寧に作られていることから，金属器等を模倣した可能性も考えられる。

270～272は，口縁部から底部付近にかけての破片である。270は，胴部から緩く口縁部に立ち上がり，271は非常に薄手で，口縁から胴部にかけて直線的に立ち上がる。272は，胴部全体は丸みを帯びる数条の段があり，外面に横位のハケ目がみられる特徴的な調整となっている。

273 ～ 278は，底部及び底部付近で，比較的高い高台を有し，特に273は高台部だけで約３cm の高さがある。277・278は，高台の高さは低めである。279・280は，小型の椀で，279は見込みに放射状のミガキが確認され，高台は，約1.5cm の高さがあるが，器壁が薄手である。

281・282は，内面の風化が激しいが，高台部分のみ赤色胎土となるもので，赤色高台椀に該当する。281は高台が若干低めだが，厚手のつくりとなっている。

283は，椀である。口縁部と高台部分が欠損し，胴部は高台脇から腰部で屈曲し，胴部は湾曲しながら口縁に向かって開く器形である。

⑶　須恵器（第53 ～ 60図　284 ～ 368）

ア　食膳具

椀・坏（第53図　284 ～ 292）

284・285は，非常に薄手のつくりの椀もしくは坏の口縁部付近で，いずれも直線気味に立ちあがり口唇部付近でわずかに外反する。

286 ～ 291は，高台を有するものである。286・287は，断面台形状の低い高台がつく。288 ～ 290は，比較的高い高台を有するが，290は高台接地部分が欠損する。291は，高台に厚みがあり，全体的に器壁も厚い。

292は，坏の底部と考えられる。底部はヘラ切り痕が残る平底で，胴部は外方へ開く器形である。

高坏（第53図　293）

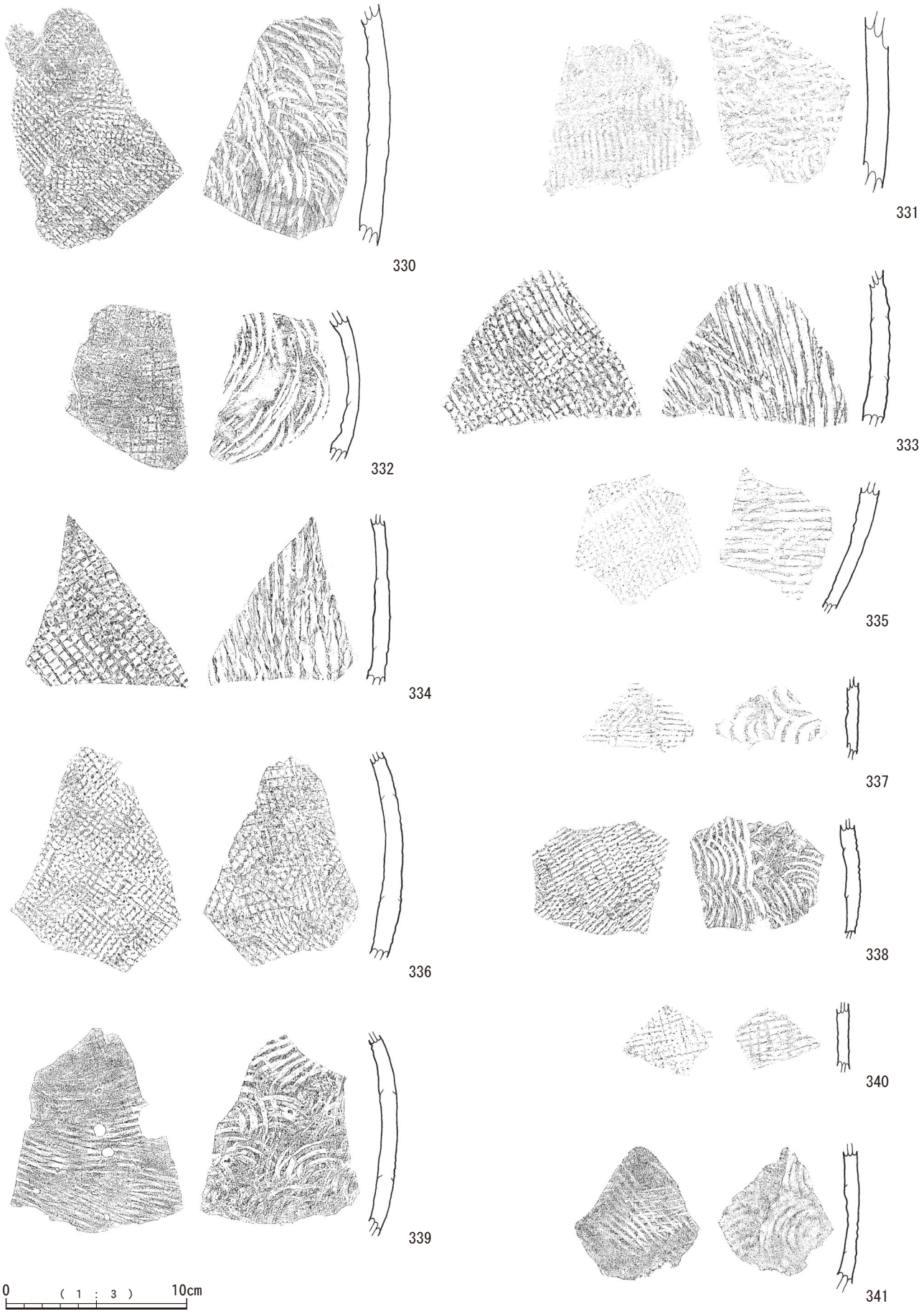
293は，高坏の坏部のみの小片で，外面はにぶい赤褐色を呈するのが特徴的である。古代の高坏は，この１点のみの出土である。

蓋　（第53図　294 ～ 300）

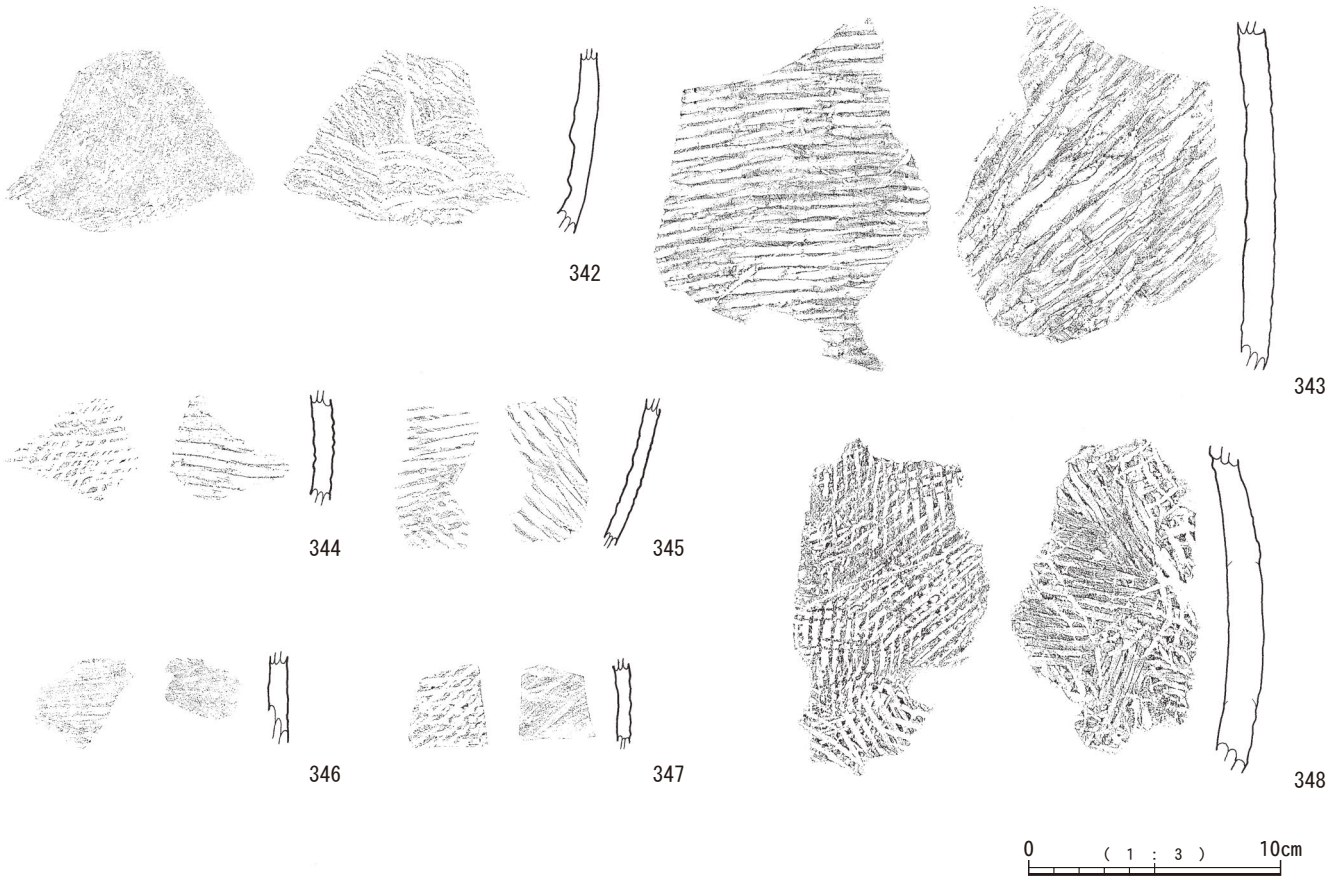
294は，つまみ～体部の破片で，上部中央には擬宝珠状のつまみを有する。295 ～ 300は，破片資料ではあるが，294と同様の形態と考えられる。端部の断面は玉縁状となっているものが多くみられる。

皿（第53図　301）

301は，口縁部の小片で，非常に薄手のつくりである。口縁部は外方へ大きく開く。



第57図　古代の遺物⑭



第58図　古代の遺物⑮

器種不明の食膳具（第53図　302）

302は，破片のため，器種は不明である。小型の鉢の可能性がある。

イ　貯蔵具

甕・壺（第54～60図　303～368）

303～368は，破片資料で判別が困難なものも多いため，甕・壺としてまとめて記述する。

303～313は，口縁部付近の破片である。口縁部下が突帯状となるものがある。310・312は，口縁部と頸部の間でさらにもう一度屈曲させ，二重口縁状となる。また，口唇部は平坦である。

313・314は，口縁部下の破片である。310等と同様に横方向に突帯状の稜を巡らす。

315～322は，頸部から肩部にかけての破片である。いずれも，内面には同心円状当具痕が確認される。外面については，格子目タタキ痕が残るものが多い。319は，厚みがあり大ぶりで，大型製品であった可能性がある。

323～329は，壺の可能性があるものである。324～326・328・329は，頸部または肩部上部が締まるため壺としたが，内面に当具痕が確認されるものも多く含まれ，検討を要する。324・325は，口縁部から胴部まで残るもので，外面には格子目タタキ痕，内面には同心円状当て具痕が確認される。328・329は，頸部から肩部まで残存する。

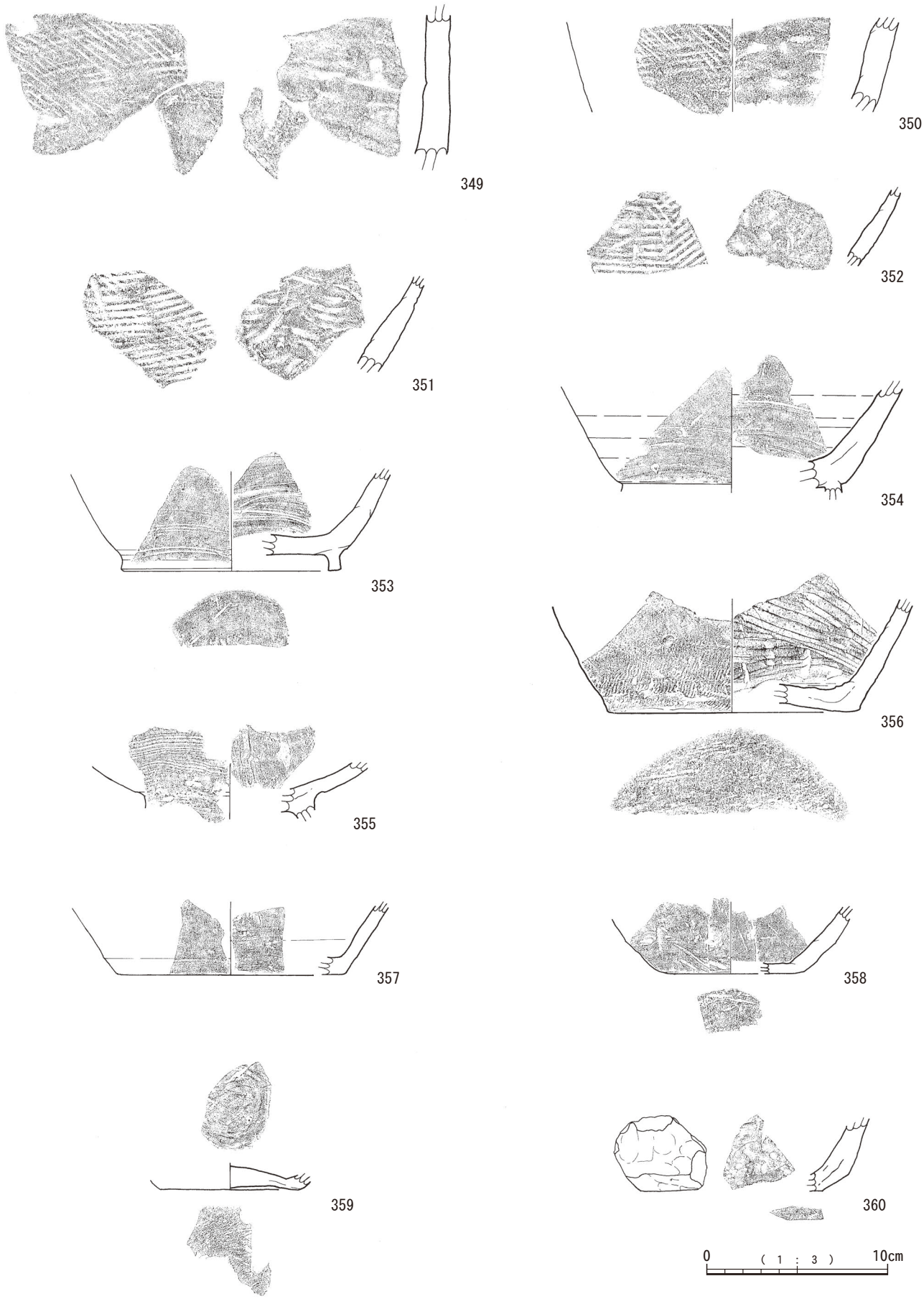
330～348は，胴部の破片である。330～332は，外面が格子目タタキ，内面が同心円状当具痕，333～335は外面が格子目タタキ，内面は平行当具痕の残るものである。九州で生産された須恵器の特徴として，内面の上半～半ばまでは同心円状当具痕，内面の底部近くには平行当具痕が施されるが，これらについても内面の当具痕からおおよその部分を推定した。

336・340は，内外面ともに格子目の痕跡が残るもので，類例が少ない資料である。337・338は，外面には細かい格子目タタキ痕，内面は同心円状当具痕が残る。

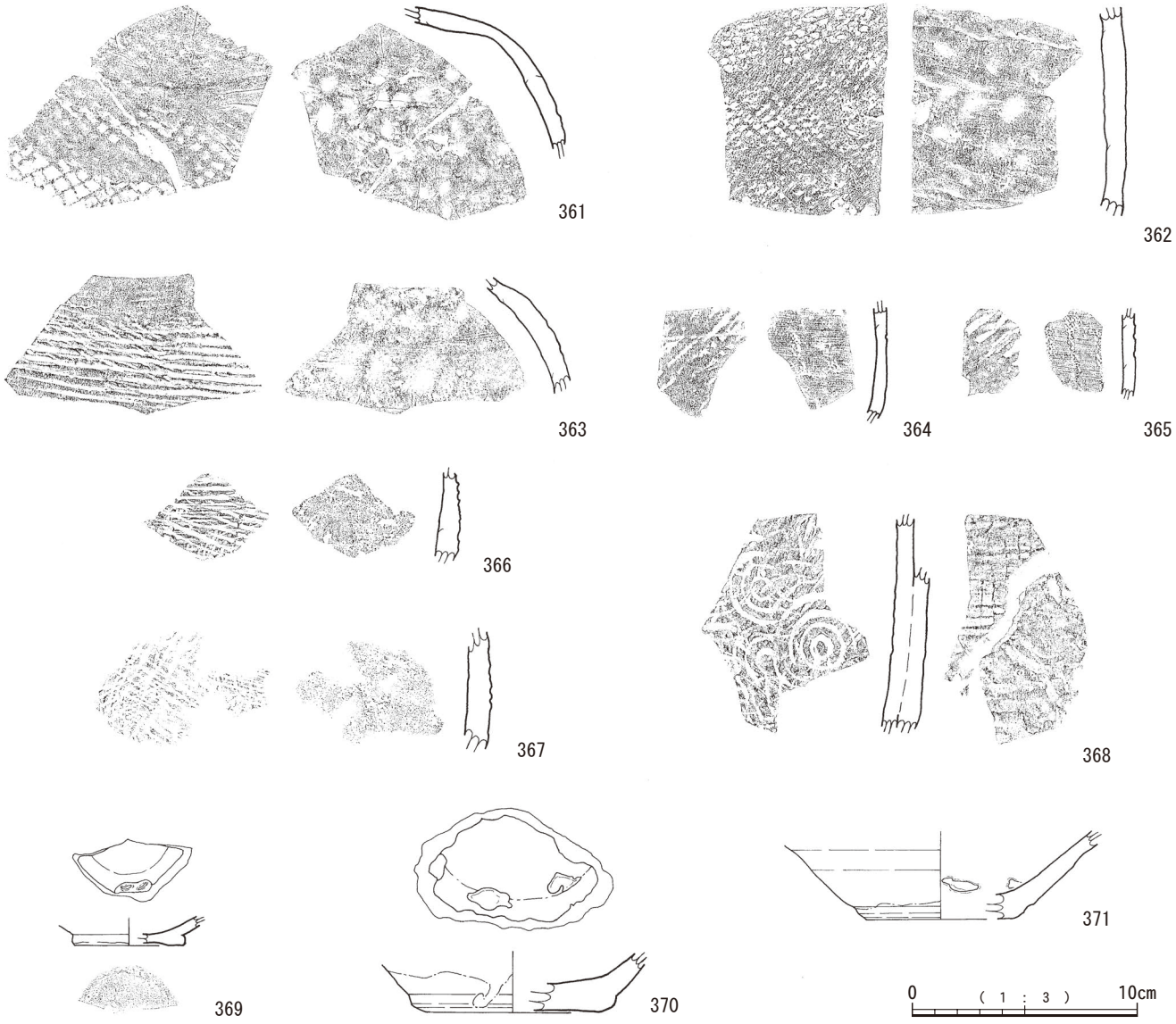
339・341は，外面は平行タタキで内面が同心円状当具痕，342は，外面は不明瞭ではあるが，平行タタキの後，強めのナデが施されたとみられる。内面には，同心円状当具痕が確認される。343～347は内外面に平行タタキ，平行当具痕，348は外面が格子目タタキ，内面が平行当具痕が不規則に入るものである。

349～360は，体部下半底部付近の破片を集めた。

349～352は，外面には平行タタキ痕，内面にはユビオサエ，351は同心円状当具痕が確認される。



第59図　古代の遺物⑯



第60図　古代の遺物⑰

353 ～ 355は，高台付きの底部付近である。薬壺形と考えられる。354は，外面底部付近にヘラケズリが施される。その上部については，ユビオサエなどが確認される。

356 ～ 360は，平底の底部付近のものである。いずれも，タタキ痕は確認されない。356は，若干上げ底となるもので，小型の壺の可能性がある。

361 ～ 363は，内面には斑点状の凹みが確認される。これは，布を巻いた小石による当具痕とされてきたものである。ただし，指頭や掌の可能性も指摘されてきており，ここではユビオサエとした。

364・365は，外面に格子目タタキ痕が，内面には布目及び撚り糸状の圧痕がみられる。

366・367は，焼成不良とみられるもので，土師質に近く，外面に平行タタキ痕がみられる。

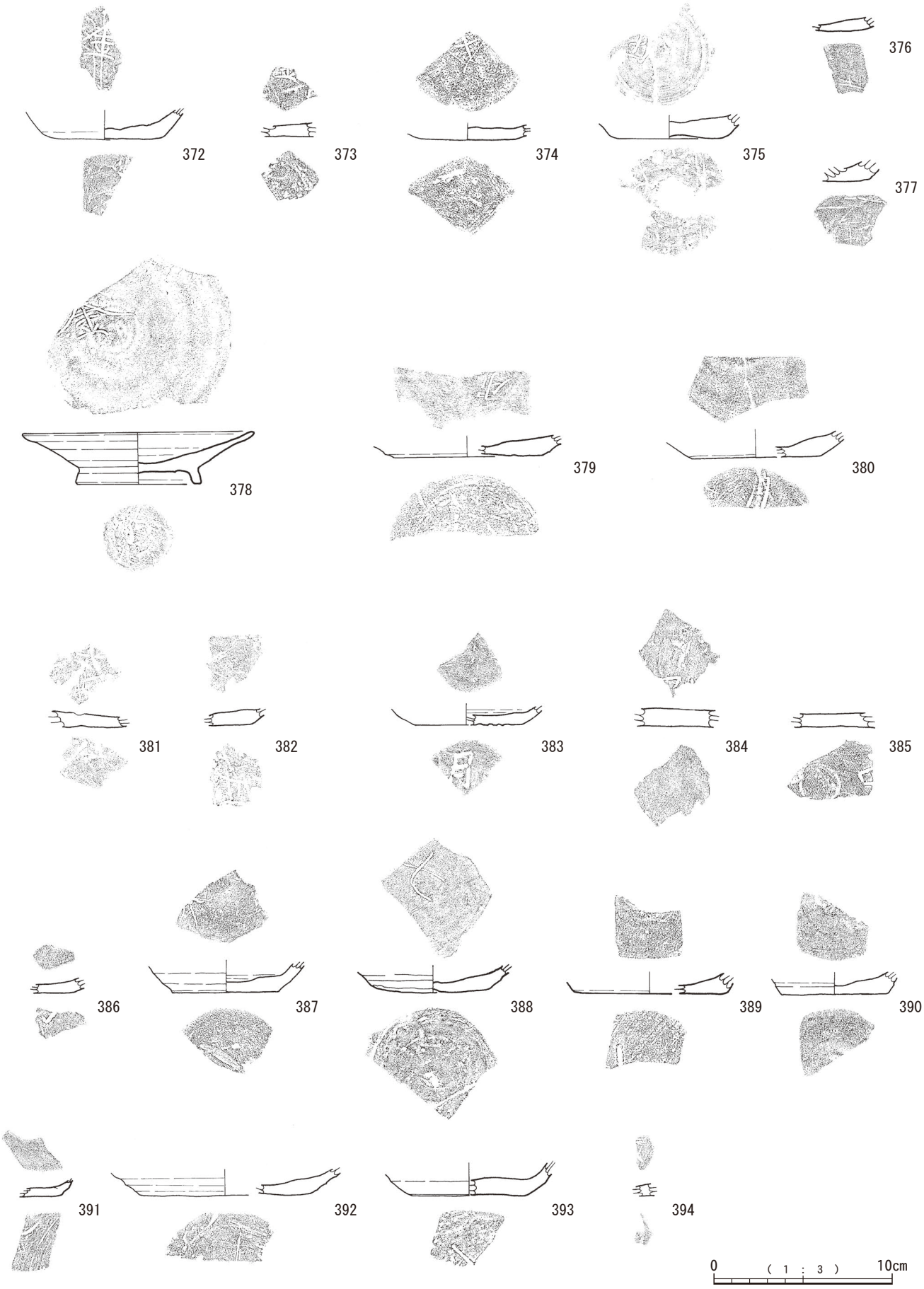
368は，焼成中において，釉着した破片である。このように，破片が釉着して残ったままのものも製品として流通していたことが分かる。

⑷　越州窯系青磁（第60図　369 ～ 371）

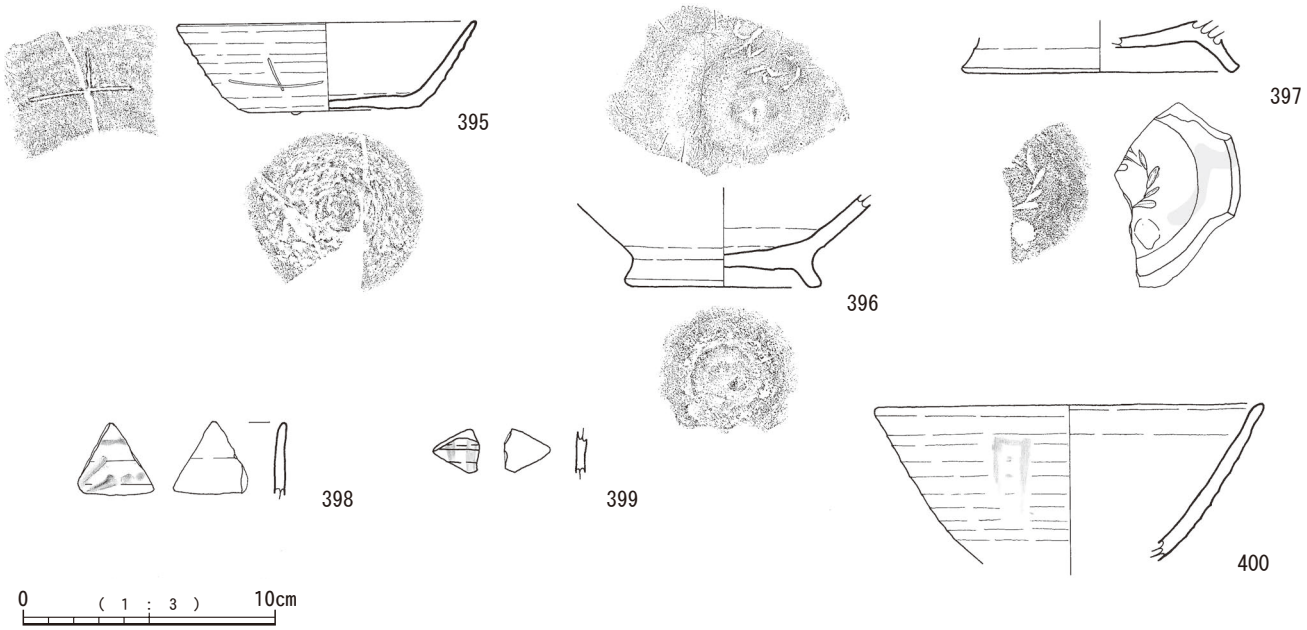
369 ～ 371は，いずれも内面見込みに目跡があり，底部外面にも同様のものが観察される。いずれも粗製で，器面の内外の発色が異なり，釉薬にはムラがある。胎土は粗く，黒色の斑点を含む。胴部下半及び底部付近は，ほとんどが無釉である。

369は，小型の碗とみられる。高台はやや上げ底で，円盤を貼り付けたものである。大宰府分類の，越州窯青磁Ⅱ類にあたる。

370は，大碗もしくは鉢で，比較的大型のものである。


372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
0
(1 : 3)
10cm

第61図　古代の遺物⑱



第62図　古代の遺物⑲

大宰府分類の大椀・鉢Ⅱ類にあたる。371は，大型の碗で，大宰府分類の大椀Ⅰ類にあたる。

⑸　文字資料（第61 ～ 62図　372 ～ 400）

372 ～ 400は，土器の表面にヘラ書きもしくは墨書による文字等が確認されるもので，他の土師器，須恵器と区別して掲載した。

372 ～ 397は，土師器の焼成前にヘラ状工具を用いて文字等が書かれた，刻書土器の一群である。

372 ～ 378は「金」，またはその可能性がある文字の一部が書かれているものをまとめた。ただし，375は非常に細く繊細に書かれ，376は小片で「七」のようにも見え，判読が困難である。378は，高台付皿の内面見込みに「金」の文字が明瞭に書かれている。

379 ～ 387は「月」，またはその可能性がある文字の一部が書かれている。379・381は「肥」もしくは，「月」の文字とその前にもう一文字が書かれていた可能性が考えられる。384・387は見込み部，385・386は底面にヘラ書きが確認できるが，小片のため判読は困難である。

388は，内面見込みに「七」の文字が，明瞭に書かれている。

389 ～ 394は，文字の一部もしくは記号とみられるヘラ書きが確認できるが，判読できない資料である。

395は，完形の土師器坏の胴部外面に「十」または「丄」と考えられる文字が，鋭いヘラ状の工具を用いて書かれている。

396・397は，土師器埦に文字等が書かれている。396は，埦の内面見込みに判読できない文字または記号と，「子」の字が確認される。397は，底部及び高台のみの残存であり，底部見込みに草花文に似た文様が月桂冠のような配置で描かれている。また，文様付近には赤色顔料と思われる物質が付着している。

398 ～ 400は，赤外線を用いて観察した結果，墨書が書かれていることが確認された。398・399は，土師器に墨書が書かれる。これらは，「月」の可能性があるものの，小破片のため判読不明である。400は須恵器埦の胴部に，「月」とみられる墨書が確認できる。

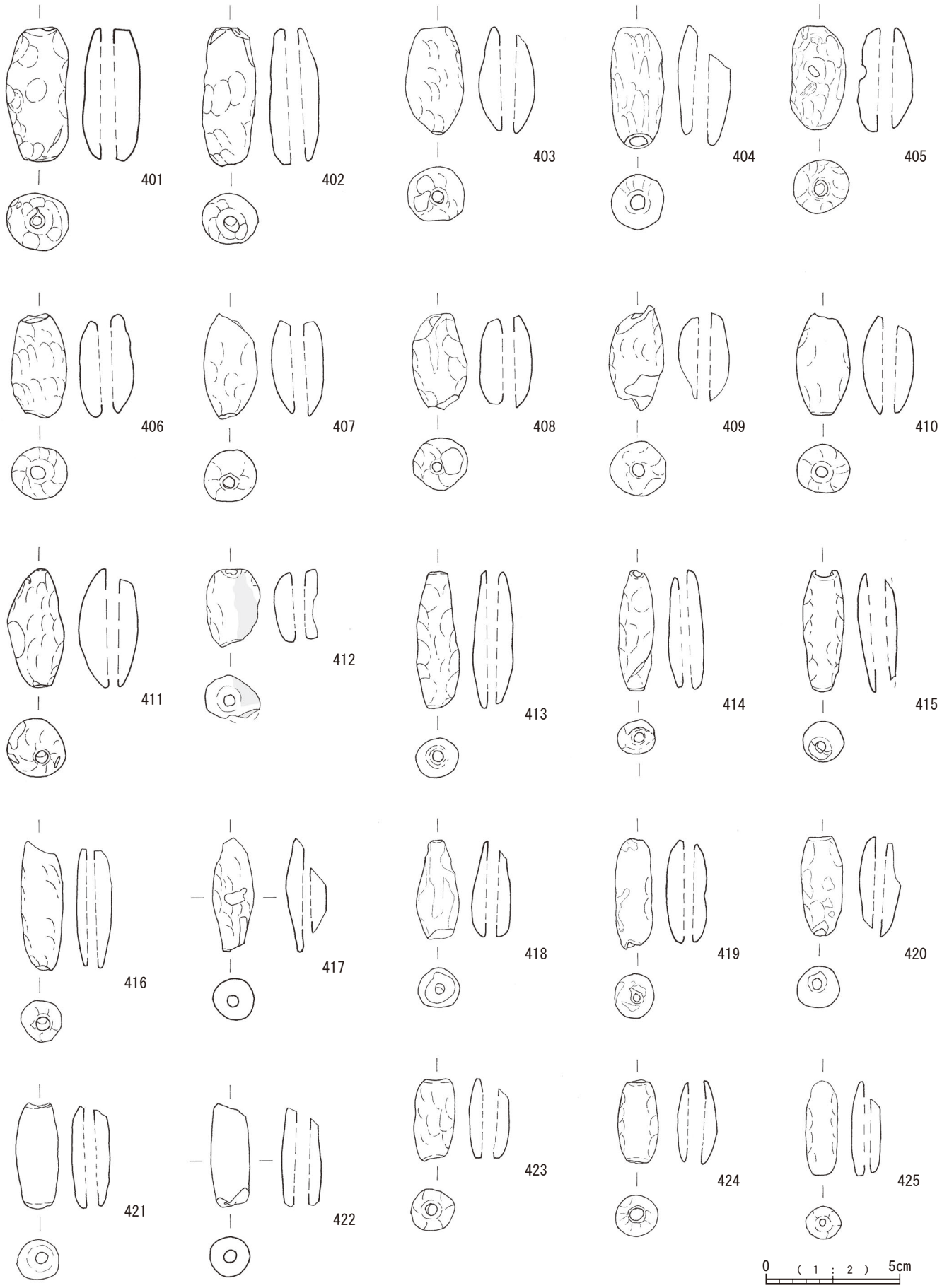
⑹　その他（第63・64図　401 ～ 444）

土錘（第63・64図　401 ～ 432）

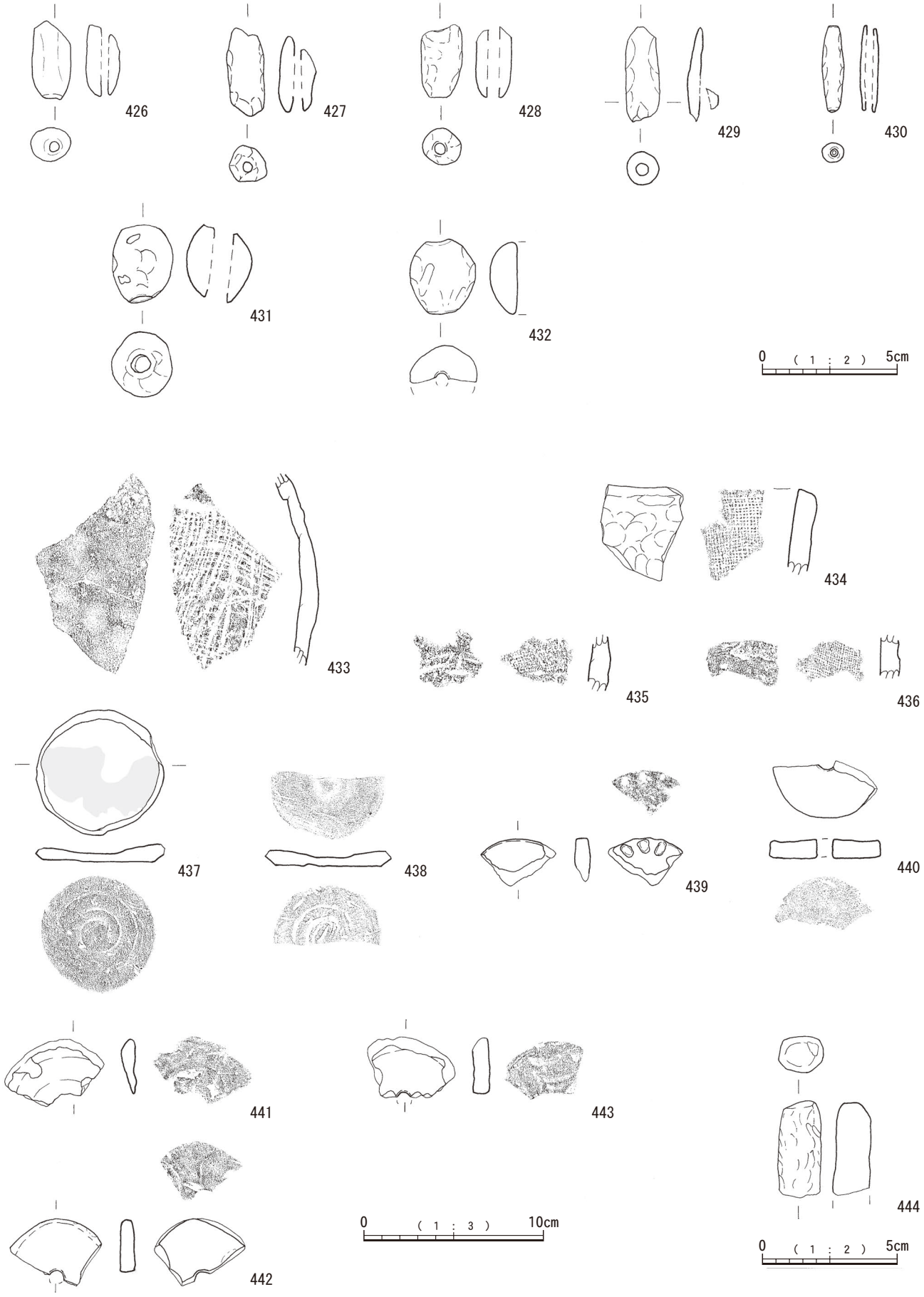
紡錘形（俵型）・水滴形・球形などの形状があり，長軸方向に孔をもち，漁網錘として用いられたと考えられる。長軸の長さ5.2 ～ 2.7cm，幅2.7 ～ 0.8cm で，重量は，24.4 g ～ 1.8g と様々である。

401 ～ 404及び411は，長さ４cm 以上のやや縦長の紡錘形，405 ～ 410は長さが４cm 未満で水滴形で，いずれも，幅は２cm 程度，孔の直径は約４～６㎜程度である。多くは，製作時のユビオサエ痕が残る。404はミガキの痕跡もあり，405は外面にモミ圧痕，405・410は赤色顔料の付着が認められる。

413 ～ 430は，幅1.6cm 以下のやや細身で縦長のものである。表面は製作時のユビオサエが確認できるものがほとんどであるが，414は粘土を上から重ねた跡が残り，つくりが粗く，415は赤色顔料の付着が確認できる。421・422は表面が摩滅しており，調整痕が確認できない。430は最も小ぶりで，幅８㎜，孔の直径はわずか３㎜し


401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
0 (1:2) 5cm

第63図　古代の遺物⑳


426
427
428
429
430
431
432
0 (1 : 2) 5cm
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
0 (1 : 3) 10cm
0 (1 : 2) 5cm

第64図　古代の遺物㉑

かない。412及び431・432は，長さ・幅がほぼ同じで球形に近く，いずれもナデが確認できる。

焼塩土器（第64図　433 ～ 436）

433～436は，内面に布目圧痕が残る粗雑なつくりの土器で，焼塩土器と考えらえる。433の内面は，ナデによってほぼ消されているものの，わずかに布目圧痕が確認できる。また，434の内面で観察される布目は非常に目が粗く，大型の土器と想定される。435・436は，内面の布目がやや細かい。外面についてはユビオサエ・ナデなどで整形されており，円錐形の器形であると想定できる。

円盤状製品（第64図　437 ～ 439）

437・438は，土師器坏の底部を再加工した円盤状製品である。側面は，丁寧に面取りされている。

439は，円盤状製品に含めたが，紡錘車の可能性もある。残存部には穿孔は認められない。端部付近に，放射状に短めのユビオサエ状の文様が連続して施される。

紡錘車（第64図　440 ～ 443）

440 ～ 443は，紡錘車である。440は，専用品としてつくられたもので，本県では転用品が多く，希少である。441 ～ 443は，土師器坏底部を利用した転用品である。

棒状土製品（第64図　444）

444は，小指大の棒状土製品である。表面はナデ，ユビオサエが確認でき，孔や空洞部はない。把手等の土器の一部の可能性が考えられるが，形状・用途等は不明である。

【参考文献】

岩元康成2012「鹿児島県の遺構内出土完形遺物の組成」『中近世土器の基礎研究』24　日本中世土器研究会

神野恵2010「土師器の種類・器種」「須恵器の種類」『図説 平城京事典』柊風舎

中村和美1994「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の食器について - 土師器の変遷を中心に -」『中近世土器の基礎研究』X　日本中世土器研究会

西弘海1982「土器様式の成立とその背景」小林行雄博士古稀記念論文集刊行会編『考古学論考』平凡社

山本信夫1990「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」乙益重隆先生古稀記念論文集『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

第15表　古代　土師器・須恵器・青磁観察表(1)

※表中，層位内の「マ」は古代以外の時代の遺構内埋土から出土したもの
※接合資料について…取上番号ありの遺物＋あり＝「複数の出土区」／あり＋なし＝「アリの出土区他」／なし＋なし＝最も離れた「２つの出土区（他）」

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区		層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
44	167	土師器	埦	D-I	44·45	Ⅱb下	底部付近	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄橙	浅黄橙	白粒，石英，長石，角閃石	-	
	168	土師器	埦	G	45	Ⅱb下	底部付近	-	7.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤色小石，白粒，長石	240·241	
	169	土師器	埦	-	-	マ	底部付近	-	(8.2)	-	ナデ	ナデ	淡赤橙	褐灰	白粒，黒粒	3789	
	170	土師器	埦	H·I I	52-55 51	I Ⅲ	底部付近	-	(8.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，長石，角閃石	-	
	171	土師器	埦	F	45	Ⅱb下	底部付近	-	7.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒，白粒，黒粒，長石	445	黒色高台，高台の接地面に煤付着
	172	土師器	埦	F	44	Ⅱb下	底部付近	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，長石	447	
	173	土師器	埦	H	59	I	底部付近	-	(9.0)	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒，白粒，長石	-	貼り付け高台
	174	土師器	埦	G	59	マ	底部付近	-	(5.6)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，小石	4566	
	175	土師器	埦	G	45	Ⅱb下	口縁～底部	14.4	7.8	4.7	ケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄橙	黄橙	赤小石，白粒，角閃石，石英，長石	98	
	176	土師器	埦	F	50-53	I	底部付近	-	(8.0)	-	ケズリ・回転ヨコナデ	ケズリ・回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒，白粒，石英，長石，角閃石	-	
	177	土師器	埦	E	70	Ⅱb	底部付近	-	6.0	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	黄橙	赤色小石，白粒，長石，角閃石	-	
	178	土師器	埦	G	45	Ⅱb下	口縁～底部	(14.2)	(8.4)	6.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒，精良	385	
	179	土師器	埦	F	68	Ⅱb下	底部付近	-	7.0	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒粒，白色小石，長石	-	
	180	土師器	埦	F	46	マ	底部付近	-	(7.2)	-	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒，白粒，黒粒，小石，長石	-	SP61内遺物
	181	土師器	埦	G	58	Ⅱc	口縁～底部付近	(12.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤色小石，白粒，黒粒，長石	-	赤色高台・煤付着
	182	土師器	埦	I	52他	Ⅲ他	口縁～底部	-	7.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	白粒，石英，長石，角閃石	3197	
	183	土師器	埦	G	44	Ⅱb下	底部付近	-	(8.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤粒，白粒，長石	258	
	184	土師器	埦	D-F	51-53	I	底部付近	-	7.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	浅黄橙	赤粒，黒粒，長石	-	
	185	土師器	埦	G	45	Ⅱb下	底部付近	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	摩滅	橙	橙	赤粒，白粒，長石，角閃石	450	
	186	土師器	埦	E	70	Ⅱc	底部付近	-	7.8	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	浅黄橙	赤粒，白粒，長石	2009	
45	187	土師器	埦	I	52	Ⅱc	底部付近	-	7.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	灰褐	灰色小石，赤粒，白粒，黒粒，長石	3325 3342	
	188	土師器	埦	F	45	Ⅱb下	底部付近	-	(7.0)	-	回転ヨコナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	赤粒，白粒，石英，長石	-	
	189	土師器	埦	H	45	Ⅱb下	底部付近	-	8.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石，黒粒，長石	266	
	190	土師器	埦	F	45	Ⅱb下	底部付近	-	8.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙・橙	浅黄橙	小石，石英，長石/赤粒，白粒，石英，長石，角閃石	433	赤色高台
	191	土師器	埦	I	55	Ⅱc	底部付近	-	7.6	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒，白粒，石英，長石	3443	高台見込みに煤付着
	192	土師器	埦	G	53	Ⅲ	底部付近	-	7.2	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒	3675	
	193	土師器	埦	G·H	44·45	Ⅱb下	底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	明赤褐	にぶい赤褐	赤粒，白粒，黒粒，石英	-	
	194	土師器	埦	F・G	45	Ⅱb下	底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，長石，角閃石	449·173	
	195	土師器	埦	H	61	Ⅲ	底部付近	-	(6.6)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石，白粒，黒粒	4818	
	196	土師器	埦	H	58	マ	底部付近	-	6.3	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，灰粒，赤色小石	4739	白色胎土

第16表　古代　土師器・須恵器・青磁観察表(2)

※接合資料について…取上番号ありの遺物＋あり＝「複数の出土区」／あり＋なし＝「アリの出土区他」／なし＋なし＝最も離れた「２つの出土区（他）」

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区		層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
46	197	土師器	坏	I	52	Ⅱb下	完形	12.8	6.6	4.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤色小石，長石，角閃石	-	ヘラ切り，(内面に墨書か)
	198	土師器	坏	G E・F	44 44・45	Ⅱb下	口縁～底部	12.0	6.1	4.5	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄褐	浅黄橙	赤粒，白粒，白色小石，長石	257	ヘラ切り
	199	土師器	坏	I	59	Ⅲ	口縁～底部	12.4	6.8	5.0	ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	赤粒，白粒，黒粒，石英，角閃石	4977	ヘラ切り
	200	土師器	坏	G	57	Ⅲ	底部付近	-	6.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石，白粒，長石	-	ヘラ切り
	201	土師器	坏	G	45	Ⅱb下	底部付近	-	6.1	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤色小石，白粒，石英，長石，角閃石	169	ヘラ切り
	202	土師器	坏	G	58	Ⅱc	底部付近	-	5.9	-	ナデ	回転ヨコナデ	明赤褐	橙	赤粒，石英，長石，角閃石	3745	底面に沈線，ヘラ切り
	203	土師器	坏	G	45	Ⅱb	底部付近	-	5.5	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	赤粒，白粒，長石	2	ヘラ切り
	204	土師器	坏	I	63	マ	底部付近	-	(7.4)	-	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	白粒，灰粒，小石，長石	4885	ヘラ切り
	205	土師器	坏	E	69	Ⅱb	底部付近	-	5.8	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，灰粒，長石	-	ヘラ切り
	206	土師器	坏	D	70	Ⅵa上	底部付近	-	(7.0)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	黄橙	赤粒，白粒，黒粒，角閃石	-	ヘラ切り
	207	土師器	坏	G	45	マ	底部付近	-	(5.6)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒，角閃石	-	ヘラ切り
	208	土師器	坏	F	45	マ	底部付近	-	6.7	-	ナデ	ナデ	橙	橙	白粒，黒粒，小石，長石	-	ヘラ切り
	209	土師器	坏	H	57	マ	底部付近	-	5.0	-	ナデ	ナデ	橙	橙	白粒，黒粒，長石	-	ヘラ切り
	210	土師器	坏	F	69	Ⅱ	底部付近	-	6.2	-	ナデ	ナデ	黒褐，にぶい橙	にぶい褐	白粒，黒粒，長石	-	ヘラ切り
	211	土師器	坏	H	55	マ	底部付近	-	5.6	-	ナデ	ナデ	明灰褐	褐灰	白粒，黒粒，長石	-	ヘラ切り
	212	土師器	坏	I	63	マ	底部付近	-	(4.8)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒粒，長石，角閃石	4747	ヘラ切り
	213	土師器	坏	G	64	マ	底部付近	-	(5.4)	-	ナデ	ナデ	灰白	灰白	白粒，黒粒，小石，角閃石	4764	ヘラ切り
	214	土師器	坏	F	58	マ	底部付近	-	5.6	-	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒，白粒，黒粒，長石	-	ヘラ切り
	215	土師器	坏	F	69	Ⅱb	底部付近	-	6.2	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，灰粒	-	ヘラ切り
	216	土師器	坏	F	69	Ⅱ	底部付近	-	5.6	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，長石	-	ヘラ切り
	217	土師器	坏	H	60	Ⅲ	底部付近	-	6.0	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白粒，黒粒	4641	底部のヘラ切りナシ
	218	土師器	埦・坏	G	67	マ	口縁～胴部	(12.9)	-	-	ナデ	ナデ	黒褐	褐灰	白粒，黒粒	5033	
	219	土師器	埦・坏	E	52	Ⅲ	口縁～胴部	(12.7)	-	-	ナデ	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	橙	白粒，黒粒，長石	-	
	220	土師器	埦・坏	I	54	マ	口縁～胴部	(12.0)	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，黒粒	-	白色胎土，焼成堅緻，(搬入系)
47	221	土師器	高坏	G	65	マ	脚部	―	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	-	赤粒，石英	4901	白色胎土
	222	土師器	蓋	H・I	52-55	I	つまみ	2.8	※つまみ部直径		ナデ	-	浅黄橙	-	赤粒，灰粒，白粒，長石	-	
	223	土師器	蓋	E	49	I	つまみ	2.6	※つまみ部直径		ケズリ・ナデ	-	橙	-	赤粒，白粒，黒粒，石英	-	
	224	土師器	蓋	I	52	マ	つまみ	3.2	※つまみ部直径		ケズリ・ナデ	ナデ	橙	-	赤粒，灰粒	-	
	225	土師器	蓋	H	56	マ	つまみ	-	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，灰粒	-	
	226	土師器	蓋	I	63	マ	体部	15.2	-	1.2	ケズリ・ナデ	ナデ	浅黄橙，黒褐色	浅黄橙	赤粒，灰粒，角閃石	5014	
	227	土師器	蓋	H	51	マ	体部	15.0	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	赤粒，長石	-	
	228	土師器	皿	H	60	Ⅲ	完形	12.4	6.2	3.3	ナデ	ナデ	橙	橙	赤粒，白粒，黒粒	-	高台付皿，内外面に煤付着
	229	土師器	皿	H	56・57	Ⅲ	底部付近	-	8.0	-	ケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒，白粒，長石	-	高台付皿，痘痕状の剥落
	230	土師器	皿	E	50	Ⅱb	口縁～底部	(15.9)	(12.8)	2.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒	3171 3172	ヘラ切り
	231	土師器	皿	G	45	Ⅱb	完形	14.0	9.6	1.8	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石，黒粒，長石	424	ヘラ切り
	232	土師器	皿	I	59	マ	完形	14.6	10.0	2.1	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，黒粒，長石，角閃石	5183	ヘラ切り
	233	土師器	不明	F	67	Ⅱb	底部	-	(6.6)	-	ケズリ・ナデ	ナデ	赤橙	灰白	精良，赤粒，白粒，長石	-	赤色顔料塗布，水銀朱ではない
	234	土師器	壺	F	52	Ⅵa上	頸部	-	-	-	ナデ	ケズリ・ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	赤粒，白粒，黒粒，赤色小石，長石	-	
	235	土師器	壺	G-I	45・46	Ⅱb下	頸部	-	-	-	タタキ	当具痕	浅黄橙	浅黄橙	白粒，灰粒，長石	-	焼成不良の須恵器の可能性あり
	236	土師器	壺	I	54他	Ⅲ他	完形	8.1	7.2	8.4	ケズリ・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	精良，赤粒，白粒，長石	-	白色胎土，焼成不良
	237	土師器	鉢	G	45	Ⅱb下	胴～底部	-	8.2	-	ケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石，石英，長石，角閃石	121 129	ヘラ切り，底部に赤色顔料付着
	238	土師器	鉢	F・G	-	Ⅱb	底部	-	9.6	-	ケズリ・回転ヨコナデ	ケズリ・ナデ	橙	橙	赤粒，白粒，石英，長石，角閃石	-	
48	239	土師器	甕	G	45	Ⅱb下	口縁～胴部	(30.6)	-	-	ナデ・ユビオサエ	ケズリ・ナデ	橙	橙	赤粒，白粒，小石，石英，長石	448	
	240	土師器	甕	G	45	Ⅱb Ⅱb下	口縁部	(28.6)	-	-	回転ヨコナデ	ケズリ・回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒	26 102	
	241	土師器	甕	G	45	Ⅱb下	口縁～胴部	(31.0)	-	-	回転ヨコナデ・ハケ目	ケズリ・回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒，白粒，黒粒，石英，小石	231	
	242	土師器	甕	E・F	51・52	I	口縁～胴部	(28.0)	-	-	ナデ・ハケ目	ケズリ・ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	白粒，黒粒，石英，長石，角閃石	-	
	243	土師器	甕	E	69	I	口縁～胴部	(29.2)	-	-	ナデ・ハケ目	ケズリ・ナデ	橙	橙	赤粒，白粒，黒粒，小石，石英，長石，角閃石	-	
	244	土師器	甕	H	55	Ⅱc	口縁～胴部	(26.0)	-	-	回転ヨコナデ・ハケ目	ケズリ・回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，灰粒，長石	3654	
	245	土師器	甕	D	64	Ⅱ	口縁～胴部	(25.6)	-	-	ナデ・タタキ・ケズリ	ケズリ・回転ヨコナデ	赤橙	にぶい赤褐	赤粒，白粒，黒粒，小石，石英，長石	-	外面に煤付着
	246	土師器	甕	G	45	Ⅱb下	口縁～胴部	(23.0)	-	-	回転ヨコナデ・瓜痕	ケズリ・回転ヨコナデ	にぶい橙	橙	白粒，黒粒，石英，長石，角閃石	277	
49	247	土師器	甕	E・F	46	Ⅱb	頸部	-	-	-	ナデ	ケズリ	橙	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒，石英，長石，角閃石	-	
	248	土師器	甕	H	45	Ⅱb下	口縁～頸部	-	-	-	回転ヨコナデ	ケズリ・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒，金雲母	-	煤付着
50	249	土師器	甕	G	45	Ⅱb下	口縁～頸部	(23.0)	-	-	ヨコナデ	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，黒粒，小石，石英，長石	2801	小型甕
	250	土師器	甕	H	61	Ⅲ	口縁～頸部	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	ケズリ・ユビオサエ	橙	橙	白粒，黒粒，長石，角閃石	4006	小型甕
	251	土師器	甕	G	45	マ	口縁～頸部	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	ケズリ・ユビオサエ	にぶい橙	にぶい橙	黒粒，赤色小石，石英，角閃石	-	小型甕
	252	土師器	甕	D	49	Ⅵ	口縁部	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	ケズリ・ユビオサエ	橙	明赤褐，褐灰	白粒，石英，長石，角閃石	-	小型甕
	253	土師器	甕	H・I	51-55	マ	口縁部	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	ケズリ・ユビオサエ	褐灰，にぶい赤褐	にぶい橙	白粒，角閃石	-	小型甕
	254	土師器	甕	E	69	I	頸部～胴部	-	-	-	ハケ目	ケズリ・ナデ	淡橙	淡橙	白粒，灰粒，角閃石	-	
	255	土師器	甕	E	70	Ⅱb	口縁～胴部	(31.6)	-	-	ハケ目・タタキ	ケズリ・ユビオサエ	淡橙	淡橙	白粒，灰粒，角閃石	-	鉢形の甕
	256	土師器	甕	F	45	Ⅱb下	口縁～胴部	(26.8)	-	-	平行タタキ	ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石，赤粒，白粒，黒粒，角閃石	436	外面に煤付着，鉢形の甕
	257	土師器	甕	D	62・63	Ⅲ-Ⅵ	胴～底部	-	(15.0)	-	ハケ目	ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	黒粒，石英，長石，角閃石	-	
	258	土師器	甕	G	45他	Ⅱb下	胴部	-	-	-	ハケ目	ケズリ・ユビオサエ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒，長石	137	
	259	土師器	甕	G	45	Ⅱb	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ケズリ・ナデ	赤灰	にぶい黄橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒，小石，石英，長石，角閃石	21	
	260	土師器	甕	I	59	Ⅲ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ケズリ	橙	淡橙	赤粒，白粒，黒粒，小石，石英，長石，角閃石	4910	内外面に煤付着
51	261	土師器	甑	H	52	マ	口縁～胴部	(30.0)	-	-	ナデ・ハケ目	ケズリ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，黒粒，小石	-	外面に把手痕跡

第17表　古代　土師器・須恵器・青磁観察表(3)

※接合資料について…取上番号ありの遺物＋あり＝「複数の出土区」／あり＋なし＝「アリの出土区他」／なし＋なし＝最も離れた「２つの出土区（他）」

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区		層位	部位	法量 (cm) 口径	底径	器高	文様・器面調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	取上番号	備考
51	262	土師器	甑	G	45	Ⅱb下他	口縁～胴部	(31.4)	-	-	ナデ・ハケ目	ケズリ・ナデ	橙	橙	白粒，灰粒，小石，石英，長石	174·175	外面に把手痕跡
	263	土師器	甑	G	45	Ⅱb Ⅱb下	口縁～胴部	(28.0	-	-	回転ヨコナデ・ハケ目	ケズリ・回転ヨコナデ	浅黄橙，明褐灰	浅黄橙，明褐灰	赤粒，白粒，黒粒，小石，長石	51·242	
	264	土師器	甑	I	54	Ⅱc	口縁～胴部	(25.0)	-	-	回転ヨコナデ・ハケ目	ケズリ・回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒，白粒，灰粒，小石	-	
	265	土師器	甑	I	63	マ	口縁～胴部	(18.4)	-	-	ナデ	ケズリ・ナデ	灰白	灰白	赤粒，白粒	4991	
	266	土師器	甑	F	49·50	I	口縁部	-	-	-	ナデ	ケズリ・ナデ	橙	橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒，石英，長石，小石	-	
	267	土師器	甑	G	45 43-45	Ⅱb Ⅱb下	底部付近	-	(15.6)	-	ナデ	ケズリ・ナデ・ユビオサエ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤色小石，長石	-	
	268	土師器	甑	F	47	マ	把手	-	-	-	ユビオサエ・ナデ	ユビオサエ・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，石英，長石，角閃石	-	
52	269	黒色土器	埦	I	52他	Ⅱc他	完形	16.4	9.0	9.2	ミガキ・回転ヨコナデ	ミガキ	橙	黒	赤粒，白粒，黒粒，長石	3225	黒色土器（B 類の可能性あり）
	270	黒色土器	埦	F	48	マ	口縁～胴部	(19.4)	-	-	回転ヨコナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	白粒，灰粒，長石	-	黒色土器 A
	271	黒色土器	埦	I	63	マ	口縁～胴部	(14.6)	-	-	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	白粒	4807	黒色土器 A
	272	黒色土器	埦	H·I I	55	Ⅲ Ⅱc他	口縁～底部付近	15.2	-	-	回転ヨコナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	赤粒，白粒，小石，長石	3441 3442	黒色土器 A(アバタ状の剥落)
	273	黒色土器	埦	G	56 57	Ⅲ I	底部付近	-	(9.0)	-	ケズリ・回転ヨコナデ	ミガキ	浅黄橙	黒褐	赤粒，白粒，黒粒，石英，長石	-	黒色土器 A，比較的高い高台
	274	黒色土器	埦	H	53-55	I	底部付近	-	7.9	-	回転ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙	黒	赤粒，白粒，黒粒，長石	-	黒色土器 A，比較的高い高台
	275	黒色土器	埦	G	58	Ⅲ	底部付近	-	7.4	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・ミガキ	橙	黒褐	赤粒，白粒，石英，長石，角閃石	-	黒色土器 A，比較的高い高台
	276	黒色土器	埦	H·I	59-61	I	底部付近	-	―	-	ナデ	ミガキ（摩滅）	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，黒粒，赤色小石，長石	-	黒色土器 A，高台破損，比較的高い高台
	277	黒色土器	埦	H·I	51-54	Ⅲ	胴～底部	-	7.8	-	ケズリ・回転ヨコナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	白粒，黒粒，石英，長石	-	黒色土器 A
	278	黒色土器	埦	H	45	マ	底部付近	-	7.3	-	回転ヨコナデ	ナデ	橙	黒褐	赤粒，白粒，長石	-	黒色土器 A，小型
	279	黒色土器	埦	F	58	マ	底部付近	-	5.3	-	回転ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙	黒	白粒，黒粒，小石	6	黒色土器 A
	280	黒色土器	埦	G	56	Ⅲ	底部付近	-	(5.2)	-	回転ヨコナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	赤粒，白粒，石英，長石	-	黒色土器 A，小型
	281	黒色土器	埦	E	65	Ⅱ	底部付近	-	(6.8)	-	ナデ	ナデ	にぶい橙，赤橙	橙，赤橙	赤粒，白粒，灰粒，黒粒，石英，長石，角閃石	-	黒色土器 A，赤色高台
	282	黒色土器	埦	D	72	Ⅱb	底部付近	-	(7.6)	-	回転ケズリ	ミガキ	にぶい黄橙，明赤褐	黒，明赤褐色	赤粒，黒粒，小石，石英，長石	-	黒色土器 A，赤色高台
	283	黒色土器	埦	E·F F	44·45他	Ⅱb Ⅱb下	胴～底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	ミガキ	浅黄橙	黒	白粒，黒粒，長石	-	底部下面に刻みあり，黒色土器 A，高台付鉢
53	284	須恵器	埦・坏	F	44-46	Ⅱb下	口縁～胴部	(10.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	黄灰	白粒	-	
	285	須恵器	埦・坏	G	53-55	I	口縁部	(18.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白粒，黒粒	-	
	286	須恵器	埦・坏	G	46	Ⅱb	底部付近	-	(8.4)	-	ケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒	426	
	287	須恵器	埦・坏	F	45	Ⅱb下	底部付近	-	(7.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒	437	
	288	須恵器	埦・坏	G	45	Ⅱb	底部付近	-	(6.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	赤粒，白粒，黒粒，石英	62	
	289	須恵器	埦・坏	G	58	Ⅲ	底部付近	-	(9.8)	-	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	灰赤	黒粒	-	
	290	須恵器	埦・坏	G	58	Ⅲ	底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	ナデ	明赤褐	橙	赤粒，白粒，黒粒，石英	-	高台欠損
	291	須恵器	埦・坏	H	45	Ⅱb下	底部付近	-	(7.0)	-	回転ヨコナデ	ナデ	灰黄	灰黄	白粒，黒粒，小石，石英，長石	-	
	292	須恵器	坏	H	51	Ⅱc	底部付近	-	(6.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒，白粒，石英	3193	焼成不良，ヘラ切り
	293	須恵器	高坏	D-F	44-46	Ⅱb下	底部付近	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	灰赤	白粒，黒粒	-	
	294	須恵器	蓋	G	44	Ⅱb	つまみ～体部	庇形 (13.4)		2.2	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	赤粒，白粒	72	つまみ部は破損
	295	須恵器	蓋	F	46	Ⅱb下	体部	庇形 (14.0)		-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	灰	白粒	-	
	296	須恵器	蓋	F	44·45	Ⅱb	体部	庇形 (14.2)		-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黒褐，灰黄褐	褐灰	白粒	-	口縁内側に沈線
	297	須恵器	蓋	D	68	Ⅱ	体部	庇形 (16.0)		-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒	-	
	298	須恵器	蓋	F	44·45	Ⅱb下	体部	庇形 (17.4)		-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	白粒	-	
	299	須恵器	蓋	H	54	I	体部	庇形 (16.0)		-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒，黒粒	-	
	300	須恵器	蓋	G	56	I	体部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白	灰白	白粒，黒粒	-	
	301	須恵器	Ⅲ	F	44·45	Ⅱb	口縁部	(14.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰黄	黄灰	白粒	-	
	302	須恵器	不明	D·E	50	I	胴部	-	-	-	ナデ	同心円状当具痕	にぶい黄橙	にぶい橙	白粒，黒粒	-	小型の鉢状，内面自然釉
54	303	須恵器	甕・壺	H	63	マ	口縁～頸部	(20.9)	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	にぶい黄橙，褐灰	にぶい橙，褐灰	白色小石，長石	-	
	304	須恵器	甕・壺	H	53	Ⅲ上	口縁～胴部	(21.8)	-	-	ナデ	ナデ	黒褐，褐灰	明褐灰	黒粒，白色小石	-	
	305	須恵器	甕・壺	H	44	Ⅱb	口縁～胴部	(21.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰	黄灰	白粒，黒粒，石英	194	
	306	須恵器	甕・壺	G	44	Ⅱb	口縁～胴部	(19.4)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒粒，長石	73	焼成不良
	307	須恵器	甕・壺	I	52-55	I	口縁～胴部	(18.4)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰黄	灰黄褐	白粒，灰粒，小石，石英	-	
	308	須恵器	甕・壺	E	69	Ⅱ	口縁～胴部	(20.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	灰白	赤粒，白粒，黒粒	-	
	309	須恵器	甕・壺	F	50-53	I	口縁～胴部	(17.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白	暗灰黄	白粒，灰粒，石英	-	内面に自然釉付着
	310	須恵器	甕・壺	H·I	51-54	Ⅲ	口縁～胴部	(18.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	にぶい橙	赤粒，白粒，小石，長石	-	焼成不良
	311	須恵器	甕・壺	H	52	Ⅱc	口縁～胴部	(16.2)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰	褐灰	白粒，灰粒	3498	口縁部に沈線
	312	須恵器	甕・壺	G	45	Ⅱb	口縁～胴部	(18.0)	-	-	ナデ	ナデ	灰赤，暗赤褐	灰赤	黒粒，角閃石	-	
	313	須恵器	甕・壺	G-I	45	Ⅱb下	口縁部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒，白粒，石英，角閃石	-	
	314	須恵器	甕・壺	E	51	I	口縁部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	赤粒，白粒，黒粒，小石	-	外面に沈線
	315	須恵器	甕・壺	I	51	Ⅲ	頸～肩部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・風化限当具痕	灰	にぶい褐	白粒，黒粒，灰粒	-	
	316	須恵器	甕・壺	D·E	49·50	I	頸部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・風化限当具痕	灰	灰	白粒，黒粒	-	
	317	須恵器	甕・壺	I	52-55	I	頸部	-	-	-	回転ヨコナデ・格子目タタキ	回転ヨコナデ・風化限当具痕	黄灰	灰	白粒，黒粒	-	
	318	須恵器	甕・壺	E	50	I	頸部	-	-	-	ナデ・キザミ目	ケズリ・同心円状当具痕	にぶい橙	にぶい橙	白粒，黒粒，石英	-	焼成不良
	319	須恵器	甕・壺	G	45	Ⅱb下	頸部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・風化限当具痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	白粒，黒粒，小石	229	
	320	須恵器	甕・壺	H·I	52·53	I	頸部	-	-	-	回転ヨコナデ・格子目タタキ	回転ヨコナデ・風化限当具痕	灰	褐	赤粒，白粒	-	
	321	須恵器	甕・壺	I	55他	Ⅱc他	肩部	-	-	-	回転ヨコナデ・格子目タタキ	回転ヨコナデ・風化限当具痕	灰褐	灰黄	赤粒，白粒	3434	
	322	須恵器	甕・壺	G	56	Ⅲ	肩部	-	-	-	回転ヨコナデ・格子目タタキ	同心円状当具痕	褐灰	にぶい赤褐	白粒，黒粒，灰粒	-	
55	323	須恵器	甕・壺	H	59	マ	頸部	-	-	-	ナデ	ナデ・ユビオサエ	灰白	灰白	白粒	4666	壺か
	324	須恵器	甕・壺	G F	45 44·45	Ⅱb下 Ⅱb	口縁～胴部	(11.8)	-	-	格子目タタキ・平行タタキ	同心円状当具痕	橙	橙	白粒，黒粒	106·114 134	壺か
	325	須恵器	甕・壺	G	45	Ⅱb下	口縁～胴部	(12.0)	-	-	回転ヨコナデ・格子目タタキ	同心円状当具痕	橙	橙	白粒，黒粒	116・15 112	壺か
	326	須恵器	甕・壺	F·G G-I	44 45	Ⅱb下	肩部～胴部	-	-	-	格子目タタキ	風化限当具痕・平行当具	にぶい橙	にぶい黄橙	赤粒，黒粒，小石，石英，長石	-	壺か

第18表　古代　土師器・須恵器・青磁観察表(4)

※接合資料について…取上番号ありの遺物＋あり＝「複数の出土区」／あり＋なし＝「アリの出土区他」／なし＋なし＝最も離れた「２つの出土区（他）」

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区		層位	部位	法量 (cm) 口径	底径	器高	文様・器面調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	取上番号	備考
55	327	須恵器	甕・壺	G H	45他	Ⅱb下他	底部	-	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	橙	橙	赤粒，白粒，黒粒，小石，石英	117·269	壺か
56	328	須恵器	甕・壺	F	45	Ⅱb下	頸～肩部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	オリーブ黒	灰	白粒，黒粒，小石，鉄錆粒	442	
	329	須恵器	甕・壺	G	58	Ⅱc	頸～肩部	-	-	-	カキメ	ナデ・当具痕	明赤褐	にぶい赤褐，灰白	黒粒	3764	荒尾産か
57	330	須恵器	甕・壺	H	52	Ⅱc	胴部	-	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	灰	灰白	赤粒，白粒，灰粒	3213	
	331	須恵器	甕・壺	F	47	マ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	黄灰	灰白	灰粒，長石	-	
	332	須恵器	甕・壺	I	55	Ⅱc	胴部	-	-	-	格子目タタキ，ナデ	同心円状当具痕	明褐灰	橙	赤粒，白粒，黒粒	3431	
	333	須恵器	甕・壺	G	56	Ⅲ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	黄灰	褐灰	白粒，黒粒，灰粒	-	
	334	須恵器	甕・壺	H·I	51-54	Ⅲ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	白粒，黒粒，小石，石英	-	
	335	須恵器	甕・壺	G	59	マ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	黒褐	褐灰	白粒，灰粒	4586	
	336	須恵器	甕・壺	F	65	Ⅱb	胴部	-	-	-	格子目タタキ	格子目当具痕	褐灰	にぶい黄橙	赤粒，白粒，小石	-	
	337	須恵器	甕・壺	F	44	Ⅲ上	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心円状当具痕	褐灰	にぶい黄橙	赤粒，白粒	-	
	338	須恵器	甕・壺	G	45	Ⅱb	胴部	-	-	-	格子目タタキ	同心円状当具痕	黒褐	褐灰	赤粒，白粒，灰粒，小石	286	
	339	須恵器	甕・壺	H	45	Ⅱb下	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心円状当具痕	にぶい赤褐	灰黄褐	黒粒，灰粒	-	
	340	須恵器	甕・壺	F	63	Ⅵa上	胴部	-	-	-	格子目タタキ	格子目当具痕	褐灰	にぶい黄橙	赤粒，白粒	-	
	341	須恵器	甕・壺	D·E	46	Ⅱb下	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心円状当具痕	灰褐	褐灰	白粒，黒粒，小石	-	
58	342	須恵器	甕・壺	G	45·46	マ	胴部	-	-	-	平行タタキ・ナデ	同心円状当具痕	灰白	灰白	白粒，長石	-	
	343	須恵器	甕・壺	E F	68 69	Ⅰ Ⅱ	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	にぶい黄橙	褐灰	白粒，灰粒，小石	-	
	344	須恵器	甕・壺	D	49	Ⅵ	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	黒褐，暗赤褐	灰褐	白粒	-	
	345	須恵器	甕・壺	G F	46 44·45	マ Ⅱb	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	赤褐	褐灰	灰粒	-	
	346	須恵器	甕・壺	E	70	Ⅱb	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	灰白	灰白	黒粒	-	
	347	須恵器	甕・壺	D	70	Ⅲ上	胴部	-	-	-	平行タタキ	平行当具痕	褐灰	褐灰	黒粒，灰粒	-	
	348	須恵器	甕・壺	E D	71 71	Ⅱb	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	灰黄褐	黄灰	白粒，黒粒，石英	-	
59	349	須恵器	甕・壺	H	55他	Ⅱc他	底部付近	-	-	-	平行タタキ・ナデ	ナデ・ユビオサエ	浅黄	にぶい黄橙	白粒，黒粒，小石	3461	
	350	須恵器	甕・壺	H	55	Ⅱc他	底部付近	-	-	-	平行タタキ・ナデ	ナデ・ユビオサエ	灰白	にぶい黄橙	白粒，灰粒	3462	
	351	須恵器	甕・壺	H	53	Ⅱc	底部付近	-	-	-	平行タタキ	同心円状当具痕	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒	3347	内面に縦方向に撚糸状の跡あり
	352	須恵器	甕・壺	I	57	Ⅲ	底部付近	-	-	-	平行タタキ	ナデ・ユビオサエ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，黒粒，角閃石	-	焼成不良
	353	須恵器	甕・壺	G	45	Ⅱb	底部付近	-	(12.2)	-	カキメ	ケズリ・ナデ	にぶい赤褐	褐灰	黒粒，長石，角閃石	-	薬壺形
	354	須恵器	甕・壺	H	45	Ⅱb下	底部付近	-	-	-	ナデ・ケズリ・ユビオサエ	ナデ	褐灰	灰	白粒，灰粒	364	薬壺形
	355	須恵器	甕・壺	F	70	Ⅲ	底部付近	-	-	-	回転ヨコナデ	ナデ	暗灰黄	灰黄	白粒，黒粒，石英	-	薬壺形
	356	須恵器	甕・壺	H·I	75	Ⅰ	底部付近	-	(13.8)	-	ナデ・ハケ目	ケズリ・ナデ	灰	灰	白粒，黒粒，石英	-	
	357	須恵器	甕・壺	H	45	Ⅱb下	底部付近	-	(12.6)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	暗赤褐	赤灰	白粒，黒粒	250	壁内空洞あり
	358	須恵器	甕・壺	F G	51·52 52·53	Ⅰ	底部付近	-	(8.0)	-	ケズリ・ナデ	回転ヨコナデ	褐灰	褐灰	白粒，灰粒，石英	-	焼成不良
	359	須恵器	甕・壺	F	50-53	Ⅰ	底部付近	-	(7.8)	-	ナデ	ナデ	赤灰	暗赤褐（ススあり）	白粒	-	壁内空洞あり
	360	須恵器	甕・壺	I	53·54	Ⅰ	底部付近	-	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	白粒	-	壁内空洞あり
60	361	須恵器	甕・壺	G	44 45	Ⅱb Ⅱb下	肩部	-	-	-	格子目タタキ・ケズリ	ユビオサエ	にぶい褐	明褐灰	赤粒，白粒，黒粒，石英	94·139	
	362	須恵器	甕・壺	G	56-58	Ⅰ	胴部	-	-	-	格子目タタキ	ナデ・ユビオサエ	褐灰	にぶい橙	赤粒，白粒，灰粒	-	
	363	須恵器	甕・壺	D-F	44-46	Ⅱb下	肩部	-	-	-	平行タタキ	ナデ・ユビオサエ	灰白	灰白	白粒，黒粒，灰粒，小石，長石	-	
	364	須恵器	甕・壺	I	54	Ⅱc	胴部	-	-	-	格子目タタキ・ナデ	布目・ナデ	黒	にぶい褐	黒粒	-	
	365	須恵器	壺・鉢	H·I	52-55	Ⅰ	胴部	-	-	-	格子目タタキ・ナデ	布目・ナデ	黒褐	褐灰	白粒，黒粒	-	内面に縦方向に撚糸状の跡あり
	366	須恵器	甕・壺	F	44·45	Ⅱb下	胴部	-	-	-	平行タタキ	ナデ	橙	浅黄橙	赤粒，黒粒，灰粒，小石，石英，長石	-	焼成不良
	367	須恵器	甕・壺	F	45	マ	胴部	-	-	-	平行タタキ	ナデ	浅黄橙，黒褐	浅黄橙	赤粒，白粒，赤色小石，石英，角閃石	-	焼成不良
	368	須恵器	甕・壺	I	52-54	Ⅲ	胴部	-	-	-	①同心円状当具痕 ②格子目タタキ*	①不明 ②同心円状当具痕*	①赤②黒褐	①にぶい赤②黒褐	①白粒，灰粒，小石②白粒	-	釉着したもの
	369	青磁	碗	H	59	マ	底部付近	-	(5.0)	-	（内外面に目跡あり）		褐灰	明褐灰	黒粒	4579	大宰府分類の越州窯青磁Ⅱ類
	370	青磁	大碗・鉢	H	55	Ⅲ	底部付近	-	(9.0)	-	（内外面に目跡あり）		灰褐・褐灰	灰白	黒粒，石英	-	越州窯系青磁，太宰府分類の大椀・鉢Ⅱ類
	371	青磁	大碗・鉢	H	60	Ⅲ	底部付近	-	(6.5)	-	（内外面に目跡あり）		灰	灰	黒粒，灰粒	4480	越州窯系青磁，太宰府分類の大椀・Ⅰ類
61	372	土師器	坏	G	45	-	底部付近	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒，白粒，石英，角閃石	-	見込みに「金」のヘラ書き，ヘラ切り
	373	土師器	坏	E	72	Ⅰ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，石英，角閃石	-	「金」のヘラ書き
	374	土師器	坏	H·I	45·46	Ⅱb	底部	-	(5.0)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤色小石，石英，長石，角閃石	-	見込みに「金」のヘラ書き？，ヘラ切り
	375	土師器	坏	I	53	マ	底部付近	-	(6.0)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒	3709 3319	見込みヘラ書き（文字不明）あり
	376	土師器	坏	E	72	Ⅱb	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，長石	-	底部外面に「ヒ（七）」のヘラ書き
	377	土師器	坏	G	56-58	Ⅰ	底部	-	-	-	ナデ	摩滅	浅黄橙	褐灰	赤色小石，白粒	-	底部外面に「金」のヘラ書き，ヘラ切り
	378	土師器	Ⅲ	E・F	48	マ	口縁～底部	(13.0)	7.0	2.9	ケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，石英，長石	-	高台付Ⅲ，見込みに「金」のヘラ書き
	379	土師器	坏	E	69	Ⅰ	底部付近	-	(8.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒，長石	-	見込みに「肥？」のヘラ書き
	380	土師器	坏	I	52	Ⅲ	底部付近	-	(7.0)	-	ナデ	回転ヨコナデ	黄橙	浅黄橙	赤粒，長石	-	底部外面に「月」のヘラ書き
	381	土師器	坏	E	69	Ⅱ・Ⅲ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	明褐灰	黒粒，赤色小石	-	見込みに「肥？」のヘラ書き
	382	土師器	坏	H	55	マ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，長石，角閃石	-	見込みにヘラ書き「月」あり
	383	土師器	坏	H	60	Ⅲ	底部付近	-	(6.0)	-	ナデ	ナデ	褐灰	橙	赤粒，白粒，長石，角閃石	4555	底部外面にヘラ書き「月」か
	384	土師器	坏	G	44	Ⅱb	底部	-	-	-	ナデ	ヘラケズリ・ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，長石，角閃石	-	見込みにヘラ書き（文字不明）
	385	土師器	坏	H	52·53	Ⅰ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	赤粒，長石，角閃石	-	見込みにヘラ書き（文字不明）
	386	土師器	坏	H	53·54	Ⅰ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒，白粒，長石，角閃石	-	底部外面にヘラ書き（文字不明）
	387	土師器	坏	F	44·45	Ⅱb下	底部付近	-	(5.8)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒，白粒，長石，角閃石	-	見込み部に放射状の浅いヘラミガキ，底部外面に太い沈線
	388	土師器	坏	G	53-55	Ⅰ	底部付近	-	(6.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄橙	黄橙	白色小石	-	見込みに「七」のヘラ書き，ヘラ切り
	389	土師器	坏	G	45	Ⅱb下	底部付近	-	(8.7)	-	ナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，長石	352	底部外面にヘラ書き（沈線状）
	390	土師器	坏	G	55	Ⅱc	底部付近	-	(6.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，石英，長石	3647	見込みに細い線刻，ヘラ書き
	391	土師器	坏	E	71	Ⅱb	底部	-	ー	-	ナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，黒粒	-	底部外面にヘラ書き（文字不明），糸切り

第19表　古代　土師器・須恵器・青磁観察表(5)

※接合資料について…取上番号ありの遺物＋あり＝「複数の出土区」／あり＋なし＝「アリの出土区他」／なし＋なし＝最も離れた「２つの出土区（他）」

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区		層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
61	392	土師器	坏	D･E	49･50	Ⅰ	底部付近	-	(9.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	浅黄橙	赤粒，長石	-	底部外面に「一」または「七」のヘラ書き，ヘラ切り
	393	土師器	坏	H	46	Ⅱb下	底部付近	-	(6.2)	-	回転ヨコナデ	ナデ	淡赤橙	浅黄橙	赤粒，白粒，石英，長石	-	底部外面に「一」のヘラ書き
	394	土師器	坏	G	46	マ	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	赤粒，白粒，石英，長石	-	内面にヘラ書き
62	395	土師器	坏	E	72	Ⅱb	完形	11.9	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，長石	2007 2008	胴部外面に「＋」または「丄」のヘラ書き
	396	土師器	埦	F	69	Ⅱ	底部付近	-	7.8	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	明赤褐	赤色小石，白粒，長石，角閃石	3001	見込みに判読できない文字と「子」のヘラ書き
	397	土師器	埦	I	54	Ⅱ	底部	-	11.0	-	回転ヨコナデ	ナデ	橙	黒褐	赤粒，白粒，石英，長石，角閃石	3306	内面に月桂冠のような文様・赤色顔料付着の可能性
	398	土師器	坏・埦	F	45	マ	口縁	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，石英，長石	-	外面に「月？」の墨書
	399	土師器	坏・埦	G	56-58	Ⅰ	胴部	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒，白粒，石英，長石	-	外側に「八？」の墨書，薄手
	400	須恵器	埦か	E･F	56-58	Ⅲ	口縁～胴部	15.4	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰黄	黄灰	白色小石，灰色小石	-	須恵器・胴部外面に「月」の墨書

第20表　古代　土製品観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区		層位	法量(cm，g)				調整	色調	胎土	取上番号	備考
							長さ	幅	内径	重量					
63	401	土製品	土錘	F	45	Ⅱb下	5.1	2.3	0.5	24.4	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	黒粒，灰粒，石英，角閃石	440	
	402	土製品	土錘	H	59	埋土	5.2	2.0	0.5	18.7	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	白粒，黒粒，灰粒，長石，角閃石	4619	
	403	土製品	土錘	H	52	埋土	4.0	2.1	0.6	17.3	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	白粒，黒粒，灰粒，角閃石	-	
	404	土製品	土錘	H	46	Ⅱb	4.6	2.0	0.5	14.8	ナデ	にぶい橙	白粒，黒粒，灰粒，長石，角閃石	-	ミガキ
	405	土製品	土錘	H	46	Ⅱb	3.9	2.0	0.5	14.4	ナデ・ケズリ	橙	赤粒，黒粒，灰粒	401	モミ圧痕あり，赤色顔料のちミガキ
	406	土製品	土錘	I	60	埋土	3.9	2.1	0.5	13.9	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	黒粒，長石，角閃石	4370	
	407	土製品	土錘	H	54	埋土	3.9	2.0	0.5	13.5	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	灰粒，長石	3332	
	408	土製品	土錘	H	56	埋土	3.6	2.0	0.4	12.5	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	白粒，灰粒，長石	-	
	409	土製品	土錘	I	46	Ⅱb	4.0	2.0	0.4	13.3	ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒，長石，角閃石	-	
	410	土製品	土錘	H	46	Ⅱb	3.8	2.0	0.4	12.9	ナデ	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒，長石	-	赤色顔料塗付の可能性
	411	土製品	土錘	I	54	埋土	4.4	2.2	0.5	16.9	ナデ・ユビオサエ	橙	赤粒，灰粒，石英，長石	3700	
	412	土製品	土錘	I	57	Ⅲ	2.9	2.0	0.4	6.3	ナデ	赤橙	黒粒，精良	-	赤色顔料塗付の痕跡あり，外面ほぼ摩耗
	413	土製品	土錘	I	55	Ⅱc	5.1	1.6	0.4	10.6	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	黒粒，灰粒，精良	3420	
	414	土製品	土錘	F	49	Ⅰ	4.5	1.3	0.3	7.5	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒	-	ねじったような跡，粗い構造
	415	土製品	土錘	E	71	Ⅱb	4.6	1.5	1	7.4	ナデ・ユビオサエ	浅黄橙	黒粒，精良	2002	一部破損
	416	土製品	土錘	H	52	埋土	4.9	1.6	0.3	10.4	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	赤粒，黒粒	-	
	417	土製品	土錘	E	72	Ⅰ	4.2	1.5	0.3	6.8	ナデ・ユビオサエ	橙	赤粒，黒粒，石英	-	
	418	土製品	土錘	E	70	Ⅰ	3.8	1.6	0.5	7.3	ナデ	橙	赤粒，白粒，黒粒	-	
	419	土製品	土錘	D	50	Ⅰ	4.2	1.4	0.3	10.0	ナデ	明赤褐	赤粒，黒粒，石英，長石	-	
	420	土製品	土錘	G	57	Ⅲ	3.8	1.6	0.5	8.2	ナデ・ユビオサエ	橙	白粒，黒粒，灰粒	-	
	421	土製品	土錘	F	44･45	Ⅱb下	4.0	1.5	0.4	8.2	摩滅	にぶい黄橙	赤粒，黒粒，灰粒，長石	-	
	422	土製品	土錘	H	59	Ⅲ	3.9	1.6	0.4	7.9	摩滅	橙	赤粒，白粒，灰粒，角閃石	4678	
	423	土製品	土錘	H	62	Ⅲ	3.1	1.6	0.5	7.1	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	黒粒，灰粒，長石，角閃石	-	
	424	土製品	土錘	D	49･51	Ⅰ	3.2	1.5	0.5	6.0	ナデ・ユビオサエ	浅黄橙	白粒，黒粒，灰粒	-	
	425	土製品	土錘	I	57	Ⅲ	3.6	1.1	0.4	4.3	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒，石英，角閃石	-	
64	426	土製品	土錘	G	45	Ⅱb下	2.9	1.5	0.3	4.5	ナデ	にぶい赤橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒，小石，石英，長石，角閃石	-	表面はやや風化
	427	土製品	土錘	H･I	47･48	Ⅱb	3.3	1.4	0.4	4.5	ナデ・ケズリ	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒，灰粒，石英	-	
	428	土製品	土錘	I	46	Ⅱb	2.7	1.6	0.4	4.9	ナデ・ケズリ	明赤褐	赤粒，白粒，黒粒，灰粒，石英	-	
	429	土製品	土錘	D･E	50	Ⅰ	3.6	1.2	0.5	3.9	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙	白粒，黒粒，灰粒	-	
	430	土製品	土錘	E	49	Ⅰ	3.2	0.8	0.3	1.8	ナデ・ユビオサエ	橙	赤粒，白粒，黒粒，石英，角閃石	-	
	431	土製品	土錘	E	69	Ⅱ～Ⅲ	2.9	2.7	0.7	12.7	ナデ・ユビオサエ	橙	白粒，黒粒，灰粒，石英，長石，角閃石	-	
	432	土製品	土錘	I	57	Ⅲ	2.8	2.4	0.4	6.2	ナデ・ハガレ	赤橙	黒粒，精良	-	半分に破損

第21表　古代　焼塩土器・紡錘車等観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	出土区		層位	部位	法量 (cm)			文様・器面調整		色調		胎土	取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
64	433	焼塩土器	鉢	H･I	51･54	Ⅲ	胴部	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	ナデ・布目圧痕	にぶい橙	にぶい橙	赤粒，白粒，黒粒，小石，石英，長石，角閃石	-	
	434	焼塩土器	鉢	I	57	Ⅲ	口縁部	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	布目（大）	橙	橙	赤粒，白粒，白色小石，長石	-	布目は目が粗い
	435	焼塩土器	鉢	G	57	Ⅱc	胴部	-	-	-	ナデ	布目（細）	橙	橙	赤粒，白粒，石英，長石，角閃石	-	布目は目が細かい
	436	焼塩土器	鉢	I	56	Ⅲ	胴部	-	-	-	ナデ	布目（細）	橙	橙	赤粒，白粒，黒粒，長石	-	布目は目が細かい
	437	土製品	円盤状製品	G	45	Ⅱb下	-	-	6.2	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤色小石，長石	103	煤・タール付着
	438	土製品	円盤状製品	D･E	62	Ⅳ-Ⅵ	-	-	6.0	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰褐	黒粒，小石，石英	-	
	439	土製品	円盤状製品	F	44･45	Ⅱb下	-	-	-	-	ナデ・放射状押圧	ナデ	橙	-	赤粒，白粒，黒粒	-	紡錘車の可能性あり
	440	土製品	紡錘車	D･E	63	Ⅱ	-	-	-	-	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	白粒，黒粒，長石	-	
	441	土製品	紡錘車	F	46	Ⅱb	-	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒，灰粒，石英，長石，角閃石	-	
	442	土製品	紡錘車	G	54	Ⅱc	-	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	-	赤粒，白粒，灰粒	3564	
	443	土製品	紡錘車	H	52･53	Ⅰ	-	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	-	赤粒，黒粒，灰粒	-	
	444	土製品	棒状土製品	E･F	44･45	Ⅱb	-	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	-	にぶい黄橙	-	赤粒，白粒，黒粒，長石，角閃石	-	把手の可能性あり

第４節　中世の調査

１　調査の概要

中世の遺物は，主にⅡｂ・Ⅱｃ層で確認されている。第３節古代の調査成果でも述べたが，近世の遺物と混在した状態で出土している。遺構検出面はⅢ層上面であるが，場所によっては土地改変における地形の削平による影響で，下位のⅣ～Ⅵ層で遺構を検出している。

遺構は，掘立柱建物跡12棟，竪穴建物跡１基，土坑35基，溝状遺構７条，集積４基，石列３列，ピットを検出した。遺物は，土師器，瓦質土器，中世須恵器，国産陶器，中国が中心となる輸入陶磁器，滑石製品，茶臼，銭貨などが出土した。

２　出土遺物の分類

（１）器種分類

器種分類にあたっては，大宰府分類（太宰府市教育委員会2000），中村和美氏による分類（中村1994）及び山本信夫氏・山村信榮氏の分類（山本・山村1997）を参考とした。また，輸入陶磁器については，国立歴史民俗博物館による分類（池谷ほか2021）を基本とし，これに小野正敏氏による分類（1982），森田勉氏による分類（1982），中野晴久氏による分類（2013）なども加味して行った。

・食膳具：坏・小皿（いずれも土師器）・碗・皿・盤（いずれも輸入磁器）
・調理具：擂鉢（捏鉢含む：須恵器製・瓦質製・陶器製）
・煮炊具：鍋（金属製・瓦質製）・釜（羽釜含む：滑石製・瓦質製）
・貯蔵具：壺・甕（いずれも中世須恵器・国産陶器輸入陶器含む）
・調度具：火鉢・小壺・合子（いずれも輸入磁器）・蓋
・その他：天目・風炉など
上記に含まれないものや器種が特定できないもの。

（２）遺物分類

遺物は，土師器，瓦質土器，中世須恵器，国産陶器その他に大分類した。以下には，分類について述べる。

ア　土師器

食膳具のみである。

坏　：平底を原則とする。皿とは器高が異なり，口径と比較して器が高いものである。器高はおおむね３cm以上となる。底部外面については，回転台から糸を用いて切り離した痕跡が残る。糸切りは，回転台を回転させた状態で糸を底に入れて切り離すため，一方に極端に偏った渦状の痕跡が残る。

小皿：口径に対して，器高が低いものである。器高は２cm以下である。底部外面には，坏と同じく糸切り痕が残る。

イ　瓦質土器

基本的には，いぶし瓦と同じような質感をもち，釉薬をかけずに焼成した後，燻化（くんか）と呼ばれる工程を行いて表面を黒色化する。良質なものは瓦と同じように表面が黒色化するが，南部九州では，燻しが弱いためか黒色のものは少ない特徴がある。名称についても，これまで瓦器，瓦器質土器，須恵質土器，土師質陶器などあるが，ここでは瓦質土器に統一した。生産遺跡は全国的に未発見であり，当遺跡の資料も産地不明である。ただし，一部については在地産の可能性も指摘されている（佐藤2000）。

時期については，羽釜・釜などは中世前期のものがあるものの，多くは中世後期に該当する。

瓦質土器には，調理具と煮炊具，調度具（暖房具）がある

（ア）調理具

擂鉢：口縁部の一か所に注ぎ口を設けるもので，片口鉢ともいう。当遺跡では備前焼を模倣したとみられる瓦質土器の擂鉢が多く出土した。内面の底部付近から放射状に一単位につき５～８程度の擂目（条線）を入れる点は共通するが，底部見込みと口縁部内面の擂目については個体差がある。また，擂目がなく，内面に斜位の強いハケ目が入るものもみられる。特に，底部は使用による破損のため，残存することが少ない。時期はおおむね中世後半期である。

（イ）煮炊具

釜　：基本的には，中央部よりやや上に鍔（羽）がついた羽釜である。当遺跡出土のものは在地産ではなく，他地域のものと考えられる。また，厳密には瓦質土器とはいいがたいものも含まれるが，便宜上ここに含めた。時期は中世前半である。

また，湯釜とみられる破片も出土している。厳密には煮炊具ではなく茶道具であるが，数が少なく，破片のみであることからここに含めた。時期は中世後半である。

鍋　：口縁部がラッパ状に開くものである。胴部は浅めの球状となるが，当遺跡では明確な胴部が確認されていない。時期は中世前半である。

（ウ）調度具（暖房具）

火鉢：火舎・火桶とも呼称される。中に炭火を入れた使用が想定される。底面は平底であるが，三か所に脚がつけられ，底面が直接熱を受けないようにしている。厳密には，火窓のついたものは焜炉とされるが，ここに一括する。

（エ）その他

風炉：茶の湯を沸かすために，炭を入れて火をつけて使用するものである。当遺跡では小破片のみ出土している。基本的には中世後半のものと考えられる。

ウ　中世須恵器

外見的には，須恵器に類似するもので，技法も引き継がれる。ただし，焼成，胎土，タタキ目などに特徴があり，区別することができる。当遺跡では焼成の良好でないものが多い。断面観察において胎土には，小石なども含まれており，白色や褐灰色などの色調が縞状もしくはマーブル状となるものも多くみられる。

甕　：体部よりも口縁部が締まるもので，口縁部は大きく外方に広げる。胴部はやや縦長の球形をしている。胴部外面には格子目状の叩きが施されるが，山形（矢羽根）条のものも一定量存在する。内面には当て具痕はなく，ハケ目が施される。時期は基本的に中世前半である。ただし，タタキ目の格子が大きいものは，瓦質土器に近い胎土のものがあり，中世後半の可能性がある。

片口鉢：口縁部は肥厚し，底部は平底である。口縁部肥厚部分は，自然釉が付着するか黒色化する。口縁部の一部には，注ぎ口がつく。捏鉢とされてきたが，内面に使用痕がみられる場合が多いため，擂目はみられない場合も擂鉢として使用されたことが指摘されている。基本的には，東播磨（兵庫県）が産地とされているため，東播系須恵器と呼ばれているが，模倣品とみられるものが存在する。詳細な産地については今後の課題である。

エ　国産陶器

調理具と貯蔵具がある。

（ア）調理具

擂鉢：備前産のものがある。ただし，備前に類似した他産地の可能性のあるものも含む。口縁部に厚みがあるものとないものがあり，底部は平底で，一部には注ぎ口がつく。内面には擂目が，底部を基点として放射状に施文される。擂目は一条４～12単位である。時期は，基本的に中世後半期のものである。

（イ）貯蔵具

甕　：常滑産，備前産及び瀬戸産のものがある。

（常滑）

釉薬をかけずに焼成するが，自然釉が付着する場合がある。口縁部を折り曲げてつくることによって，断面形を「N」字状とするものがあり，当遺跡出土のものに該当する。肩が張り出して，一部には肩部に押印文を施すものがある。底部はわずかに上げ底となる。時期は中世前半である。

（備前）

釉薬をかけずに焼成するが，自然釉が付着する場合がある。重厚なつくりで，器壁は厚く硬質で，他の産地のやきものと比較して重みがある。口縁を玉縁状にするものが，当遺跡出土のものに該当する。胴部は中央よりもやや上方で最大径とする。底部はわずかに上げ底となる。

壺　：瀬戸産のものがある。外面には釉薬がかかる。本遺跡では破片のみの出土であるため，全形は確認できないが，瓶子と考えられる。時期は中世前半期である。

オ　輸入陶磁器

基本的に，磁器（白磁・青磁・青花）は食膳具で，陶器は貯蔵具である。

（ア）磁器

碗・皿：白磁・青磁と，青花とに分けて記述する。

（白磁・青磁）

碗・皿は，口縁部が直行するもの，端反るもの，外反するもの，玉縁状となるものなどがある。胴部は若干膨らむものと，横に張り出すものがある。底部には高台がつく。文様については多種多様である。このほか，坏・盤などがある。

（青花）

成形した白磁の素地に酸化コバルト顔料を用いて文様を描く。景徳鎮窯系と漳州窯系のものがある。景徳鎮系が先に流通し，漳州窯系はその模倣である。漳州窯系は，上手と下手があり，上手は景徳鎮系に極めて類似性が高い高級品で，下手は文様が暗く発色するなど粗雑な量産品である。また，漳州窯系の製品には，全面施釉のものは少なく，底部付近は無釉で，高台内には籾殻痕がつくことが多い。

（イ）陶器

中国南部（華南）や東南アジア産のものである。

大型のものは，在地では日常雑器として用いられたものをコンテナ（運搬容器）として利用されたと考えられている（向井2000など）。当遺跡でも大型品が出土しているが，破片のため全形は明らかではない。無釉のものが大部分を占めるが，国産陶器との区別が困難なものがある。厳密には，産地不明なものが多い。時期は，おおむね中世後半である。

カ　その他

青白磁の合子・小壺などがあり，これらは調度具にあたる。時期は，おおむね中世前半期である。また，天目や風炉などがあるが，これらは茶道具となる。時期は，おおむね中世後半期である。

上記に含まれないものについても，各自本文中にて説明を行う。

なお，輸入陶磁器の年代分類については，国立歴史民俗博物館（以下「歴博」という。）による分類（池谷ほ

か2021）を基本とし，これに大宰府分類，森田分類や小野分類などを併記した。以下に，歴博による分類を示す。

Ⅰ期（11世紀後半～12世紀中頃）

a　指標とする主な分類

青磁碗Ａ０，白磁碗Ⅱ・Ⅳ，白磁皿Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ

b　既分類（参考）

大宰府Ｃ期

Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）

a　指標とする主な分類

青磁碗Ａ１～６，青磁同安窯系，白磁碗Ⅴ～Ⅷ，白磁皿Ⅲ

b　既分類（参考）

大宰府Ｄ・Ｅ期

Ⅲ期（13世紀後半～14世紀前半）

a　指標とする主な分類

青磁碗Ｂ１・０，青磁折縁皿，白磁碗皿Ⅸ
白磁碗浦口窯系，白磁碗ビロースク０・Ⅰ・Ⅱ

b　既分類（参考）

大宰府Ｆ期，森田Ａ群

Ⅳａ期（14世紀後半～15世紀初め）

a　指標とする主な分類

青磁碗Ｂ２・Ｃ１・Ｄ１，白磁碗枢府系，白磁碗ビロースクⅢ

b　既分類（参考）

大宰府Ｇ期，森田Ｂ・Ｃ群，小野Ａ群

Ⅳｂ期（15世紀前半～中葉）

a　指標とする主な分類

青磁碗Ｂ３・Ｃ２・Ｄ２，青磁内彎皿，白磁皿Ｂ，染付碗Ｂ

b　既分類（参考）

森田Ｄ群，小野Ｂ群（碗）

Ⅴ期（15世紀後半～16世紀前半）

a　指標とする主な分類

青磁碗Ｂ４・Ｃ３・Ｅ１，青磁端反皿，青磁稜花皿，白磁碗Ｃ，白磁皿Ｃ１・Ｃ２・Ｅ，染付碗Ｃ・Ｄ，染付皿Ｂ１・Ｃ

b　既分類（参考）

森田Ｅ群，小野Ｃ・Ｄ群，小野Ｂ群（皿）の一部（Ｂ１）

Ⅵ期（16世紀中葉～末）

a　指標とする主な分類

青磁碗Ｅ２，青磁菊皿，白磁皿Ｄ，染付碗ＥＦ，染付皿Ｂ２・Ｅ・Ｆ

b　既分類（参考）

森田Ｅ群の一部，小野Ｅ・Ｆ群，小野Ｂ群（皿）の一部（Ｂ２）

【参考文献】

岩元康成2012「鹿児島県の遺構内出土完形遺物の組成」『中近世土器の基礎研究』24　日本中世土器研究会

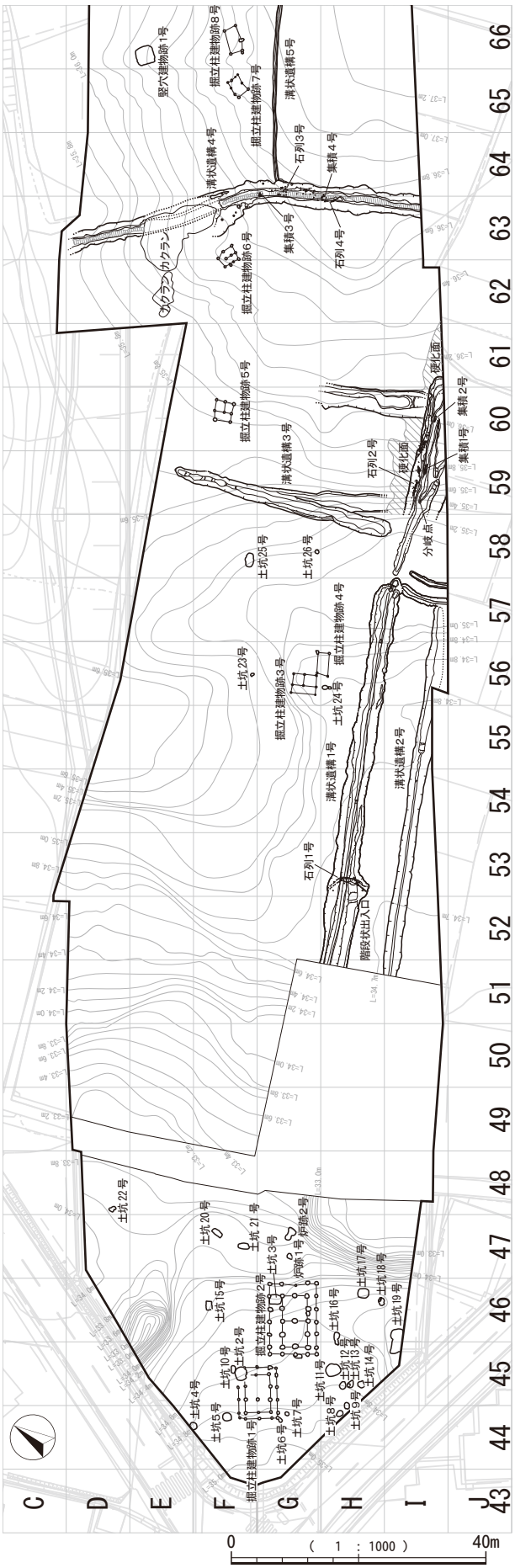
中村和美1994「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の食器について - 土師器の変遷を中心に -」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会

美濃口雅朗1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会

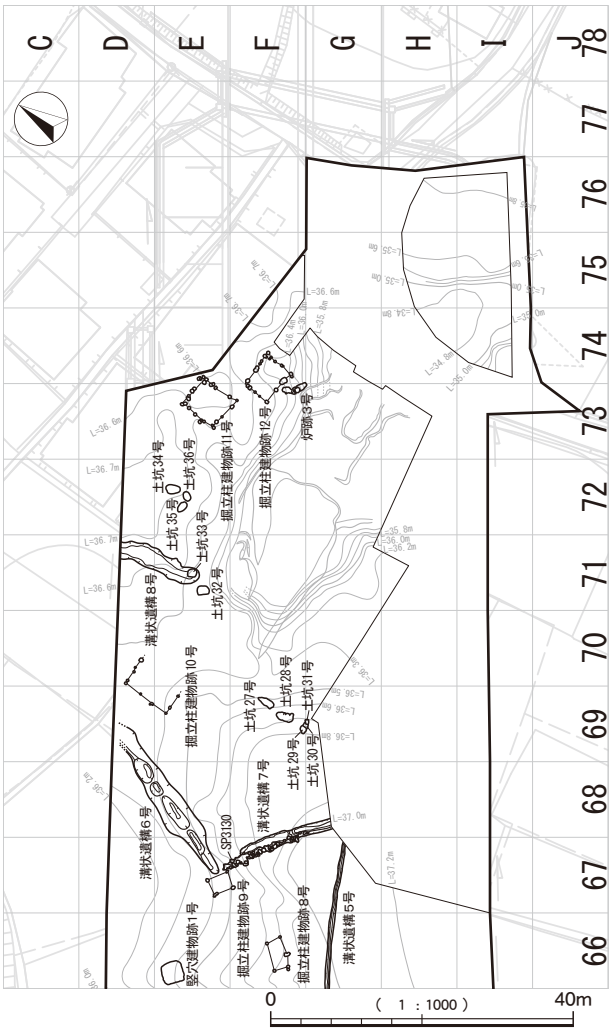
山本信夫1990「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」乙益重隆先生古稀記念論文集『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

太宰府市教育委員会（山本信夫編）2000「大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―」『太宰府市の文化財』第49集　太宰府市教育委員会

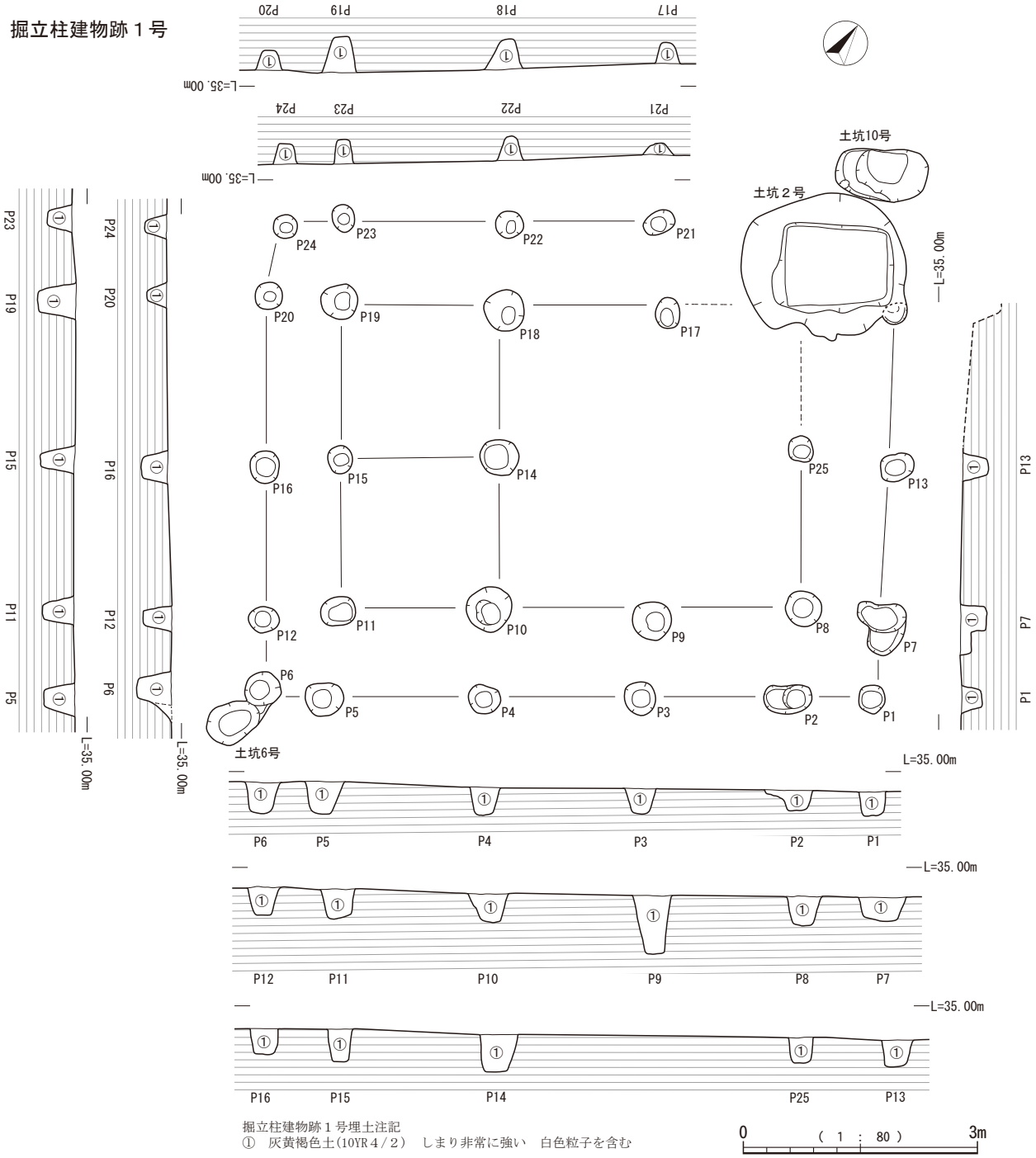
池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎2021「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集



第65図　中世の遺構配置図（43～66区）

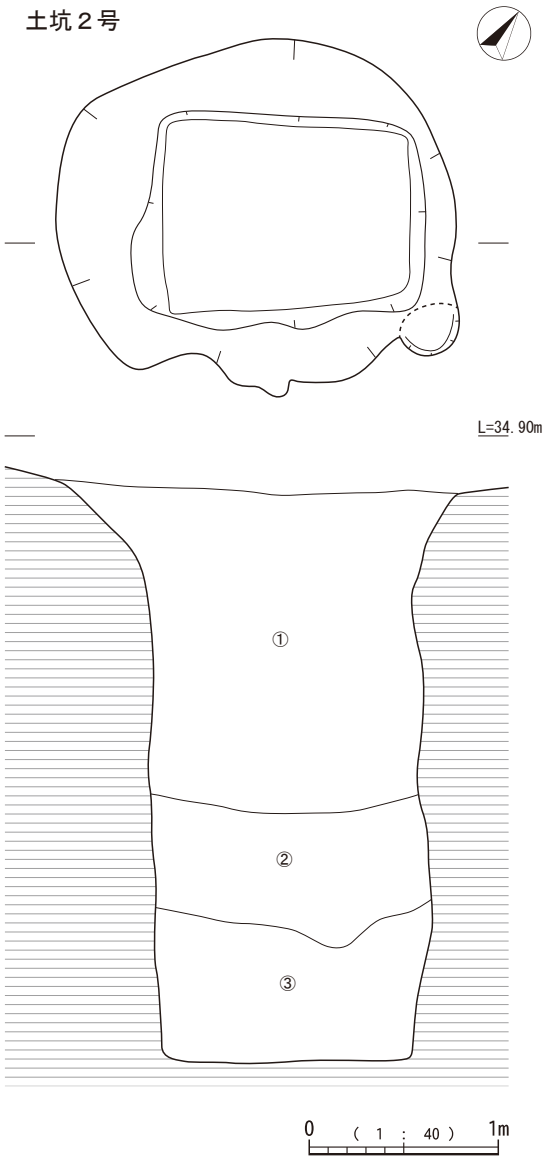


第66図　中世の遺構配置図（66～78区）



掘立柱建物跡１号埋土注記
①　灰黄褐色土(10YR４/２)　しまり非常に強い　白色粒子を含む

第67図　掘立柱建物跡１号



土坑２号埋土注記
① 黒褐色土　しまりやや弱く粘性あり　白・赤色粒子，炭化物を10％含む
② 灰黄褐色土　しまり弱く粘性あり　黄→灰→①→黄→灰の順で水平堆積する
③ 灰色土　黄→灰→白→灰と水平堆積が見られたり，マーブル状に堆積する

第68図　土坑２号

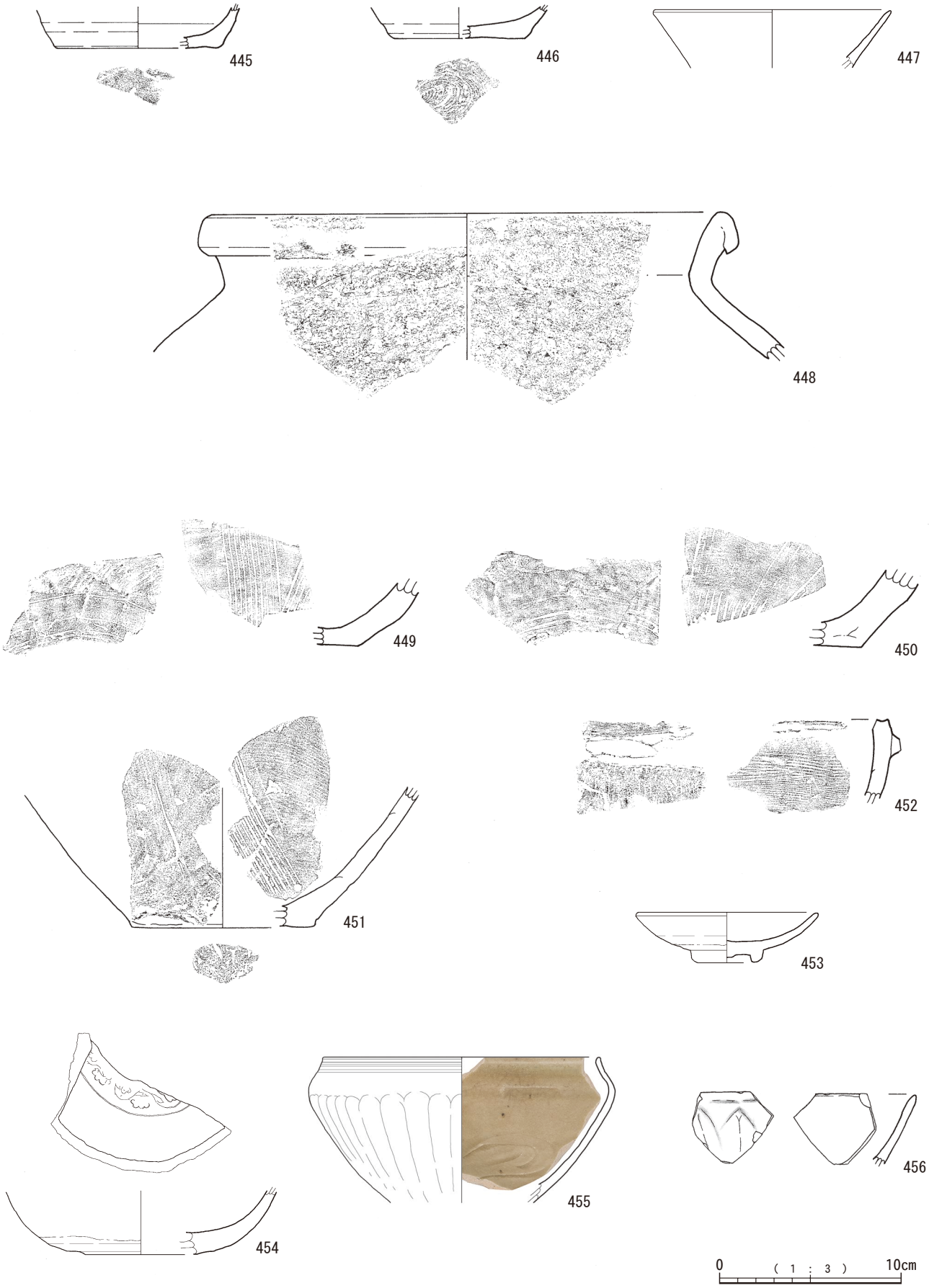
３　遺構

遺構の年代は，出土遺物から判断して，13～16世紀が中心となっている。溝状遺構の一部（溝状遺構１・４号）は，現代まで道として利用されているものもあったが，構築された時代が中世であるため本節で報告する。また，鍛冶・製鉄に関連すると考えられるＤ～Ｆ－43～52区の炉跡等は，中世末から近世にわたり連続して使用されていたことが想定されたため，「第６節　製鉄関連遺構」で報告する。本節では種類別に遺構の報告を行い，時期別の変遷については総括に記載する。

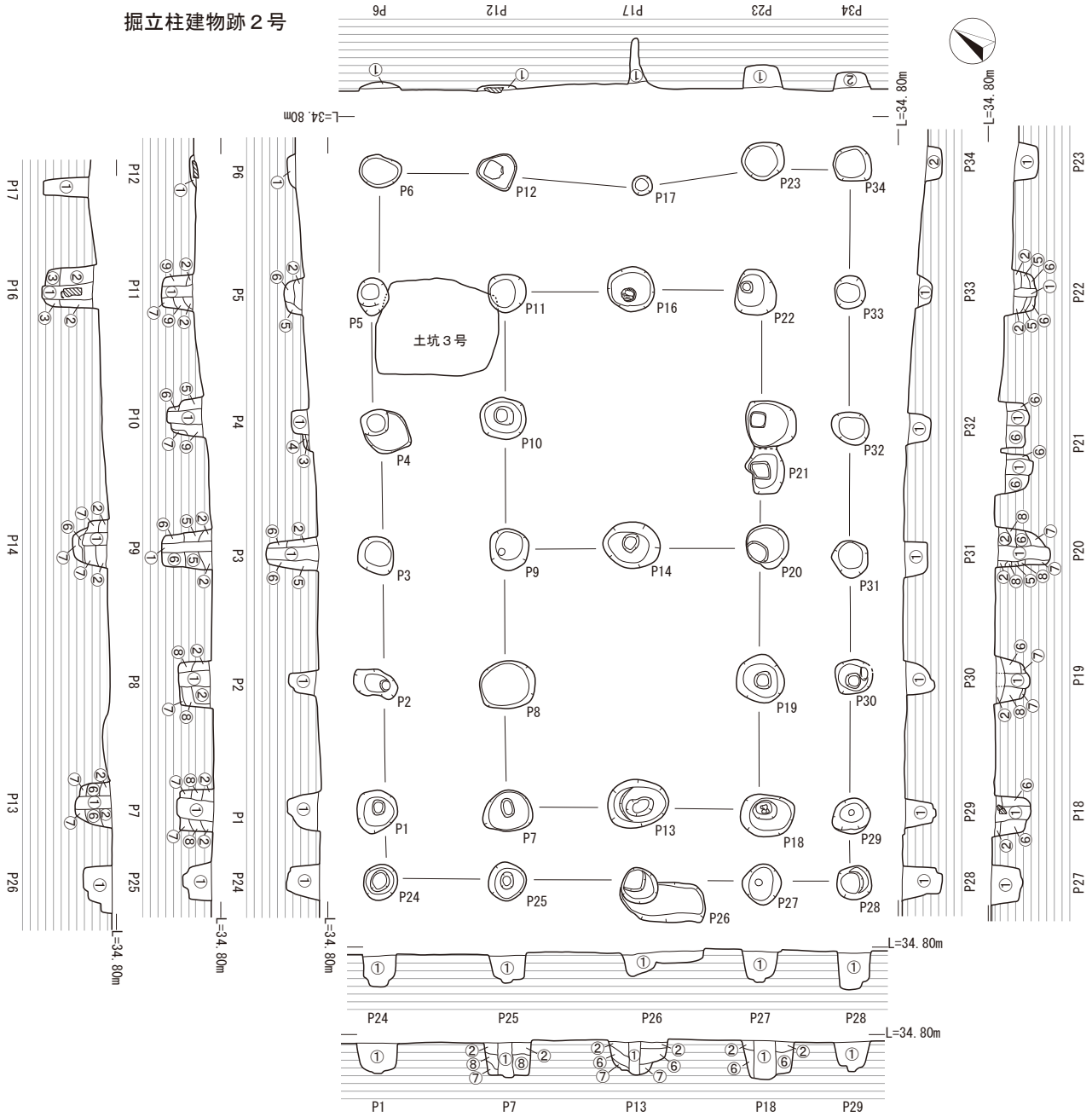
（１）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は４つのエリアで検出した。１・２号はＦＧ－44～47区，３・４号はＧＨ－56区，５～９号はＥＦ－60～67区，10～13号はＤ～Ｆ－69～74区に分布している。平面形は長方形か正方形を基本とするが，不規則な並びをしたものもある。検出状況から，方位や周囲の大型の溝状遺構を意識した配置で建てられたことがうかがえる。

掘立柱建物跡１・２号の北側にはそれぞれ大型の土坑を検出している。いずれも建物跡に関連すると考え，掘立柱建物跡と土坑を併記している。

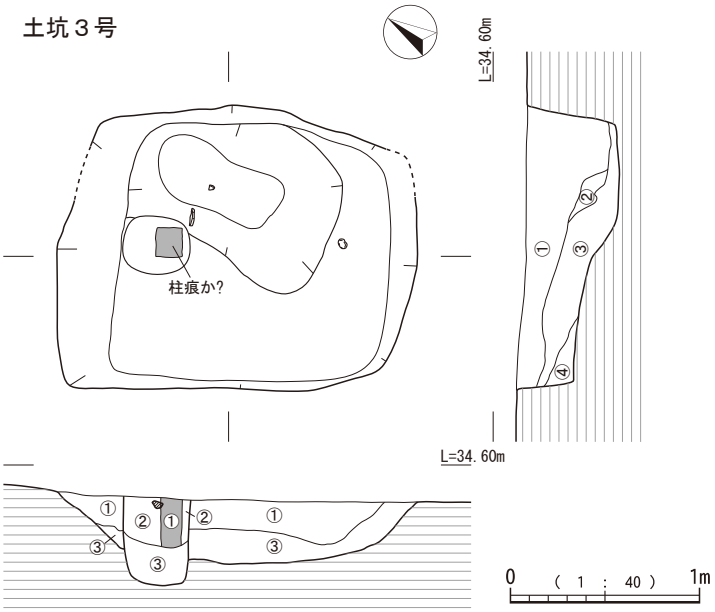


第69図　中世遺構内の遺物①

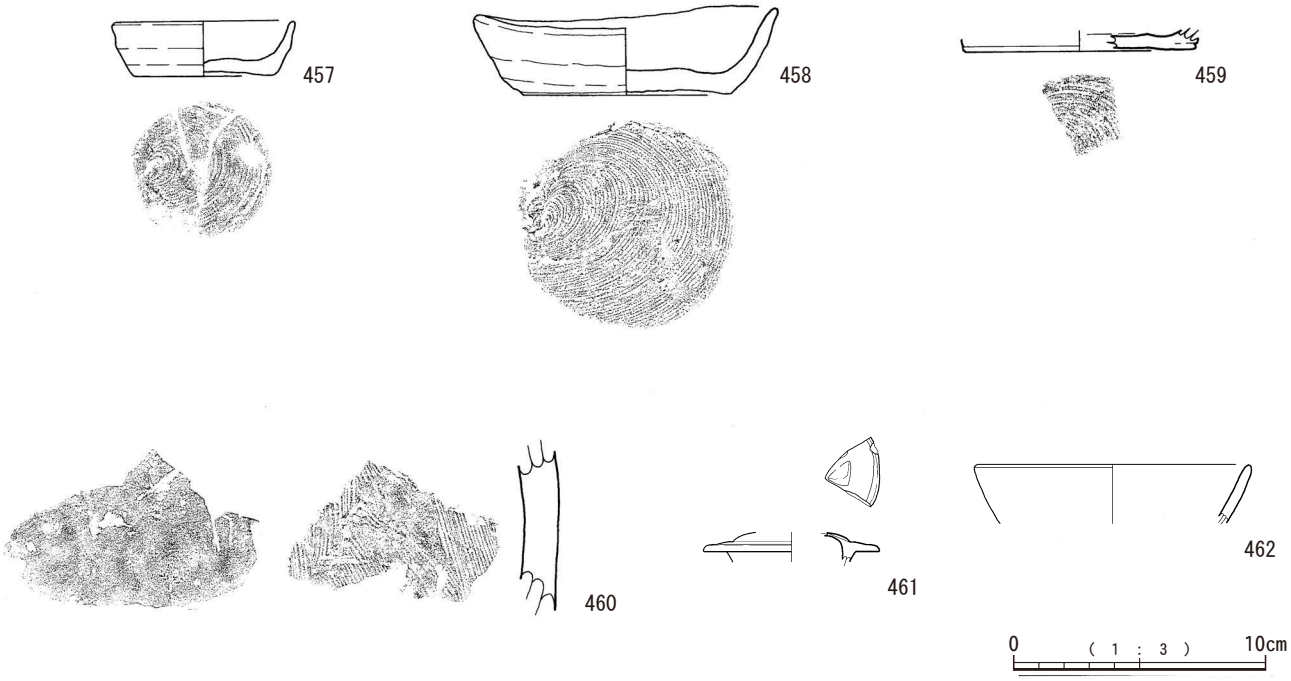


掘立柱建物跡２号埋土注記
① 黒褐色砂質土(10YR３/２) しまり強く粘性無し Ⅱｂ層由来の土 白・赤色粒子，炭化物を各10%含む
② 黒褐色砂質土(10YR３/２) しまり非常に強く粘性弱い シラスブロック(２～10㎝)40%含む
③ 黒色粘質土(10YR２/１) 粘性あり Ⅳ層土が混在している
④ にぶい黄橙色粘質土(10YR６/３) 粘性あり シラス由来の土 帯状に重なる
⑤ 灰黄褐色粘質土(10YR４/２) 粘性あり シラスブロック20%含む
⑥ 黒色土(10YR２/１) ④のブロックを60%以上含む
⑦ 灰黄褐色砂質土(10YR４/２) しまり弱い シラスブロック５%含む
⑧ ④・⑤の土が帯状に重なる
⑨ ③・④の土が混じる

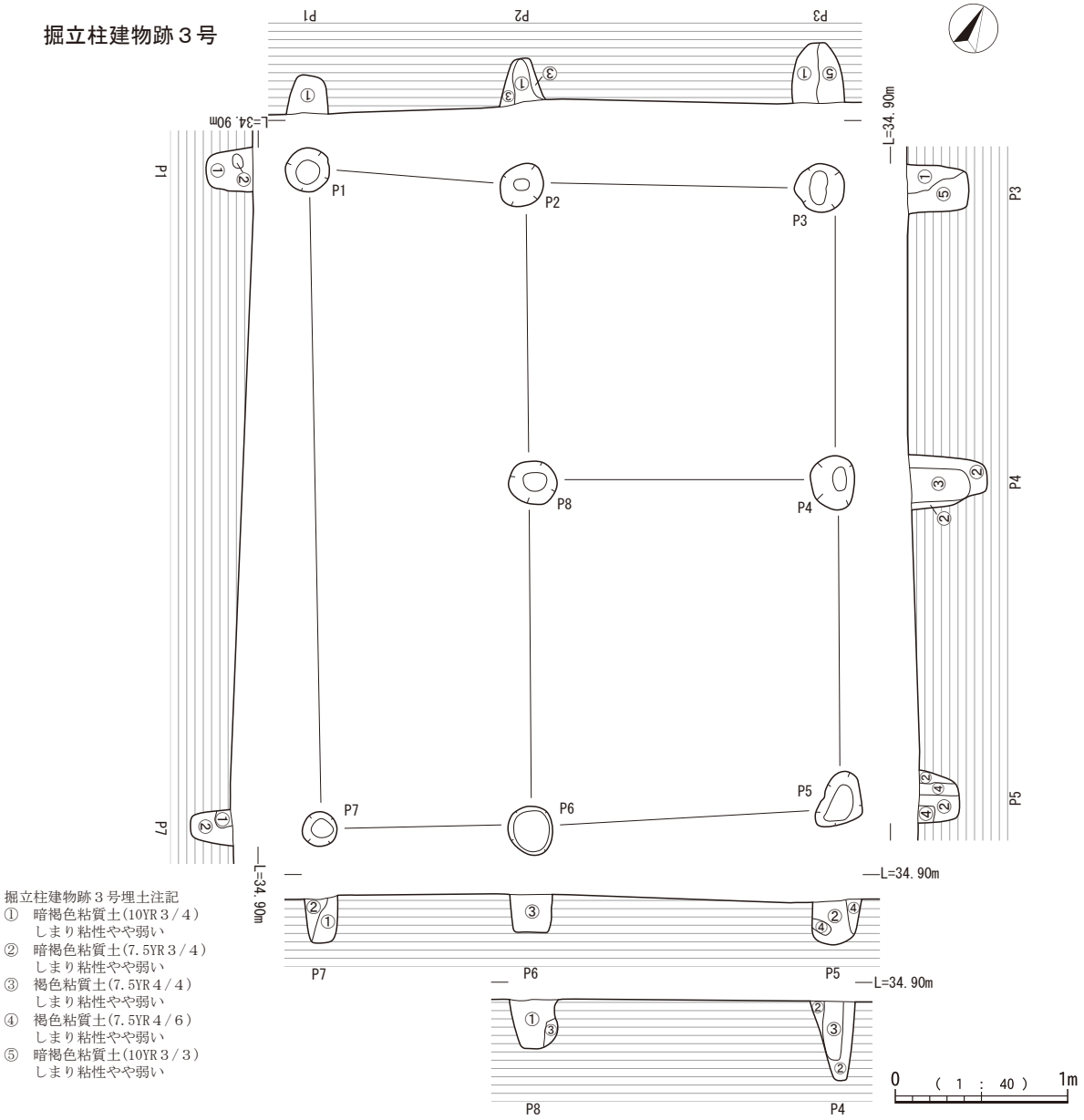
第70図 掘立柱建物跡２号



土坑３号埋土注記
① 黒褐色土(10YR３/２)
② 黒褐色土(10YR３/２) 黄褐色ブロック土含むが灰茶が強い
③ にぶい黄褐色土(10YR５/３)
④ 灰黄褐色土(10YR４/２) 粘質が強い



第71図 土坑３号・中世遺構内の遺物②



第72図　掘立柱建物跡３号

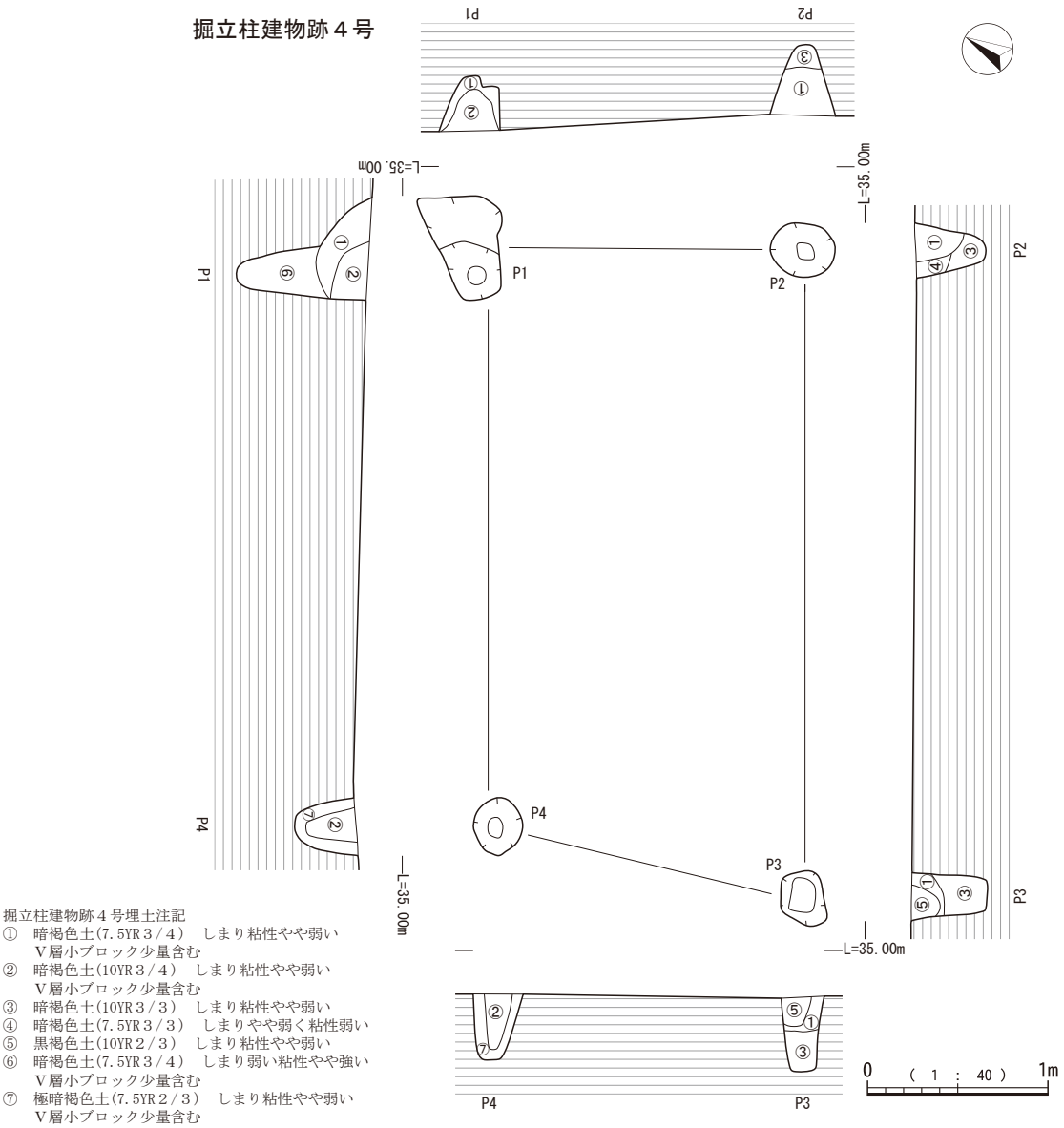
ア　掘立柱建物跡１号（第67図）・土坑２号（第68図）

Ｆ・Ｇ－44・45区のⅢ層上面で検出した。東角の柱穴から２ｍ隣に掘立柱建物跡２号を検出しており，①柱穴の大きさや深さ埋土の状況などの構造が似ている②長軸方向が一致する③遺物も同時期のものが出土していることから２棟の建物は，同時期に建てられていたと考えられる。

梁行２間×桁行３間の長方形を呈する10本柱の入側柱建物である。また，長方形平面の外側に１間の廂が延びる四面廂の掘立柱建物跡である。梁行の長さは3.9m，桁行の長さ5.9mで，総面積約23㎡である。主軸は磁北から東に60°傾いている。

身舎の柱間寸法の平均は梁行1.97m，桁行が2.02mである。柱穴の直径は，身舎，廂ともに0.3～0.5mである。深さは，0.16～0.6mとばらつきがある。Ｐ２・６・７は，断面の形状から抜取穴の可能性がある。

また，建物跡の北東側に検出した大型の土坑２号は，検出状況や遺物の出土状況から，掘立柱建物跡１号に付随する土坑と判断した。土坑２号は，長軸2.1×短軸1.9ｍで，深さは３ｍと深く掘り込まれている。検出面では円形のプランであったが，底面は方形になる。埋土は概



第73図　掘立柱建物跡４号

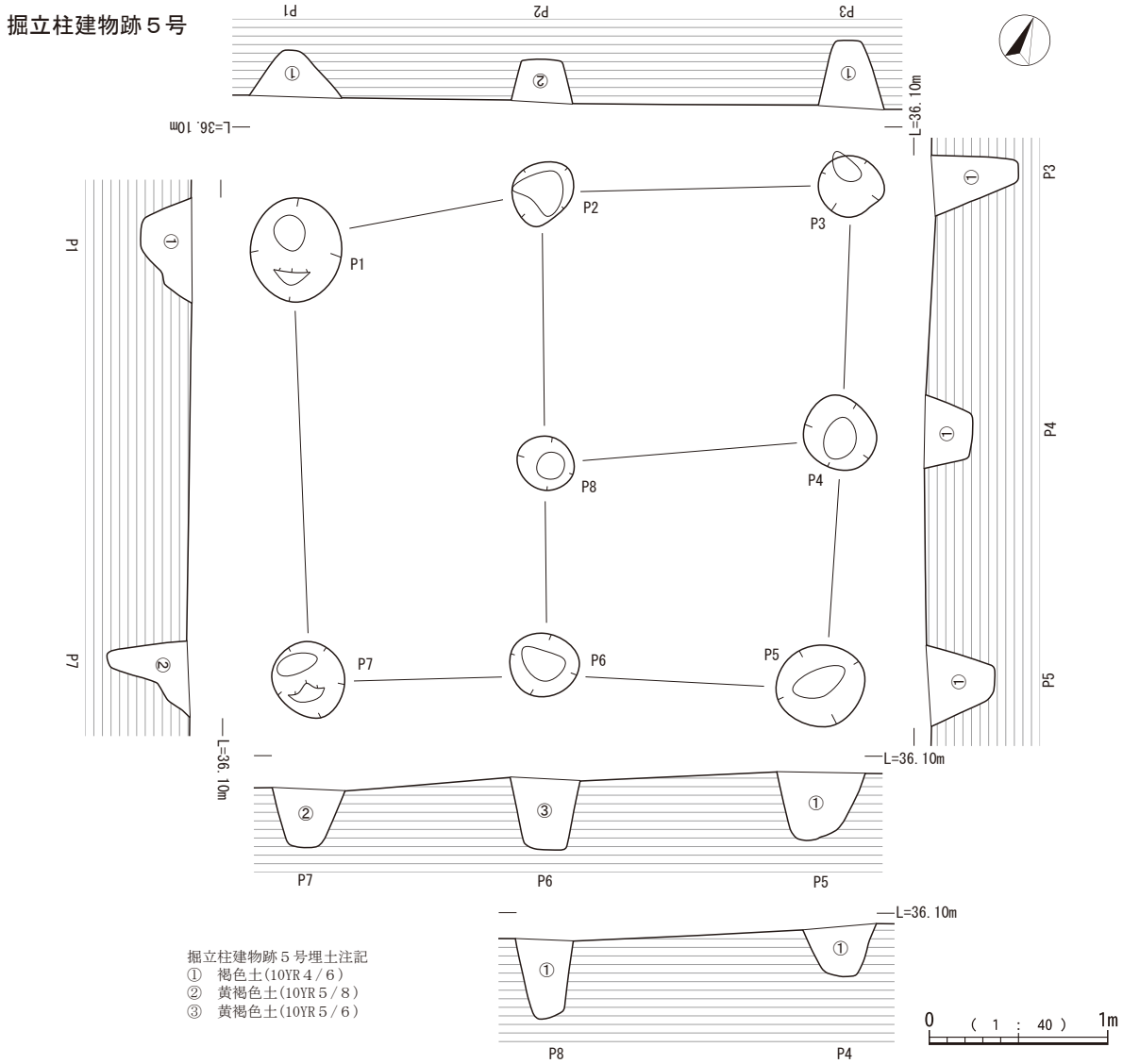
ね３層に分かれるが，②と③は，徐々に埋められたようにマーブル状の土層堆積が見られた。用途は不明である。

出土遺物（第69図　445 ～ 456）

柱穴や土坑から，土師器229点，瓦質土器13点，須恵器15点，国産陶器２点，白磁２点，青磁４点，土器82点，その他３点が出土した。そのうち，土師器３点，瓦質土器５点，白磁２点，青磁２点を図化した。

445・446は，土師器の坏と推測される。445は風化のため底部の糸切り痕は不明瞭である。446は底部には糸切り痕が残る。447は土師器坏の口縁部である。内外面の一部は，黒色化しているが，焼成時のものか使用によるものかは明らかでない。形態から古代の可能性がある。

448 ～ 452は，瓦質土器である。448は壺で，口縁部下端が突出している。風化が著しく，調整は不明である。449は擂鉢である。内面には10条一単位の擂目が施される。外面は，体部と底部の境に横方向のヘラケズリを施す。450は擂鉢である。内面は使用により摩耗しており，８条一単位の擂目が残る。451は擂鉢である。内面は斜位のハケ目が施されたのちに擂目を施す。擂目は残存部分からみて，一単位が９条以上とみられる。外面には，指オサエ痕が残る。452は羽釜である。外面は鍔の直下から縦方向のハケ目を施す。



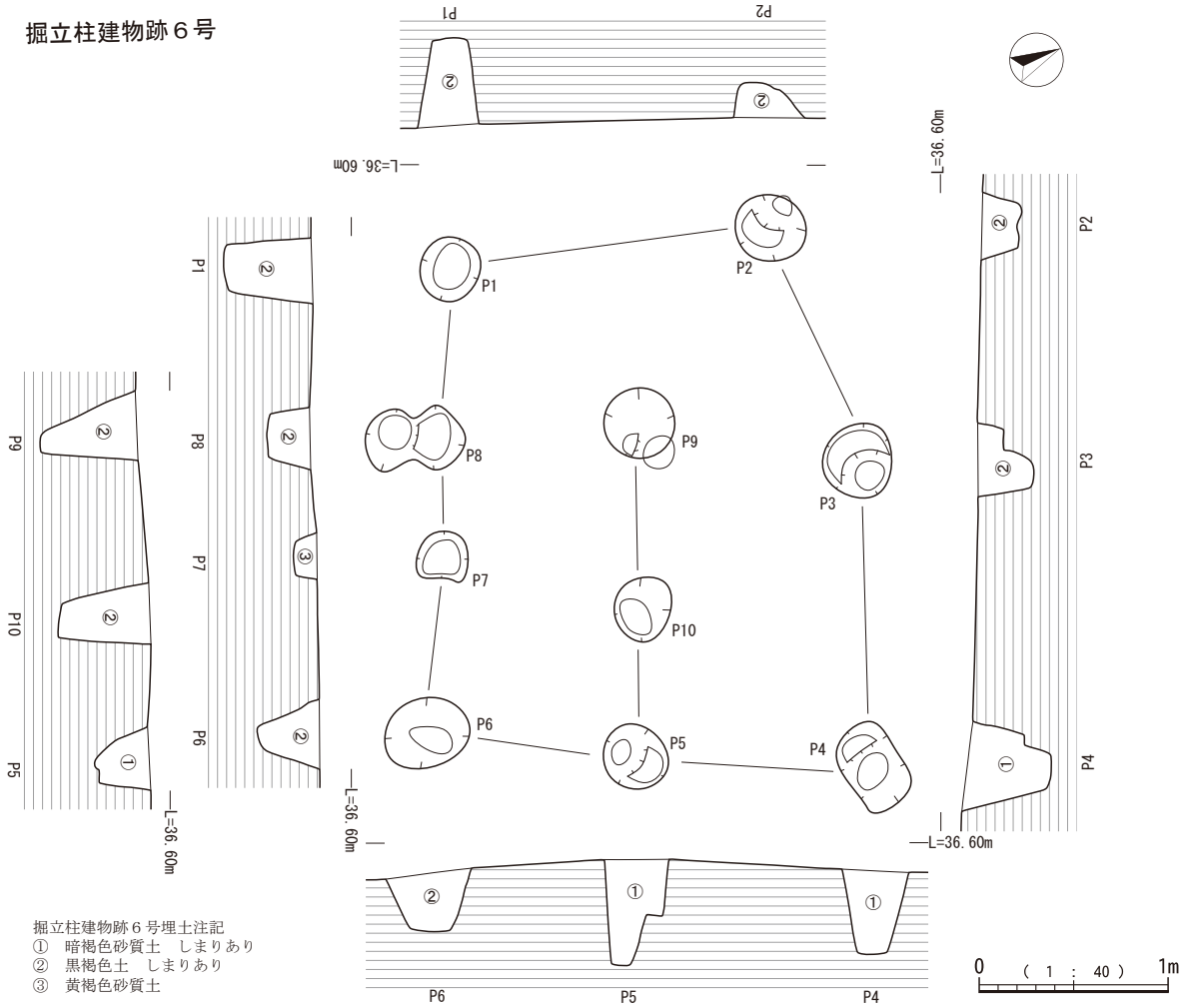
第74図　掘立柱建物跡５号

453は白磁皿である。内湾気味に口縁部が開く低平な器形である。歴博分類白磁皿Ｂ群，森田分類のＤ類に該当する。15世紀前半である。454は白磁碗である。口縁部と高台は欠損する。厚手で，外面の下半部は無釉である。見込みは平坦で，大きな印花文が押捺される。これらの特徴から，ビロースクタイプⅢ類と考えられる。14世紀後半～15世紀前半である。455は青磁の束口碗である。内面には，片切彫りによる劃花文が施される。外面の肩部以下は，細めの蓮弁が施される。器形は，龍泉窯系にもみられるものであるが，胎土・釉の発色などは同安窯（甫田窯）系のものに類似する。類例が確認できないため，今後検討が必要である。456は青磁碗である。外面には，鎬蓮弁文が施される。歴博分類の龍泉窯青磁碗Ｂ１類，大宰府分類龍泉窯青磁碗Ⅱ類に該当する。13世紀中葉～14世紀前半である。

イ　掘立柱建物跡２号（第70図）・土坑３号（第71図）

Ｇ－45・46区のⅢ層上面で検出した。本建物跡は，梁行２間×桁行４間の長方形を呈する13本柱の入側柱建物である。また，長方形平面の外側に廂が一間延びる四面廂のついた掘立柱建物跡である。梁行の長さは3.9m，桁行の長さ８ｍで，総面積約32㎡である。主軸は磁北から東に55°傾いている。

身舎の柱間寸法の平均は梁行1.94m，桁行が2.02mである。柱穴の直径は，身舎が0.6～0.8m，廂が0.3～0.6mで，身舎の柱穴が一回り大きい。深さは，0.1～0.8mとばらつきがある。柱痕跡は身舎で複数確認されている。



第75図　掘立柱建物跡６号

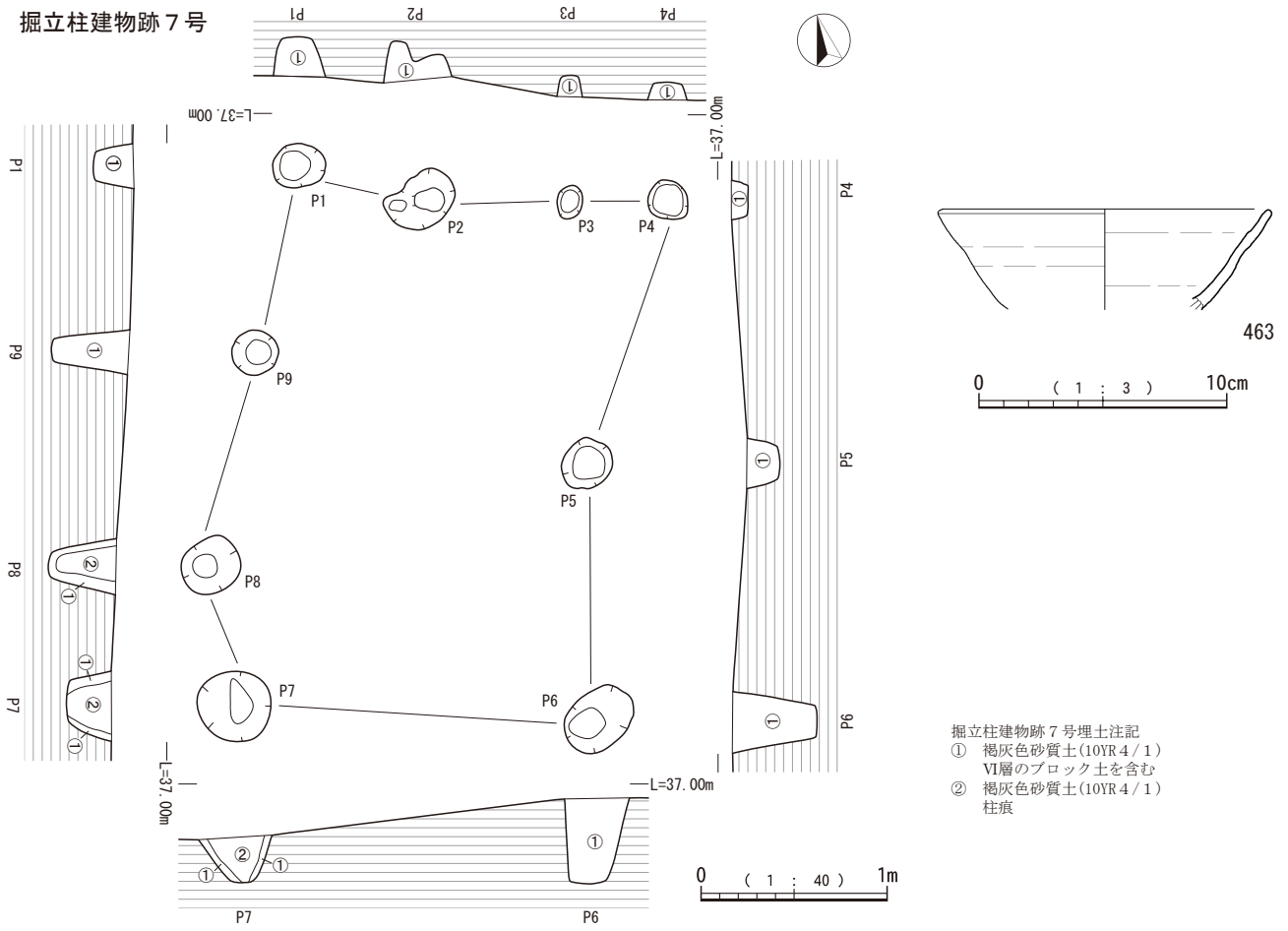
また，断面の状況から柱があったことを想定させる柱穴もある。Ｐ26は柱抜取穴の可能性がある。Ｐ21は，柱の配置状況から北西側が先に作られ北東側は建て替えか補強による追加が行われたことが想定される。

また，掘立柱建物跡１号と同様北側に大型の土坑３号を検出した。検出状況や遺物の出土状況から，掘立柱建物跡２号に付随する土坑と判断した。土坑３は，長軸1.9×短軸1.5m，深さ0.3～0.5mの掘り込みをもつ土坑である。山ノ脇遺跡（日置市伊集院町郡）でも掘立柱建物跡内に同規模の土坑を検出している例がある。土坑内に柱穴があるなど類似点が多い。

出土遺物（第71図　457～462）

柱穴や土坑から，土師器186点，瓦質土器１点，須恵器14点，白磁１点，青磁２点，土器53点が出土した。そのうち，土師器３点，瓦質土器１点，白磁１点，青磁１点を図化した。

457は土師器の坏である。口縁部は若干内湾するもので，わずかに上げ底である。底部には糸切り痕が残る。458は完形の土師器坏である。上面形はやや楕円形であり，口縁部もゆがみが顕著な粗雑なつくりである。底部外面には，糸切り痕が残る。箱形の器形を呈することから，中世後半期のものと考えられ，14世紀後半から15世紀中頃に類例がある。459は土師器の皿である。やや風



第76図　掘立柱建物跡７号・中世遺構内の遺物③

化している。底部には糸切り痕が残る。

460は瓦質土器の甕もしくは鉢と考えられる。内面には斜位のハケ目と指頭圧痕が，外面には丁寧なナデが施される。

461は青白磁の小壺の蓋である。内面は露胎で、上面に菊花状の文様を有する。12 ～ 13世紀頃と推察される。

462は無文の龍泉窯系青磁碗の口縁部である。小破片であるため，時期判断は困難であるが、15世紀頃の可能性がある。

ウ　掘立柱建物跡３号（第72図）

Ｇ－56区のⅢ層上面で検出した。梁行１間×桁行２間の長方形を呈する６本柱の側柱建物である。また，長方形平面の南西側に一間の廂が延びる掘立柱建物跡である。梁行の長さは1.8m，桁行の長さ3.7mで，総面積約6.66㎡である。主軸は磁北から西に35°傾いている。

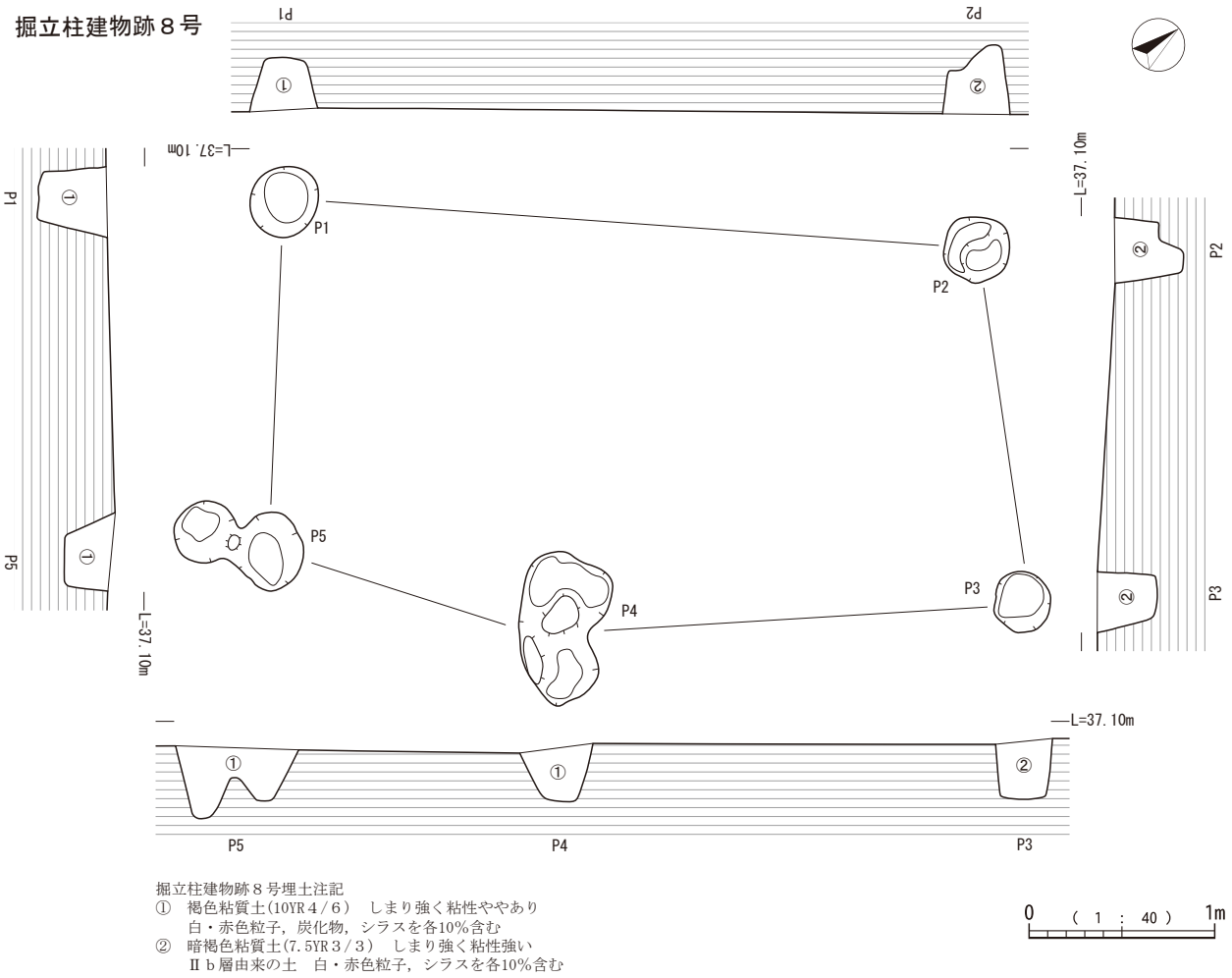
身舎の柱間寸法の平均は梁行1.76m，桁行が1.83mである。柱穴の直径は，身舎が0.25 ～ 0.3m，廂が0.2 ～ 0.25mでほぼ同じであった。深さは，0.2 ～ 0.45mとばらつきがある。柱痕跡は身舎で５か所，廂で１か所確認されている。掘立柱建物跡１・２号と比べて1/3 ～ 1/2の規模であることから，用途に違いがあると考えられる。

柱穴から，土師器１点，滑石破片１点が出土したが，小片のため図化には至らなかった。

エ　掘立柱建物跡４号（第73図）

Ｇ・Ｈ－56区のⅢ層上面で検出した。梁行１間×桁行１間の台形を呈する４本柱の側柱建物である。梁行の長さは1.75 ～ 1.82m，桁行の長さ3.08 ～ 3.56mで，総面積約5.81㎡である。主軸は，磁北から東に60°傾いている。

柱間寸法の平均は梁行1.78m，桁行が3.32mである。柱穴の直径は，0.26 ～ 0.3mであった。深さは，0.34 ～ 0.72mとばらつきがある。柱痕跡は１か所確認されている。掘立柱建物跡３号に隣接しており，同時期もしくは関連する建物と考えられる。土坑24号が規模が小さいことから柱痕の１つと考えると「Ｌ」字形の建物となるが，柱



第77図　掘立柱建物跡８号

痕として積極的に断定できる根拠に乏しいため，別遺構として掲載した。

柱穴から，摩滅した土器１点が出土したが，図化には至らなかった。

オ　掘立柱建物跡５号（第74図）

Ｆ－60区のⅥ層上面で検出した。梁行２間×桁行２間の長方形を呈する８本柱の側柱建物である。西側は中心の柱がなく梁行が１間になる。掘立柱建物跡３号ほど梁行の間隔に差がないことから，廂ではないと判断した。梁行の長さは2.8m，桁行の長さは3.1mで，総面積約8.68㎡である。主軸は磁北から東に70°傾いている。

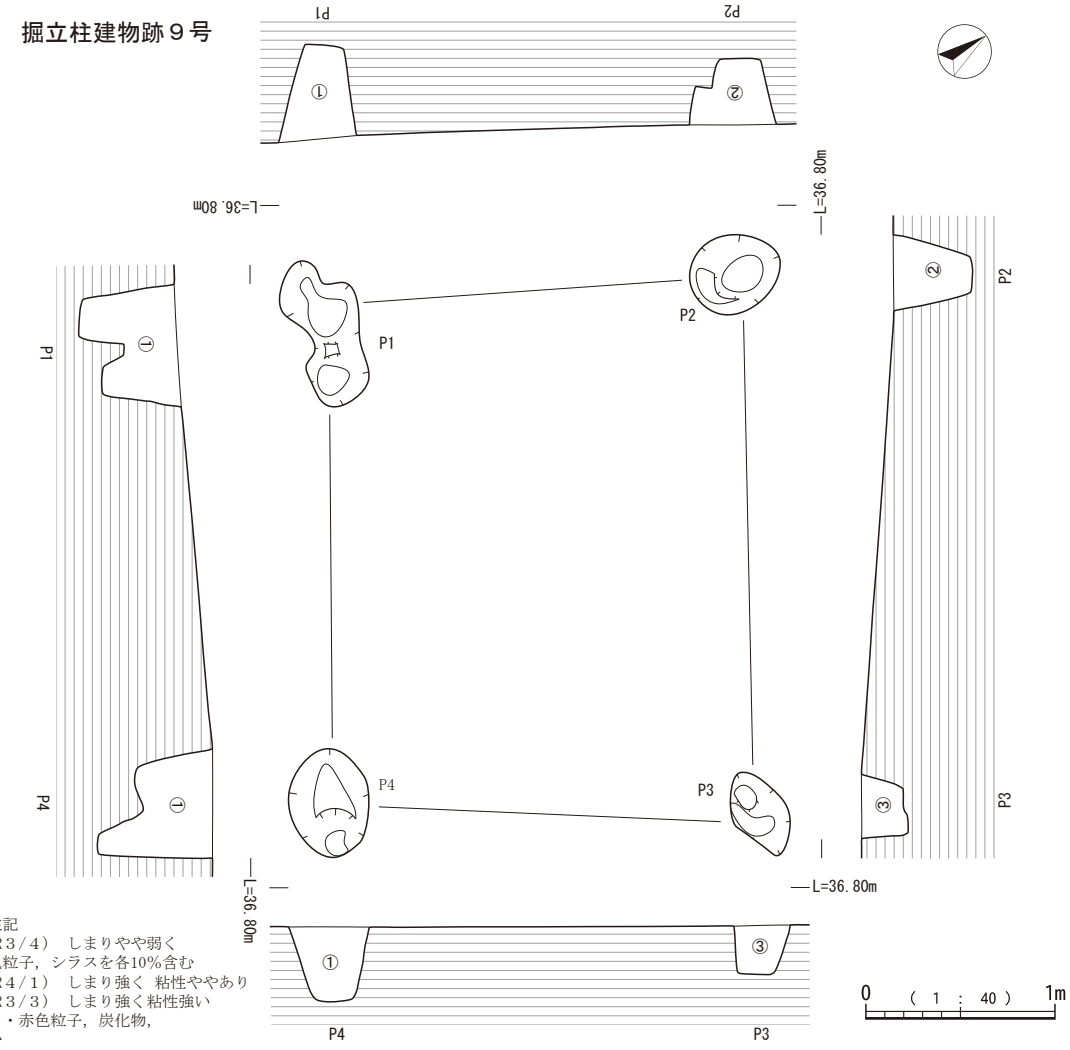
柱間寸法の平均は西側を除いた梁行1.36m，桁行が1.51mである。柱穴の直径は，0.32～0.5mであった。深さは，0.2～0.5mとばらつきがある。溝状遺構３号と溝状遺構４号に挟まれた調査区の２棟のうち西側に位置する１棟である。周辺で柱穴を複数検出しているが，掘立柱建物跡に認定できるものは確認できなかった。柱穴から遺物は出土しなかった。

カ　掘立柱建物跡６号（第75図）

Ｆ－62・63区のⅥ層上面で検出した。梁行２間×桁行２間の長方形を呈する８本柱の側柱建物である。北東側は中心の柱がなく梁行が１間になる。構造は掘立柱建物跡５号と同じである。梁行の長さは1.6m，桁行の長さ2.4mで，総面積約3.84㎡である。主軸は磁北から東に30°傾いている。

柱間寸法の平均は東側を除いた梁行0.85m，桁行が1.18mである。柱穴の直径は，0.25～0.45mであった。深さは，0.1～0.5mとばらつきがある。

溝状遺構３号と溝状遺構４号に挟まれた調査区の２棟のうち東側に位置する。また，掘立柱建物跡５・６号は，溝状遺構がある方向に面した部分の真ん中の側柱が確認できなかった。溝状遺構の時期も同時期であることから，関連する可能性がある。柱穴から，土師器10点が出土し



第78図　掘立柱建物跡９号

ているが，小片のため図化には至らなかった。

キ　掘立柱建物跡７号（第76図）

Ｆ－65区のⅥ層上面で検出した。梁行１間ないし３間，桁行２間ないし３間の変則的な柱の数で長方形を呈する９本柱の側柱建物である。梁行の長さは，1.97m，桁行の長さ2.9mで，総面積約5.71㎡である。主軸は磁北から東に20°傾いている。

柱穴の直径は0.15～0.38mで，深さは0.12～0.45mとばらつきがある。柱痕跡は２か所で確認している。

変則的な構造であるが，埋土の状態と形状から掘立柱建物跡と判断した。

出土遺物（第76図　463）

柱穴から土師器１点が出土し，図化した。

463は埦もしくは坏である。内外面回転ヨコナデを施す。古代の可能性がある。

ク　掘立柱建物跡８号（第77図）

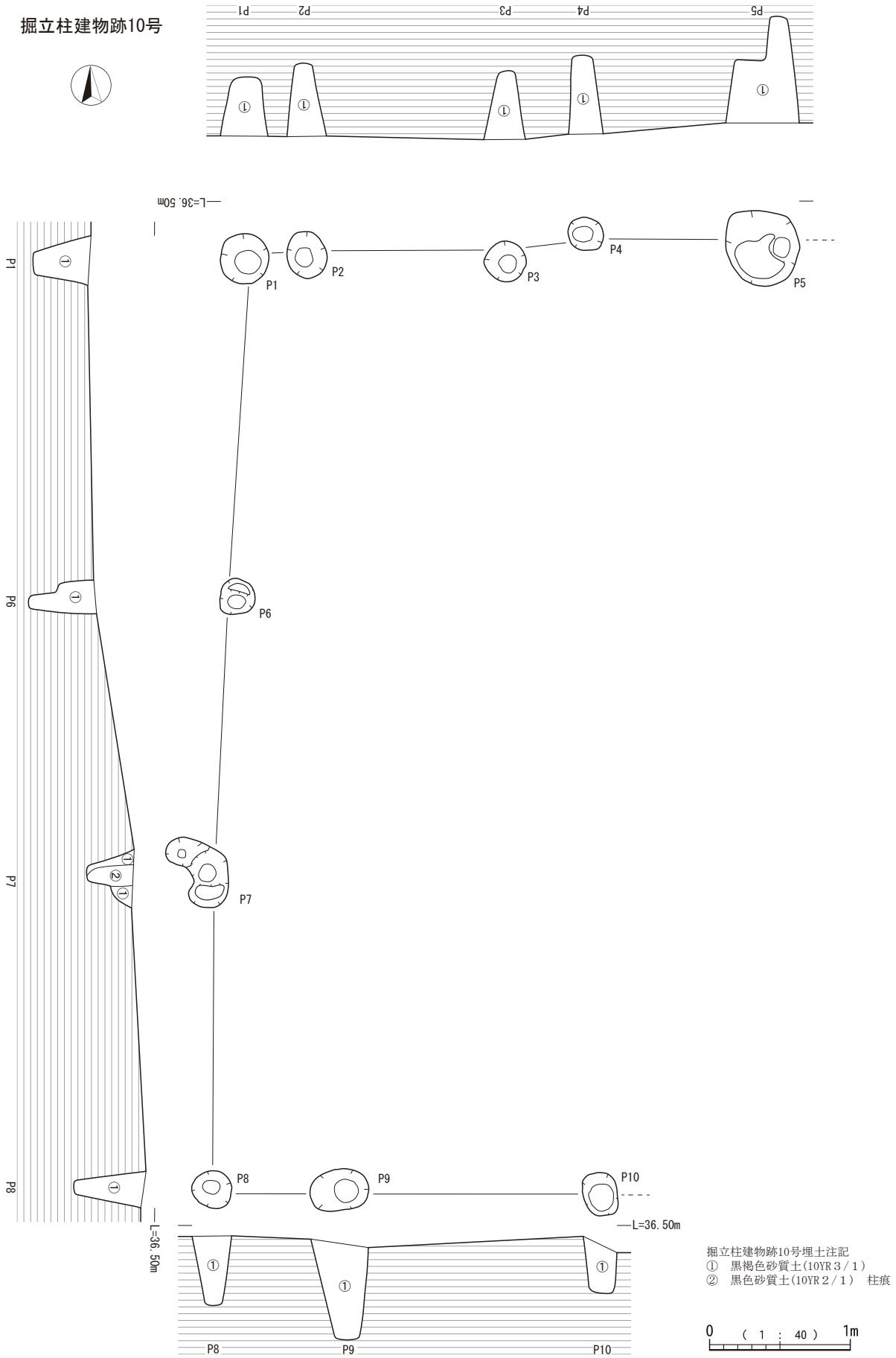
Ｆ－66区のⅥ層上面で検出した。本建物跡は，梁行１間，桁行１間ないし２間の変則的な柱の数で長方形を呈する５本柱の側柱建物である。梁行の長さは1.9m，桁行の長さ3.7mで，総面積約７㎡である。主軸は磁北から東に45°傾いている。

柱穴の直径は，0.3～0.4mで，深さは，0.3～0.4mである。Ｐ４と５は，建て替えか補強による追加が想定される。

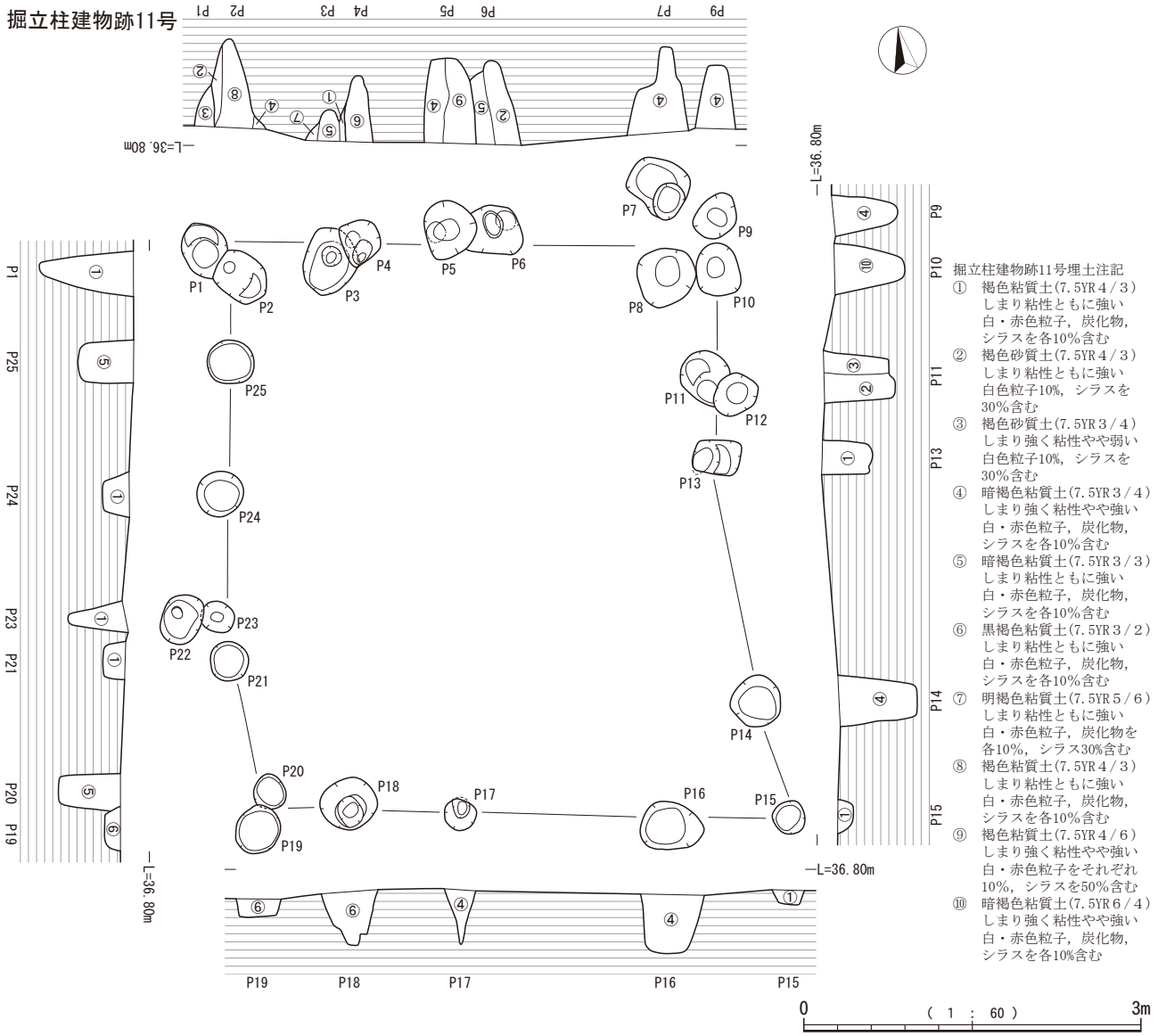
掘立柱建物跡７号の構造と似ており，埋土の状態と形状で掘立柱建物跡と判断した。柱穴から土師器１点が出土したが，図化には至らなかった。

ケ　掘立柱建物跡９号（第78図）

Ｅ・Ｆ－67区のⅥ層上面で検出した。梁行１間×桁行１間の長方形を呈する４本柱の側柱建物である。梁行の長さは2.2m，桁行の長さ2.8mで，総面積約6.16㎡である。主軸は磁北から西に55°傾いている。



第79図　掘立柱建物跡10号



第80図　掘立柱建物跡11号

柱間寸法の平均は梁行2.22m，桁行が2.82mである。柱穴の直径は，0.35～0.4mで，深さは，0.25～0.6mとばらつきがある。Ｐ１と４は，建て替えか補強による追加が想定される。

溝状遺構６号と溝状遺構７号の合流地点にあり，２つの溝状遺構に関連する掘立柱建物跡の可能性がある。柱穴から遺物は出土しなかった。

コ　掘立柱建物跡10号（第79図）

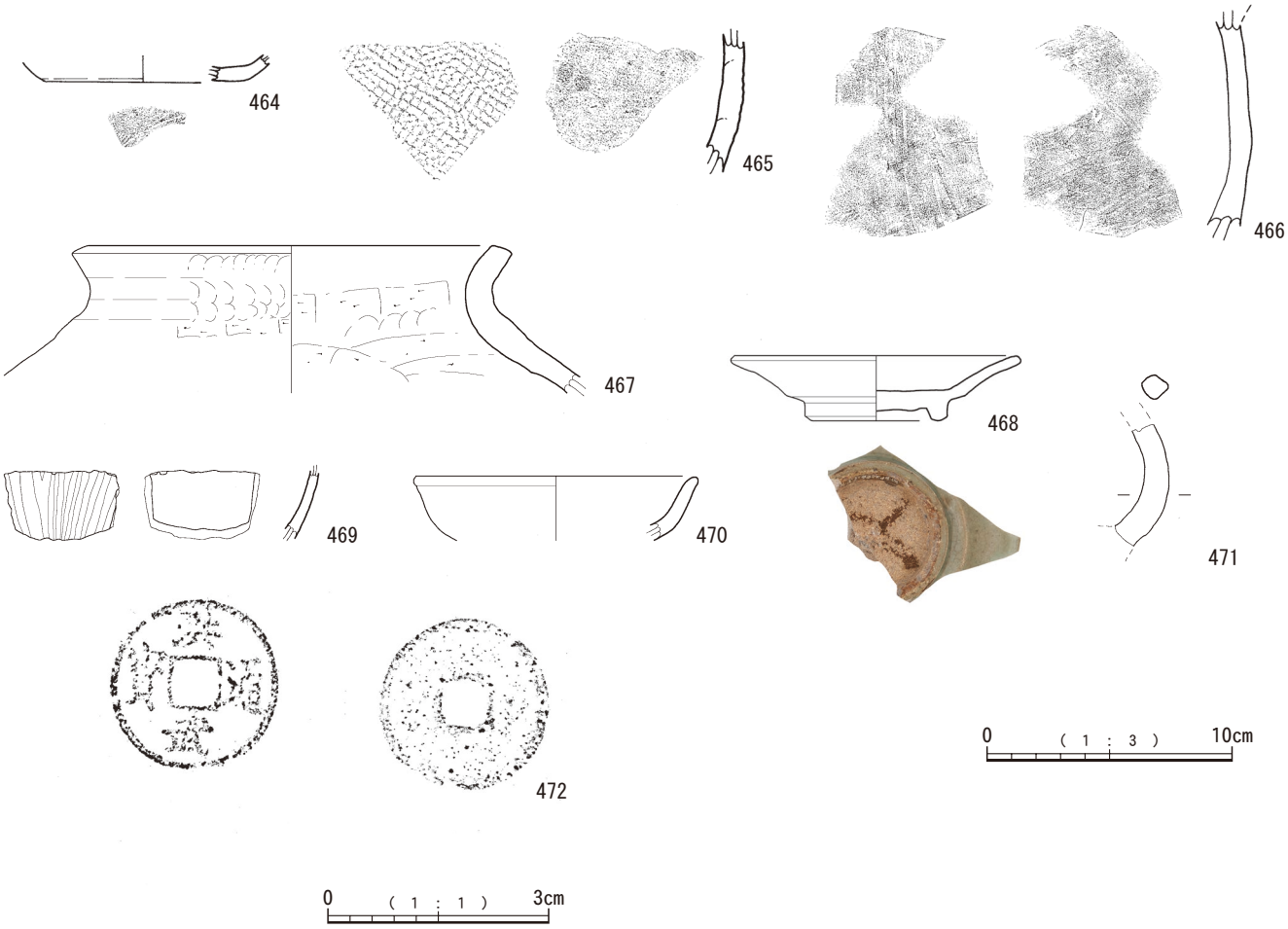
Ｄ・Ｅ－69・70区のⅥ層上面で検出した。建物東側が削平を受けているため正確な構造は不明であるが，梁行３間×桁行３間の長方形を呈する側柱建物と推測される。主軸は磁北とほぼ同じである。

柱間は不規則である。柱穴の直径は，0.25～0.55mであった。東側に面する部分は，柱穴が無い。簡易な作りであったと考えられる。

サ　掘立柱建物跡11号（第80図）

Ｄ～Ｉ－69～76区の調査は令和３年度に行われ，この調査地点から多くのピットを検出したが，調査時には掘立柱建物跡を認定することができなかった。整理作業を行う中で，埋土や遺構内外の出土遺物，柱痕の有無，遺構配置状況等を総合的に判断して，掘立柱建物跡11・12号の図上復元を行った。

Ｅ・Ｆ－73・74区Ⅵ層上面で検出した。本建物跡は，梁行３間ないし４間，桁行４間で長方形を呈する側柱建物である。梁行の長さは4.5m，桁行の長さ５ｍで，総面積約22.5㎡である。主軸はほぼ磁北と同じである。



第81図　中世遺構内の遺物④

柱間寸法の平均は梁行１m，桁行が1.24mである。柱穴の直径は，0.26～0.5mで，深さは，0.16～0.8mとばらつきがある。Ｐ１～６と12は，柱痕が確認できた。また，Ｐ２・４・５・７～９・12・20・22・23は，建て替えか補強による追加が想定される。

出土遺物（第81図　464～472）

柱穴から土師器が１点，瓦質土器１点，中世須恵器２点，青磁４点，洪武通宝１点が出土した。そのうち，土師器１点，中世須恵器３点，青磁３点，洪武通宝１点を図化した。

464は土師器の坏と推察される。底部には糸切り痕が残る。内面は黒色化している。

465～467は中世須恵器である。465は甕の胴部で、外面は格子目タタキ，内面はハケ目及びナデを施す。胎土はマーブル状である。466・467は無文の甕である。466は内外面ナデ調整を施す。467は口縁部がナデ調整で，胴部の内外面にケズリを施す。

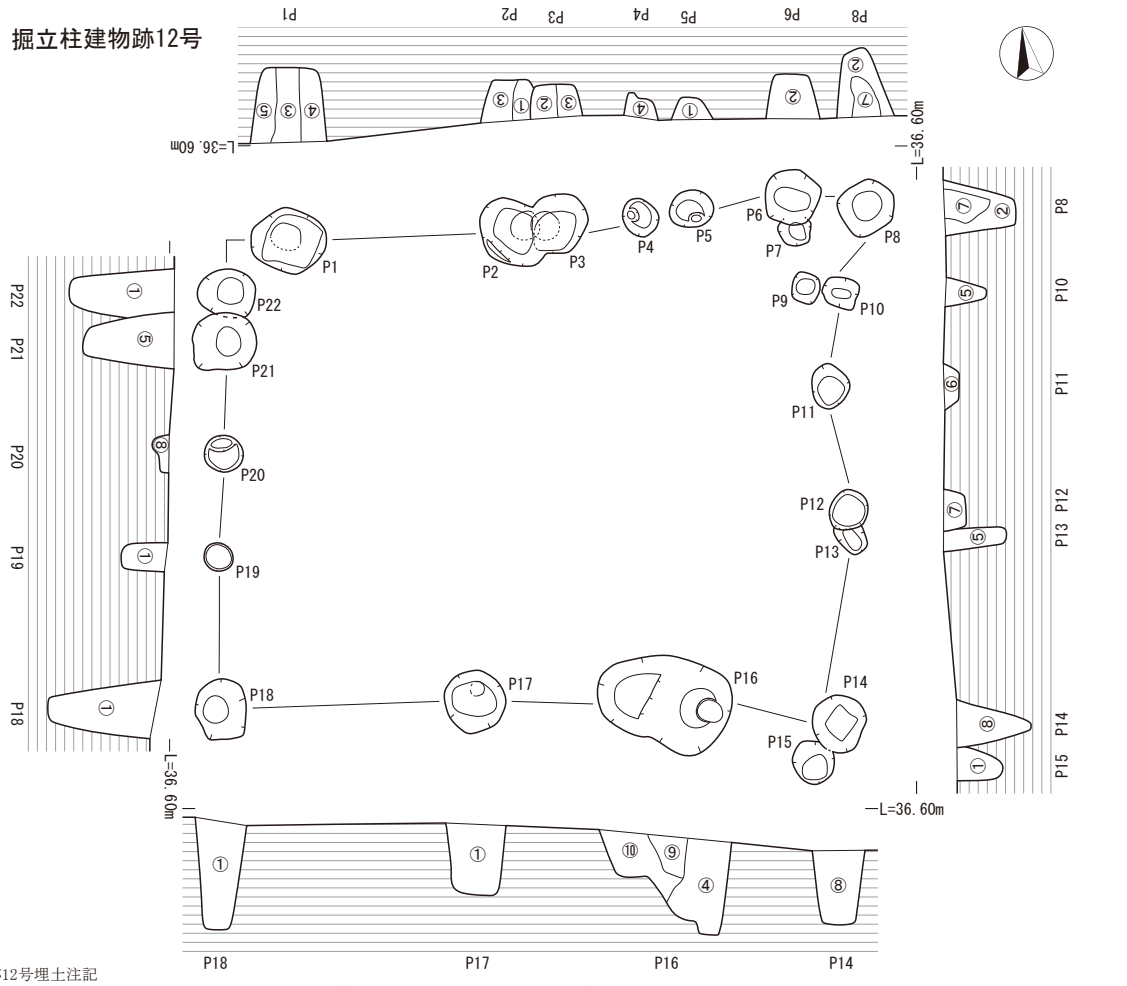
468は龍泉窯系青磁の稜花皿である。腰部で折れ，口縁部が外反する。口縁部内面には２条の沈線が巡る。体部内面の文様は不明である。高台見込みには，にぶい黄褐色の粘土で「十」とみられるものが描かれている。漆などによる記号が想定されたが，蛍光Ｘ線分析を試み，有機物ではないことが判明している。16世紀中葉～後半である。

469は龍泉窯系青磁の碗である。蓮弁はヘラ先による線描きである。内面は無文となる。歴博分類青磁碗Ｂ４類，上田分類Ｂ-Ⅳ類に該当すると考えられる。15世紀後半～16世紀前半である。470は青磁の内湾皿である。胴部は丸く張り出す。歴博分類内彎皿に該当する。15世紀中葉である。471は青磁壺の双耳環と推察される。時期は15世紀である。

472は青銅製の銭貨で洪武通寶である。初鋳は明の洪武元（1368）年である。「通」の字に特徴があり，本資料は「マ頭通・単点通」とされるものに該当する。

シ　掘立柱建物跡12号（第82図）

Ｆ－73・74区のⅣ層上面で検出した。梁行３間×桁行



掘立柱建物跡12号埋土注記
① 褐色粘質土(7.5YR4/4) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
② 褐色砂質土(7.5YR３/4) しまり強く粘性あり 白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
③ 暗褐色粘質土(7.5YR３/4) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
④ 褐色粘質土(7.5YR４/６) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
⑤ 明褐色粘質土(7.5YR５/６) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
⑥ 褐色粘質土(7.5YR４/３) しまり粘性ともにやや強い 白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
⑦ 暗褐色粘質土(7.5YR３/３) しまり強く粘性あり 赤色粒子，炭化物，シラスを含む
⑧ 黒褐色粘質土(7.5YR３/２) しまり粘性あり 白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
⑨ 明褐色粘質土(7.5YR５/８) しまり粘性ともに強い 白，赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
⑩ 明褐色粘質土(7.5YR５/８) しまり粘性ともに強い 白・赤色粒子，炭化物を各10%，シラスを50%含む

第82図 掘立柱建物跡12号

３間の長方形を呈する側柱建物である。梁行の長さは3.3m，桁行の長さ4.3mで，総面積約14.2㎡である。主軸は，ほぼ東西になる。

柱間寸法の平均は梁行1.1m，桁行が1.42mである。柱穴の直径は，0.25～0.6mであった。深さは，0.15～0.8mとばらつきがある。Ｐ１～３・８・16は，柱痕が確認できた。また，Ｐ３・６・12・14・21は，建て替えか補強による追加が想定される。掘立柱建物跡11・12号も複数の切り合いのあるピットが検出されている。周辺も切り合いのあるピットが多いことから，建物を建てる場所として使われ続けた状況がうかがえる。

出土遺物（第83図 473～477）

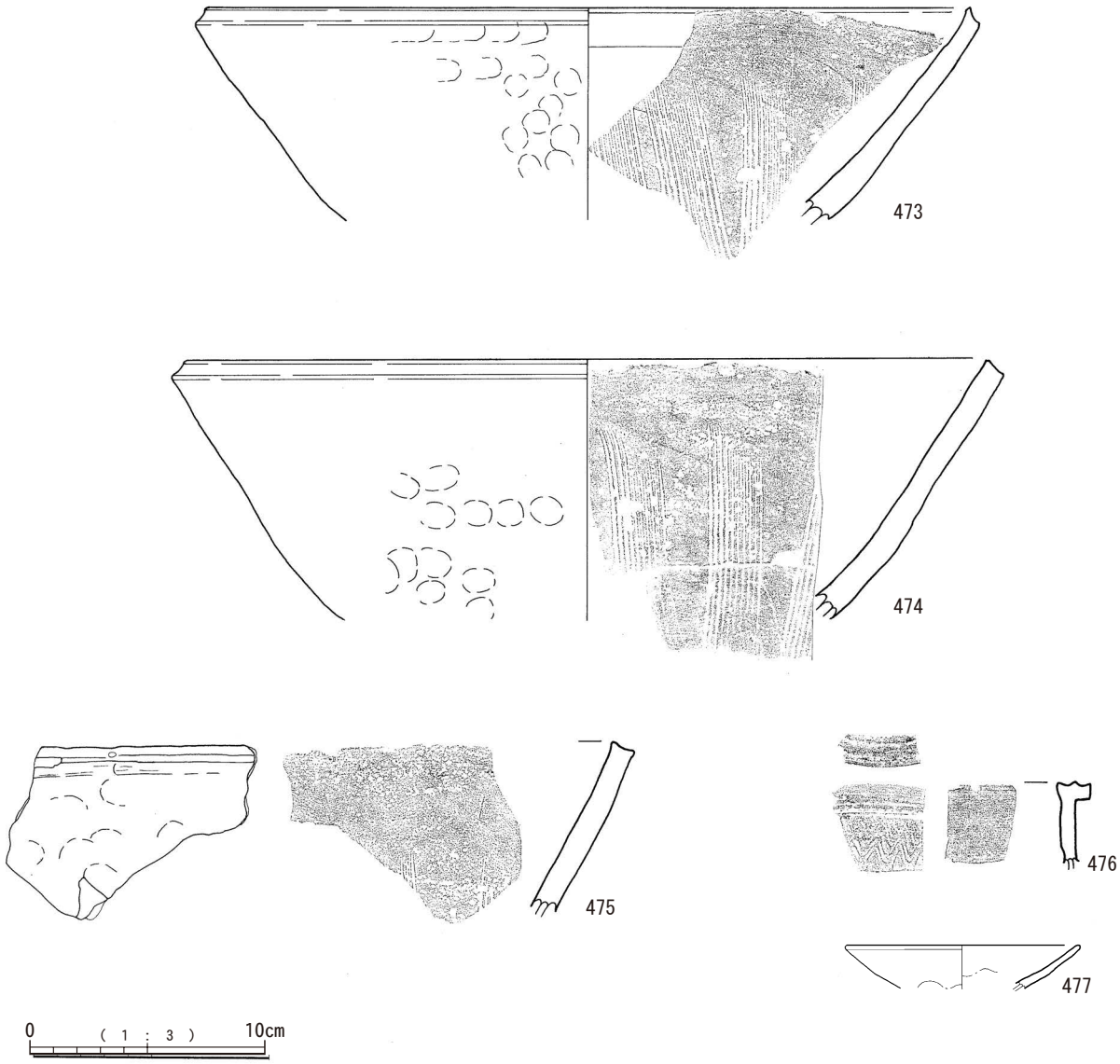
柱穴から瓦質土器３点，国産陶器１点，白磁１点が出土し，そのすべてを図化した。

473～475は，瓦質土器の擂鉢である。これらは同一個体の可能性がある。口唇部は溝状となっている。外面はナデ，内面は10条を一単位とする擂目が施される。

476は肥前系陶器の香炉と考えられる。口縁部を「Ｌ」字屈曲させ、上面には２条の溝を巡らせる。外面は鉄釉を掛けた後，６条に束ねた櫛状のもので波状に掻き取っている。17世紀後半である。

477は白磁の皿である。若干内湾気味の口縁である。歴博分類白磁皿Ｂ群，森田分類Ｄ群に該当する。15世紀前半である。

（２）竪穴建物跡



第83図　中世遺構内の遺物⑤

竪穴建物跡１号（第84図）

Ｅ－66区のⅢ層上面で検出した。遺構の年代は，出土遺物から判断すると13世紀中葉～14世紀前半と考えられる。平面形は2.8m×2.8mの正方形で，深さは0.4～0.5m程度で軟弱な貼床がある。床面中央部に埋土に混ざって複数の焼土塊（焼土２）が貼床を切って積み重なっており，炉が壊された痕跡の可能性がある。また，北側床面にも薄く焼土（焼土１）が広がり，炉跡が２か所あった可能性がある。鍛冶関連の工房の可能性も考え，焼土跡付近で鍛造剥片を探したが見つからなかった。

埋土は５層に分層することができ，しまりが弱い②層が主となる。東西の土層断面から，西側から人為的に埋め戻されたと考えられる。

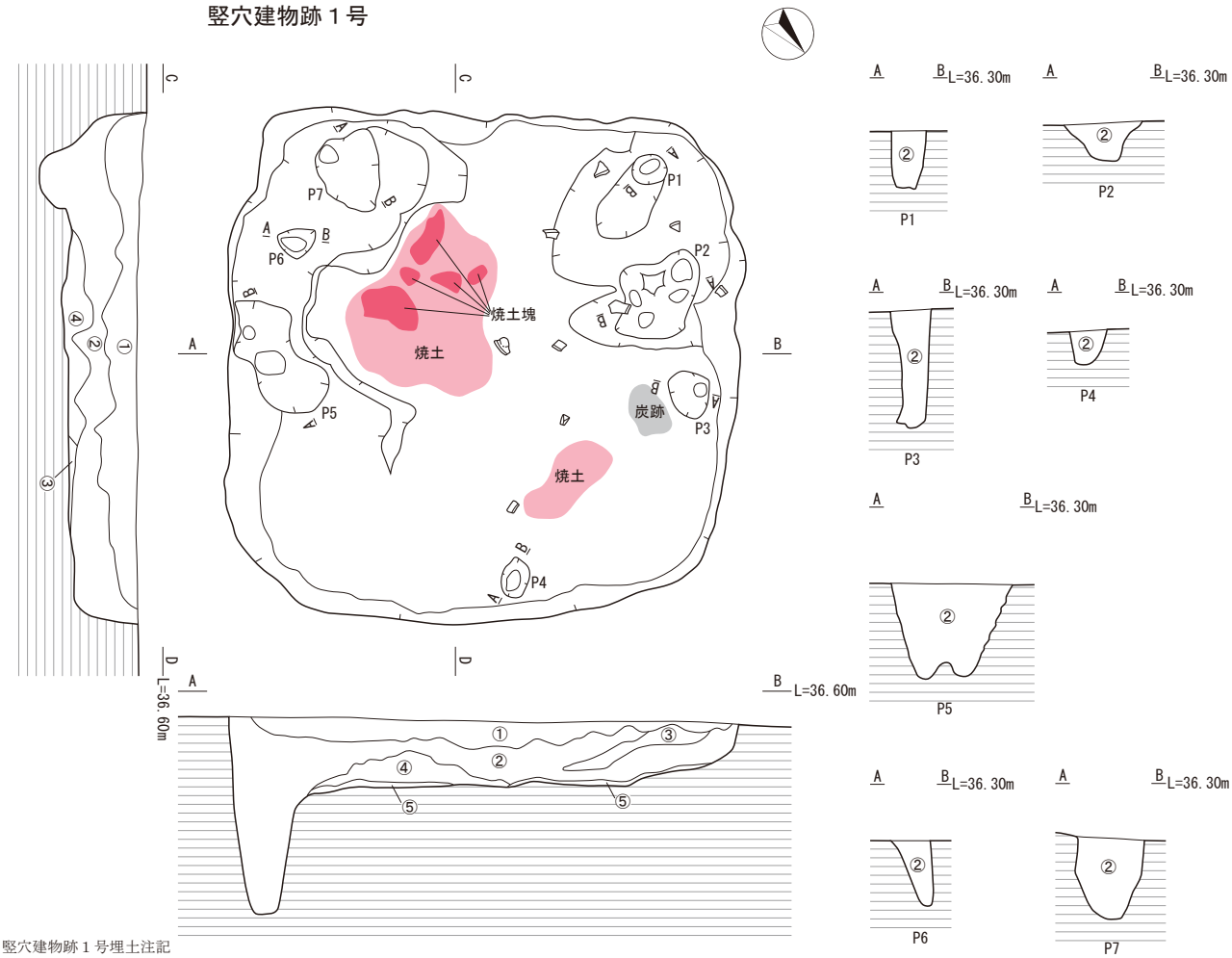
柱穴は東西に各３基，北側１基の合計７基で北側のものはごく浅い。南側の柱穴周辺の床面が深くなっており，柱を抜く時に穴が広がってできた柱抜取穴の可能性がある。

竪穴建物跡については，「①一辺２～４mの方形を基調とする。②堆積土は人為的な埋め戻しである。③共伴遺物がない（少ない）。④床面が踏み締まっているものが少ない。⑤長期の使用が認められない。」（飯村均1994）という特徴があげられている。竪穴建物１号は①～④の項目についてあてはまり，
13世紀以降に見られる中世における竪穴建物の条件を満たしているといえる。

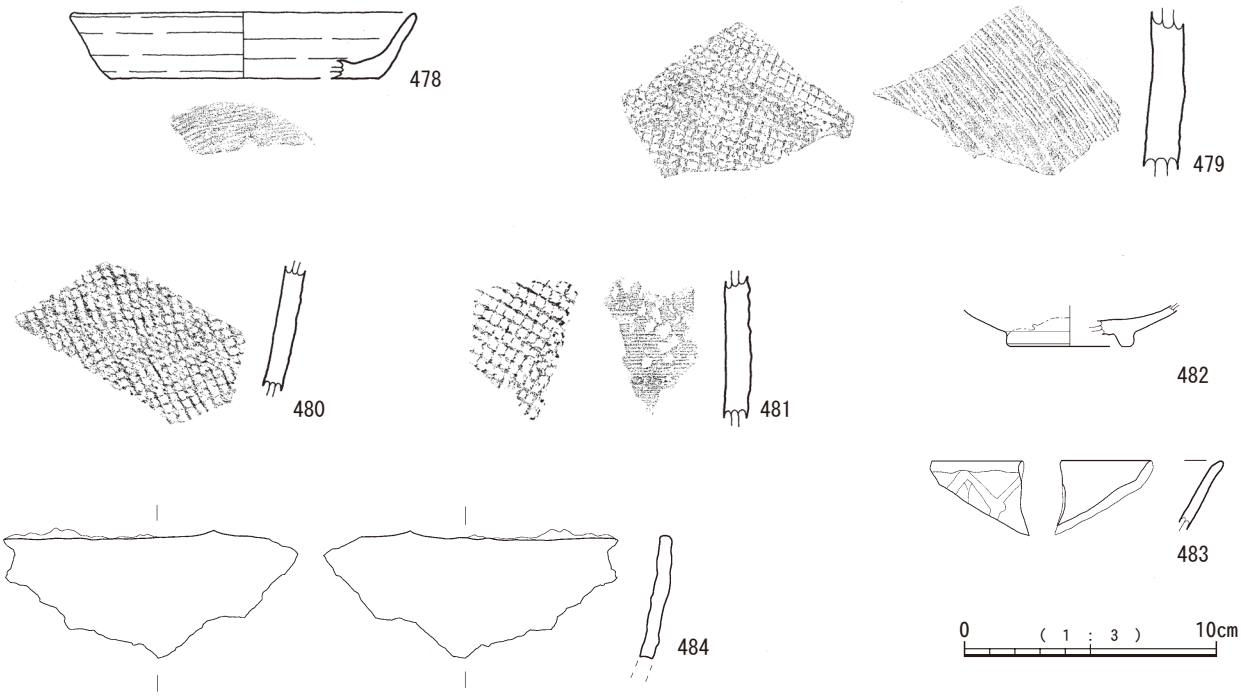
出土遺物（第84図　478～484）

遺物は，土師器３点，須恵器３点，白磁１点，青磁１点，鉄器１点，土器片11点が出土した。そのうち，土師

竪穴建物跡１号

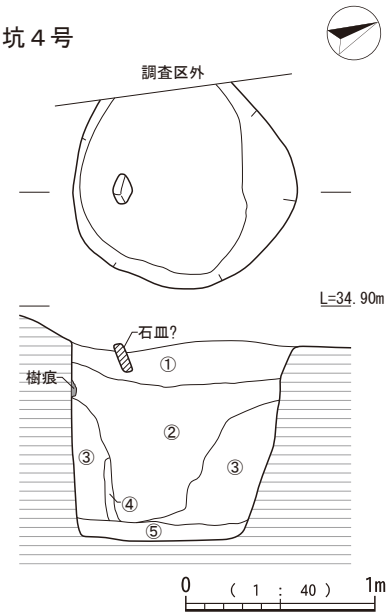


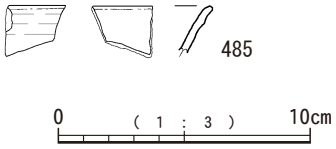
竪穴建物跡１号埋土注記
① 灰黄褐色砂質土(10YR４/２) Ⅱｂ層由来の土 硬くしまっており礫片を含む
② 灰黄褐色砂質土(10YR４/２) しまり弱い Ⅳ層ブロック土が入る 炭化物，焼土を含む
③ にぶい黄褐色砂質土(10YR６/４) Ⅳ層由来の土 東側に堆積している
④ 灰黄褐色砂質土(10YR４/２) 焼土の塊を多く含む
⑤ 黒褐色砂質土(10YR３/１) 柱穴はこの上面から掘られている はり床と考えられるがしまり弱い 炭化物を多く含む



第84図 竪穴建物跡１号・中世遺構内の遺物⑥

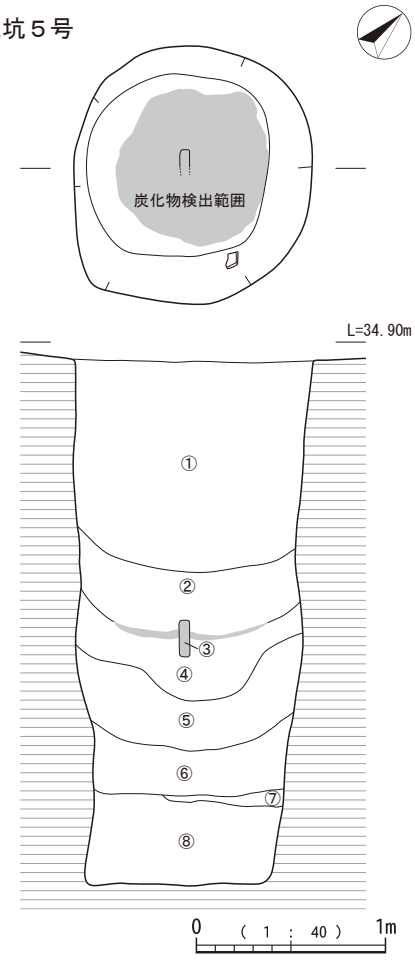
土坑４号

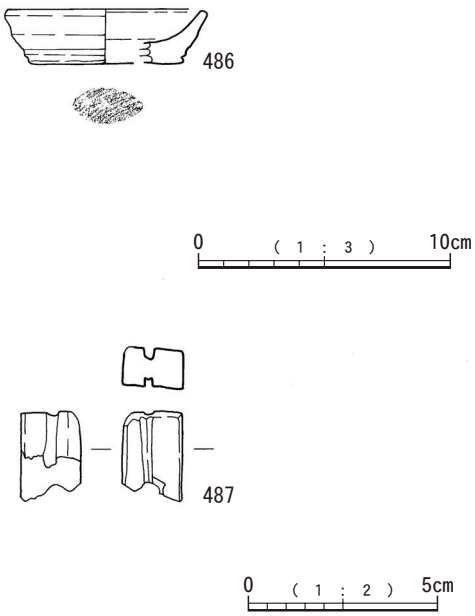




土坑４号埋土注記
① 茶褐色土(10YR４/２) 小粒の炭化物を含む
② 茶褐色土(10YR４/２) ５㎜～２㎝のシラスブロックを含む
③ 茶褐色土(10YR４/３) ５㎝程度のシラスブロックを含む ②よりやわらかい
④ 灰黄褐色土 シラスブロックを含む
⑤ 黄灰褐色土(2.5YR４/１) わずかに粘質 ④より粘性がある

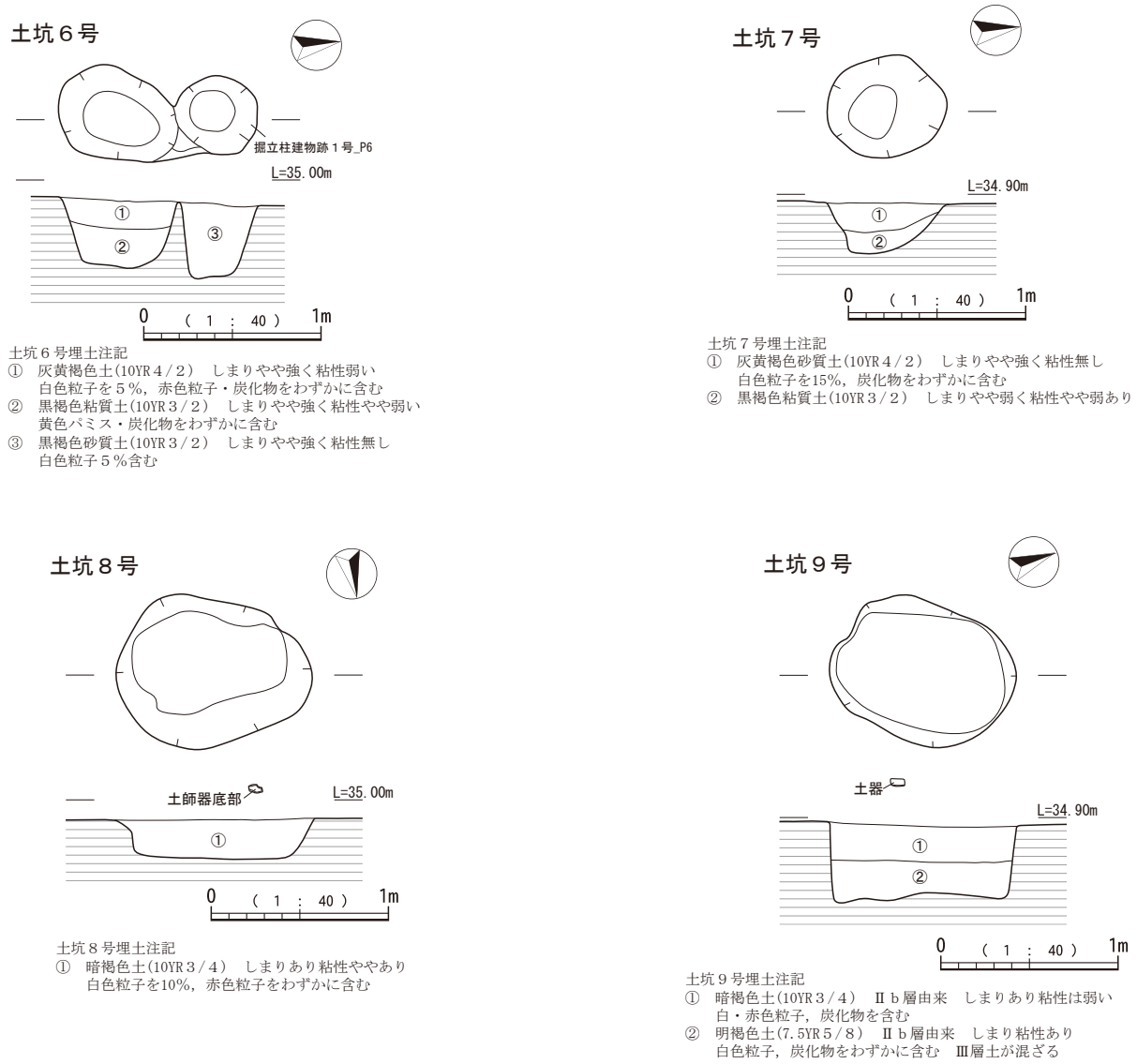
土坑５号





土坑５号埋土注記
① 黒褐色土
② 黒褐色(10YR３/２) しまりやや弱い粘性あり
③ 黒色土 円形状に炭が残る
④ ②にシラスのブロックが入る
⑤ 灰黄褐色土 しまりが非常に弱い
⑥ 灰色土 粘性あり グライ化している
⑦ 黄色土 シラスが帯状に入る
⑧ ①・④・⑤・⑥が交互に水平堆積している

第85図 土坑４・５号・中世遺構内の遺物⑦



第86図　土坑６～９号

器１点，須恵器３点，白磁１点，青磁１点，金属製品１点を図化した。

478は土師器の坏である。底部から直行しながら開くものである。内外面は丁寧なナデ調整が施されている。底部と体部の境にはナデ調整が施される。底部には糸切り痕が残る。13世紀代のものと考えられる。

479～481は中世須恵器の甕である。内面は斜位のハケ目を施す。外面は格子目タタキが施される。胎土は白色土と灰色土のマーブル状となっており，小石なども含まれる。480は外面が黒色化し，胎土は灰色である。481は焼成が悪く、赤身を帯びる。

482は白磁碗の底部である。見込みには圏線が巡る。高台は比較的低く，断面方形となる。底部付近は無釉である。歴博分類白磁碗Ⅸ類，大宰府分類白磁椀Ⅸ類に該当する。13世紀中頃～14世紀初頭である。

483は青磁碗の口縁部である。外面には鎬蓮弁文が施される。歴博分類の龍泉窯青磁碗Ｂ１類，大宰府分類龍泉窯系椀Ⅱ類（Ｄ期）に該当する。13世紀中葉～14世紀前半である。

484は鉄鍋の口縁部と考えられる。

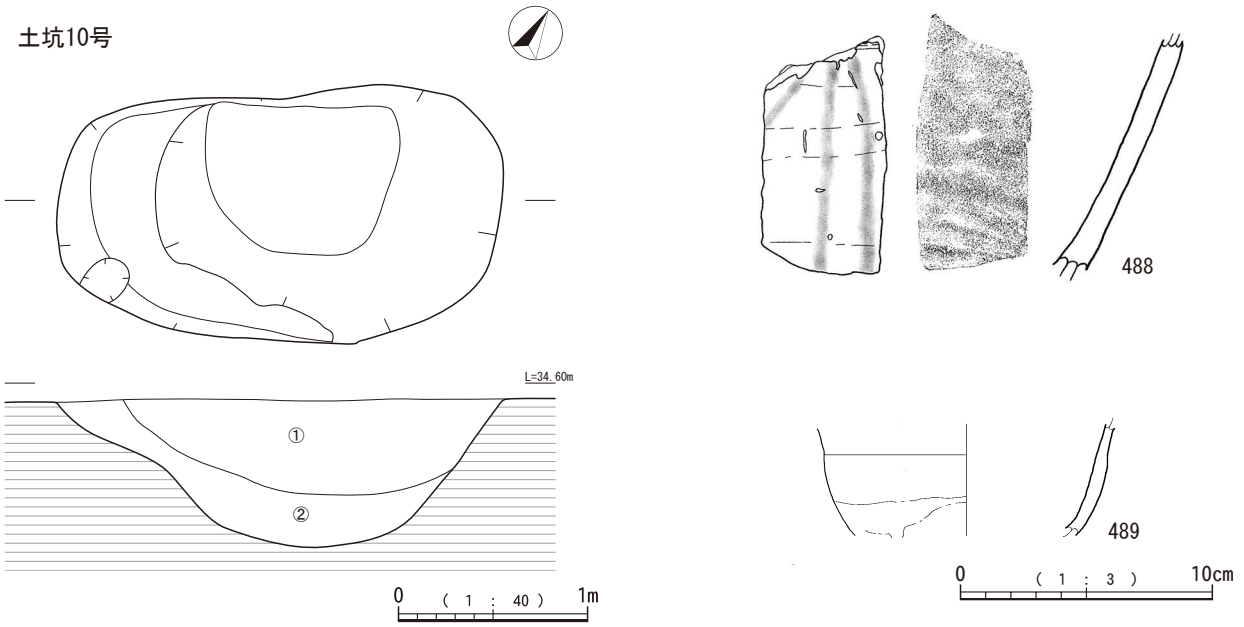
（３）土坑

中世に該当する土坑は，総数35基で，特に44～48区および69～73区で多く検出した。なかでも大型の土坑は44～48区に集中している。

なお，土坑２号・３号については，掘立柱建物跡で報告している。

ア　土坑４号（第85図）

Ｅ・Ｆ－44区のⅢ層で検出した円形と考えられる土坑



土坑10号埋土注記
① 黒褐色砂質土 しまり強く粘性無し Ⅱb層由来の土
② 黒色粘砂質土(10YR２/１) しまりやや強く粘性あり シラスブロックを10%，白・赤色粒子をわずかに含む

第87図 土坑10号・中世遺構内の遺物⑧

である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。短軸は調査区外で切られているが規模は1.2m×1.05mで，検出面からの深さは1.04mである。埋土の状況から徐々に埋まっていったと考えられる。

出土遺物（第85図 485）

遺物は，土師器59点，須恵器２点，白磁１点，常滑１点が出土している。そのうち，白磁１点を図化した。

485は白磁の口禿碗と考えられる。口縁部がわずかに外反し、内面の釉薬は掻き取られている。歴博分類白磁碗Ⅸ類，大宰府分類の白磁椀Ⅸ類に該当する。13世紀中頃～14世紀初頭である。

イ 土坑５号（第85図）

Ｆ－44区のⅢ層上面で検出した。円形の大型土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.36m×1.26mで，検出面からの深さは2.76mの深い土坑である。埋土の状況は下層は，水平堆積を呈しており，徐々に埋まっていった状況であった。形状や規模は，掘立柱建物跡１号内の土坑１号に類似する。

出土遺物（第85図 486・487）

遺物は，土師器71点，須恵器３点，瓦質土器２点，青磁１点，滑石製品１点，土器片14点が出土している。そのうち，土師器１点，滑石製品１点を図化した。

486は土師器の小皿である。底部は厚く、底に糸切り痕を残す。487は滑石製品で長軸に太めの切り目をもつ有溝石錘（沈子）と考えられる。

ウ 土坑６号（第86図）

Ｇ－44区のⅢ層上面で検出した楕円形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，0.71m×0.48mで，検出面からの深さは0.45mである。掘立柱建物跡１号を構成する柱穴に隣接しており，建て替えや補強用に使用された土坑の可能性もある。

遺物は，土師器１点が出土したが，図化には至らなかった。

エ 土坑７号（第86図）

Ｇ－44区のⅢ層上面で検出した。円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，0.67m×0.58mで，検出面からの深さは0.29mである。用途は不明であるが，掘立柱建物跡１号に近いところで検出していることから関連する可能性がある。

遺物は，土師器２点，土器１点が出土したが，図化には至らなかった。

オ 土坑８号（第86図）

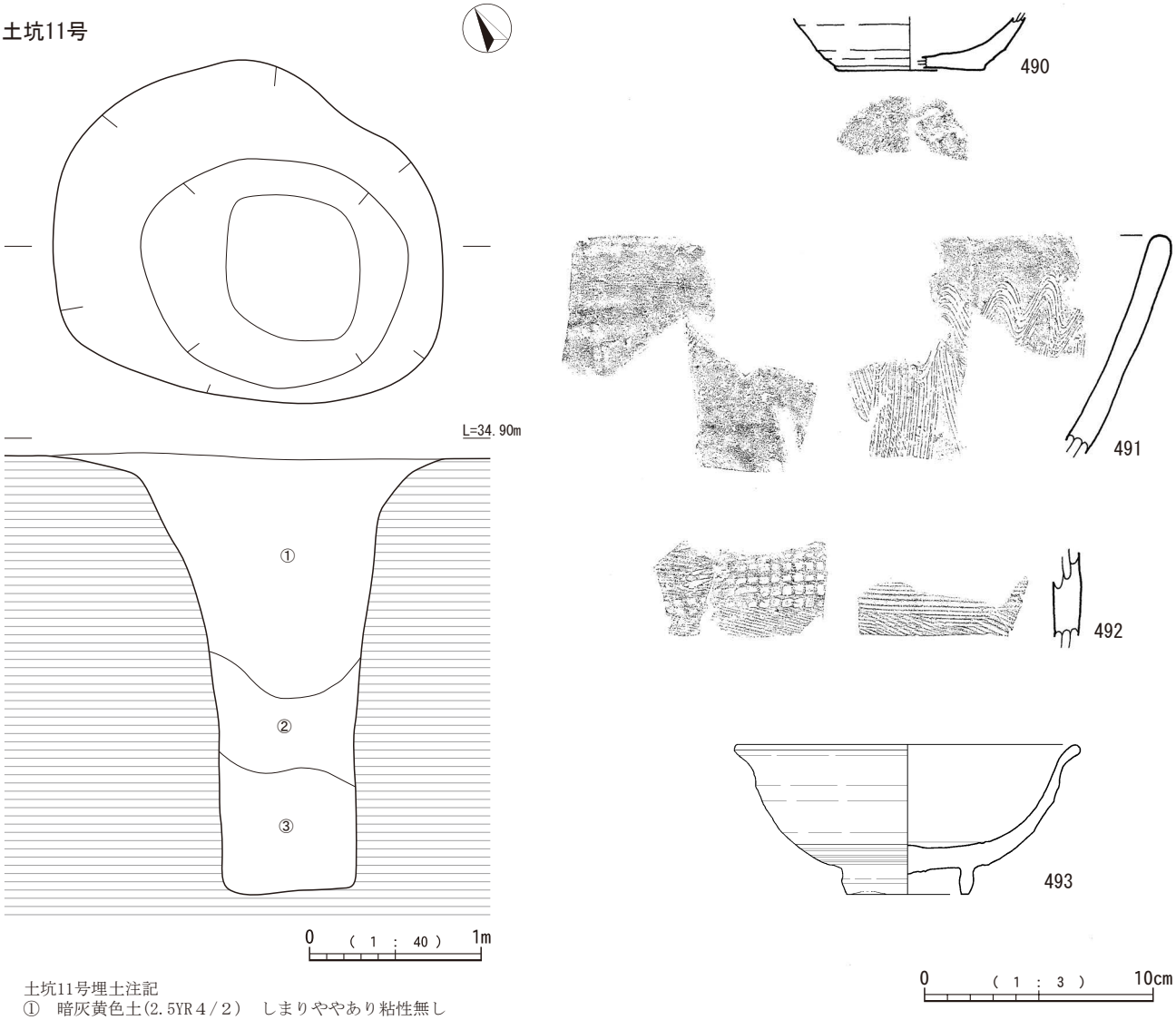
Ｈ－44区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.11m×0.83mで，検出面からの深さは，0.21mである。

遺物は，出土しなかった。

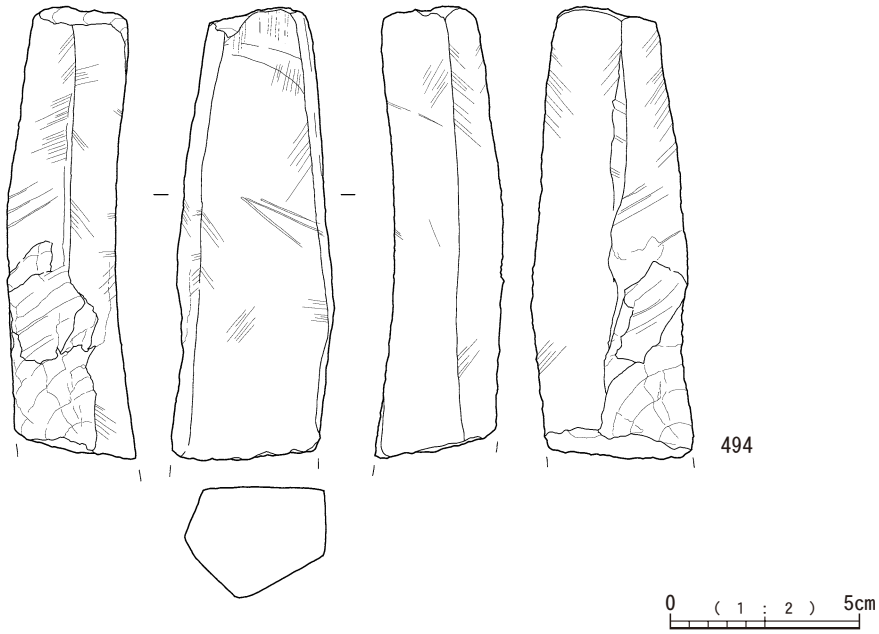
カ 土坑９号（第86図）

Ｈ－44・45区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土している遺物および埋土，周辺の状況から中

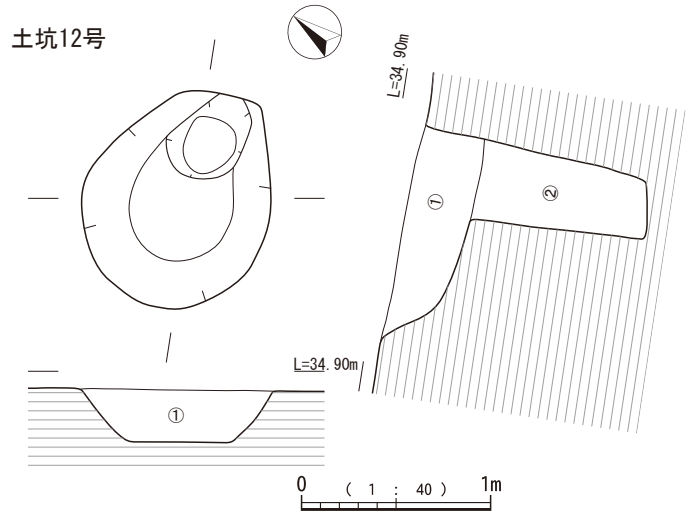
土坑11号



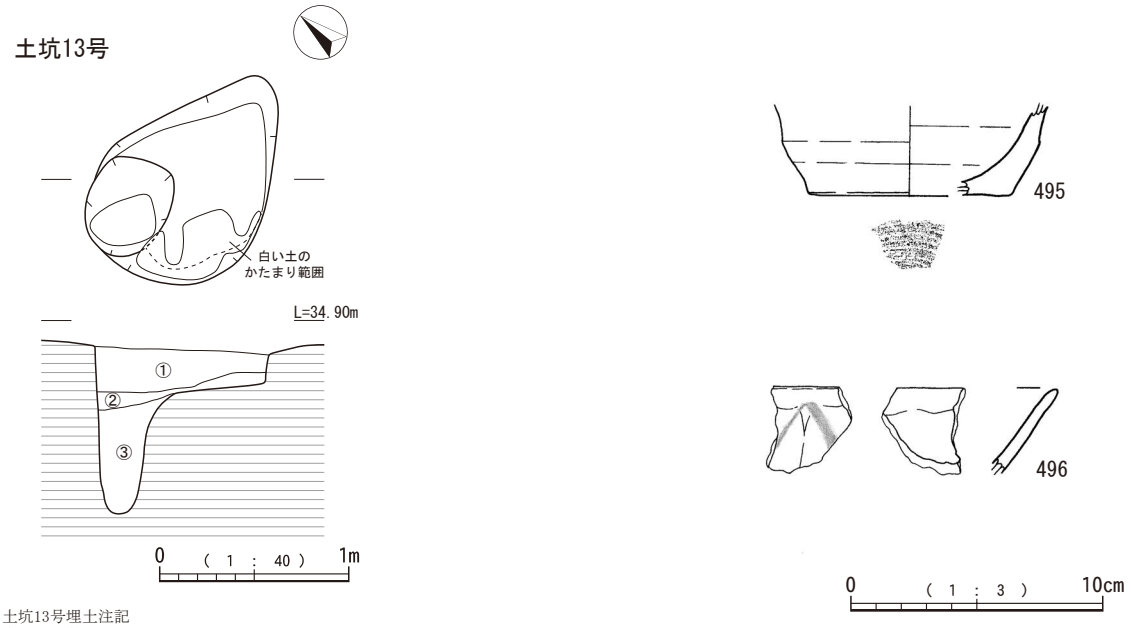
土坑11号埋土注記
① 暗灰黄色土(2.5YR４／２) しまりややあり粘性無し
② オリーブ褐色土(2.5YR４／４) しまり粘性ややあり Ⅲ層ブロック土をまばらに含む
③ 灰白土(2.5YR７／１) しまり粘性なし



第88図 土坑11号・中世遺構内の遺物⑨



土坑12号埋土注記
① 褐色土(7.5YR４/４) しまりあり粘性弱い Ⅱｂ層由来の土 白色粒子，炭化物をわずかに含む
② にぶい黄褐色土(10YR４/３) しまり粘性あり Ⅲ層ブロック土混じる 白・赤色粒子をわずかに含む



土坑13号埋土注記
① 暗褐色土 Ⅱｂ層由来の土
② ①に灰のようなものがブロックで混じる
③ 褐色土(7.5YR４/６) しまり弱い粘性ややあり Ⅱｂ層由来の土にⅢ層ブロック30%を含む

第89図 土坑12・13号・中世遺構内の遺物⑩

世の土坑とした。規模は，1.06m×0.83mで，検出面からの深さは0.45mである。

遺物は，土師器14点，青花１点が出土しているが，図化には至らなかった。

キ 土坑10号（第87図）

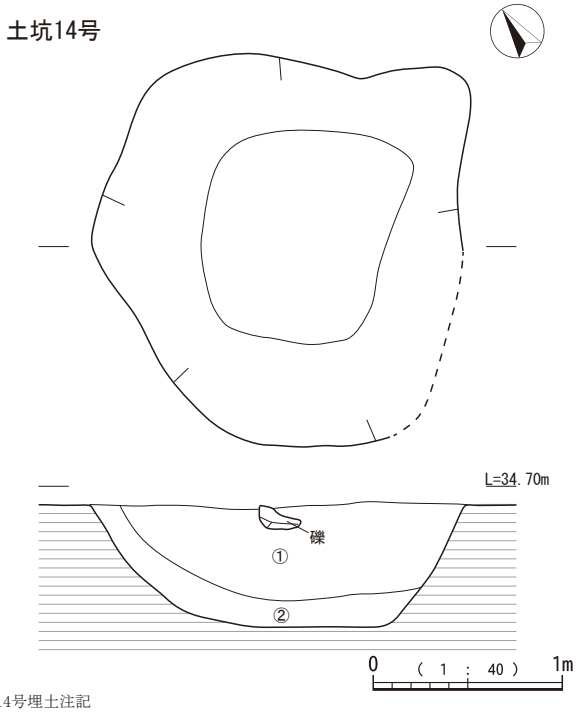
Ｆ－45区のⅢ層正面で検出した。楕円形の土坑である。出土している遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，2.35m×1.26mで，検出面からの深さは0.77mである。①掘立柱建物跡１号に隣接する②比較的規模が大きい③出土遺物も多いことから，掘立柱建物跡１号に関連する遺構の可能性がある。

出土遺物（第87図 488・489）

遺物は，土師器15点，須恵器３点，陶器１点，土器３点が出土している。そのうち，須恵器１点，国産陶器１点を図化した。

488は中世須恵器で、東播系の片口鉢と考えられる。外面上端には１条の横沈線が確認でき、その下位には３条の火襷が縦方向に入っている。

489は天目碗である。胴部は一旦すぼまり，そこから外反する口縁（鼈口）となる。内面には，全面的に釉が



土坑14号埋土注記
① 灰黄褐色砂質土(10YR４/２) しまり強く粘性無し 白・赤色粒子，炭化物をわずかに含む
② 黒褐色砂質土(10YR４/２) しまりやや強く粘性弱い 赤色粒子が多く白色粒子，炭化物をわずかに含む

第90図 土坑14号

かかるが，外面は胴部下半が無釉である。胎土と形態から，瀬戸・美濃産の天目であると考えられる。

ク 土坑11号（第88図）

Ｈ－45区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土している遺物および埋土，周辺状況から中世の土坑とした。規模は，2.26m×1.96mで，検出面からの深さは2.56mの深い土坑である。遺構の形状および埋土の堆積状況が，土坑２号・５号と類似しており同じような用途で使われたと考えられる。

出土遺物（第88図 490～494）

遺物は，土師器32点，須恵器２点，瓦質土器２点，青磁２点，石器１点が出土した。そのうち，土師器１点，瓦質土器１点，中世須恵器１点，青磁１点，石器１点を図化した。

490は土師器の坏である。体部は丸みを帯びる。風化しているが，底部にはわずかに糸切り痕が確認される。491は瓦質土器の擂鉢である。口縁部の内面近くには、６条一単位の波状の擂目を施し、さらにその下に11条一単位の擂目を施す。外面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。

492は中世須恵器の甕の胴部片である。内面にはハケ目，外面には格子目タタキが施される。493は龍泉窯系の端反青磁碗である。口縁部が比較的シャープなつくりで釉が薄く透明感がある。外面にはロクロ痕が明瞭に残る。また，高台の内外面は無釉である。歴博分類の龍泉窯青磁碗Ｄ１類，上田分類Ｄ－１類に該当する。14世紀後半～15世紀前半である。

494は流紋岩製の砥石（天草砥石）である。側面は全て砥面に利用されている。

ケ 土坑12号（第89図）

Ｈ－45区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.13m×１mで，検出面からの深さは0.3m～1.3mになる。土坑東側の0.5m×0.3mが，１mほど下がる。埋土で柱痕を確認することができなかった。

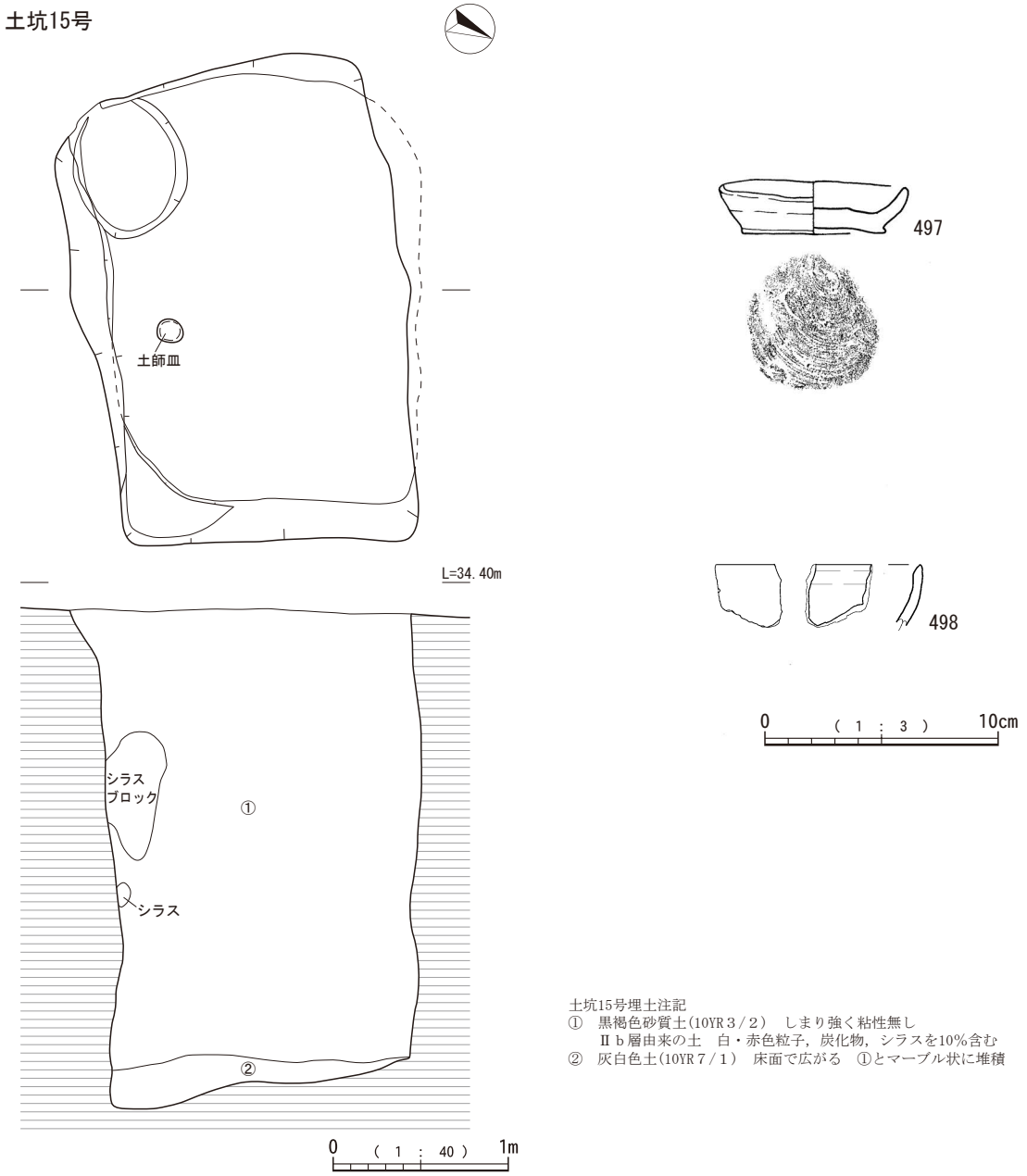
遺物は，須恵器１点，土器１点が出土したが図化には至らなかった。

コ 土坑13号（第89図）

Ｈ－45区のⅢ層上面で検出した。楕円形に近い土坑である。出土している遺物および埋土，周辺状況から中世の土坑とした。規模は，1.25m×0.84mで検出面からの深さは0.28m～1.56mになる。土坑西側の0.5m×0.4mが，1.3mほど下がる。似たような形状をしている土坑12号に隣接しており，深くなる部分が向かい合っている状態なので，関連する可能性があるが，用途は不明である。土坑12号同様，柱痕は確認することができなかった。

出土遺物（第89図 495・496）

遺物は，土師器13点，青磁１点，陶器１点が出土した。そのうち，土師器１点，青磁１点を図化した。



第91図　土坑15号・中世遺構内の遺物⑪

495は土師器の坏である。底部には糸切り痕が残る。箱形の器形で，比較的器高が高い。中世後半期のものと考えられ，14世紀後半～15世紀半頃に類例がある。

496は龍泉窯系青磁碗の口縁部で，外面に鎬連弁文が施される。歴博分類の龍泉窯系青磁碗Ｂ１類，大宰府分類龍泉窯系青磁椀Ⅱ類に該当する。13世紀中葉～14世紀前半である。

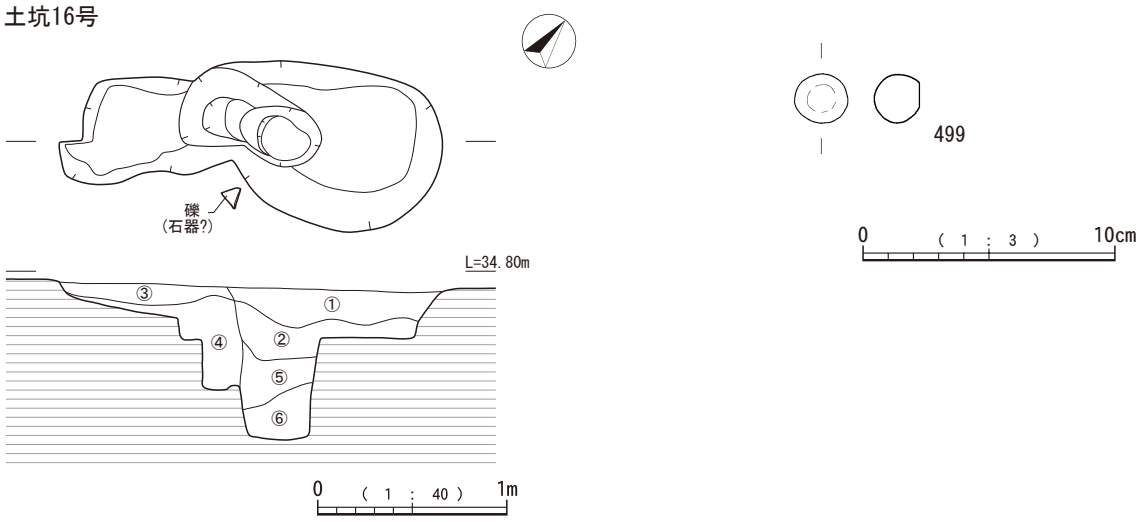
サ　土坑14号（第90図）

Ｈ－45区のⅢ層上面で検出した。円形に近い土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑と判断した。規模は，2.05m×1.96mで，検出面からの深さは0.64mである。土坑13・14号に隣接する状態で検出しているが，形状は異なる。

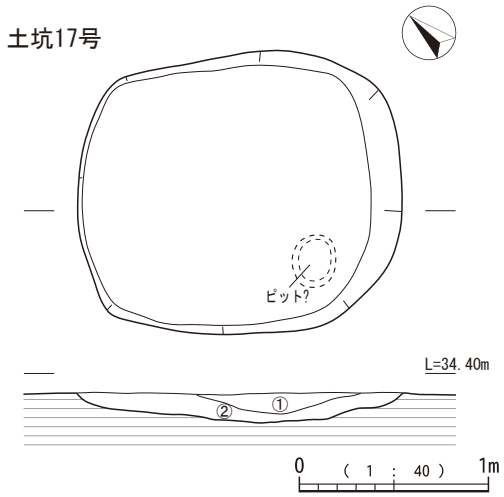
遺物は，土師器10点が出土しているが，図化には至らなかった。

シ　土坑15号（第91図）

Ｆ－46区のⅢ層上面で検出した。方形の土坑である。出土している遺物および埋土，周辺状況から中世の土坑とした。規模は，1.37m×0.97mで，検出面からの深さは1.36mでやや深い土坑である。形状および埋土の堆積状況が，土坑２・５・11号と類似しており同じような用途で使われたと考えられる。また，床上20cmで完形の土



土坑16号埋土注記
① 暗褐色土(7.5YR３／４) しまりあり粘性弱い Ⅱｂ層由来 白色粒子を10%，赤色粒子をわずかに含む
② 褐色土(7.5YR４／６) しまりあり粘性ややあり ブロック状にⅢ層由来黄色土が入る 白・赤色粒子をわずかに含む
③ 褐色土(7.5YR４／４) しまりあり粘性弱い Ⅲ層由来の黄色土が混じる 白色粒子10%，赤色粒子わずかに含む
④ Ⅱｂ層由来の土に茶褐色の粘土質の土が混じる しまりあり粘性ややあり
⑤ Ⅱｂ層由来の土に，茶褐色粘土・黄色土が混じる しまりあり粘性弱い
⑥ 黄色土と黒色土との混ざり しまり弱く粘性も弱い



土坑17号埋土注記
① 黒色砂質土(10YR２／１) しまり強く粘性弱い Ⅱｂ層由来の土
わずかな白色粒子，赤色粒子と炭化物を微量含む
② 灰黄褐色砂質土(10YR５／２) しまり強く粘性弱い ①とシラスがマーブル状に堆積

第92図 土坑16・17号・中世遺構内の遺物⑫

師器の皿が出土している。

出土遺物（第91図 497・498）

遺物は，土師器36点，須恵器６点，青磁１点，陶器３点，土器９点が出土した。そのうち，土師器１点，国産陶器１点を図化した。

497は完形の土師器小皿である。口縁部が歪み粗雑なつくりである。見込みが盛り上がり、糸切り痕が底部に残る。

498は口縁が内湾する丸碗である。胎土と形態から，瀬戸・美濃産と考えられる。

ス 土坑16号（第92図）

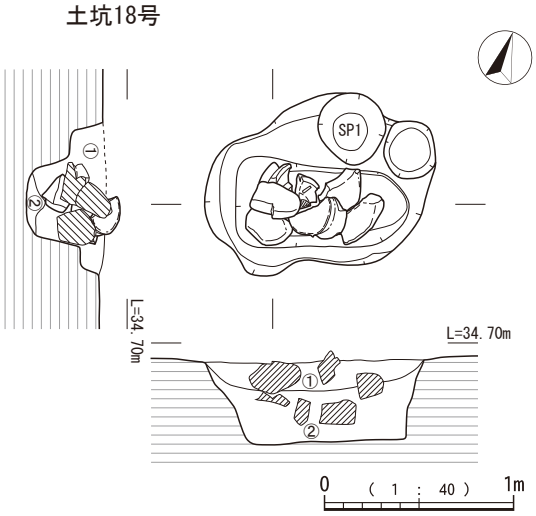
Ｈ－45・46区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.91m×0.55～0.86mで，検出面からの深さは0.17～0.8mである。断面および埋土の状況から，最初にあった土坑を北東側の土坑が切っている。形状から柱の建て替えなどを行っている可能性がある。遺物も多く出土しており，出土炭化物からは，14世紀末～15世紀初頭の年代が結果が出ている。（第Ⅴ章参照）

出土遺物（第92図 499）

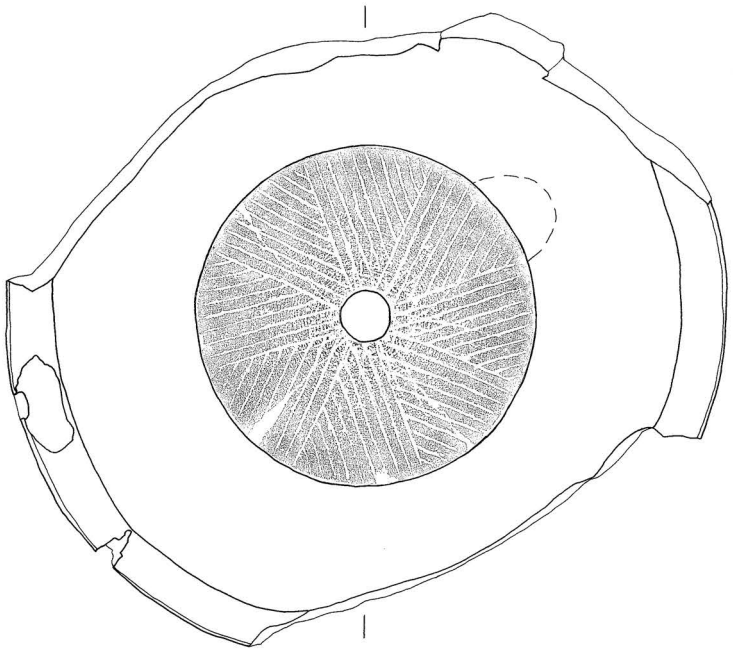
遺物は，土師器30点，須恵器３点，青磁１点，青花１点，金属製品１点が出土している。そのうち，金属製品１点を図化した。

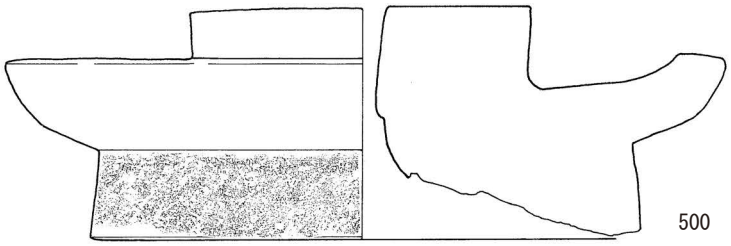
499は直径1.3cmの球形の金属である。理化学分析の結果，鉛の成分が主であったため，鉄砲玉と考えられる。

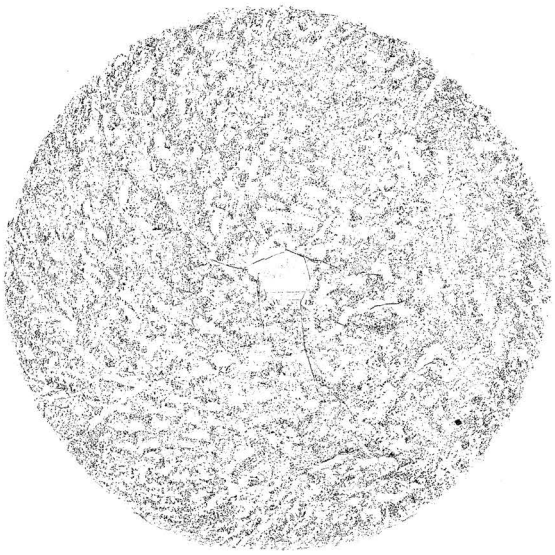
土坑18号

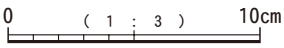


土坑18号埋土注記
① 灰黄褐色土(10YR４/２) しまりやや弱く粘性あり 白色粒子を５%,
ブロック状の黄色パミスを10%含む
② 黒褐色粘質土(10YR３/２) しまりやや弱く粘性あり
ブロック状の黄色パミスを５%含む

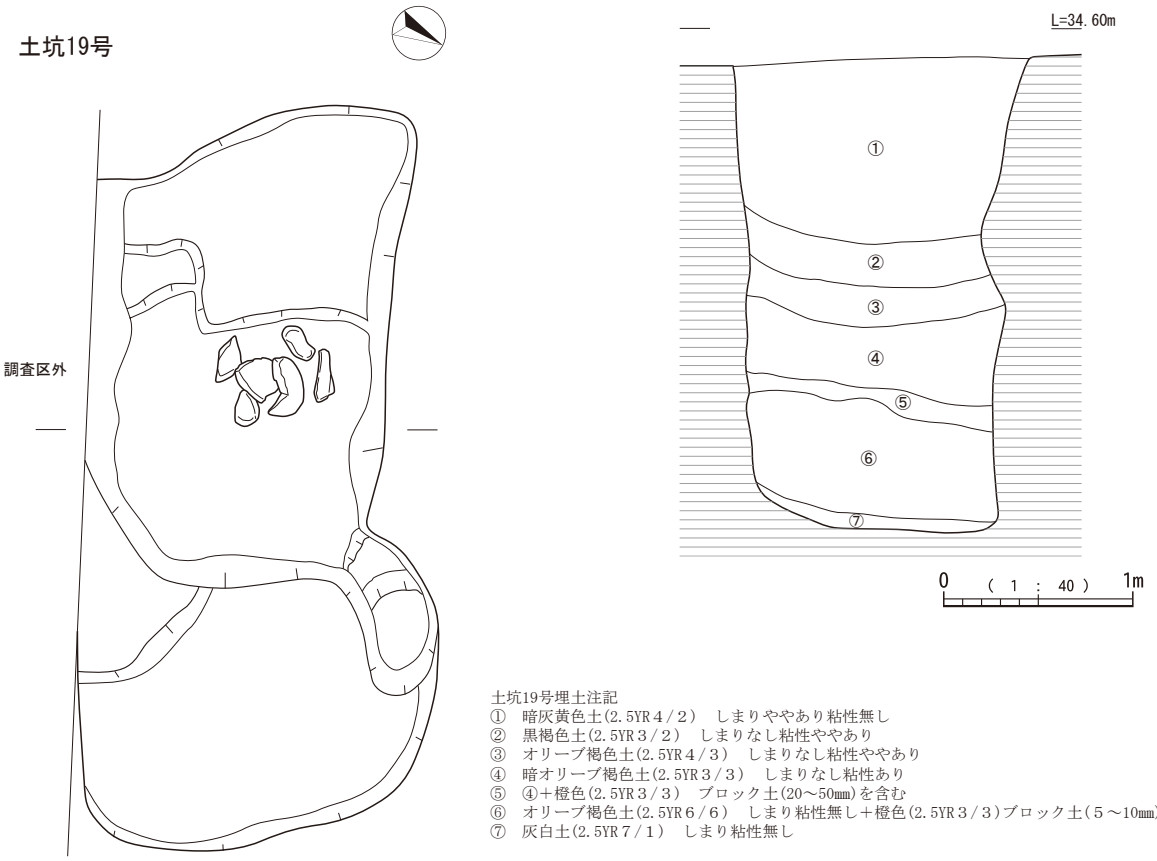








第93図 土坑18号・中世遺構内の遺物⑬



土坑19号埋土注記
① 暗灰黄色土(2.5YR４/２) しまりややあり粘性無し
② 黒褐色土(2.5YR３/２) しまりなし粘性ややあり
③ オリーブ褐色土(2.5YR４/３) しまりなし粘性ややあり
④ 暗オリーブ褐色土(2.5YR３/３) しまりなし粘性あり
⑤ ④＋橙色(2.5YR３/３) ブロック土(20～50㎜)を含む
⑥ オリーブ褐色土(2.5YR６/６) しまり粘性無し＋橙色(2.5YR３/３)ブロック土(５～10㎜)を含む
⑦ 灰白土(2.5YR７/１) しまり粘性無し

第94図　土坑19号

（第Ⅴ章参照）

セ　土坑17号（第92図）

Ｈ－46区のⅢ層上面で検出した。隅丸方形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.72m×1.49mで，検出面からの深さは0.15mである。周辺の土坑と比べて，検出面からの深さが浅く断面は皿状となる土坑である。

遺物は，土師器８点，土器１点が出土したが，図化には至らなかった。

ソ　土坑18号（第93図）

Ｈ－46区のⅢ層上面で検出した。北側に２基のピットをもつ楕円形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.16m×0.85mで，深さは0.43mである。被熱をうけ，打ち欠きにより３つに割れた茶臼が，人頭大の礫と重なるように廃棄された状況であった。埋土中から牛と考えられる骨片も出土している。また，出土した炭化物を科学分析にかけ，14世紀との結果を得た。（第Ⅴ章参照）

出土遺物（第93図　500）

石臼１点を図化した。500は直径38.2㎝、高さ12.3㎝の茶臼である。受け皿部分の付いた下臼で，底面は凹んでおり，ノミ痕の可能性のある痕跡がみられる。目立てが完全に残っており，八分画となっている。目立ては10条が一単位となる。焼けており，石材は緻密な凝灰岩と推測される。県外産石材の可能性がある。

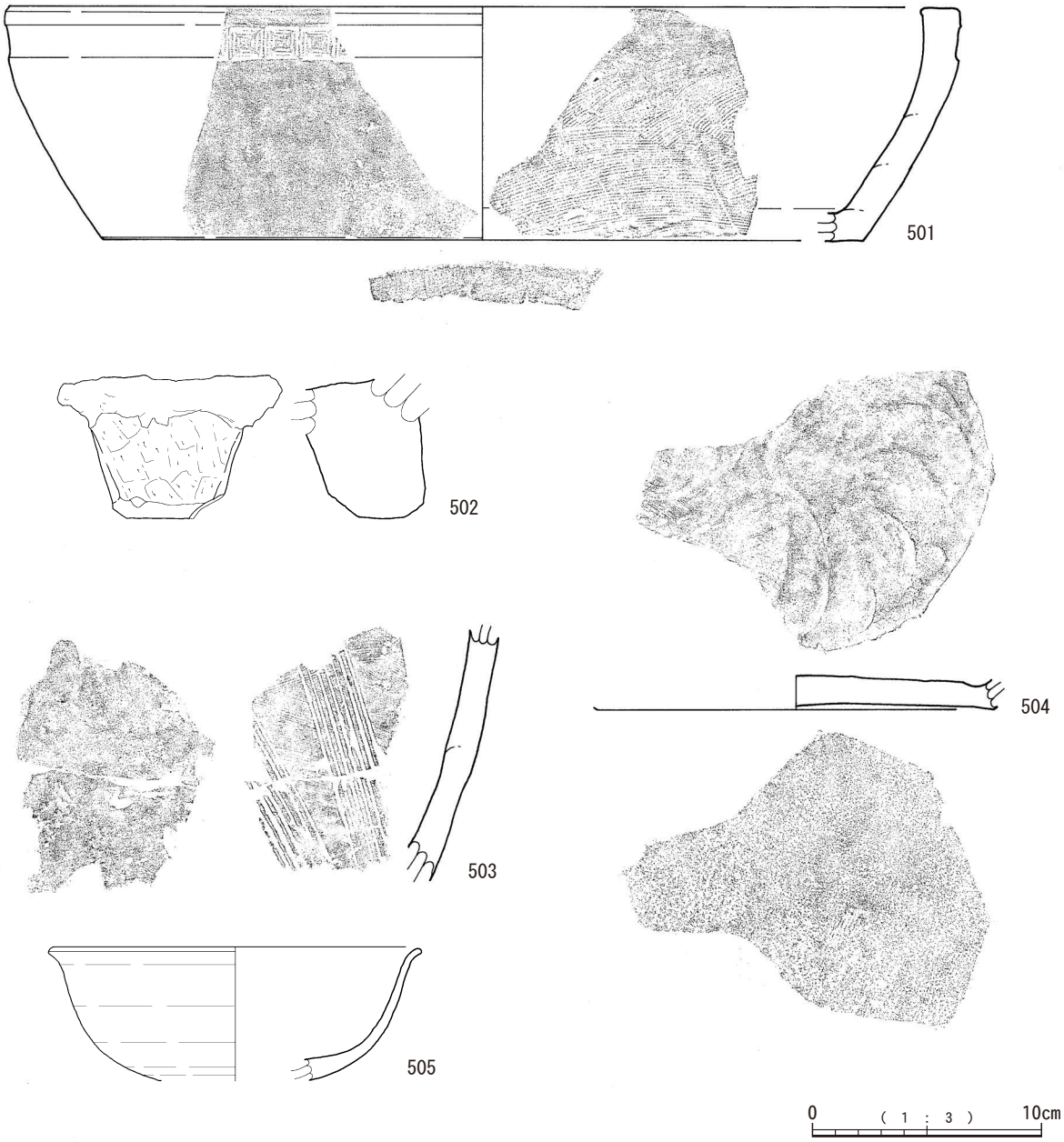
タ　土坑19号（第94図）

Ｉ－45・46区のⅢ層上面で検出した。調査区外に遺構が延びることから，正確な形状は不明である。出土している遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。検出できている規模は，1.91m×0.79mで，遺構中心の深さは1.25mある。底面の中心部に1.5m×1.5m，深さ1.25mの土坑をもつ。北側と南側に降りることができるような階段状の段差がある。本遺跡では階段状の段差を伴う遺構は，溝状遺構１号で１基，製鉄関連遺構で１基の合計３基が確認されている。

出土遺物（第95図　501 ～ 505）

遺物は，土師器32点，須恵器２点，瓦質土器10点（風炉・火鉢含む），土器８点，青磁４点，国産陶器２点が出土している。そのうち，瓦質土器３点，国産陶器１点，青磁１点を図化した。

501は瓦質土器の火鉢である。内面にはハケ目が施される。口縁部外面には，重画文のスタンプが横方向に連



第95図　中世遺構内の遺物⑭

続して押捺される。外面は黒色化している。502は瓦質土器の風炉の脚である。重厚なつくりのもので，安定感がある。全面にヘラケズリによる調整が施される。503は瓦質土器の擂鉢である。内面には，７条一単位の擂目が施される。外面にはハケ目と指頭圧痕が残る。504は国産陶器とみられる甕の底部である。内面は円形の当て具を反時計回りに当てて、成形している。胎土に砂粒を多く含む。505は無文の青磁端反碗である。体部外面にはケズリの痕跡が顕著に残り、見込みに圏線を施す。歴博分類の龍泉窯青磁碗Ｄ１類，上田分類Ｄ－Ⅰ類に該当する。14世紀後半～15世紀前半である。

チ　土坑20号（第96図）

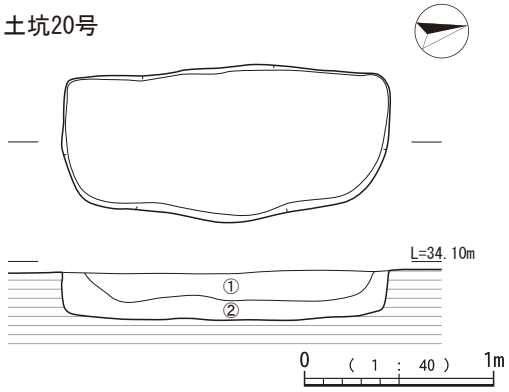
Ｈ－45・46区のⅢ層上面で検出した。隅丸長方形の土坑である。埋土および周辺の状況から，中世の土坑と判断した。規模は，1.73m×0.85mで，深さは0.25mである。底面も検出面の形状とほぼ同じであり，垂直に近い角度で掘られている。

遺物は，出土しなかった。

ツ　土坑21号（第96図）

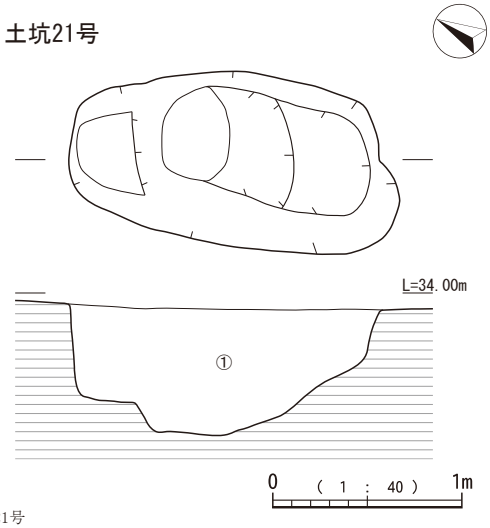
Ｆ－47区のⅥ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。

土坑20号



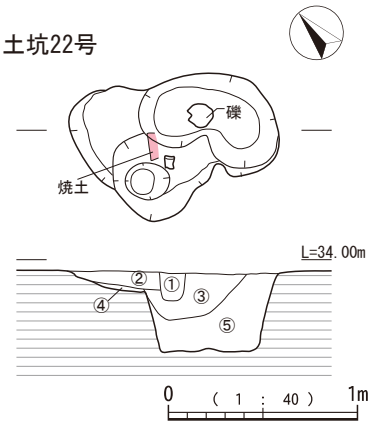
土坑20号埋土注記
① 黒褐色土(10YR２/２) しまり強く粘性あり 軽石を含む
② 灰黄褐色土(10YR５/２) しまり強く粘性あり 軽石を含む
わずかにシラスブロックが混じる

土坑21号



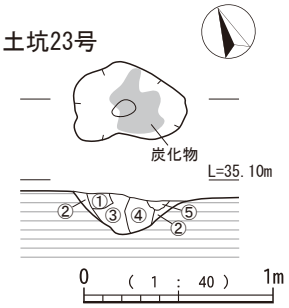
土坑21号
① 黒褐色砂質土(10YR３/１) しまり強く粘性弱無し
シラスの入り方が場所によって異なる

土坑22号



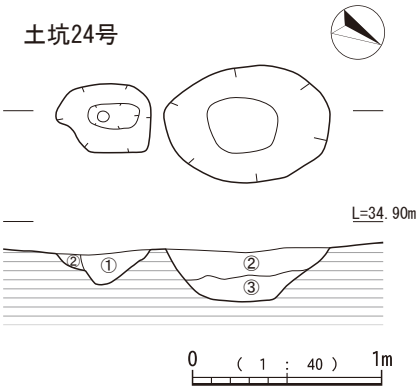
土坑22号埋土注記
① 撹乱土
② 灰黄褐色土 炭化物集中部 炭化物，焼土が混在する
③ 黒褐色砂質土(10YR３/２) しまり弱い粘性無し シラス20%を含む
④ 硬化面
⑤ 黒褐色砂質土(10YR３/１) しまり粘性ともに弱い

土坑23号



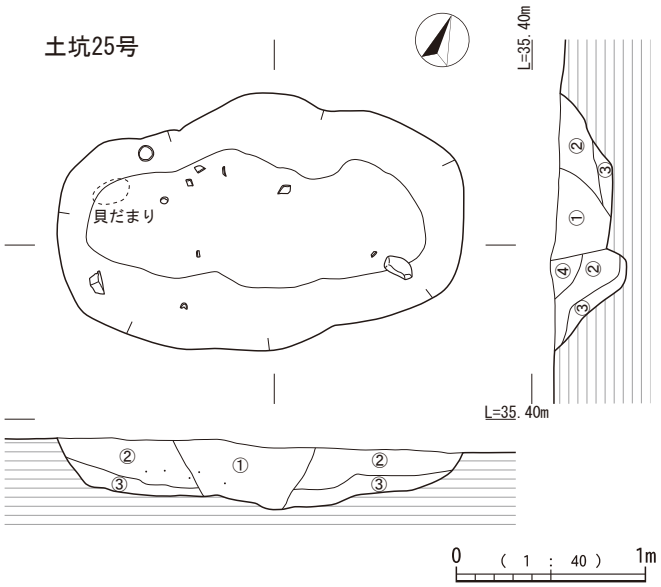
土坑23号埋土注記
① 暗褐色土(7.5YR３/４) 炭化物少量含む
② 暗褐色土(10YR３/４) 炭化物少量含む
③ 暗褐色土(7.5YR３/４) 炭化物多い
④ 暗褐色土(10YR３/３) 炭化物多い
⑤ 褐色土(7.5YR４/４)

土坑24号

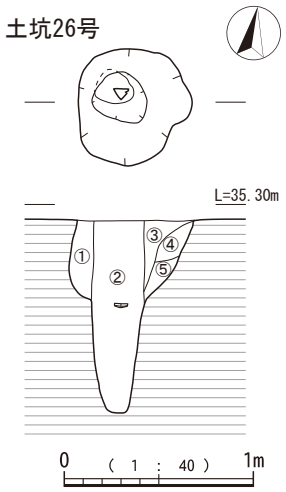


土坑24号埋土注記
① 暗褐色土(10YR３/４) しまりやや強く粘性やや弱い
② 暗褐色土(7.5YR３/４) しまり粘性やや弱い
③ 黒褐色土(10YR２/３) しまりやや強く粘性やや弱い

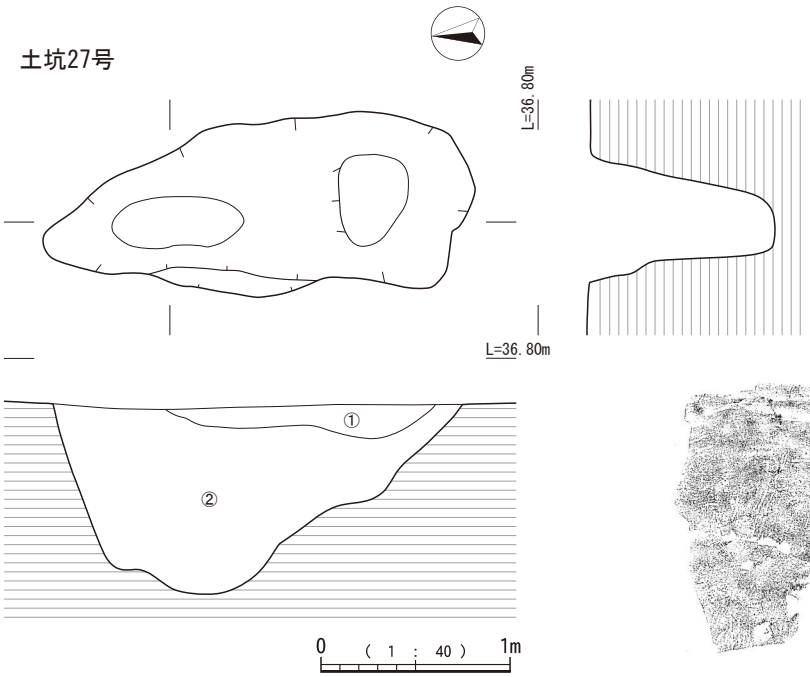
第96図 土坑20 ～ 24号



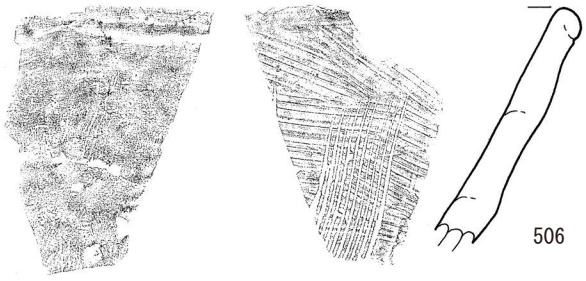
土坑25号埋土注記
① 黒褐色粘質土(7.5YR２／２) しまり粘性やや強い 炭化物を多く含む
② 極暗褐色粘質土(7.5YR２／３) しまり粘性やや強い 炭化物を含む
③ 褐色砂質土(7.5YR４／３) しまり粘性やや弱い Ⅱｂ層由来の土 赤色粒子を含む
④ 黒褐色粘質土(10YR２／３) しまり粘性やや強い 炭化物を含む

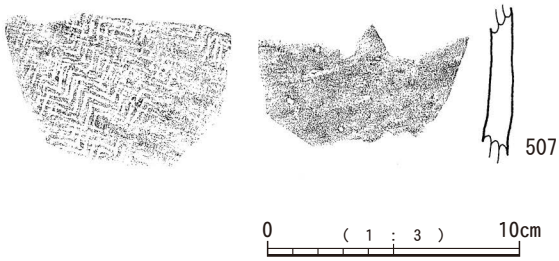


土坑26号埋土注記
① 褐色土(7.5YR４／３) しまりやや強く粘性弱い
② 黒褐色土(10YR２／３) しまり粘性弱い
５㎜～３㎝のⅢ層ブロック多く含む
③ 黒褐色土(10YR２／３) しまり粘性弱い
５㎜のⅢ層ブロック少量含む
④ 黒褐色土(7.5YR４／３) しまり粘性弱い
⑤ 極暗褐色土(7.5YR２／３) しまりややり粘性弱い
５㎜のⅢ層ブロック少量含む

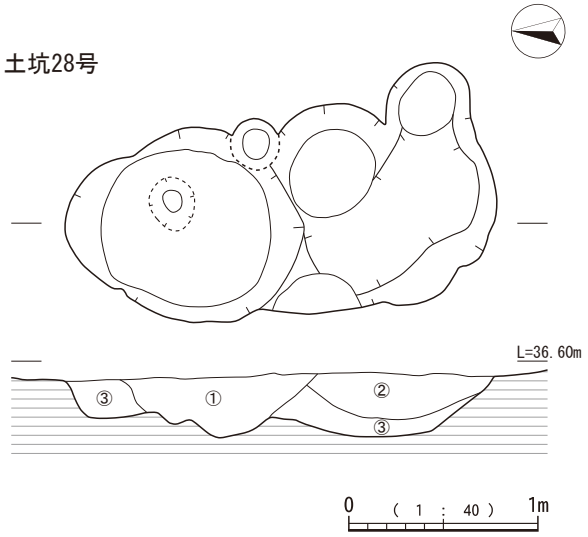


土坑27号埋土注記
① 黒褐色砂質土(10YR３／１) しまりあり
Ⅱｂ層由来の土
② Ⅱｂ層とⅥ層の混じり土 しまりなし

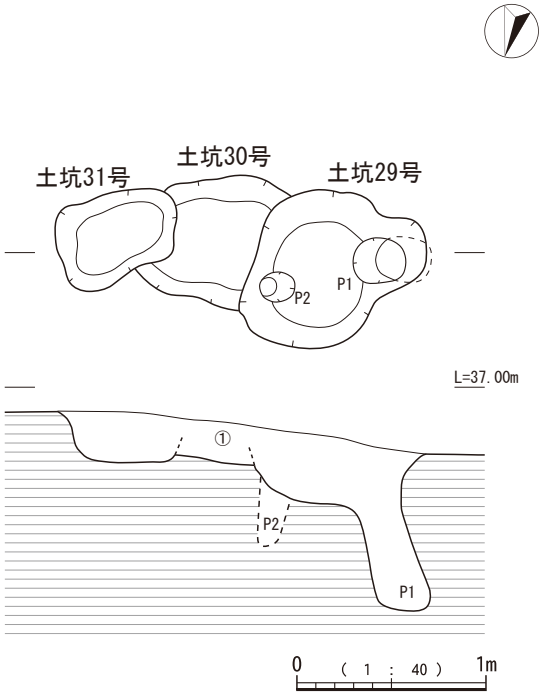




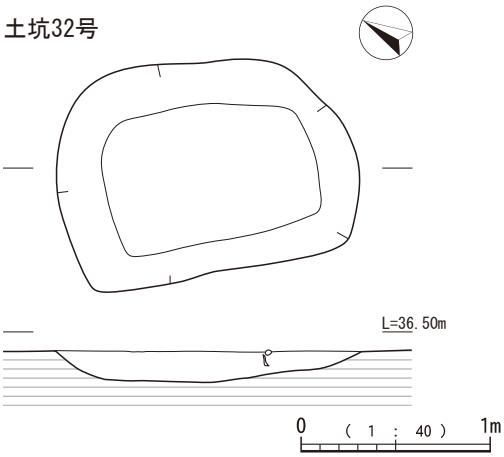
第97図 土坑25～27号・中世遺構内の遺物⑮



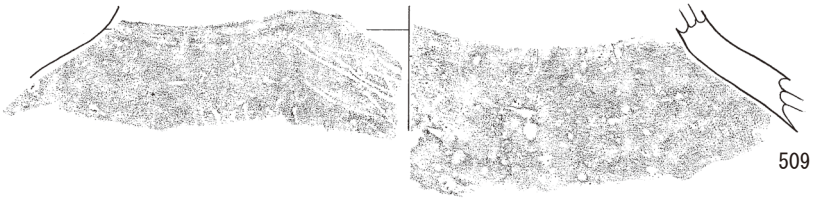
土坑28号埋土注記
① 黒褐色土(7.5YR３/２) Ⅱｂ層由来の土
② 暗褐色土(7.5YR３/３) 赤色粒子を含む
③ 暗褐色土(7.5YR３/３) Ⅲ層ブロック土を含む



土坑29・30・31号埋土注記
① 黒色粘質土(10YR２/１) しまりあり粘性あり
Ⅱｂ層由来の土

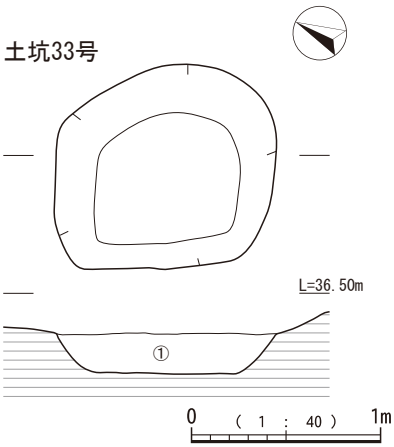


土坑32号埋土注記
① 暗褐色砂質土(7.5YR３/３) しまり強く粘性やや弱い
白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む

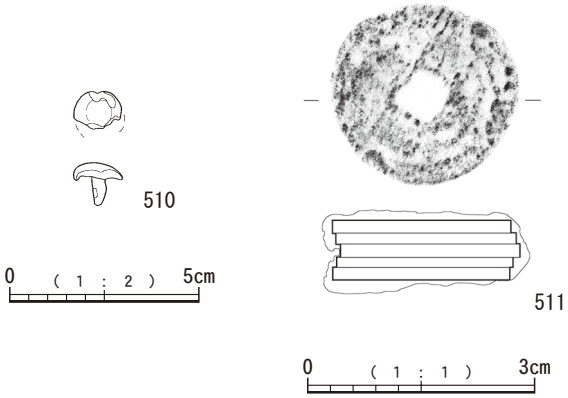


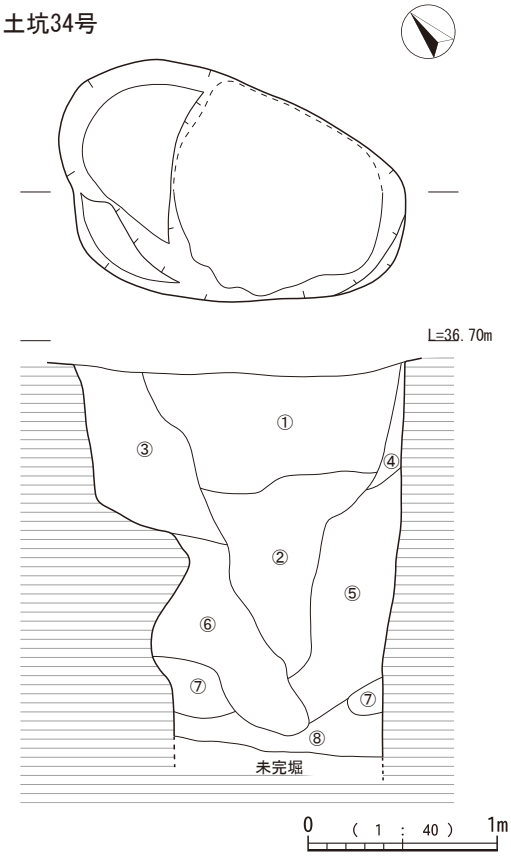
0 (1 : 3) 10cm

第98図 土坑28 ～ 32号・中世遺構内の遺物⑯

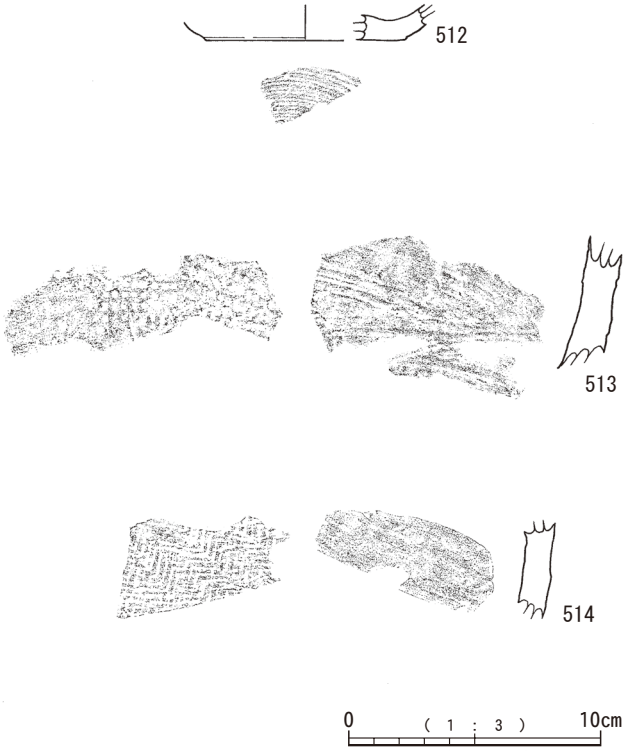


土坑33号埋土注記
① 暗褐色砂質土(7.5YR３／３) しまり強く粘性やや弱い
白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む

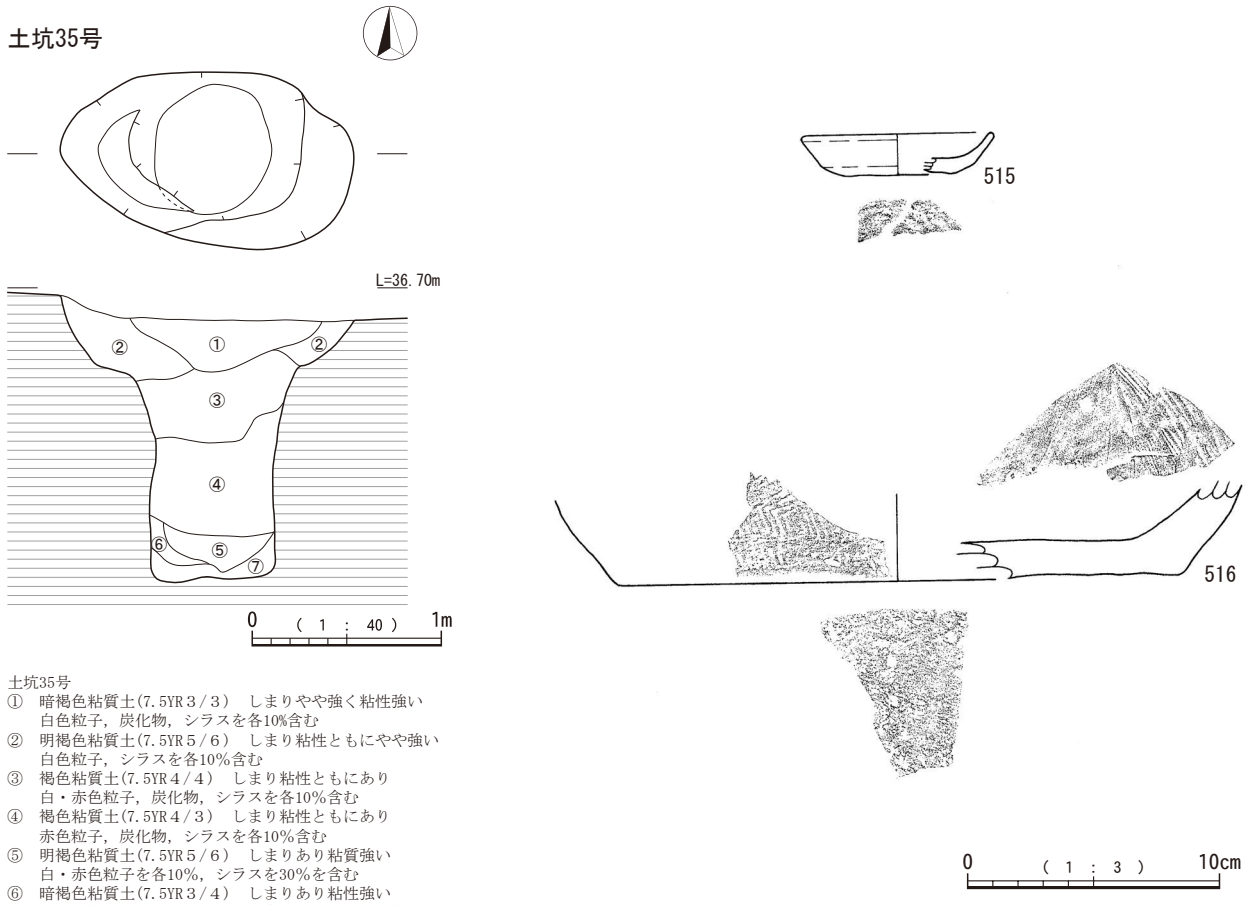




土坑34号埋土注記
① 暗褐色粘質土(7.5YR３／３) しまりやや強く粘性強い
白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
② 橙色粘質土(7.5YR６／６) しまり粘性ともに強い
白・赤色粒子，炭化物を各10%，シラスを80%含む
③ 褐色粘質土(7.5YR４／４) しまり，粘性ともにやや強い
白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
④ Ⅰ層にⅥａ層が30%含まれる
⑤ 褐灰色質土(7.5YR５／１)砂 しまり弱く粘性やや弱い
シラス(明褐色)と褐灰色が互層となり堆積 白色粒子を30%，
シラスを40%含む
⑥ 褐色粘質土(7.5YR４／４) しまり有あり粘性やや強い
シラスを40%含み，シラスブロック１㎝～５㎝程を
全体的にマーブル状に含む
白，赤色粒子を各10%含み，特に白色粒子は，
Ⅵ層，Ⅶ層との接地面にマーブル状に含んでいる
⑦ 黄橙色砂質土(7.5YR８／８) しまり強く粘性弱い
白・赤色粒子，シラスを各10%含む
※白・赤色粒子は２～３㎝のブロック状
⑧ 暗褐色粘質土(7.5YR３／４) しまりあり粘性やや強い
暗褐色土と褐灰色，黄橙色の層が互層となり堆積している
中心部の方がしまりが弱くなる 炭化物，シラスを各30%程含む



第99図 土坑33・34号・中世遺構内の遺物⑰



土坑35号
① 暗褐色粘質土(7.5YR３/３) しまりやや強く粘性強い
白色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
② 明褐色粘質土(7.5YR５/６) しまり粘性ともにやや強い
白色粒子，シラスを各10%含む
③ 褐色粘質土(7.5YR４/４) しまり粘性ともにあり
白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
④ 褐色粘質土(7.5YR４/３) しまり粘性ともにあり
赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
⑤ 明褐色粘質土(7.5YR５/６) しまりあり粘質強い
白・赤色粒子を各10%，シラスを30%を含む
⑥ 暗褐色粘質土(7.5YR３/４) しまりあり粘性強い
白・赤色粒子，シラスを各10%含む ３㎝程の赤色粒子あり
⑦ 褐灰粘質土(7.5YR４/１) しまりあり粘性強い
白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む
※底部に炭化物を多く含む ５㎝程度の白色ブロックを１つ含む

第100図 土坑35号・中世遺構内の遺物⑱

規模は，1.74m×0.93mで，深さは0.67mである。

遺物は，備前焼と考えられる陶器片が１点出土したが，図化には至らなかった。

テ 土坑22号（第96図）

Ｄ－48区のⅥ層上面で検出した。不定形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.1m×0.73mで，深さは0.42mである。検出状況から複数の遺構が重複していると考えられ，周辺の製鉄関連の遺構の一部の可能性が高い。

遺物は，白磁の小片が１点出土したが，図化には至らなかった。

ト 土坑23号（第96図）

Ｆ－56区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，0.59m×0.37mで，深さ0.18mの小規模の土坑である。壁や床の一部が焼けて赤化している。

遺物は出土しなかったが，炭化物を多く含む埋土があった。

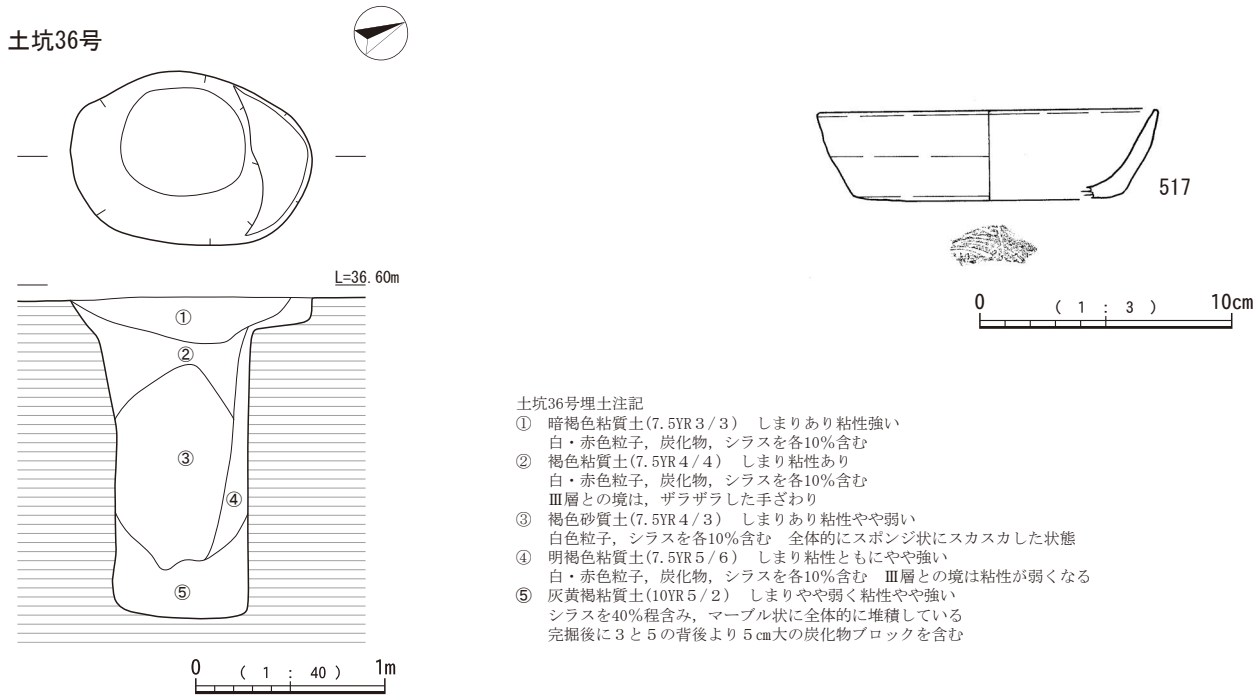
ナ 土坑24号（第96図）

Ｈ－56区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，0.5m×0.36mの小土坑と0.87m×0.61mの土坑で，深さは小土坑が0.16m，土坑が0.26mである。形状から連穴土坑を想定して調査を行ったが，それぞれ単体の土坑となった。埋土の状況から小土坑は柱穴の可能性がある。周辺に掘立柱建物跡３・４号があり埋土の状況も似ていることから，これらに伴う土坑の可能性が高い。

遺物は，出土しなかった。

ニ 土坑25号（第97図）

Ｆ－58区のⅢ層で検出した。隅丸方形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，2.14m×1.36mで，深さは0.3～0.4mである。レンズ状堆積の埋土を中心部の埋土が切っていることから，複数回利用されたことが想定される。炉や貼り床などは確認できなかったが，小規模な竪穴建物であった可



第101図　土坑36号・中世遺構内の遺物⑲

能性がある。埋土中から貝殻が出土していることから，最終段階では廃棄用の土坑として利用されたと考えられる。

遺物は，土師器が12点出土している。２点を図化しているが，古代該当の土師器のため古代の調査成果で報告をしている。

ヌ　土坑26号（第97図）

Ｇ－58区のⅢ層上面で検出した。円形の土坑である。規模は，0.62m×0.6mで，深さは0.9mある。形状から柱穴を想定して調査を行ったが，土坑や柱穴は検出されなかった。埋土中から古代の須恵器が出土しているが，柱を抜き取って埋めた際に入り込んだと考えられる。溝状遺構３号に隣接しているため関連する可能性がある。

遺物は，須恵器１点が出土しているが古代該当遺物のため古代の調査成果で報告をしている。

ネ　土坑27号（第97図）

Ｆ－69区のⅢ層上面で検出した。不定形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，2.18m×0.9mで，深さは0.98mでやや深い。埋土の状況から人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物（第97図　506・507）

遺物は，土師器が１点，須恵器２点，瓦質土器１点，常滑焼１点が出土している。そのうち瓦質土器１点，須恵器１点を図化した。

506は須恵器の擂鉢である。口縁部は玉縁状となっている。内面には10条一単位の擂目が施される。焼成は非常によく，堅緻である。

507は中世須恵器の甕である。内面は丁寧なナデを施す。外面は山形状のタタキ目を施す。

ノ　土坑28号（第98図）

Ｆ－69区のⅥ層上面で検出した。不定形の土坑である。埋土および周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，2.25m×1.1mで，深さは0.3mである。埋土の状況から複数回にわたっての使用が考えられる。

遺物は，出土しなかった。

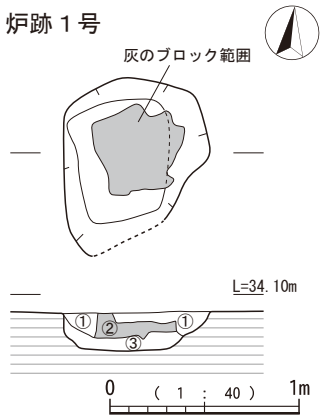
ハ　土坑29・30・31号（第98図）

Ｆ・Ｇ－69区のⅥ層上面で検出した。切り合いのある，不定形な土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.95m×0.55mで，深さは0.2～0.3mである。土坑30号から土坑29・31号の順に構築されているが，埋土に共通性があり時間差なく連続して掘られた可能性がある。Ｆ－69区に５基の土坑がまとまって検出されているため，関連性があることも考えられる。

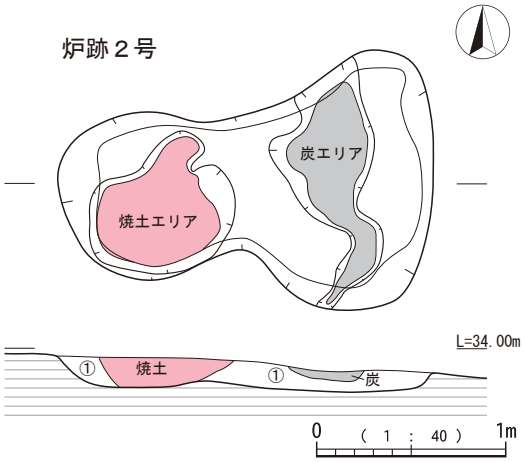
遺物は，土師器が12点，須恵器２点が出土している。

ヒ　土坑32号（第98図）

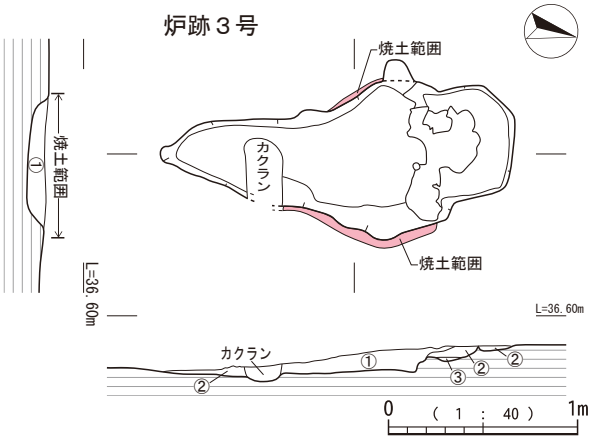
Ｅ－71区のⅢ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。



炉跡１号埋土注記
① 暗褐色土(7.5YR３/３) しまりあり粘性弱い
白・赤色粒子をわずかに含む
② 黒褐色砂質土 Ⅱｂ層由来の土 しまりあり粘性あり
灰のようなものがブロックで混じる
③ 黒褐色砂質土 Ⅱｂ層由来の土 しまりあり粘性弱い
Ⅲ層土が混じる



炉跡２号埋土注記
① 黒褐色砂質土(10YR３/２) しまり強く粘性無し
焼土・炭化物を20%含む



炉跡３号埋土注記
① 暗褐色砂質土(7.5YR３/４) しまり強く粘性有り
白・赤色粒子，シラスを各10%含み，炭化物を30%含む
② 褐色砂質土(7.5YR４/３) しまり粘性ともに弱い
③ 暗褐色砂質土(7.5YR３/４) しまり粘性ともにやや強い
白・赤色粒子，炭化物，シラスを各10%含む

第102図 炉跡１～３号

規模は，1.6m×1.1mで，深さは0.16mである。断面形が，皿状の浅い土坑である。

出土遺物（第98図　508・509）

遺物は，須恵器２点が出土している。そのうち須恵器２点を図化した。

508・509は，中世須恵器の甕である。508は内面にナデを施す。外面は風化がはげしく，残りは良好ではないが，頸部以下に格子目タタキが施される。509は内外面ともに風化のため，調整は不明である。胎土中に直径２～５㎜程度の小石が多く混入する。

フ　土坑33号（第99図）

Ｅ－71区のⅢ層上面で検出した。円形に近い土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.15m×1.07mで，深さは0.2mである。洪武通寶が出土しており土坑墓の可能性がある。

出土遺物（第99図　510・511）

遺物は，白磁１点，金属製品１点，洪武通寶１点が出土している。そのうち金属製品１点，洪武通寶１点を図化した。

510は青銅製の傘釘である。傘部は比較的残存状況が良好で丸まったドーム状となる。釘の足部分は欠損している。

511は古銭が５枚積み重なったものである。表面が錆ているが，洪武通寶の可能性が高いと考えられる。

へ　土坑34号（第99図）

Ｅ－72区のⅣ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.75m×1.19mである。深さは安全の関係上，２m下げたところで調査を終了した。

出土遺物（第99図　512～514）

遺物は，土師器２点，須恵器２点が出土している。そのうち土師器１点，須恵器２点を図化した。

512は土師器坏の底部である。底部には糸切り痕がみられる。513は中世須恵器の甕である。風化が著しく、外面は格子目タタキ、内面は粗いハケ目を施す。514は中世須恵器の甕である。外面には山形状のタタキが丁寧に施され，内面にはハケ目が施される。

ホ　土坑35号（第100図）

Ｅ－72区のⅣ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.55m×0.9mで，深さは1.38mである。

出土遺物（第100図　515・516）

遺物は，土師器３点，須恵器２点が出土している。そのうち土師器１点，須恵器１点を図化した。

515は土師器の小皿である。底部は風化しているが，わずかに糸切り痕が残る。色調は橙色で、白色砂粒を含む粗い胎土を使用している。

516は中世須恵器の甕の底部である。内面はハケ目及びナデを施す。外面は山形状のタタキ痕がみられる。胎土は，白色土と灰色土がマーブル状となっている。

マ　土坑36号（第101図）

Ｅ－72区のⅣ層上面で検出した。楕円形の土坑である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の土坑とした。規模は，1.27m×0.9mで，深さは1.68mである。

出土遺物（第101図　517）

遺物は，土師器２点が出土している。そのうち土師器１点を図化した。

517は土師器の坏である。体部はやや丸みを帯びた箱形である。底部には糸切り痕が残る。

（４）炉跡

中世に該当する炉跡は，Ｇ－47区で２基，Ｆ－73区で１基の計３基検出した。

ア　炉跡１号（第102図）

Ｇ－47区のⅥ層で検出した。不定形の炉跡である。埋土および周辺の状況から中世の炉跡とした。規模は，0.82m×0.77mで，深さは0.21mである。埋土中に５～14㎝の灰のブロックが堆積した層がある。完掘後に床面や壁面の確認を行ったが，赤化している状況は見られなかった。

遺物は，出土しなかった。

イ　炉跡２号（第102図）

Ｇ－47区のⅥ層で検出した。不定形の炉跡である。出土遺物および埋土，周辺の状況から中世の炉跡とした。規模は1.99×0.74で，深さは0.14mである。西側に焼土エリア，東側は炭化物の集中部がある炉跡である。

遺物は，土師器１点，瓦質土器１点が出土している。

ウ　炉跡３号（第102図）

Ｆ－73区のⅥ層上面で検出した。不定形の炉跡である。削平を受けており，残存状態は良好でなかった。科学分析の結果および埋土，周辺の状況から中世の炉跡とした。規模は，1.85m×0.78mで，深さは0.13mである。焼土塊が残る炉跡である。炭化物の年代測定を行ったところ，14世紀前半の年代が出ている。（第Ⅴ章参照）

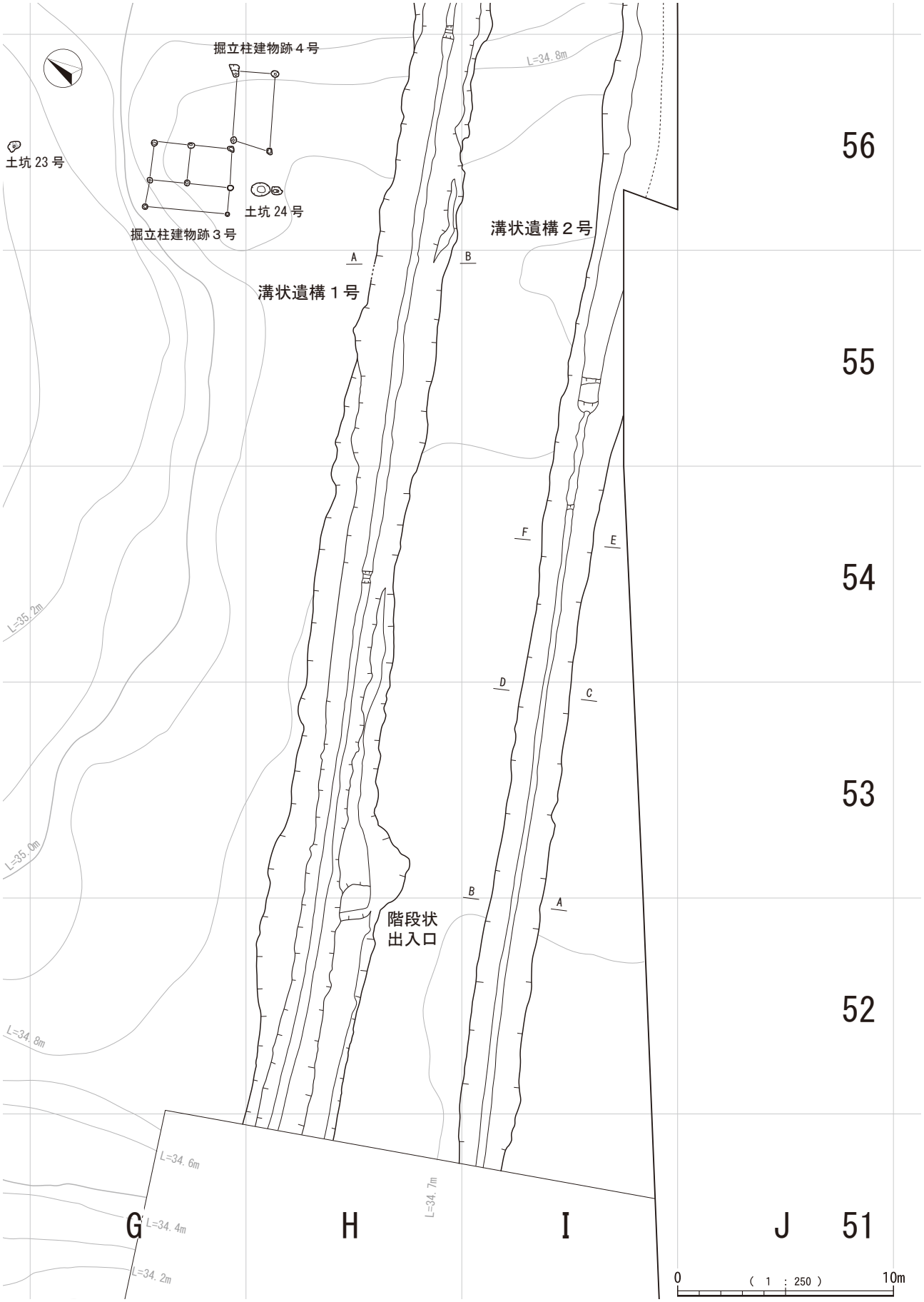
遺物は，出土しなかった。

（５）溝状遺構・石列・集積

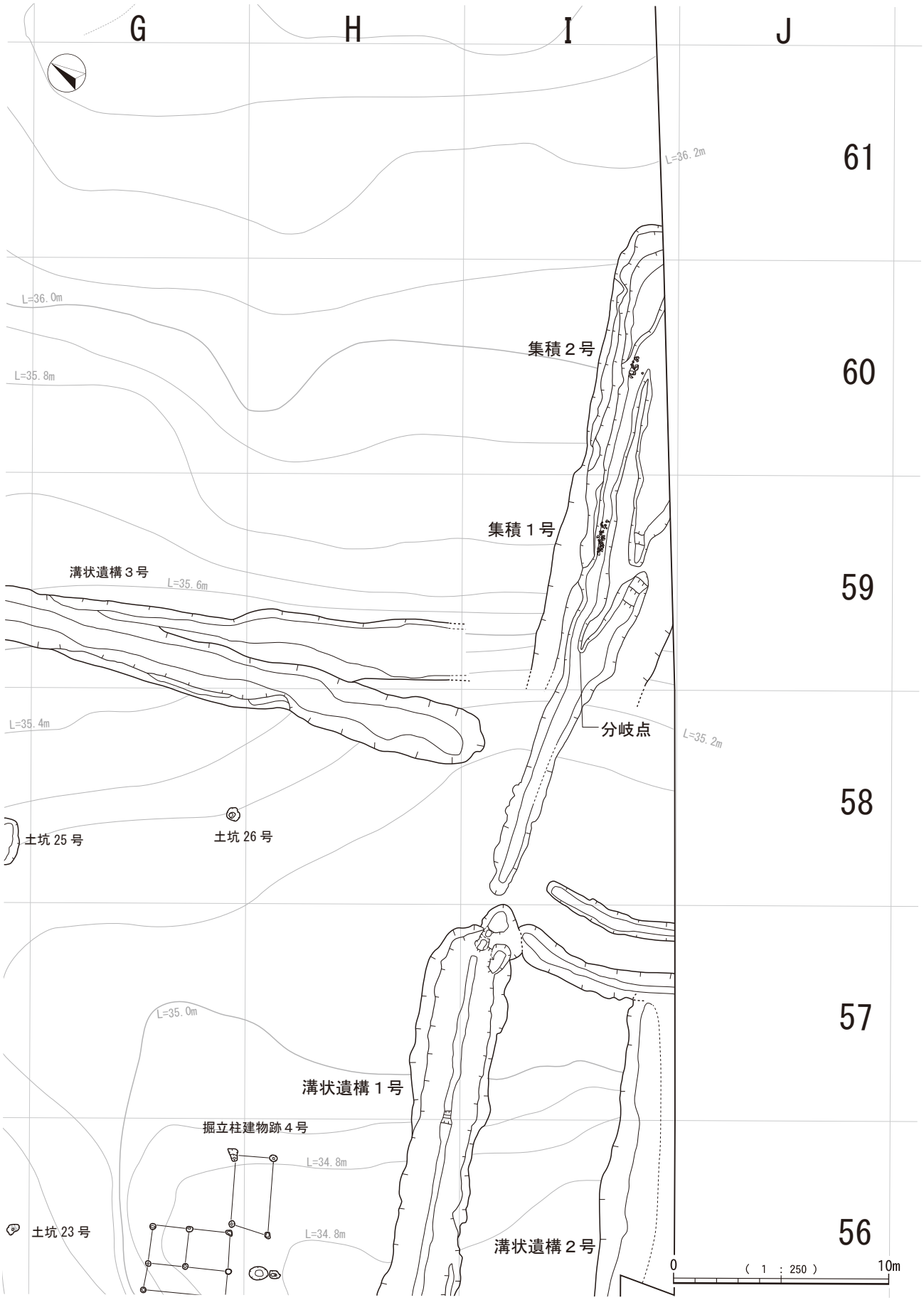
溝状遺構は，７条検出された。発掘調査および整理作業の過程で，中世段階で構築され，一部は道として現代まで利用されていたと判断した。また，遺構内に石列や集積等の遺構も見られる。これらは，溝状遺構と直接関連がある遺構のため，各溝状遺構とあわせて報告を行う。

ア　溝状遺構１号（第103・104図）

Ｈ－51区からＩ－61区のⅢ層上面で検出した。溝状遺構２号に並行する。また，Ｉ－58区で溝状遺構３号と直交する。長軸がほぼ東西方向に延びており，主軸はN70°

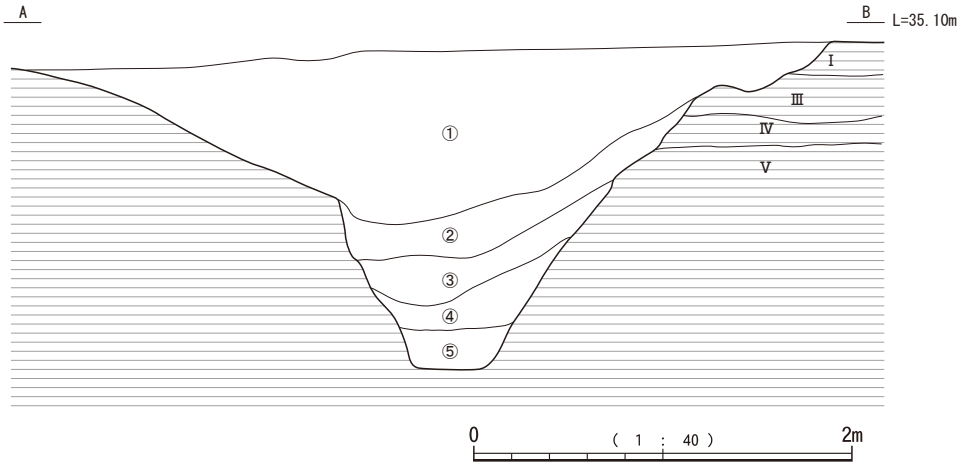


第103図　溝状遺構１・２号溝（51 ～ 56区）



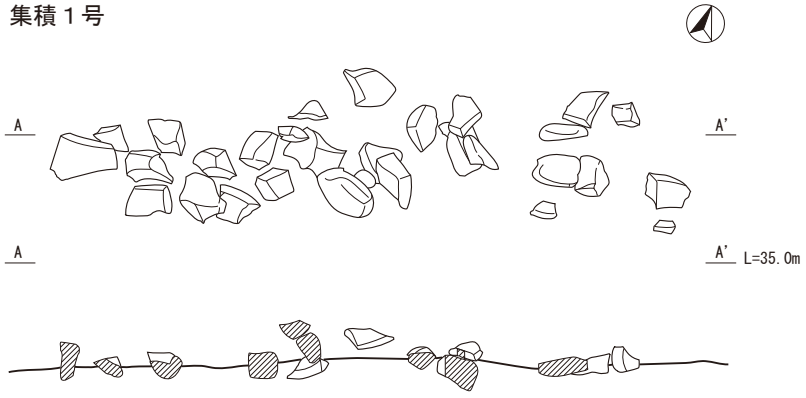
第104図　溝状遺構１・２号溝（56 ～ 61区）および集積１・２号

溝状遺構１号土層断面

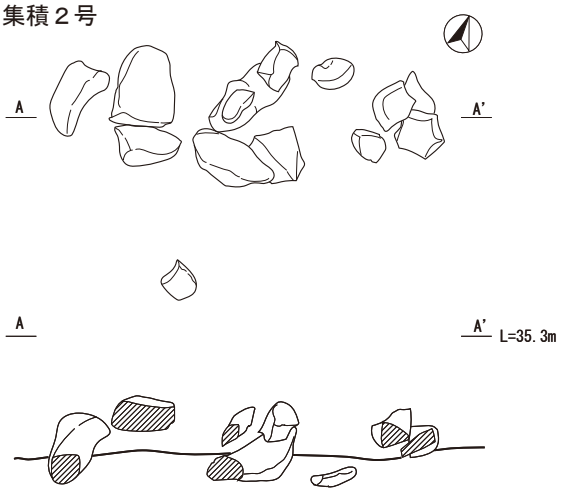


① 暗褐色砂質土(10YR３／４) しまり強く粘性やや弱い 白色粒子を含む
② 褐色砂質土(10YR４／４) しまり強く粘性弱い ３㎝大のⅤ・Ⅵ層ブロック土多く含む
③ 暗褐色砂質土(10YR３／４) しまりやや強く粘性弱い Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層ブロック土を含む
④ 褐色砂質土(10YR４／４) しまりやや強く粘性やや弱い ３㎝大のⅤ・Ⅵ層ブロック土多く含む
⑤ 暗褐色粘質土(10YR３／４) しまりやや弱く粘性やや弱い Ⅴ・Ⅵ層小ブロック少量含む

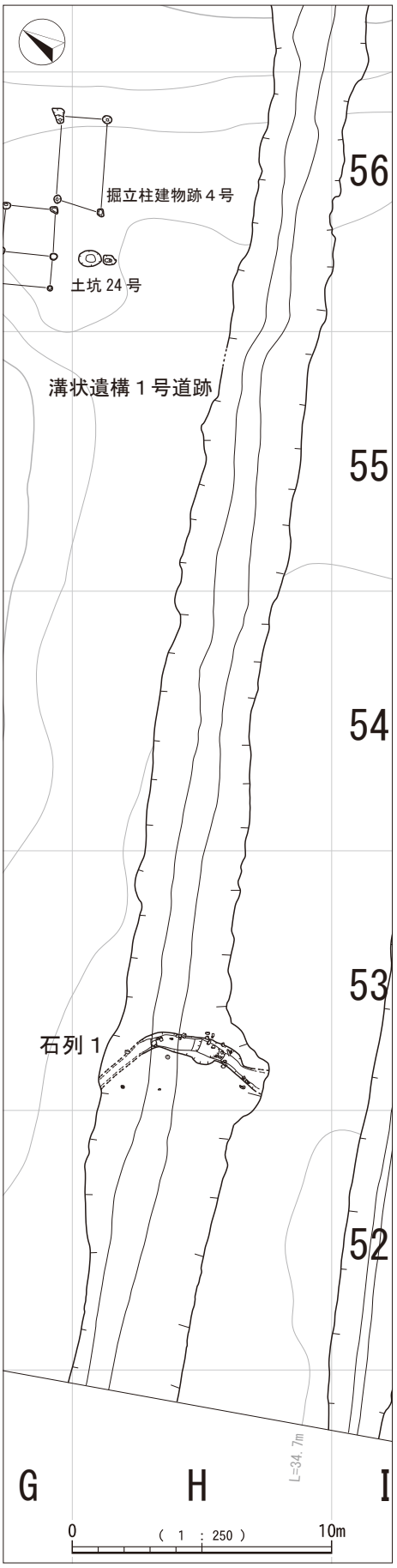
集積１号

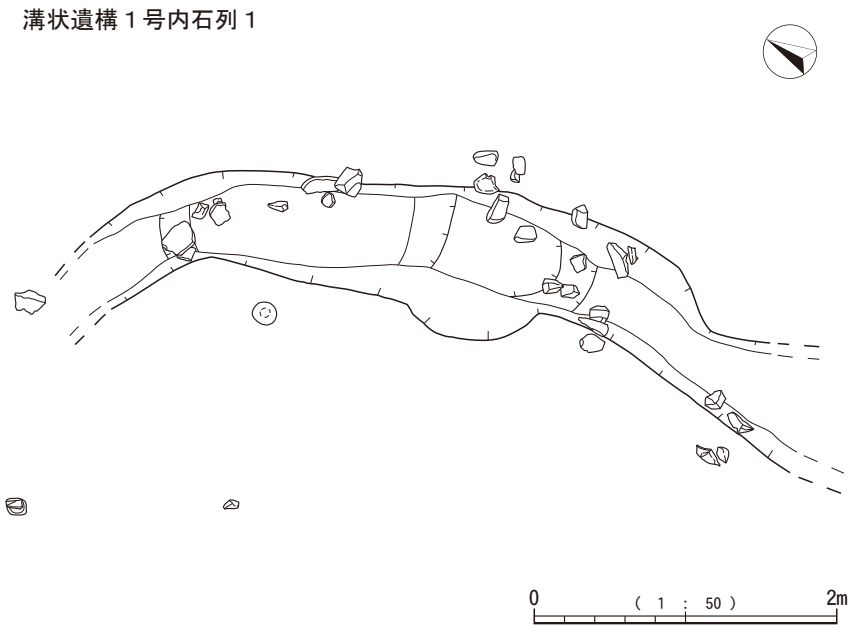


集積２号

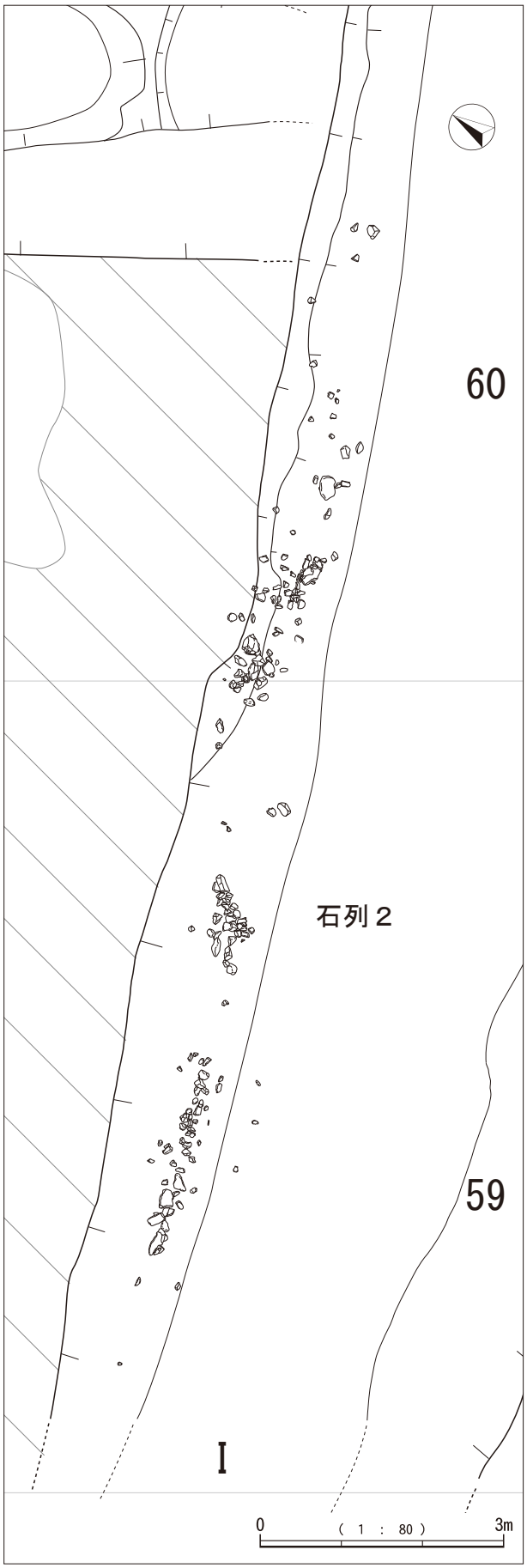


第105図 溝状遺構１号断面・集積１・２号





第106図　溝状遺構１号道跡（51 ～ 56区）および石列１



第107図　溝状遺構１号道跡（56 ～ 61区）および石列２

Ｅを示す。規模は，長さ95m，幅3.5～６ｍであり，東端と西端はともに調査範囲外に続く。検出面からの深さは1.5mである。断面形は底面がほぼ平坦で，擂鉢状を基本とするが，南側の立ち上がりに箱形で二段堀状になる箇所も見られた。埋土は，南側から流れ込んだレンズ状堆積になる。Ⅱ～Ⅵ層の土が混ざった状態だが，埋土の層によってブロックで入っている土の状況が変わり，３～５枚に分かれていた。溝として機能した後は道として使用され，長い期間にわたって用途を変えながら使用されてきたと考えられる。

溝状遺構１号に関連する遺構として溝内から，集積２基，石列２列，階段状出入口１か所，分岐点１か所を検出した。

（ア）集積１号（第104・105図）

Ｉ－59区で溝が二つに分岐するが，北側の溝の底面で検出した。長さ約1.7m，幅0.6mの範囲から，29個の礫を検出した。検出状況から，意図的に集中させて配置したと考えられる。半数以上の礫に被熱と考えられる赤化が見られたが，周辺の壁が焼けていたり炭化物が出土するといった状況は見られなかった。用途は不明である。

（イ）集積２号（第104・105図）

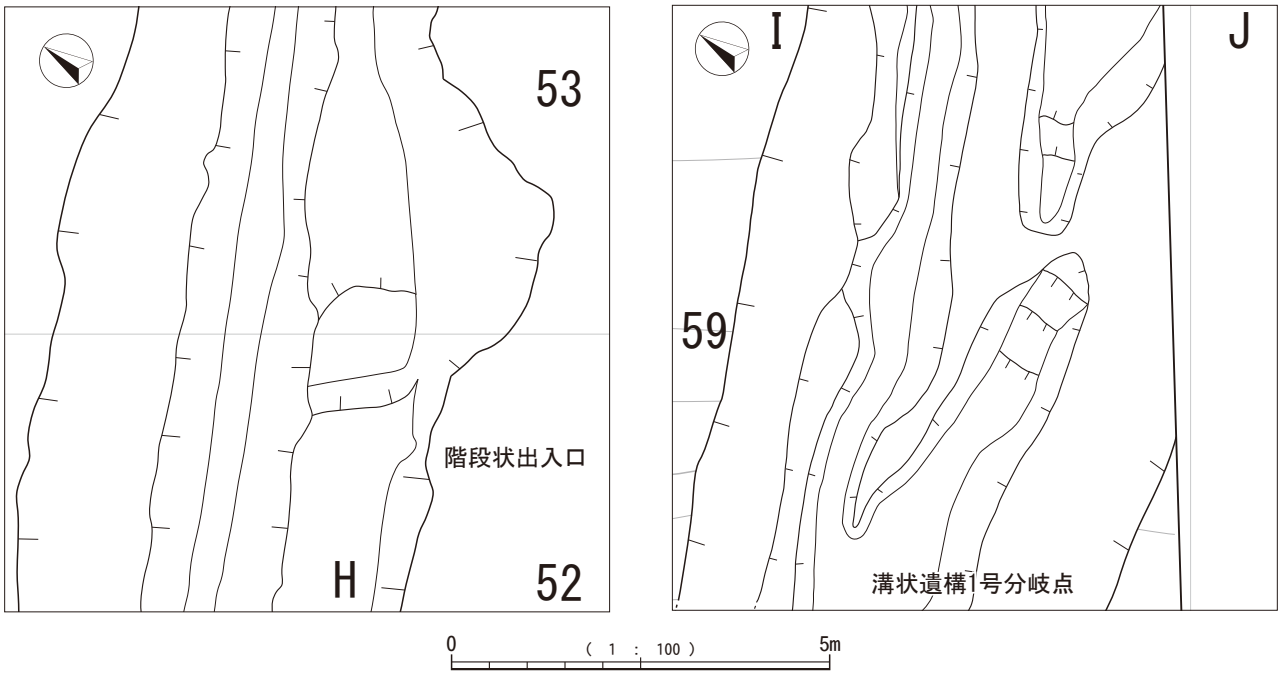
Ｉ－60区の北側溝の底面で検出した。長さ約1.1m，幅0.6mの範囲で，14個の礫が出土した。集積１号と同様に集中して配置した状況であった。赤化している礫も見られたが，周辺が焼けている状況等は確認できなかった。用途は不明である。

（ウ）石列１（第106図）

Ｈ－53区の埋土中で検出した。溝状遺構１号を横断し，石列に伴い道跡も検出された。礫は34個あり，密集しているというよりは，まばらに広がっている状況であった。埋土の状況から，溝の下部が埋まった後に利用されたと考えられる。

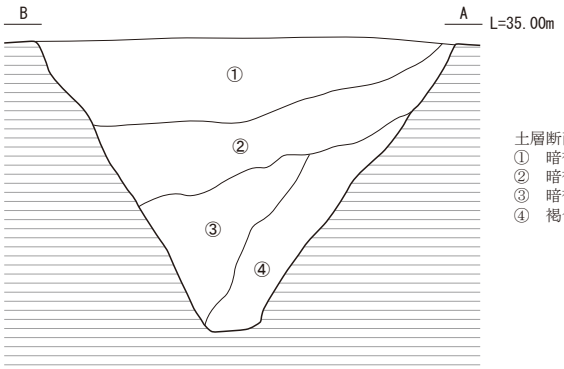
（エ）石列２（第107図）

Ｉ－59・60区の埋土中で検出した。全長は約14mで大



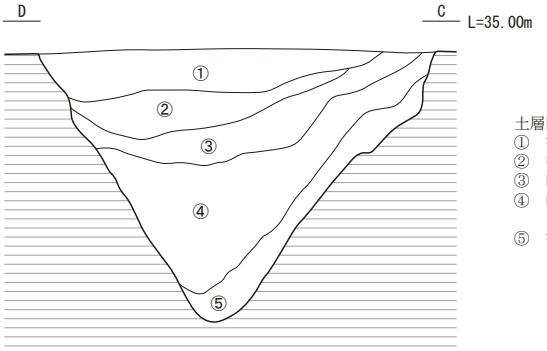
第108図　溝状遺構１号内階段状出入口および分岐点

土層断面１



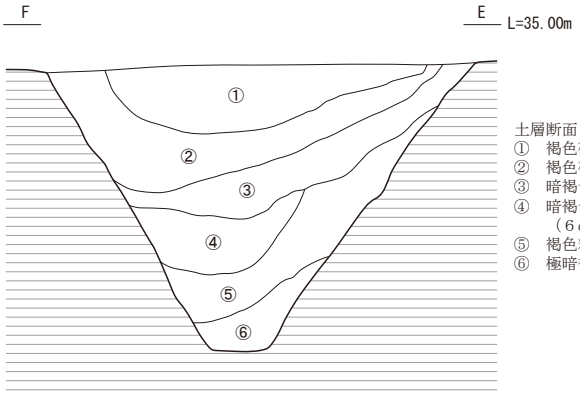
土層断面１
① 暗褐色砂質土(7.5YR３／４) しまりやや弱く粘性弱い ３㎝大のⅤ・Ⅵ層ブロック土多く含む
② 暗褐色砂質土(10YR３／４) しまりやや弱く粘性弱い Ⅴ・Ⅵ層ブロックを含む
③ 暗褐色砂質土(10YR３／４) しまりやや弱く粘性弱い Ⅴ・Ⅵ層小ブロック多く含む
④ 褐色粘質土(7.5YR４／３) しまり弱く粘性やや弱い

土層断面２



土層断面２
① 褐色砂質土(10YR４／４) しまりやや強く粘性弱い Ⅴ・Ⅵ層ブロックを含む
② 褐色砂質土(10YR４／６) しまりやや弱く粘性弱い ２㎝大のⅤ・Ⅵ層ブロック多く含む
③ 暗褐色粘質土(10YR３／４) しまり粘性ともにやや弱い Ⅴ・Ⅵ層ブロックを含む
④ 暗褐色粘質土(7.5YR３／４) しまり粘性ともにやや弱い Ⅴ・Ⅵ層ブロック
（６㎝程度のブロックも混じる）を含む
⑤ 褐色粘質土(7.5YR４／３) しまり弱く粘性やや弱い Ⅴ・Ⅵ層小ブロック多く含む

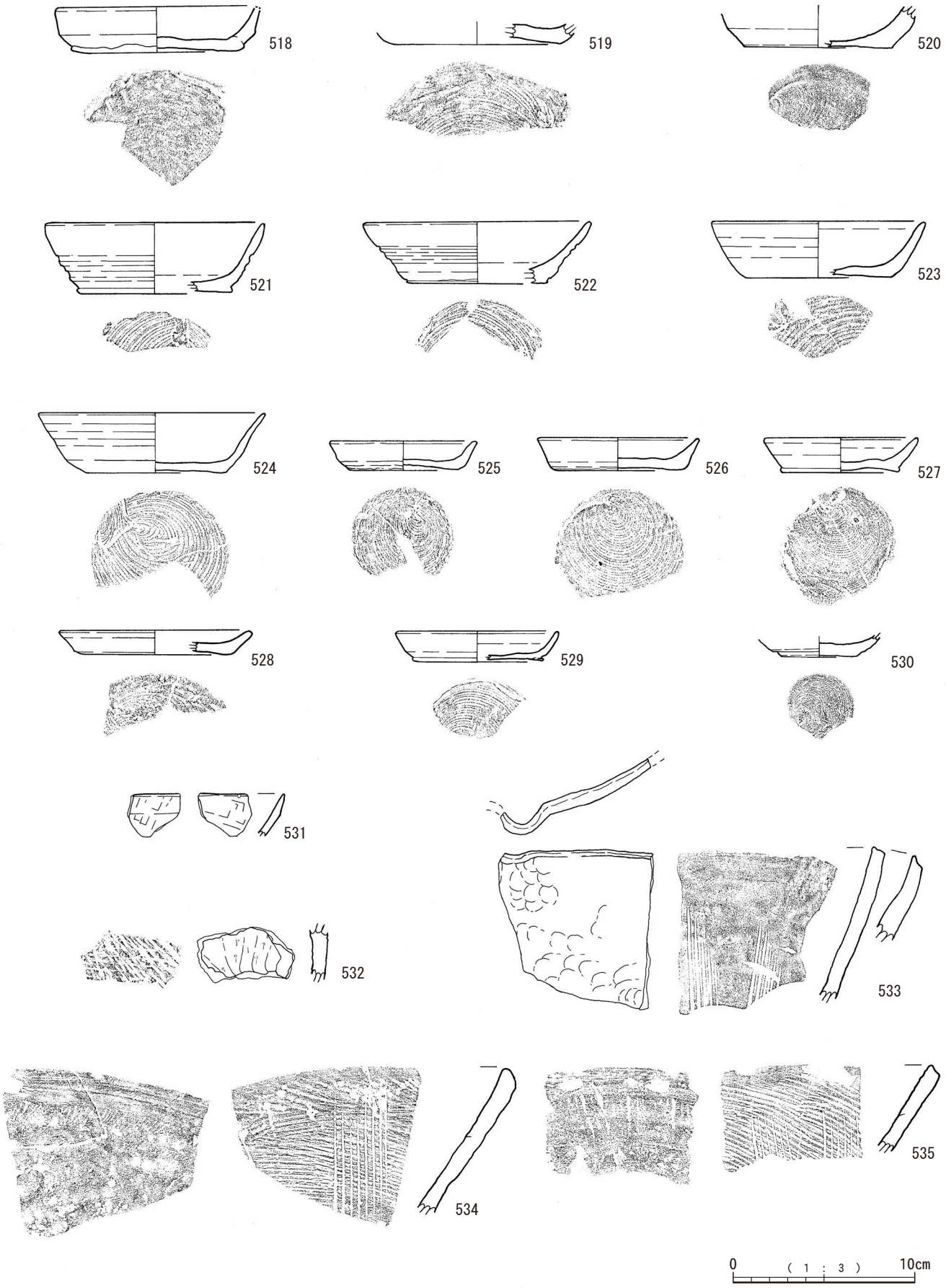
土層断面３



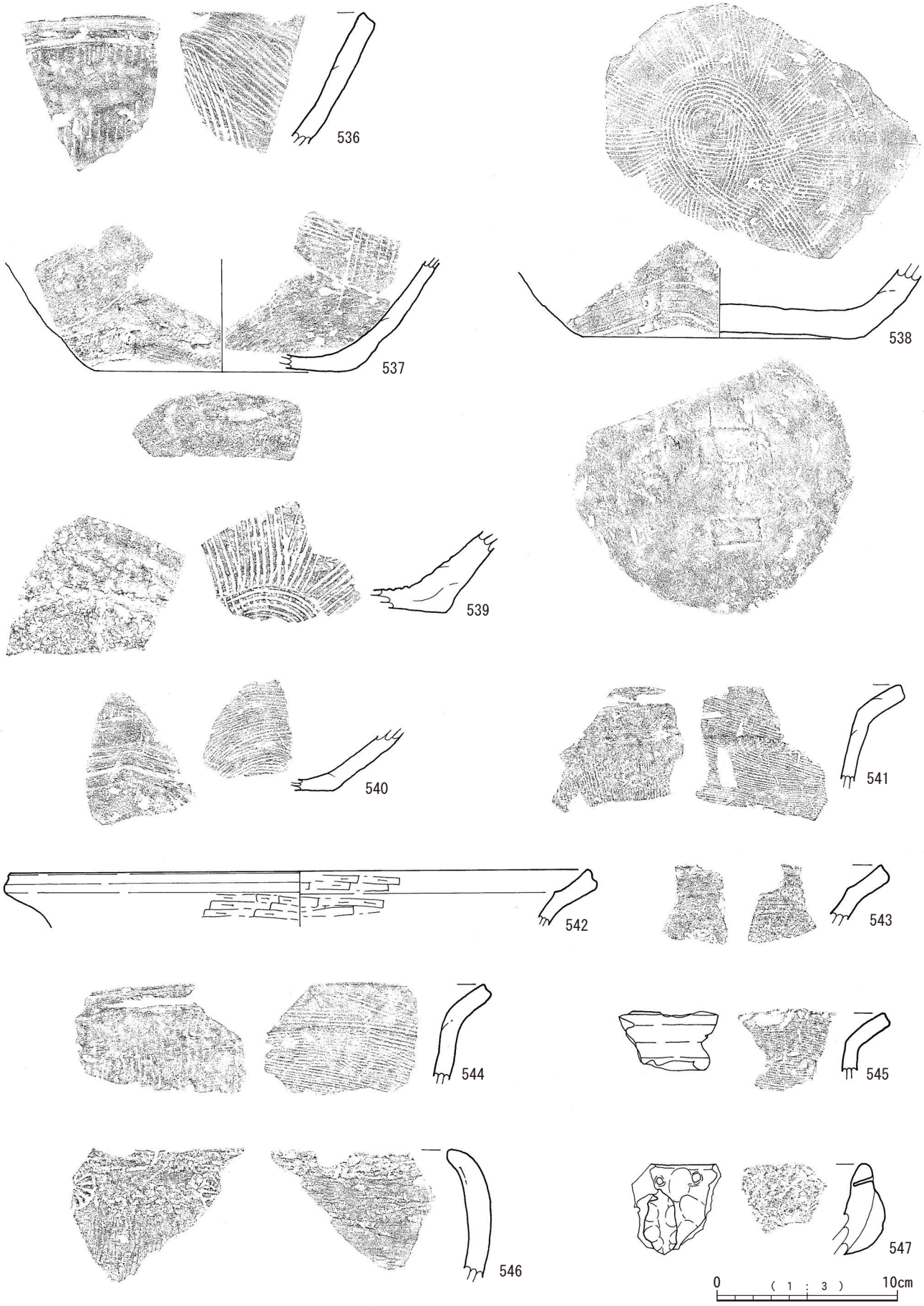
土層断面３
① 褐色砂質土(10YR４／４) しまりやや強く粘性弱い Ⅴ・Ⅵ層ブロックを含む
② 褐色砂質土(10YR４／６) しまりやや弱く粘性弱い Ⅴ・Ⅵ層ブロック多く含む
③ 暗褐色粘質土(10YR３／４) しまり粘性ともにやや弱い Ⅴ・Ⅵ層ブロックを含む
④ 暗褐色粘質土(7.5YR３／４) しまり粘性ともにやや弱い Ⅴ・Ⅵ層ブロック
（６㎝程度のブロックも混じる）を含む
⑤ 褐色粘質土(7.5YR４／３) しまり弱く粘性やや弱い Ⅴ・Ⅵ層小ブロック多く含む
⑥ 極暗褐色砂質土(7.5YR２／３) しまり粘性ともに弱い Ⅴ・Ⅵ層小ブロック少量含む

0 (1 : 40) 2m

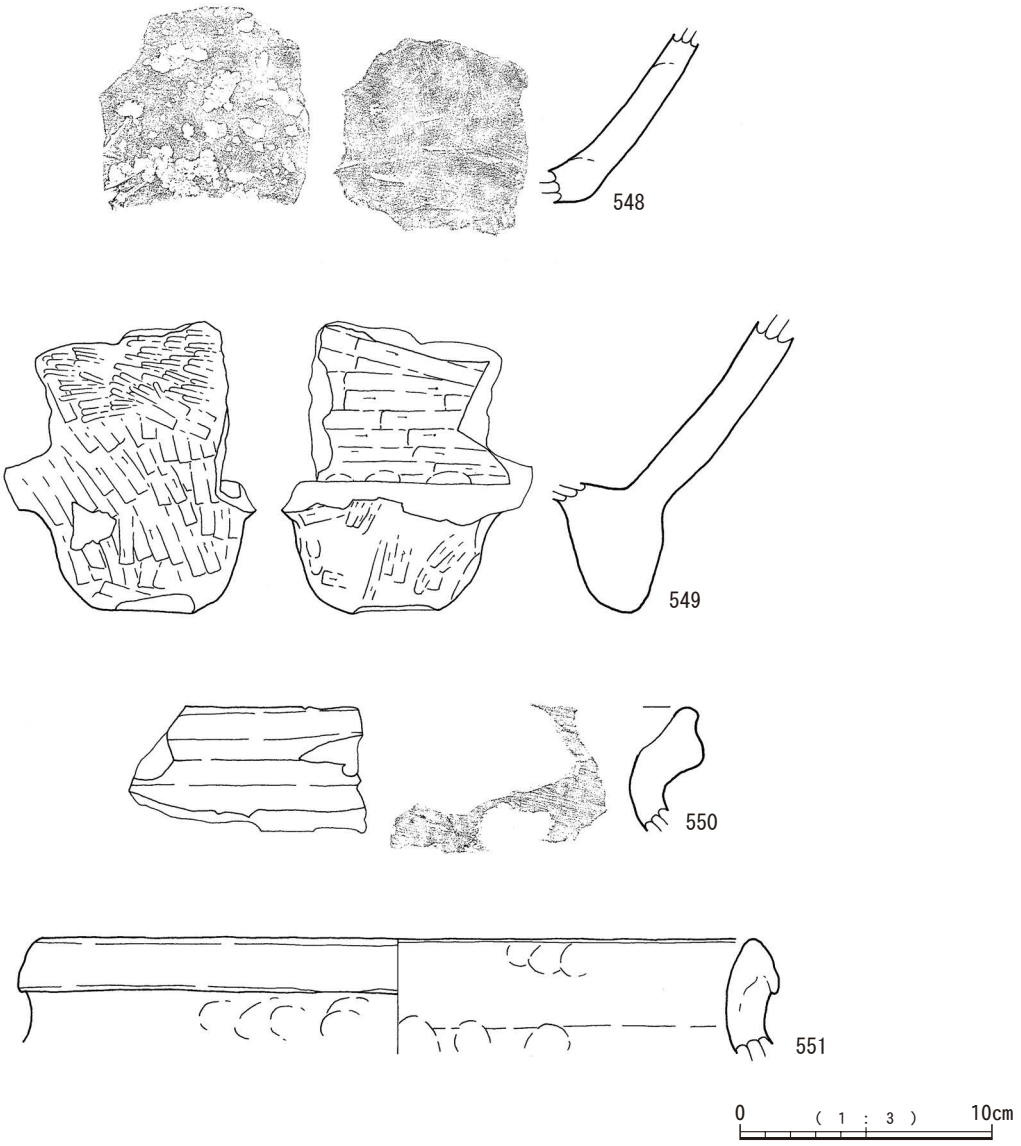
第109図 溝状遺構２号断面１～３



第110図　中世遺構内の遺物⑳



第111図　中世遺構内の遺物㉑



第112図　中世遺構内の遺物㉒

小235個の礫が出土し，溝に沿う形で広がっていた。埋土の状況から，溝が道として利用されている時期の遺構と考えられるが，詳細は不明である。

（オ）階段状出入口（第108図）

Ｈ－52・53区の南側で検出した。溝を構築した段階ですでに造られていたと考えられる。溝の底面は平坦で，人が通れる規模であることから，溝内への上り下りのために設けられたと考えられる。部分的に硬化している面があった。北側に同様の施設は検出していない。

（カ）分岐点（第108図）

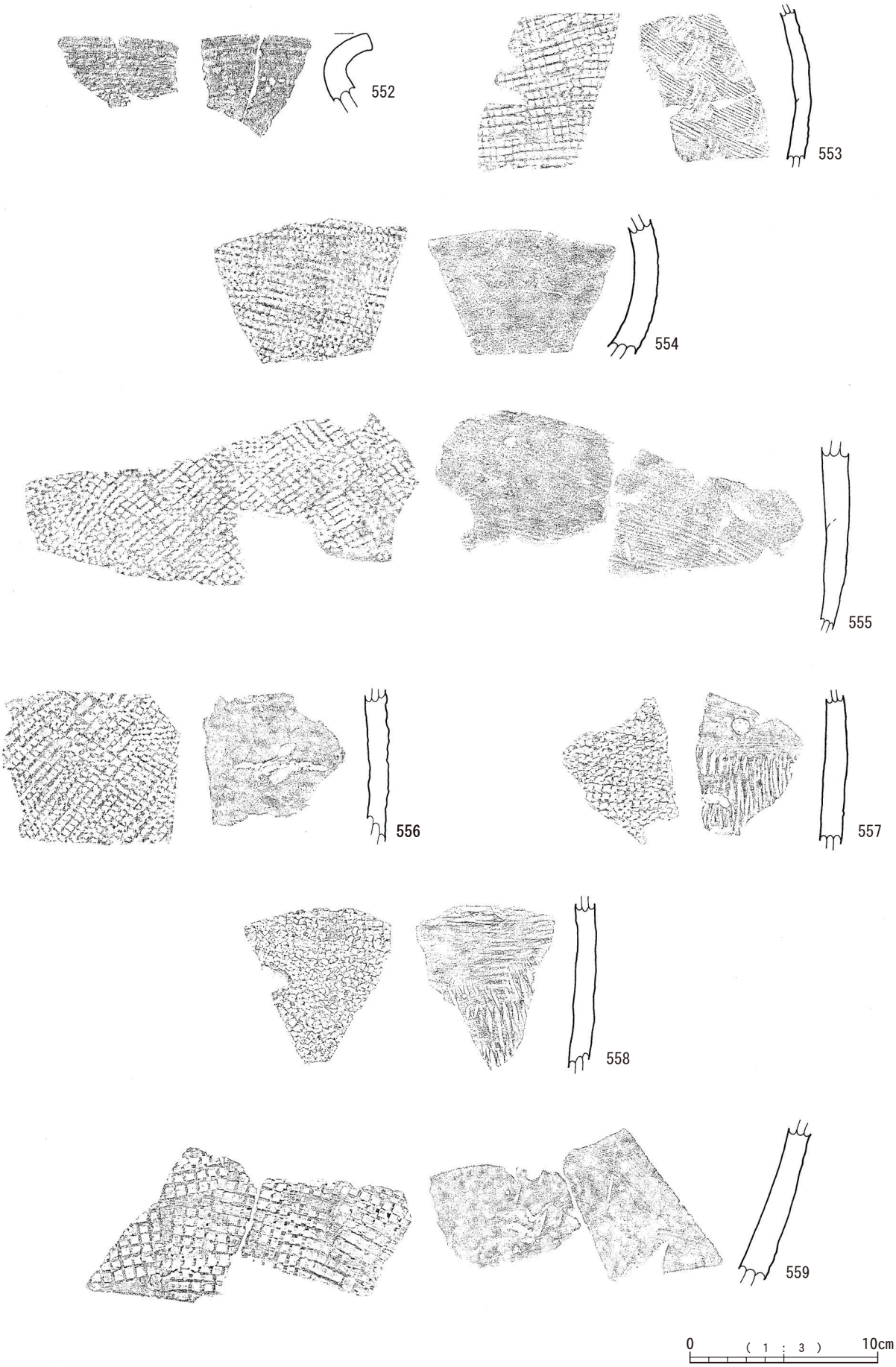
Ｉ－59区で検出した。溝を東から西に向かって進むと北側と南側に分岐するように構築されている。北側はそのまま続くが，南側は深さが次第に浅くなって，調査区外へ曲がれるようになっていたと考えられる。（オ），（カ）の状況から，溝構築当初から通路として使うことも想定し造られた可能性がある。

出土遺物（第110～117図　518～611）

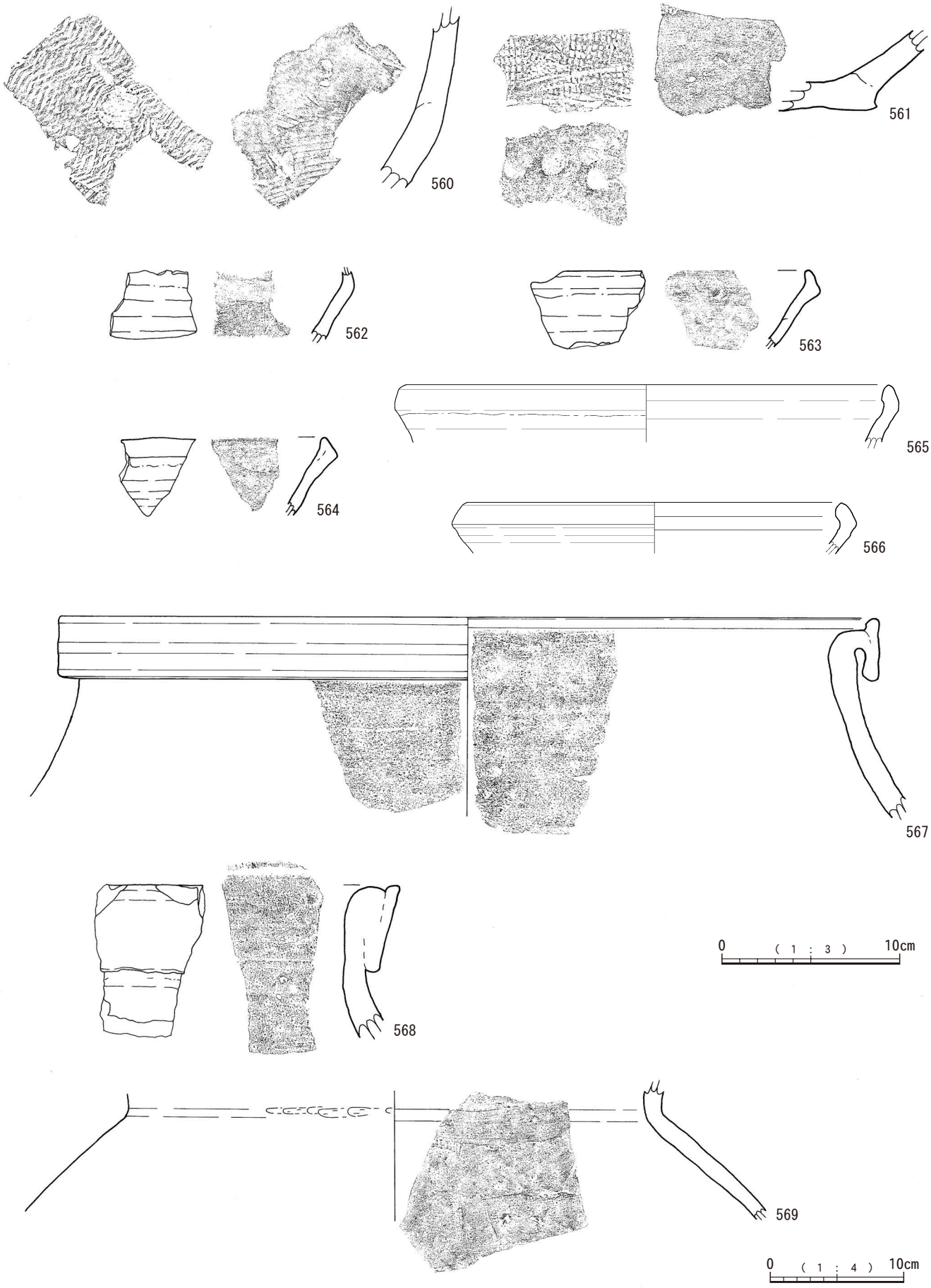
遺物は，土師器618点，瓦質土器74点，須恵器164点，国産陶器53点，白磁49点，青磁58点，青花１点，輸入陶器９点，土器220点，滑石製品５点が出土している。そのうち土師器15点，瓦質土器20点，須恵器17点，国産陶器６点，白磁12点，青磁８点，青花１点，輸入陶器６点，滑石製品５点を図化した。

①　土師器（第110図）

518～531は土師器の坏・皿で、底部に糸切り痕が残



第113図　中世遺構内の遺物㉓



第114図　中世遺構内の遺物㉔

る。518 ～ 524は坏である。518 ～ 520は底径約10cmで、器高は低い。518は見込み中心部が若干盛り上がる。519は底部にモミの圧痕が残る。中世前半期のものと考えられる。

521 ～ 524は底径が約７～８cmで，器高は約３cmと高めである。521・522・524は体部にケズリ状の回転ヨコナデを施す。底部の切り離しが粗雑であるため，粘土がはみ出している。

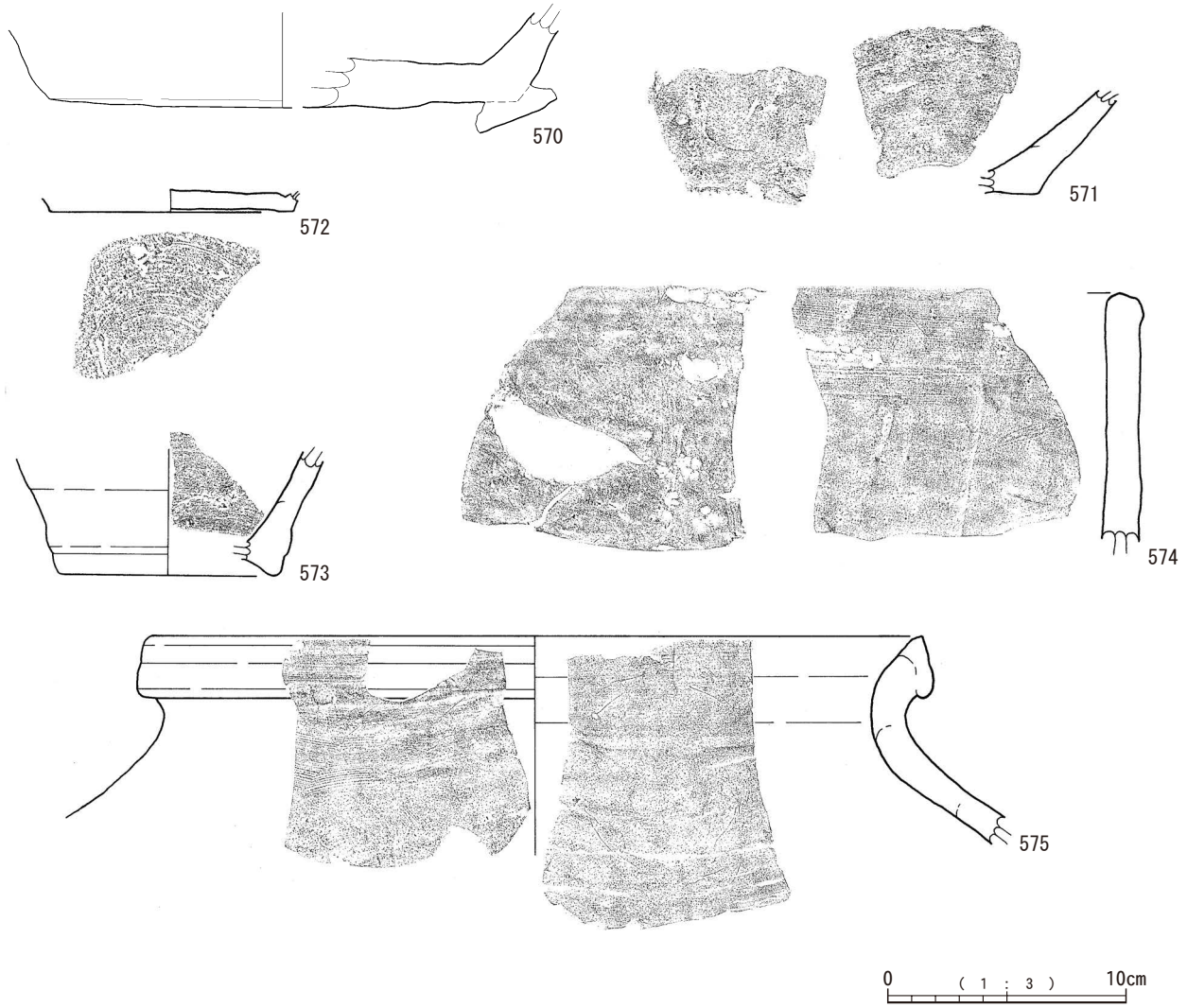
525 ～ 530は小皿である。528は底径約８cmで，器高は約1.5cmと低い。外面の一部と内面は黒色化しており，使用による痕跡の可能性がある。中世前半期のものと考えられる。525・526・529は底径約６cm，器高約1.5cmでやや小振りである。腰のあたりにヘラケズリを行うことから，16世紀代の可能性がある。530は小型のものである。底径約４cmで底部は高さの低い柱状高台のようになる。16世紀代以降の可能性がある，531は胎土が白色で，他の土師器と異なるため，他地域から移入された可能性が考えられる。摩耗のため調整は不明である。

532は土師器の甕である。外面に平行タタキ，内面にケズリを施す。体部下半の破片で，時期は古代である。

② 瓦質土器（第110 ～ 112図）

533 ～ 551は瓦質土器で，533 ～ 540は擂鉢である。533は口縁部に注ぎ口が残り，口唇部は溝状に凹む。外面に指頭圧痕が残り，内面には５条一単位の擂目が施される。534は口唇部が山形となり、内面は斜位にハケ目を施した後，縦方向の擂目を施す。535・536は口唇部が溝状となるものである。535の内面には６条一単位，536には７条一単位の擂目が施される。外面は筋状に延びる調整痕をナデ消している。

537 ～ 540は底部である。537の内面は使用による磨滅が著しく，わずかに擂目が残存する。見込み付近は特に磨滅している。内面の擂目は８条一単位とみられる。538は底部をわずかに上げ底としている。外面の底部近くはヘラケズリで調整する。内面には９条一単位の擂目



第115図　中世遺構内の遺物㉕

第116図　中世遺構内の遺物㉖

が施される。見込みの中央から擂目を放射状に施した後，「U」字状や「J」字状の擂目を縦横に追加する。539は外面には指頭圧痕などが残るが，風化がはげしい。内面には８条一単位の擂目が施される。見込みの中央付近から口縁部にかけて放射状の擂目を施した後，見込み部分に同心円状の擂目を施す。540の外面底部付近にヘラケズリを施す。内面には，横方向のハケメが施される。残存部分では擂目は確認できない。

541 ～ 545は鍋である。口縁部がくの字状に開き，中世前半期のものと考えられる。内外面にハケ目・ケズリを施す。542・543は同一個体で，口縁部内面に小さな段をもつ。

547は湯釜の可能性がある。口縁部外面には，約２cmごとの間隔で孔を穿つ。孔は，貫通しておらず，７割程度穿ったところでとまっている。また，外面には把手状の耳が縦方向につけられる。

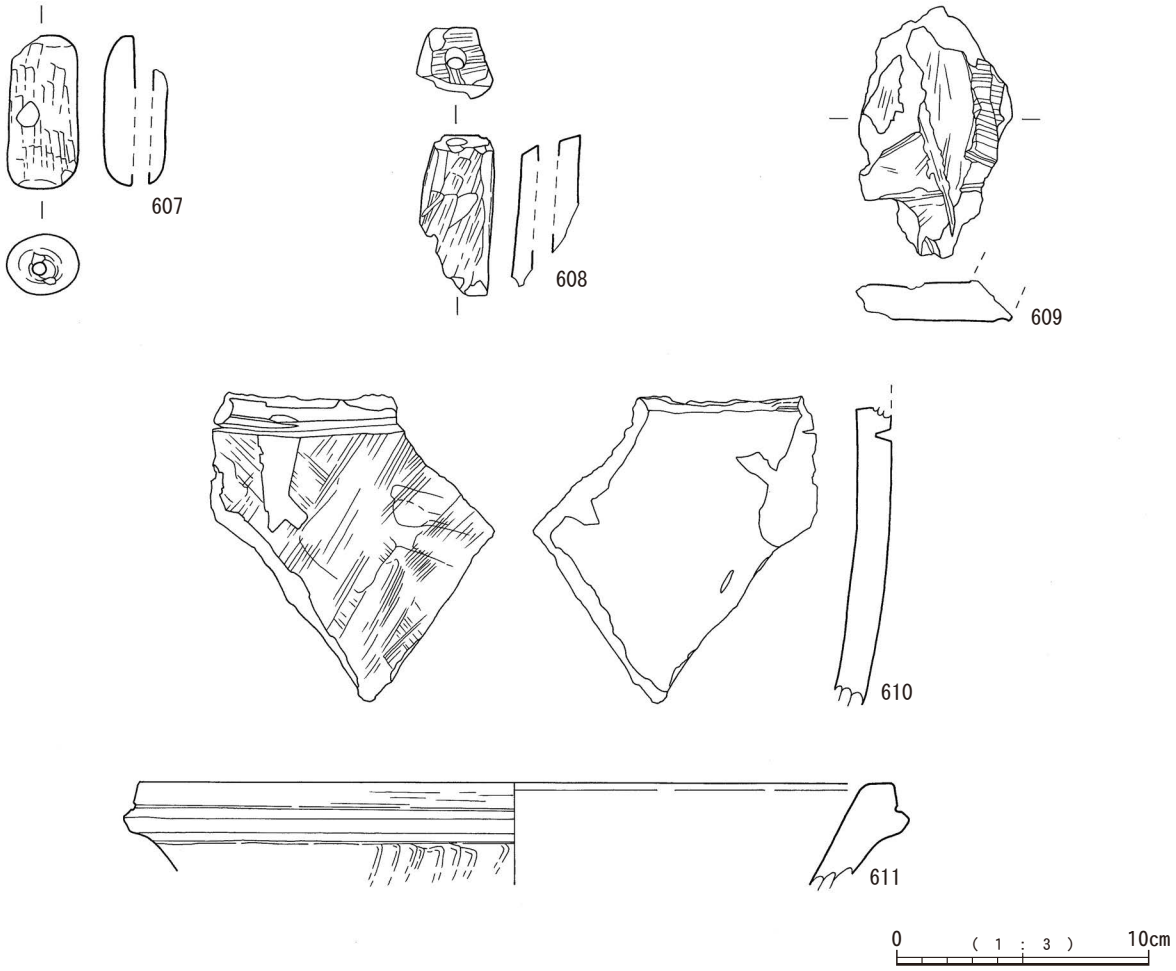
546・548・549は，瓦質土器の火鉢・風炉とみられる。546は口縁部が内湾するもので，風炉と考えられる。口縁部外面には，菊花文のスタンプが押捺される。内面にはハケ目とミガキが施される。548は底部である。内外面とも燻しが均一に施され，黒色を呈する。外面は被熱による影響ではじけた痕跡がみられる。549は脚部が１か所残っている。外面調整は胴部にミガキ，底部にハケ目を施す。内面調整はハケメである。

550・551は風炉もしくは壺と考えられる。550は口縁部が山形に直立する。内外面ナデ調整である。551は口縁が玉縁状に肥厚する。内外面ナデ調整である。

③　須恵器（第113・114図）

552 ～ 561は中世須恵器の甕である。552は口縁部を外方に向かって屈曲させる。内面に直径約２㎜の穴を近接して３か所施す。

553 ～ 560は胴部片である。外面に格子目タタキ，内



第117図　中世遺構内の遺物㉗

面にはハケ目・ナデを施す。554の外面には自然釉が掛かる。中世後半期のものと考えられる。557・558は外面に目の細かい格子目タタキを施す。内面にはヨコナデと平行線状の当て具痕を施す。中世前半期のものと考えられる。560は外面に山形状のタタキがやや粗雑に施されており，タタキの重なりやズレが顕著な部分がある。中世前半期と考えられる。

561は底部である。成形が粗いため、体部と底部の境が外方へと突出する。

④　東播系須恵器（第114図）

562 ～ 566は東播系須恵器の片口鉢である。口縁部を屈曲させ，上方へと突出させるものである。口縁部外面には自然釉が掛かる。13世紀後半頃のものと考えられる。565のみ口縁部外面と内面に自然釉が掛かる。

⑤　国産陶器（第114・115図）

567 ～ 571は常滑焼の甕である。567は口縁部を折り返して断面「N」字状につくる。外面には自然釉が，掛かる。中野編年の８型式（14世紀後半）に該当する。568の口縁部は外面に粘土を被せ、帯状に肥厚している。中野編年の７型式（14世紀前半）に該当する。569は肩部の外面に自然釉がかかる。胴部内面にケズリを施す。570 ～ 573は底部である。570は底部に須恵器片が１か所付着している。内面には自然釉がかかる。572は底面には糸切り痕が残る。器種は不明である。

573は東海系の捏鉢である。器壁は厚く，外面には粗いケズリを施す。内面にはわずかに自然釉が掛かる。底部には，高さ約0.5cmの低い高台がつく。

574・575は産地不明の国産陶器である。574は備前焼に類似する陶器である。口縁部が直行することから，大型の鉢と考えられる。備前焼にはこのような器形のものは確認できない。

575は壺で口縁部が玉縁状に膨らむ。常滑焼に類似するが，胎土・器壁の厚さなどに違いがある。また，器壁が厚いという点に関しては，備前焼と共通するものの，備前焼にはない器種である。

⑥　白磁（第116図）

576・577・584は中世前半期のものである。576は碗の底部である。高い高台が細く直立する。高台の内面は無釉である。見込みには短い櫛目文様を描く。歴博分類白磁碗Ｖ－４類，大宰府分類白磁椀Ｖ－４ｂ類に該当する。12世紀中頃～後半である。577は壺の胴部である。内外面に薄く透明な釉が掛かる。584は口禿皿である。口縁部を釉剥ぎするものである。歴博分類白磁皿Ⅸ類，大宰府分類白磁皿Ⅸ類に該当する。13世紀後半～ 14世紀初頭である。

578 ～ 581・583･585は中世後半期のものである。578は枢府系の坏である。体部途中で大きく屈曲する。屈曲部の外面は，わずかに盛り上がり突帯状となる。歴博分類の白磁碗枢府系，森田分類Ｂ群，大宰府分類白磁坏Ｂ群に該当する。14世紀中頃～後半である。579・580はビロースクⅢ類の碗である。580は見込みに印花が押捺される。外面は無釉である。歴博分類白磁碗ビロースクタイプⅢ類に該当する。14世紀後半～ 15世紀前半である。

582は碗の底部である。高台は断面が三角形となる。外面は無釉であり，内面は蛇目釉剥ぎされる。福建産のものに類似する。時期は不明である。586は朝鮮白磁の碗である。抹茶用で，口縁部がわずかに外反する。

583は抉り高台の皿で，高台接地部分は無釉である。見込みにも目跡が残る。歴博分類白磁皿Ｂ群，森田分類Ｄ群に該当する。15世紀前半である。

581・585は端反の皿である。581は口縁部で端部が外反する。585は底部である。高台接地部分は，釉剥ぎがなされる。歴博分類白磁皿Ｃ１群に該当する。15世紀後半である。

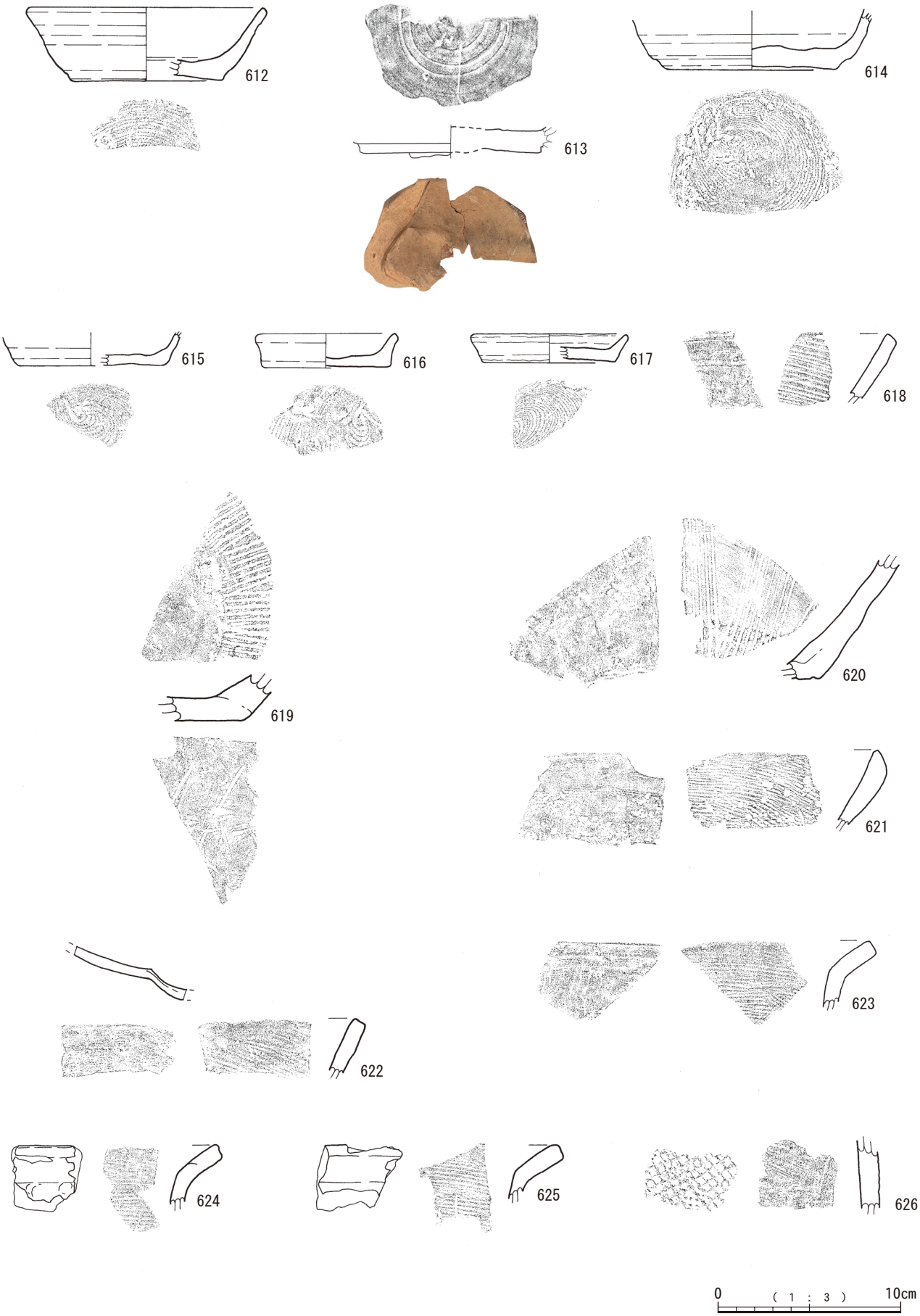
587は青白磁の瓶もしくは坏と考えられる。外面には鋸歯状の浮文が施される。馬上杯の可能性もある。588・589は青白磁の梅瓶と考えられる。588は透明感のあるミントグリーン系の釉薬が外面にかかるもので，数条の沈線と，同心円もしくは渦状の文様が描かれる。内面は無釉である。589は外面に浮文と沈線による文様が入る。時代は中世前半である。

⑦　青磁（第116図）

590は碗の底部である。高台は断面四角形で，高台の内外は無釉である。見込みには「有」もしくは「八月」などの可能性のあるスタンプが押捺される。歴博分類の龍泉窯系青磁碗Ａ類，大宰府分類龍泉窯系椀Ⅰ類に該当する。12世紀後半～ 13世紀初頭である。591は鎬蓮弁文碗の口縁部である。口縁はわずかに外反する。歴博分類の龍泉窯系青磁碗Ｂ１類，大宰府分類龍泉窯系椀Ｂ－１類に該当する。13世紀中頃～ 14世紀前半である。

592は皿の底部である。高台は細身でシャープなものであるが，釉が厚く掛かるためやや丸みを帯びる。見込みには，型押しによる浮彫りの魚文が施される。胴部上半を欠損するが，歴博分類の折縁皿の見込みに双魚文を施したものと考えられる。13世紀後半～ 14世紀前半である。

593・594は碗の口縁部である。口縁部が比較的シャープなつくりで釉は薄く透明感がある。歴博分類の龍泉窯系青磁碗Ｄ１類，上田分類Ｄ－１類に該当する。14世紀後半～ 15世紀前半である。595は碗の胴部である。外面は無文である。内面には，「Ｙ」字状の文様の一部が残存する。歴博分類の龍泉窯系青磁碗Ｄ２類，上田分類Ｄ－２類に該当する。15世紀中頃～後半である。596は歴博分類青磁内彎皿の口縁である。15世紀中頃である。597は碗の底部である。高台端部外面は，斜めに面取りをする。高台内面は無釉である。15世紀後半である。



第118図　中世遺構内の遺物㉘

第119図　中世遺構内の遺物㉙

598は皿の底部である。高台は断面方形で，底部外面の中央は無釉である。所属時期は15世紀と考えられる。

⑧　青花（第116図）

599は碗もしくは皿の口縁部である。口縁は外反し，内外面に界線が施される。釉の発色は青磁に近いものである。近世の可能性もある。

⑨　輸入陶器（第116図）

600は器種不明で口縁部が外反し、端部は下方に突出する。ほぼ無釉である。601は金華鉄店窯の壺で，口縁は外側に屈曲する。また，口縁上面は斜めに面取りをする。内外面とも施釉がなされる。602は磁竈窯の盤である。口縁部は屈曲し，「L」字状になる。口縁上面から外面屈曲部にかけて，釉薬を掻き取っている。

603は泉州窯系の黄釉盤である。黄釉が外面は底部近くまで，内面は全体に掛かる。604は器種不明で，底部に角高台をもつ。黒色・飴色の釉薬が，内面と胴部下半まで厚く掛かる。605は壺の底部である。外面には粗い砂粒が付着し，内外面黒色である。606は大型品の甕の底部である。中世前期の褐釉陶器の可能性がある。

⑩　滑石製品（第117図）

607 ～ 611は滑石製石鍋の転用品である。

607・608は筒状で中央に穿孔があり，沈子と考えられる。607は円筒状，608は方柱状である。石鍋の鍔部分の破片を再利用したものとみられる。609は底部の破片である。

610は胴部の破片である。断面を見ると擦り切り加工によって切り離されている。表面には擦り切り途中の溝が残る。611は石鍋の口縁部の破片で，鍔（横耳）が残っている。

イ　溝状遺構２号（第103・104図）

Ⅰ－51区からⅠ－57区のⅢ層上面で検出した。溝状遺構１号と並行する。Ⅰ－57区で一部が溝状遺構１号と直交するように分岐する。長軸がほぼ東西方向に延びており，長軸はN65°Eを示す。規模は，長さ62m，幅2.1 ～ 2.3mであり，東端と西端はともに調査範囲外に続く。検出面からの深さは，最深部で1.5mである。底面がほぼ平坦で断面形はすり鉢状になっている部分と，「V」字形に近い形状の部分がある。埋土は，南側から流れ込んだレンズ状堆積になる。Ⅱ～Ⅵ層の土が混ざった状態だが，埋土の層によってブロックで入っている土の状況が変わり，４～６枚に分かれていた。埋土は，混在土であり，堆積の状況から，溝構築時に掘り上げた土で南側に土塁を造っていた可能性がある。

出土遺物（第118・119図　612 ～ 639）

遺物は，土師器309点，瓦質土器16点，須恵器53点，国産陶器５点，白磁６点，青磁11点，輸入陶器１点，土器76点，滑石製品４点，金属製品１点が出土している。そのうち土師器７点，瓦質土器７点，須恵器４点，国産陶器１点，白磁２点，青磁２点，輸入陶器１点，滑石製品４点，金属製品１点を図化した。

①　土師器（第118図）

612 ～ 614は坏で、全て糸切り底である。612は口縁部内面に黒色部分があり，タール状の付着物がみられる。613の底面には粘土塊が付着しており，回転台からの切り離しが粗雑に行われた結果と考えられる。614はの底部切り離しは粗雑である。

615 ～ 617は糸切り底の小皿である。

②　瓦質土器（第118図）

618 ～ 622は擂鉢である。618は内面に斜位の強いハケ目を施す。619は底部である。内面に７条一単位の擂目を施す。620は内外面ともに黒色で，燻しが強いものである。擂目は８条一単位である。621は口縁部が山形で，内面に斜位のハケ目を施す。622は内面には斜位に強いハケ目が施され，注ぎ口がわずかに残る。他の擂鉢よりも焼成が良好で堅緻である。

623 ～ 625は鍋である。胴部から外方へと屈曲して口縁が開く。内面には，横方向のハケ目が施される。外面には指頭圧痕などが残る。

③　須恵器（第118・119図）

626 ～ 628は中世須恵器の甕である。内面にはハケ目が施される。外面には格子目タタキがみられる。

629は常滑産の甕である。外面にはわずかに自然釉が付着する。14世紀前半頃のものと考えられる。

④　白磁（第119図）

630は口禿皿の口縁部である。口縁部は釉剝ぎがなされる。歴博分類白磁皿Ⅸ類，大宰府分類の白磁皿Ⅸ類に該当する。13世紀後半～ 14世紀初頭である。631は内面には印花が入る。器壁は薄いが，胴部片のため器種は不明である。14世紀代と考えられる。

⑤　青磁（第119図）

632は鎬蓮弁文の碗の底部である。高台は断面四角形で，高台接地部分及び高台内面は無釉である。歴博分類龍泉窯系青磁碗Ｂ１類，大宰府分類青磁碗Ⅱ類に該当する。13世紀中頃～ 14世紀前半である。633は，同安窯（甫田窯）系の青磁皿である。胴部に屈曲部があり，口縁は外反しながら立ち上がる。見込みにはわずかに櫛描文が残る。歴博分類同安窯系皿，大宰府分類Ｄ期に該当する。12世紀後半～ 13世紀初頭である。

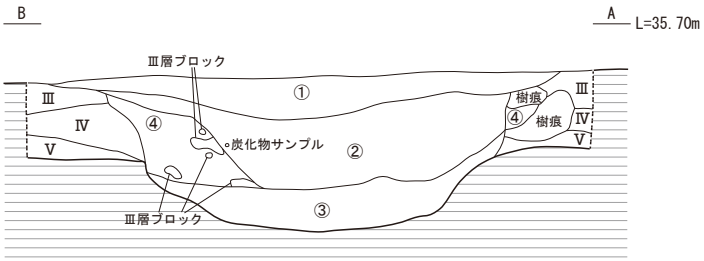
⑥　陶器（第119図）

634は輸入陶器の壺である。内外無釉で中世前半期と考えられる。

⑦　滑石製品・鉄製品（第119図）

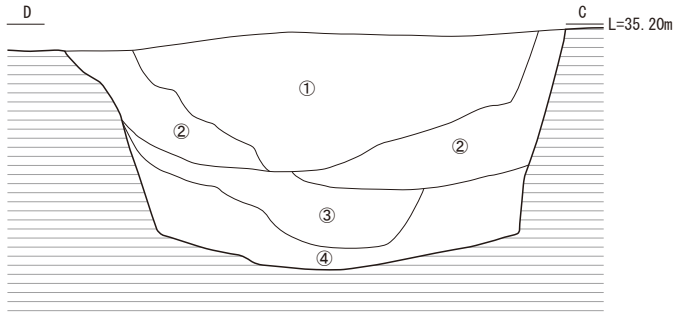
635 ～ 638は滑石製石鍋を転用した滑石製品である。635 ～ 638は筒状で中央に穿孔があることから，沈子と考えられる。636は中心軸に対して斜めに破損している。加工途中で，節理などの影響で破損した可能性がある。638は方柱状で，穿孔は２か所認められる。石鍋の鍔部

土層断面１



土層断面１
① 褐色砂質土(10YR４／４) しまりやや強く粘性やや弱い 白・赤色粒子，炭化物を少量含む
② 暗褐色砂質土(10YR３／４) しまりやや強く粘性やや弱い 白・赤色粒子，炭化物を少量含む
③ 暗褐色粘質土(10YR３／４) しまり弱く粘性やや弱い Ⅲ層ブロックを含む
④ 暗褐色粘質土(10YR３／４) しまり粘性ともにやや弱い 20cm程度のⅢ層ブロックを含む

土層断面２



土層断面２
① 極暗褐色砂質土(7.5YR２／３) しまりやや強く粘性やや弱い
② 暗褐色砂質土(10YR３／４) しまり粘性ともにやや弱い Ⅲ・Ⅳ層ブロック多く含む
③ 褐色粘質土(10YR４／６) しまり粘性ともに弱い Ⅳ～Ⅵ層ブロック多く含む
④ 褐色粘質土(10YR４／４) しまり粘性ともにやや弱い Ⅳ・Ⅴ層の混じり土 Ⅵ層ブロックを含む

0 (1 : 40) 2m

第120図 溝状遺構３号および断面１・２

分の破片を再利用したものとみられるが，穿孔に失敗した可能性が高い。637は台形状となった石鍋の胴部片を再利用したものと考えられる。穿孔が斜めに貫通しており，失敗品と考えられる。

639は方柱状の角釘である。「L」字状に折り曲げて，釘の頭としている。

ウ　溝状遺構３号（第120図）

E～I－58・59区のⅢ～Ⅵ層上面で検出した。I－58区で溝状遺構１号と直交する。長軸がほぼ北北西から南南東方向に延びており，長軸はN17°Wを示す。規模は，長さ35m，幅2.5～３mであり，北側は調査区内で，南側は溝状遺構１号と直交するところで立ち上がる。検出面からの深さは0.8～0.9mである。溝状遺構１・２号と違い断面形は，箱堀に近い形状である。埋土は，レンズ状堆積になっており，一定の方向からの顕著な流入は見られなかった。埋土はⅡ～Ⅵ層の土が混ざった状態で，４～６枚に分かれていた。遺構の最終段階の機能としては，道としての利用が考えられるが，①EF－59区，H－58区で検出した部分は幅が狭く，深い箇所がある。②溝状遺構１号に直行する，といった点から溝状遺構１号に関連し，構築段階では溝としての機能をもっていた可能性がある。

出土遺物（第121図　640～651）

遺物は，土師器18点，須恵器７点，国産陶器７点，白磁３点，青磁３点，輸入陶器２点，土器９点が出土している。そのうち瓦質土器２点，須恵器２点，国産陶器２点，白磁２点，青磁２点，輸入陶器２点を図化した。

640・641は瓦質土器の擂鉢である。640は口唇部が浅い溝状となる。内面には横方向に強いハケ目が施される。641は胴部で、内面に斜位の強いハケ目を施した後，縦方向の擂目を施す。擂目の単位は破損のため確認できない。

642・643は中世須恵器の甕である。中世前半期のものと考えられる。642は器壁が厚い。内面にはハケ目とナデが施される。外面には頸部以下に平行タタキが施される。643はの内面は瓦質化し，部分的にはじけたような痕跡がみられる。外面には，格子目タタキが施される。破片を円盤状に再加工した可能性がある。

644・645は瀬戸焼の壺の胴部片である。内面は無釉で、外面は透明感のある薄い緑色系の釉が施される。644は外面に４条の沈線を横方向に施す。中世前半期のものであり，13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられる。

646・647は白磁である。646は内湾する皿である。647は白磁の「面取杯」とされるものである。上面からみた形状が八角形で「八角杯」とも呼称される。体部の底部以下は無釉である。いずれも歴博分類白磁皿B群，森田分類D群に該当する。15世紀前半である。

648・649は龍泉窯系青磁である。648は口縁部が内湾する束口碗である。外面には横方向の沈線（界線）が４条みられる。内面には，劃花文とみられる文様が描かれる。14～15世紀である。649は幅広蓮弁の碗である。歴博分類龍泉窯系青磁碗B２類，上田分類B－Ⅱ類に該当する。14世紀後半～15世紀中頃である。

650・651は輸入陶器の甕と考えられる。内外面とも施釉される。650は内外面に白色の釉薬が掛かる。651の底面には粗い砂粒が付着する。

エ　溝状遺構４号（第122・123図）

D～I－63・64区のⅢ～Ⅵ層上面で検出した。遺跡の調査範囲を縦断する。D～F区にかけては長軸がほぼ北北西に延びるが，F・G区境辺りから南東方向に延びている。規模は，長さ56m，幅2.5～４mであり，北端と南端はともに調査範囲外に続く。検出面からの深さは0.9～1.4mである。断面形は溝状遺構３号に類似している。部分的に，溝状遺構１号のような段をもつ。埋土は，レンズ状堆積になっており，溝状遺構１・２号ほどではないが，西側から流れ込んでいる傾向が見られた。埋土はⅡ～Ⅵ層の土が混ざった状態で，４～５枚に分かれていた。遺構の機能としては，溝状遺構１・３号と同じような利用が考えられる。

溝状遺構４号に関連する遺構として溝内で，集積１基，石列２列を検出した。

（ア）集積３号（第124図）

H－63・64区の底面付近で検出した。長さ約１m，幅0.4mの範囲で，６個の礫と瓦質土器４点が出土した。被熱している状況や掘り込みなどはなかった。用途は不明である。

（イ）石列３（第125図）

G－64区の床面付近で検出した。全長は約7.3mで大小44個の礫と瓦質土器が数点出土した。南北に走る溝の東側壁に沿うように礫が分布している。西側の壁付近には礫は出土していない。用途は不明である。

（ウ）石列４（第125図）

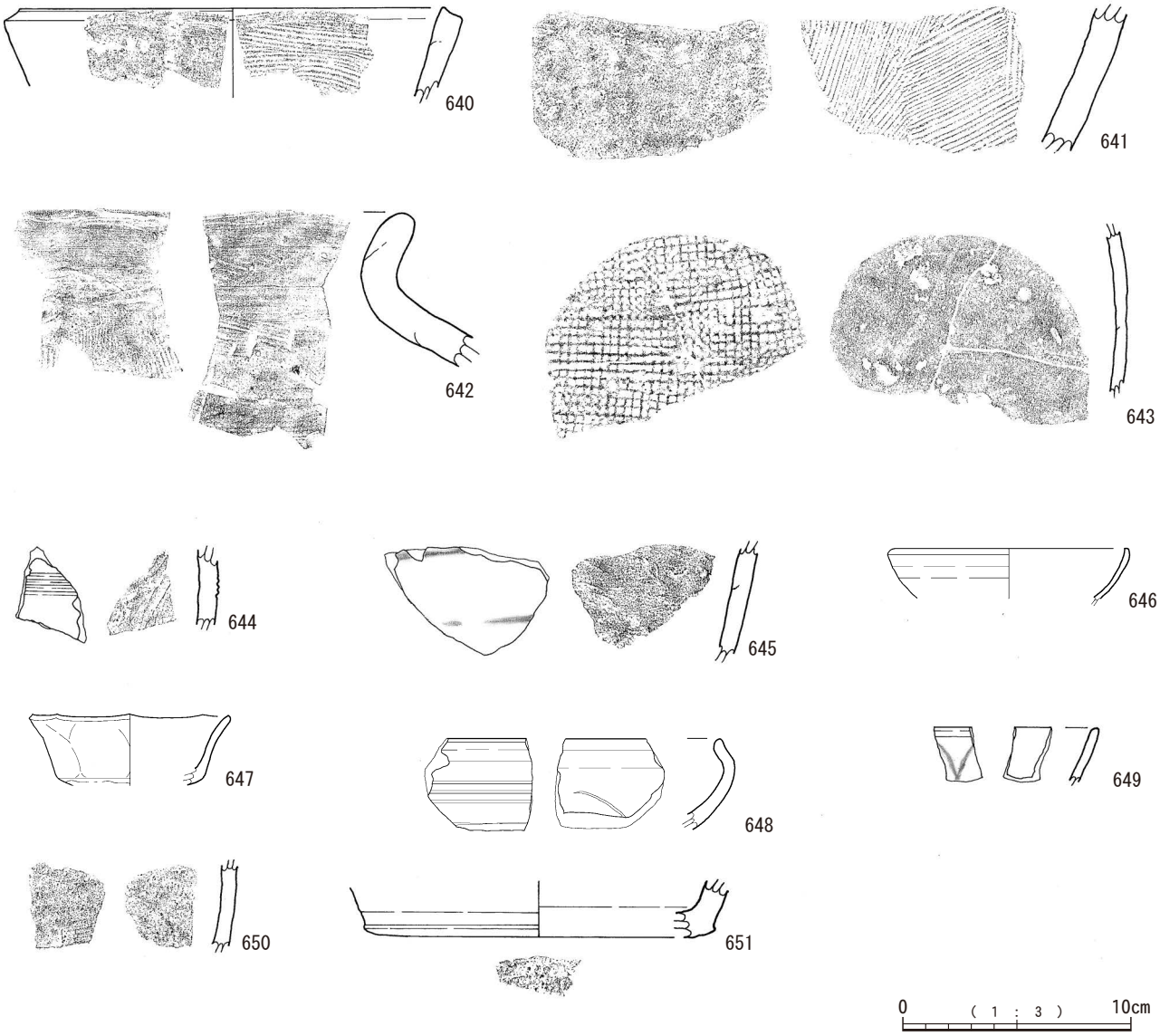
G・H－63区の西壁の段になっている部分で検出した。全長は約３mで大小16個の礫が出土した。石列の南側は底面が高く盛り上がって，溝が浅くなっている部分がある。石列３とは反対に，東壁には礫が出土しなかった。用途は不明である。

出土遺物（第126図　652～691）

遺物は，土師器119点，瓦質土器20点，須恵器24点，国産陶器14点，白磁19点，青磁26点，青花４点，輸入陶器５点，土器19点が出土している。そのうち土師器２点，瓦質土器15点，須恵器６点，国産陶器５点，白磁４点，青磁５点，青花２点，輸入陶器１点を図化した。

①　土師器（第126図）

652・653は土師器小皿である。体部の様相から，中世



第121図　中世遺構内の遺物㉚

前半期のものと考えられる。底部には糸切り痕が残る。

②　瓦質土器（第126・127図）

654は器種不明である。上端は内面に小さく突出し，下端は平坦に成形されている。器壁が厚く，内面には，連続した溝状の線刻を施す。酸化焼成のため，色調は赤みを帯びる。655は器種不明である。非常に厚手で，大型品の一部の可能性がある。

656は鉢で，口縁部の一部を薄く作っている。内外面ナデ調整で，外面には指頭圧痕が残る。657は湯釜の体部上半である。外側には，鐶付が貼り付けられている。鐶付の頂部は欠損する。

658は風炉の口縁部付近である。上下に横方向の沈線を施し，その中を斜位の連続した沈線で充填し，施文帯とするものである。659は大型の浅鉢であると考えられる。口縁部を外側に屈曲させ，水平の鍔状とする。内面はわずかに突出させる。外面の口縁部下には，菊花文のスタンプを連続して押捺する。内面はハケ目を施す。

660～668は擂鉢である。660は口縁部に注ぎ口がつくものである。661は口唇部が浅い溝状となり，胴部内面に６条一単位のハケ目を施す。662は口唇部が山形となり，須恵質で焼成が良い。内面に細かいハケ目を施す。663は口唇部が平坦で，内面に斜位の強いハケ目を施す。664は外面に縦位の粗いハケ目，内面に斜位の強いハケ目を施す。

665～668は擂鉢の胴部である。擂目は，665が５条一単位，666が９条一単位，667・668は７条一単位である。

③　須恵器（第127図）

669～673は中世須恵器の甕である。中世前半期のも

のと考えられる。669は胴部外面に縦位のハケ目，内面に斜位と横位のハケ目を施す。670は外面に格子目タタキが施される。画質焼成のため，内外面ともに黒色化している。671は全体的に白色で，表面は粉っぽい。外面には大きめの山形状のタタキ，内面にはナデが施される。672・673は外面に山形状のタタキが丁寧に施される。内面には強めのハケ目が残る。

④　東播系須恵器（第127図）

674は片口鉢である。口縁部は直立して山形となり、注ぎ口が１か所残っている。内面と口縁部外面には自然釉が付着する。

⑤　国産陶器（第127・128図）

675 ～ 678は常滑焼で甕である。675は，口縁部を折り返して帯状に肥厚させている。内面は横ナデを施す。外面には自然釉が付着する。中野編年の７期（14世紀初頭から前半）に該当すると考えられる。676・677は外面には自然釉が掛かる。678は底部外面をヘラケズリによって成形している。底面は未調整で、内面はナデ調整を施す。

679は備前焼の擂鉢である。口縁端部に浅い沈線を１条施す。重根編年のⅡＡ期（12世紀末～ 13世紀前半）に該当する。

⑥　白磁（第128図）

680 ～ 682･684は皿である。680は口縁が内湾し、外面の体部下半は無釉である。見込みには粗い砂粒が付着する。684も同型式である。681は高台に４か所の抉りが入る。見込みには目跡が残る。全体的に黒色化しているため，二次焼成を受けた可能性がある。680・681・684は，歴博分類白磁皿Ｂ群，森田分類Ｄ群に該当する。15世紀前半である。682は口縁部が外反する。歴博分類白磁皿Ｃ１群，森田分類Ｅ群に該当する。15世紀後半である。

⑦　青磁（第128図）

683は龍泉窯系青磁碗の底部である。見込みには，ヘラ状工具で片切彫りの劃花文が描かれる。歴博分類龍泉窯系青磁碗Ａ類，大宰府分類龍泉窯系青磁椀Ⅰ類に該当する。12世紀後半～ 13世紀前半である。685は龍泉窯系鎬蓮弁文の碗である。口縁はわずかに外反する。歴博分類龍泉窯系青磁碗Ｂ１類，大宰府分類青磁碗Ⅱ類に該当する。13世紀中頃～ 14世紀前半である。686は龍泉窯系青磁碗で，外面に線描き蓮弁文を施す。見込みは無釉である。胎土・釉などの特徴から，福建産の可能性が高い。歴博分類龍泉窯系青磁碗Ｂ４類に該当する。15世紀後半～ 16世紀前半である。687は龍泉窯系青磁の無文碗である。歴博分類龍泉窯系青磁碗Ｄ１類に該当する。14世紀後半～ 15世紀前半である。688は短頸壺の口縁部と考えられる。中世前半期とみられる。

⑧　青花・輸入陶器（第128図）

689は漳州窯系の碗である。口縁部の内外面には，界線が巡り，外面には花卉文が描かれる。外面の底部以下は無釉である。690は景徳鎮系の皿である。口縁部の内外面には，界線が施される。外面には浮草文とみられる文様が描かれる。歴博分類染付皿Ｅ群に該当する。16世紀中頃～後半である。

691は輸入陶器の胴部片で，盤もしくは鉢の可能性がある。内外面ナデ調整を施す。中世前半期と考えられる。

オ　溝状遺構５号（第129図）

Ｇ－64区からＧ－67区のⅥ層上面で検出した。長軸がほぼ東西方向に延びており，長軸はＮ55°Ｅを示す。規模は，長さ36m，幅0.5 ～ 0.6mであり，西側は溝状遺構４号に直交し，東側は本年度調査範囲外に続く。検出面からの深さは最深部で0.3mである。底面がほぼ平坦で断面形はすり鉢状になっている。埋土は，レンズ状堆積になる。Ⅱ～Ⅵ層の土が混ざった状態だが，２面に分かれていた。他の溝状遺構とは異なり幅が狭く浅い。排水用や区画溝として造られた可能性がある。

出土遺物（第130図　692 ～ 694）

遺物は，土師器24点，瓦質土器３点，須恵器２点が出土している。そのうち土師器１点，瓦質土器２点を図化した。

692は完形の土師器坏である。底部には糸切り痕が残る。平面形はややゆがみがあり，口縁部も弱い波状となる。底部には亀裂が入る。内外に煤が付着している。

693・694は瓦質土器の擂鉢である。693は口縁部に注ぎ口がみられる。外面はナデ調整を行い指頭圧痕が顕著に残る。内面は斜位のハケ目を施した後，縦方向に擂目を施す。擂目は９条一単位である。694は外面にナデ調整を施し，内面には斜位のハケ目を施した後，縦方向の擂目を施す。擂目は９条一単位である。

カ　溝状遺構６号（第131図）

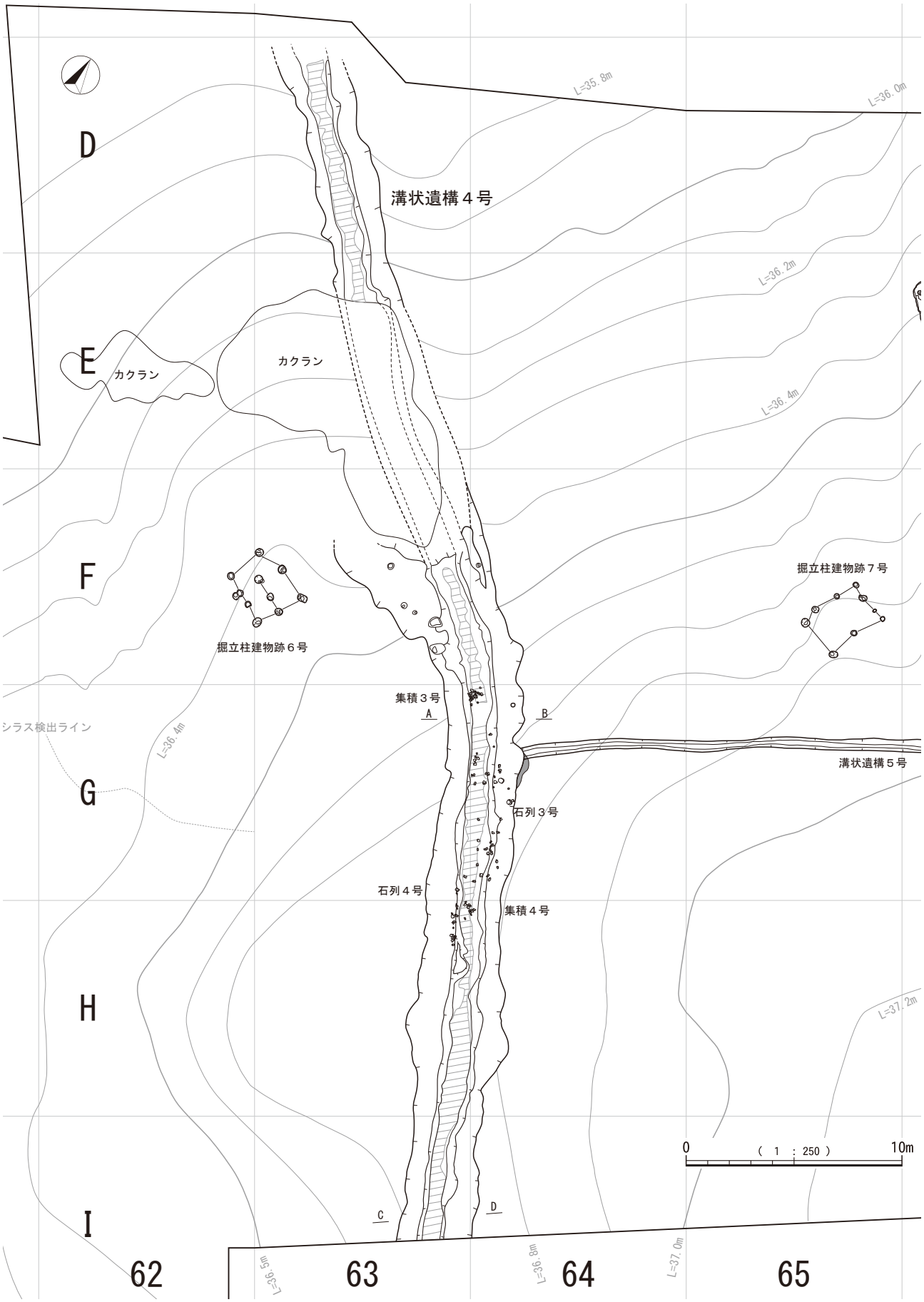
Ｄ・Ｅ－67 ～ 69区のⅥ層上面で検出した。平面形は，長軸が北北東から南南西方向に延びており，主軸はＮ25°Ｅを示す。規模は，長さ22m，幅1.4 ～ ４mであり，東端は調査範囲外に続く。検出面からの深さは1.3mである。深く掘り込んでいる場所や，底面が安定せず，断面形は凹凸が激しい。埋土は，レンズ状堆積になる。Ⅱ～Ⅵ層の土が混ざった状態だが，３枚に分かれていた。流路や道跡としての利用ではなく，溝としての使用が考えられる。

出土遺物（第133図　695 ～ 715）

遺物は，土師器27点，瓦質土器20点，須恵器22点，国産陶器８点，白磁６点，青磁19点，青花７点，輸入陶器４点，土器15点，金属製品１点が出土している。そのうち瓦質土器４点，須恵器３点，国産陶器５点，青磁１点，輸入陶器１点，金属製品１点を図化した。

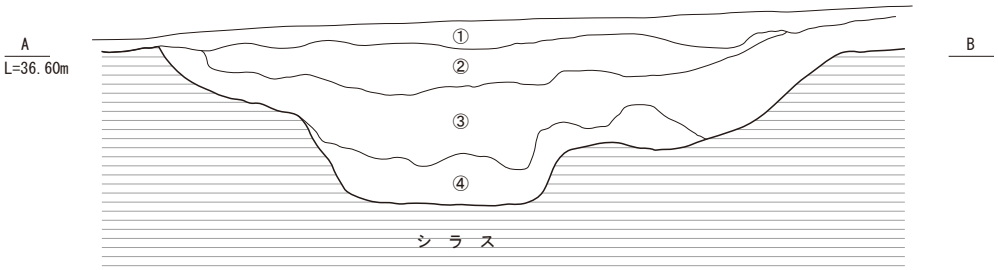
①　瓦質土器（第133・134図）

695 ～ 699は擂鉢である。695は口縁端部が平坦で，外



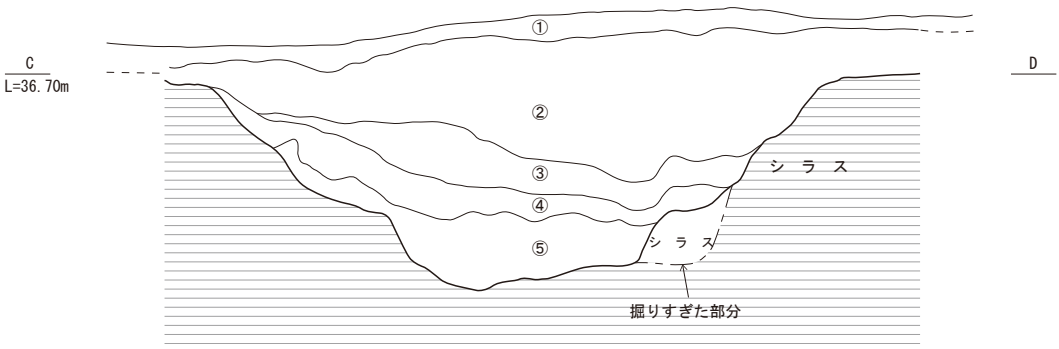
第122図　溝状遺構４号平面図

土層断面１

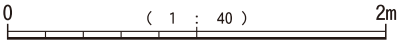


土層断面１
① 暗褐色砂質土(7.5YR３／３) しまりあり粘性弱い 白・赤色粒子を含む
② 褐色砂質土(10YR４／６) しまり強く粘性弱い 白色粒子を多く含む
③ 褐色粘質土(10YR４／６) しまり弱く粘性強い 白・赤色粒子を少量含む
④ 褐色粘質土(10YR４／６) しまり弱く粘性強い Ⅴ・Ⅵ層ブロック多く含む

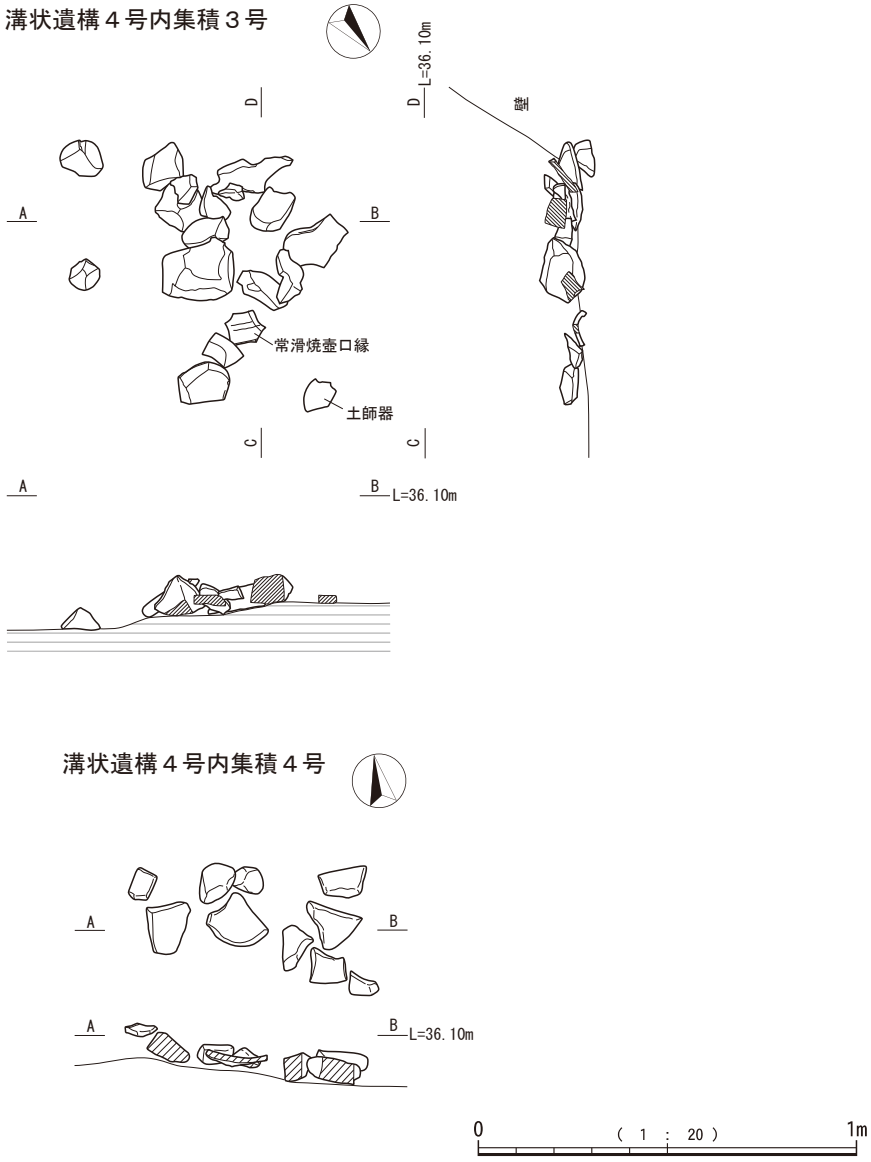
土層断面２



土層断面２
① 暗褐色砂質土(7.5YR３／３) しまり強く粘性弱い 白・赤色粒子を含む
② 褐色砂質土(10YR４／６) 褐色砂質土(10YR４／６) しまり強く粘性弱い 白・赤色粒子を多く含む
③ 褐色砂質土(10YR４／６) しまりやや弱く粘性あり 白色粒子を少量含む
④ 褐色粘質土(10YR４／６) しまり弱く粘性強い Ⅵ層ブロックを含む
⑤ 褐色粘質土(10YR４／６) しまり弱く粘性強い Ⅵ層ブロックを多く含む



第123図 溝状遺構４号断面１・２



第124図　溝状遺構４号内集積３・４号

面はナデ調整，内面は斜位のハケ目の後，縦方向の擂目が施される。擂目は９条一単位である。焼成は土師質に近い。697は口縁部断面が山形となる。内外面ナデ調整を施し，内面の擂目は９条一単位である。色調は赤褐色で焼成は堅緻である。698は口縁部に注ぎ口があり，内面に10条の擂目が残る。

696・699は底部である。外面は指オサエ・ナデののちに底部付近は横方向のヘラケズリがなされる。内面は斜位のハケ目後，縦方向の擂目が施される。擂目の単位は，696が11条，697が10条である。

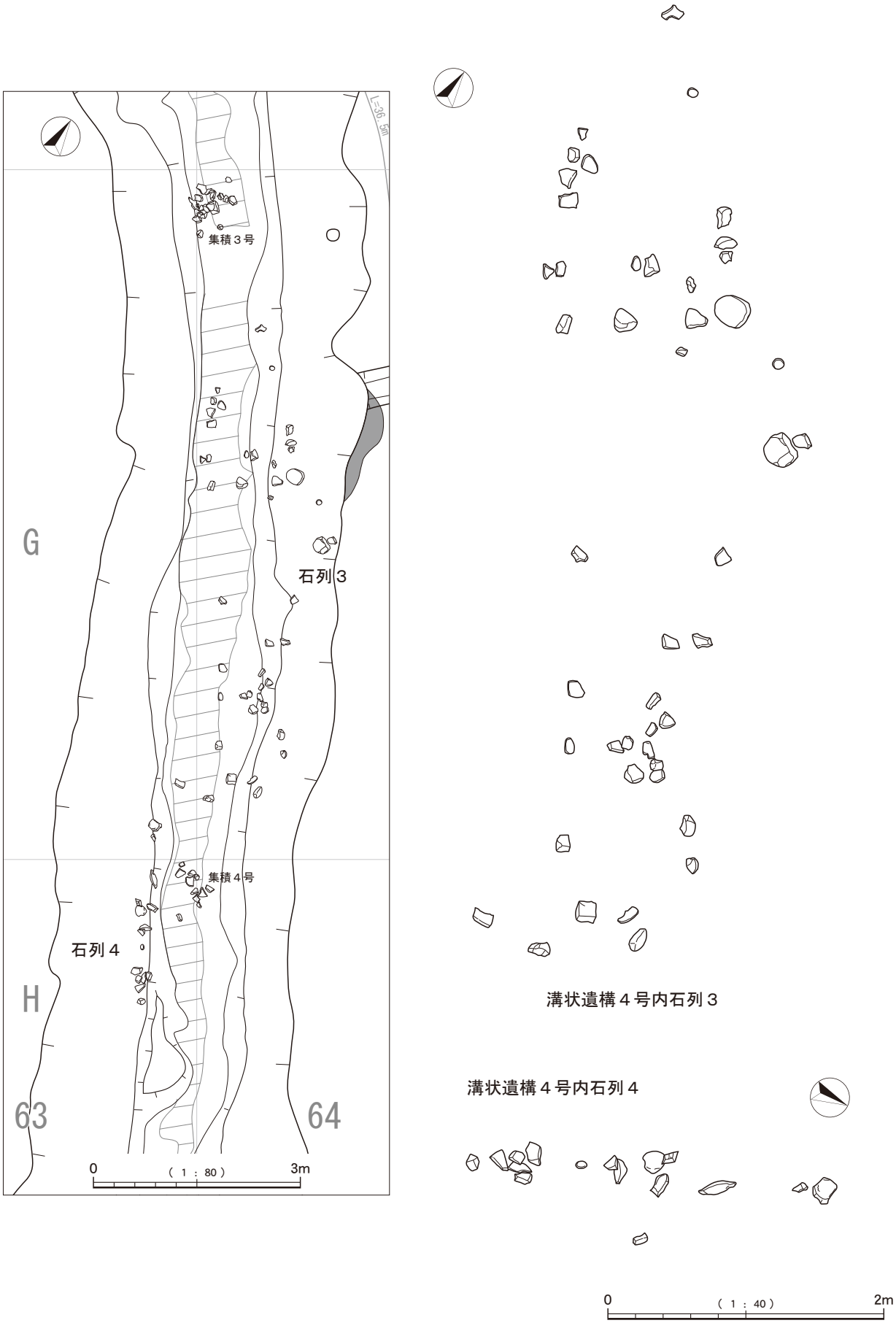
700は壺である。口縁部を平坦に拡張し，内外面ナデ調整を施す。701は湯釜である。球状の体部から，口縁部が内傾して直立する。胴部外面には，菊花文が押捺される。胴部内面はハケ目が施される。705は火鉢もしくは風炉である。菊花文が上下２条の突帯間に巡る。706は大型品の底部である。穿孔が１か所みられる。

②　須恵器（第133・134図）

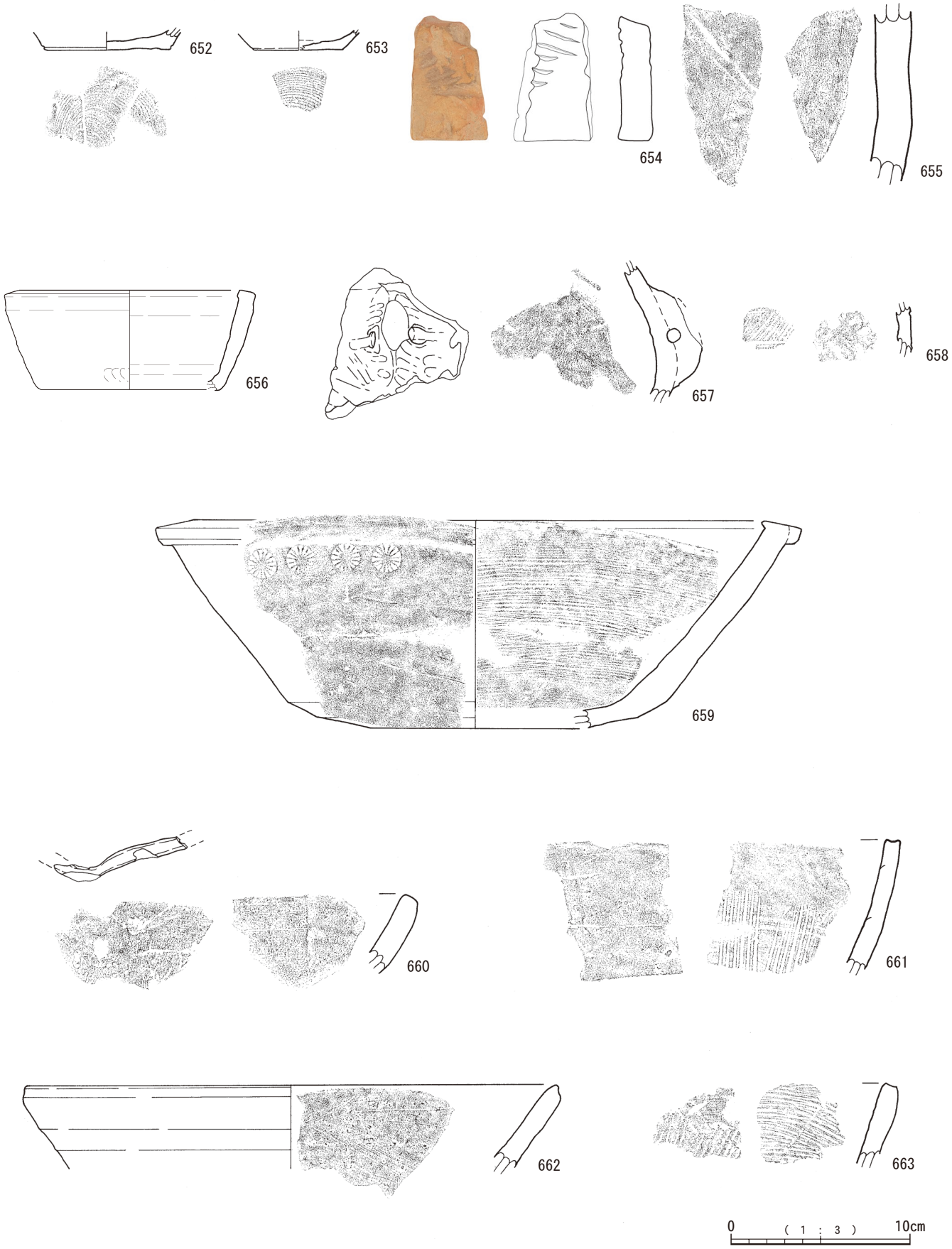
702は甕の口縁部が外方へと屈曲する。胎土は白色土と灰色土がマーブル状となる。703は底面のみの破片である。内面にはヘラケズリの痕跡が残る。器種は不明である。704は胴部で，外面には山形状のタタキ，内面は幅広のハケ目が施される。

③　国産陶器・輸入陶器（第134図）

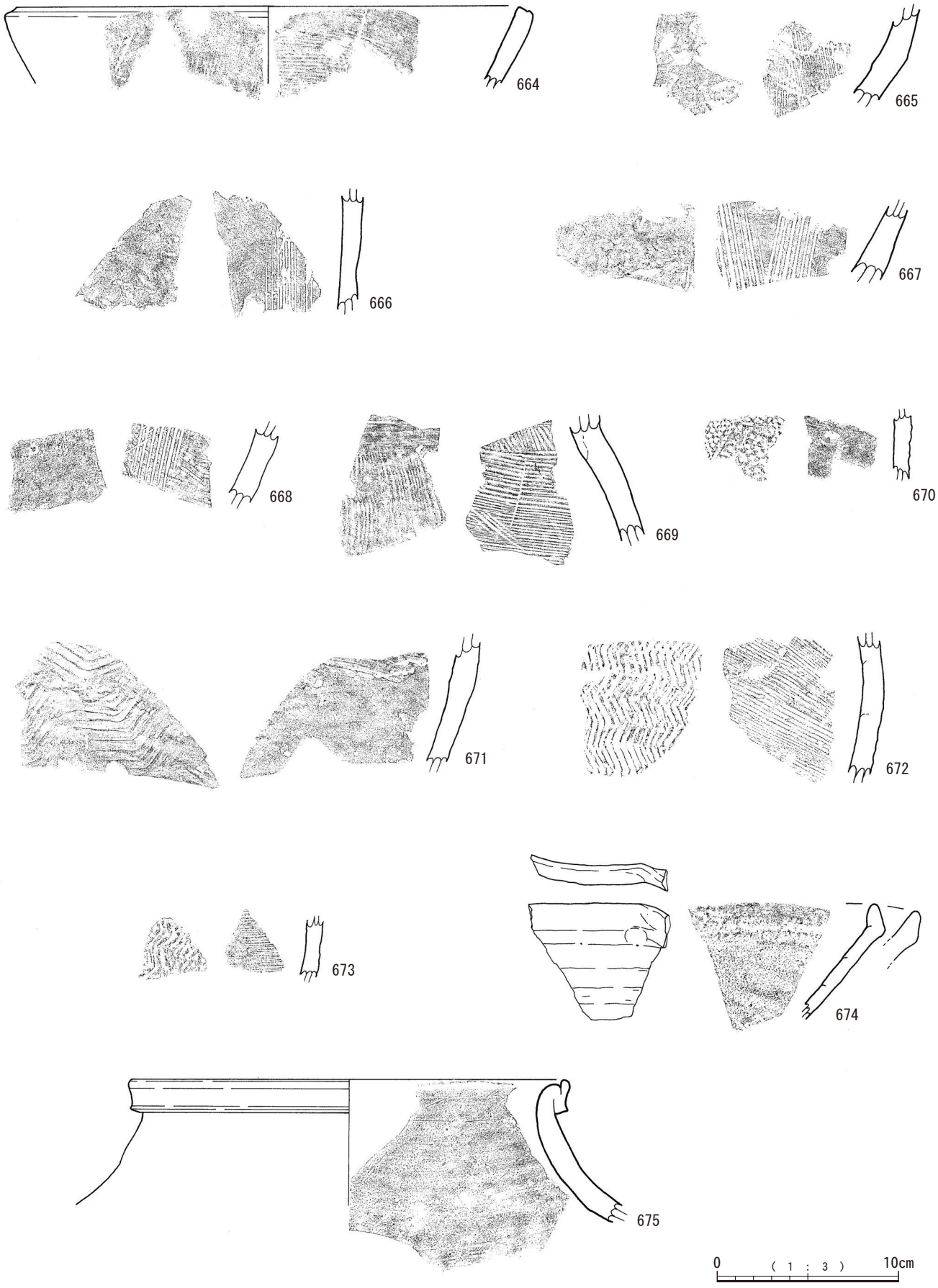
707は擂目が確認できないが，擂鉢と推測される。口唇部は平坦で溝状となる。近世のものと考えられる。708は備前焼の擂鉢である。709は羽釜の口縁部の可能性



第125図　溝状遺構４号内石列３・４

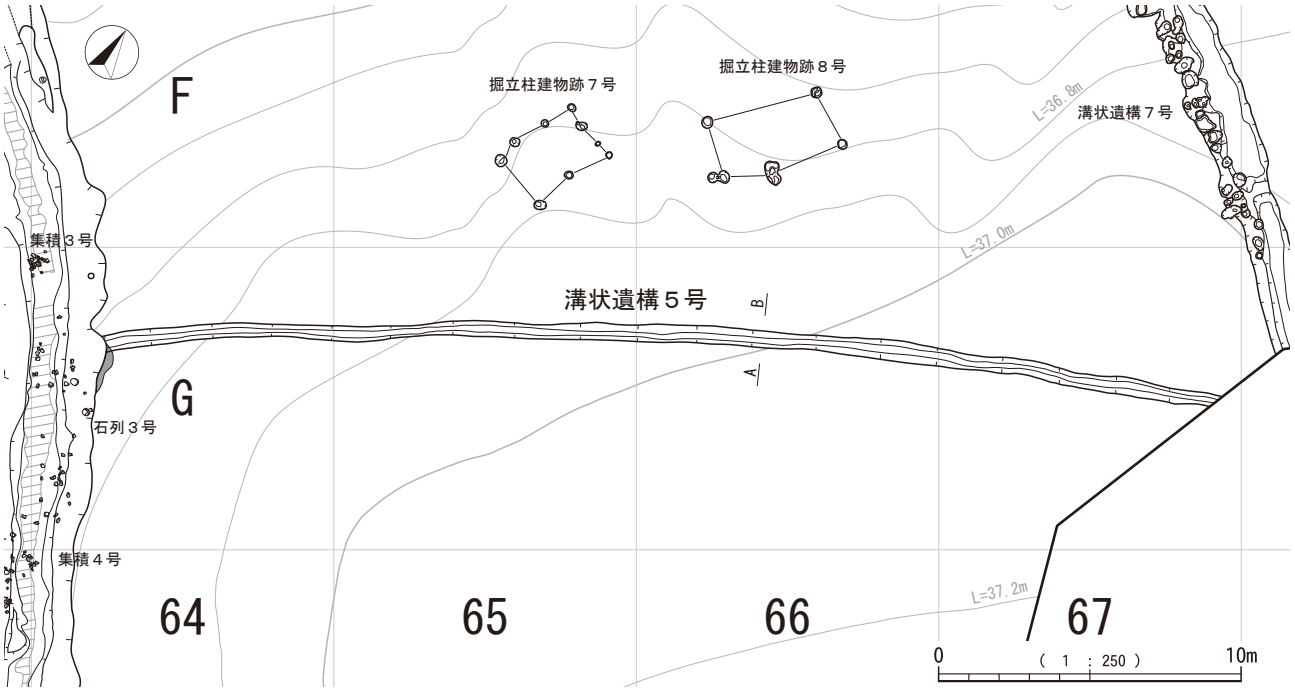


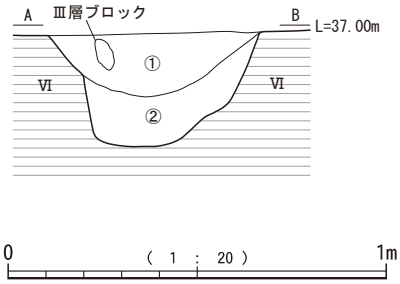
第126図　中世遺構内の遺物㉛



第127図　中世遺構内の遺物㉜

第128図　中世遺構内の遺物㉝





① 黒褐色砂質土(10YR２/３) しまり強く粘性弱い 白・赤色粒子，シラスブロックを含む
② 暗褐色粘質土(10YR３/４) しまり弱く粘性あり 白・赤色粒子を含む

第129図 溝状遺構５号および断面

がある。口縁端部は玉縁状で，胎土は土師質で浅黄色である。

710は輸入陶器の甕である。胴部内外面に黒褐色の釉が掛かる。器壁は薄く，沖縄分類褐釉陶器Ⅴ類に類似する。

④ 白磁・青磁・青花（第134図）

711は白磁の皿である。低く小さな高台が底部の端を巡る。高台端部は露胎となる。時期は16世紀後半以降と考えられる。712は内湾皿とみられる。外面には釉が厚く掛かり不明瞭であるが，蓮弁文が施される。口縁端部はわずかに内側へ突出する。歴博分類青磁内彎皿に該当すると考えられる。15世紀中頃である。

713は青花の蓮子碗である。歴博分類染付碗Ｃ群に該当する。15世紀後半～ 16世紀前半である。714は，陶器の鉢である。産地は不明。

⑤ 金属製品（第134図）

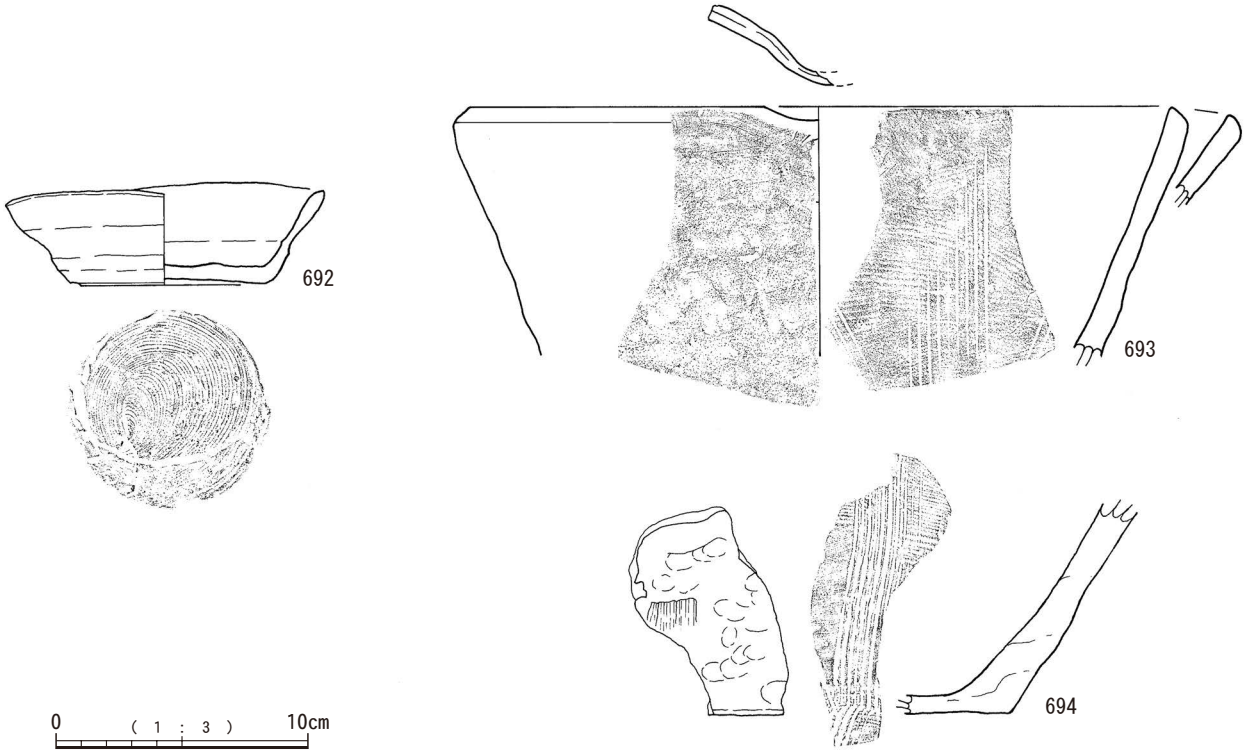
715は青銅製の用途不明品である。平面形が楕円形で，裏面は凹凸があり，未貫通の孔が３か所あいている。厚みがあり，重量感がある。

キ 溝状遺構７号（第131図）

Ｅ～Ｇ－67・68区のⅥ層上面で検出した。長軸が北西から南東方向に延びており，主軸はＮ57°Ｗを示す。規模は，長さ15m，幅0.5 ～２ｍであり，南東端は調査範囲外に続く。検出面からの深さは最深部で0.3mである。底面がほぼ平坦で断面形は皿状になっている。埋土は，Ⅱｂ層の土で自然堆積したと考えられる。他の溝状遺構と違い遺構の集中するピットを検出した。

出土遺物（第135図 716 ～ 720）

遺物は，土師器８点，瓦質土器７点，須恵器３点，国産陶器２点，土器３点が出土している。そのうち土師器１点，瓦質土器２点，須恵器１点，国産陶器１点を図化した。



第130図　中世遺構内の遺物㉞

716は土師器の坏である。底部には糸切り痕が残る。内外面に煤が付着している。717・719は瓦質土器の擂鉢である。717の口唇部は平坦で，中央が溝状となる。外面はナデ調整。内面は斜位のハケ目を施した後，縦方向に擂目を施す。擂目は全体を確認できないが一単位６条以上とみられる。719は底部である。外面はナデ調整，内面は丁寧なナデ調整後，放射状の擂目を施す。擂目は８条一単位である。

718は備前焼の擂鉢と考えられる。口縁部は山形で，口唇部に自然釉が掛かる。内面は縦方向の擂目が施される。擂目は破損のため，全体を確認できないが一単位６条以上とみられる。重根編年のⅣＡ期（14世紀前半から15世紀前半）に該当すると考えられる。

720は中世須恵器の甕である。外面には山形状のタタキ，内面にはナデが施される。

ク　溝状遺構８号（第136図）

Ｄ・Ｅ－71区のⅢ層上面で検出した。長軸が南南東から北北西方向に延びており，主軸はＮ13°Ｗを示す。規模は，長さ10m，幅２～３ｍであり，北北西側は調査範囲外に続く。検出面からの深さは0.15mである。底面がほぼ平坦で断面形は皿状になっている。埋土は，Ⅱｂ・Ⅲ層の土で自然堆積したと考えられる。検出面から浅いのは，削平の影響と考えられる。

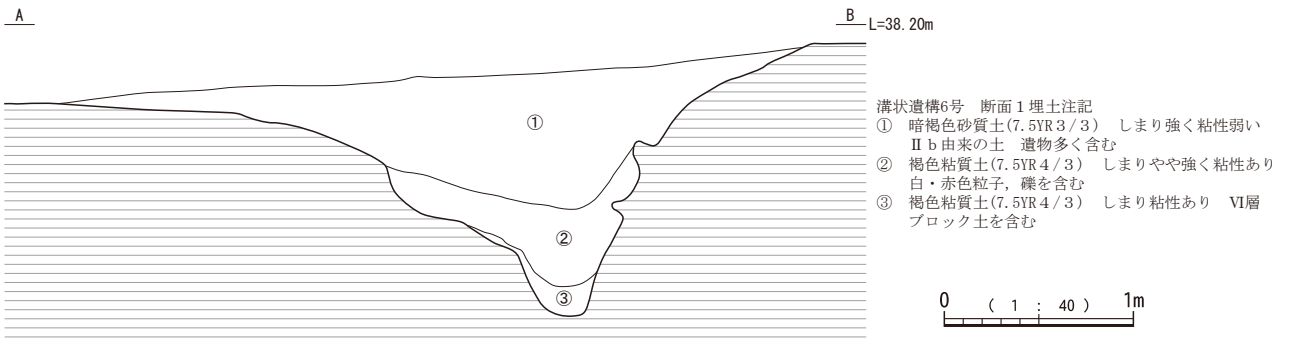
出土遺物（第137図　721・722）

出土遺物は，土師器１点，須瓦質土器２点，恵器１点，土器１点である。そのうち瓦質土器１点，須恵器１点を図化した。

721は瓦質土器の擂鉢である。外面は底部付近に横方向のヘラケズリを行う。内面は斜位のハケ目の後，擂目が施される。擂目は11条一単位である。

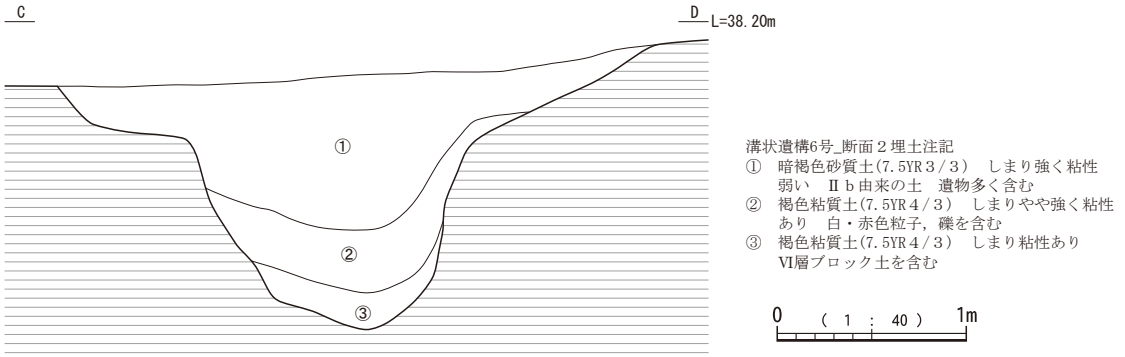
722は中世須恵器の甕である。頸部から肩部の破片で，外面には山形状のタタキが施される。内面は，ハケ目・ナデが横方向に施される。

溝状遺構６号土層断面１

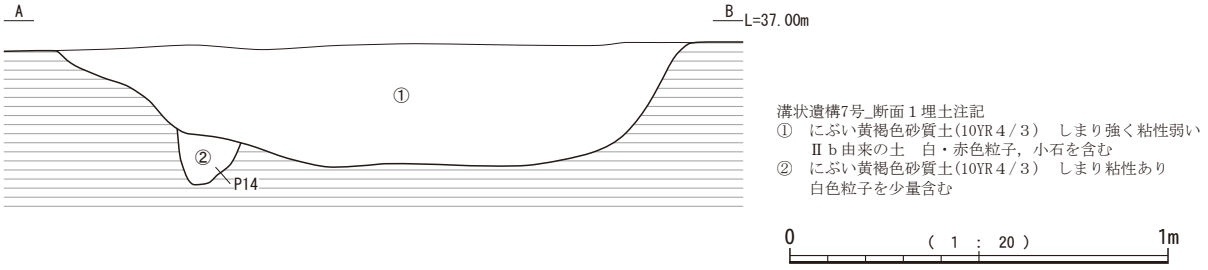


第131図　溝状遺構６・７号および６号断面１

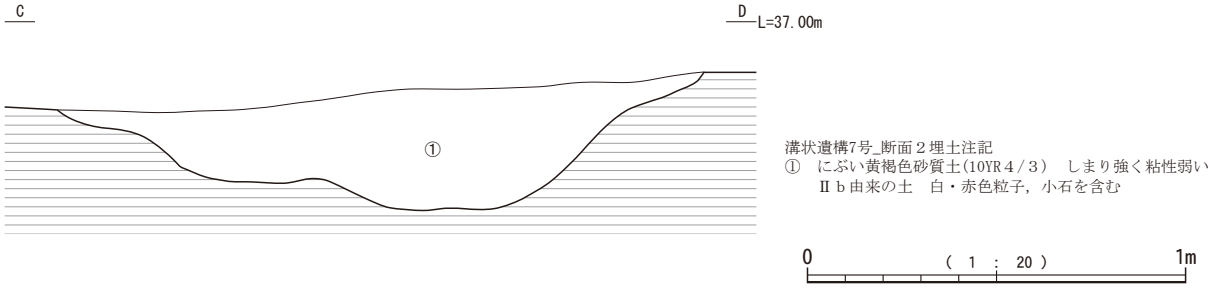
溝状遺構６号土層断面２



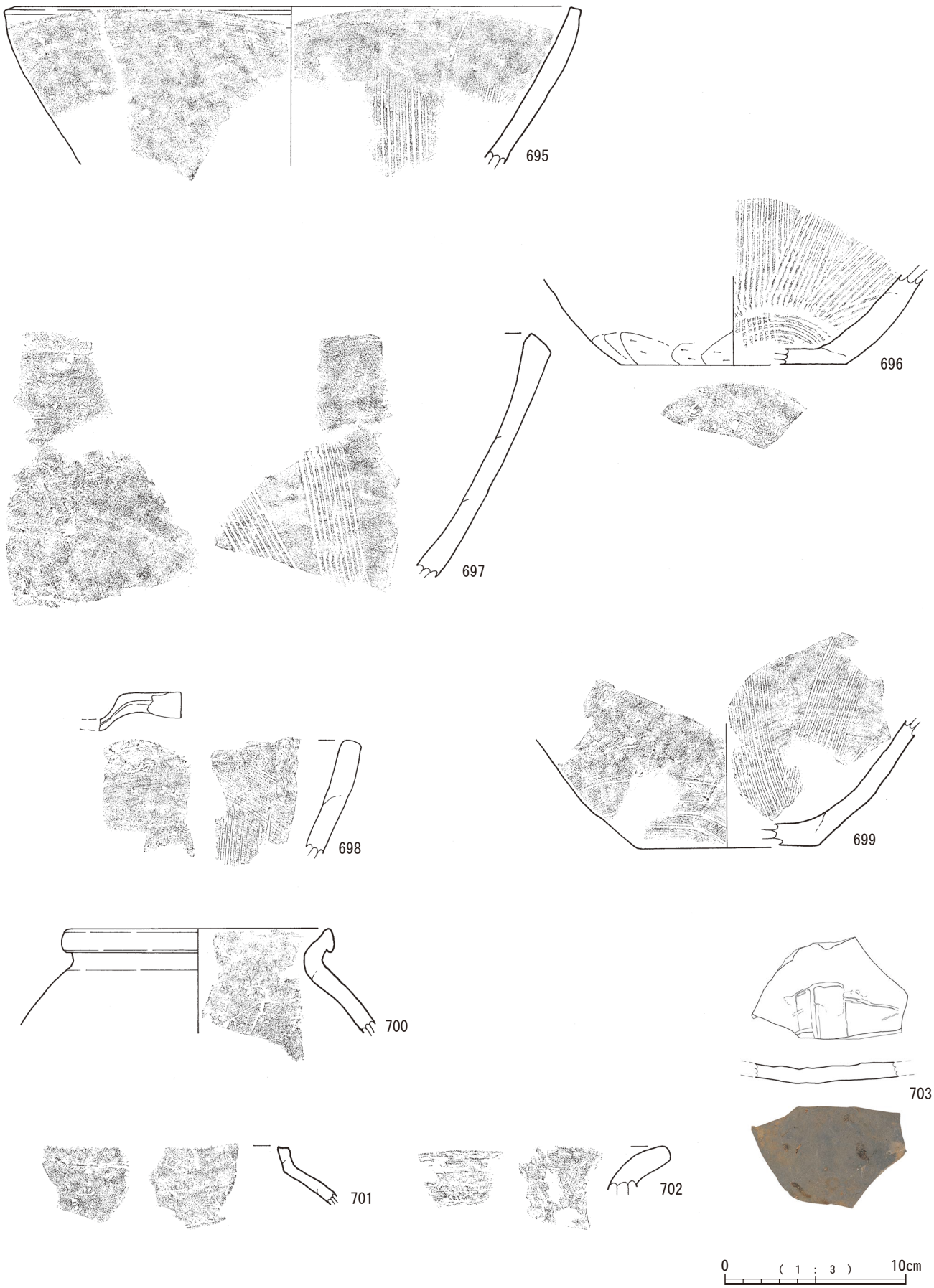
溝状遺構７号土層断面１



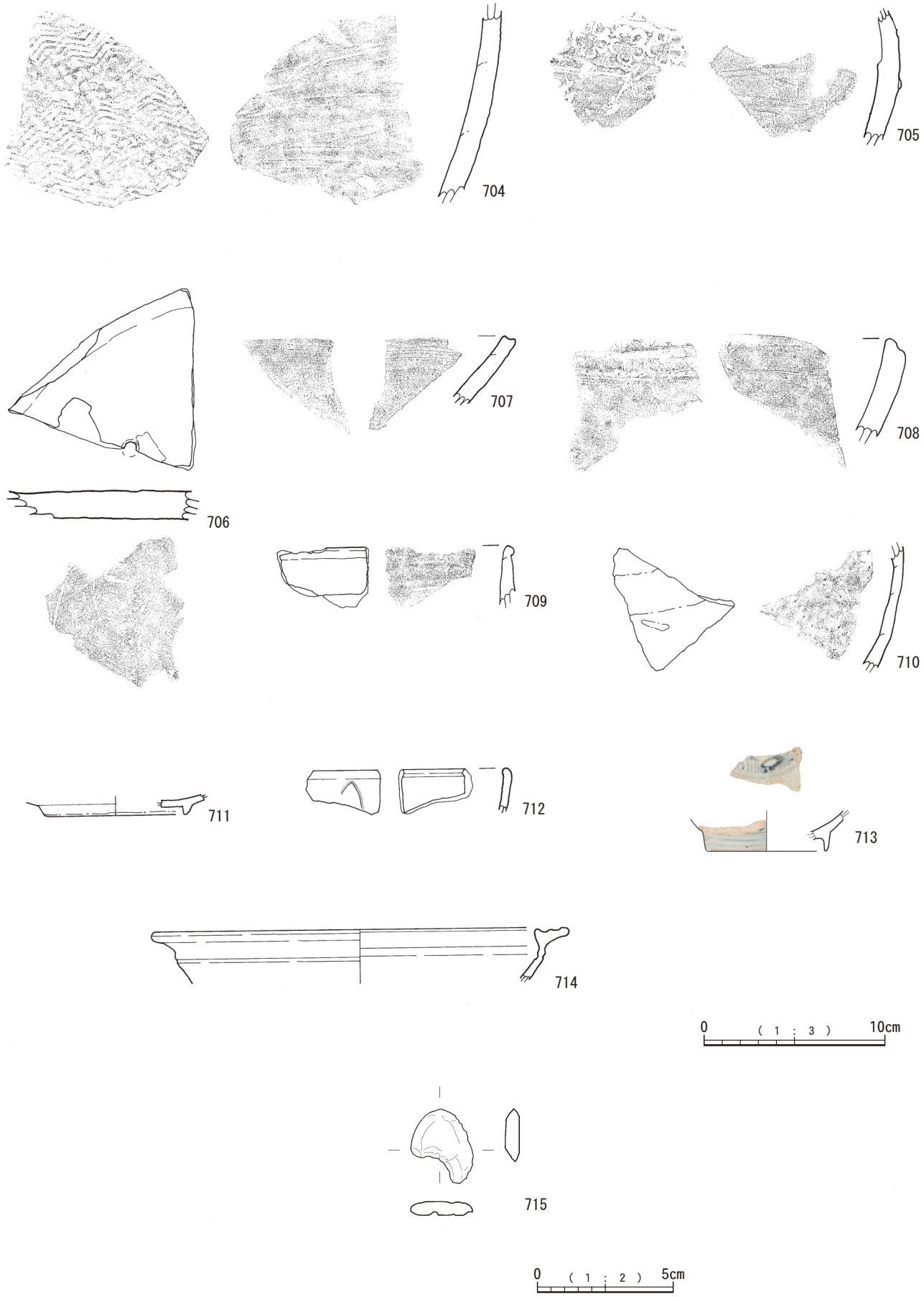
溝状遺構７号土層断面２



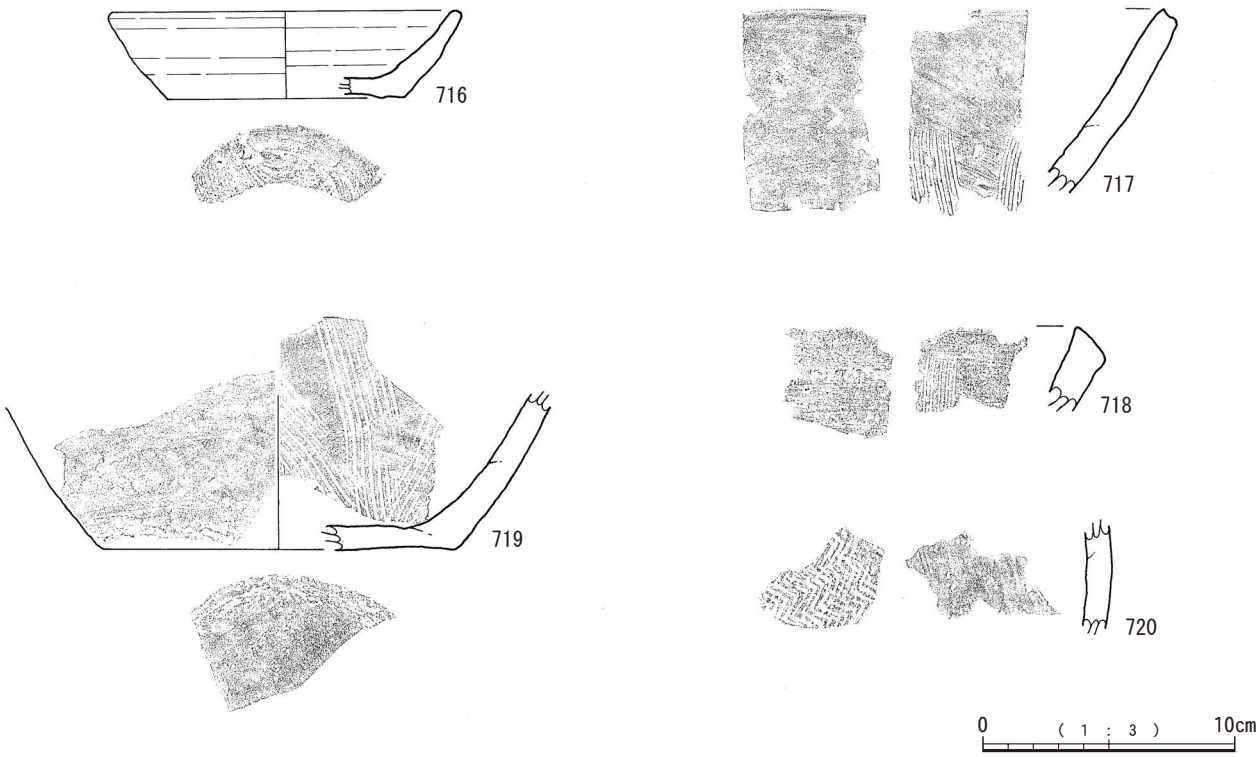
第132図　溝状遺構６号断面２および７号断面１・２



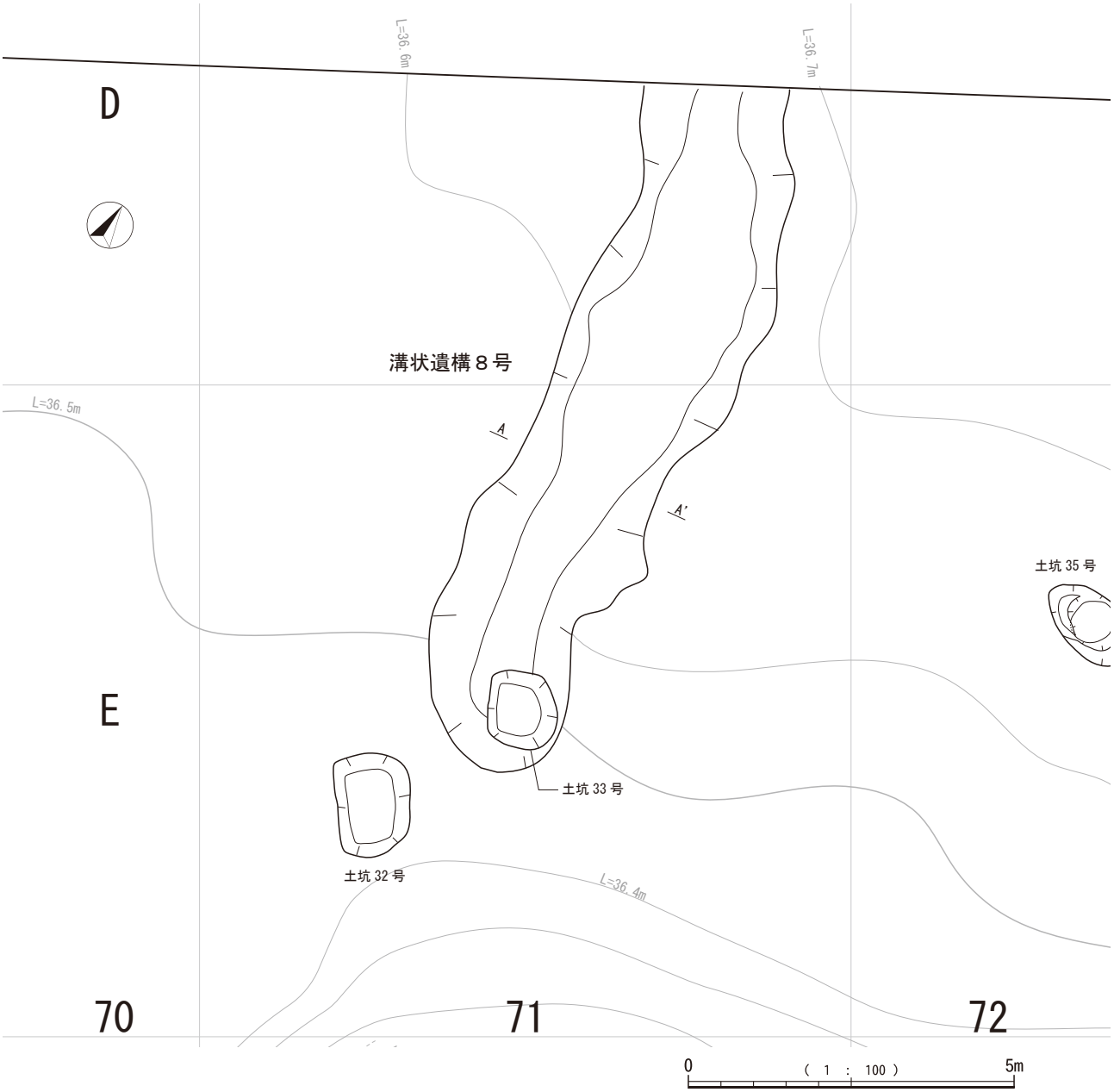
第133図　中世遺構内の遺物㉟

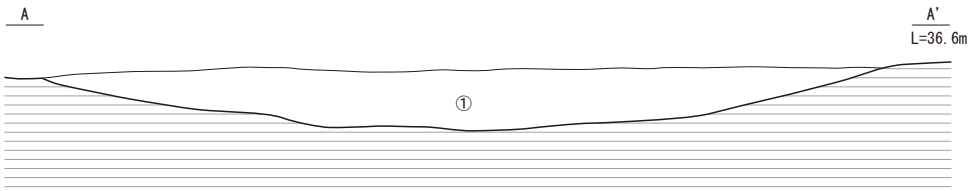


第134図　中世遺構内の遺物㊱



第135図　中世遺構内の遺物㊲

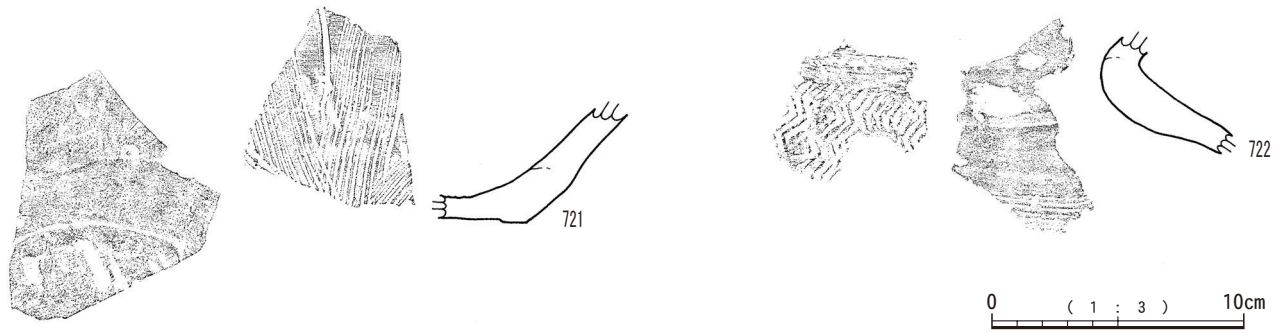




① 褐色粘質土(7.5YR４／４) しまり粘性ともにやや強い 白・赤色粒子を各10%，シラスを30%含む
※磁器片や須恵器の遺物片が多数出土

0 (1 : 20) 1m

第136図 溝状遺構８号および断面



第137図　中世遺構内の遺物㊳

第22表　中世遺構内出土遺物観察表(1)

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	出土区	出土地点	層位	部位	法量(cm) ※重量は備考欄 口径	底径	器高	文様・器面調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	歴博分類	取上番号	備考
69	445	土坑２号	土師器	坏	F	45	マ1	底部	-	(9.2)	-	ナデ	ナデ	橙	橙	白粒，黒粒，石英 角閃石	-	-	
	446	土坑２号	土師器	坏	F	45	マ1	胴～底部	-	(7.2)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，石英 長石	-	-	
	447	掘立柱建物跡１号	土師器	坏	G	45	マ	口縁部	(13.0)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，長石	-	P7	
	448	土坑２号	瓦質土器	壺	F	45	マ1	口縁部	(29.6)	-	-	－	－	灰白	灰白	白粒，白色小石	-	-	
	449	土坑２号	瓦質土器	擂鉢	F	45	マ1	底部	-	-	-	ヘラケズリ・工具ナデ	ナデ	灰白	灰白	黒粒，白色小石	-	-	
	450	土坑２号	瓦質土器	擂鉢	F	45	マ1	底部	-	-	-	工具ナデ・ケズリ・ナデ	ナデ	灰白	灰白	黒粒，石英	-	-	
	451	掘立柱建物跡１号	瓦質土器	擂鉢	G	44	マ	胴～底部	-	(10.2)	-	ハケナデ・ナデ	ハケナデ	灰白	灰白	白粒，黒粒，石英	-	P15	
	452	土坑２号	瓦質土器	羽釜	F	45	マ1	口縁部	-	-	-	ナデ・ハケナデ	ハケ	灰	灰	赤粒，小石，石英 長石，角閃石	-	-	
	453	土坑２号	白磁	皿	F	45	マ1	口縁～底部	10	3.2	2.7	-	-	浅黄	灰白	-	B	-	15c 前
	454	土坑２号	白磁	碗	F	45	マ1	底部	-	6.2	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	-	-	14c 後～ 15c 前
	455	土坑２号	青磁	碗	F	45	マ１	口縁～胴部	15	-	-	-	-	-	灰白	-	-	-	
	456	掘立柱建物跡１号	青磁	碗	F	44	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	B１	P24	13c 中～ 14c 前
71	457	掘立柱建物跡２号	土師器	坏	G	45	マ	口縁～底部	(7.2)	6	2.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	黒粒，白粒，灰粒	-	P27	
	458	掘立柱建物跡２号	土師器	坏	G	46	マ１	口縁～底部	12	8.4	3.4	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤粒，黒粒，白粒	-	P22	14c 後～ 15c 中
	459	掘立柱建物跡２号	土師器	皿	G	45	マ	底部	-	(9.2)	-	－	回転ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒，黒粒 長石	-	P11	
	460	土坑３号	瓦質土器	甕・鉢	G	46	マ1	胴部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ユビオサエ	褐灰	にぶい黄橙	赤粒，白粒，石英	-	SX2-2	
	461	掘立柱建物跡２号	青白磁	蓋	G	46	マ	蓋	※底径 (7.0)	-	-	-	-	透明釉・灰白	明緑灰	-	-	P22	12c ～ 13c
	462	掘立柱建物跡２号	青磁	碗	G	46	マ	口縁～底部	(11.0)	-	-	-	-	浅黄	浅黄	-	-	P24	時期判断は困難であるが15c の可能性
76	463	掘立柱建物跡７号	土師器	碗・坏	F	65	マ	口縁～胴部	(13.4)	-	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	赤粒，白粒 赤色小石	-	P6	
81	464	掘立柱建物跡11号	土師器	坏	E	74	I	底部	-	(8.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	灰黄褐	白粒，灰粒，長石	-	P10	
	465	掘立柱建物跡11号	須恵器	甕	E	73	I	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ・ナデ	灰	灰	白粒，長石	-	P2	
	466	掘立柱建物跡11号	須恵器	甕	E	73	I	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	精良	-	P18	
	467	掘立柱建物跡11号	須恵器	甕	E	73	I	口縁部	(18.0)	-	-	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ・工具ナデ	灰	灰	精良，石英	-	P18	
	468	掘立柱建物跡11号	青磁	皿	E	73	I	口縁～底部	(11.8)	5.8	2.7	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-		P18	16c 中葉～後半
	469	掘立柱建物跡11号	青磁	碗	E	74	I	胴部	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰	-	B４	P10	15c 後～ 16c 前
	470	掘立柱建物跡11号	青磁	皿	E	74	I	口縁～胴部	(11.6)	-	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	P10	15c 中
	471	掘立柱建物跡11号	青磁	壺	E	73・74	I	双耳環	-	-	-	-	-	明オリーブ灰	明オリーブ灰	-	-	P8	15c
	472	掘立柱建物跡11号	銅銭	洪武通宝	E	73・74	-	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P2	
83	473	掘立柱建物跡12号	瓦質土器	擂鉢	F	74	I	口縁部	(33.1)	-	-	ナデ・ユビオサエ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒，長石	-	P14	
	474	掘立柱建物跡12号	瓦質土器	擂鉢	F -	74 -	I マ	口縁～胴部	(35.2)	-	-	ナデ・ユビオサエ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒，長石，角閃石	-	3012	溝状遺構６号内遺物と接合
	475	掘立柱建物跡12号	瓦質土器	擂鉢	F	74	I	口縁部	-	-	-	ナデ・ユビオサエ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤粒，長石	-	P14	
	476	掘立柱建物跡12号	陶器	香炉	F	73	I	口縁部	-	-	-	-	-	褐灰	明赤褐	-	-	P17	17c 後
	477	掘立柱建物跡12号	白磁	皿	F	74	I	口縁～胴部	(10.0)	-	-	-	-	-	-	-	B	P6	15c 前

第23表　中世遺構内出土遺物観察表(2)

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	出土区	出土地点	層位	部位	法量 (cm) 口径	底径	器高	文様・器面調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	歴博分類	取上番号	備考
84	478	竪穴建物跡1号	土師器	坏	E	66	マ1	口縁～底部	(13.6)	(10.6)	2.6	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	黒粒，灰粒，石英長石，角閃石	-	SI7-6	13c
	479	竪穴建物跡1号	須恵器	甕	E	66	マ2	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ	灰	灰	白粒，黒粒，長石	-	-	
	480	竪穴建物跡1号	須恵器	甕	E	66	マ2	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ	灰黄	黄灰	白粒，灰粒，長石角閃石	-	SI7-5	
	481	竪穴建物跡1号	須恵器	甕	E	66	マ2	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ	橙	橙	白粒，黒粒，小石長石，角閃石	-	SI7-10	中世
	482	竪穴建物跡1号	白磁	碗	E	66	Ⅱ	底部	-	(5.0)	-	-	-	灰白	灰白	-	Ⅸ	SI7	13c 中頃～14c 初頭
	483	竪穴建物跡1号	青磁	碗	E	66	マ2	口縁部	-	-	-	-	-	オリーブ灰	オリーブ灰	-	B 1	SI7-9	13c 中葉～14c 前半
	484	竪穴建物跡1号	鉄製品	鍋	E	66	Ⅱb～Ⅲ	口縁部	(3.5)	(7.8)	0.45	-	-	-	-	-	-	-	※重量19.6 g
85	485	土坑4号	白磁	碗	E	44	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	Ⅸ	-	13c 中頃～14c 初頭
	486	土坑5号	土師器	Ⅲ	F	44	Ⅲ上	口～底部	(8.0)	(6.2)	2.1	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	白粒，黒粒，長石	-	-	
	487	土坑5号	滑石製品	-	F	44	Ⅲ上	-	-	幅1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	※重量6.6 g
87	488	土坑10号	須恵器	鉢	F	45	マ	胴部	-	-	-	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	灰白	灰白	白粒，灰粒，角閃石	-	-	
	489	土坑10号	陶器	碗	F	45	マ	胴部	-	-	-	-	-	褐	褐	-	-	-	
88	490	土坑11号	土師器	坏	H	45	マ	胴～底部	-	(6.4)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	白粒，黒粒，長石	-	-	
	491	土坑11号	瓦質土器	擂鉢	H I	45 46	Ⅱb	口縁部	-	-	-	ナデ，ユビオサエ	ハケメ・ナデ	黄灰	黄灰	白粒，白色小石	-	-	
	492	土坑11号	須恵器	甕	H H	46 45	マ1	胴部	-	-	-	ハケメ・タタキ	ハケメ	黄灰	灰白	長石，角閃石	-	-	
	493	土坑11号	青磁	碗	H	45	マ	口縁～底部	(15.1)	5.4	6.5	-	-	-	-	-	D 1	-	14c 後半～15c 前半
88	494	土坑11号	石製品	砥石	H	45	マ	-	12.0	3.4	2.9	-	-	-	-	-	-	-	※重量209.0 g
89	495	土坑13号	土師器	坏	H	45	マ	胴～底部	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	橙	白粒，黒粒，長石	-	-	14c 後～15c 半頃？
	496	土坑13号	青磁	碗	H	45	マ	口縁部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	B 1類	-	13c 中葉～14c 前半
91	497	土坑15号	土師器	Ⅲ	F	46	マ	完形	8	6.2	2.2	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	白粒，灰粒，小石長石	-	-	
	498	土坑15号	陶器	碗	F	46	マ	口縁～胴部	-	-	-	-	-	褐	褐	-	-	-	
92	499	土坑16号	金属製品	鉛玉	H	46	マ	完形	1.3	1.4	1.2	-	-	-	-	-	-	-	※重量12.7 g
93	500	土坑18号	石製品	茶臼	H	46	マ	-	38.2	29	12.3	-	-	-	-	-	-	－	重量15620.1 g
94	501	土坑19号	瓦質土器	火鉢	I	45	Ⅱb	口～底部	(54.0)	(33.3)	10.1	重画文のスタンプ	ハケメ	黒褐	黒褐	-	-	SX5-458	
	502	土坑19号	瓦質土器	風炉	I	45	Ⅱb	脚部	-	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	灰	灰白	-	-	SX5-459	
	503	土坑19号	瓦質土器	擂鉢	H	45	Ⅱb	胴部	-	-	-	ハケメ・指頭圧痕	ハケメ・ナデ	灰白	灰白	白粒，黒粒，灰粒長石	-	326	
	504	土坑19号	陶器	甕	I	45	マ	底部	-	(17.6)	-	-	-	灰黄	灰黄	-	-	462	
	505	土坑19号	青磁	碗	I	45	Ⅱb 下 マ	口～胴部	(16.2)	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	D 1	SX5-462	14c 後半～15c 前半
97	506	土坑27号	須恵器	擂鉢	E F	68 69	I Ⅱ	口縁～胴部	-	-	-	ナデ	ハケメ・ナデ	褐灰	灰白	白粒，石英	-	-	
	507	土坑27号	須恵器	甕	F	69	マ	胴部	-	-	-	タタキ	ナデ	灰	灰	白粒，角閃石	-	-	
98	508	土坑32号	須恵器	甕	E	71	マ	頸部	-	-	-	格目タタキ	ナデ	灰白	灰白	白粒，灰粒，長石角閃石	-	-	
	509	土坑32号	須恵器	甕	E	71	I	頸部	-	-	-	マメツ	マメツ	灰白	灰白	白粒，石英，長石	-	-	
99	510	土坑33号	銅製品	傘釘	E	71	I	-	1.15	1.25	0.95	-	-	-	-	-	-	SK1004-3	※重量0.8 g
	511	土坑33号	銅製品	古銭	E	71	I	完形	2.9	2.6	1.1	-	-	-	-	-	-	SK1004-1	※16.4 g
	512	土坑34号	土師器	坏	E	72	マ	底部	-	(8.0)	-	マメツ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤粒，黒粒，長石	-	-	
	513	土坑34号	須恵器	甕	E	72	I	胴部	-	-	-	格目タタキ	ハケメ	橙	淡赤・橙	石英，長石，角閃石	-	-	
	514	土坑34号	須恵器	甕	E	72	I	胴部	-	-	-	タタキ	ハケメ	灰	灰	灰粒，石英	-	-	
100	515	土坑35号	土師器	Ⅲ	D	72	Ⅱb	口縁～底部	(7.6)	(4.6)	1.6	マメツ	マメツ	橙	橙	白粒，白色小石長石	-	-	
	516	土坑35号	須恵器	甕	E	72	マ	胴～底部	-	(22.0)	-	タタキ	ハケメ・ナデ	灰	灰	白粒，黒粒	-	-	
101	517	土坑36号	土師器	坏	E	72	Ⅱ	口縁～底部	(13.4)	(10.6)	3.5	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	白粒，黒粒，長石	-	-	
110	518	溝状遺構1号	土師器	坏	H	56	マ2	口縁～底部	(11.2)	(9.5)	2.5	ヘラケズリ	ヘラケズリ	浅黄橙，灰白	浅黄橙，灰白	白粒，赤色小石白色小石，長石	-	-	
	519	溝状遺構1号	土師器	坏	I	56-58	マ	底部	-	(9.0)	-	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒，長石	-	-	中世前半
	520	溝状遺構1号	土師器	坏	I	59	マ1	胴～底部	-	(8.0)	-	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙	橙	赤粒，黒粒，長石	-	4027	
	521	溝状遺構1号	土師器	坏	H	51·52	マ2	口縁～底部	(12.0)	(8.4)	3.9	回転ヨコナデ	ユビナデ，ヘラナデ	明赤褐	明赤褐	白粒	-	-	
	522	溝状遺構1号	土師器	坏	H	51·52	マ2	口縁～底部	(12.4)	(7.8)	3.3	回転ヨコナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	白粒，灰粒，小石	-	-	
	523	溝状遺構1号	土師器	坏	H	51	マ2	口縁～底部	(11.8)	(8.2)	3.1	ヘラナデ	ヘラナデ，ユビオサエ	橙	橙	白粒	-	-	
	524	溝状遺構1号	土師器	坏	H H H	52 51-52 54	マ2	口縁～底部	(12.5)	7.6	3.3	回転ヨコナデ	工具ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰粒，石英，長石角閃石	-	-	
	525	溝状遺構1号	土師器	Ⅲ	H G·H	56 52-55	マ2 マ	口縁～底部	8.2	6.3	1.6	ケズリ	ヘラケズリ	浅黄橙	浅黄橙	白粒，赤色小石石英，長石	-	-	16c 代
	526	溝状遺構1号	土師器	Ⅲ	H	52	マ2	口縁～底部	9	7.4	1.8	ヘラケズリ	ヘラケズリのち指ナデ	橙	橙	白粒，灰粒，長石角閃石	-	-	16c 代
	527	溝状遺構1号	土師器	Ⅲ	H	56	マ	口縁～底部	(8.4)	6.6	1.8	ヘラケズリ	ヘラケズリのち指ナデ	橙	橙	黒粒，長石	-	-	中世前半
	528	溝状遺構1号	土師器	Ⅲ	G·H H	52-55 54	マ マ2	口縁～底部	(10.6)	(8.2)	1.3	ヘラケズリ	ヘラケズリ	橙	橙	白粒	-	-	中世前半
	529	溝状遺構1号	土師器	Ⅲ	H	54	マ2	口縁～底部	(9.0)	(7.2)	1.7	ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒粒，白色小石	-	-	16c 代
	530	溝状遺構1号	土師器	Ⅲ	I	59	マ3	底部	-	(4.0)	-	ヘラケズリのち指ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	淡橙	白粒，白色小石石英	-	5062	16c 代以降
	531	溝状遺構1号	土師器	坏・Ⅲ	H	54	マ2	口縁～胴部	-	-	-	-	-	灰白	灰白	灰粒，白色小石	-	-	

第24表　中世遺構内出土遺物観察表(3)

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	出土区	出土地点	層位	部位	法量 (cm) 口径	底径	器高	文様・器面調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	歴博分類	取上番号	備考
110	532	溝状遺構１号	土師器	甕	I	59	マ3	胴部	-	-	-	平行タタキ	ヘラケズリ	にぶい橙	淡橙	赤粒，黒粒，小石 石英	-	5120	古代
	533	溝状遺構１号	瓦質土器	擂鉢	I	59	マ3	口縁～胴部	-	-	-	ユビオサエ	スリ目	淡黄	淡黄	-	-	5173	
	534	溝状遺構１号	瓦質土器	擂鉢	H･I	56-58	マ	口縁部	-	-	-	ハケメ・ナデ	ハケメ・スリ目	黄灰	オリーブ黒	白粒，石英	-	-	
	535	溝状遺構１号	瓦質土器	擂鉢	H	51・52	マ2	口縁部	-	-	-	ナデ	スリ目	灰白	灰白	精良，白粒	-	-	
111	536	溝状遺構１号	瓦質土器	擂鉢	H	54	マ2	口縁部	－	－	－	ナデ	スリ目	灰	灰白	白粒，白色小石 角閃石	-	-	
	537	溝状遺構１号	瓦質土器	擂鉢	H	54	マ2	底部	(14.4)	－	－	－	スリ目	灰黄	灰黄	白粒，石英，長石	-	-	
	538	溝状遺構１号	瓦質土器	擂鉢	I	59	マ3	底部	-	(15.0)	－	ヘラケズリ	スリ目	灰	灰	白粒，黒粒，小石 石英，長石	-	5055	
	539	溝状遺構１号	瓦質土器	擂鉢	H	55	マ2	底部	－	－	－	ユビオサエ	スリ目	灰	灰白	長石	-	-	
	540	溝状遺構１号	瓦質土器	擂鉢	H	54	マ2	底部	－	－	－	ヘラケズリ	ハケメ	灰	灰	白粒，角閃石	-	-	
	541	溝状遺構１号	瓦質土器	鍋	H	51	マ2	口縁部	－	－	－	ハケメ・ナデ	ハケメ・ケズリ	灰白	灰黄	長石，角閃石	-	-	中世前半
	542	溝状遺構１号	瓦質土器	鍋	H F	52 51･52	マ2 マ	口縁部	(32.8)	－	－	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	にぶい褐	灰褐	白粒，赤粒 白色小石	-	-	中世前半
	543	溝状遺構１号	瓦質土器	鍋	H	52	マ2	口縁部	－	－	－	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	にぶい黄褐	暗オリーブ	白粒，赤粒 白色小石	-	-	中世前半
	544	溝状遺構１号	瓦質土器	鍋	H	56	マ2	口縁部	－	－	－	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	黄灰	黄灰	白粒，白色小石 角閃石	-	-	中世前半
	545	溝状遺構１号	瓦質土器	鍋	H	54	マ2	口縁部	－	－	－	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	灰	灰	白粒，長石，角閃石	-	-	中世前半
	546	溝状遺構１号	瓦質土器	風炉	H	52	マ	口縁部	－	－	－	工具ナデ	ミガキ・ハケメ	灰	灰	白粒，石英	-	3504	
	547	溝状遺構１号	瓦質土器	湯釜	H	54	マ2	口縁部	－	－	－	－	ユビオサエ・ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	白粒，黒粒	-	-	
112	548	溝状遺構１号	瓦質土器	火鉢・風炉	H	55	マ2	胴～底部	－	－	－	ナデ	ハケメ・ナデ	暗灰	暗灰	白粒，石英	-	-	
	549	溝状遺構１号	瓦質土器	火鉢・風炉	H	55	マ2	胴～脚部	－	－	－	ミガキ・ハケメ	ハケメ	黄灰	黄灰	白粒，灰粒	-	-	
	550	溝状遺構１号	瓦質土器	風炉・壺	H	51･52	マ2	口縁～頸部	－	－	－	工具ナデ・ユビナデ	工具ナデ	オリーブ黒	オリーブ黒	白粒	-	-	
	551	溝状遺構１号	瓦質土器	風炉・壺	H	54	マ2	口縁部	28.5	－	(4.5)	ナデ	ナデ	灰	灰	白粒	-	-	
113	552	溝状遺構１号	須恵器	甕	H･I	51-53	マ2	口縁部	－	－	－	格子目タタキのちナデ	ナデ	灰白	灰白	白粒	-	-	
	553	溝状遺構１号	須恵器	壺	H	54	マ2	胴部	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ・当て具痕	灰白	灰白	白粒，角閃石	-	-	
	554	溝状遺構１号	須恵器	甕	H	55	マ2	胴部	－	－	－	格子目タタキ	ナデ	黄灰	黄灰	白粒，長石	-	-	中世前半
	555	溝状遺構１号	須恵器	甕	I I	55 56-58	Ⅱａ マ1	胴部	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白粒，長石，角閃石	-	-	
	556	溝状遺構１号	須恵器	甕	H	51・52	マ2	胴部	－	－	－	格子目タタキ	ナデ	黄灰	黄灰	灰粒	-	-	
	557	溝状遺構１号	須恵器	甕	H	55	マ2	胴部	－	－	－	格子目タタキ	ヨコナデ・平行当て具痕	褐灰	褐灰	黒粒，灰粒	-	-	中世前半
	558	溝状遺構１号	須恵器	甕	H	55	マ2	胴部	－	－	－	格子目タタキ	ヨコナデ・平行当て具痕	黄灰	黄灰	白粒	-	-	中世前半
	559	溝状遺構１号	須恵器	甕	H	51-52	マ2	胴部	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ・ナデ	灰オリーブ	灰白	精良	-	-	
114	560	溝状遺構１号	須恵器	甕	H	57	マ2	胴部	－	－	－	山形タタキ	ハケメ・ナデ	褐灰	褐灰	灰粒，角閃石	-	-	中世前半
	561	溝状遺構１号	須恵器	甕	H	56	マ2	胴～底部	－	－	－	格子目タタキ	ナデ	灰	黄灰	白粒，灰粒，角閃石	-	-	
	562	溝状遺構１号	須恵器	鉢	I	51-55	マ1	胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	灰白	灰黄	白粒，角閃石	-	-	13c 後半
	563	溝状遺構１号	須恵器	鉢	H	55	マ2	口縁～胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	白粒，黒粒，灰粒 小石	-	-	13c 後半
	564	溝状遺構１号	須恵器	鉢	H	52	マ2	口縁～胴部	－	－	－	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	白粒	-	-	13c 後半
	565	溝状遺構１号	須恵器	鉢	H	61	マ１	口縁～胴部	(27.9)	－	－	ナデ	ナデ	灰白	黒褐色	白粒，黒粒	-	4363	13c 後半
	566	溝状遺構１号	須恵器	鉢	I	59	マ２	口縁部	(25.0)	－	－	ナデ	ナデ	褐灰	明褐灰	白粒，灰粒，長石	-	4419	13c 後半
	567	溝状遺構１号	国産陶器	甕	H	55	マ2	口縁～胴部	(45.6)	－	－	-	-	-	-	-	-	-	14c 後半
	568	溝状遺構１号	国産陶器	甕	I	59	マ3	口縁部	－	－	－	-	-	灰オリーブ	褐	-	-	5097	14c 前半
	569	溝状遺構１号	国産陶器	甕	I	59	マ５	頸部	－	－	－	-	-	にぶい褐	にぶい褐	-	-	5192	
115	570	溝状遺構１号	国産陶器	甕	I	60	マ3	胴～底部	－	(19.9)	－	-	-	にぶい橙	にぶい橙	-	-	5181	
	571	溝状遺構１号	国産陶器	甕	H	53	マ2	胴～底部	－	－	－	-	-	にぶい橙	褐灰	-	-	-	
	572	溝状遺構１号	国産陶器	不明	H	53	マ2	底部	－	10.2	－	-	-	褐灰	褐灰	白粒，黒粒，石英	-	-	
	573	溝状遺構１号	国産陶器	こね鉢	H	55	マ2	底部	－	(9.5)	－	-	-	灰白	灰白	白粒，黒粒	-	-	
	574	溝状遺構１号	国産陶器	鉢	I	59	マ3	口縁部	－	－	－	-	-	褐灰	褐灰	-	-	5123 5124	
	575	溝状遺構１号	国産陶器	壺	I	60	マ3	口縁部	(32.8)	－	－	-	-	褐灰	褐灰	-	-	5083	
116	576	溝状遺構１号	白磁	碗	H	56	マ2	胴～底部	－	－	－	-	-	灰白	灰白	-	Ⅴ-4	-	12c 中頃～後半
	577	溝状遺構１号	白磁	壺	H	52	マ2	胴部	－	－	－	-	-	灰オリーブ	灰白	-	-	-	中世前半
	578	溝状遺構１号	白磁	坏	H	54	マ2	胴部	－	－	－	-	-	灰白	灰白	-	枢府	-	14c 中頃～後半
	579	溝状遺構１号	白磁	碗	H	52-53	マ1	胴部	－	－	－	-	-	灰白	灰白	-	-	-	中世後半
	580	溝状遺構１号	白磁	碗	H	54	マ2	底部	－	－	－	-	-	灰白	灰白	-	-	-	14c 後半～ 15c 前半
	581	溝状遺構１号	白磁	皿	H･I	53-58	マ1	口縁～胴部	12.0	－	－	-	-	灰白	灰白	-	-	-	中世後半期
	582	溝状遺構１号	白磁	碗	-	-	マ	底部	－	(6.2)	－	-	-	橙	浅黄橙	-	-	3515	
	583	溝状遺構１号	白磁	皿	H･I	56-58	マ1	底部	－	4.0	－	-	-	灰白	灰白	-	B 群	-	15c 前半
	584	溝状遺構１号	白磁	皿	H	51-52	マ	口縁～胴部	13.8	－	－	-	-	灰白	灰白	-	Ⅸ類	-	13c 後半～ 14c 初
	585	溝状遺構１号	白磁	皿	-	-	マ	底部	－	(8.4)	－	-	-	灰白	灰白	-	C１群	3521	15c 後半